

女王の女王

アスランLS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

坂柳有栖

一年Aクラス所属。

高度育成高等学校理事長の娘にして、Aクラス2大巨頭の片割れ。生まれながらの天才……少女。

本条桐葉（ほんじょう きりは）

同じく一年Aクラス所属。

坂柳有栖と同じく生まれながらの天才にして、天賦の求道者。坂柳が最も信を置く『切り札』。

もし坂柳に同格の友人がいたら……という物語。

桐葉 「チエスで例えるなら有栖がキングで、俺はクイーンだね」

有栖 「……普通逆では？」

桐葉 「女王様とお呼び？」

有栖 「呼びませんよ」

目次

プロローグ	1
入学説明	9
自己紹介と生徒会長	19
クイーンボーイ	31
ようこそ実力至上主義の世界へ	46
対立	60
女王、暗躍	73
中間テスト終了	85
1巻エピローグ	99
坂柳派の日常	112
挑戦状	122

206	無人島試験結果発表	221
	3巻エピローグ	232
	第2の特別試験	243
170	俺は自由だあああああ！	183
	大自然最高！	193
	リーダーを当てるだけの簡単なゲーム	
	バカンス開始！そして終了……。	158
	2巻エピローグ	146
	134	

波乱の竜グループ	256	卑劣な戦略	426
グループデイスカッション①	267	裏切り者	439
グループデイスカッション②	277	眼	451
グループデイスカッション③	291	女王VS麒麟児	467
グループデイスカッション④	304	体育祭閉幕	480
グループデイスカッション⑤	317	5巻エピローグ	494
4巻エピローグ	333	ペーパーシャッフル	510
桐葉と有栖の夏休み①	344	勉強会	522
桐葉と有栖の夏休み②	360	天運の証明	533
2学期	371	期末テスト	549
体育祭準備(前編)	384	6巻エピローグ	561
体育祭準備(後編)	396	綾小路グループ	577
体育祭開幕	412	綾小路先生	588

ドラゴンボーイ(笑)	600
ドラゴンボーイ……	616
7巻エピローグ	628
Aクラスの殺伐としたクリスマスイブ	636
クリスマスデート(という名の総集編)	650
混合合宿	661
グループ決め(前半)	672
グループ決め(後半)	682
グループ交流……?	693
合宿の幕開け	708
混合合宿①	718

混合合宿②	730
混合合宿③	740
混合合宿④	750
混合合宿⑤	764
合宿終了	776
8巻エピローグ	790
Aクラスの陰謀	802
胎動する悪意	817
おとといきやがれ	830
背中を蹴り飛ばせ	845
消えない罪と逃げない勇氣	860
9巻エピローグ	878
クラス内投票	893

信念はときとして地獄の扉を開く

907

容赦できませんので

921

江戸の仇を長崎で

934

脱落者

950

10巻エピソード

966

選抜種目試験

978

麒麟児からの挑戦状

990

happy birthday

r 有栖

1002

えんだー

1014

復活の平田（瀕死）

1025

綾小路VS坂柳

1035

Tip of

1046

盤上の死闘（前編）

1063

盤上の死闘（後編）

1075

11巻エピソード

1085

卒業式

1100

桐葉君と敗残兵達

1117

勇気を翼にこめて

1129

プロローグ

俺の名は本条桐葉。ほんじょうきりは

この春から全国でも有数の名門私立へと入学する、ピカピカの中学一年生だ。ほらそこ、人のこと指差してボンボンとか温室育ちとか言わない。行儀悪いでしょうが。

唐突だが俺は長年、ある疑問を抱えながら日々を健やかに過ごしている。この疑問を最初に抱いたのはいつだったかな？去年か一昨年か、それよりも大分前か……もしかしたら母さんの子宮にいた頃から抱いていたのかもしれない。……ごめんちよつと盛った。出来心だから許してくれ。

流石にそれは無いにしても、物心ついたときには似たような疑問を感じていたと思う。

世の中、何故こうもつまらない人間が多い？

はいストップ。痛々しいものを見る目でこつちを見ない。「中二病乙」とかも言わない。精神的には凶太い方だけど多少は傷つくんだよ？一見ヘラヘラしてるように見えて、実は心の中で泣いてるんだよ？まあ嘘だけだ。

それはさておき、確かにそう指摘されても仕方がないような疑問なのは否定できない。できないけど抱いてしまったのだからしようがないじゃないか。俺は悪くない。

……あ、別に「悪い人が多すぎる」や「低レベルな人が多すぎる」といった意味じゃないよ？

善悪の区別なんて人それぞれだと思おうし、俺も別に聖人君子って訳じゃない。まして人間正しくなければ生きる価値無し、なんて極端な正義感を持つてる訳でもない。体がマグマになったりもしない。そりや目の前でお婆さんが通り魔に刺されそうになったら助けに入るけど、万引きしようとしてる人を見かけても多分普通に素通りする。俺が持っている正義感なんてそれぐらいしょっぱいものだ。

そして高慢ちきエリート思想も持つてる訳でもない。俺自身は……まあ不遜に思われるだろうが、高い能力を持つてると言えるだろう。俺はこれまであらゆる物事で勝利してきたし、才能という面では俺より格上どころか、同格の奴、あまつさえ追い縋る奴すらもこれまで一人もいなかった。天賦の才とは俺のような人間のこと指すのだから。

でも、ただそれだけだ。

俺がここまで周りと隔絶した才を持つて生まれたのは、別に俺が神から選ばれた人間じゃないし、俺でなくてはいけない理由があったわけでもない。俺はたまたま天才として生まれただけで、たまたま凡人に生まれた人を見下す理由も蔑む理由も無い。

なら、俺の疑問は何なのかって？……どうしてどいつもこいつも現状に満足しているのかってことだ。

さっきの話に少し戻るが、俺はたまたま天才としてこの世に生を受けた。だがもし俺が凡人として生まれ、生きていくうちに自分より格上の存在にあつたのなら……きつと俺は是が非でもそいつを越えたいと思うだろう。たとえ壁にぶち当たっても、たとえそれがどれほど茨の道だろうとも。

でも、周りの奴等はそうじゃなかった。

俺と深く関わった奴の反応は様々だ。俺に過剰とも言える信頼を置き崇拜する奴、俺の能力を恐れる奴、媚びた笑みを浮かべて俺に取り入ろうとする奴、俺の才能を恨めしそうに妬む奴……総じてつまらない奴ばかりだったが、共通するのは総じて『俺（桐葉）が上、自分が下』と認識していること、そのことに何の疑問も抱いていないこと、そして『俺に勝ちたい』と本気で思っている奴が一人としていなかったことだ。

何故挑まない？

何故諦められる？

何故納得できる？

何故疑問に思わない？

全知の神から「彼はあなたと違って特別なのだから諦めなさい」と神託を受けた訳でもないくせに、何故自分の立ち位置を勝手に決め、それを受け入れることできる？ お前達には向上心というものが無いのか？ 負けたままで構わないのか？

俺なら嫌だな。自分より上に誰かがいるとわかっているのに、満足などできるわけがない。

これまでほとんど負けたことなど無いが、全く無かった訳ではない。あれは俺が物心ついた頃の正月、たしか俺はまだ将棋を覚えてたで、親戚のおっちゃんに惜しくも負けてしまったことを今でもよく覚えてる。あのとき俺は恥ずかしながらそれはもう凄い勢いで悔し泣きしてしまった。あんまりにも俺が泣くせいで親戚中から魔女裁判のごとく糾弾されたおっちゃんには悪いことしたと反省している。いやはや、今から思い返しても一回負けたぐらいで取り乱し過ぎたなあれは。うん、ごめんねおっちゃん。……まあそれはさておき、そのときから1ヶ月間、俺の脳内は『リベンジ』というワードに支配されていた。貰ったお年玉で購入した将棋の本をひたすら読み込み、定石や戦法を頭の中に刻み込むや否や、比較的家から近かったこともあつて親戚のおっちゃんの

家に特攻した。

そのときの、まだ幼児だった俺に惨敗したおつちちゃんの驚愕と、勝利の喜びは今でも色褪せることなく覚えている。あのとき以上のカタルシスは、もうある程度成熟してしまつた今からでは多分得られる機会は無いだらう。

……話が反れたがそんな訳で、俺は自分より上がいるとわかっているなら挑まずにはいられない。現状に満足するなど決してできない。……もつと言うなら、たとえ俺が一番上だつたとしても満足などできない。今日の俺は昨日の俺よりも凄くなりたいし、明日の俺は今日の俺よりも優れていたい。立ち止まることは苦痛でしかなく、望みはひたすら前へ進むこと。飽くなき進化への探求心こそが俺の全てだ。そんな俺からすれば、立ち止まつたままの人間は理解に苦しむしまらないことこの上無いだ。

……いやまあ、別にそれが悪いとは言わないけどね。

重ねて言うが俺は別に選民思想など持ち合わせちゃいない。桐葉君そんな悪い子じゃないもん。

長々と語つたが、あくまで疑問は疑問であつて不満でも憤りでもない。面白いつまらないなど所詮俺の主観でしかないし、他人からしたら正直「知るかボケ」と言いたくなるんじゃないかな。本人達がそれで良いと言うならそれで良いのだらう。それこそ神

でも王でもあるまいし、「俺がこう思ってるんだから世界もこうあるべき」なんて大それたこと思っっちゃいない。俺はただ、この長年の疑問に答えを出したいだけだ。

この疑問を解く鍵はいたってシンプル、まずは俺があいつらと同じ立場になることだ。先程もし俺が凡人として生まれたなら……と仮定したがあくまでそれは仮定ではない。凡人として生まれてない以上、凡人の考えを真に理解できる訳ではない。もしかしたら凡人として生まれたなら俺もつまらない人間になっていたかもしれないが、凡人として生まれ直せない以上それを確かめる術などない。

では天才として生まれた俺には、この疑問は解けないものなのかというところ……そんなことはない。ただ単に俺よりも格上の天才に巡り会えばいい。そのとき俺は歩みを止めずにいられるのか、はたまた歩みを止めつまらない人間に成り下がるのか……もし後者だったらこれまでつまらない人間だと見なしてきた奴等に「調子こいてすいませんでした」と土下座する所存だ、心の中で。いやだつてき、こんな間違いなく誤解されそうな疑問を誰かに打ち明けたことないし、急に土下座されてもあいつら「??」ってなるだろうし。

とまあそんな訳で、俺よりも優れた天才を追い求めるまま、小学6年間共に過ごした仲間達と感動の別れ（正直どうでもいい連中だったがそんな態度はおくびにも出さな

かった。桐葉君は空気を読める子なのです。この日本でも最高峰の中学へと入学したわけだが……入試問題でかなりの肩透かしを食らったせいで、既にあまり期待できそうにない。

現在ただ今入学式の真つ最中。偉い人の話が進む中、新入生代表の挨拶の時間へとなった。

ここが最初の……もしかしたら最後の分水嶺だ。この中学では新入生代表は入試で最も優秀な成績を出した人が代表に選ばれる。あの程度の入試問題で満点を取れない奴など正直俺の敵じゃないので、できれば複数人であつて欲しいんだが……

『新入生代表、本城桐葉、並びに坂柳有栖』

……たった一人かよ。いやまあ一人いただけでも良しとするか、うん。人生妥協も大事。

そうしてどうにか無理矢理納得させながら壇上へ向かうと、杖をつきながら壇上へと向かう女子生徒……確か坂柳とやらが俺の視界に入り、

思わず目を奪われた。

別にこの女に一目惚れした訳じゃない。まあ確かにお伽噺の本から飛び出てきたか

のような美少女だが、どれだけ美人だろうと『つまらない人間』には興味を持たないのが俺という人間だ。ならば俺がここまで心から歓喜しているその理由は……

そのまま俺達は壇上で向かい合う。坂柳は僅かに目を見開き、ほんの一瞬だけ獣のように口角をつり上げたかと思えばすぐにつこりとした笑みを浮かべ、俺達は新入生の方へと向いた。坂柳のいかにも優等生なスピーチの後、俺もそれらしい内容のスピーチを述べながら思考する。

確証は無いがさつき坂柳と向かい合ったとき、多分俺もあいつと同じように凶暴な笑みを浮かべていたと思う。

オカルトやスピリチュアルな話はあまり信じない方なのだが、そのとき多分俺も坂柳も直感したのだろう。

こいつは己自分と同格分、もしくはそれ求め以上たの天才種だと。

入学説明

人間は平等であるか否か。

生まれてから死ぬまでに少くとも一度や二度、人によつては何十何百と抱くであろうありふれた疑問だ。

そして、大抵の人間は「否」という答えを出すだろう。社会は平等を訴えて止まないし、世界中が人は平等であるべきだとされている以上、公の場でこの問いを聞かれのなから「是」と答える人も少なくないだろうが、本心から肯定しているものは多分極少数だ。まあ誰だつて隣の芝は青く見えるものだ、それも致し方無いのかもね。

それらを踏まえて、俺がこの問いに答えを出すとしたら――

「――最終的には皆燃えて灰になるんだし、平等なんじゃね？はい終了」
「いや終わらないでください。流石に投げ遣り過ぎますし、その答えじゃ誰も納得しませんよ」

「ふむ?……ああ、そういうや海外じゃあ火葬は主流じゃあなかつたつげ」

「問題はそこじゃありませんよ」

呆れたように溜め息をつき、ジト目を向けてくるのはマイベストフレンド有栖。

「自分から話を振っておいて失礼な反応だね有栖。君のそういうところ正直引くよ」

「奇遇ですね桐葉、私も貴方の奔放過ぎる所は改善すべきだと思つてますよ。あと目つきが悪い所も」

「余計なお世話だし、それを言つたらお前もなんだよその髪。ビジュアル系崩れみたいな髪色しよつてからに」

「地毛だからしよつてないでしょう。まあ確かに奇異の目で見られたりもしますが……おっと、面白味の欠片も無い黒髪の桐葉には無縁の話ですね」

「歪んだ性格腹黒女」

「ファンタジスタ気取りのドキザ男」

しばらくここぞとばかりにお互いの短所を遠慮無くデイスリ合う。俺達をよく知らない第三者にはさぞや険悪な雰囲気だと思ふかもしれないが、俺達は普段からまああの頻度でこういうやり取りを普通に楽しんでやつてゐる。この程度ではで波乱と激動の中学生活で育んだ俺達の絆に罅は入らないとわかつてゐるからこそ、遠慮のない罵詈雑言。

俺と有栖が初めて相對してから早三年。ただ今四月の入学式、俺達はこれから三年間通う高校へ向かっていた。……坂柳家のリムジンで。こんなTHE・テンプレ金持ちの送迎など悪目立ちすることこの上無いが、先天性心疾患の有栖にバス通勤させるのはアレなのはわかってるし、お友達からのお誘いを一蹴するほど桐葉君は薄情じゃない。こいつこう見えて意外と寂しがりだし。

そんなこんなでじゃれ合っている間に俺達にたどり着く。運転手にお別れの挨拶を済ませリムジンから降り少し歩くと、天然石を連結加工した門が見えてきた。市民の血税が惜しみなく投与されたであろうその門の下を、俺達と同じ制服を来た若者が期待と不安を胸にぞろぞろと潜っていく。

ここは東京都高度育成高等学校。

有栖の父親が理事長を務める、日本の未来を支えていく若者たちを育成する政府公認の学校。

「彼ら彼女ら一人一人が、全国から集められた原石達……どれだけ私達を楽しませてくれるかわくわくしますね」

「達、って……俺はお前みたいに格下を玩具にしていたぶる趣味は無いんだけど」

「これはまた酷い言われようですね。まるで私が人でなしのようではないですか」

「実際そうだろこのサディストが。この指の傷のこと、忘れたとは言わせねーぞ」

「いや忘れた覚えてる以前に知りません。初めて聞きましたよそんな傷」
「昨日ささくれ剥き過ぎた」

「……………はあ」

だから溜め息吐くなつての。

「……………なあ有栖」

「……………なんででしょうか桐葉」

「俺達入学早々物凄く悪目立ちしてしまった気がするんだが」

「おそらく……………いえ、ほぼ間違いなくあれが原因でしょうね」

「慣れつて怖いな」

「そうですね」

振り分けられたクラスを確認し（ちなみに俺達二人ともAクラスだった）教室に向かう途中に階段があつたのだが、中学時代の習慣が抜けずごく自然に有栖をお姫様抱っこ

した状態で階段を上ってしまった。いやはや、この俺ともあろうものがぬかった。そりや入学早々そんな少女漫画みたいなやり取りしている男女など目立つに決まってるだろうに。

上り始めてから感じる四方八方からの好奇と怨嗟の視線の数々に己のしくじりを悟るが、中途半端な所でやめるのはなんか周囲の視線に負けた気がするので、横抱きの有栖とアイコンタクトで続行を決定、見事お姫様抱っこのまま階段を上りきった。その光景をクラスメイトになるであろう新入生に目撃されていたらしく、あつという間にこの出来事がAクラス中（多分高確率で他クラスにも）に広まってしまったらしい。なんてこつたい。

教室に入り、ちよつとしたお茶目な仕込みをしつつ自分の机を探すと、俺と有栖の席はまさかの隣同士。坂柳パピーはルールや規則に実直な人だから無いと思うが、どうしても作為的な何かを邪推してしまうのは俺も人の子なんだなとしみじみ思う。

まあ遅かれ早かれ周知されるだろうし、周りから俺と有栖がそういう関係なのか聞かれても今まで通り肯定も否定もしないでおく。そうすれば思春期真っ盛りの学生なら勝手に邪推してくれるだろうし、今後誰かがアプローチしてくることも無くなるだろう。つまらねー有象無象からの好意は対処が面倒だしな。

「いやあ入学式早々見せつけてくれるね」二人

「なんだ羨ましいのか橋本。代わってやろうか？」

「……え？マジで？」

「申し訳ありませんがご遠慮させて頂きます」

『『凶々しいチャラ男だな、おとといきやがれカスが』だつてさ。残念だつたな橋本」

「いや何だよその悪意に満ちた翻訳!?!このお淑やかな笑顔の下でそんなこと思つてるの!?!」

「ふふふ、ご想像におまかせしますね」

「おいおい否定しないのかよ……思つたよりおつかない子なんだな坂柳さんつて」

「まあとにかく無意味にチャラいのはマイナスだな。とりあえずそのピアス外せ、耳ごと」

「こつちはもつとおつかねえし……」

それにしてもこの橋本とやら、席が結構離れてるのにやけに俺達と絡んでくるが……まあ十中八九、今後クラスで頭角を表すであろう俺や有栖に早めに取り入つとこうという心算だろうな。俺は頭の中で橋本を『つまらない奴』リストに加えつつも、とりあえず仲は深めておく。いくらつまらない奴だからって、こうして友好的に差し伸べてきた手を振り払うほど俺は冷たい人間ではない。打算まみれの上辺の友情、歓迎しようじゃないか橋本正義君。

それからしばらくして始業のチャイムが鳴ると、担任らしき一人の男性が入ってきた。もう見るからに規律に厳格そうな教師だ。

「初めまして、新入生諸君。私はAクラスの担任を務める真嶋智也だ。担当教科は英語を担当している。この学校には学年ごとのクラス替えが存在しないため、卒業までの3年間、私が担任としてお前達全員と学ぶことになるだろう。今から1時間後に体育館で入学式が始まるが、その前にこの学校に関する特殊なルールの説明をさせてもらう」

そう言うって真嶋先生は資料をクラス全員に配布し、説明が始まる。そう、この学校は一般的な高校ではまず存在しない特殊な部分がある。

まず一つ、生徒全員が敷地内の寮での生活が義務付けられ、在学中は部活の試合や近親者の葬式などの特例を除き敷地内から出ることを禁じられている。しかし家族と連絡を取ることすらできないとは、刑務所でももうちよつと融通効くぞ……。まあ敷地は60万平米（東京ドーム1.2、3個分くらいだけ？）と広大で一つの街と化しているので、生きていく分には何ら不自由はしないみたいだ。

そしてもう一つ……。Sシステムの導入。あ、別に有栖は関係無いぞ？ いや確かにこいつはサデイストだけでも。

「桐葉？何か失礼なことを考えてませんか？」

「さて、皆目見当もつきませんな」

先生が大事な説明してらるだろ、黙って聞けや。さりげなく杖で俺の足を踏もうとしな
い。

「今から学生証カードを配る。この学生証は身分証であると同時に、敷地内の施設を使用するためにも必要となるので、無くさないよう気を付けるように。学生証にはポイントが蓄積されており、このポイントが金銭の代わりとなる。この学校の敷地内に存在するものならば、何でもポイントで購入可能だ」

……ふむ、さりげなく「何でも」の部分をほんの僅かに強調させたな。顔を動かさず目だけでクラスメイトを見渡すと、そのことにはつきり気づいたのは……二人か。一人は言わずもがな、隣で楽しそうに微笑んでいる有栖。もう一人はここから少々離れた席の髪が無くて厳つい顔をした男子生徒。うーむ、どちらも真逆の意味で同い年とは思えない容姿だ。

「桐葉？」

「知らんて」

だから杖で俺の利き脚を狙うなや。隠れて設置された監視カメラに気づいててその暴挙か。

「ポイントとは1ポイントにつき1円の価値があり、毎月1日に支給される決まりとなっている。新入生には既に平等に10万ポイントが既に支給されているが、不具合があれば申し出るように」

おっと、思わぬ臨時収入にクラスが俄かにざわついたな。……まあ一般高校生の小遣いにしては貰い過ぎの額だから、先生のお茶目な言葉遊びに気づかないのも仕方ないか。あと有栖さん、随分楽しそうですね。どうせ「扱い易そうな奴等だ」みたいな黒いこと考えてるんだらうけども。

「支給額に驚いただろうが、この学校は実力で生徒を測る。この学校に入学を果たしたお前達には、それだけの価値と可能性があると評価された結果だ。遠慮なく自由に使うといい。ただ、このポイントは卒業後に全て回収され、現金化もできないので注意するように。使う必要の無いポイントは誰かに譲渡するのも構わない。勿論、カツアゲの類いは当然禁止だ。……さて、ここまでで何か質問があるか？」

怪しい点だらけだが……まあ放っておこう。ここで質問してクラスメイトに一目置かれるのは兵の俺じゃなく、将である有栖の役目だ。そのことを理解しているようである。あとさっきのスキンヘッドがほぼ同時に手を上げた。

「ふむ……では、葛城から聞こうか」

「来月から支給されるポイントは幾らなのでしょうか？」

お、ちゃんと引っかけを看過しなかったか。真嶋先生も心なしか嬉しそうに目を細めた。

「……今はまだ正確には答えられない。が、今後のお前達次第だと言っておこう」

その答えを聞いた葛城は一瞬監視カメラに視線を移すと、満足したのか真嶋先生に礼を言つてから着席した。どうやら中々頭のキレる奴のようだが、が……まあ今後に期待しよう。

「それでは、坂柳」

「先ほど先生は敷地内にあるものならポイントで、何でも購入できると仰つていましたが、それは常識で考えれば本来購入できないものも可能である、ということでしょうか」

「……ああ、可能だ。勿論あまりに非常識なもの……例えば誰かの命、などでなければだかな」

それを聞いた坂柳は微笑みながら俺を一瞥して、同じように礼を言つてから着席した。はいはい、わかつてるよ。

「他に質問のある者はいないか？……では、入学式までは自由にしてくれ」
そう言つて真嶋先生は教室から退出した。

自己紹介と生徒会長

「みんな、少しいいだろうか」

真嶋先生が出ていった直後、ポイントをどう使おうだの入学式終わったらどこ遊びに
いこうだのクラスメイト達が浮き足立つ中、葛城が椅子から立ち上がりクラス全員に向
けて話しかけた。

「俺達は今日から三年間同じクラスで学校生活を送る。そのためクラスの親睦を深める
意味も込めて、自己紹介の場を設けたいと考えているのだが、どうだろうか？」

「良いんじゃない？」

「ええ、私も賛成します」

長いものには巻かれるのが日本人の性。先ほど真嶋先生とのやり取りでクラスから
一目置かれているだろう二人、ついでの入学初日に女の子をお姫様抱っこで運んだ俺が
賛同した以上、反対意見は出ないだろう。提案自体も反対するようなことでも無いだろ
うしな。

「ありがとう。ではまずは提案した俺から始めさせてもらう。俺は葛城康平。全頭無毛

症で物心ついたときから禿頭で、自分で言うのもなんだが厳つい顔つきをしていて近寄り難いだろうが、どうか気安く接してほしい。小、中学では生徒会に属していて、この学校でも志願する心積もりだ。よろしく頼む」

なるほど。真面目で誠実、意思も強く頭も切れる……髪は無いが中々骨のある男のようだ。有栖も玩具を買ってもらった子供のように楽しそうな笑みを浮かべている。この様子から、とりあえず対抗馬として合格らしい。

その後も自己紹介は机順に進む。名前だけで終わらせた無愛想な神室、見た目通りチャライ男だとクラス中に認知された橋本、葛城に続いて本当に同い年かと突っ込みたくなるような風貌の鬼頭と中々濃いラインナップ続き、とうとう俺の番が回ってきた。さて、ファンタジスタの腕が鳴るぜ。

「俺は本条桐葉。特技はスポーツ全般で、趣味はガーデニングと……最近だとマジックに嵌まつてるかな」

「マジで？面白そうだから何か披露してくれよ」

「それじゃあ欲しがりさんの橋本のリクエストにお応えして……はい！」

俺はハンカチを取り出しヒラヒラとクラスの皆に見せてから、ゆっくり手のひらに被せてから一氣に取っ払う。すると俺の手のひらに一輪の花……白いカサブランカが。何人かが感心したように拍手する中、俺はもう一度ハンカチを被せて取っ払うと、カサ

ブランカは影も形も無くなる。

「君達、制服の右ポケットを確かめてみな」

クラスメイト達は首を傾げながらもポケットを探ると、全員のポケットから白いカサブランカが一輪ずつ。クラス中が言葉を失う中、俺は自分のポケットから取り出したカサブランカを持ち上げに入る。

「それではカサブランカの花言葉に従い、俺達の入学と今後の高校生活に………： 祝福”を」

先ほどとは比較にならない拍手喝采を浴びながら、全てをやりきった俺は着席する。

「見事な御手前です………と感心したいところですが、加減を知ってください。貴方の後だとやりにくくて仕方がありませんよ」

「自己紹介はエンターテイメントだからなく。それもクラス替えが無いんじゃあ今がラストチャンスだ。………それに、お前ほどの女がこの程度で尻込みするかよ」

「ふふ………それもそうですね。そんなことでは、貴方の将は務まらないでしょうし」

俺のパフォーマンスでエキサイトしていたクラスメイトは、有栖がゆつくりと席から立ち上がった途端嘘のように静かになった………というより静かにさせられた。有栖が特に何かしたわけではない、ただこの子の放つ覇気にクラス中が圧倒され飲み込まれただけだ。

「坂柳有栖と申します。私は先天性の疾患を患っており体が丈夫ではなく、手に持ったこの杖が無ければ日常生活にも支障をきたしてしまいます。今後ご迷惑をおかけしてしまうこともあるでしょうが、どうかよろしくお願いします」

いかにも自分は弱者ですと言いたげな自己紹介だが、内情を知ってる俺からすれば腸がよじれそうな程白々しい内容だ。病弱関係ない方向から迷惑かける気満々の奴が抜かしよる。ほら、俺でなくともクラスの誰一人として弱者を見る目で有栖を見ていない。特に葛城なんて険しい顔で冷や汗をかきながら露骨に警戒してるし。

その後俺達は自己紹介も（俺と有栖の後だから残りの奴等がすぐく肩身狭そうにしていたのは正直悪かったと思ってる）、偉いさんの自己満足もとい入学式も終わった。

ウチのクラスは何人かは普通に帰宅し、葛城と有栖はそれぞれ10人ちよいの生徒と

どこかで親睦会を開くらしい。

「じゃあな有栖。後で必需品の買い出し手伝うから、終わったたら連絡くれ」

「わかりました、お手数おかけします」

「二度別れてからなんて回りくどいことしなくても、一緒に着いてくればいいじゃんか」
「ちよいと野暮用があつてね、まあまた別の機会に誘ってくれ」

橋本のもつともな疑問に適当に理由をでっち上げて教室を後にした。親睦会と銘打っているが、実際は有栖による今後の方針の説明会となるだろう。長い付き合いだ、有栖の考えなんて一々言われなくてもだいたい理解してるので、そんな面倒かつ無意味な集まりに出席したくない。桐葉君退屈嫌いだもん。

さてと……とりあえず有栖が連絡してくるまで学校でも探索するか。

俺は至るところに設置された監視カメラに、逐一目線を合わせてピースしながら校舎を練り歩く。途中で食堂や二、三年の教室を通りかかり色々確認を済ませ、そろそろ探索を終えて外でぶらぶらしようかと思いだしたそのとき、丁度最後であろうカメラを発見しピースをしている俺に二人の男女が近づいてきた。立ち振舞いからして隙が全く無いし相当できるなこの男。黒髪なのも好ポイントだ。

「何をしている」

「カメラを見つければ決めポーズをとりつつ校内を探索中」

「何故カメラに決めポーズをとる」

「理由は特に無い」

キリツとした表情の眼鏡をかけた男性と、ノートを手に持ったお団子ツインの女性……おい待ちなさいお団子ちゃん、何だその変人を見るかのような困惑顔は。桐葉君泣いちゃうぞ？

「生徒会長と書記が俺に何の用つすか？」

「……ほう？」

「な、なんで私達が生徒会役員だと？」

「そっちの会長さんがカイチヨーフェイスだからつすね」

「会長フェイス!？」

「説明しようお団子ちゃん!カイチヨーフェイスとは!生徒会長っぽい顔の人のことなのだ!」

「いやそのまんまじゃないですか!というかお団子ちゃんって何ですか!?!私一応先輩ですよ!」

「説明しよう!」

「しなくていいですよ!」

「お団子ちゃんとは!」

「いや無視すんな！礼儀というものを顔面に叩き込んで差し上げましょうかこの野郎！」

うがーつと両手を振り上げて怒るお団子ちゃん改め橘先輩。やべえこの人おちよくるとめつちや楽しいやめられない止まらない。

「落ち着け橘、新入生相手に感情的になつてどうする。生徒会役員としての品位を損ねるつもりか」

「つ……申し訳ありませんっ……」

おつと何か罪悪感。

「あー……すみませんね橘先輩。先輩があまりにも良いリアクションなんで、つい調子に乗つてからかい過ぎちゃいました」

「そ、それで謝っているつもりなんですか……！」

「それじゃあ機嫌を損ねちゃったお詫びに……」

俺は橘先輩の手を取りハンカチを被せる。

「えっ、ちよ、何するんです——」

「1・2・はいっ」

「……えっ、花？」

ハンカチを取ると橘先輩の手は、一輪のギボウシを握りしめていた。

「ギボウシの花言葉は『献身』。貴方の日々の行いはきつと、会長さんの支えになっていますよ。……いやまあ俺達初対面だから実際はどうなのかは知らないっすけどね」

「……ふふっ、何ですかそれ？最後の最後で締まらない人ですねっ」

口を手をあててクスクスと笑う橘先輩。よかったよかった、どうやら機嫌を直してくれたらしい。

「なるほど……中々ユニークな生徒のようだ」

「生粋のファンタジスタなもんで」

「自己紹介がまだだったな。俺は3年Aクラス、生徒会長の堀北学だ」

「同じく3年Aクラス、書記の橘茜です」

「あー……1年Aクラス、『ガーデニング愛好会』会長の本条桐葉っす」

「いや張り合って余計な肩書きを持ち出さないでくださいっ」

メツと俺を叱る橘先輩。この人何から何までいちいち可愛いなオイ。

「そうか……お前が本条か」

「なんすかその俺を知っているかのような口振り」

「今年度の入学試験で満点を叩き出した生徒が二人いると俺の耳にも入ってる。お前は
その内の一人だ」

「いやいや生徒会長とはいえ生徒にそんな個人情報流出させるなよ。コンプラがなっ

てないんじゃない？

「……ちなみにもう一人は有栖でしょ？」

「そうだ」

ですよ。また引き分けか。

「ところで本条……お前はSシステムについて、どれほど把握している？」

「んー……さつきまでの探索でほぼ10割方っすね」

「ほう？」

「—その後色々あつて100万も貸してくれたとき。生徒会長ともなると随分と溜め込んでるみたいだねー」

「ふむ……流石お父様の経営する学校と言うべきでしょうか、今後どうなっていくか楽しみですね」

その後ちよつとしてから親睦会が終わつたと連絡が来たので、有栖と合流して寮生活に必要なものの買い出しをしつつ情報の共有を行う。有栖はこの学校の理事長の娘だが、ルールに実直な坂柳パピーはSシステムについて有栖には何も伝えていなかった。まあ有栖も俺と同じく娯楽に飢えた人種だから、そんな小説のネタバレみたいなことは好まない。こういうのは自分で探りを入れて解き明かすから面白いのだ。

「まあ他のクラスのこととは一旦置いて、とりあえずは有栖がウチのクラスを牛耳らないとな」

「そうですね。どうやら葛城君は中々頭の切れる方の方のようですし、リーダーの資質も十分に備わつてるでしょう。……ですが集団にトップは二人も必要ありません」

名将二人は凡将に及ばず。

かのフランス皇帝はそう言つたらしいが、そもそもおとなしく誰かに従う有栖なんて有栖じゃない。

「……念のため一応聞いておくけど、これから起こるであろう政戦ごっこに俺は表立つて参加しなくていいよな？」

「はい、というかお願いされても表立つて参加させませんよ。私と貴方が組めば無敵過ぎて、葛城君がどう足掻こうと結果は見えてしまいます。せつかく見つけた私の玩具を取らないでください」

「うむ、正直でよろしい」

君のそういうところ大好きだよ。

「じゃあ俺はしばらくは水面下で動くとして……当面は資金集めだな」

「話が早くて助かります。どうやらポイントはただのお小遣いではなく、使い方次第で身を守る盾にも、敵を討つ剣にもなり得ると見ていいでしょう」

「だな。具体的な使い道は追々探っていくとして……どれくらい欲しいんだ」

「手段は貴方に任せます、来月までに500万ほど集めてください」

「わかってたけど容赦ないなお前……了解了解、あくせく働きますよ。お前が俺の〃将〃であり続ける限りな」

「フフフ……では私も貴方を失望させないようにしないとイケませんね」

俺は自分よりも無能な〃将〃に従う気は無い。葛城もまあ優秀な奴なのは間違いないが……あの程度の相手に手こずるようでは俺の上に立つ資格は無いぞ、有栖。

「……とところで桐葉、さつきから何を頓珍漢なことをしてるのですか？」

「監視カメラにピースを取り続けるゲーム」

「一緒に歩くのが恥ずかしくなるのでやめなさい」

クイーンボーイ

この俺、本条桐葉の朝は早い。

平日休日関係なく毎朝4時には起床し、朝食と花への水遣りを済ませた後、6時までひたすら勉強に励む。まだ授業すらスタートしていない上、正直高一の範囲で躓くような箇所は一つとして無いので、内容は先を見据えての自習がメインとなる。

「勉強を終えた後は登校時間の少し前までひたすら肉体の鍛練。怪我に配慮しつつの入念な筋力トレーニングを終えてから、持久力を伸ばすため走り込みをしている途中、同じくランニング中だったガタイのいい金髪の男子と遭遇し、気がつけば一緒に走っていた。……こいつかなり体力あるな。割と早めのペースで走ってるのに、涼しい顔でついてきている。昨日の生徒会長といいこいつといい、この学校に来たのは間違いじゃなかったぜ。」

「フツ、中々やるじゃないかナイトボーイ。どうやら君も私程ではないが、極めて高いポテンシャルを秘めているようだねえ」

「第一声がそれかい。とりあえずお前が自分大好き人間だということはわかった」

「当然さ。この私高円寺六助は、自分自身が唯一の最高にして、最強の人間であると自負している」

「なるほど色んな意味で大物だね君。まあそれは良いとして……何だナイトボーイって、聞き捨てならないぞ」

おそらく有栖お姫様抱っこ事件はおそらく他クラスにも広まっている。それに由来しているんだろうが……断じてそのニックネームは認めん。

「君をナイトボーイと呼ぶのは私が決めたことさ。君が認めようが認めまいが私には関係——」

「ナイトなんざチエスだとトリツキーな動きができるだけで、そこまで大して価値無いだろ。せめてクイーンボーイにしてよ」

高円寺はきよんとした表情になると、優雅に髪をかき上げて笑いだす。

「はっはっは！君は私が思っていた以上にユニークなボーイのようだねえ。本来なら私は誰の指図も受け付けないのだが……楽しませてくれた札だ、君の要望通りこれからはクイーンボーイと呼ぼうじゃないか」

「話せばわかる奴で何よりだぜ。それじゃあほれ、リクエスト受理の礼。お前にピツタリの花だろ？」

俺は懐から取り出した2輪の花を投げ、高円寺はそれをキャッチして薄く笑う。

「スイセイランにダリア、か。……つくづく興味深い男だねえ、クイーンボーイ」
「お気に召したようで何より」

「普段は男にしろ女にしろ年上でなければ興味が無いのだが……この学校を卒業した後、私が継ぐ高円寺コンツェルンで働かないかね？」

「申し出はありがたいが却下だな。俺の今の将は有栖だし、今日あつたばかりの奴に鞍替えるほど尻軽じゃないんでね」

「フツ、それを聞いて安心したよ。もしここで簡単に飛び付くようなら君に対する興味を失っていただろう」

「自分で誘つという勝手な奴だね君」

「それが私さ。まあ高校生活は始まつたばかりだ焦る必要はない。この三年間で君は、私が従うに値する男だと身をもって知るだろう。それではシュー、クイーンボーイ」

「そーかい、まあ期待はしておくよ。じゃあな、Mr. シックス」

六助だからMr. シックス。我ながら安直なネーミングである。

やや時間が押していたので急いで身嗜みを整え、寮のロビーにて有栖と待ち合わせしてから登校する。

授業初日ということもあって大半は退屈な勉強方針の説明だけだった。教師達は授業中に私語しようが全く注意しないし、まだSシステムを理解していない生徒は緩すぎると拍子抜けしていることだろう。

それにしても無所属の生徒は放っておくとして、有栖の方の取り巻き達が模範的な学生態度を徹底しているのに、葛城の方の生徒……確か戸塚とかいう奴の私語が少し目立った。葛城は真嶋先生の説明の不審な点に感じていた筈だが、まさか取り巻きに情報を共有していなかったのか？……と思っていたら昼休み、葛城から説教されて項垂れていた。ただあいつが無能なだけかい。

「……どうやら葛城君は、あくまで個々に反映されると考えているようですね」

「だな。そうでなければ一限目終わりには戸塚の私語を慎ませていただろうし、もっと言うならクラス中に情報の共有を徹底していただろうな」

食堂にて有栖及びパシリ達とランチタイム。学食派の生徒達が混み合って騒がしいため、悪巧みの密談をするにはもってこいのスポットだ。

食生活に気を浸かっている俺は弁当だが、他の奴は普通にエビフライ定食だのハンバーグ定食だのを注文していた。

「いやいや本条よお、せつかく食堂に来たんだからなんか頼めよ」

「うるさいな橋本、栄養バランスには人一倍気を遣ってるんだよ。体造りはとりあえず

食生活からだ」

「あんな気取った自己紹介をしたのに、随分ストイックな奴だな」

「放つとけ鬼頭。あと君なんで食事中も手袋着けたままなの？」

「秘密だ」

「さいですか……」

誰が聞き耳を立てているかわからないので、最低限の会話で情報の擦り合わせが終わった後、パシリ達と他愛もない雑談に興じていると…

『本日午後5時より、第一体育館の方にて部活動の説明会を開催いたします。部活に興味のある生徒は——』

スピーカーから昨日知り合った書記ちゃん先輩のアナウンスが流れてきた。ふむ、放課後に部活動紹介か……昨日会長さんにも校則違反ではないと確認取ったし、獲物の品定めと参りますかね。

「皆は入りたい部活とかあるのか？ちなみに俺はテニス部に入るつもりだけど」

「チャライ橋本にはピツタリだな」

「放つとけ!?!」

「私は遠慮しておきましょう。多少興味を惹かれるのはボードゲーム部ですが、所属したいとまでは思いません」

多分俺と打つてる方が楽しいだろうしな。

「本条はどうするんだ？」

「いくつか候補はあるが……とりあえず個人スポーツのどれかだね」

「へえ、なんで個人限定なんだ？」

「そんなもんいつ飽きてやめても、あまり迷惑がかからないからだよ」

「最後まで続けるといふ選択肢は無いのか……」

鬼頭も橋本も呆れているが、資金繰り目的なんだからしょうがない。一月で500万なんて膨大なポイントを集めようと思うなら……溜め込んで先輩達から筆り取るのが一番手っ取り早いからね。

そして迎えた放課後、部費のために部員を獲得しようと思気込む先輩達の熱心な部活紹介を聞き流しつつ、ターゲット……ある程度部員が充実している個人技の部活を5つほど見繕いつつ、会長さんの生徒会勧誘演説を聞き届ける。

「私たち生徒会は甘い考えによる立候補を望まない。そのような立候補者は落選して恥

をかくだけでなく、この学校に汚点を残すことになることになるだろう。我が校の生徒会には規律を変えただけの権利と使命が認められ、求められている。その覚悟を持つ者のみ、歓迎しよう」

勧誘というか警告ともとれる内容だったが……流石会長さん、有栖に勝るとも劣らない。将の器だ。誰一人として私語を挟むことなく聞き入っていた。

「さてと……狩りの始まりだぜい」

入部受付係を残して各部活の部員達が引き上げていくのを見届けてから、俺は行動を開始する。貰ったパンフレットでターゲットの部室位置を確認し、ここから一番近い空手部へと足を運ぶ。

「たのもー。本条桐葉、華麗にさんじょー」

気の抜けた挨拶とともに部室のドアを開けると、鳩が豆鉄砲を食ったような先輩達がおよそ10名ちよい。

「……新入生、か。橘の話聞いていなかったのか？入部受付は第2体育館だ」

なんか主将らしき人が呆れたようにやんわりと注意してきた。まあこのタイミングで訪ねてこられたらそう思うわな。

「いえいえ先輩。俺は入部希望者じゃなくて、まあ道場破りみたいなもんですよ」

「道場破り、だと？」

「この学校ではポイントを用いた賭博行為が合法なんでしょ？ポイントを賭けて空手で勝負してくださいよ」

「……?」

先輩達のほとんどが瞠目した。学生が10万円分のポイントを貰ったら多かれ少なかれ浮かれるものだし、普通いきなりそれをさらに増やそうなどは思わないだろうからな。しかし主将らしき人は落ち着いた様子で首を振った。

「確かにポイントによる賭け事を挑むことは学校は認めている。が、それに応じるかどうかは自由だ。俺達はこの後入部希望者達への対応をしなければならぬ。君のような業突く張りの相手をしている暇は――」

「いやいや、あんたらにはそんなことする必要も資格も無いっしょ?」

「……なんだと?」

主将らしき人は不快そうに眉を吊り上げる。俺と同じような考え方の奴が他にいないとは限らないからな、ここは引き下がれない……多少ヘイトを稼いでも闘ってもらわず先輩達。

「さっきも言ったように、俺は道場破りみたいなものですよ?そんな相手から挑まれた勝負から背を向けるようなプライドの低い腰抜けが、後輩を教え導く資格があるとでも?」

「ツ!? テメ、一年の分際で言わせておけば舐めやがって!」

「やめろ瀬川!」

「でも主将っ!」

気性の荒い坊主の先輩が俺に食ってかかろうとするも、主将に手で制される。さて、ここまでコケにされてそれでも黙っているような人達なら筆り取るのは諦めよう。なんか可哀想だし。

「まあそんなに俺が怖いなら仕方ないか。じゃあねチキン先輩達、自己満足の空手ごっこ頑張ってください」

「っ!! 待ちやがれこの糞ガキ!」

立ち去ろうとする俺だったが、瀬川先輩に胸ぐらを掴み上げられる……痛いなあもう。

「どしたんすか?」

「上等だ、テメエの挑戦受けてやるよ! 叩きのめしてやる!」

「瀬川!」

「止めないでください主将! 主将を、俺達を、俺達の空手をここまで虚仮にしたこいつを、ただで帰す訳にはいかねえ!」

釣れた釣れた♪ こういうタイプは扱い易くて助かる。無能な味方は有能な敵より厄

介なら、無能な敵は有能な味方より頼りになるのさ。

「いいんすか？分不相応の虚勢は後で恥をかくだけですよ？」

「くどいぞガキ！その腐った根性俺が叩き直してやる！」

「そうこなくつちや♪……ああでもまずは一番弱い人から順がいいです」

「ハッ！大口叩いというビビったのがガキ！今なら泣いて謝れば許してやらんことも
—」

「いやだって筆れるだけ筆るつもりで来たのに、先に強いの倒しちゃうと小便漏らされて対戦拒否されるじゃないすか？」

「こ、こいつつ………！」

「あ、それとも瀬川先輩が一番弱いですかー？いやくん、威勢だけの口だけ男♪」

「ぶち殺す！」

「やめろ瀬川」

試合を無視して殴りかかる勢いの瀬川先輩の間に、主将が割って入った後、敵意のこもった目で俺を睨む。

「……ではこうしよう。君が瀬川に勝った後、試合を放棄した者は不戦敗とし君に30万ポイント支払うというルールでどうだ」

「俺は別にそれで構わないっすけど、主将だからってそんなこと簡単に決めていいんす

か？」

「心配は無用。あれだけ侮辱されて引き下がる者など、うちの部にはいない」

辺りを見回すと、皆敵愾心剥き出しの目で俺を睨んでいる。なるほど闘争心腐ってる奴はいないってことね、安心したよ。

「それじゃあ……闘り合いましうか」

「ふむふむ、久し振りの実践にしては上々か」

空手道場にて、死屍累々に横たわる先輩達を他所に、たった今下した主将からポイントを受け取りつつ満足そうにそう呟く。先輩ら大丈夫かね？……ちゃんと手加減した

から怪我はしていかないと思うが、精神的なダメージは流石にどうしようもない。

「ええと、大丈夫ですか主将？ 思ったより手強かったんで強く打ち込み過ぎちゃったか心配なんですけど」

「ああ、体の方は問題ない……これでも都大会で準優勝した実績があるのだがな、信じられないほどの強さだ……堀北が興味を持つだけのことはある」

「他の人と違って俺のこと値踏みするような目で見ていたと思いましたが、会長さんから俺のこと聞いてたんすね。……じゃあこんなあからさまな罠に踏み込んだじゃ駄目でしようが」

「俺にも主将としての面子がある。部員達皆が闘うつもりなら、俺もおめおめと引くわけにはいかん。それにあのままでは君が入部した後部内に軋轢を生む。こうして実力を示せばそれも多少は改善——」

「あ、俺まだ入部すると決まった訳じゃないすよ」
「「……は？」」

「いつの間にか起き上がっていた先輩達の目が点になる。やっと復活したか、安心安心。」

「いやなんでだよ本条！ あんな強えんなら迷う必要無いだろ！」

「意外とフランクな人なんすね坊主先輩」

「瀬川先輩だ！というか話を反らすな！」

「空手が強いからって空手部に入らなきゃいけない決まりなんてないでしょうに」

「そ、そりゃあそうだけだよ……」

「はいはい早とちりしない、別に入らないとは言っていないですよ。……はい主将コレ」
鞆から予め用意していた紙を渡すと、主将は怪訝そうに俺を見る。

「契約書、だと……?」

「そ。別に入部するのは構わないんですけど、相応のポイントを支払って貰うつす」

「はあっ!?なんだよそれ!」

「これは趣味ではなくビジネスということですよ。会長さんから俺のこと聞いてるなら、俺がSシステムについてほとんど把握してるって知ってるでしょ?……入部に契約金としてポイントを要求する代わりに、俺は入った部活の大会で必ず結果を出し、部に栄光をもたらすと約束しましょう」

「……なるほど。もし仮に結果を出せなかった場合契約金は全て返還する、か」

俺の渡した契約書を読み終えた主将は、納得したように頷いた。

「だが本条、何故肝心の額が空欄なんだ?これでは君にいくら払えば良いのかわからんぞ」

「額は先輩らが相談して好きに決めてください。俺は他にも4つほど部活を回って同じ

ことをして契約書を渡してから、まとめて回収して待遇が一番良い所に入部します」

「お、お前他の部からも巻るつもりかよ!?!まだ入学したてのお前がそんなにポイント集めて何するつもりだよ!」

「さあ?」

「……は?いや、さあ、つてお前……」

完全に混乱状態の坊主先輩。まあ他人からすればワケワカメになるのは当然かな。

「いやそれがね先輩。うちのクラスに中学からの付き合いの子がいるんすけどね、そいつがまあ人遣いの荒い女でね、『来月までに1000万死に物狂いで集めやがれ(意訳)』なんて言うんですよ」

「いや無茶苦茶だなその女!?!ブラック企業も真っ青だぞ!」

「まああいつのムチャぶりは今に始まったことじゃないから別に構わないんすけど、そんな訳で資金繰りにも手段を選ばなくて。おかげで不慣れな挑発なんてやる羽目に……すみませんね先輩方、さっきは好き放題コケにして」

「あー……:気にすんな、お前もお前で大変なんだな」

空手部員達からの同情を買いヘイトを打ち消すことに成功。すまん有栖、この人達の中でとんでもない悪女になっちゃった。しれっとノルマ500万水増ししちゃったけど許してね。

そして一週間後……柔道部、テニス部、陸上部、水泳部の先輩達から搾取しつつ（初日じやなかったため挑発しなくても普通に引き受けてくれました）最後に契約書を纏めて回収、審査の結果選ばれたのは200万ポイントの空手部でした。

ようこそ実力至上主義の世界へ

俺が空手部へ入部した翌日。

いつものように4時に起床し、朝食と花への水遣りを済ませた後6時まで勉強。そして入念な筋力トレーニングを終えた後は走り込みという、決まりきったルーティーンをこなす。走り込み途中たまにMr. シックスこと高円寺と会うことがあり、そのときは仲良く談笑しながら並走したりもする。

「おーい、そこの君ー!」

「おや?」

が、今日エンカウントしたのは高円寺ではないようだ。声のした方へ視線を向けるとストロベリーブロンドの長髪が特徴的な女子生徒。

ふむ、有栖が見たら嫉妬するであろう発育……おつといかんいかん、女性を胸で比較するのはコンプラ違反だ。セクハラで訴えられて刑務所で臭い飯を食う羽目になる。

「どしたのシャケ子ちゃん、俺に何か用?」

「シャケ子ちゃん!」

「まるでサーモンのようなピンク色の髪をした女の子、だからシャケ子ちゃん」

「そ、そのネーミングはちよつと独特過ぎて遠慮したいかな、なんて……」

「ふむ?……ああごめんね、もしかして鮭子ちゃんの方が良かった?」

「いや問題はそこじゃないよ!」

ふむふむ……書記ちゃん先輩ほどじゃないけど、中々楽しい子みたいだな。

「冗談冗談、流石に女の子を魚類にちなんだアダ名で呼ばれるのは嫌だよね。……それで君は誰だい?名前を知らないんじゃない、なんて呼べばいいかもわからないぜ」

「あつ……それもそうだよね。ごめんね、私は——」

「でも人に名前を聞くときは先に名乗るのが礼儀だよな、うん。俺は1年Aクラスの本条桐葉、今後もしよしなに」

「え、えーと……私は1年Bクラスの一之瀬帆波だよ。よろしくね本条君」

「ふむふむなるほど、どうやら君は優しい人のようだね。以前気の短い人に今のやったらキレたのに」

「じゃあやめようよそんな悪戯!」

「それで話は戻るけど、一之瀬ちゃんは何で俺に声をかけてきたのさ?」

「本条君って、大分マイペースな人なんだね……呼び止めちゃってごめんね。私もランニング中だったから、せっかくだからよかったら一緒に走らないかなって」

ほうほう、この俺と一緒に走る……ねえ?

「俺は別に構わないけど、ちゃんとしてきてね」

「にやはは、これでも中学のとき陸上部だったからね。置いていかれないように頑張るよー」

「あとそれから……どうぞ」

「えっ、と……花？」

「カスミソウ、花言葉は『謙虚』と『気高い人』。気に入った人にアダ名をつけるのと、その人にピッタリな花を渡すのが最近のマイブームなのさ」

「な、なんだか気恥ずかしいな……ありがとう本条君」

親睦も深めたし時間は有限、俺達は風を切って走り出した。シャケ……一之瀬ちゃんはミスターとは違い運動能力はまあまあ速い女子生徒レベルだったので、俺はジョギングレベルまでペースを落とさなければならなかったが……まあ仕方がないか。相手が仲良くなろうと歩み寄って来たからには、快く応えてあげるのが礼儀だろう。たとえこの先敵対する相手であつてもね。

一之瀬ちゃんと別れてから俺は自室で身嗜みを整え、いつものようにロビーで有栖と

待ち合わせを……おや？

「なんで神室ちゃんもいるの？」

「……何よ、私がいると不都合でもある訳？」

不機嫌そうに睨んでくるこの女子生徒は同じクラスの神室真澄。入学式にクラスで行った自己紹介を名前だけで済ませたという、社会不適合者一步手前のコミュ力の無さを持つ女の子だ。先日の水泳の授業では女子の中ではトップの成績と、身体能力はかなり高い。……なるほど有栖が欲しがりそうな人材だが、この子が有栖に歩み寄ろうとするとは思えない。

「真澄さんとは昨日些細なきっかけで意気投合しまして、お友達になっていただきました」

「ふーん……弱味でも握られたのか」

「っ!？」

驚愕した表情で足を止める神室。時間的にはまだ余裕あるけどあまりのんびりしてたら遅刻しちゃうぞ？

「坂柳、どういうことよ？あの件は秘密にするんじゃないか？」

「いえ、私に問い詰められましても」

「ちよつと考えればわかることだよ。君、さつき有栖に友達呼ばわりされたとき凄く嫌

「そんな顔してたよ？」

「……だつたらどうだつていうの？」

「となると君は澁々有栖に付き合つてることになる。無理矢理人を従わせる方法は主に2つ。暴力で屈服させるか弱味を握つて脅すかだけど、トイプードルより弱つちい有栖じゃあ力づくは無理でしょ」

「流石に怒りますよ桐葉」

「実際そんなもんだろうに。」

「まあ二人の秘密なら、詮索はしないけど」

「……私が何やらかしたか気にならないの？」

「全然。他人の失敗談なんて聞いてもつまらないし興味も無い。だけどまあ御愁傷様、これから三年間苦労すると思うよ君。この子見た目チワワだけど中身獵犬だから、一度噛みつかれたらそう簡単には離しちやくれなないぜ？」

「桐葉は私のことなんだと思つてるんですか」

「別に同情してくれなくて結構よ。こんな性悪の前で馬鹿やった私の自業自得と割り切つてるから」

「真澄さん、貴方もですか」

「ふむふむ……表面的には物凄い嫌がつてるけど、意外と仲良くやっていけそうな感じ

だな。有栖は同性の友達が少なかつたから桐葉君もひと安心です。でもやつぱりちよつと気の毒だから「忍耐」を意味するシヤスタ・デイジーを渡すと、苦虫を嘔み潰した表情をしつとも受け取ってくれた。いや別に皮肉じゃないからね。

ちなみに俺と有栖は入学式以降も例のお姫様抱っこモードで階段を上っているのだが、今日階段を上るとき非常に神室ちゃんが居心地の悪そうな表情でできるだけ距離を空けようとしていたのは凄く面白かつた。

「そんなこつ恥ずかしいことしておいて、なんで付き合っていないのよアンタら……」
そんなの俺達の勝手でしょうが。

三時間目の英語。授業開始のチャイムが鳴り担任の真嶋先生が入って来たときには、生徒達は皆静かに席へと着席している。有栖が橋本に調べさせたところDクラスなんかは酷かつたらしいが、それはそれで面白そうな光景だ。

「今日は抜き打ち小テストを行う。内容は主要五教科の総合力。成績表には反映されないので安心してほしい。言うまでもないが、カンニングは厳禁だ」

成績表には……ねえ。なんでこの学校の教師はいちいち含みのある言い回しをする

のかね？学習指導要領を一回見てみたいぜ……もしかしてそれもポイントで買えるのかな？

くだらないことを考えつつ、配られた小テストを黙々と解いていく。計20問の100点満点、教科ごとに4問で配点は一律5点のシンプルな内容だが、欠伸が出るほど難易度が低い。こんなテストでどうやって生徒の学力を計るのか……と思っていたら最後の3問だけ急に難易度が跳ね上がった。特に最後の数学の問題は非常に難解な数式を組み立てなければならぬ超難問で、高校一年生が解けるレベルじゃない。

こんなもん普通事前に答えを知っていなきや解けないだろうから、これも何か今後役立つ伏線なんだろう。まったく、つくづくこの学校はいちいち回りくどくて不親切だ。

……いやまあ、俺も有栖も普通に解けるけど。

さらに時は流れ5月1日となる。世間では学生社会人問わずゴールデンウィークを満喫しているだろうが、残念ながらこの学校には祝日など存在しない。その分長期休暇はよその学校より若干長めなんだが、何だか損した気分になるのは否めない。

いつものルーティーンをこなした後、寮のロビーにて有栖&神室と合流し学校へと向かう。

「5月になりましたね桐葉。お願いしていたものは用意できましたか？」

「ああ、そういやそんなこともあったな。……はいよ、振り込んだいたぜ」

「ご苦労様です」

俺は携帯を操作し頼まれていた例のものを送り、有栖はそれを確認する。そのやり取りを見ていた神室は怪訝な表情を浮かべている。

「本条アンタ、坂柳に何頼まれたのよ？」

「お前が普段やらされている雑用と似たようなもんだよ。今日までにポイントを集めろって言われててな、たった今それを振り込んだ」

「へえ……いくらよ？」

「500万」

「ごつつつ……ゴゴゴ500万!?!」

お、ナイスリアクション。普段ずっとムスとした表情ばかり浮かべてるだけあつて凄
い新鮮。

「ア、アンタそんなぶつ飛んだポイントをどうやって……!?!」

「溜め込んでる先輩から巻き上げた。あ、勿論合法的にだから安心してね」

「Sシステムについて、こないだ真澄さんにもお話したでしょう？ポイントは今後重要になってくると推察したので、桐葉に集めてもらっていたんです」

「いやどうかしてるわよアンタ、そんなお遣い感覚で頼める額じゃないでしょ……言つとくけど、私にはそんなムチャクチャな仕事振ってこないでよね」

「心配せずともわかっていますよ真澄さん。桐葉に頼むような案件を真澄さんに任せるのは不安ですし」

「そういう言い方されるとムカつくんですけど」

難しい年頃だな神室も。

なお登校中三人で情報を共有した結果、学校から振り込まれたポイントは三人とも94000であり、その後念のため教室でクラスメイト達にも確認したが結果は一緒。

葛城が何やら有栖に向かって苦々しい表情をしていたが……まあ気づくよな。自分達のグループは少なからず動揺しているのに、有栖のグループメンバーが皆平然としているんだから。

ちなみに橋本が小耳に挟んだ話だと、Dクラスの生徒がポイントが振り込まれていないと騒いでいたらしい。……おいおいマジかよ、酷いとは聞いていたがそこまでか。

やがて始業を告げるチャイムが鳴ると、真嶋先生が丸めた白いポスターを二つ持って教室に入ってきた。いつも通り厳格な表情だが、心なしか若干頬が緩んでいる気がする

る。

「これより朝のホームルームを始めるが、今日は説明することが多い。質問はその都度受け付けるが、まずはこれを見てほしい」

そう言つて真嶋先生は白いポスターを広げて黒板に貼りだした。内容は一目瞭然、AとDまでの各クラスの成績だ。

Aクラス……940

Bクラス……650

Cクラス……490

Dクラス……0

そして真嶋先生はSシステムの詳細を説明する。

この学校におけるポイントにはクラスポイント(c p)とプライベートポイント(p p)の二種類があり、生徒の実力に応じてリアルタイムでクラスポイントが変動する。この1ヶ月間の間では加点要素は無く、現在のクラスポイントは所属する生徒の素行不良、例えば遅刻欠席や授業中の私語や居眠り等の妨害行為により減点された結果である。ちなみに減点の詳細な基準を葛城が質問したが極秘とのこと。

こうまで綺麗な並びなのは真嶋先生曰く、クラス分けは優秀な生徒順にAからDへと振り分けられるからだそう。……すまん戸塚、優秀な生徒と説明されたとき思わずチ

ラ見してしまった。

そしてクラスポイントとクラスは密接に関係しており、例えば仮に俺達Aクラスのクラスポイントが649ポイントまで減らされていたなら、Bクラスに降格していたらしい。

そして最後に……ここ高度育成高等学校は、希望する進学・就職先にほぼ100%応えることで有名な学校なのだが、その恩恵を受けられるのはAクラスで卒業した生徒のみで、Bクラス以下の生徒には国は一切責任を持たないんだそう。

これはまさに衝撃の真実だ。大半の生徒はこの謳い文句につられてこの学校に入学しただろうから、これから先B〜Dクラスの生徒は死にも狂いでAクラスを引き摺り降ろそうとするだろうし、Aクラスも必死に下位クラスを蹴落とすだろう。これから先の波瀾万丈なクラス間戦争を想像すると……

「心が踊りますね、桐葉」

「うむ。それでこそ俺の将だぜ」

はつきり言つて俺も有栖も国からの補助など必要としていない。実力主義の学校でAクラスで卒業できなければ多少経歴に傷がつくだろうが、そんなもの俺達にとっては足枷にもならない。俺達が楽しめるかどうか、重要なのはそれだけだ。

「先生、質問をよろしいでしょうか？」

「坂柳か、許可しよう」

「クラスポイントを増やす手段について教えてもらえますか。推測では学業や部活動で結果を出すこと考えられますが」

「全てを明かすことはできないが、お前の推察は概ね正解だ。部活動の大会などで優秀な成績を収めた場合プライベートポイントが支給される他、クラスポイントが増加する。そして次の中間テストに限って言えば、成績次第で最低でも100ポイントのクラスポイントが支給されることになっている。まあこれは入学して初めての試験を乗り越えた褒賞のようなものだ」

「乗り越える、か。上級生クラスの机の数からわかっていたが、ただ卒業するだけでも楽じゃないようだ。」

「やがて真嶋先生はもう一つのポスターを黒板に張り付ける。内容は先日の抜き打ち小テストの結果。俺と有栖は当然満点として……葛城は90点か。優秀っちゃ優秀だが、今後有栖と張り合うならもうちよつと頑張つて欲しかったな。それ以外の生徒は大半が80〜85点だったが……オイオイ戸塚、あのテストで65点はねーよ。まあ最後の3問は間違えても仕方ないが、それ以外は絶対間違えちゃ駄目でしょ。葛城の腹心がそんなことじゃ先が思いやられ……」

「……もしもーし神室ちゃん？俺の目に狂いがなければ、70つて数字が見えちゃうん

だが。

神室の方を向くと一瞬目が合ったが、気まずそうに反らされた。……可哀想だけど君、今後しばらく勉強地獄が決定したみたいだよ？さつきまで少し何かを考え込んでいた有栖が凄く楽しそうに笑って、いや嗤っているもん。

「この小テストを、仮に定期テストの結果だとする。平均点は82点なので、赤点ラインはその半分の41点となる。今回赤点となった生徒はいなかったが、定期テストで一科目でも赤点を取ればその時点で退学処分となるので気を付けるように」

赤点1つで退学、という厳しい措置にクラスの何人かがざわつく。この赤点の方式だと50点以上取れば安全圏なので、真面目に学習して名前無記名等のミス等に気を付ければ赤点など取らないから普通はそう悲観することでもない。しかしあんなアンバランスな難易度の小テストを実施する学校だ、現時点で問題の傾向はまるで読めない。不安になるのも仕方ないか。

「中間テストまで後三週間となる。お前達なら心配することは無いだろうが、これまでに以上に熱心に取り組むように。お前達全員が五教科で満点を取る、という結果も決して不可能ではない。……さて、早めにホームルームを切り上げるので、クラス全員で今後の方針をちゃんと話し合っておくように」

そう言って真嶋先生は教室を後にした。最後に気になることを言っていたが……ま

あそれは置いて、今から面白いことになりそうだ。

教壇に向かう葛城を一瞥し、俺は今から始まる激突を楽しみに待つ。

対立

「クラスの皆。たった今真嶋先生に説明された内容から考えるに、今後我々は他クラスから狙われる立場になる。そこで授業が始まる前に今後の方針を決めたい」

教壇に立つ葛城の言葉に、俺や有栖及びそのパシリ達以外のクラスメイトは真剣に聞き入る。おいこら橋本、興味ないからって頬杖つくんじゃない。

「今最優先にすべきことは、三週間後に控えた中間テストの対策だ。ここで結果を出せば他クラスをさらに引き離せるだろう。そこでクラス全体で勉強会を開こうと思う」

葛城の方針は非常に堅実な内容だった。なるほど確かに目の前の課題を地道にこつこつとクリアしていけば、クラスの将来は磐石になるだろう。俺にとってはつまらないことこの上無い判断だが、やはり葛城は良いリーダーになるだろう……有栖さえいなければな。

「坂柳、本条。あの小テストで満点を取ったお前達には、教師の役割を務めてもらいたい

——」

「お断りします」

「じゃあ俺もパス」

俺達の返答をある程度予想していたのか、葛城は苦々しそうに顔をしかめるだけだったが、その側近である戸塚は納得がいかないとばかりに立ち上がった。

「ふざけるなよお前ら。クラスに貢献しようとは思わないのか?」

「クラス一丸となつての中間テスト対策……それ自体に異議はありません。私が不服なのは、何故当たり前のように葛城君がクラスをしきっているのかということですよ」

「は? 葛城さんがリーダーを務めることに何の問題があるんだよ?」

「問題しか無いですよ。先ほど真嶋先生は減点される要素は生徒の素行不良だと仰いました。戸塚君、確かあなたは授業開始一日目の午前中、私語が目立つと葛城君に怒られていましたよね?」

「だ、だからなんだよ!? 確かにそれは悪かったと思つてゐるが、葛城さんには関係——」

「大あります、部下の失敗は上司の責任ですよ。それに……察するに戸塚君は評価が個人ではなくクラス単位であると、葛城君から聞かされていなかったようですね。葛城君が情報を秘匿していたとは考えづらいので、そのことを見抜けなかったのでしょうか。そんな方にクラスの命運を預けたくありません」

「こ、この女つ……!」

「座れ弥彦」

「葛城さん!?でも……!」

「わかつている。……坂柳」

今にも有栖に飛びかかりそうな程怒っている戸塚を下がらせてから、葛城は怖い顔で有栖に向き直る。……顔が怖いのは元からか、ごめんね。

「お前のグループのメンバーがまるで取り乱していなかったから、もしやと思っていたが……お前は真嶋先生が説明したSシステムの全容をほぼ解明していたようだな。……何故それをクラス中に共有しなかった?そうすれば減点を0に抑えられていたかもしれないんだぞ」

「それは葛城君、貴方がクラスのリーダーに相応しいか見定めるためです。果たしてこの人に、クラスの命運を預けてよいものか」

「……そんなことのためだけに、クラスポイントを失うリスクを取ったのか……?」
「貴方を見極める為には安い代償です。私も貴方には期待していたのですが……小テストの結果といい、正直失望させられました。貴方にリーダーを任せるくらいなら、不本意ですが私が前に立ちましょう」

よくもまあ涼しい顔して平然とデマカセを言うよなこの娘は。情報を差し止めたのは葛城達に不満を抱かせて自分達に歯向かうよう誘導するためだし、そもそもお前は葛城がどれだけ優秀なリーダーだろうと……むしろ優秀であればある程嬉々として潰し

にいくだろうに。

「お前がリーダー？はっ、杖が無きや日常生活も満足にも行えないような女がつけ上がるなよー！」

「ご心配なく、私が動けずとも桐葉を筆頭に頼れるお友達が沢山いますので……周りに足を引っ張るような人しかいない葛城君と違って」

「へ、このアマツ……！」

「やめろ弥彦。……坂柳、今の問答ではつきりした。俺もクラスへの被害をまるで省みないお前に、クラスを任せるわけにはいかん」

「なるほど、お互い譲るつもりは無いと……それでは、一つ勝負しませんか？」

「勝負……だと？」

怪訝そうな顔をする中、有栖はそれはもう楽しそうに提案した。

「ルールはいたってシンプル、次の中間考査で私と葛城君どちらがより高い点数を取るのかというものです」

「それで勝った方がリーダーだとも？」

「まさか、そんなリーダーの決め方は誰も納得しません。ですが学力が上に立つ者の指標の一つになることもまた事実」

「む……」

「そもそも誰がリーダーに相応しいかはクラスの総意で決めるべきでしょう。この勝負はその判断の参考になります。……それとも、学力では私には勝てないからと勝負を避けますか？まあそれもある意味賢い選択ですが」

「さつきから聞いていればいい気になるなよ坂柳！たまたま満点だったからって図に乗りやがって！いいぜ、その勝負受けてやる！」

「おい弥彦！」

「大丈夫ですよ葛城さん、こんな生意気な女凹ましてやりましょう！」

ほんと無能な敵って頼りになるよな。……残念ながら戸塚、この勝負は受けた時点でお前達の負けみたいなものなんだぜ？

流星にここから引き下がることは不可能と悟ったのか、葛城は渋々といった様子で承諾した。

「……わかった。いいだろう」

こうしてAクラスは葛城を擁する保守派と、坂柳を擁する革新派の真つ二つに別れてしまった。今後二人は自身がリーダーとして相応しいかを示しつつ、未だ中立のクラスメイトを自派閥へと取り込んでいくことになるだろう。有栖は楽しそうだから良いとして、内輪揉めで他クラスへの対策が遅れることに葛城は苦々しく思ってるだろうな。それでも有栖と戦うことを選ばざるを得なかったのは……多分、この子の本性がいかに

邪悪かを見抜いたんだろう。

クラスは割れども時間は進み、あつという間に放課後になる。一触即発状態の2つの派閥は、それぞれどこで勉強会を開くか話し合っている。

「じゃあな有栖、また明日ロビーで」

「ええ、さようなら桐葉」

「えっ。本条お前、勉強会に参加しないの？せつかく勉強教えてもらうつもりだったのに」

橋本のもつともな疑問に、他の派閥メンバーも同意するように怪訝な表情を浮かべている……もつと言えば葛城派のメンバーも信じられないといった表情で聞き耳を立てている。

「有栖は元々派閥争いに俺を参加させるつもりは無いんだとき。無敵過ぎてフェアじゃないとのことだ」

「桐葉に頼ったパワープレーで勝ったとしても、私が葛城君よりもリーダーとして優れていることにはなりません。彼が大々的に動くとしたら、それはAクラスが1つになつてからです」

「有栖はプライドが高いから、完膚無きまでに葛城を打ち負かさないと気が済まないんだろな。そういう訳で君達政戦ごっこ頑張つてね、応援してる」

「応援してるならもうちよつと心込めろよ」

ナチュラルに見下された葛城派の敵意に満ちた視線を無視して、俺は颯爽と教室を飛び出した。とりあえず秘密裏に有栖から頼まれていた用件をさっさと済ませるため校舎を適当にぶらついていると、見回りをしている大好きな先輩の後ろ姿が見えたので、俺はバレないように気配を殺して後ろに回り……

「書記ちゃん先輩ゲエエツツト!」

「ひゃあああああつ?!」

両脇を持つて大きく抱え上げた。何が起こったか理解が追いつかないであろう、書記ちゃん先輩こと生徒会の橘茜先輩。俺は高い高いの体勢のままコマのように回り始める。

「書記ちゃん先輩久し振り〜、ねえ元気してました〜?というか羽のように軽いですね
〜ちゃんとかご飯食べてます〜?」

「そ、その声は本条君?!いきなり何するつ、というか降ろしてください回らないでくだ
さいつ?!これが先輩に対する仕打ちですか?!あと書記ちゃん言うな!」

「リクエストにお応えしてすぴーどあ〜つぶ」

「いやそんなのリクエストしてませんあなたはいいい加減話をにぎやあああああああ
あああああああ!」

〜5分後〜

「バカなんですか?!いえ聞くまでもありませんバカですね!本条君はバカです間違いあ
りませんこのおバカっ!」

「バカバカ酷い言われようすね、可愛い後輩のちよつとしたお茶目じゃないですか書記
ちゃん先輩」

「タ・チ・バ・ナ先輩ですつ!何が可愛い後輩ですか厚かましい!乙女の両脇に無断で手
をいれるなんて、セクハラで訴えられたいんですか!」

「あー、それもそうすね……すいませんタ・チ・バ・ナ先輩。この通り、手について謝る

んで許してください」

「普通手をつくつて言つたら床にでしよ!? 壁に片手ついて髪をかき上げながら謝られても、誠意を欠片も感じませんよ! というか呼び方からして喧嘩売つてますよね!」

「……まあ流石に悪ふざけが過ぎましたよね、先輩に嫌われても仕方ありません。今後はもう先輩の前には現れませんから」

「そ、そこまでしなくても……べ、別に本条君を嫌いになつたわけじゃ……!」

ぶんぶんという擬音が聞こえてきそうな怒り方をしていたかと思えば、我ながら大根だと思ふほど露骨な落ち込むフリをして背を向ける俺に、アワアワと狼狽えまくる書記ちゃん先輩。なんだこの人メチャクチャ可愛いな。

「……もう、仕方ありませんね! もう怒つてないから戻つてきなさい! 反省してるなら許してあげますっ!」

「やった! 書記ちゃん先輩大好き!」

「はうわっ!」

振り向きながら満面の笑みとともに行った不意打ちに、顔を真っ赤にしてテンパりまくる書記ちゃん先輩。やべえこの人、可愛すぎてちよつと引く。

「いや、あの……君の気持ちは嬉しいんですが、本当に凄く嬉しいんですが、その……私にはもう心に決めた人が——」

「? いや知ってますよ会長さんが好きなことぐらい。俺も異性としてじゃなくて先輩として好きって意味で言いましたし」

「へ? …… あ、そ、そうですか? …… って、なんで私が堀北君のこと好きだって知ってるんですか!? 誰にも言っていないのに!」

んなもん一目瞭然でしょうが。

「んー、女の勘じゃなくすか?」

「あなた男でしょうが!?!」

「多分前世は女だったんですよ。トナカイの」

「多分メスのトナカイは女の勘なんて持ってないと思うんですけどね! もし持ってたらトナカイさんごめんささい!」

ほんとこの人との会話は楽しいなあ。本音を言えばあと40時間くらい続けたいところだけど、書記ちゃん先輩も生徒会の仕事とか忙しそうだし: ……そろそろ本題に入るか。

「ところで書記ちゃん先輩。可愛い後輩からちよつとお願いがあるんすけど」

「だから自分で可愛い言わないでください凶々しい。: ……ちよつと可愛いと思ってしまっている自分が憎いです: ……それで、用件はなんですか? 私も生徒会の一員ですし可能な限り力になりますよ」

頼られて満更でもないのか、ふんすと胸を張る書記ちゃん先輩に、俺は遠慮なく要求した。

「先輩達の代の一学期の中間テストと、4月に行われたテストの問題用紙を譲ってくださいませんか？」

俺の要求を聞いた書記ちゃん先輩は、さつきまでと違って真剣な表情になりつつ周囲を窺う。……なるほど、あの会長さんが信頼してるだけあってただ可愛いだけの無能ってわけではないようだ。

「……………どうしてそんな物を欲しがるのですか？」

「今日のホームルームで担任が言ってたんすよ、中間テストでクラスの全員が満点を取るのも不可能じゃないって。いくらAクラスとはいえ、三週間の勉強浸け程度でそんなことは到底不可能でしょ。……………だけど真嶋先生はその絵空事を確信していた。それはつまり、事前に答えを得る手段があるんじゃないか思えないっす」

「では何故小テストも？そもそもどうして私達が本条君達と同じ小テストを受けたと思うんですか？」

「あの小テストの難易度はチグハグでしたからね。最後の3問は普通ならそれこそ事前に答えを知っていなければ早々解けるような問題じゃない。この学校はいちいち回りでどいからあれはおそらく、中間テスト攻略のヒントをさりげなく示していたんでしょ

うね」

「……なるほど、会長があなたを気にかけてるのもわかります。でも本条君なら過去問なんて無くても問題ないのでは？……なら誰かのため？こう言ってはなんですが、あなたがクラスのために貢献しようと思うような人には見えないんですが」

「ひでー言い草だけどの射ていますね。先輩には嘘とかつきたくないんで正直に言いますが、ろくでもない使い方をします。……あ、校則やモラルはちゃんと守るので心配しないでください」

「はあ……………」

呆れたように深く嘆息した後、手にかかる弟を見るかのようなジト目を俺に向けてくる書記ちゃん先輩。うむ、多分有栖ともきつと仲良くなれるだろう。

「わかりましたよもうっ。もし私が断つたとしても、他の先輩に声をかけるでしょうしね……でもただではダメですよ。この学校は実力主義、何かを得るにはそれに見合う対価が必要です」

「300万でいいですか？」

「いや額が暴力的過ぎます!?!たかが過去問一つに正気ですかあなた!?!」

「けちくせー考えは己のスケールを狭めるだけですからね。遠慮せず受け取ってください」

「遠慮しますよ!?!?」というかさせてください私のためにも!過去問一つで後輩から300万も巻き上げたら、私もうこの学校にいられませんよ!」

「ダメっすか。それじゃあこれから書記ちゃん先輩から書記様先輩と呼ぶってことではないっつ」

「なんで頑なに役職呼び!?!」

その後色々交渉した末、3万ポイントと今後は茜先輩と呼ぶことになった。……あのアダ名ちよつと気に入ってたのに残念だ。

女王、暗躍

中間テストまで残り二週間。

朝のホームルームで真嶋先生から、テスト範囲の大幅な変更をしたことを伝えられた。一見信じられないような暴挙に思うが、二週間前にテスト範囲が発表されたと考えればさほど慌てる必要は無いだろう。ちなみに例の過去問は今朝の登校時にコンビニでコピーをとって有栖に渡しておいた。このままだと有栖の派閥は大きくリードするだろう。……このまま順当にいけばだけどね。

「なあ、本条……」

「むっ？」

ただ今昼休み。いつものように有栖及びパシリ軍団と食堂にてランチタイムを満喫中に、橋本が苦虫を噛み潰した表情で俺と、あと俺の弁当を交互に見る。

「今日までずっと言おうか迷ってきたけど、我慢できないから言うわもう。………なんでお前の弁当の中身、毎日毎日同じなんだよ!？」

何かと思えば人の弁当へのダメ出しだった。よく見ると有栖以外のメンバーも皆微

妙な表情を浮かべている。

「ほう？君達俺が考案した完璧な栄養バランスの弁当にケチをつけるつもりかね？」

「いやいやバランス云々じゃなくて！来る日も来る日も寸分の違いも無い画一的な食事を見せられる俺達の身にもなつてくれよ！弁当だけじゃなく食べ進める順番や食べ終わる時間もほぼ一緒だし、何か恐怖すら湧いてくる！」

いやそんなこと俺に言われても、これが俺のルーティンなんだから諦めてくださいいとしか言えないぞ。

「この件で桐葉に何を言っても無駄ですよ皆さん。桐葉は自分で料理を作る場合、三食とも全く同じ料理をひたすら食べ続けますから」

「……姫さん、それマジ？」

「マジです。私が知り合った頃には既にこうでした」

「怖……ロボットかよお前」

「失敬な、誰がドラえもんだ」

「言つてねえよ!?!」

俺にとつて食事は肉体造りのプロセスでしかない。別に毎度同じ料理を食べることを苦に思わないし、むしろいちいち栄養バランスを計算し直す方が面倒極まりない。食事において楽しむとは、俺にとっては味を楽しむのではなく、一緒に食卓についた人と

の触れ合いを楽しむことを指す。

「ありやりや……すっかり遅くなっちゃったな」

久し振りに空手部へと顔を出したら、道場にはテスト前だというのに猛練習に励む部員達の姿が。なんでも個人戦は俺が結果を出すと約束した一方、主将達は主将達で団体戦で全国を本気で目指すそうだ。そんな熱い志を聞いたからには俺も手助けしたいと思いい、ついつい最終下校時刻まで指導に熱が入ってしまった。一旦寮に帰り急いで夕食と明日の弁当の準備を終えた後、ルーティンの一部になっている鍛練をして……気がつけば10時を回ってたとさ。

「睡眠不足になっちゃ流石に本末転倒だし、流石に夜の自習はパスするか……おや？」

こんな時間に寮から長い黒髪が特徴的な女子生徒が出ていくのが見えた。それだけなら不思議に思いつつも放っておくのだが、間髪入れずに茶髪の男子生徒が出てきて女

子生徒の後を追っていった。俺もまだまだ青二才、好奇心には勝てず二人の後をつけることにしたのだが、寮の裏手で俺の目にしたのは会長さんが黒髪ちゃんを投げ飛ばそうとしているのを、茶髪君が手を掴んで押し止めている光景だった。……いや、どういふこと？

俺が不思議に思っていると、会長さんは茶髪君へ標的を切り替え襲いかかる。会長の暴力の嵐を茶髪君は非常に手際良く捌いているが……流石に止めに入った方がいいよねこれは。

俺は懐からあるものを取り出し、会長さんと茶髪君の間を高速で横切った。

「っ、本条……むっ!？」

「兄さん!？」

会長さんの妹だったらしい黒髪ちゃんが驚いたのも無理は無い。俺が先ほど用意したのは数本の細いワイヤー……それらが会長さんの両手両足に巻き付いているのだから。というか茶髪君ノーリアクションかい。さっきの攻防といい、かなり大物だね君。

「……何の真似だ本条」

「いやこっちの台詞つすよ会長さん。茜先輩に生徒会の品位がどうたらと偉そうに説教してたくせに、自分は暴力万歳とか流石にちよつと引きます」

色々世話になったけどそれとこれとは話が別だ。しばらく無言で睨まれたが、やが

て会長さんは溜め息をついて両手を上げた。

「一年に諭されるとは俺もまだまだ未熟だな。もう戦闘の意思は無いから外してもらえるか？」

「了解つす、助かりましたよ会長さん。あんたと敵対して茜先輩に嫌われでもしたら、俺はシヨックであと70年くらいしか生きられないところでした」

「いやそれ十分長生きだろ。天寿全うしちゃってるよ」

「おつ、流石イケメンだけあつて鋭い指摘。だけど甘い茶髪君、俺はドラえもんの誕生日をこの目で見届けるまで絶対に生き延びてやる」

「ど、ドラえ……何……？」

瞬間、時が止まった。

黒髪ちゃんとか会長は信じられないものを見る目で茶髪君を凝視し、俺もワイヤーを巻き取りつつ驚愕を隠せない。いったいどういう生い立ちなら、現代日本でドラえもんを知らないまま高校生になれるんだ……？

しばらく沈黙が続いたが、会長さんは一度咳払いをして気を取り直す。

「……見事な体捌きだな綾小路。何か格闘技を習っていたのか？」

「ピアノと書道なら」

ふむ、茶髪君の名前は綾小路君か……ピアノと書道をリアルファイトでどう役立てろ

と？仮に実力を隠したいのだとしたら、しらばつくれ方が下手過ぎるぞ。

「本条といいお前といい、新入生にはユニークな生徒が多いようだ。……それに鈴音、お前に友達がいいたとは正直驚いたぞ」

ふむ、会長妹は堀北鈴音ちゃんね。……というか会長さん、その言い草酷くね？

「綾小路君は友達ではなくただのクラスメイトで、そつちの男は知り合いですらありません」

こつちもこつちで酷かったよ。初対面の俺はともかく、綾小路君ちよつと悲しそうな顔してるじゃん可哀想に。

「相変わらず、孤高と孤独を履き違えているようだな。……綾小路、這い上がりたければ死にも狂いで足掻け。生半可な努力と覚悟では、こいつには決して届かない」

一瞬俺の方を一瞥してから、そのまま会長さんは綾小路の横を通り過ぎ闇へと消えていった……いやもう9時だよ？寮に帰れや。

「……いやはや、災難だったね君達。いったい何があつてああなつたのさ？」
「あなたには関係ない話よ」

「わーおすごい塩対応。もしかして余計な真似だった？だとしたらごめんね」
「いやそんなことない、助かったぞ。正直あのままだとヤバかった」

ヤバかった、ねえ……？

「……………どういたしまして、と。遅くなったけど自己紹介をしようか、俺は一年Aクラスの
本条桐葉です」

「A、クラスっ……………!」

おっと見事に敵愾心の籠った目だこと。まあ確かに俺達は狙われる立場だけど、そんな親の仇を見るような目で睨まなくても良いじゃないか怖いなあ。

「俺は1年Dクラスの綾小路清隆だ」

「Dクラス……………ミスターのいるクラスだね」

「……………ミスター?」

「Mr. シツクスこと高円寺六助、お友達なんだ」

「高円寺に……………友達……………!」

重ね重ね酷いなオイ。Dクラスってそんなに友達いない子多いの?

「……………それで君は?」

「あなたに名乗る必要性を感じないわ」

「じゃあこれからゴキブリちゃんって呼ぶね?」

突然脇目掛けて手刀を繰り出してきたので払い落としておく。随分と情緒不安定だね君。

「……………っ!」

「気に入らないからって暴力に訴えてもダメだぜ？ 挨拶もろくにできないような奴は何されても文句は言えないからね。……たとえ最下位のクラスに振り分けられようとね」

「つー……堀北鈴音、よ……！」

今にも歯軋りしそうなくらい、悔しそうな目で睨めつけてくる堀北ちゃん。この子やっぱりあれか、自分がDクラスということに心底納得できてないクチだな。こういう子はひたすら這い上がろうとするだろうから嫌いじゃないよ……黒髪だし。

しかしDクラス、か。例の0ポイント事件もあつて、正直ミスター以外には期待してなかったが……随分と面白い奴等が集まつてるじゃないか。

「じゃあ俺はもう寮に戻るよ。どうやら堀北ちゃんは俺が嫌いみたいだし。……あ、それと綾小路君」

「ん？ なんだ？」

「君の実力について詮索はしないけど、どうやら君は随分前に出るのが嫌みたいだな。……君のこと、ウチのボスには秘密にしといてあげよつか？」

「実力？ なんのことはわからないが、秘密にしといてくれるというなら是非とも頼む。俺は事なかれ主義だからな。お前みたいな凄いやつを従えてる奴になんか、絶対目をつけられたくない」

「了解了解。それじゃあまた今度ね」

何か言いたげな堀北ちゃんを無視して俺は寮へと戻る。まあそう焦るなよ、ぶつかる機会はすぐにもあるさ。

……さて、あの二人のアダ名は何にしようか。茶髪君と黒髪ちゃんだと該当者多すぎるしなあ……。

中間テストまで残すところあと一週間。

いつも通り有栖達と食事を済ませた後、借りたい本があったので図書館に向かう。流

石国が運営する学校、既に絶版になった本とかも結構あるため最近気が向けば寄るようになっている。

テスト間近ということもあって、図書館にはクラス学年問わず大勢の生徒が黙々と勉強して……つと、数人の生徒が何やら言い争い始めたぞ。マナーがなつてないなあ……つてあれ？ホリリン（堀北妹）とコージー（綾小路）もいるじゃん。

「私達を悪く言おうが構わないけど、あなたもCクラスでしょう？正直自慢できるクラスではないわね」

「CくAクラスなんて誤差みたいなもんだ。お前らだけは別次元だけどなあゝ」
「随分と不便な物指しね、私からすれば別次元と言えるのはAだけよ」

話の内容からしてDクラスとCクラスの揉め事かね……つと？クラスメイトである生徒達と勉強していたシヤケ子ちゃんこと一之瀬が、あの集団へと一人で近づいていく。まああの子の性格からして争いを止める気なんだろう。

ふむ、奇しくもBくDの生徒が揃うことになる……ああしまった、面白いこと思いついちやつた。そうと決まれば俺はちよつとした準備を済ませてから、借りた本を片手にシヤケ子ちゃんの後続に続いた。

「相変わらず真面目で優しい子だね君は」

「え？……あつ、本条君久し振り。もしかして止めるの手伝ってくれるの？」

「流石に無いとは思うけど、1億分の1くらいの可能性で君が痛い目に合う可能性があるでしょ？女の子には優しくつてのが、まだ死んでないお爺ちゃんの遺言だから放つとけないぜ」

「まだ死んでないなら遺言じゃないけど、ありがとね。……はい、ストップストップ！」
俺とシヤケ子ちゃんは一触即発の両者の間に割って入る。今更だが最近の俺喧嘩の仲裁すること多いな。水を差されたのが気に入らないのか、Dクラス側の赤髪君が食ってかかる。

「んだテメエ等は？部外者が口出すなよ」

「部外者と言われても、この図書館を利用して一人として、騒ぎを見過ごせないかな」
「ヤンチャするなら外でやりなさいな、まったくもう。人が必死に勉強してるのに妨害しやがってよー」

「いや待てなんだその手に持った『世界の不思議な植物』って本は!?!明らかに勉強してなかっただろテメエ！」

「それからそつちの君らも挑発が過ぎるぞ。試験前でノイローゼだからって八つ当たりはやめなさい」

「無視すんなコラ!?!」

ヤンキーみたいな見た目と性格してるのに、中々ツツコミスキルがあるじゃないか赤

髪君。

「お、おい行こうぜつ。こいつ多分Aクラスの本条だ。こんなことで揉めたとあの人に知られたら……!」

「だ、だなっ」

何やら怯えた表情でCクラスの生徒達は、そそくさと図書館から去っていった。うーむ、一方的に知られてるというのはあまり愉快な話じゃねーな……今度メアドでも聞きに行こ。

「君達も勉強を続けるなら大人しくやろうね、以上つ。……あつ、本条君もありがとね」
「ほいほーい。それじゃあ試験頑張つてねシャケ子ちゃん」

「だからそのアダ名はやめてよ!」

クラスメイト達のところへ戻っていくシャケ……一之瀬ちゃんに続き、俺も色々と用件を済ませたので図書館から出ていく。ちよつとした出来心だから悪く思わないでくれよ有栖、暇で暇で仕方がないんだ。

やつぱりシャケ子は不服みたいだし変えるしかないか……よし、あれにしよう。

中間テスト終了

「……俺達に過去問を渡す、だど？」

中間テスト5日前。

Aクラス教室にて、過去問を片手に俺は葛城とその派閥メンバー達と接触した。有栖の派閥は図書室で勉強会を開いているため、完全にアウエー状態だ。うむ、周りから敵意の籠った視線をビシバシ感じるぜ。特に戸塚から。

「そ。1年1学期中間考査は毎年同じ問題が出題される。つまり上級生から問題用紙を入手できれば、中間テストでどんな問題がでるかわかるってことだ」

「で、でまかせ言うな！坂柳派のお前の言うことなんか誰が信じ——」

「待て弥彦。……本条、その仮説の根拠は何だ？それを聞かないことには、そんな話信じられるわけにはいかん」

「ヒントなら露骨な程転がっていたでしょうが。不自然な難易度の小テスト、全教科の大幅な範囲変更、それに真嶋先生の『クラス全員が満点も可能』という言葉……本当は君もわかってるでしょ？俺の言ってることが嘘じゃないと」

俺や有栖には及ばないが、葛城も頭の切れる男だ。学校側の出した回りくどい手がかりを疑問に思っていた筈。その上で俺の説明を聞いたのだから、全ての点が線でつながつただろう。

葛城が俺から過去問を受け取るのを渋るのは、それとはまったく別の理由からだ。

「まあ信じないなら別に構わないけどさ、このままだと葛城派は一気に衰退していくぜ？」

「……なんだと?」

「何のために有栖がお前に一騎討ちを申し込んだと思う? 有栖に負けなかったためには満点に近い点数を取る必要がある以上、お前はこのテスト期間中必死に勉強に打ち込んできたんだろうな……派閥メンバーに勉強を教えることが疎かになるくらいにさ」

「っ!」

「ようやく気づいたみたいだな。このままだと葛城派の成績は坂柳派に惨敗するだろう。そうなれば……」

「中立の関心が大幅に坂柳に大きく傾く、か……」

「なんで俺達が負けるって決めつけてんだよ!」

「逆に勝てると思ってるの? 多分有栖は今回、ひたすら派閥メンバーの学力向上のみに心血を注いだぞ」

神室とか鬼頭の目が日に日に死んでいったから間違いない。

「それなら葛城さんが坂柳に勝て——」

「言っておくが有栖は俺の知る限り、満点以外の点数を取ったことないからな」

まあ俺もだけど。

絶句する戸塚及び葛城派に囲まれながら、俺は心の中でそう付け足す。

「……いったい何を企んでいる？」

「あー?」

「坂柳の策略は正直予想外だった。このままいけば奴に敗れることも、それを避けたくばその過去問に頼るしかないこともわかった。……だが本条、何故坂柳派筆頭のお前が奴の邪魔をする? いったい何が目的なんだ?」

「何って、嫌がらせだけど」

「「……え?」」

葛城が、戸塚が、いや葛城派の全員が一人残らずポカンとした表情になる。

「最近有栖がお前らとの政戦ごっこに夢中でよ、全然構ってくれなくて拗ねてんだよ。それでちよつと邪魔してやろうと思ってね」

「何だその理由?! 面倒くさっ!」

「知らなかったのか? おそらく俺はAクラスで……いや、学年で一番面倒臭い男だぜ?」

「いや何で誇らしげなの!?!そのドヤ顔やめろ腹立つわ!」

ほう……無能だと思っていたが、中々のツツコミスキルじゃないか戸塚。

「一応言つとくけど、過去問を使つても勝てるとは思うなよ?俺と有栖の思考レベルは拮抗している。俺が過去問という答えに辿り着いたということは、有栖も派閥メンバーに過去問を共有してると考えた方がいいよ。それじゃあ頑張つてね、応援してる」

渡す物も渡したし、俺はさつき帰りますかね……と思つた束の間、葛城に肩を掴まれ引き止められる。

「待て本条。過去問のことは感謝するが……最後に一つ聞かせろ。お前は本当に坂柳がクラスを率いることが正しいと思うのか?あの女は危険すぎる」

「ふーん?……どうやら、有栖の本性には気づいてるみたいだね」

「悔しいが、坂柳は俺よりもリーダーの資質がある。奴が本気でリーダーを目指していたなら、俺と拮抗することなど無かつた筈だ。……今の状況は、奴が意図的にこうなるよう誘導したと思えない」

「お見事、大正解だよ。……有栖はこの政戦ごっこを楽しむためだけに、クラスを真つ二つに割つたのさ」

パチパチとわざとらしく拍手してから、葛木の推測を肯定してやる。俺と有栖はSシステムを初日で解き明かした。当然、AとDクラスが実力順になっていることも。

そのとき格下のBとCクラスよりもAクラス同士で争った方が楽しめる確率が高いと考えた有栖は、策略を巡らせて葛城と自分を支持する人間が半々になるよう調整したのだ。

「葛城さん、なんでそんなこと黙ってたんですか!?!そのことをバラせば、坂柳を支持している連中もあいつを見限——」

「らないよ残念ながら。有栖を慕う連中はあの子の人徳に惹かれた訳じゃないからね。有栖が勝ち続ける限り、あの子の地位は揺らがない」

「……つまり坂柳にクラスを牛耳らせないためにはやはり、俺が奴に勝たねばならん訳か」

「そゆこと。まあ今回の勝負じゃ引き分けにするのが精一杯だろうから、お前が有栖を失脚させたきや今後の君の頑張り次第だよ」

そう助言し、今度こそ俺は教室を後にしようとするが……

「待て本条、肝心の質問に答えてもらってない。……何故お前は坂柳に従う?私利私欲のためにクラスの不利益をも厭わないような奴に、クラスを率いる資格があると思っているのか?」

「まあ確かに、有栖のしたことはとても褒められた内容じゃないけどさあ……あいつの他に適任がないんだから、しょうがないじゃないか」

少なくとも俺は絶対に嫌だ。つまらねー奴等を管理、統治するなんて正直面倒極まりない。他に適任がいらないなら引き受けるけど、そうじゃないならそいつに丸投げする。

「適任なら、葛城さんがいるだろうが！」

「他の奴等にとつちや葛城で構わないかもしれないけどさ……俺、自分より頭悪い奴には従えないんだわ」

「っ！お前えええっ！」

完全に葛城を下に見た俺の発言に、頭に血が上った戸塚は俺の胸ぐらを掴み上げる。随分と慕われてんなあ葛城。

「止せ弥彦！」

「痛いなあ。離せよ」

「凶に乗るのも大概にしろよ本条！」

「最終通告だ。離せよ」

「坂柳の犬風情が、葛城さんに舐めた口叩きやがつて！ちよつと勉強ができるからつていい気になるなよ！」

葛城の制止や俺の忠告にも耳を貸さず戸塚は恫喝を続けるので、俺は戸塚の腹に右手を添えて……

「つつつうぐあつ?!」

震脚と共に思いつきり掌底を打ち込む。後方へ吹っ飛ばされた戸塚は勢い余って机を何台か薙ぎ倒し、その場に倒れこんだ。それと同時に受け身を取りつつ俺も後ろに倒れておく。

「弥彦っ!？」

慌てて葛城が駆け寄り戸塚の容態を確認する。意識が朦朧としているものの幸い怪我はしていないことに安堵し、非難するように俺を睨めつけた。

「ありやりや、やってしまったなー。つい監視カメラがある教室内で暴力行為を振るってしまったなー」

「本条、貴様……!？」

「それでどうする葛城? とりあえず咄嗟にカメラ越しだと事故に見えるようにしたいけど、一部始終を見ていた君は学校にこのことを訴えるか? だとしたら俺も一方的に罰せられるのは嫌だし胸ぐら掴まれて恫喝されたことを引き合いに出すけど、そうしたら喧嘩両成敗で二人とも罰せられるだろうね」

少し試すように葛城に問いかける。もしも有栖が葛城の立場なら迷うことなく学校側に訴えるだろう。クラス自体にも多少の被害は出るだろうが、各派閥への被害は天と地ほど離れている。ポーンの犠牲でクイーンを貶められるのだから、葛城が本気でリーダーになりたいなら迷う必要はない。だが……

「……いや、お前には過去問の借りがある。弥彦には訴えさせないし、俺の方から学校側に事故だと口裏を合わせておく。内輪揉めでクラスポイントを減らされるわけにはいかないからな」

「……………そりやどうも。それじゃ俺はもう行くから、戸塚が起きたらごめんって伝えといてよ」

敵意と警戒が混ざった視線を浴びながら、俺はようやく教室を後にする。どうやら葛城は有栖同様俺も危険人物だと認識したようだが、俺も俺で予想通り過ぎる結果に非常に落胆していた。あの体たらくではとても有栖には敵わない、どこるか勝負にすらならないだろう。

せつかく千載一遇のチャンスをくれてやったのに……葛城よ、お前のそれは手堅いんじゃないや。ただ臆病なだけだぜ。あの様じゃ有栖どころか、Cクラスのあいつにも勝てないよな。

「いやはや、結局今回も引き分けか。……一応聞いておくけど、俺の渡した過去問は見た？」

「見るわけじゃないじゃないですか。もし仮にそれで貴方との長年の勝負に決着が着いたとしたら、私は一生後悔しますよ。完璧な形で貴方に勝利しなければ、私は納得できません。それに……」

「あの程度のテストをノーヒントで満点取れないようじゃ、俺と張り合う資格すらないよね」

中間テスト終了日の放課後、俺と有栖は久し振りに二人で下校していた。

今回の中間テストで、坂柳派と葛城派の戦いは引き分けに終わる。トップ二人は当然満点としてその配下、さらには無派閥の生徒達まで皆全教科満点かそれに近い点数を叩き出した。真嶋先生曰く、五教科の平均点は96.3と歴代でも最高点だそうで、Aクラス独走体勢により一層拍車をかける………ことはなさそうだ。

Bクラスの平均点は93.4、Cクラスは90.1、歴代最低と蔑まれているDクラ

スでさえ88。6と、どのクラスも軒並み好成绩を叩き出しているのだ。この結果は明らかに全クラスがテスト前に過去問を手に入れたからだろう。

いやー、どのクラスも中々悔れないなー（棒）。

「ともかくこれで葛城派との力関係は拮抗したまま……どころか、俺の見立てじゃ多少向こう側が有利といったところだね」

「ええ、葛城君も抜け目の無い方です。過去問を入手するだけならともかく、中立の生徒にも共有するとは」

「まあ中立の何人かは実は中立のフリした有栖の手下だが、それを抜きにしても現状ではやや優勢に傾いたな。いやあ困った困った。」

「それで有栖、どこまでがお前の筋書き通りなんだい？」

「貴方が過去問を他のクラスにバラまいたことと、戸塚君をノックアウトしたこと以外ですよ、まったくもう」

「テヘペロ」

「可愛いですけど誤魔化されませんよ」

「そう……俺が今回独断で行ったのは他の三クラスに過去問を贈与したことと、戸塚に寸剽をぶちこんだだけだ。まあつまり、葛城に過去問を渡したのは有栖の指示というこ

となる。

「それじゃあ答え合わせといこうか。真嶋先生からSシステムの全容を説明され、クラスが二つに割れたあの日の放課後、俺はお前の指示で上級生から過去問を入手した。そのときには既にクラス全員で過去問を共有すること……もつと言えば、1学期の間は葛城派を存続させることに決めていたな？」

四月当初の予定では、1学期が終わる頃までに有栖は葛城派は潰すつもりだった。方針を大幅に変更したのは、どうやら葛城派が生き残った方が都合が良いらしい。

「となるとだ、これはあくまで推測になるが……近いうちにお前がクラスの指揮を取れない状況が待っているんじゃないか？」

「ええ、その通りです。あの日の昼休み真嶋先生に、今後行われるポイントが大幅に移動する試験について聞きに行きました。今回の中間テストでボーナスとして最低100クラスポイントが入るということは……」

「今後のテストではクラスポイントは然程変動しないとみていいだろう。学校側は各クラスに競合を促したいだろうから、今後学力以外の分野でポイントが大幅に変動する試験があるんだろうね」

「しかし今後行う予定の試験の内容を事前に知りたいとなれば、当然膨大なポイントが要求されることは間違いありません。実際100万ポイントも要求されましたが……」

「俺がかき集めたから余裕で払えるな、準備しといて正解だったぜ。ただお前も俺と同じくネタバレが嫌いだから、試験の内容なんざ普通は事前に知ろうとは思わない。……が、自分が参加しない試験なら話は別」

たとえば肉体的に大きな負担がかかる試験なんてものがあつたら、心疾患の持ちこの子が参加できる訳がない。

「ええ。私が真嶋先生に要求したのは、『この一年で私が参加できない試験の実施日と内容』です。あ、内容は他言することを禁じられているので話せませんよ」

「いらんわ」

ネタバレ嫌いだって言ってるでしょうが。

「……それで？その試験の実施日が1学期中、もしくは夏休み中だったりしたわけだ」
「夏休み中に2つ実施されるそうです。たとえ1学期中に葛城君の派閥を潰したとしても、私が参加できない上貴方にその気が無いのであれば、おのずとクラスメイトの多くは葛城君を頼るでしょう」

「それで特別試験で実績を出せば、不死鳥のごとく葛城が息を吹き返しちゃうだろうね。そんなことになるくらいなら葛城には1学期の間は頑張ってもらって、特別試験ではあえてクラスを取り仕切らせ……」

「盛大に失敗して転落してもらいましょう。そういう思惑もあつて今回の試験では葛城

派には、私の派閥より僅かに優位に立つてもらったのです」

「これで次の期末試験で多少打ち負かしても派閥は存続するだろうし、特別試験ではさぞや功を焦つてくれるだろうな。……後で嵌めるために偽りの勝利でぬか喜びさせておくとは、いやはや相変わらず実に悪辣な手口だね有栖」

答え合わせが終わり俺がそう締め括ると、有栖は不服そうに頬を膨らませる。なんだよ可愛いなオイ。

「悪辣とはなんですか失礼な。全部予想した上で止めもしない貴方も同罪じゃないですか。……だいたい、何で葛城君や他クラスに塩を送るような真似をしたんですか？」

「最近お前が構つてくれなくて寂しかったんだよ。言わせんな恥ずかしい」

実際は暇を持て余した思いつきでしかないのだが、葛城へ過去問を渡すときにでっぴ上げた理由をそのまま流用すると、有栖は少しきよとんとしてから嬉しそうに微笑んだ。この子は俺が焼き餅を焼いたりすると割と喜ぶ。

「ふふ、それは申し訳ありません。ではちょうどテストも終わったことですし、今日は久しぶりにどこかへ出掛けましょうか」

「やったー。どこ行く？ 植物園？」

「そんな施設ここには無いでしょうに……そうですね、とりあえず私の行きつけのカフェで構いませんか？」

「はいよ。それじゃあエスコートはお任せを」

「ふふ、それでは頼みましたよ」

有栖がAクラスのトップになる頃には、各クラスの結束も強まり、クラス間の争いは一段と激化しているだろう。いやはや実に楽しみだ、が……とりあえず今は有栖とのデートを楽しもうか。

1 卷エピローグ

〔side：一之瀬帆波〕

中間テストまで残すところあと6日。

少し早めに起きた私は朝食を済ませ、制服に着替えて学校に向かう。テスト期間中は毎朝早めに登校してBクラスの皆と教室で勉強をしているのだが、今日は参加できないとクラスメイトには事前には伝えてある。

その理由は先日CクラスとDクラスの争いを仲裁した後、制服のポケットに入っていた一枚の紙切れにある。そこに書かれていたのは差出人の名前と、中間テストについて重要な話があるので、明日の7時半に特別棟へ来るようにという内容だった。

テストについて重要な話となると無視できないし、何よりあの人は少し変わった性格だけど悪戯でこんなことをするとは思えないので、私は指定された時間より少し早めに特別棟に向かうと、目当ての人物は既にそこに佇んでいた。

短めの黒い髪で顔立ちは整っているが少々目つきが鋭く、気弱な人には怖い印象を持たれることもあるだろうが、少し会話すればそんな印象は薄れるであろう、ちよつと変わったっているけど気さくで優しい人。

Aクラスの本条桐葉君だ。

「おはよう本条君！待たせちゃったかな？」

「おはよう卍解ちゃん。そんなに待ってないから気にすんな」

「卍解ちゃん!？」

「髪色がストロベリーブロンド↓莓↓一護だから卍解ちゃん。シャケ子よりかは良いでしよっ。」

「そ、そうだね。あはは……」

いやほんと、性格は少々変わってるんだけどね。

「テスト前の貴重な時間削ってまで来てもらった手前、手短に済ませないと……。……Bクラスはテスト勉強の方は順調かい？」

「うん、今のところ順調かな。打倒Aクラスを目指して、クラス皆で頑張っているよ。……あつ、本条君からしたら気分の良くない話だったかな？」

「そんな器の小さい奴じやないから気に病まんでよろしい。今回はそんな頑張ってる君達に、ちよつとしたプレゼントを用意しました」

ばんぱかぱーんという掛け声とともに、本条君は紙束を取り出し私に手渡してきた。……つていやいやいや!!

「どこから出したのこれ!?本条君今鞆も持ってないのに、この紙束折れても曲がっても

「いないし……」

「あー？手品のタネをバラすマジシャンがいてたまるかよ、無粋極まりない」
「て、手品って凄いいんだね……それでこれは？何か問題集みたいだけど」

「それはな、何を隠そうー」

【side：綾小路清隆】

「ー1学期中間テストと、小テストの問題用紙か？去年か一昨年の」

「そ。よくわかったなコージー」

「ちようどオレもそれを探していたからな。……コージーって俺のことか？」

「綾小路だからコージー。……嫌？」

「いや別に構わないが」

アダ名で呼ばれるなんてなんか友達同士のやり取りっぽい。流石イケメンランキング4位&頼りになる男子ランキング1位と噂の男だ。距離感の詰め方がオレとは比

べ物にならないほど上手い。……どうやったら友達ができるか聞いてもいいだろうか？

テスト6日前の昼休みの食堂にて、オレは先日知り合った本条に呼び出され、ちょうど探していた物を受け取った。オレでも見落としかけたほど鮮やかな手口で俺のポケットに紙を忍ばせて何が目的かと少し警戒してここに来たのだが……担任からテスト範囲の変更を知らされていなかったりと、Dクラスは赤点続出の危機にさらされていただけに、どういう意図かはわからんがこの施しはありがたい。

しかし偶然オレについてきていたクラスメイトの櫛田は、やや困惑した表情で本条に訪ねる。

「あの、本条君……なんでそんなもの持つてるの？」

「仲の良い先輩にポイントと引き換えに譲ってもらった。この学校大抵のものはポイントで買えるから、覚えといた方がいいよ？」

「綾小路君もそれを探していたって本当？」

「須藤達の退学を阻止するための保険だ」

「でも、過去問は過去問でしょ？今年のテストとは全く無関係って可能性も……」

「ところがそうでもないんだな」

本条はオレに渡した紙束のうち小テストの問題用紙を抜き出し、最後の3問の部分を

オレと榊田に見せた。

「この問題、なんか見覚え無い？」

「……あつ！この前の小テストと一言一句一緒だ！」

そう、あの小テストは中間テスト攻略のヒントだったんだろう。事前に答えを知る抜け道があるのなら、小テストで散々な成績を出したのに『全員が赤点を回避できる』と担任が断言してもおかしくはない。

「どうもありがとう本条君！この過去問を見せてあげたら須藤君達も赤点を回避——」

「ちよつと待て榊田。この過去問はすぐには見せるべきじゃない」

「ど、どうして？」

「須藤達がせっかく猛勉強をしているのだから、それに水を差したくない。何より信用し過ぎて違う問題が出たらアウトだ、保険はあくまで保険だ。……見せるとしたらテスト前日だな。一昨年はほぼ同じ問題だったと一緒に教えれば——」

「夜、必死になつて暗記するね！」

オレの考えに榊田も納得したようだ。今回のテストでのオレ達の目標は満点を取ることでなく、退学者を出さないよう赤点を取らないことだ。欲張ると墓穴を掘る可能性がある。

「うーん……一つ助言するならコージ、見せるなら前日じゃなく2日前の放課後くら

いにしといた方がいいかな」

「? どうしてだ?」

「前日に覚えようとしてる途中に寝落ちしちやつたらシャレになんないでしょ。君が赤点を危惧してる生徒達つて、一人残らず皆しつかり者なの?」

「……ありえる話だな。特に須藤とか」

「ひ、否定しづらいね……」

今まで寝落ちなんて決して許されない環境で育ってきたから完全に盲点だった。そんな話を聞いたら不安すぎて、前日までキープなんてとてもできない。

「まあそれをどう使うかは君達の自由だ、よく考えて判断したまえ。じゃあ俺はもう行くから頑張つてね、応援してる」

「待つてくれ本条。……最後に一つ聞かせてくれ、どうしてお前は——」

【side：龍園翔】

「この過去問が有用なのは納得した。だが、何故これを俺達に渡す？てめえ一体何を企んでやがる？」

テスト6日前の放課後。度胸があるのかただのバカか、完全アウエーである俺達Cクラスの教室にノコノコとやってきた、この本条とかいう男にそう問い詰める。山脇の服に手紙を仕込むなんて回りくどい真似して何の目的で来たのかと思えば、中間テストで出題されるであろう問題をプレゼントするときはきた。

正直こいつにどんな思惑があるのか測りかねている。過去問を餌にポイント等見返りを要求してきたんなら、今後散々利用してから見捨ててやるつもりだったが、あろうことかこいつはただ過去問を渡しに来ただけだと言う。

これで怪しむなど言う方が無理がある。調べさせた手下曰く馬鹿みたいなお人好しの一之瀬だろうが多分怪しむ。今後敵対するクラスをむぎむぎ有利にする理由なんざ、自分のクラスの誰かかクラス全体がよっぽど嫌い、くらいしか思いつかないが……

「ふむふむなるほど。確かにもつともな疑問だリユンケル」

「リユンケルつてなんだコラ」

「龍園翔、略してリユンケル」

「ヒユンケルみてえに言うんじゃねえ」

「何だよヒユンケル嫌いなのか？」

「ヒユンケルは嫌いじゃねえが、今日あつたばかりのテメエに馴れ馴れしくされる覚えはねえんだよ」

「心配すんな、友情つてやつは付き合つた時間とは関係ナツシングらしいぜ」

「おちよくつてんのか素でやつてるのか……どちらにせよふざけた野郎だが、突つかかろうとする石崎のバカは抑えておく。俺の集めた情報から判断すれば、こいつは石崎ごときがどうにかできる相手じゃない。」

「まあ君等に渡そうと思つたのは、ぶつちやけ思いつきでそれらしい動機は無いさ。けど目的なら答えるのは難しくない。……俺達Aクラスの内情は説明した方がいい？」

「いらねえよ。葛城と坂柳、二人の頭を支持するグループが対立してるのは調べがついてる。お前が坂柳の方についてることもな」

「ありやまあ事情通だね、だつたら話が早い。なんというかね……葛城が思つたよりつまらない奴で、このままだと苦もなく有栖がクラスのトップに立つちやうんだよ。堅実

な方針一辺倒じゃ、到底有栖には勝てやしない」

俺も葛城が非常に慎重かつ手堅い男だと聞いている。いずれAクラスに牙を剥くなら葛城から切り崩すつもりだったが……こいつの話した通りなら近い内に葛城は失脚しそうだ。

「クク、結構なことじゃねえか。てめえのボスが苦勞せずトップに立てて何の問題がある?」

「問題大有りさ、齒応えの無い相手との争いなんてただつまらねーだけだよ。有栖だつて多分今ごろ退屈してるだろうよ、可哀想に……そう思うと俺ばかり楽しめそうな奴見つけててやや後ろめたくてな、ちよつとお膳立てをしてやろうかってね」

「お膳立てだと?」

「遅かれ早かれ、俺達Aクラスは他のクラスから狙われるだろう? 学校側の言つた通りクラス分けが優秀さ順なら、葛城派以下の相手なんて何も楽しめないだろうけどよ……君とかミスターとか卍解ちゃんとか見てると、どうもそうとは思えなくてさ」

「とりあえずお前にネーミングセンスが無えことはわかつた」

おい、なんでそこで心外みたいな顔ができる。

「他のクラスにも楽しめそうな奴はちゃんという。……なら、そいつらのポイントが十分になれば、有栖がもつと楽しめると思わないかね? この学校ではポイントが多いほど

戦略の幅は広がるからさ」

「……ククク。そんなことのためだけに利敵行為を平然と行うなんざ、お前も大概イカれてやがんな」

「クラスの皆には悪いとは思うけど、俺も有栖もAクラスの地位も恩恵も別に興味が無いからね。何より重要なのは俺達が楽しめるかどうかだし。……ああ勿論、信じてついてくるなら悪いようにはしないぜ。期待に応えてちゃんとAクラスで卒業させてあげれば、俺が好き勝手にしても誰も文句は言わないだろうよ。……じゃあそろそろ帰るわ。テスト頑張つてね、応援してる」

そう言つて本条は教室から出ていった。

……奴の目には、一切の曇りも陰りも見られなかった。不安もなく恐怖もなく、最終的に自分が勝つことを確信している。己の能力と実績に絶対の自信が無ければこうはならないだろう。……面白い、どうやら奴は随分と喰い応えのある獲物のようだ。

「残念だが本条、テメエの思い通りにはならねえよ。しばらくは首を洗つて待つてな……Dクラスで遊んで、Bクラスを引き摺り降ろしてから、じつくりと喰らい尽くしてやるからよ」

まず狙うのはやはりDクラス。山脇から聞いた話じゃ、随分と遊びがいのあるチンピラがいるようだ。まずはそいつを生け贄に、知っておきたい情報でも集めるとするか。

「おつと危ない、忘れるとこだった。メアド教えてよりユンケル」

「誰が教えるかバアカ」

「えー。ケチー、紫ロン毛ー」

「ぶつ殺されてえのか？」

【side：坂柳有栖】

中間テストも終わり、入学式から今日までを振り返り溜め息をつきます。正直、クラスを真つ二つに割り葛城君と対立したことを後悔しています。今さら悔やんでもしょうがないことでしょうが、まさか葛城君がここまでつまらない相手とは夢にも思いませんでした……入学初日ときの彼の輝きは幻だったのでしょうか……？

最近桐葉に私が葛城君に構ってばかりだと拗ねられました。私だつて葛城君のせいで貴方との時間が削られるのは不満なんですよ？……とは、対立するよう仕組んだ私の自業自得なので口に出して言いませんけど。

頭脳が私より明確に劣ることや、慎重過ぎて手堅い手段しか用いないことはまだ許容範囲です。ここまでなら私もある程度は楽しめたでしょうし。

私がつとも失望させられたのは、他でもない彼の覚悟の無さ。

既に私は葛城派に二人ほど、私のお友達を潜り込ませています。葛城君は慎重な方です。重要機密は派閥の中心にいる生徒にしか共有されていませんが、それでもある程度は情報を抜き取ることはできます。例えば、桐葉経由で渡した過去問の使い方などを。

どうやら葛城君は万一に備えて勉強会を続行しつつ、最終日に過去問を派閥の皆及び中立の生徒で共有したそうです。……そう、リーダーである自分も含めて。

つまり中間テストで私と勝負する予定の葛城君は、負けることを恐れて過去問に目を通したということです。もう一気に冷めましたね、はい。完全に時間を無駄にしました。そんな密度の薄い覚悟でこの私に張り合ったのかと怒りさえ湧いてきます。

私は桐葉を本当の意味で私のものにするため、出会ってから現在まで幾度となく、 1

点のミスさえ許されない重圧と戦ってきたというのに。

坂柳派の日常

「ほれほれ橋本、時間稼ぎしたところで事態は好転しないよ？助かりたきや一度地獄を潜らなきや——」

「わかっただよ！いちいち煩いな本条！」

「こんなあからさまな煽りに声を荒げてしまうほど、橋本は追い詰められていた。

橋本はしもとまさよし正義。学力、運動神経ともに高水準で少々チャラいが社交的で女子からの評判も

上々と、総じて高いスペックの男子生徒。しかし坂柳派の側近のうち有栖からの信頼は最も低い。何故ならこいつの真骨頂は優秀な人間を見極め取り入ることであり、入学初日から俺や有栖に友好的に接してきたのもそのためである。裏を返せば俺達がAクラスを維持できなさそうなら、さつさと見限るだろうということだ。チェスの駒に例えるならナイトだが、実際は騎士道精神とは無縁の尻軽もとい足軽野郎だ。

そんな蝙蝠外交万歳な油断ならない男だが、普段の飄々とした軽薄さはいったいどこへ行ったのやら、顔中冷や汗だらけで鬼気迫る表情を浮かべている。

「見苦しいわね、さつさと覚悟決めなさいよ」

「無駄だ橋本。本条は一度狙った獲物を逃がすような甘い相手ではない」

「だからうるさいんだよ！気が散るからちよつと黙っていてくれ！」

煮え切らない橋本に若干イライラし始めた女子生徒は神室真澄かむろますみ。美人だが社交性はかなり低く、有栖に弱味を握られる形で派閥に入ったため、常に不機嫌そうにしている。有栖に良い感情を持っていない……表向きは。俺の見立てでは派閥の中でこの子が一番有栖に依存している。仮に有栖が退学になったら、それはもう凄いい取り乱すと思う。要は素直になれないツンデレちゃんだ。学力は（Aクラス基準では）低めだが、身体能力は女子の中では学年でもトップクラス。Aクラス自体ががやや学力方面に能力が片寄っていて、当の有栖本人がその最たる存在ということもあって、運動能力に長けた人材は希少性が高い。俺達と違って女性であるため、有栖もこの子にしか頼めない用件がいくつもあるだろう。駒に例えるなら……ピシヨップかな。

橋本に諦めるよう諭した男子生徒は鬼頭隼きとうはやと。癖の強いロン毛が特徴的な、本当に高校

生かと疑いたくなるような容姿をした体格の良い男。橋本とは真逆で寡黙かつ口数が少ない上に無愛想。必要なこと以外はいちいち口にせず、有栖の指示には忠実に従い淡々と任務を遂行する質実剛健な男だ。あと何故か常時手袋をしているが、その理由は頑なに話そうとしない。見た目通り極めて身体能力の高い武闘派で、俺を除けば多分Aクラス最強だ。普段俺が自由に動いているとき、有栖の護衛はこいつに任せている。駒

に例えるなら当然ルーク。

そんな自分と同じく有栖を支える同志達の声も、今の橋本には届かない。それほどまでに彼は追い詰められているのだ。……ここでミスをすれば、地獄の底に突き落とされることを理解しているから。

「くそっ……………これだあつー！」

やがて腹を括った橋本は、ようやく震える手を伸ばし答えを選択する。

「はい残念ローン。リーチタンピンリヤンペーコードラドラ16000てくん♪」

「ちくしよおおおおおおおおお！」

「無惨ですね……」

失意のあまり雀卓に倒れこむ橋本に、非常に愉快そうな笑顔で憐れみの言葉をぶつける有栖。というか雀牌散らばったんだけど。牌無くしても弁償とかしないからな。

ただ今7月初旬、茹だるような暑さに生徒達が年間共通のブレザーに苛立ちを覚え始めた時期。先日俺が空手のインターハイ個人の部出場を決めたお祝いとして、有栖の部屋でちょっとしたパーティーを開くことになったのだが、橋本が雀卓を持ち込んだので

有栖の側近四人で罰ゲームを賭けた麻雀勝負が行われることになり……結果はまあ、俺の執拗な集中攻撃により橋本が7局連続乙る羽目になり、神室に金的されたりタバスコを鼻から注がれたりと散々な目に遭いましたとき。生粋のDSである有栖も大満足だ。「さて、またまた箱割れした橋本君に罰ゲエエエム！テリブル★BOXから一枚引くが……いー！」

「さつきからおかしいだろお前の引きの強さ!?!?というかさつきから俺ばかり狙われてるけど何、お前実は俺のこと嫌いなもの!?!」

「いやいやまさか。だって神室も鬼頭も最近覚えたばつからしいじゃん？流石に初心者を苛め倒すのはアレだろ?」

「俺を苛め倒すのは良いんですかね!?!」

「えーい、小悪党はいちいちしぶといー!これでラストにしてやるから、地獄の片道切符を受け取りな!」

「小悪党言うな!?!わかったよ引けばいいんだろ引けば………っ………!?!」

観念した橋本はため息を吐きながら箱から一枚の紙を引き、中を確かめ硬直した。どれどれ書かれていた罰ゲームの内容は………うわっ、これを引き当てちゃったか。

「罰ゲームは『1日メイド服』に決定♪」

「おい待てなんだそれは!?!字面からして嫌な予感しかしないが、嘘だよな!?!嘘だと言っ

てよお願い！」

「いやそのまんまの意味だよ。明日になるまでお前はメイド服で過ごさなくてはなりません」

「やっぱりそうなのかよ畜生！つーかメイド服なんていったいどうやって用意しろと!?!」

「ありますよ？はい、どうぞ」

実に良い笑顔でクローゼットからメイド服を取り出し、取り乱す橋本に手渡す有栖に、橋本だけじゃなく神室と鬼頭も思わず目を疑う。

「……は？えーっと、あの、姫さん？なんでこんなものがアンタのクローゼットに？」

「私の私物です。貸し出すのは構いませんが、桐葉に頂いた大事なもので、汚したら承知しませんよ」

「「……………」」

何やら信じられないといった目で俺と有栖を交互に見る三人。しばらく気まずい無言タイムが続いたのち、それに耐えきれなくなった橋本がおずおずと口を開く。

「な、なあ本条……いや本条くん？なんで姫さんにメイド服なんてもの渡したんだ？」

「バカだなー橋本は、そんなもんメイド服着た有栖が見たかったからに決まってるでしょうが。期待通りすげー可愛いかった」

「あ、あんたってそういう趣味があったの……?」

ケダモノか何かを見る目で俺を睨んでくる神室。何を想像したか知らないけど失礼な反応だね君、別にいかがわしいことはしてないよ? 桐葉君草食だもん、キリンだもん。「どういう趣味かは知らんけど、最近のマイブームは有栖に色々コスプレさせて楽しむことだね。幸いポイントは潤沢にあるし」

「ちなみに私のマイブームも、桐葉に色々コスプレさせて楽しむことですね。燕尾服とかすごく似合ってたんですよ?」

「なあお前から本当に付き合っていないのか? よつぽど仲の良いカップルでもないやらなようなことしてんのに?」

「なんか頭痛くなってきた……」

「気をしっかり持つんだ神室。……しんどいのは皆一緒だ」

いやいや君達派閥の中でも幹部なんだからさ、この程度のことδειいちいち狼狽えてちやだめでしょうが。

ちなみに明らかにサイズの合っていないメイド服をムリヤリ着た橋本の破壊力は、それはもう凄かった。全然丈足りてないあたりがもう……。普段あまり笑わない神室や鬼頭も爆笑していたし、有栖に至っては危うく酸欠になるところだった。あつぶね。

「そういえば桐葉……例のCクラスとDクラスのいざこざの件、どう思いますか？」

パーティーもお開きとなり、橋本達三人を帰らせた（勿論橋本はメイド服のまま帰らせた。第三者に彼が通報されないことを祈る）後、部屋の片付けを手伝う最中有栖がそんなことを聞いていた。

話は7月1日まで遡るが、毎月1日に振り込まれる筈のプライベートポイントが1年だけ差し止めになるというトラブルが発生。Aクラスは皆ポイントに余裕があるので困惑はすれど、さほど取り乱しはしなかった。

そしてその翌日。CクラスとDクラスの生徒の間でトラブルが発生し、それが一年のポイント振り込みが差し止められている原因だと担任から伝えられた。

下位クラスを見下している戸塚が色々と思いつていたが、そんな暇があるなら葛城派のために何か貢献でもしなさいという話だ。ただでさえ葛城が生徒会の面接で落とされて、中間のときにはあつたりードが無くなつちやつたんだからさ、もつと危機感持て

や。

……まあそれはそれとして、その日の放課後Aクラスの教室にDクラスの平田洋介というイケメン君が、仲間という名の取り巻きを大勢引きつけてやってきた。

その平田君が言うにはトラブルの内容は、Cクラスの生徒3名が特別棟三階でDクラスの須藤という生徒にフルボッコにされたと学校に訴え、しかしその須藤は先に襲われたから反撃しただけと正当防衛を主張し、両者の語る内容が食い違っている……というものらしい。

最終的な判断は一週間後に下されるので、現場を目撃した者がいないか訪ねに来たんだそうだ。Aクラスには他クラス、特にDクラスを見下す生徒も少なくないため危うく一触即発に陥りかけたが、すぐさま有栖と葛城が仲裁してそれぞれの派閥の生徒から聞き込みを行った。……残念ながら誰もいなかったんだけどね。

「んー……もしその須藤って子の言ってることが本当なら、黒幕は多分リユンケルだろうね」

「……リユンケル？」

「龍園翔だからリユンケル。Cクラスの番長君」

「ああ、その方なら私も名前だけは知っています。何故リユンケルさんが黒幕だと？」

「この間会ってみてわかったけど、あいつはお前と違って暴力による恐怖でクラスを支

配するタイプだろうからね。下っ端が勝手に他クラスに喧嘩を吹っ掛けるのを許すとはとても思えないな」

以前図書館でCクラスの生徒が誰かの許可無く俺と争うことを忌避してたけど、その誰かは間違いなくリユンケルだろう。

「ではリユンケルさんの目的は、そうですね……退学、または停学したときのペナルティを知ることでしょうか」

「だろうね。卍解ちゃん辺りには何の役にも立たない情報だろうけど、リユンケルにとっては非常に価値のある情報だ。彼は勝つためなら手段を選ばないタイプだから」

使い方次第では、そうだな……俺達には通用しないだろうけど、卍解ちゃん達Bクラスはなんとか引き摺り下ろせるだろうね。

「でしたら私は静観することにしましょう。クラスから退学者が出た場合どうなるかは多少気になりますし」

「それなんだけどな有栖、しばらく葛城派は放置でいいよな？」

「ええ。夏休みの特別試験では葛城君に指揮を取ってもらわなくてはなりませんから、期末テストでは何も仕掛けないつもりです」

絶滅危惧種かってくらい丁重に扱われている葛城派だがそれも仕方ない。葛城が生徒会に入れなかったことに加え、有栖の右腕である俺が部活動で全国行きを決めたせい

で、クラスポイントが50もプラスされてしまったのだ。この結果を受けて中立のほとんどは当然として、葛城派の何人かまでが坂柳派に流れてしまったのだ。これで期末まで不甲斐ない結果を出せば、葛城が特別試験を仕切れなくなってしまうかねない。……いちいち世話の焼ける奴だねあいつも。

「つてことは俺もしばらく暇になるわけだ」

「そうなりますね。……まさか」

「面白そうだからちよつと首突っ込んでくるZ E ☆」

「貴方という人は……どうせ止めても無駄でしょうし、好きにしてください」

「流石有栖、愛してるぜ♪」

「ふふ、私もです」

さて、そうと決まればとりあえず正解ちゃんにメールしようかな。Dクラスは絶対Bクラスにも事件の目撃者がいないか訪ねに行つただろうし、そうなればT H E・善人のあの子のことだ、きつと損得勘定無しでDクラスの力になろうとするだろう。ただでさえBクラスは以前Cクラスにちよつかいかけられて揉めたらしいから、リUNKELの手口を知つてそうだしね。

邪魔してすまんリUNKEL、素直にメアド教えてくれない君がいけないのだよ。

挑戦状

翌日の放課後。

メールで約束で取り付けておいた一之瀬こと正解ちゃんと落ち合い、ただ今談笑しながら例の事件があった特別棟へと向かっている。おそらくはDクラスも何か解決の手がかりが無いか調べてるだろうしね。

「しかしまあ俺だけじゃなく、先輩達も団体戦でインターハイ出場決めるとは思わなかったな。空手部の未来が明るくて何よりだ」

「すごいよ本条君、おめでとう！あ、でも私達Bクラスからしたらちよつと複雑かなあ。クラスポイントもさらに離されちゃったし」

「まあ正解ちゃん達は正解ちゃん達のやり方で成長していけば良いんじゃないやね？大丈夫、団結力ならウチの惨敗だからね！」

「誇らしげにするところじゃないと思うよそれ……えつと、確か坂柳さんと葛城さんのどっちがリーダーになるかで争ってるんだよね？」

「それも時間の問題だけだなあ……まったく葛城の奴、生徒会の審査落とされやがってよー。お陰で葛城派は最近元気が無くてさ、歯応えが無くて仕方ない」

「……っつ……そうなんだ、葛城君もなんだ」

「？　も　っつてことは……卍解ちゃんも？」

「……うん」

やや落ち込んだ様子の卍解ちゃん……葛城のときも引つ掛かったが、やつぱり妙な話だな。葛城も卍解ちゃんも、学年トップクラスに優秀な生徒だ。流石に会長さんに比べればケチもつくけど、茜先輩が書記をやれてるんだから能力的には問題ない筈……あ、違うんです茜先輩。別に先輩を無能だと思ってる訳じゃないんで、俺の心の中で涙目になって怒らないでください。

俺のやや気まずそうな様子に何か勘違いしたのか、卍解ちゃんは手を振って笑顔になる。

「あつ、ごめんね暗い話題になっちゃって。生徒会に入るのを諦めたわけじゃないから、気にしないで本条君」

「ああそうなの。……まあ根気よく立候補し続ければ、会長さんにも熱意が伝わるでしよ」

「うん、きつとそうだねっ！　よーし、私も頑張っちゃうよー！」

とりあえず卍解ちゃんには気休めを言っておくけど……成就するかは正直微妙だなあ。俺が賭け試合に使うポイントを借りたときに出された条件といい、会長は能力や

人格といったこととは別の理由で二人を不採用にしただろうし。

「それにしても……暑いね特別棟」

「んむ？……ああ、確かにね」

いつのまにか特別棟についていたようだ。真夏だというのに窓を閉めきつていてなおかつエアコンもついていないこの場所は、どうぞ熱中症になってくださいと言わんばかりの地獄と化していた。俺は昔から暑さにも寒さにも病的に強いからどうとでもなるが、一之瀬は汗だくになりながら下敷きを団扇代わりをしている。……有栖連れてこなくて良かった。

「あつ、やつぱり誰かいるみたい。あの子達、確かDクラスの生徒だったと思う」

「どれどれ……って、ホリリンとコージーじゃん？たしかにDクラスの生徒だね」

「お友達？」

「コージーとはね。……ここにいるとは微塵も思ってたけど」

ホリリンはともかく、なんでコージーが事件現場なんかにいるんだ？事なかれ主義はどうした？

「おーいホリリンとコージー、そんなところで何してんの？」

俺の呼び掛けに二人はこちらへ振り返る。……ん？ホリリンは多分俺を嫌ってるから視線に敵意があるのはわかるけど、それと同時に困惑と興味も混じっているな。

「ちよつと時間いいかな？もし甘酸っぱいデート中だったらすぐに退散するけど——」
「それはないわね」

正解ちゃんの言葉を遮るように否定するホリリン。おお、早押しクイズ並みの反応の早さだ。

「あはは、そうだね。デートスポットにしちやちよつと暑すぎるし」

「甘酸っぱいというか、酸っぱいデートになるな。汗的な意味で」

「お願いやめて本条君、嫌な想像しちゃうから……」

「何か用かしら。茶化しに来たならお引き取り願いたいんだけど」

俺達のそんなくだらないやり取りに、ホリリンは警戒心剥き出しにして問いかける。
うんうん、相変わらず人を寄せ付けない子だね。そういう子嫌いじゃないよ、好きでもないけど。

「君達ってDクラスの生徒だよな？昨日私のいないとき、Bクラスに目撃者の情報を探しに来たって聞いてね」

「同じく。……君達クラスメイトの無実を証明しようとしてるんだよな？」

「もし私達がその調査をしているとして、あなた達に関係があるのかしら？」

「無いな、ぶっちゃけ」

「まあ、そうだね……でも、ちよつと気になって様子を見に来たの。よかつたら事情を聞

かせてくれないかな？」

「……裏があるようにしか思えないわ」

まあ今回の件に関しちやAもBも完全に部外者だろうけどよ、それにしたって取り付く島も無いなこの子。

「そこまで警戒しないでもいいんじゃないか？　どうやら本当に興味本位って感じだし」
「私は他人の興味本位に付き合う気はないの」

コージーがそう諫めるも、友好度0のホリリンは少し距離を置いて窓の外を眺めだした。どうやら勝手にしろということらしい。それとコージー、俺は100パー興味本位だけで正解ちゃんは100パー善意で手伝いに来たらしいぞ。

「聞かせてよ。先生達からは喧嘩があつたくらいしか教えてくれなくて」

コージーは少し迷っていたようだが、事件の全容を教えてくれた。どうやら須藤君はバスケットでもレギュラー候補になるほど優秀なそうで、それを妬んだCクラスのバスケット部にここへ呼び出され殴りかかられ、撃退したら嘘の報告を学校にされたそう。コージー達は何か手がかりが無いか探してきたものの、不幸なことに特別棟には監視カメラが無くどちらが嘘の証言をしたかわからないとのこと。……もしリユニケルが裏で手を引いてるんだとしたら、間違いなく監視カメラの無いこの場所を狙って事件を起こさせたなこりゃ。

「君達はその、須藤君の方を信じてるんだよね。友達だから当たり前だけど、Dクラスにとっては今回の騒動は冤罪事件になるね。……でも、もし須藤君が嘘をついてたと判明したら君達はどうするの?」

「当然正直に申告させるわ。その嘘は間違いなく自分の首を絞める結果に繋がるでしょうし」

ここで揉み消すなんて答えてたら、流石の卍解ちゃんも手伝う気になれなかっただろうな。その証拠に安心したように息を吐いているし。

「……もういいかしら。知りたい情報は全部知れた筈よ」

「……あのさ、もしよかつたら私達も協力しようか?人手は多いほど色々効率的でしよ?」

「どうしてそういう流れになるのかしら?」

「この学校はクラス同士を競わせてるから、こういうトラブルは今回だけじゃなくこの先も起こりうることだよ。嘘をついた方が勝ちやうなんて大問題だよ。……それに話を聞いちゃった以上、個人的に見過ごせないしね」

流石卍解ちゃん、THE・善人な行動原理だ。腹の中真っ黒な有栖は勿論、あの葛城でさえそんな理由でDクラスを助けようとは思わないだろう。自分で言うのもアレだけど、遊び半分で首突っ込みにきた俺とは大違いだね。

「俺も手を貸すよ。今クラスは内輪揉めで忙しいから、個人での協力になるけどね」

「クラスに居場所が無いのかしら？だとしたら憐れねあなた」

「チエスに例えると俺はクイーンだからね、本当に重要な局面でしか指示が回ってこないのさ。派閥争いなんて俺が直接動かなくても、葛城じや有栖には勝てやしない」

「……葛城？有栖？」

マジかよホリリンちゃん。敵対するクラスの中心人物くらい調べとけよ……つてそういうえばこの子ぼっちだったっけ。誰からも教えてもらえないだろうし、Dクラスは大変だったみたいだから情報収集してる暇も無いか。

「葛城康平君と坂柳有栖さん。Aクラスはこの二人がそれぞれグループを作って、どちらがクラスを纏めていくか争っているらしいんだ」

「Aクラスは常に狙われる立場だというのに、内輪揉めなんて随分と暢気なものね」

「そりやあ外側に脅威が無い以上、内側で揉めるのは不自然じゃないでしょ？」

面白くなりそうだったのでわざと火種を投げ入れてみると、卍解ちゃんとコージーは平然としていたが、ホリリンからの敵意が跳ね上がった。……というかコージー、君も置物みたいに立ってないでもう少し会話に混ざろうぜ？

「今の内に好きなかだけ図に乗っておけばいいわ。あなた達がトップの座に胡座をかいていれば、引きずり降ろすのも難しくはなさそうね」

「本気で引きずり降ろすつもりなら、無駄に警戒させないために黙ってた方が賢明だぜ？……まあでも期待はしてるよ。君達が脅威になるくらい成長したら、退屈している有栖も喜ぶだろうし。……まあそんな訳で、暇だから俺も手伝って——」

「お断りするわ」

ですよね。薄々そうだろうとは思ってたよ。

まあ適当に言いくるめることもできなくはないが……別にそこまでする程のことじゃないかな、うん。

「一之瀬さんはともかく、あなたには信用できる要素が欠片もない。下手に引つ掻き回されたらたまらないし、さっさとお引き取り願うわ」

「わーお随分な嫌われよう。……まあお呼びじゃないってんなら別にいいけどさ。またね卍解ちゃん、コージー、ホリリン」

「待ちなさい。ずっと気になってたけど、私のことをふざけた名称で呼ぶのをやめなさい」

「別にふざけてないよ失礼な。〃堀〃北〃鈴〃音だからホリリン。可愛らしいでしょ？」

「やめなさいと言ったはずよ。あなたに頓珍漢な愛称で呼ばれる筋合いは無いわ」

「えー……なんで俺が君なんかに命令されなきゃいけないのさ？俺が君をどう呼ぼうと

俺の勝手でしょ」

「正解ちゃんみたいにお願ひしてきたならともかく、上から物言ってきたなら当然拒否する。俺に命令していいのは有栖だけだよ、今のところは。」

「……力づくで言うことを聞かせてあげましょうか？」

「力づくで？君程度が？寝言は寝て言おうか」

ああ駄目だな俺も。女の子からここまで敵意を向けられることは今まで無かったから………ついつい火に油を注ぎたくなる。俺の心の中の有栖がいいぞもつとやれと囁し立てる。

「はいはいストップストップ！暴力事件を解決させようとしてる人が暴力に訴えたら本末転倒だよ。本条君も必要以上に挑発しない！」

「それもそうだね、ごめんごめん」

申し訳無い気持ちなど欠片も無いが形だけ謝っておいた俺に対し、ホリリンは懽然とした表情でそっぽを向いた。気位が高いなあこの子……リユンケルと戦っていく上では致命的だ。

「そんなにホリリンが嫌？……よし、じゃあ一つゲームをしよう」

「ふざけてるの？私達にそんなことしてる暇は——」

「ゲームの内容はともシンプル！……須藤君の完全無罪を勝ち取ってみな。そしたら

名前を普通に呼んであげる」

「っ!？」

……ふむ。表情から察するにホリリンと卍解ちゃんは、それがどれだけ困難か理解しててみたいだな。コージーは無表情のままだからどうなのかわからねーけど。

たとえばCクラスが嘘をついていようが、実際に暴力を振るって怪我させてしまった須藤君にも、多分停学等の何らかのお咎めはあるだろう。そうなればレギュラーの話も多分白紙……つまり完全無罪を勝ち取らなきゃCクラスの勝ちみたいなものだ。

俺の見立てでは、正攻法ではどうあがいても須藤君が完全無罪になることは無い……正攻法なら。

「俺の挑戦を受けるかい？正直、この程度の危機を対処できないなら俺や有栖の敵じゃないけど……まあどうしても嫌だっというなら、別に無条件で堀北呼びでも構わないよ？」

「……いいわ、その勝負受けてあげる」

やはりプライドが高く挑発に弱い女……とバカにする気にはならないな。一見途方もなく困難な試練が立ち塞がり、さらにリスクの無い逃げ道まで用意されたんじや、大抵の奴は逃げることを選ぶ。ここで逃げずに戦えるのは、よほどのバカかよほど強い芯を持った人間だけだ。

「その代わり、私が勝ったときの要求は変えてもらおうわ。よく考えたらあなたがどう呼ぼうが、私の知ったことじゃないしね」

「ふむ……何が望みだい？」

「あなたの所持ポイント数と、どうやってそれを集めたかを教えてもらおうわ」

……ほー、そうきたか。

「……何故そんなことを聞きたがるのさ？」

「今日ウチの担任に質問したの、この学校が始まって以来、過去最高どれだけのポイントを集めた生徒がいるのかってね。……返ってきた答えはあなただったわ。具体的な額は教えてくれなかったけど」

なるほど、最初に興味の視線を向けてきたのはそういう理由か……というかまた個人情報流出してるし、相変わらずコンプライアンスがなってるねえなこの学校。

「……いいよ、須藤君が無罪になったら教えてあげる。それじゃあ頑張ってるね、応援してる」

不敵な笑みを浮かべつつそう締め括り、俺は特別棟を後にし。ホリリンの性格上多分今回の件にはあまり乗り気じゃなかっただろうけど、本気で取り組む気になっただろう。卍解ちゃんも協力するみたいだし、あとはちよつと頭を使えば無罪に持つていくことはそう難しくない。……ただ、1つだけ懸念事項はある。

……監視カメラ、こここの敷地内で手に入るのかな？

(1 . 3) (1 . 3 .) (. 3 .) (3 .)

光陰矢の如しとはよく言ったもので、あつという間に須藤君の命運が決定する日になった。コージー達が何をやっていたかは知らないが、正解ちゃんは学生掲示板にて情報収集等を行っていたみたいだ。ふむふむ、なかなか悪くないアプローチだ。良くもないけど。

俺は朝からいつものルーティンをこなし（走り込み中ミスターに会ったが、彼はいつも通り自分に酔っていた。須藤君がどうなろうと興味無いのだろう）、寮のロビーにて有栖と合流し学校へ向かう。

「……そういや以前は神室も一緒に登校していたのに、最近は全然だねー。どしたの？喧嘩でもした？」

「してるわけないじゃないですか。昨日3人で映画に行っただばかりでしょうに」

「あーあれは楽しかったな。ヒロインが化け物に喰い殺された辺りで神室が物凄いビビりまくってたっけ」

「上映後余計な悪戯をしかけた貴方が、涙目の真澄さんに思いつき怒られていましたね」

ちよつとしたお茶目であんなにパニックになるとは思わなかった。ごめんね神室、悪気はあんまりなかったんだ。おかげで俺と有栖は大満足でした。

「じゃあ俺のせいなの？でも神室と一緒に登校しなかったのって結構前からだよな？」

「本人曰く馬に蹴られたくないから、だそうですよ。どうやらまた不要な気遣いをさせてしまったみたいですね」

「中学のときから似たようなことがちよくちよくあるよな。付き合ってるわけでもないんだから、別に気にしないでもいいのに」

「実のところ、単に居心地が良くないのでしよう。私が無理を言えば一緒に登校してくれるでしょうが……それをしたいとは思いませんし」

一見平然としているけど耳が真っ赤だね有栖。照れるならいちいち言わなきゃいいのに。

「それってつまり俺と二人きりで登校したいってこと？きゃー有栖ちゃんってば乙女ー☆」

「怒りますよっ」

「ごめんちゃい」

「まったくもう……」

僅かに頬を膨らませそっぽを向く有栖だが不機嫌そうな気配は微塵も感じないし、何

だったらさつきより顔が赤くなってる。相変わらず今日も引くほど可愛いなこの子、おかげで溜まったストレスが弾け飛んでいくようだけ。……まあストレスとか別に溜め込んでねーけど。

そして放課後になり、俺は結果がどうなったか見届けるために職員室へ足を運ぶ。いやまあ見届けるといっても俺は100%部外者だから、全部終わってから結果を聞く形になるだろうけど。

「失礼しまーす。CクラスとDクラスの小競り合いどうなりましたー？」
「あれ？Aクラスの本条君？」

意気揚々と職員室に入りそう告げると、近くのデスクにいたBクラスの担任、星之宮先生が立ち上がり駆け寄ってきた。パツと見はただの美人な先生なのだが、Bクラスの子曰くこう見えて非常に酒癖が悪いらしく、二日酔いが抜けないままホームルームを行ったりと残念な一面のある先生だそうだ。

「どうしてそんなこと聞きたいの？あつ、もしかしてウチの一之瀬さんみたいにDクラスに協力してたの？」

「そのつもりだったんすけど断られちゃいました。どうも俺堀北ちゃんに嫌われてるみたいで」

「あら〜……確かに堀北さんってちよつと気難しそうだからね〜」

まあ嫌われている理由の半分以上は俺のせいなんだけどね。

「そこでちよつと一悶着ありましてね、もし須藤君の無罪を勝ち取れたら一つお願い事を聞くことになってましてね。それでその結果を知りに来たわけっす」

「あらあら、そつちはそつちで面白いことになってるのね。その審議なら4階の生徒会室で行われてるよ。時間的にそろそろ終わるんじゃないかな〜」

「マジすか先生。生徒会って……もしかして茜先輩も審議に参加してるんすか？」

「橘さん？多分そうじゃないかな。……もしかして本条君、橘さんと仲良しなの？坂柳さんがいるのに、浮気は良くないぞ〜？つんつんつと」

「茜先輩はこの学校で一番尊敬してる先輩ってだけで、恋愛感情とかは別に無いっすよ。……それにそもそもあの人が好きなの会長さんじゃないすか」

「あく、やっぱりわかっちゃう？本人が隠せてると思ってるのが可愛いよね」

「そつすね♪しかし肝心の会長さんだけがまったく気づいてなさそうなのが、また何と

ももどかしいというか……まあそれはあれでとても愉快ですけどね☆」

「あゝ、わかるゝ」

「何をやってるんだお前達は……職員室は井戸端会議をするところではないぞ」

俺と星之宮先生が恋バナに花を咲かせていると、真嶋先生が呆れた表情でやって来た。

「固いこと言わないでくださいよ真嶋先生、ちよつとしたガールズトークじゃないっすか」

「この場にガールなんて一人もいないだろうに……」

「真嶋君、ひよつとして喧嘩売ってる？」

「もうガールなんて歳でもないだろうお前も」

「デリカシー無いっすね先生」

「やかましい。百、いや一億歩譲って星之宮をガールとカウントしたとしても……」

「真嶋君、後で覚えててね？」

「……。本条、お前は違うだろう。それではどちらにせよガールズトークではない」

「英語教師らしい指摘っすね。でも残念、俺は多分前世は女でしたから。カピバラの」

「今世は男であることに変わりはない」

うん、もつとも。自分で言っというて我ながら苦しい主張だと思った。

「それじゃあそろそろ俺は生徒会室に行きますけど……星之宮先生の相手、頑張ってくださいね？ 気が向いたら骨は拾ってあげます」

「……今度覚えていろよ本条」

「女性に歳の話を持ち出した先生が悪いので綺麗さっぱり忘れます」

何やら疲れた様子の真嶋先生と威圧感のある笑みを浮かべた星之宮先生に見送られながら、俺は職員室を後にした。……ただの同僚にしては随分と気安い関係だなあの二人、実は同期だったりするのかな？

「ごめんね綾小路君……私が最初から名乗り出ていたら、こんなことには……」

「同じことだ。佐倉が最初に名乗りでようがあいつらは結局、目撃者がDクラスだったことを責め立てた筈だ」

「でもっ……!」

えー……何この状況？

生徒会室まで足を運んでみれば、そこには泣き崩れている眼鏡をかけた女の子と、ど

うしていいかわからず立ち往生するコージの姿が。さっきの会話から察するにこの眼鏡の子……佐倉ちゃんが例の事件の目撃者のようだが……うーん、Dクラスから目撃者が出てきちゃったと嘆くべきか、Cクラスじゃなくて良かったと喜ぶべきか……まあ無罪を勝ち取りたいならどっち道些細な違いか。

「やつほコージ」

「本条か」

ハンカチを佐倉ちゃんに渡しつつ二人に合流する。佐倉はやや怯えつつも礼を言うてからハンカチを受け取った。ごめんね怖い目つきで。

「なんだ、まだいたのか……本条？」

「本条君？」

それとほぼ同時に、生徒会室から茜先輩と会長さんが出てくる。そして茜先輩が戸締まりのために背を向けたと同時に、俺はすかさず背後を取りつつ懐から音楽プレーヤーを取り出し、音量をかなり上げて茜先輩の耳にそとイヤホンをつけ再生ボタンを押す。

『うらめしやああああああああ』

「にぎやああああああああああ!？」

「「!?!」」

大音量でプレーヤーから流れたのは、それはもうおどろおどろしい心霊ボイス。昨日神室にしかけた悪戯を再び行ったところ、それはもう満足のいく撮れ高になった。最高です先輩。

その場で飛び上がって震えて蹲り、しばらくしてから恐る恐る後ろを振り返ると、『ドッキリ大成功』という小さなプラカードを片手に満面の笑みを浮かべた俺。涙を浮かべていた橘先輩の目はみるみる内に吊り上がっていき、全身から怒りのオーラらしきものがふつつつと立ち上る。あつ、ヤベ……。

「このつ、このこのこのつ、このおおおおおおつー!」

「痛いっ、痛い痛い痛い!?!ごめ、すんません茜先輩、そんな執拗に脛蹴らないで折れちゃうっ!?!」

「うるさいいつそ折れちゃえこのお婆か!ばかばかばかばかあつつつ!」

「すんません悪いとは思っていますちよつとした出来心だったんです悲鳴可愛かったですー!」

「全然悪びれてないでしょうがああああ!」

怒れる茜先輩は意外と陰湿かつ的確な報復攻撃の嵐を俺にお見舞いする。茜先輩の

キツク力だと正直大して痛くないが、少しでも溜飲を下げてもらうためここは痛がっておこう。痛めつけられつつ必死で謝り倒したおかげでひとまず満足した茜先輩は施設に戻り、会長さんは一旦咳払いしてとっ散らかった空気をリセットする。なんか私は無関係ですみたいな態度とってるけど、俺が私刑にかけられてる間助けようともせずこっそり笑つてたの見逃しませんからね？コージー、佐倉ちゃん、君達もな。

「……………本条、生徒会室に何のようだ？まさか橘にくだらん悪戯をするためだけにここに来たわけではあるまい」

「くだらんとは失礼な。……………おたくの妹ちゃんと今回の件で、ちよつとした勝負をしてみせてね。それで須藤君どうなったんすか？無罪になりましたか？」

「明日の4時に再審だ。……………なるほど、完全無罪と言い放つたのは鈴音の暴走というわけか」

会長さんがコージーの方に視線を移してそう問いかけると、彼もそれを否定しなかった。ふーむ……………ホリリンはひよつとすると、答えに辿り着いたかもね。

「それから佐倉と言ったな。お前の目撃証言と写真は、審議に出すだけの証拠はあった。しかし覚えておけ、その証拠をどこまで信用するかは証明力で決まると。お前がDクラスの子生徒である以上、今回お前の証言が真実として認識されることはない」

おもむろに会長さんは佐倉ちゃんの方を向き、容赦なく厳しい言葉を浴びせかける。

……いや会長さん、言ってることは正論だけでもうちよつと空気読もつか？泣いていたであろう面識の無い女の子に追い討ちかけちゃダメでしょ。

「わ、私は……ただ、本当のことを……」

「証明しきれなければ、ただの戯言だ」

俯いたまま再び涙を流し始める佐倉ちゃんを庇うように、コージーとついでに俺は佐倉ちゃんと会長さんの間に割って入る。

「オレは信じますよ。佐倉の証言を」

「じゃあ俺も」

「クラスメイトならば、信じたいと思うのは当然のことだ。……それから本条、部外者はお呼びじゃない」

「さっきのこと許してあげますから、私と一緒に端に寄ってましよう本条君。話をややこしくしないでください」

茜先輩に手を引かれて端へフェードアウトする俺。すまんコージー、後は任せた。

「信じたい、じゃない。俺は信じてると言ったんだ」

「そうか……ならば証明してみせろ。佐倉の証言が戯言ではないとな」

「それをするのはオレじゃなくあんたの妹だ。オレは堀北のことも信じてる」

いや話の流れ的にそこは君の出番だろ。なんでここまで盛り上げといて他力本願？

二人が去つた後も、佐倉ちゃんは泣いたままその場から動けないでいた。

「しかし酷い目にあつたね君も。会長さんもデリカシーつてもんがねーのか。あれじゃ茜先輩も今後苦勞しそうだぜ」

「顔を上げる佐倉。泣いてたつてしようがない」

「だって……私のせいで……っ……」

「お前は何も悪くない。本当のことを言っただけだ。お前のお陰で須藤や皆が救われる可能性が出て来たんだ」

「……でも……っ……」

まあコージの主張も間違つてはいない。この子がいなければ、再審を行うまでもなく須藤君が有罪になつていただろうから。後はホリリンがやるべきことをやつてくれれば、晴れてDクラスの完全勝利だ。

「オレはお前を信じる、それが友達だ」

コージは佐倉ちゃんの肩を掴み強引に向かせ、真つ直ぐに目を合わせてそう言い

放った。うんうん、実に格好良いぜコージー。……だけど君さ、そこまで格好良くビシツと決めたならお前が何とかしろよ。全部ホリリンに丸投げってどうなのさ？

(—ω—) (ω—) (' —ω) (' —ω—)

翌日の放課後、俺はすぐさま生徒会室に直行する。審議はまだ始まってすらいないため急ぐ必要は別に無いのだが、そういえば今回の騒動の中心である須藤君のこと何も知らないと思い、審議が始まる前に一度会ってみるかと思つて馳せ参じた次第だ。……あと茜先輩にも会いたかつたし。

「むっ、本条君……」

「あ、茜先輩。……ウイイイーツス!!」

「やめてくださいなんですかその体育会系全快の挨拶はっ!」

「だって俺運動部ですし?」

「あなたほとんど幽霊部員でしょうが!」

えっ、なんでそんなこと知つてんの? ストーカー? ……つて、そういえばウチの主将つて3年Aクラスだっけ。

「じゃあ……チヨリイーツス☆」

「無駄にチャライ! イラツとするからやめなさい! 先輩への敬意がまるで感じられません!」

「これもダメすか。じゃあ……」

「いあ いあ アーカネ先輩」

「そんな冒険的な神話生物に払うような敬意は求めてないですっ!!」

「だったら……???!」

「んんっ……どこの国の挨拶ですかそれ!!」

「やれやれ、茜先輩たら我儘なんですから」

「……今忙しいから見逃しますけど、今度時間があるとき覚えていてくださいね。先輩としてじっくりお説教してあげますっ」

「えっ、デートの誘いつすか? 会長さんというものがありませんながら堂々と浮気とか……無いわー」

「お説教だつて言っているでしょうが!! だいたい私と会長はまだ付き合ってもいませんよー」

「へえ、まだ……ねえ?」

「えーあつ!! その、えつと、ちよつと言い間違えただけで……」

「それに付き合つて『も』いない、かあ……つまり茜先輩は会長さんに、交際以上の何かを求めているんすねー」

「うえあつ!?! いや、それは、そのう……」

「ご祝儀は弾むんで式にはちゃんと呼んでくださいねー」

「……………あう」

羞恥で思考のキャパシティをオーバーしたのか、茜先輩は顔を真っ赤にしたまま復活までちよつと時間がかかった。俺は先輩のそういうところが大好きです。今後とも好き放題弄っていくのでご容赦ください。

「まったく……………忙しいって言ってるのに、本条君のせいで酷い目に合いましたよ」

「自分で勝手に自爆したくせに……………」

「何か言いました？」

「人は一生のうちに16回ほど殺人鬼とすれ違うらしいですよ？って言いました」

「いや言ってますんよね!?!というかそんな豆知識聞きたくなかった!」

忙しいなら相手しなきゃいいのに、茜先輩はいちいち律儀にツッコんでくれる。そういうところも大好きです。

「それじゃあ審議の件、頑張ってくださいね。茜先輩の働きが一人の生徒の命運を左右すると言っても過言じゃありませんよ」

「いえ過言です、生徒会はあくまで中立ですから。……昨日のやり取りから察するに、本条君は何故かDクラスに肩入れしているみたいですが、私の助けは期待しないでくださいね」

「それぐらいわかってますよ。そもそも俺は別にDクラスの味方じゃないですし。気まぐれでホリリンを焚き付けたりもしましたが……」

彼女が失敗して須藤君がどうなるかと、俺の知ったことじゃないしね」

「本条、君……？」

この人には極力嘘をつきたくないので、俺の偽らざる本音を洗いざらい打ち明けておく。

茜先輩は少し困惑した様子だったが、そろそろ審議の時間だったのでさっさと生徒会室に入っていった。それと入れ違いになる形でホリリンと、見るからに不良っぽい赤髪の男子生徒がやってきた。以前図書館でCクラスと揉めてた……なるほど、この子が須藤君だったか。

「つ……本条君……！」

「あ？テメーはいつぞやの……」

「Aクラスの本条桐葉だよ。バスケット部の須藤君、だっけ？ちよつと君に1つ聞いておきたいことがあるんだけど……」

「いきなりなんだコラ。こっちは忙しいんだよ、もしつもらねえことだったら——」
「君、桜木花道に憧れてるね？」

「んなつ!?!何故それを!?!」

「凶星だったのか狼狽える須藤君。いや逆になんでわからないと思つた?見た目不良で赤髪でバスケ部とか、まんま花道じゃん。」

その後少々話し合い、気がつけば最初はあつた彼の警戒心は跡形もなく消え去つていた。こういうタイプの子は、同じ趣味を持つてる人にはすぐ心を許すからね。

「やっぱ山王戦で花道と流川がハイタッチしたシーンは痺れたよな!」

「そうだね。ベタと言われるかもしれないが、最初から読み進めていた人にとっては凄く感慨深いシーンだ」

「だよな!なんだよ話がわかるじゃねえか本条!他にも海南大附属と戦つたときのゴリは——」

「そこまでにして須藤君。もうすぐ審議が始まるわ、バスケ漫画トークは無罪を勝ち取つてからにしないかい」

「うっ……すまん堀北」

流石歴戦のぼっちホリリン。和気藹々としてるところを躊躇なく一刀両断したよ。

……まあ確かに審議まであと10分ちよいしか無いから仕方ないか。

「何しに来たのかしら本条君」

「君達の結末を見届けに、ね。随分自信满满だけど期待してもいいのかい？」

「当然よ。……例の約束はちゃんと覚えてるでしょうね？」

「約束は守るさ、たとえ口約束だろうとね」

俺の返事に面白くなさそうに鼻を鳴らし、ホリリンは生徒会室に入っていった。約束とやらが気になるのかこちらを気にしつつも、須藤君もホリリンの後に続く。ふむ、コージがいらないみたいだね……どうやらこれは期待しても良さそうかな。

次に来たのは会長さん。俺を僅かに一瞥してから、言葉を交わすことなく生徒会室に入っていく。

「おや？君は……」

「Aクラスの本条、か」

「んむ？ああ、お務め御苦労様です」

そしてその次にやってきたのはCクラス担任の坂上先生と、Dクラス担任の茶柱先生。

「Aクラスの君がいったい生徒会室に何の用ですか？これから大事な審議があるので、用件があるなら後にしてもらおうことになるが」

「その審議で必ず無罪を勝ち取ると、Dクラスの堀北ちゃんに啖呵を切られましたね。」

打倒俺達に燃えるあの子がどんな答えを出すのか、少し気になって」

「……なるほど、昨日の暴走はそういう訳ですか。流石はDクラスの生徒ですな、よもや嘯み付く相手も区別できないとは」

何やら勝ち誇った様子で坂上先生は生徒会室に入っていく、茶柱先生も会長さんのように俺を少し一瞥してからそれに続いた。

あらためて思うが、各クラスの担任の生徒への接し方ってバラバラだな。ウチの真嶋先生はどの生徒にもフラットに接しているけど、坂上先生や星之宮先生は明らかに自分のクラスに肩入れしているみたいだし、茶柱先生なんかはその逆で自分のクラスを見放しているのか、テスト範囲の変更を伝え忘れたこともあったらしい……文科省の審査どうなってるんだ？

そんなくだらないことに思いを馳せていたら、引くほど汗だくになったCクラスの生徒らしき3人を引き連れた、同じく汗だくになったコーギーがやってくる。俺に対して何か言いたげなCクラスの3人を生徒会室放り込むのを見届けてから、俺はコーギーに声をかける。

「どうやら仕込みは上手くいったようだね」

「ああ、堀北が打開案を考えてくれた。……その様子からして、堀北に勝負を持ちかけたときには既に気づいていたんだな」

「まあね。審議がどう進もうと須藤君を無罪にできないなら、訴えそのものを取り下げさせればいい」

例えば偽の監視カメラを取り付けて退学をちらつかせるとかしてね。普通に考えれば畏だつて気づけてもいいけど、あの判断が鈍るほど蒸し暑い特別棟だと、人心掌握に優れる卍解ちゃんなら大抵の人は言いくるめられるだろうし。

彼等の目論見通りCクラス生徒と坂上先生は何かを言い合いながらすぐ出てきて、少ししてから須藤も出てきた。

「上手くいっただな」

「おめでとう、と言っておこうかね？」

「何だかよくわからねえけど、堀北が何かしてくれたんだよな？……あいつは俺のためをやってくれると思つてたぜ。へへへ」

多分色々勘違いしてるっぽいけど、なんか幸せそうだしそつとしておこう。世の中知らない方が良くある。

コージと祝勝会の約束をしてからが須藤君が去つてからすぐに、茜先輩と会長さんも生徒会室から出てきた。

「Cクラス側が突然訴えを取り下げると申し出た。……これがお前達の、佐倉が嘘つきでない」と証明する方法か。訴えを取り下げたとなれば、嘘を吐いていたのは佐倉ではな

くCクラスだと噂が広まるだろうな」

「あんたの妹が上手く運んだだけだ。オレは何もしちゃいない」

別に何もしてないってことはないでしょうに。リーダーの立てた戦略がどれだけ優れてようが、俺達実働部隊が動いてこそ意味があるんだぜ。

「……まだ書記の席が1つ空いていたな。綾小路、お前が望むならその席を譲っても構わん」

……ほう？こりやまた意外なスカウトだ。葛城や正解ちゃんを差し置いて会長さんが誘うとは。しかもこのタイミングってことは………今回の件、もしかしてコージーが全部裏で糸を引いて解決したっていうのか？

それはつまりこの俺を騙した、いや……この俺を騙せていたことになる。嘘がわかりにくい奴は探せばまあまああるが、ここまで変わらない奴は初めてだ。そういえば以前会長さんに襲われてたときもまるで変わってなかったし……もしかしてコージーは、思っていたよりも凄い奴なのかもしれないな。

「か、会長……本気ですか？」

「不服か？」

「い、いえ。会長が仰るなら私に異存はありませんが……」

「そこはもうちょい自分の意見を持ちましょうよ茜先輩、会長が相手だからってビビッ

てんすか?」

「話がややこしくなるから本条君は黙っててください!メールの返信無視しますよ!」

おっとそいつは困るな、極力黙ってようっと。

「オレは基本的に事なかれ主義なんだ。生徒会なんて冗談じゃない」

「ええ!?!会長からのお誘いを断るんですか!?!」

「興味無いし……それに生徒会って能力を求められるんでしょ?パツとしない俺なんかよりも、本条を誘ったらどうですか?」

「あ、それは無理だぜコージ。生徒会って部活と兼任できないし。空手部員の俺は厳しい練習で日夜大忙しなのです」

「いやだから、あなた幽霊部員でしようが!?!それで結果を出してるのは凄いですけど!」
やったー茜先輩に誉められた。

内心俺が喜んでいて、会長さんも興味を示したのかこちらへ向き直る。

「ふむ……確かに原則兼任は認めていないが、どうしてもと言うなら許可してやってもいい」

「書記ってことは茜先輩と同じ役職かあ……やめといた方がよくないですか?茜先輩がストレスで禿げちゃいますよ」

「何をしでかすつもりなんですか!?!」

「問題無い。橘は優秀だ、後輩のやんちゃくらいそつなく捌くだろう」
「会長!？」

会長の無慈悲な宣告に、捨てられた子犬のように目を潤ませる茜先輩。俺が女だったら思わず抱き締めてるぐらい庇護欲をそそるなこの人。

「それに会長さん、葛城を面接で落とすじゃないですか？有栖とクラスのリーダーの座を争っているあいつが落ちて、有栖の取り巻きAである俺が通ったら面目丸つぶれでしょうが。何だか可哀想なので辞退します」

「取り巻きAにここまで憐れまれてる時点で、もう手遅れだと思いますけど……」
「茜先輩、それは言っちゃおしまいです」

葛城だけならともかく、正解ちゃんにも悪いしな。それに生徒会役員は能力よりも、熱意と責任感を優先すべきだと個人的に思うし。

「ならばいい。……一応釘を刺しておくが、南雲の件を忘れていないだろうな」
「はいはい、約束は守りますよ」

入学式の日。俺はギャングブルの軍資金を得るため、会長さんにある条件と引き換えに100万ポイントを借り受けた。その条件は……生徒会副会長・南雲雅に今後決して味方をしないこと。会長さんがここまで警戒するからには、おそらく非常に高い能力と危険な思想を併せ持つ先輩なんだろう……めちゃくちゃ好奇心を刺激するが約束は約束

だ、諦めるしかない。

そして会長さん達が去った後、やっと生徒会室からホリリンと合流して、彼女の望む通りの情報を公開した。……もしかしたら心が折れてしまわないかと少し危惧したが、俺への敵意が消えてない様子からして心配は無さそうだ。

……期末が終われば、いよいよ最初の特別試験か。有栖が参加できない上、葛城を転落させる予定のため俺が本気を出す機会が無いのが少々残念だが、ホリリンが、リユンケルが、卍解ちゃん……そしてコージが、いかにして俺達を引き摺り降ろすか楽しみだ。

……でも有栖は不参加なんだよな。あーあ、そう思うと一気にモチベーションが……。

2巻エピソード

《Side：堀北鈴音》

七月末、期末テストが終了した。

前回同様1つでも赤点を取れば退学なのは勿論、前回の過去問のような抜け道の無い試験だったが、どうにか退学者を出さずに乗り越えることができた。……まあ一部の生徒は相変わらずギリギリだったけど。特に須藤君……この間あれだけクラスに迷惑をかけておいて、あつさり赤点なんか取ったらどうしてやろうかと思ったわ。

茶柱先生が何かと注目している綾小路君も手を抜いてるのか、相変わらず箸にも棒にもかからないような成績のままだし……総じてDクラスはやはりまだまだ心もとない戦力だ。今のままじゃ到底あのAクラスを倒すなど夢のまた夢だろう。

Aクラス……そう、私が目指すのはAクラスただ一つのみ。別にAクラスだけが受けられる恩恵、進学や就職等のサポートが欲しいのではない。私が望むのは兄さんに認めてもらふこと、そして兄さんのような優れた人間になることのみ……そのためには、何としてもAクラスに上がらなくてはならない。

この私が不良品の集まりであるDクラスなんかに配属されたのは、学校側のミスで

あったと確信している。確かに私は兄さんと比べれば大きく劣っているが、周りから見れば優れた人間であることに間違いない。今回の期末テストだって学年でもトップクラスの成績だった筈だ。たった今職員室に張り出されている成績表を確認してきたが、学年で5位だという結果が出ていた。つまり私はAクラスの生徒の大半よりも優秀ということに他ならない。

厚顔無恥なことに学校側はそのミスを頑なに認めようとはしないが、それならばもう仕方がない……絶対にこのクラスをAクラスまで押し上げてみせる。

……ただ、不安が無いと言えば嘘になる。当然誰かに弱音を吐くつもりなどないが、まず間違いなく困難な道になりになるのは間違いないこともわかっている。私は確かに優秀だが、兄さんのように突出しているわけではない。……学力1つとっても、私より上の人間がいるのだから。

心の中でそう自嘲しよう一度成績表の最上位の部分、私よりも高い点数を取った生徒4名……特に、ある人物の名前へと向かい合う。

1位	Aクラス	坂柳有栖	500点
1位	Aクラス	本条桐葉	500点

3位	Aクラス	葛城康平	486点
4位	Bクラス	一之瀬帆波	484点
5位	Dクラス	堀北鈴音	483点
6位	Aクラス	山村美紀	481点
7位	Dクラス	幸村輝彦	480点
7位	Dクラス	高円寺六助	480点
9位	Cクラス	椎名ひより	478点
10位	Aクラス	西川亮子	475点

思わず顔が強張るのを感じる。脳裏にあの人を食ったような態度と余裕の笑みが嫌でも浮かび、苛立ちを抑えられない。いったいどうしてあんなおちゃらけた男が……。

本条桐葉

私達DクラスがAクラス打倒を目指す上で、まず間違いなく最大の障害となる人物。その理由はいたつてシンプル、その桁外れな能力。

学力はこのテスト結果を見れば一目瞭然。学力最上位のうち10位から3位までは大した差は無いが、トップ2人だけは完全に別次元……もしこの二人が今後も満点を取り続けるなら、私がどれだけ勉強に励もうと引き分けに持ち込むのが精一杯ということ

だ。

そして先日の件で開示させた、彼の持つポイントとそれを得る手段……空手部には空手で、水泳部には水泳で、テニス部にはテニスで挑んで勝ち抜いたことからして、運動能力も並外れていると分かる。これらの情報だけで非常に悔しいが、彼は私よりも優れていると認めざるを得ない。

しかし何よりも危険なのは、彼の持つプライベートポイントの総数だ。先日目にした彼のケータイ画面が、まだ目に焼き付いて離れない。

本条桐葉、彼が現在所有するプライベートポイントの額は……

8, 276, 002ポイント

ふざけるなど言いたくなる。

不正をしてポイントを得た訳ではないのだから理不尽なのはわかっているが、いくら

なんでも無茶苦茶だと文句を言いたい。クラスを上げるために重要なのはあくまでクラスポイントだが、それだけの額のプライベートポイントなら使いようによつては非常に強力な武器になるだろう。

……彼のポイント額からしても、やはり個人でAクラスに上がることは不可能らしい。歴代で最も多くポイントを貯めているのが本条君なら、それはつまりあの兄さんですら1000万ポイントを貯められていないことになる。ましてや個人でAクラスに昇格する権利、2000万ポイントなど限りなく夢物語だろう。……正直頭を抱えたくない。私はこの実に頼りないクラスメイト達と共に、あの強大な「個」に立ち向かわなくてはならないのだから。

さらに悪いことに、Aクラスには彼に指示を出す人間……つまり、彼と同等かそれ以上の人物がいる。それが同率学年1位の坂柳有栖さん……一之瀬さんの話では3位の葛城君とクラスのリーダーの座をかけて争つてるようだが、本条君の言う通りならいずれAクラスを率いるのは坂柳さんで間違いないだろう。クラスの総合力では圧倒的に負けている上、本条君をどう対処すればいいか未だ見当もつかないのに、さらにそれ以上の人物がいるのだからもう堪ったものではない。どうにか気をしっかり持たなければ、心がくじけてしまいそうだ。

……しかし、これは逆にチャンスでもある。

非常に悔しいことに兄さんは本条君と、何故か綾小路君に目をかけている。……それこそ出来ない妹だと見放されている私なんかよりもずっと。綾小路君の方は不明だが、兄さんが本条君に目をかける理由はやはりその優秀な能力だろう。でなければ100万なんて額のポイントを貸すわけがない。

つまり、私達がAクラスに上がる……すなわち私が本条君よりも優秀だと証明できれば、兄さんは必ずもう一度私を見てくれるんだ。だったら私は兄さんに言われた通り……

死に物狂いで本条君を越えてみせる。

《side : 橘茜》

「どうしてだ桃太郎!?! どうして……!」

「決まっているだろワンコ、主役はいつだって俺なんだよ。こんな美味しい場面……お前なんざに譲れるかよ」

不意をつかれ脱出ポットに閉じ込められた犬養が、怒りと困惑と悲しみが混ざり合った絶叫を上げるも桃太郎は取り合わず、脱出機能を発動させるべくパネルを操作する。そんな桃太郎に、犬養は両手から血が出るのも構わずに扉を叩く。

「ふざけるなよ桃太郎……アンタには、帰りを待っている人達がいるだろうが！アンタがくたばっちまえば、お爺さんとお婆さんがどれだけ悲しむと思つてやがる！犠牲になるべきは、どう考えても元は畜生だった俺だろうが！」

犬養とて死にたい訳ではない。だが脱出ポットが一人用な以上、生き残るべきは桃太郎で、死ぬのは自分であることに異論は無かつたしそうであるべきだとも思つていた。長年苦楽を共にしてきた、親とも兄とも呼べる男を死なせたくないのは勿論、自分達三匹が人へと変わったあのとき共有した桃太郎の記憶……彼の両親が、どれだけ彼に愛情を注いできたかを知っている。故に彼を、畜生でしかなかった自分達に、優しさと温もりを教えてくれた彼を、こんな絶望の果てで見殺しになんてできやしない。

「今ならまだ間に合う！早く開けやがれ！」

「畜生とか自分を貶めるようなこと言うなよ。俺はお前達をそんな風に思つたことなんざ一度も無いぞ」

「話を逸らすんじゃないやねえ！アンタの安易な自己犠牲で、悲しむ奴がいるか考えろ！」
「それはこつちの台詞だぜワンコ。……お前は雉美と、雉美の腹ん中のガキを残して死ぬつもりか」

「っ!?!……なんで、そのこと……」

「ばーか、がきんちよが大人に対して隠し事なんて10年早いんだよ。何を後ろめたく思ってたのかわらねーが、ウジウジと思ひ詰めやがってアホンダラ」

「だって……俺のせいで猿川は……その上、アンタまでもいなくなったらー！俺はー！」

「いつまでも甘ったれてんじゃないやねえ！」

「っ!?!」

犬養が怒られたのは、それが初めてだった。口は悪いがしつかり者の犬養と、常に軽薄かついい加減な桃太郎。親子、兄と弟のような関係の二人だったが、振り回すのは常に桃太郎で、怒るのは常に犬養だった。そんな桃太郎が犬養に向けての……最初で最後の叱咤激励。

「ガキ作っちゃったからには、お前はもうお前だけの命じゃねえんだよ！いい加減な俺がお前に教えることなんざほとんど無かったがよ、育児放棄なんてしやがったらただじゃおかねえぞ！」

「桃、太郎……!?!」

「それになワンコ……俺は死ぬつもりなんざ一切ねえよ。知らんうちにグレちまったバカ息子を迎えにいくだけさ」

パネルでの操作が終わり、脱出ポットが起動し始める。最早止めることはできないと悟り、涙を流しながらポット内で崩れ落ちる犬養に対し、桃太郎はガラス越しに最後の言葉を優しく告げる。

「じゃあな、ワンコ。お前を息子のように愛してたよ。……元気でな」

犬養が悲痛の叫びを上げる間もなく、脱出ポットは次元の狭間へと消えていった。先に離脱した雉美と共に、元の時代へと帰れるだろう。

桃太郎は次元の狭間を消してから煙草を取り出し、ジツポライターに火をつけると同時に、猿川が壁を壊して部屋に入ってきた。4足歩行で両手両足は5mほどまで伸び、3つに増えた顔はそれこそ桃太郎達の宿敵たる鬼のように醜悪な面になっており、体の所々が液状化し床へと滴り落ちている。

この怪物がかつては人間になった猿だと信じる者は誰一人としていないだろう。度重なる薬物投与の弊害か、もう猿川は長くは生きられないとわかる。……嫉妬とは、人をこのような化け物へと変えてしまうのだろうか。

「おいおい忙しないな。俺はお前を、ちよつとした一服の邪魔をするような無粋者に育てた覚えはないぜ？」

本条君から送られてきたメール小説を読み終わった私は、ハンカチで目から溢れ出した涙を拭う。

2週間前に本条君からこんなメールが送られてきたときは、試験中に何おバカなことやってるの!?!……としか思わなかったが、毎日送られてくるメールを読み進めていくうちにすっかり引き込まれてしまった。「むかしむかし」の書き出しで始まったのに、紆余曲折の末最終的にプレデーター顔負けのSFアクションものになったのはどうかと思うが、そんなツッコミどころを抜きにしてもとても面白かった。特に桃太郎と三匹の絆、三匹同士の友情……それらが少し崩れていくのは胸が締め付けられるような思いに駆られた。

「つと……もうこんな時間」

夢中で読んでいて気づかなかったが、いつの間にかいつもの就寝時間を過ぎてしまっていた。夜更かしは美容の大敵だ、気をつけなければ。

すぐに歯を磨いてパジャマに着替え、布団に入ると良い感じに眠気がやってきて、そのまま深い眠りにつこうとする寸前に……どうしても見逃せないツッコミ所を発見し、布団から起き上がり思わず叫ぶ。

「鬼は!?!」

結局最後の最後まで鬼ヶ島放ったらかしでしたよあの桃太郎!?!

バカンス開始！　そして終了……。

常夏の海、どこまでも広がる雲一つない青空、そして澄み切った空気。真夏の暑さがまるで苦に思わなくなるほどの爽快感をもたらしながら、豪華客船は青い海を駆け抜ける。

1学期を無事乗り越え夏休みを迎えた俺達一年生を待っていたのは、豪華客船によるクルージングの旅であった。

旅行費用及びその間の食費が完全無料という破格の待遇に、クラス問わず生徒達が否応なしにアゲアゲになる中……

「あーつまんねー……早く終わんないかな……」

客船のデッキで携帯を弄りながら一人やる気を無くしていた。ダメだ、どうしてもモチベーションが保てない。ガッツがでない。旅始まって早々でアレだがもう帰りたい。「いやテンション低いな本条……姫様が不参加で寂しいのはわかるけどよ、せっかくの

バカンスなんだからもうちよつと喜ぼうぜ?」

橋本がヘラヘラと浮かれた表情で励ましてくるが、打算のみで有栖に従ってるこいつに言われても俺の心には響かない。てかこいつ今回の旅行の内情知っててなんでこんなヘラヘラしてられるの?

「だって2週間だよ、2週間。いくらなんでも長すぎるぜー……ああくそ、サボれるなら俺もサボリたかった」

「いや坂柳は別にサボリじゃないからな?」

先天性心疾患を持つ有栖は、医療設備が十分じゃない環境で2週間過ごすなど危険過ぎると学校に判断され、今回の旅行には不参加となっている。事前にわかっていたことだが……いざ現実に直面すると凄くしんどい。寂しい。

「あーあ、退屈退屈暇暇暇暇……」

「高校生が駄々っ子みたいに床転げ回るなよ……今のお前、凄くバカっぽいぞ」

「誰がバカだー、バカって言った方が打ち首獄門なんですうー」

「いやでけえよペナルティが!」

この学校にきて面白い奴はいっぱい見つかったし、楽しいことも探しゃ多分見つかるだろうが、いかんせん有栖がいらないんじゃないやどうやっても差し引きマイナスだ。例えるなら麺もトッピングも最高級だけどスープの無いラーメン……それもうラーメンじゃ

ねーよ。

「よほど正当な理由がなければ不参加は認められないんだよな確か。……やつぱ特別試験があるからか？」

「かもねー」

有栖が買い取った情報によれば、今回の催しはバカンスの皮を被った今年度初の特別試験（しかも2回行われる）とのこと。その事実を知ればバカンス気分真つ盛りな生徒達はさぞ衝撃を受けるだろうな。皆が皆橋本のようにヘラヘラしてられないのだ。

「その特別試験自体も憂鬱なんだよ。負ける予定の戦いほどつまらねーものは無いでしょうがまったたく……」

有栖は自分の参加できない今回の試験を葛城に仕切らせ、大失敗させることで葛城派を潰すつもりだ。……となれば必然的に、俺は今回の試験を適当に流さなきゃならない。これでやる気を出せという方が無茶つてもんだ。

「負ける予定とは言うがな本条、葛城は姫様には劣るとはいえ優秀な男だぜ。総合力もAクラスがトップなんだし、普通にやれば早々負けることは無いだろ？ここはやつぱ俺達坂柳派が動かないと——」

「俺は何もしないよ。葛城じゃあ卍解ちゃんやホリリンはともかく、リユンケルには勝てないだろうし」

多分橋本含む坂柳派の何人かは事前に有栖から（試験内容は伝えちゃダメだから抽象的な）指示を受けているだろうが、俺に対しては何も指示してこなかった。それはつまり、いちいち俺が手を貸さずとも葛城の敗北は確実なのだろう。

「それから橋本、これは一つ助言なんだが……有栖の参加しない今回の試験、リユンケルに恩を売っておくチャンスだぜ？」

「……何の話だよ？人を裏切り者みたいない言い方しないでくれよ、傷つくぞ」

「あーいいっていいって取り繕わなくて。別に咎めようってわけじゃないんだ、お前の好きに動きゃあいい。……多分有栖も気づいてて放置してるだろうしな」

笑顔の中に少しの警戒を滲ませた橋本をよそに、俺はその場から立ち上がり移動する。ケータイ越しでやっていた有栖とのチェスも、いつものように後攻で始めた俺がリザインしたところで俺は立ち上がる。いつまでも愚痴つてもしょうがないし、気分転換に景色でも見てこよう。人生切り替えが大事。

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デツキにお集まりください。間もなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義ある景色をご覧頂けるでしょう』

狙い済ましたようにそんなアナウンスも聞こえてくる。相変わらずの奇妙な言い回しは試験へのヒントが隠されているんだろうが、本気で参加しない以上放置でいいか。

「デメエ何しやがる！」

お、さつそく愉快な出来事に遭遇するチャンス。せつかくのバカンスだというのに、デッキ内で揉めている血の多い奴等は、須藤君にコーギー櫛田ちゃんその他2名のDクラス御一行と……戸塚。やや体勢を崩しているコーギーとそれを支えている櫛田ちゃんから察するに、どうやらベストポジションで景色を眺めていたコーギーを、後から来た戸塚が強引に押し退けたらしい。何してんだあのバカ。

「お前らもいゝ加減この学校の仕組みは理解してるだろ。この実力主義の学校において、Dクラスのお前らに人権なんてないんだよ。不良品は不良品らしくしてろ、こっちはAクラス様なんだ——へぶううっ!？」

「!?!」

なんか寒いこと言つて恥を晒していたので、俺はワイヤーを戸塚の足に引っかけて思いつき転ばせた。こんなんが派閥の側近とか葛城何考えてんだとつくづく思う。

「やーやーすまんねコーギー。せつかくのバカンスなのに、ウチのお荷物君のせいで不快な思いをさせてしまつて」

「いや、オレは別に構わないが……」

「お、おう本条、だった、よな？お荷物君つて何だよ？詳しく教えてくれ」

思いつき顔を打ったせいもか蹲つて悶え苦しむ戸塚の滑稽な様子に、笑いを堪えなが

ら須藤君がそう尋ねてくる。リクエストされたからには応じないと失礼だよな。

「こいつは戸塚弥彦。中間テストではクラス最下位、期末にいたっては学年でも中の下、さらに運動能力もへなちよこ、と……名実ともにAクラスの面汚しだね、うん」

「ぶはははは!なんだそりゃ?よくそれで俺達のこと見下せたな!」

須藤君と名前の知らない男子生徒2名が、腹を抱えて笑い転げる。直前にあんな見下した態度を取ってた奴がこのザマじゃさぞかし愉快だろうな。で、見下してた奴等にいよいよ笑いにされた戸塚はというと、顔を真っ赤にして俺に食って掛かってきた。茜先輩だと可愛いのにこいつがやると鬱陶しいだけだな。

「本条テメエ、何しやがる!?!」

「んー?この学校は実力主義なんでしょ?Aクラス最強の俺に対して、最弱の君に意見する権利なんてあるの?ねえねえ、あーるーのーかーなー?」

「ぐ、このっ……!?!」

「ほら、せっかくの旅行にトラブルを持ち込む無粋な輩はさっさと消えなよ。それとも……また飛ばされたいの?」

笑顔で手のひらを向けると戸塚はたちまち怒りを消し、怯えた表情でそそくさとデッキから立ち去った。ありやりや、相当あの事がトラウマになっちゃってるみたい、かわいそ。

そんな無責任なことを考えていると、櫛田ちゃんが笑顔で駆け寄ってきた。……この子多分俺のこと嫌いなのに、なんでこんな友好的に接してくるのかね？女心とはかくも不思議なものだ。

「えっと、ありがとう本条君。……戸塚君凄く怯えてたけど、二人の間で何があつたの？」

「あー、少し前にしつこくつつかかってきて鬱陶しかったんで、ちよいとばかり力の差をわかりやすく教えてやったら……ああなつた」

「そ、そうなんだ……でも、あまり乱暴なことはしちやダメだよ？」

「俺だつてそういうのは極力避けたいよ。桐葉君温厚だもん、水牛だもん」

「水牛にあまり温厚なイメージないよ!」

そんな風に他愛ない雑談に花を咲かせていると、さつきまで笑っていたDクラスの男子生徒が真剣な、緊張した顔つきで歩み寄ってきた。

「ねえねえ櫛田ちゃん。ちよつといいかな……」

「池君？何かな？」

一瞬池君とやらに向けられた敵意に満ちた目から彼の目的を察した俺は、そつと二人から距離を取り何やら固唾を飲んで見守っている須藤君達に合流する。うんうん、青春だねえ。

「そのさ、なんつーか……アレじゃん、俺達出会って4月くらい経つじゃん? ちょっと他人行儀だからそろそろ、下の名前で呼び合ってもいいんじゃないかって」

それを聞いて危うくずっこけそうになる俺達。告白じゃないんかい紛らわしい。

「……だ、ダメかな? き、桔梗ちゃんって呼んだら」

「もちろんオツケーだよ。じゃあ私も寛治君って呼ぶね?」

「うおおおおお! 桔梗ちゃああああん!」

両手を広げ天に向かって魂の咆哮を上げる池寛治君。……名前呼びの許可貰っただけでこのテンションだと、もし仮に告白されたらこの子死ぬんじゃないかね?

「下の名前か……っし、この夏休みの間に俺も下の名前で呼ぶぞ。鈴音、鈴音っ」

「えっ、何? 須藤君ホリリンが好きなんだ?」

「ホリリン!?!」

俺の何気無い呟きに須藤君は瞠目し、俺の両肩を掴んで鬼気迫る表情で顔を寄せてくる。なんだよ暑苦しいなあもう。

「おい本条……ホリリンって何だホリリンって」

「堀北鈴音だからホリリン。可愛いでしょ?」

「確かに可愛いが問題はそこじゃねえ! なんて他クラスのテメエがニツクネームで呼ぶほど堀北と親しくなってるんだよ! 俺なんてまだ下の名前でも呼べてねえのに!」

「ある程度気に入った人間をアダ名で呼ぶことにしてるだけで、別に親しくはなつてないよ？何だったら一方的に敵意持たれてるね。俺Aクラスだし」

本気でAクラスを目指してるらしいホリリンからすれば、俺は目の上のたんこぶだろうからね。正解ちゃんは普通に友好的に接してくるけど。

「……本当に堀北とは何も無いんだな」

「今のところ無いね。そして今後も無い」

「……………ならない」

完全に納得したわけではないようだが、俺を解放した須藤君は何故かコージーに向き直る。

「なあ綾小路……試しにちよつと鈴音って呼ぶ練習させてくれよ」

「練習ってなんだ練習って……」

凄く嫌そうな表情のコージーに、須藤君は真剣な表情で近づいていく。……うん、端から見ると気色悪いな。

「なあ堀北、ちよつといいか？」

「俺は堀北じゃない」

「バカ野郎！俺だつてやりたかねーけど、練習は必要だろ？」

「練習なら俺が手伝つてやろうか？よりホリリンに近い方がやりやすいでしょ」

ちよつとコージが気の毒になつてきたので助け船をだしてやる。俺は優しいから放つておけないのだ。

「あ? 近いつてどういふことだよ?」

「ちよつと待つてな。……あーあ、ゴホン、あーあーあー、ゴホンゲフン……」

怪訝そうな須藤君達をよそに、俺は咳払いでウォームアップを行い、そして……

「何かしら須藤君? 私も暇じゃないから、手短にお願ひするわ」

「うおうつ!?! ほ、堀北だ! 堀北の声だ!」

「どうかしら? これが本条桐葉637の特技の1つ、声帯模写よ」

「中途半端な数だな……しかし凄いな。声だけじゃなく、人から好かれなさそうな刺々しさまでそっくりだ」

感心するのはいいがコージ、その言い方はあんまりじゃないか? ホリリンが聞いたら泣いちゃうよ?」

「よ、よし、物凄く緊張するがやってやるぞ……なあ堀北、そろそろ下の名前で呼びたいんだがいいか?」

「は? ふざけてるの? お断りよ」

「がふつ!?!」

まずは手始めに言葉のボディブロー。

「私と仲良くなったと勘違いしているようだけど……先日物件といい、あなたには迷惑をかけられた覚えしか無いわ。それでよくそんな凶々しい提案をしてこれたわね」

「ぐぼおらあつ!?!」

畳み掛けるように言葉のデンプシーロール。

「はつきり言うけど、私は無能な人間にいちいちかまってあげる程お人好しじゃないの」
「……………」

そのまま言葉のアップパーカットでフィニッシュ。須藤君は真つ白に燃え尽きたようにその場に崩れ落ちる。そして俺は声帯模写を解除し、ドヤ顔でコージーにサムズアップ。

「……………どう? 完璧でしょ?」

「ああ完璧だ、完璧に堀北だった。……ただちよつと完璧過ぎて、須藤がぼろ雑巾みたいになつてしまったが」

「け、健人ん人ん!?!」

「立てえ! 立つんだジョ…じゃなくてケエエエエエエー!」

いつの間にか戻つてきていた池君と、もう一人の男子生徒が須藤君に駆け寄る。とうかノリいいね君達。

……つと、何やら周囲が騒がしくなつたので何事かと思えば、目的地である島……つ

まり特別試験が行われる場所が見えてきたようだ。俺はコージ達から離れ、意義のある景色とやらを確認しに行く。船は上陸するのであろう棧橋をスルーして、凄いスピードでぐるっと島を旋回する。……観光させる気ねーだろこれ。

『これより孤島に上陸いたします。生徒達は30分後全員ジャージに着替え、所定の鞆と荷物をしっかりと確認した後、携帯を忘れず持ちデツキに集合してください。それ以外の私物は全て部屋に置いてくるよう……』

アナウンスからしてもうすぐ上陸か。しかしジャージ……ジャージね。せつかく手品用に制服の裏地にありとあらゆる改造を施したつてのに、ジャージだと何も仕込めないじゃないか。……どっち道私物は持ち込めないから一緒か。

ジャージに着替えて30分後、デツキで担任に携帯を提出し入念な持ち物検査の後島へと降り立つ。そして全生徒の点呼が済むと壇上に立った真嶋先生が、無情にもバカンスの終わりを告げた。

「ではこれより、本年度最初の特別試験を行いたいと思う」

有栖がない時点でやる気半減どころじゃねーが、精々滑稽に踊ってくれよ葛城君よ。

……ん？待てよ？ここで試験？この鬱蒼とした木々が立ち並ぶ、大自然の環境下で？
……やべえ、急にテンション上がってきた。

俺は自由だあああああ!

「え?特別試験って……どういうこと?」

他クラスの誰かが戸惑いの言葉を口にしたが、その子だけでなく全クラスのほとんど生徒がざわつきだした。まあバカンスだと言われて参加したのにこんな不意打ちを食らったんじゃ無理も無いが、逆に葛城やリUNKEL卍解ちゃんなんかは落ち着き払っていた。リUNKELに至ってはなんか邪悪な笑みを浮かべちゃってるよ。

「今日から8月7日の正午までの一週間。君達はこの無人島で集団生活して貰う。なおこの試験は実在する企業研修を参考にした、現実的かつ実践的なものであることを最初に言っておく」

「無人島で生活って……船じゃなくてこの島で寝泊まりするってこと?」

「ああ、試験実施中正当な理由がない限り乗船は許されない。勿論それだけではなく、ここでの生活は寝泊まりのみならず食料や飲料水に至るまで、その全て自分たちで考える必要がある。スタート時点でクラス毎にテントを2つ、懐中電灯を2つ、マッチを1箱支給する。それから日焼け止めは制限なく、歯ブラシに関しては各自1セットずつ配布

し、女子生徒にのみ生理用品は無制限で支給する。以上だ」

ふむふむ、実にゴールドレジェンドな内容だ。

話を聞いただけで過酷だとわかる試験内容にDクラスの池君が無茶苦茶だと猛抗議するが、ただの学生に一流企業のやり方にケチをつけられるだけの根拠など無いと真嶋先生に一蹴される。まあ自分の理解を超えたものをおかしいだのあり得ないだのと、勝手に決めつけても滑稽なだけだよな。

「しかし先生。今は夏休みの筈ですし、我々は旅行という名目で連れて来られました。企業研修ならこんな騙し討ちのような真似はしないでしよう」

「なるほど、その指摘は間違いではない。確かに不平不満が出るのも納得できる」

池君よりかはまともな葛木の反論に、真嶋先生はその言い分を認めた。まあ無断で休日に研修をねじ込むなんて普通に労基案件だろうね。

「だが特別試験と言っても深く考える必要は無い。今から一週間君達は何をしてもいい。海で泳ごうがバーベキューを楽しもうが、キャンプファイヤーで友と語り合おうが構わない。この特別試験のテーマは『自由』だ」

「んん？えつ、試験なのに自由？あれ、ちよつと頭混乱してきた……」

いやいやいや早いよ池君。もう話についていけないの？君本当に高校生か？

真嶋先生はそんなことお構いなしに、卒業アルバムぐらいの厚さの冊子を取り出す。

「この無人島における特別試験では、最初に試験専用のポイントを300ポイント支給することになっている。このポイントを手早く使うことで、君らはこの試験を旅行のよりの楽しめるだろう。今から配布するマニュアルに、ポイントで手に入るものが全て載っている。水や食料のみならず、バーベキューの機材や無数の遊び道具なども用意しよう」

ポイント、ねえ……今回の試験の趣旨がおおよそわかってきたな。

「つまり、その300ポイントで欲しいものがなんでも買えるってことですか?」

「そうだ。無論計画的に使う必要はあるが、ちゃんと堅実に使っていけば大丈夫なよう設定されている」

「で、でも試験なんだから難しい何かがあるんじゃない?」

「いいや、難しく考える必要は全く無い。2学期以降への悪影響もないと保証しよう。勿論集団で生活する上での最低限の決まりはあるが、基本的に全てお前達の自由だ。そして……」

試験終了時に各クラスに残ったポイントを、そのままクラスポイントに加算し夏休み明けに反映する」

要は難しく考える「必要」は無いけど、難しく考えた方がメリットがあるってことか。毎度毎度言葉遊びが過ぎるぜこの学校。ちなみにウチのクラスだけ有栖が不参加

のペナルティとして、270ポイントからのスタートだそうだ。心疾患持ちだったのにとことん容赦無いなこの学校。それから露骨に不満そうな態度取んな戸塚。人としてどうかと思うぞ。

全体での説明を終え解散宣言をした後、4クラスが距離を空けての各担任のよる補足説明に移る。各クラスがどう戦略を立てるかばバラバラだろうし、機密保持のためには当然の措置だ。

真嶋先生はまずGPS、体温や脈拍を測るセンサー、緊急用のボタンなどが搭載された凄腕時計（外すとペナルティ）を1人ずつに配布してから、残りの補足説明に入った。内容をまとめると……

- ・ 担任は自分のクラスと1週間行動するが、一切の手助けを行わない。
- ・ 体調を崩したり大怪我をしたりして続行不可能と判断された場合は、マイナス30ポイントとなりその者はリタイアとなる。

- ・ 環境を汚染する行為はマイナス20ポイント。

- ・ ベースキャンプ地で午前と午後の8時に行われる点呼に遅れた場合、1人につきマイナス5ポイント。また、1度決めたベースキャンプの場所は正当な理由無く変更できない。

- ・ 他クラスへの暴力、略奪行為、器物破損を行なった場合そのクラスは即失格とし、対象者のプライベートポイントを全て没収する。

- ・ ポイントがマイナスになることはない

- ・ 島の各所にはスポットが設けられていて、占有したクラスのみそのスポットの使用権が与えられる（占有権の効力は8時間の毎にリセットされる）

- ・ 他クラスが占有しているスポットを許可なく使用した場合、50ポイントのペナルティを受ける。

- ・ 占有されていなければ、同時にいくつもスポットを占有してもよい。

- ・ 一度スポットを占有するごとに1ポイントのボーナスポイントが与えられる（ボーナスポイントは加算されるのは試験終了時）

- ・ スポットを占有するためには専用のキーカードが必要。キーカードの使用権は決められたリーダーのみ。

- ・ 正当な理由なくリーダーを変更することはできない。

・最終日の点呼で各クラスのリーダーを言い当てる権利が与えられ、他クラスのリーダーを1人当てることに50ポイント。外してしまった場合はマイナス50ポイント。

・他クラスに言い当てられた場合マイナス50ポイントの上、ボーナスポイントは無効になる。

……補足部分の方が明らかに大事な内容やんけ。

生粋の江戸っ子なのに思わず関西弁になってしまったが、それにしたってこれは酷い。この試験で求められるのはクラスの団結と判断力。

結論として、300ポイント丸々残すのは不可能だ。何せポイントを支払わなければ、排泄行為を災害時などに使われる簡易トイレで行う羽目になるのだ。ワンタッチテント付きで誰かに見られることはないが段ボール……俺達野郎共なら妥協できなくはないが、年頃の女子からすれば論外だろう。つまり計画的なポイント運用を行う必要があり、それで揉めているようではお話にならない。それにこの大人数で1週間もの間共同生活を送るには、クラスが一丸となつて取り組まなければ次々とトラブルに見舞われるだろう。

またクラス間での競争に勝つためには、正しい状況判断能力は必要不可欠だ。ポイン

トを切り詰め過ぎて体調を崩す生徒が出てくるようでは本末転倒だし、無計画にスポットの占有を進めていけばそれだけリーダーを当てられる危険が高まる。……私見で言うなら、より重要になってくるのはやはりスポット占有とリーダー当てだな。特にリーダー当てはリスクが大きい反面、的中させられればポイントが上乘せされるだけでなく、この試験において唯一他クラスへダメージを与えられる。リーダー当て以外の他クラスへの攻撃の一切を厳罰化してるあたり、今回の試験の肝は間違いないここだ。

もし仮に有栖が今回の試験に参加できていたら、まず間違はなくリーダー当てを戦略の主軸にしていただろうな。……しかし有栖が不在な以上、(予定通り)Aクラスは葛城が取り仕切ることになる。となれば徹底して堅実かつ退屈な方針で進むだろう。ポイントを計画的に使うのはまあいいとして、リーダーバレ対策を徹底的した上での最小限の占有、リスクのあるリーダー当てなんかは最初から無視つてところか。この戦法なら最終的な結果でBクラスあたりに上回られようが微々たる差、独走状態のAクラスからしたら大した脅威にもならないんだろうが……つまんねー。有栖が聞いたら鼻で笑いそうな程しようもないスタンスだ。改めて有栖と葛城はソリが合わないんだとしみじみ思う。

と、今回の試験の考察を適当にし終えたところで、ちょうど真嶋先生の補足説明も終わった。さあこれからAクラスはどのようにしていくのか葛城が仕切り始めようとする

る前に、我慢の限界に達した俺は真嶋先生から無料かつ無限に支給されるビニール袋を5袋程頂戴し、広大なジャングルへと向かう。いぎ、大冒険の始まりだぜい！

「待て本条。どこへ行くつもりだ」

「そりゃバカンスを楽しみにだよ。雄大な大自然が俺を待っている」

「勝手な行動を慎めと言っているんだ」

「待ちなよ葛城君」

俺に詰め寄ろうとする葛城を、軽薄な笑みを張り付けた橋本と仏頂面の鬼頭と神室、坂柳派側近3人衆が間に割って入る。

「姫様から伝言を預かってるぜ。……今回の試験、俺達坂柳派はおとなしくお前の指示に従う。だけどその代わり、本条には何も命令するなってさ」

「ふざけたことを言うな橋本。今回の試験、クラス全員足並みを揃えることが必要不可欠なのは明白だ。本条だけ身勝手に振る舞うなど許されるわけがない」

「1日2回の点呼ならちやんと遅れずに行くから大丈夫だよ」

「そういう問題ではない。第一そもそも、まだベースキャンプをどこでするかすら決まっっていないだろう」

「お前がクラスを仕切るんなら大方予想つくよ。どうせ洞窟だろう？」

「……」

難しい顔をして押し黙ったところを見るに、どうやら凶星だったらしい。上陸前やけに高速で島をぐるっと一周していたのは、今から思えばスポットに関するヒントだったのでろう。有意義な景色なんて変な言い回ししてたから間違いない。葛城ほどの男なら当然気づいているだろうし、こいつがベースキャンプ地を選びそうな場所はおそらく洞窟だろう。雨風を凌げるしリーダーを隠すにもうってつけだ。近くに別のスポットらしき小屋とか塔とかもあつたし。

「スポットは早い者勝ちだから、俺一人に構っていたら先を越されるよ? 有栖のお仲間が無条件で協力してくれる代償と考えるんだな」

まだ何か言いたげな葛城を捨て置き、俺はジャングルへと歩を進める。我ながら傍若無人な振る舞いに、葛城派の奴等は敵意に満ちた視線を送ってくるが、有栖から指示を受けている坂柳派は平然としている。中にはもしかしたら俺に対して不満に思っている奴もいるかもしれないが、有栖は俺が水面下で行動している内容を派閥で共有している。俺の振る舞いが気に入らなからうが今までの俺の実績が実績なため、多分何も言うとはしないしできないだろう。

「……町田、本条についていってくれないか?」

「は、はいっ」

葛城の判断はまあ予想通り。クラス崩壊のリスクを避けるため坂柳派の条件付きの

恭順を承諾しつつ、しっかりと俺にも監視の目をつけておく。もし俺が問題行動を取るや否や町田はすぐさま葛城に報告し、それを盾に俺に協力を迫る腹積もりだろう。

「別にいいよ。俺を監視したいなら思う存分するといい。ただし……」

今の俺についてこられたらね」

突如全速力で森に突入していく俺に町田は面食らい、慌てて追いかけてこようとすが……ジャージになった俺を見失わずにいられるかな？

大自然最高!

青々と生い茂る森を動き回るのは、アスファルトで舗装された道に慣れてしまった現代の子にとってはどうしても苦痛が伴う。ジメジメとした暑さ、不安定な足場、方角を狂わせる見通しの悪さと自然の障害物の数々……それら全てが探索者の心身を蝕ばむ。この過酷な環境下でド素人が、この俺を追跡するなどできるわけがない。

「ヒヤッホオオオオオオオオオオッ！ イエエエエエエエエエエー！」

早々に町田を撒いた俺は、自分でも引くほどハイテンションで、森の中を全力失踪で駆け抜けていた。端から見ればトチ狂ったようにしか見えないだろうが、アゲアゲになるのは仕方がないのだ。自然と植物をこよなく愛する俺としては、せめて学校敷地内に植物園くらい無いのかと常々不満に思っていた。それでもここを卒業するまでの辛抱だと今まで己に言い聞かせていたが、まさか試験で大自然を満喫できるとは思ってもみなかった。……もしかして有栖、俺が散々ゴネ倒しても仮病でサボることを許さなかったのはこのためなのか？ だとしたら薄情とか思ってたゴメン、やっぱ愛してる。

「おっとアブね」

アホなことを考えていたらいつの間にか目の前に大木が迫っていたので、俺は脚力に任せて木に向かつて大きく跳び上がり、枝を掴み一回転して着地する。そのまま忍者のようによくつかの木々を渡り進み回収する物を回収してから、再び地上へと舞い戻る。

森の中で全力疾走など普通の人なら自殺行為だ。体力を過度に消耗するのは勿論、大怪我を負う危険性が付きまとうだろうが……今まで幾度となく鍛練を行ってきた俺にとつては、コンデイションを落とさず駆け抜けることなど造作もない。……これぞ本条桐葉684の特技の1つ、『フリーランニング』だ！

「……さてと、一旦合流しますかね」

目ぼしい物はひとまず集め終えたし、葛城達もそろそろ洞窟を抑えているだろう……んあ？今向こうの方にチラツと見えた金髪は……。

目星をつけた方向へダツシユで駆け寄ってみると、見知った友人が相変わらず自分に酔った振る舞いで森を練り歩いていた。

「ようミスター」

「おや、クイーンボーイではないか、奇遇だねえ」

「探索かい？森の中を1人で歩き回るのは危ないんだぞー？」

「私にとつては大した問題ではないさ。それにそのセリフ、そっくりそのまま君にお返してもいいかな？」

「俺も問題ないぜ。というか誰が付き添いだろうが基本足手まといだから、むしろ一人の方がいいかな」

「同感だねえ」

優雅に髪をかき上げながら、不敵に笑うミスターこと高円寺。同学年のほとんどから変人扱いされ良く思われていないらしいが、唯一俺とは比較的仲が良い。将来的に俺を部下にする予定らしいというのもあるが、それを抜きにしても色々と波長が合うのだろう。

「ところでクイーンボーイ。いったい君にはここがどんな風に見えているか、聞かせてもらえるかい?」

「ぶっちゃけファクション無人島だな、うん」

こんな徹底的に人の管理が行き届いた森が自然界にあつてたまるか。群生してる植物にしたつてある程度の知識があれば、この土壌と気候では自然に育つことがない植物が紛れていると気づくだろう。というか明らかに人為的に栽培されたものが盛り沢山だし、木に生っている実も虫食い一つ無い……これではジャングルというよりそれこそ植物園だ。

「グウツド。やはり君はそこらの凡人達と違い、目の付け所をわかっているようだねえ。

……それでは失礼するよクイーンボーイ、これから7日間頑張ってくれたまえ」

「あ、もうリタイアするんだ？」

ミスターの性格上最後までやり遂げるわけがないとは思っていたが、まさか初日とは……Dクラスかわいそ。

「もう飽きてしまったのだから仕方ないさ。……クイーンボーイもどうだい？ いずれ私の右腕になる男が、凡人達にかかずらっているのは感心しないねえ」

「そんな予定は今のところ無いし、好き勝手はしてもクラスの毒になるようなことは気が引けるから却下だね。……それに何より、せっかくの森林浴タイムを早めに切り上げるなんてとんでもない」

「なるほど、それならば仕方がないか。……シーユー、クイーンボーイ。健闘を祈るよ」
「シーユー、ミスター。また7日後な」

それにしても、リタイアすればマイナス30ポイントだというのに一切お構い無しとは……俺も大概フリーダムだけど、流石にあいつには負けるかな、うん。

「ふむふむ……半分予想通り、半分予想外だな」

葛城がベースキャンプの場所を選んだのは、案の定洞窟だった。しかも入り口には生徒を見張りに立て、さらにビニールをつなぎ合わせてバリケードを作り内部が見えないようにしている。「絶対にリーダーを見破らせはしない!」という、葛城の断固たる決意が現れているな。

ここまでは概ね予想通りだったが、入り口の側に設置された2組のシャワー室と仮設トイレは予想外だった。1つずつならわかるが2つ……設置にいくらかかるかなんてチエックしてないが、工夫次第で削減できる出費を葛城が許容するとは思えない。多分俺のいない間に色々とかあったんだろうな。

入り口に向かって歩いていくと、ちょうど警備していたのが葛城派の生徒だったのでたちまち敵意を向けられるが、俺が両手に抱えているものに気づくと苦々しい表情で道を開ける。ものわかりの良い奴は嫌いじゃないよ、好きでもねーけど。

「おーい葛城ー。桐葉君の帰還ですよー」

「本条! お前よくもぬけぬけと戻ってこれたな! ……あ? なんだよこれ!」

洞窟に入ると案の定戸塚が噛みついてきたので、俺は戦利品が詰まった袋を1つ投げ渡す。

「見りゃわかるでしょ、森を探索中に集めといた食料だよ。クロマメノキやアケビなど

身近に無いものから、トマトやきゅうりのような明らかに人工栽培されたであろう野菜まで盛り沢山だ」

クラス全員で分けあっても1日は持つ量だ。食料を調達で賄うことができれば、ポイント消費を大幅に抑えられるだろうと思いい、大自然を満喫しながら集めておいた。

「それで葛城、ほれ」

「これは、細い木の枝か……」

戸塚に続くように何やら難しい顔でやってきた葛城にも、残った袋を投げ渡す。

「火付けるときに必要なになるだろ。焚き火をする際に使えとばかりに、そこら中に自然なほど落ちてたやつを集めといた」

「……どういうつもりだ本条。お前は今回の試験、協力しないんじゃないか?」

「誰もそんなこと言っていないでしょうが。お前の指示に従うのは嫌だけど、クラスを放つたらかしにするほど俺は薄情じゃないよ」

「あくまで自分の判断で動くという訳か。……クラスの害にはならないと信じていいんだな?」

「勿論だ、約束してやるよ」

何やら疲れたように溜め息を吐く葛城。オッサンみたいな容姿も相まって残業明けの社畜みたいだね。

「……わかった、それなら好きにしろ。クラスに貢献するというなら、もう俺からは何も言わん」

「か、葛城さん!? 良いんですか!?!」

「残念ながら弥彦、今の俺ではこいつの手綱は握れそうもない」

今の、てことはクラスのリーダーの座を諦めた訳じゃないやなさそうだ。……ということは今回の試験も、別に自暴自棄になって諦めたわけじゃないようだね。

「ところで葛城、お前にしっちゃ珍しく随分と大人買いたんだね。初日からいいくら使ったのさ?」

洞窟の中はサバイバル中とは思えない快適空間に様変わりしていた。クラス全員が寝られるように追加したテントはともかく、地面の固さを和らげるフロアマットやアウトドア用の枕、数台のコードレスの扇風機に冷蔵庫代わりのクーラーボックス数個……本当に勝つ気あんのかと問いたくなるほどの大判振る舞いだ。

「いや、俺達Aクラスは1ポイントも使っていない。依然として270ポイントのままだ」

「ふーん……Cクラスと取引でもした?」

「つ……そうだ。何故わかった?」

「なんでも何も、そんなぶつ飛んだことを実行できる奴なんてリユンケルぐらいでしょ」

リユニケルの持ち掛けた取引内容はおそらく、何かしらの見返りと引き換えにAクラスの消費ポイントを肩代わりすること。この試験で彼が目をつけたのは、クラスポイントがマイナスには決してならないというルール。極論300ポイントを初日で使い切つて全員が仮病でリタイアしても、クラスには何のダメージも入らないのだ。

「それで何を要求されたのさ？ 何の見返りもなくAクラスを支援する、なんてボランティア精神に溢れた子じゃないよねリユニケルは」

「……これが奴と結んだ契約書だ。ちなみにこれは両クラスの担任のもと正式に結ばれた契約故、反故にすると重いペナルティを受けることになるぞ」

そう言つて葛城は契約書を渡してくる。そこに書かれている内容をまとめると……

・CクラスはAクラスに対し、200ポイント相当の物資を購入して譲渡する（購入する物資はAクラスが決める）。もしBクラスとDクラスのリーダーを見抜いた場合、得た情報を全てAクラスにも共有する。

・（坂柳有栖を除く）Aクラス生徒は龍園翔に毎月2万のプライベートポイントを譲渡する。この契約は龍園翔がこの学校を卒業、または退学するまで継続する。

……なるほど、一見お互いに旨味のある契約に見える。プライベートポイントはクラ

スの優劣には関わらないが、使い方次第で身を守る盾にも敵を討つ剣にもなる。クラスリーダーであるリユンケルに毎月安定して78万ものポイントが流れ込むのだから、様々な戦術に應用することができらるだろう。

逆にプライベートポイントに余裕のあるAクラスにとっては、地位を磐石にするためにクラスポイントの方が遥かに重要になる。ポイントを一切消費せず、さらにスポット占有とリーダー当てるによるボーナスが加わるのなら、大幅にBクラスを突き放せるだろう。

……しかし、正直やつちまったなという感想しか出てこない。リユンケルがそんな温い契約を結ぶ筈がないだろうに。思わず溜め息を吐いた俺に、葛城が厳しい表情を向けてくる。

「勝手に契約を結んだことが不服か？だが今回の試験は俺がクラスの指揮を取っている。クラスが一丸となるべき試験で足並みを揃えようとしないう前には、俺の方針に文句を言われる筋合いは無いぞ」

「別に文句は無いさ、毎月2万なんて大した出費でもないしな。……ただやっぱり、お前にしては大胆に動いたなと思ってさ。そんなに有栖に追い詰められていくのが怖いのかな？」

再び葛城派の生徒に敵意を向けられるが、当の葛城は苦々しい表情をしているところ

を見るに凶星らしい。中間テストの時点では優位に立っていたが、生徒会の面接で落とされ、俺が部活動で結果を出し、さらに期末テストでも……ここ最近の葛城はさぞや焦燥に駆られていただろうな。そして今回の特別試験で有栖が不参加という千載一遇の大チャンスが転がりこんできたんだ、リユンケルの契約に思わず飛びついてしまったのも無理は無いかな。……あの契約書の内容だと、リユンケルがAクラスのリーダーを当ても何のお咎めも無い。普段の葛城ならそんな大事なことを見落とさなかった筈だ。「ま、いいや。お前の言った通り、今回の試験においてはお前がトップだ。あれこれ口出しするつもりはないさ。……それで他に何か俺に伝えておくことは無い？たとえば誰をリーダーにしたとか」

「っ……誰がお前みたいな奴に教えるか！」

「正直に言おう。弥彦の言う通り俺達はお前……正確に言えばお前達坂柳派を信用していない。あの女ならクラスの勝利を度外視してでも、俺を陥れろと指示してもおかしくないからな」

うん、大正解。

「なるほど。俺達には教えず、お前達だけでリーダーの情報を他クラスから守りきると」「そうだ……だが代わりに良い情報を教えてやろう。お前も既に気づいているだろうが、この洞窟の近くには複数のスポットがある。その内の1つ、崖沿いの死角に取りつ

けられたハシゴの下にある小屋には、スポットを占有したクラスだけが使える釣竿が置いてある。釣りがしたくなったら好きに使うといい」

要は暇なときに魚でも釣ってクラスに貢献しろって遠回しに言ってるんだな。少し賢くなつたじゃないか葛城よ。

「へえ、中々楽しそうだな。……よし荷物も……橋本、クーラーボックス持って俺についてこーい」

「ついていくのは別に構わないけどよ、今荷物持ちっついていいかけただろお前」

「だって俺箸より重いもの持てないしー」

「たつた今かき集めてきた食糧詰めの袋はどうなんだよ!？」

しょうもないやり取りを繰り返しながら洞窟を出て、葛城派の人間がついてきていないことを確認してから、橋本に小声で話しかけられる。

「ところで本条……このクラスのリーダーは誰だと思う? 葛城派の誰かなのは確定だが」

「戸塚だね、うん」

「……根拠は?」

「まず他クラスにも名が広まっている葛城は除外。そしてあいつのことだ、有栖の手の者が派閥に紛れ込んでいることぐらい薄々わかっている筈。誰を疑えばいいのかわか

らない状況下でリーダーを選ぶとしたら、100%有栖の味方じゃない戸塚だ」

橋本が納得するような理屈はこんなところかな。実際はアイツわかりやすいから視れば一発だったんだが……橋本にはまだこの特技教えてないからな。

「何故素直に俺に教えたか聞いてもいいか？」

「だつてお前多分、有栖から指示を受けてるだろ？ Aクラスを敗北させて葛城を失脚させろつて。……それに、リユンケルに恩を売っておきたいお前からすりゃ丁度良い手土産だろう？ 葛城にはクラスの害にはならないつて約束したけど、今俺がしたのはクラスメイトに憶測を話しただけだしね」

「船のときといい、やつば俺の思惑はバレバレつて訳か。まったく、これだから天才様は恐ろしいぜ……」

降参とばかりにやれやれと肩を竦める橋本。俺にとっては凄くどうでもいい存在だが、必要とあらば平気でクラスを裏切れるこいつは、間違いなく有栖にとつて貴重な駒だ。

「ところで本条。多分信憑性があるから、リーダーを龍園に教えるときにお前の名前を出していいか？」

「んー、別に構わんよ。……おつ、これが例のハシゴだな。よっしゃ釣るぜさあ釣るぜ！ 太公望のごとく釣つてやるぜ！」

「魚釣る気無いだろお前!」

ちなみに釣果は橋本がやたらと釣りまくってたのに対し、俺の釣竿にはまったく食いつかず坊主だった。おのれ太公望。

リーダーを当てるだけの簡単なゲーム

無人島生活2日目。

いつものように体内時計に従って4時に目覚めた俺は、周りを起こさないようにテントから抜け出す。洞窟内に張られたテントは計6つ、坂柳派と葛城派がそれぞれ3つずつに分かれて寝泊まりしている。葛城が今回の試験はクラスが一丸となつて云々言っていたものの、両派閥の溝は思ったより深かつたらしい。……あつ、勿論それぞれ男女別にも分かれてるからね？ いやらしい妄想はほどほどにするように。

申し訳程度に身嗜みを整えてから洞窟を出てみると、まだ朝日が昇り始めたばかりだと言ふのにやたらと蒸し暑い。

「さてと、絶好のファルトレク日和だ」

大自然で行う鍛練と言えばやはりファルトレクだ。全身を使つて変化に富んだ地形を走ることで、総合的な体力アップを可能とする。今回の試験中は勉強道具を持ち込めないからいつものルーティンをこなせないで、ひたすら肉体の鍛練に重点を置くつもりだ。

しばらく森の中を縦横無尽に走り回っていると、見知った強面ロン毛……鬼頭隼と遭遇する。

「んあ？ フアルコンじゃん」

「本条か。……フアルコン？」

「隼だからフアルコン。ダメ？」

「好きにしろ。……お前もトレーニングか」

も、つてことはフアルコンもトレーニングしていたのか。よく見ると全身汗まみれだ。……しかし何故手袋は頑なに外さないのか。

「試験中なのに随分ストイックだね」

「お前に言われたくはない。それに……俺は学業ではクラスに貢献できんからな、日々の鍛練を怠るわけにはいかない。この学校では強みを持たぬ生徒は、存在価値を無くしていくだけだ」

うむうむ、流石は有栖のルーク。社交性は低いと言動には一切の迷いが無く、シビアな現実からも決して目をそらさない不動の精神を持つ武闘派。……有栖を除けばやはり、クラスで一番気に入っている奴だ。

「いいね、向上心のある奴は大歓迎だ。それなら派閥の側近同士の親睦を深めるため、一緒にトレーニングしようか」

「……俺としては願ってもない提案だが、いったい何をするつもりだ？」

「鬼(ご)っ(こ)」

「……は？」

「それじゃあ最初は丁度鬼みたいな顔してるしファルコンが鬼ね、アバヨー！」

ファルコンが呆気に取られている内に、俺はさつさと一目散にトンスラする。

「あ、ちよつ、待つ——誰が怖い顔だ貴様!？」

朝の点呼の少し前まで鬼(ご)っ(こ)は続いたが、結局ファルコンは自在に森を駆ける俺を一度として捕らえることはできなかつた。見かけに反して意外と素早かつたが、大自然に慣れてない奴が俺を捕らえるなど不可能なのだよ。

無事朝の点呼を終えた俺は、今日も今日とて食糧を集めつつ全速力で森を疾走する。途中で何人かの生徒とすれ違ったが、なんか全員俺のことを野生動物か何かと勘違いしてるのかパニツクになっていた。失礼しちゃうよもう。

「んむ？なんだこりゃ？」

「ここら辺の地面やけに歩きやすいな。……というか明らかに不自然に平らだ。それこそまるで誰かが踏みならしたかのように。」

少し興味が湧いたので痕跡を辿ってみると、あつという間にBクラスのベースキャンプ地に辿りついた。スポットとして活用している井戸の周りは木々が生い茂り、クラス全員分のテントを張るほどのスペースが無いが、その狭さをいくつかのハンモックで補っている。他にもざつと見渡しただけで、ポイントを最小限にしようという工夫がちこちに散りばめられている。……やっぱクラスの雰囲気と団結力じゃボロ負けしてるよな。

「あれ？本条君？」

俺の来訪に気づいたのか、水の入ったペットボトルを抱えながら正解ちゃんが駆け寄ってきた。しかしジャージ凄く似合うね君。

「どうしたの？もしかして敵情視察かなー？」

「いやなんか不自然に地面が平らになってたから、興味本位で辿ったらここに着いた。あれ君らの仕業だったりする？」

「うん、まあね。はぐれないための目印になるかなって、昨日皆で踏みならしておいたんだ」

「そりやまた用意周到なこと。……なんか色々忙しそうだね、お邪魔だったらさっさと退散しようか？」

「少しくらいなら大丈夫だよ？そろそろ休憩しようと思つてたし。……それに、本条君とは色々話もしたかつたしね」

相変わらず良くも悪くも邪氣の無い子だね。邪氣の塊のような有栖と渡り合うには、もうちよつと黒くなつた方がいいかな。

「しかしなんというか、随分統制の取れたクラスだね。これもひとえに卍解ちゃんの力リスマのお陰かな？」

「にやはは、私はそんな凄い人じゃないよ。でも皆が積極的に協力してくれるからね」

「謙遜すんなつて。ウチのクラスなんか方針の違いでクラスは真つ二つになるわ、初の特別試験だつてのに足並みを揃えず好き勝手する奴はいるわ、君達とは大違いだぜ」

「いや他人事のように言つてるけど、多分好き勝手してるの本条君だよな？」

「まあそうだけど、なんでわかつたのき？」

「さつきクラスの子から本条君らしき人が、森の中を凄いスピードで走り回つてたつて報告があつてね……」

苦笑いととも「少し自重してくれ」と言外に言つてくる卍解ちゃん。……もしかして怖がらせちゃつたかな？だとしたらごめんね。

「まあ善処はしておくよ、うん。……俺に聞きたいことってそれ？」

「うん、それもあるけど……Aクラスはどんな風に取り組んでるのか、ちょっと教えてくれないかなって」

なるほど、確かにあんなガチガチに籠城されたら探りようが無いだろうしな。リーダーも普通当てようがない。

「あー……悪いけど教えられないかな。俺今回の試験完全に葛城に丸投げしてる訳だし、あいつが必死に隠したがっていることを勝手に暴露するのは、流石の俺でも気が引けるっていうか……」

「あつ、ごめんね!?別に無理矢理聞き出そうって訳じゃないからっ！そうだよね、クラスを裏切るなんてできないよね……」

何故か勝手に凄く申し訳なさそうになる亾解ちゃん。何か罪悪感湧くからやめてもらえませんかね？

「まあ気にすんな、そして安心しろ。俺も亾解ちゃん達の情報は、クラスには一切伝えるつもりないから」

「え?えーと……そこまで別に気を遣わなくても良いんだよ?知られても困ることじゃないし」

「いやいやそんなことは無いでしょ?過ごしやすい環境作りの工夫とかだけならまだし

も……リーダー当てられたら大損害なんだから、是が非でも隠さなきゃ」

「……………え？」

「どういふことだ本条」

俺の何気無い指摘が完全に想定外だったのか卍解ちゃんは目を見開いて驚き、慌てて一人の男子生徒……神崎隆二が駆け寄ってきた。

「あ、ザキちんだ。どうしたのさ？」

「今のはどういう意味だ？まるでBクラスのリーダーが……誰かわかっているかのような口ぶりだったぞ？」

「うん、わかったよ」

「「っ!？」」

卍解ちゃんやザキちん……いやこの場にいるBクラスの生徒全員が一人残らず、緊張感に包まれながら俺に視線を向けてくる。……ふむ、やっぱりこの子で間違いないみたいだ。

「そんな警戒しなくても大丈夫だよ。今回は葛城が仕切ってるって言っただろ？仮に俺がバラしたところで、あのバカみたいに慎重な男がホイホイ信じるかよ」

「……一応誰がリーダーだと思ってるか、教えてもらってもいいかな？」

「そこにいるヘアピンの子でしょ？確か白波ちゃん、だっけ」

「う、嘘……どうして!？」

俺に指名された白波ちゃんは、顔を真っ青にして両手で口を覆う。……いやあのさ、せめてしらばっくれるなりして足掻こうよ? せっかく卍解ちゃんとかザキちゃんが必死に平静を装ってるのに台無しじゃん。

「……どうして千尋ちゃんだと思ったの?」

「んなもん視りゃわかる。お節介かもしれないが、もうちよつと上手く隠した方がいいぜ?……それじゃあ用事もできたしそろそろ行くわ」

「……用事? できたとはどういう意味だ?」

「ちよつと興が乗った。特に意味は無いけど暇潰しがてら、各クラスのリーダーでも見破ってこようと思ってね。それじゃあ試験頑張ってるね、応援してる」

隠しきれない警戒を含んだ視線を全身に浴びつつ、Bクラスのベースキャンプ地を後にした。これで警戒レベルを吊り上げてくれれば万々歳だ。結束力には目を見張るものがあつたが、それだけでこの先俺達と戦っていくには心もとないからね。

……だから今回Cクラスにリーダー当てられても恨まないでね。というかなんでスパイが紛れ込んでるのに誰も疑ってないんだよ。

事前に葛城から聞かされていたCクラスのベースキャンプ地では、豪勢なバーベキューが開かれていた。……で、何故か俺もご相伴にあずかることに。

「やー何か悪いねリユンケル、すっかりゴチになっちゃって。ちようどタンパク質が不足してると思ってたんだよ、うん」

「クク、別に構わねえよ遠慮するな。今回CクラスとAクラスは、手を取り合うべきお仲間だからな。それにさつき金田から連絡が入った。Bクラスのリーダーの目星を付ける手伝いをしてくれたそうじゃねえか」

「他クラスの生徒を疑いもせず招き入れていたのは、正直どうかと思ったからね。俺達や君と戦っていく上では致命的だから、ちよつとした老婆心で千尋の谷に突き落としてやったのさ」

「なんだそりゃ？連中からしたらさぞかしありがた迷惑だろうなあ」

「そりゃ今後俺が楽しめるようにしたお節介だから、正しく余計なお世話だろうね」

それにしても壮観な光景だ。バーベキューセットはもとより、娯楽に必要なありとあ

らゆる道具のオンパレード……節約という概念を粉々に粉碎して液状化させる散財っぷりだ。俺達の取引を知らないホリリン達や卍解ちゃん達には、さぞや気が狂ったようにしか見えないだろう。……もうすぐしたらCクラスの生徒はほとんどリタイアするから、さらにびつくりするだろうな。

「ところであの契約内容からして、Dクラスにもスパイを送り込んでるんでしょ？」

「ああ、伊吹の奴をな。あつちはまだ探りを入れている最中だが……それも時間の問題だ」

「招き入れたのは多分平田君か榎田ちゃんだろうね。皆危機感が足りてないぜまったく」

「Dクラスといえば、さつき鈴音が金魚の糞を引き連れて偵察に来たぜ。各クラスに周るだろうから、そろそろAクラスに探りを入れ始めるんじゃないやねえか？」

「マジでか。だったらまた戸塚あたりが無礼やらかさないうちに戻らなきゃな。……それじゃあご馳走様。葛城とか戸塚がお前の手のひらの上でどう踊るのか楽しみにしてるぜ」

「クク、やっぱり契約の抜け穴にも気づいてるか。なのに指摘してやらないとは薄情な奴だな。……いいぜ、お望み通りダンサブルに踊らせてやるから楽しんで見届けな」

さてと、最後はDクラスか。

Cクラスのリーダーは案の定リユンケルだなこりや……まああの契約内容からして何人か島に残らなきゃいけないし、振る舞いからして自分しか信じてなさそうなりユンケルが、誰かにリーダーを任せて船で結果を待つ……なんてする訳ないよな、うん。

「葛城さん！こいつら、俺達の寢床を偵察に来たんですよ！汚い連中です！」

「ビニール如きで大げさね。中を少し見せてもらっただけよ」

ありやりや、戻ってきたら案の定揉めてやがる。状況を推察するに、ウチのクラスの偵察に来たホリリンとコージを戸塚がどうにか塞ぎ止めている間に、葛城が後から来たつてところか。……中を見られたらCクラスと取引しているとバレちゃうよなこれ。さて葛城、どうやってこの窮地を切り抜けるのかね？

「別に好きにするといいが、覚悟はしておくことだ。指一本でも触れた瞬間、妨害行為と

して学校に通達する。その結果Dクラスがどうなるかは保証せん」

「戸塚君にも説明したけど、スポットの独占行為はルール上守られた権利じゃないわ」
「確かにそうだが、1つの占有スポットをベースキャンプとして1つのクラスが抑え、それを試験終了まで守り通しポイントを得続けることは、暗黙のルールだと俺は考える。それに踏み込めば大混乱が起きるし、当然俺達も報復としてDクラスのベースキャンプに踏み込むことになる。……不必要な面倒ごとは避けるべきだと思うが、違うか？」

ふむふむ、なんとかいい感じで口八丁に言いくるめたな。有栖に散々苛められてきたからか、少しは成長したようで感心感心。ホリリンも説得は不可能と判断したのか、踵を返し洞窟の入り口から遠ざかる。

「まあいいわ。Aクラスの実力がどの程度のものか、結果を楽しみにしておくから」
「随分と威勢がいいな。君達がどう悪足掻きをするのか、期待しておくでしょう」

戸塚ほど露骨じゃないが葛城もAクラス特有の驕りがあるのか、ナチュラルに下位クラスを見下してるな。だからリユンケルの手のひらで戸塚とランバダを踊る羽目になるんだよ。

……さてと、

「おーいそこゆく少年少女達ー」

「本条か」

「っ……」

葛城達の姿が見えなくなるまで待つてから、とぼとぼと帰宅する二人に声をかけると、コージーはともかくホリリンは一瞬で最警戒態勢に入る。相変わらず嫌われてる……だけじゃなさそうだね。風邪でも引いたのか、近くで見るとボロボロじゃん。……ちようどいいしカマでもかけてみるか。

「すまんねわざわざ来たのに追い返すような真似しちやつて。……まったくたかが寢床でケチケチしちやつて、あの妖怪ピカ電球め」

「酷い言われようだな葛城……」

「だつてせつかく他クラス巡りを楽しんだのに、これじゃもうDクラスのとこに行けないじゃん」

「ええ、断固として拒絶させてもらうわ」

「ちえー……それにしてもホリリン、どうしたのさ？何かいつもより警戒してるみたいだけど」

「さつき一之瀬さんに聞いたのだけど、あなたBクラスのリーダーを見抜いたそうね。そんな危険人物が自分のクラスに来ようとしているのだから、警戒して当然でしょ？」

「正解ちゃんに聞いたんなら、俺が見抜いても何ら支障無いのは知ってるよね？いくら君がリーダーだからって肩肘張りすぎでしょ」

「いったい何の話よ？ 私がリーダーだなんて言った覚えはないわ」

白波ちゃんに比べれば、体調悪いなりに立派にポーカーフェイスを取り繕ってはいるけど……ごめんね、嘘つてわかつちやうんだ俺。

Dクラスはまとまりが無いからクラス単位でリーダーを任せるのではなく、しっかりとした人に一任するだろうと思つて当てずっぽうで振つただけど……まさかドンピシャだとは予想外だった。上手いこと交渉してじっくり見つけ出そうとしたのに、すごい損した気分。

「あつ、ごめんごめん。ホリリン他クラスへの認知度が低くてしつかりしてるから、てつきりリーダーなのかと思つて」

「見当違いも甚だしいわ。……どうやら私はあなたを過大評価していたみたいね」

「嘲笑するならポケットからチラ見してるものをちゃんと隠してからにしろよ」

ほぼ反射的にホリリンは自分のポケットに目を落としてしまうが、勿論カードキーなどはみ出してない。からかわれた怒りからか、人を殺してそんな目で俺を睨んでくるホリリン。怖いなあもう。

「私を謀つたわね……！」

「こんな単純な罠にかかるとは、随分判断力が落ちてるね。若いからつてあんまり無茶したらダメでしょうが」

遠回しに風邪のことを指摘するも、ホリリンは余計なお世話とばかりに背を向ける。

「行きましよう綾小路君。真面目に試験を取り組む気の無い人に構つてるほど暇じゃないわ」

「お、おう」

「わーお随分な言われよう。それじゃあ試験頑張つてね、応援してる」

あの様子で最後まで持つのかねえ。……いや、持たなかつたらある意味都合なのかな？俺にリーダーを見抜かれてもコージーが平然としたのはそのため……なのかね？コージーって俺の知る限りずっと機械みたいに平然としてるし五分五分だな。

無人島試験結果発表

そんなこんなで、あつという間に無人島試験最終日を迎えた。しかし振り返ってみるとこの試験中食糧集めを除けば、ほとんどファルコンと鬼ごっこしてただけだな。リーダー探しは偶然も重なって2日目に全部終わっちゃったし、スポットの占有とかは葛城派だけで行ってたしな。

今日も朝から森の中を逃げ惑っている。最初らへんは慣れない大自然の環境に四苦八苦していたファルコンだったが、この数日で中々の適応力を見せている。……さて、時間的にこれがラストチャンスかね？

「おっと追い込まれちゃったか……」

「もう逃げられんぞ」

俺を木々に囲まれた天然の袋小路に追い詰めたファルコンが、手を伸ばして俺を捕まえようとする……が、

「はい残念♪」

「ぐっ……!!？」

俺は巨木を蹴った反動で大きく宙返りし、ついでに手でファルコンの頭を踏み台にし

て後ろを取った。

「……………こまでだな」

「えつ、まだ時間的にもうちよい余裕あるよ？惜しいところまで行つたのにもう諦めんの？」

「あまり俺を愚弄するな。常に俺がぎりぎり追いつけない程度の速さで逃げていたのはわかっている。……………そして最後の攻防もわざと追い込まれただろう？」

「ありやいやご名答。でもまあ良い鍛練にはなつたでしょ？」

「……………今後お前と戦わなくてはならない奴等には同情する」

「何言つてるのさ。ずっと俺と戦い続けているのが俺達のリーダーだろうに」

大半の奴は俺との埋められない差に絶望したり、劣等感に苛まれて妬んできたり、甘い汁を吸おうと下手に出たり、俺には関係ないと無干渉を決め込んだりするが、あいつは俺を従えるために真つ向からぶつかってきてくれる。だからあいつにぜひとも俺を越えて欲しいと思うと同時に、あいつには負けたくないとも思つてしまう。……………面倒な性分だな俺も。

「なあ本条。無意味な仮定なのはわかっているが……………今回の試験、坂柳が取り仕切つていればどうなつてたと思う？」

「そりや当然圧勝してたよ。……………俺と有栖が組めば無敵だからな」

『ただ今試験結果の集計をしていますのでしばらくお待ちください。各自飲み物やお手洗いを希望する場合は休憩所をご利用ください』

そして試験は終わりを迎えた。休憩所には最後まで試験をやり遂げた各クラスの生徒（Cクラスはリユニケル一人だけだが）が集まっており、リタイアした生徒は客船で待機しているらしい。

ちなみに今回の試験の肝であるリーダー当てだが、ウチのクラスはDクラスだけの指名に留まった。リユニケルは契約通りB、D両クラスのリーダーの情報も葛城に渡したが、俺のお節介が功を奏したのかBクラスの方は確たる証拠をリユニケルに奪われなかったようで、「石橋を叩いておいて渡らない」がモットーの葛城はリスクを恐れてBクラスの指名を断念しようだ。

いつもの側近3人と集計結果が終わるのを待ったりしながら待っていると、何やら勝ち誇った表情の戸塚と葛城が近寄ってきた。こちとら大自然とおさらばするノスタルジーに浸ってるのに無粋な奴だな。

「お前から坂柳派もこれまでだな。今回Aクラスは葛城さん主導の下425ポイントを残すことができた。間違いなくダントツトップだろうな」

「へー」

「あつそ」

今の彼等ははつきり言って道化も良いところなので、俺も橋本も適当に返事する。マスマインとファルコンに至っては反応すら示さない。そんな俺達の態度に戸塚は苛立ちを見せる。

「お前から自分の置かれている状況わかっているのか？派閥筆頭の本条は最低限の協力しかせず、トップの坂柳に至っては参加もしないでクラスに損害をもたらしたんだぞ。2学期からはおとなしく——」

「ありやりや、まーたりユンケルとDクラスの人達が揉めてるよ」

「聞けよ!」

何か言ってるが興味無いので無視無視。「強がりやがって……」とかぶつぶつ言ってる戸塚を捨て置いて、リユンケル達に駆け寄ってみる。……しかしこりやまた、

「随分ワイルドになったねリユンケル。町歩いてたら職質されそうだ」

「ぶつ殺すぞテメエ。……それより鈴音はどこだ。ケツでも撫でてやろうと思つたんだがな」

あらやだ手をわきわきさせてお下品なこと。……などと思つていたらホリリンに惚れてるであろう須藤君が、何やら怒りに任せてリユンケルに詰め寄ろうとしていたので、一応肩を掴んで止めておく。

「っ!？」

「すぐ熱くなつちやダメだぜ? 口で喧嘩売られたなら口で応じなきや」

「んなことわかつてらあつ! ちよつと脅してやろうとしただけだ! ……というかそれより、本条お前なんで——」

「さあ、なんでだろうね?」

不可解な出来事に襲われ須藤君が怒りを静めたのを確認し、平田君がリユンケルに向き直る。

「堀北さんなら昨日リタイアしたよ」

「は? リタイア? あいつがそんなタマかよ」

あちやー……その反応からして、どうやらまんまとしてやられたようだねリユンケル。そして葛城達の道化も完全確定したな、可哀想に。

そして良いタイミングで集計が終わったようで、真島先生が拡声器を持って姿を現す。無事試験を乗り越えた俺達に対する賛辞を述べてから、いよいよ試験結果の発表に移る。

『なお結果に関する質問は一切受け付けていない。自分達で結果を受け止め分析し次の試験へと活かしてもらいたい』

「だそうだ。失禁しないで、ちゃんと現実を受け止めろよ?」

「それはこっちの台詞だぜ。ポイント全部使いきったとか、バカじゃねえの?」

「僕はボーナスポイントも含め125ポイント。立派にやり遂げたと思ってるよ」

「興味無かったから知らにゃい」

「このスーパ―自己中野郎はともかく……はっ、その程度のポイントで満足するとはおめでたい奴等だな」

「0ポイントが偉そうに言うんじゃねえよ!」

「……ク、クク。確かに俺はポイントを使い切ったがな、俺は紙に書いたぜ?お前らDクラスのリーダーの名をよ!」

ふむ、須藤君は驚愕し動揺してるけど、コージも平田君も平然として……須藤君にも教えてやれよ事前に。

「そしてAもBも同じように書いた。どういうことだかわかるか?」

「どういふことだよそれ、なあ!?も、もし本当だとしたら……」

「これからさぞや面白いもんが見られるぜ、なあ本条?」

「ウン、ソウダネ」

ダメだ……こんなにイキイキとしているリユンケルにネタバラシなんてできないよ、可哀想で。

『最下位は………Cクラスの0ポイント』

「ぶはははー!やっぱり0ポイントじゃねえかよ!ダッセー!!」

「……0だと?」

リユンケルを指差しながら腹を抱えて笑う須藤君。リユンケルはシヨックを受けているようには見えず、冷静に何が起きたのか思考を巡らせていた。……まあウチのクラスと契約した時点で、最低限の成果は上げているからねえ。

『続いて3位はAクラスの120ポイント。2位はBクラスの140ポイントだ』

「ふむ、やっぱこうなったか。それじゃあ葛城をおちよくりに行くとするか。あつ、ホリリンにはナイス替え玉☆つて伝えといて」

「つ、わかっていたのかい?だったら何故……」

平田君の言いたいのは多分、どうしてリーダーがホリリンから変わっているのに葛城を止めなかったのか?つてことだろうけど……

「だから興味無いんだってば。それに集団にトップは二人もいらぬし、最初から盛大にこけてもらうつもりだったよ坂柳派^俺は。……それじゃあまた船で」

和を重んじる彼からしたらクラス同士で蹴落としかう俺達は理解できないのか、複雑そうな表情の平田君の視線を背に俺はAクラスの集まりへと移動する。……というか結局何も喋らなかつたなコージ。

『そして1位……Dクラス、225ポイント。以上で結果発表を終了する』

まさかの1位にDクラスの集団から爆発的な喝采が飛び交う中、俺は頭の中で今回の試験結果を分析し振り返ってみる。

まず最初に最下位のCクラス。

最初の300ポイントを初日で使い尽くし、気がすんだらクラス全員がリタイアして完璧なバカンスを楽しむ……とBクラスとDクラスに思わせておいて、リユニケルを含む3人だけは虎視眈々と各クラスのリーダーを探っていた。そしてBクラスとDクラスにそれぞれスパイを潜り込ませリーダーを特定し、Aクラスのリーダーはリユニケルに恩を売りがついていた橋本がリークした。よって合計150ポイント……とはならず結果は無情の0ポイント。

この結果はDクラスのリーダーを外し、逆にDクラスにリーダーを当てられたからだろう。ホリリンがリタイアしたようなのでリーダーは別の誰かに移っている。リー

ダーは正当な理由なくして交代できないが、リーダーの体調不良によるリタイアは正当な理由として通るだろう。よって100-50-50で0ポイント。これはリユニケルどんまい。

続いて我等がAクラス。

有栖が不参加だから270ポイントからスタート。葛城達がこつこつとスポットの占有を頑張っていたようだが、リーダーを当てられたから全部ペア。リユニケル同様Dクラスのリーダーを外し、さらにリユニケルにリーダーを当てられ合計マイナス100。残りの50は……得点からして多分Dクラスにも当てられたようだ。……2日目に口八丁でホリリン達を追い返しておいて、最終的に結局バレるとかだっさ。

次はBクラス。

奇抜な戦略を用いず正攻法で試験に臨むが、他クラスの生徒を疑いもせず引き入れるという愚行を犯し、案の定リユニケルにリーダーを指名されて140ポイント……うん、特に良くも悪くもない平凡な結果だ。

しかし有栖が指揮取ってなくて良かったな正解ちゃん。あいつだったらリスクなんて恐れず指名しているだろうし、何だったらDクラスにも情報をリークして40まで減らされてたかもな……いや、Dクラスとは同盟関係を結んでいるっぼいしそれは無い
か。

そして最後に……教師達もビックリしたであろう、大金星をもぎ取ったDクラス。

平田君曰く、リーダー指名を除けばスポットのボーナス含めて125ポイント。あのまとまりの無いクラスで、ミスターにホリリンとリタイアを2名も出しながら、それでもそれだけ残せただけでも頑張ったよ彼等。平田君が誇らしく思うのも頷ける。

その上リーダーを特定されながらも、リーダーを入れ換えるという荒業で指名を逃れ、さらに最終得点からして2クラスのリーダーを的中させている。Bクラスの最終ポイントと、正解ちゃん達が俺の情報をホリリンにも共有したことからして、あの2クラスは同盟関係にあると見て間違いない。よって彼等が的中させたのはAクラスとCクラス。

ウチのクラスはどうせ戸塚がまた何かやらかしたんだろうが、まさかスパイを潜り込ませていた筈のCクラスが当てられるとは……それにリーダー交代作戦だが、明らかに潔癖優等生タイプของホリリンが行いそうな作戦とはどうも思えない。となるとまたコージが裏で糸を引いていたのか?……だとしたら実に面白い。

目立つのが嫌いな事なかれ主義者を自称していたから、無理矢理戦いを強要する気は無かったが……: どういう心境の変化か知らんが、ホリリンを隠れ蓑にしつつそつちから挑んでくるなら十分楽しめそうだ。リユンケルも正解ちゃんもこのまま終わるわけ無いだろうし……: 喜べよ有栖、この学校はお前が憂いているほど退屈しなさそうだ。

「どういふことだよ葛城！」

……さてと、少し興が乗った。今回の試験を経て他クラスにも面白い奴が色々いるとわかったことだし、つまらねー対抗馬にはひと思いにギロチンを振り下ろしてやるとするか。

3 卷 エピローグ

〔side：葛城康平〕

試験結果が発表されて初めて、俺は大きな大きな過ちを犯したことを悟った。

「どう責任取るつもりだ葛城！」

「あの契約は大きな損害だぞ！」

「うるさい！お前達も納得していただろ！」

休憩所にて俺は坂柳派だけでなく、今まで俺を慕ってくれていた生徒からも糾弾を受けていた。弥彦や数人の生徒は必死に俺を庇ってくれているが、残念ながら俺を責め立てる彼等の方に理がある。今回の試験で勝利を収めるためにCクラスの取引に応じたのに、あんな結果で幕を閉じたのだから。

最終得点を逆算すれば何故こうなったかを推測するのは難しくない。おそらく俺達はAクラスはDクラスのリーダーを外し逆に当てられた。そしてさらに……Cクラスにもリーダーを当てられている。

龍園がDクラスに潜り込ませたスパイが手に入れたキーカードをこの目で確認し、俺達は堀北鈴音を指名したが……何らかの手段でDクラスはリーダーを変更した。Cク

ラスが0ポイントであることから、Dクラスの指名を外したことは間違いない。では逆に何故彼等にAクラスのリーダーを当てられたのか……心当たりがあるとすれば初日、誰が見ているかもわからないのに弥彦が迂闊にスポットを占有してしまったので、俺がリーダーであるかのように芝居を打ったのだが……弥彦が占有する瞬間から見られていたのならそんな芝居に意味はない。おそらくDクラスの誰かがあの場に潜んでいたのだろう。

Dクラスに関しては特に言うことはない。弥彦の不手際や不運があつたとはいえ、リーダーを見抜かれながらも会心の一手で勝利を引き寄せたことは称賛に値する。

問題はCクラス……龍園は自分から協力を申し出ておきながら、最初から俺達に牙を剥くつもりだった。お互いのクラスを指名してはならないと契約書にしっかりと明記しなかつた俺にも非があるが、ある種暗黙の了解といえるそれを平気で破るモラルの欠片も無い奴のやり口には、憤りを覚えずにはいられない。俺が犯した過ち……それは坂柳に追い詰められ功を焦り、手を出してはいけない悪魔との取引に応じてしまったことだ。

……しかし不可解な点が1つある。どうして龍園は弥彦がリーダーだと見抜けたのか？ 弥彦の迂闊な行動を2つのクラスに見られていたなど、偶然にしては流石に出来すぎだ。……もしや、坂柳派の誰かがリーダーの情報を漏らしたのか？ Dクラス相手に漏

らしたのではない。籠城作戦を行っているクラスの生徒から渡されたリーダーの情報など信じられるわけがない。だが裏側を知るCクラスになら……しかし何故だ？裏切ることを危惧し、坂柳派はもとより俺の派閥でさえほんの一部にしかリーダーが弥彦だと教えていない筈……

「不様だねえ葛城君」

皆の非難を甘んじて受けつつ思考を巡らせていると、橋本ら坂柳の側近3人が近づいてきた。神室と鬼頭はいつも通り仏張面だが、橋本は馬鹿にするような笑みを浮かべている。龍園との契約で大きな痛手を負った筈なのに、まるで気にした様子もないその態度に、俺は裏切り者の正体を悟った。

「お前のような信用できない奴等がいたから、葛城さんは大人数で動けなかったんだ！そのせいで……」

「おいおい戸塚。結果発表前はあるなに勝ち誇ってたのに、負けが決まった途端に責任転嫁かよダツセエな」

「橋本……龍園と通じていたな？お前がリーダーの情報を奴に売ったんだろう」

「葛城君までとんだ言いがかりをつけてきたもんだ。俺達の裏切りを警戒して、リーダーが誰か教えなかったのはお前だろ？」

「おそらく本条に聞いたのだろう。奴ならばリーダーを見抜いても不思議ではない」

「挙げ句の果てに本条まで疑うのかよ。友達として弁明するが、あいつは約束を破る奴じゃないぞ?」

確かに本条は、自分はクラスには危害を加えないと約束した。奴が約束を必ず守るという保証はどこにもないが、そもそもそれ以前に……

「リーダーが誰だと思うかクラスメイトのお前に予想を教えるだけでは、クラスに危害を加えたことにはならない」

「なるほど、憶測にしてはなかなかどうして辻褄が合っているな」

俺が追求しても橋本はまるで余裕を崩さず平然としている。確かにこれはただの憶測に過ぎず証拠も無いため、どれだけ怪しくてもこれ以上橋本を糾弾することはできない。真相は既に闇の中だ。

「ありやりや、やっぱりギスツてたよ」

呆れるように溜め息を吐きつつ戻ってきた本条に、クラスメイト達は道を開ける。坂柳派の生徒は勿論、俺の派閥の生徒のほとんどもごく自然に道を譲った。モーセのように開けられた道を本条は悠々と歩み、俺の目の前に立った。……気のせいか、いつもの本条と雰囲気が違う。

「今回の試験、ホリリンとリユンケルにはしてやられたね。まあお疲れさん」

「……その口ぶりからしても、龍園の企みと堀北鈴音の企みに気づいていたのか?」

「そりゃあね。あのリユンケルが素直にお互いに利のある契約なんか持ちかけるわけないし。ホリリンは2日目の時点で随分体調が悪そうだったから、最後まで持たないと思つたしね」

「2日目……!? どういうことだ本条！ お前まさか、Dクラスとつながつて——」

「お前らが上から目線で口八丁に追い返した直後に偶然会つたんだよ。暇潰しに適当にカマかけたらドンピシャで当てちゃつたからビックリしたね、うん」

「なつ……!? リーダーがわかつたんなら、なんでそのとき俺達に言わなかつた!？」

「俺が言つてもお前ら信じないだろうが。ホリリンの体調不良に関しては、女の子が苦しんでることに気づきもしない愚鈍な奴が悪いだろ」

責め立てるような弥彦に対して突き放すように言う本条は、やはりいつもと何かが違つていた。表面的な態度こそいつも通りなのに考えているわからない飄々としたものだが、いったい何が……

違和感の正体に気づいた俺は、不意に全身に鳥肌が立つのを感じた。入学式のあの日、坂柳が自己紹介をしたとき以来になる……本能的な警戒。

「悪いけど負け犬の戯れ言に付き合っているほど暇じゃないんだ。……坂柳派の皆しゅーごー。あ、そつちの2人も集合してね」

本条が俺から僅かに距離を取りつつそう告げると、過半数の生徒が本条に続いた。

「お、おい!?!山村と森重!お前らは葛城さんの味方だっただろ!?!」

弥彦に耳を一切貸さず、二人は本条のもとに集う。……坂柳が俺のもとにスパイを潜り込ませていることは薄々気づいていたが、本条のセリフからしてどうやらあの二人がそうだったようだ。だが、何故このタイミングでそれを明かす……?!

困惑する俺達を捨て置き、本条は幾度か咳払いしてから集まった生徒達に語りかける。

「とりあえず試験お疲れ様。有栖の指示とはいえ、つまらねー奴のつまらねー指示に従って過ごすのはさぞや不服だったでしょ? 挙げ句の果てにそれで得た報酬が毎月2万ずつリユンケルに徴収されることとなれば……ふざけんなと怒りたくもなるよな」

「まったくだ」

「ほんと信じられない」

「葛城なんかに従って損したぜ」

優しく問いかけるような本条に、坂柳派の生徒は口々に不満をぶちまける。怒りで弥彦が突っかかりそうになるが手で制しておく。今回の結果は責められても文句は言えないのだから。……だが次に本条が優しい笑顔であっさり言っただけのこと、

「でも大丈夫、安心しな。この場にいる坂柳派の21名が負担する分は……俺が全部肩

代わりしたげるから」

俄には信じられないものであった。

「よっしやー!」

「流石本条君!」

「坂柳さんについて良かったー!」

自分達の負担がチャラになったことで坂柳派は本条を褒め称え喝采するが、やはり到底信じられることではない。

「ありえない……本条お前、自分が何を言っているかわかっているのか!? 毎月2万ポイントを自分含めて22人分……卒業まで払うとなると、軽く1000万を超えるぞ!」

「ふむ、確かに莫大な出費になるね。……でも俺にとっては些細な無駄遣いだ」

「っ……!?!」

余裕を滲ませた笑みに俺は、いや俺達は戦慄を隠すことができない。こいつは一切冗談を言っていない……1000万程度の損失など大した問題ではないと本気で考えている!

そして、坂柳派の連中はそのことに微塵も疑いを持っていない!

「な、なあ本条! なんでそいつらだけなんだよ!?! 俺達のやつも肩代わりしてくれよ!」

「え? 嫌だよ。なんで葛城に従う君らの分も負担しなくちゃいけないのさ!」

「な、ならもう葛城君には従わないから！これからは坂柳さんにつくから！」

「俺も俺も！」

「お、おい!? お前ら何を勝手な——」

「有栖の味方になるなら好きにするといいけど、どっちみち君達の分は肩代わりしないよ」

友人達の離反に弥彦は憤慨するが、本条はそれらを冷たく一蹴する。

「ど、どうしてだよ!?!」

「えー? 本気でわからないの? だとしたら……」

お前らはどこまでも愚かな奴等だな」

「ひっ……」

とてもあの本条のものとは思えない冷たい声色と能面のような無表情に、ほとんどの生徒が恐怖に駆られる。突き放すような冷たい言葉に込められたのは、怒り? 嘲り? 失望?

……そのどれでもなく、ただただ『無』だった。今の言葉といい、ここへ来てから奴の目といい、とても同じ人間へ向けたものとは思えない……無機質なものだった。

「お前らには自由に選ぶ権利が、そして選択する猶予があつた筈だ。有栖と葛城……対

立する二人のリーダーどちらにつくのが正しいかをお前なりに熟考し、自分の将来を預けるに足ると判断した相手が葛城だったというなら、別にその決断を責めやしないさ」

励ますような言葉を述べつつも声色はどこまでも無機質で、身に纏う雰囲気は呼吸さえしづらくなるほど重苦しい。恐怖のあまり逃げ出したくなると同時に、心を縫い付けて動きたくなくなる……そんな矛盾を押し付けられる。

先ほど坂柳への鞍替えを申し出た女子生徒……田宮に本条はゆっくりと近寄るが、誰一人としてそれを阻めない。

「だがな……最初から有栖を信じてついてきた奴と、不利になった途端にあっさりと鞍替えするような奴を、どうして同列に扱わないといけないのさ？ありえないだろ常識で考えて。……ところで田宮ちゃん、人が話してるときは顔上げよっか？」

「っ、う、ああ……」

本条は恐怖のあまり俯いていた田宮の喉元に手を添え、そのまま目が合うように顔を上げさせるが、あの冷たい目で真正面から覗きこまれた田宮は、さらに震えて今にも泣き出しそうになる。流石に危険だと判断し止めようとするが、俺が動き出す前にさっと手を離し俺に向かって制止する。

「まあ落ち着けよ田宮ちゃん。鞍替えに関しても責めようって訳じゃないんだ、したけ

りや別に好きにすればいいさ。今後何かあれば勿論俺は手を差しよべる。ただ2万ポイントの肩代わりはダメ。それはこの特別試験で有栖を信じて不自由を我慢した彼らに対する報酬だからね。……わかった？」

その問いに田宮が涙目で何度も頷くと、本条は優しい笑みを浮かべてその頭を撫でる。

「怖がらせてゴメンね？」

「う、うんつ。大丈夫だよ……」

いつの間にか目も普段通りに戻っており、重苦しい雰囲気も消えている。そして昨日まで身勝手な振る舞いをする本条に腹を立てていた筈の田宮は、顔を紅潮させて俯いていた。……もう俺達のもとへは戻ってこないだろう。

「それじゃあ船に戻るとするか。……ああそれと葛城、有栖から伝言」

「……何？」

「残りの7日間でもう1つ特別試験があるけど指揮は引き続き任せるから、名誉挽回目指して頑張れだつてさ」

俺が失態を犯すことをわかっていたかのようなその伝言に、やはり坂柳が俺を失墜させるよう橋本達に命じたと確信する……が、追求したところでもう無意味だろう。そもそも俺の失態に対する皆の怒りも不満も、本条が全て飲み込み消し潰してしまった。当

の本人は普段の調子で悠々と船へと歩みを進めるが、奴が命じた訳でもないのにクラス
の大半が当然のようにそれについていく。

恐ろしい男だとあらためて思う。

奴の突出した学力や運動能力など氷山の一角でしかなかった。そして今日見せた、坂
柳や堀北生徒会長をも凌駕するあの威圧感と人心掌握力も、本条の数ある才の一部でし
かないのだろう。

実力の底が、まるで見えない。

逆に何を持ち得ないのかと問いたくなるが、奴と本当の意味で敵対しなくてよいのは
俺達にとって幸運なのだろう。……もしあいつがAクラスを率いるのなら、俺の気苦労
も無くなるのと思うことは、はたして贅沢な悩みだろうか。

第2の特別試験

前半の特別試験が終了してから早3日。

「ほい、スリーカード」

「……ツーパー、です」

豪華客船地下2階のカジノにてギャラリーの注目を浴びながら、やや顔をひきつらせたディーラーから報酬のチップを受けとる。

「しかしお前ほんとポーカー強いな。……実はイカサマしてたりとかする?」

「カードに触れるの基本ディーラーなのにどうイカサマしろと? 勝てる勝負を取りこぼさないだけさ」

坂柳派の側近が一人、ナイト(笑)こと橋本が茶化してくるも本気で言ってる訳ではないのか、呆れたように肩を竦める。というかそういうお前もそこそこ強いだろ。3日連続プラス収支なの知ってんだぞ?

「しかしこのカジノ……どれも1日にチャレンジできる回数に制限があるとか、随分とおかしなルールだよな」

「学校側も運で大量にポイントが稼げる仕組みを避けたいんですよ。一応ここ日本の将来を担う人材を育成する学校だしね」

もしギャンブル中毒者をＡクラスとして送り出したりしたら、この学校ひいては国の面目丸潰れだ。そうでなくてもプライベートポイントは国民の税金で負担されているものだし、大量にポイントを入手する手段は次々と規制されていくに違いない。以前俺の用いた稼ぎ方も来年からは通用しなくなるだろう。

「さてと……これ全部１５番」

「うげ……やっぱ今日もそれするのかよ」

３万程度の利益が出るようチップを分けてから、それ以外を全部ルーレットに数字賭けする。そしてルーレットの中を転がる玉がどこに止まるのかを確認もせず、俺は分けたチップをプライベートポイントに換える。そのままカジノを出るが特に騒ぎが起きなかったことから、案の定外れたのだろう。

「毎度思うけど当たったかくらい確認しろよ」

「３７分の１なんてそうそう当たるかよ」

「もったいねえなく、３０万近くあったぜあれ。いらぬなら俺にくれても良いじゃん」

「この甘ったれが。初日に軍資金は貸してやったんだし、それで満足しなさいまったく」

「ちえっ……だいたいなんで毎度毎度ドブに捨てるんだよ？」

「カジノで勝ちすぎる客は嫌われるんだよ。調子に乗って出禁とかされたくないし」

そう、ただでさえ俺は気を紛らわすための娯楽に飢えている。無人島での試験が終わったことで、大自然パワーによって封じられていた有栖欠乏症が再び猛威を奮っているのだ。学校側もさっさと次の特別試験を始めろよ何焦らしてくれてんだよああ退屈退屈暇暇暇……

「学校戻って有栖に会ったら……」

「また姫様の話かよ、ほんと仲良いな——」

「……訴えられてもいいから好き放題セクハラしてやろうかな？」

「いや待てええええええ!!」

隣を歩いていった橋本が力の限り声を振り絞ってシャウトする。なんだようるさいな橋本、いつものスカした態度はどこ行つた？

「……冗談だ」

「お前が言うのとシャレにならないんだよ!!そんな髪伸ばそつかな?みたいなノリで人生棒に振らないでくれよ頼むから!」

まあ確かにこんなしょうもないノリで俺が退学処分になつたら、クラスにとつて大打撃どころじゃないよな。

「わかっているわかってる。もしかしたら有栖はクラスの損害を考えて、訴えられず抱え込んだりやうかもしれないしな。そんな卑劣な真似は良くないか、うん」

あいつが泣き寝入りするなんてあり得ないとは思いますが、1億分の1くらいは可能性がある。

「……いやちよつと待て、まず前提からして間違っている気がする」

「あー？」

「坂柳がお前にセクハラされたとして……そもそも嫌がるのか？」

「……………おお、それは盲点だった」

「お前ら普段からしていちやつきまくっている上に、アウトかセーフか判別しかねるグレーゾーンなこともなんかやっているみたいだし……」

「ふむ、確かに。この前悪ふざけでほとんど紐みたいな水着着てって頼んだら平然と着てたし、後ろから抱き締めて胸揉みしだきつつ顔中をペロペロと舐め回したところで、普通に流されそうでつまらねーか。よし、ここは高い高いしておちよくるだけに済ますか。あいつ子供扱いされんの嫌いだから間違いないぶちギレるな」

「ゴメンちよつと待って流石に捌き切れない!?というかそのセクハラはお前らは良くても第三者に見られたら間違いなくアウトだから頼むから自重してくれ!というか毎回言うけどなんで付き合ってるねえんだよなんなんだよお前ら!」

「こっちも毎回言うけど俺達の勝手でしようが。」

そんな風に俺と橋本がしようもないやり取りを繰り返している、どちらの携帯からもキーンという高い音が同時になった。……マナーモードでも強制的に音が鳴る重要性の高いメールだ。送られてくるのはこれが初めてになるな。

そしてほぼ同時にアナウンス流れる。

『生徒の皆さんにご連絡いたします。先ほど全ての生徒宛に連絡事項を記載したメールを送信いたしました。各自携帯を確認しその指示に従ってください。またメールが届いていない場合には、近くの教員まで申し出て……』

「……これは、いよいよ始まったな」

「待ちくたびれたよまったく。危うく人としての一線を越えそうになったぜ」

「マジでやめろよ、ほんと頼むぞ」

「わかってるわかってる。ちよっとお前で遊んでただけよ」

「……お前実は性格悪いよな」

「有栖の本性知ってて平然と仲良くしてる奴が聖人君子だとも思った？」

送られてきたメールを確認すると、特別試験の説明を行うので午後6時までに2階201号室に時間厳守で集まれとのこと。橋本のメールにも目を通してみると、集合時間と集合場所が異なっていた。

「無人島試験と違って、クラスメイトと協力するタイプじゃないのかもな」

「かもねー。それじゃあ俺はそろそろ時間だから行つてくるわ。橋本も試験頑張つてね、応援してる」

「……一応聞くけど、本条はこの試験も適当に流すんだよな？」

「内容を聞かないことには断言できないけど、とりあえずそうなるね。この試験で葛城にとどめを刺す」

無人島試験の結果と俺のちよつとした思いつきのせいで、今やクラスの8割強は有栖の味方だ。有栖の伝言によりこの試験も葛城が取り仕切ることになるが、さらに失態を重ねれば派閥は完全に崩壊するだろう。……それどころか、ヒエラルキーの最下層まで落ちたりしてな、ああかわいそ。

「……あ、リUNKケルにポイントを肩代わりすること伝えとかなきゃ。橋本、リUNKケルが何時に集合するか聞いて」と

「そんな回りくどいことしなくても、俺が代わりに伝えておこうか？」

「ダメダメ。お金のやり取りはちゃんと本人が出向かなきゃトラブルに繋がりがねないぜ」

「きつちりしてるのかいい加減なのか……」

呼び出し場所に指定された2階フロアはどういった場所か事前に説明されておらず、昨日までは全然生徒が立ち入らなかつたのだが、今日は何人かの生徒がウロウロしてはバラバラの部屋に入っていくのが見えた。

俺がこのフロアに足を踏み入れた途端あちこちから警戒やら敵意やら好奇やらを孕んだ視線を感じるが、別に珍しいことでもないので気にせず指定された部屋のドア前に立ち、4回ノックする。

「入っていいぞ」

許可を得たのでドアを開け中に入ると、Dクラス担任の茶柱先生が椅子に腰掛けていた。……何故か警戒されてるんだけど、俺この先生に何かしたっけ？

部屋の中には既に二人の生徒……町田と森重が椅子に座っていた。スパイとして葛城派に潜り込んでいた森重と、無人島試験を終えてなお葛城についている町田。雰囲気はギスらない訳がなく、間の椅子を空けてお互いがお互いを視界に入れないようにしている。

「そこに座れ」

指示されたので特に気にすることなく間の椅子に座ると、案の定片側から敵意と警戒の視線が飛んでくる。

「Aクラスの本条、町田、森重だな。少し早いが全員集まったので、これより特別試験の説明を行う」

この時点でもう異質だな。試験の説明なんてどんな内容だろうと普通は、公平性を期すために全員同時にやるものだ。第一こんな少人数ずつバラバラに説明するとしたら、物凄い手間がかかるし非合理的だ。だいたいこのメンバーの人選何？接点ほぼ皆無なんですけど。

……まあとりあえず説明を聞こうか。

「今回は1年生全員を干支になぞらえた12のグループに分けて特別試験を行う。なお試験の目的はシンキング能力を問うものとなっている」

……干支？数字でもアルファベットでもなく？何か引つ掛かるから頭の片隅に置いておこう。

「社会人に求められる基礎力は大きく分けて3つある。すなわちアクション、チームワーク……そしてシンキングだ。それら全てを備えてこそ優秀な大人足り得る」

チームワーク欠片も無くして申し訳ない。

「この前の無人島試験ではチームワークに比重が置かれた試験だったが、今回はシンキ

ング……考え抜く力が必須な試験だ。現状を分析し課題を明らかにする力。問題解決のプロセスを導き出し準備する力。豊かな創像力で新しい価値を生み出す力……そういったものがこの試験で必要になるだろう」

要は有栖の得意分野か……つくづくあいつが参加できないのが悔やまれるな。

「……までで何か質問はあるか？」

「何故俺達3人だけで説明を受けているのですか？仮にグループ別に説明するにしても人数が少なすぎると思います」

町田のもつともな疑問に、茶柱先生は何故か薄く笑って答える。

「わかっているとは思いますが、ここにいるお前達3人は同じグループとなる。そして今頃の別の部屋で、お前達と同じグループとなるメンバーに同じ説明がされているだろう」

何かを察したのか町田と森重の目が見開かれる。Aに所属されただけあって地頭はそこそこ良いな。……わざわざグループ内で分けて説明するということは、おそらくグループの他のメンバーとやらは他クラスの生徒だ。

「お前達の配属されるグループは『卯』。ここにそのメンバーリストがあるが、退室時に返却させるので必要と思うならこの場で覚えておくことだ」

真ん中の俺は葉書サイズの紙を渡され、森重と町田はそれを覗き込む。……干支なのに『兎』グループなんだな。

Aクラス：本条桐葉 町田浩二 森重卓郎

Bクラス：一之瀬帆波 浜口哲也 別府良太

Cクラス：伊吹滯 真鍋志保 藪菜々美 山下沙紀

Dクラス：綾小路清隆 軽井沢恵 外村秀雄 幸村照彦

おつ、コージと亍解ちゃんがいるじゃん。どんな試験になるかはわからんが、どうにか退屈せずに済みそうだ。

「今回の試験では、大前提としてAクラスからDクラスまでの関係性を一度無視しろ。そうすることが試験をクリアするための近道だ。試験中お前達はAクラスとしてでなく、兎グループとして行動することになる。そして試験の結果はグループ毎に設定されている」

今まで散々いがみ合い蹴落とし合いさせておいて、いきなりクラスの垣根を越えて協力し合えてるか？相変わらず意地が悪いねこの学校。……いや、よく考えると協力しろなんて一言も言っていない。またいつもの言葉遊びか？……だとしたらやっぱり意地が悪いねこの学校。

「特別試験の各結果は全部で4通りで例外は存在しない。わかりやすく理解してもらおう

ために結果を記したプリントも用意してあるが、このプリントも持ち出しや撮影は禁止だからしつかり覚えろよ？」

今度は個別に用意されていた。書かれてあるルールの基本的な部分を要約すると

……

- ・この試験は各グループに割り当てられた『優待者』を基点とする。
- ・試験開始当日午前8時、優待者選ばれたかどうかを生徒全員にメールを送信する。
- ・試験の日程は明日から4日後の午後9時まで。
- ・1日に2度、グループごとに所定の時間と部屋で1時間の話し合いを行う。話し合いの内容は完全に自由。
- ・試験終了後、午後9時半から午後10時の間のみ、優待者が誰であったかの答えを受け付ける。解答は1人1回まで。
- ・解答は自分の携帯電話を使って所定のアドレスに送信する。なお優待者はメールにて解答する権利はない。
- ・自身が属するグループ以外の解答は無効
- ・試験結果の詳細は最終日の午後11時に全生徒にメールにて伝える。

ここまですが基本となるルール。そしてこの試験、やけに禁止事項が多い。優待者かどうか知らせるメールの削除や文章の変更、または他クラスの携帯を強引に見る等々……要は不正な手段で優待者であることを隠そうとしたり優待者を暴こうとしたりといった、試験の根幹である『シンキング』から大きく逸脱した行為は全て退学処分とのこと。まあそれ普通の試験で言うカンニングみたいなもんだし当然の処置か。

それで、その試験の結果とやらは……

結果1：グループ内で優待者及び優待者の所属するクラスメイトを除く全員の解答が正解していた場合、グループ全員にプライベートポイントを支給する（優待者は100万プライベートポイント、優待者以外の者は50万プライベートポイントが支給される）

結果2：優待者及び所属するクラスメイトを除く全員の答えで1人でも未解答や不正解があった場合、優待者には50万プライベートポイントを支給する。

ここまででならただ優待者が有利なだけの比較的平和な試験だが、残りの2つの結果で大きく覆ることになる。

結果3：優待者以外の者が試験終了を待たずして答えを学校に告げ正解した場合、その生徒の所属するクラスはプラス50クラスポイント、正解者には50万プライベートポイントが支給される。優待者を見抜かれたクラスはマイナス50クラスポイントされ、そのグループの試験は終了（優待者と同じクラスメイトが正解した場合、解答を無効とし試験は続行）。

結果4：優待者以外の者が試験終了を待たずして答えを学校に告げ不正解だった場合、答えを間違えた生徒の所属するクラスはマイナス50クラスポイント。優待者には50万プライベートポイントが支給され、優待者の所属クラスはプラス50クラスポイント。答えを間違えた時点でグループの試験は終了（優待者と同じクラスメイトが不正解した場合、解答を無効とし試験は続行）。

うん、やっぱグループで協力させる気無いわこれ。こんなもん優待者は必死になって隠そうとするし、それ以外は血眼になって炙り出そうとするだろう。

……仮に俺が真剣に取り組むつもりだったら、優待者を選ばれないとさぞやガツカリするだろうな。だって無人島のリーダーのときと同じで、探る側だと優待者多分すぐわかるもん。俺が楽しむ暇もなく速攻で終了するもん。こんなもんシンキングでも何でもねーよごめんね先生達って何か申し訳なくなると思う。

波乱の竜グループ

その後、茶柱先生からちよつとした補足説明を受けてから解散となった。町田は敵対派閥、森重もスパイとはいえ先日まで葛城派として行動していたためまったく親しくないことから、説明が終わると二人ともさつさと部屋を出ていつてしまった。やはり『兎』グループに配属されたAクラスのメンバーに、チームワークなんてものは存在しないよ
うだ。

部屋を出てマナーモードにしていた携帯をチェックすると、リUNKELの集合時間が午後8時30分だと橋本からメールが来ていた。となると午後8時頃にまたここに来て例の話を伝えるとするか。……まったくリUNKELめ、あのときメアド教えてくれてたらこんなまわりくどいことしなくて済んだのに。

さて、そうなると2時間ほど暇を持て余すことになるよね……ここは試験のテーマたる『シンキング』らしく、夕食でも取りながら試験の内容と俺の立ち回りについて考えてみようか。

「……なんで私がアンタと二人きりでご飯を食べる羽目になってるのよ？」

「まあそう嫌な顔するなマスマシン。ここ奢ってあげるから」

「ここの料理全部タダでしようが。というかマスマシン言うな」

「……カムロンの方が良かった？」

「そういう問題じゃない」

「でもなんか語感がマカロンみたいじゃね？とてもじゃないけど君にはそんなファンシーなの似合わないと思う」

「話を聞け！あとどういう意味よそれ!？」

客船を歩いていたらちようどレストランに向かう坂柳派のビショップ、神室真澄……通称マスマシンを見かけたので、予定を変更して半ば強引に同伴し一緒に食事を摂ることに。たまには派閥の側近同士で親睦を深めないかね。

「なんでそんなに不機嫌なのさ？普段から昼食は派閥の皆と摂ってるし、マスマシンは俺のこと嫌ってないのに」

「……確かに嫌いではないけど、よくそこまではつきり断言できるわね」

「俺そういうのすぐわかるからね。Dクラスの榊田ちゃんなんて凄いや？この国が法治国家じゃなかったら命奪^{タマ}りに来ても不思議じゃないレベルで嫌われてる」

「……榊田って、あの榊田が？俄には信じられないわね。アンタあいつに何したのよ」「知らないし興味も無い」

それだけ嫌悪感を抱いている俺に、何故友好的に接してくるのかは少し気になる。理解に苦しむ、とも言えるけど。

「……話を戻すけど、確かにアンタのことは嫌いじゃないわよ。でもね……彼女持ちの男と二人きりで食事する女が、周りからどう見られるか考えてよ」

「俺と有栖はまだ付き合っていないぜ？」

「アンタ達の面倒な関係は置いといて、周りはそう見ないわよ。……というかアンタ達、意図的にそう見られるようにしてるでしょ？」

それはそうだ。周りから恋人同士だと認知されていれば、交際を申し込まれるような面倒な手間を省ける。有栖をよく知らない女子はその容姿から横恋慕を諦めるだろうし、有栖をよく知る女子は横恋慕など怖過ぎてできないだろう。その逆も似たようなものだ。

「私も面倒ごととは避けたかったのに……これで変な噂でもされたらどうしてくれんのよ？」

「大丈夫でしょ。大半の生徒からの俺の印象は『ちよつと変わった人』だろうから、『まあ、本条だし……』で済まされるよ多分」

「自覚してんなら少しは改めなさいよ……」

「やだよ。あるがままを生きてこそ人生だ、そうでなければ意味がないでしょ？」

「あるがまま……ね」

何やらマスミンの表情が陰る。無理矢理有栖に従わされてるのにそれほど嫌がつてないあたり、どうやらこの子は結構重めな過去を抱えているようだね……まあいいや、放っておこう。多分話したからないだろうし、そもそも他人の過去なんか興味無いしね。

「……まあそれはそうと、アンタは今回の試験どうするのよ？」

「予定通り適当に流す。坂柳派の皆はまた葛城の指示に従つとけば良いんじゃないかな」

「そう……となると私達がどう動くかは、葛城が説明を受けた後のミーティングで決まるわね」

「ナヌ？ミーティング？」

「さつき葛城からメールが来たでしょ？9時に2階フロアに集まってる」

「何それ初耳」

「……もしかして葛城、どうせ言うこと聞かないからアンタに連絡回してないのかもね」
「おのれ葛城め、俺をハブにするとは許せん。今度あいつの誕生日に最新式ドライヤーを送ってやる」

「やめなさいよそんな微妙な嫌がらせ……」

その後はそれなりに楽しく談笑が進み、やがて丁度良い時間になったのでマスマミンと別れて2階フロアに向かう。……葛城に会ったらちよつと苛めてやろつと。

2階フロアに向かう途中、見知ったイケメン君×2と鉢合わせる。

「あつ、本条君」

「おつ、平田君に……コージー？確か俺と同じ『兎』グループじゃなかったっけ？」

「堀北に呼び出されていてな。そういうお前も誰かに用事か？」

「ちよつとリユンケルとね」

「リユンケルって……龍園君のことだよな？彼と同じグループか、要注意だな……それ

にしても無人島試験最終日のときといい、龍園君とは仲が良いのかい？」

「仲良くはないよ、以前メアド聞いても教えてくれなかったし。あのドケチ紫ロン毛め」
「そ、そうなんだ……」

こう見えて俺は結構根に持つタイプなのだ。

そんな風に談笑しながら目的のフロアにたどり着くと、何人かの生徒をギャラリイに葛城とホリリンが対峙していた。うわ、通報したくなる絵面。

「君とは一度改めて話したいと思っていた。明日からは同じグループとして協力し合うことになるな」

「話したかった？先日会ったときは眼中になかったみたいだけどう？」

あー、あれなー。女の子が病気で弱ってるのを気づきもせず、ナチュラルに上から目線の対応してたやつなー。蓋開けたら試験結果があれだしとんだ道化だなー。

「正直今まではそうだった。しかし前の試験の驚異的な結果を見れば、注目しないわけにはいかないだろう。その立役者が君だと分かれば尚更だ」

多分だけど実際はホリリンじゃなく、俺の横で何食わぬ顔してつつ立つてるコージーなんだけどね。道化はやっぱりどこまで行っても道化か、可哀想に。

「これから先Cクラスに上がってくるようなことがあれば、我々は容赦なく君を叩くだろう」

「随分勝手な言い分ね。独走状態のAクラスが、Cに上がった程度で怖じ気づくというの？」

「二度優劣がついた位置から逆転したとなれば当然警戒する。それはBクラスやCクラスも同じだろう」

葛城は脅しのようなことを言いながら、僅かに残った派閥の人間と共にホリリンを睨む。やっぱり通報しよっかな………というか葛城、勝手なこと言ってるけどお前がクラスの方針を決められるのって、この試験がラストだからね？

「他クラスの意向まで、勝手に決めつけるのは感心しないな」

そんな酷い絵面に見かねたのか、Bクラスの神崎隆二………通称ザキちゃんが俺の横を通って堀北の隣に立つ。BクラスとDクラスは事実上同盟関係だし、自分達まで狙い撃ちすると勝手に決められるのはイラっとするよな、うん。

「無理して葛城に話を合わせる必要はないぞ」

「心配無用よ。見下されていたイメージを払拭できるのなら歓迎するわ」

「なるほど、これまでのぞんざいな扱いに納得がいつていなかったようだな。確かに俺のクラスではDクラスを蔑ろに扱う者もいる」

戸塚とか、戸塚とか、あとは戸塚とかだな。

「間違いなく無人島の一件ではその見方を少しだけ変えさせた。……だが一度偶然に成

功したくらいで、立場が並ぶと思わない方がいい」

「……どういう意味かしら」

「誰にでも一度は会心の出来というものはある。自らの戦略が偶々一度成功したくらいで調子に乗らない方がいい。クラスポイントの差は今も歴然だ」

なんだその小物感溢れる負け惜しみ甚だしい警告。なんかクラスメイトとして悲しくなってくるからやめてくんない？……第一ホリリンは欠片も調子に乗っていないだろうな。だってそもそも自分の戦略じゃないから。

「平田、大変なグループに巻き込まれたな」

「そうだね。葛城君に神崎君に龍園君……苦戦は必至だと思う」

「俺を呼んだかよ？」

平田の呟きにそう答えつつ、無駄に足音を大きく鳴らしながらホリリン達のもとへ歩みを進める。リユンケルと愉快的仲間達のご到着だ。

「クク。随分と雑魚が群れてるじゃねえか。俺も見学させてくれよ」

「……龍園か。お前もこの時間か？それとも偶然ここを歩いてるだけか？」

「残念だがお前らと同じ時間のようだな」

リユンケルに付き従っている3人の生徒は葛城の取り巻きとは違い、怯えきつていて静かで従順にしていた……全然愉快じゃねーな、うん。

「これから見世物でもするのか？『美女と野獣』ってタイトルでどうだよ。なあ本条？」
「うーん……陳腐で捻りが無いな。『防犯ブザーを持ち歩こう！』にしよう」

「クハハハツ、そいつはいいな！」

腹を抱えて笑うリユンケルに、しかし葛城は冷静に切り返す。

「ひとつだけわかったことがある。この組は学力の高い生徒が集められていると思っていたが、お前を見る限りそうではなさそうだ」

「学力だ？くだらねー。そんなものに何の価値がある？」

「それこそ残念な発言だ。学業の出来不出来は将来を左右する最も大切な要素だ。日本が学歴社会であることを知っているだろう」

「本気でそう思ってるなら悪足掻きせずさっさと坂柳に従えよ、3位の分際でしゃばりやがって。なあ本条？」

「そうだねまったく。無人島試験のときも1位の俺を従わせようとするし……3位の分際だね」

「あなたどつちの味方なの？」

「俺は有栖の味方だよ。つまりは有栖と敵対してる葛城の敵。どうーゆーあんだすたん？」

ホリリン含む何人かに睨まれたが、リユンケルはまだ有栖と敵対していないので敵で

はないのだ。葛城は敵。俺のことハブにしたしこいつは敵。絶対に敵。

「……俺はお前の非道さを許すつもりはない」

「あ？非道さ？身に覚えがねーなあ。具体的に教えてくれよ葛城」

「メアド聞いたのに教えてくれないこと」

「テメエには聞いてねえ。つーかまだ根に持ってたのかよそれ……」

「傷ついちゃったなー、橋本には教えてたのになー、なんで俺はダメなんだろうなー」

「ああもううっぜえな!?!仕方ねえから教えてやるよ、精々感謝しな!」

「わーいリユンケル太っ腹ー♪紫ロン毛ー♪」

「やっぱぶち殺すぞテメエ!」

「りゅ、龍園君が振り回されてる……」

「やはりAクラスを目指す上で一番厄介なのは本条君のようね……色んな意味で」

義憤に燃える葛城を放置してメアド交換に勤しむ俺達。さぞや屈辱的な扱いだろうが、正直俺もリユンケルも葛城など既に眼中に無いから仕方がないのだ。

「あつ、そうそうリユンケル。例の契約のことなんだけどね?」

「あ?いきなりなんだ?今さら取り消してくれなんて言っても——」

「坂柳派の分は俺が全部出すから」

「……本気で言ってるのか?」

「先生曰く俺、歴代で一番プライベートポイントを多く集めた生徒らしいよ?」

以前ホリリンから間接的に聞いた情報をひけらかすと、リUNKELは邪悪な笑みを浮かべる。

「ククツ、どうやらテメエは俺が想定した以上にできる奴のようだな。……ちようど懐も潤うことだし、坂柳共々引き摺り降ろしてからテメエを引き抜くのも面白そうだ」

「それは確かに面白そうだけど、果たして君が有栖に勝てるかな?」

「ほざけ、最後に勝つのは俺だ」

「そうかい……君達が挑んでくるのを楽しみにしてるよりUNKEL」
「精々首を洗って待ってるんだな」

さて、用件は全部済ませたし帰りますかね。

「待ちなさい本条君、契約とは何のこと?」

「話す義務はない。それじゃアディオス」

ホリリンを始め何か言いたげなメンバーを残して、俺は2階フロアから立ち去った。さて、そろそろ自習の時間だ。無人島試験中はどうしても肉体の鍛練に偏っちゃったから、残り7日間はひたすら勉強浸けで帳尻を合わせなくちゃ……え? クラスのミーティング? 知るかそんなもん。だって俺誘われてないもん。ハブにされたもん。

グループディスカッション①

『厳正なる調整の結果、あなたは優待者に選ばれませんでした。グループの一人として自覚を持って行動し試験に臨んでください。本日午後1時より試験を開始いたします。本試験は本日より3日間行われます。兎グループの方は2階兎部屋に集合して下さい』

特別試験1日目の朝8時。

学校から送られてきたメールによると、どうやら俺は優待者ではないらしい。隠しきれぬかどうかのスリルは味わえなくなったが、こればかりは仕方ない。

早々に朝食を済ませていた俺は船内を適当に散策しながら、昨日の説明で引っ掛かっている部分を頭の中で整理することに。

まずはグループの区別に十二支を選んだこと。12のグループを作るのだから十二支がちょうどよかった、と言われればそれまでだが……十二支を用いるためにグループを12にしたなら話は変わってくる。あくまで可能性なので囚われすぎるのはダメだが、頭の片隅には置いておこう。

次に、大前提としてAクラスからDクラスまでの関係性を無視しろ、とは言われたが

協力しろとは一言も言っていないかったこと。というか試験の内容からして協力させる気が欠片も無い。何故ならお手でつないで仲良しこよしで試験に取り組んでも、結果1では肝心のクラスポイントに一切影響が無いからだ。よってこの試験は誰よりも早く優待者を見破り仕留められるかが重要になってくる。ならば何故先生は何故あんなことを言ったのか……？

そして、優待者は学校側が公平かつ厳正に調整するということ。前の試験でもクラス間の公平さは極力徹底されていたので、おそらく優待者は各クラス毎に3人ずつと考えていいだろうけど、優待者の選び方もランダムではなく何か規則性があるだろう。だとしたらグループが十二支であることや、クラスの関係性を無視するという大前提は、その法則を解き明かすヒントになるかもしれない。

これらを手がかりをもとに考えれば優待者が誰なのか、いくつかの推理案が思い浮かぶが……ダメだ、手がかりが少な過ぎて全て憶測止まりだね。推理をおおよそ確定させるには最低でも自分のクラスの優待者を全員分、より確実にするためには他クラスの優待者をせめて1人は把握する必要があるかな。しかしいくらクラスメイトとはいえ自分が優待者だと打ち明けるのは少々抵抗があるだろう。今回の試験で有利なのは、平田君や卍解ちゃんのように自然と優待者の情報が集まってくる奴か、リユンケルのようにクラスメイトから強引に聞き出せる奴――

「ありや？噂をすれば……」

甲板にあるカフェで、ホリリンとコージーに絡んでいるリユンケルが見えた。引き連れている子は確か、伊吹ちゃんだったかな。ここからじゃちよつと遠いけど、好奇心には勝てないので近寄っていく。

「おーいリユンケルー、何してんのー？というか最近よく会うねー」

「本条……」

さつきまで凄く邪悪な笑みを浮かべながらホリリンに絡んでいたのに、俺の顔を見るや苛立った表情へと変わる。なんでや。

「テメエ、アドレス交換した途端くだらねえメール送つてくんじやねえよ」

「くだらないとは失敬な。昨日から俺と有栖で始めた日刊メール小説第2弾『浦島太郎的な話』を愚弄するか貴様」

「1話の冒頭で浦島太郎が死ぬ話は浦島太郎じゃねえだろうが」

「特別試験前に何してるのよあなた……」

「そうかあ……そこまで迷惑だったならごめんね、もう送るのやめるから」

「あ？おい、ふざけんなコラ。あれで打ち切られたら逆に気になるだろうが、始めたんなら責任持つて完結させろ。亀三郎は乙姫の魔の手から逃れられたのか？」

「しつかり熟読してるじゃないの。あとなんで乙姫がラスボスポジション？」

「……本条、気になるからその小説俺にも送ってくれないか？」

「綾小路君まで乗っからないの！」

「私も、ちよつと気になる……」

「伊吹さんあなたもなの!？」

ありやりや、さつきまでコーヒーを優雅に飲んでいたホリリンは、あつという間に気苦勞ポジションに成り下がっちゃった。真面目な人つてこういうとき損だよね。

「そろそろホリリンが気の毒だから話を戻すけど、こんな朝っぱらから何を揉めてたの？」

「別に揉めちゃいねえよ。ちよつとした親切心で忠告に来たのさ、Dクラスにいる陰で暗躍している奴に鈴音を通してな」

「……なるほど。どんな手を使ってでも突き止めて、無人島試験での借りを返してやるって宣戦布告したのか」

「クク、話が早くて助かるぜ」

だつてさコージ。

こんなまわりくどい言い回しをするってことは、リユンケルはまだコージだと気づいてないみたいだ。

「私に出し抜かれて悔しい気持ちはわかるけれど、どうしてそんなに執着するの？他に

も警戒する相手はいるでしょう？一之瀬さんや葛城君、噂に聞く坂柳さん……それにそこのおちやられた人とかね」

失敬な。

「葛城と一之瀬は既に実力が知れた。どっちも潰そうと思えばいつでも潰せる。……本条と坂柳は言わばメインディッシュだ。こんな早々に喰らうのはもったいねえ」

「なあコージ、俺メインディッシュらしいぞ。豆腐ハンバーグらしいぞ」

「チヨイスが渋いな」

「もう黙っててくれないかしら本条君。あなたがいると緊迫感というか、シリアスな空気が死滅するわ」

なんとも心外な言い分だったがりユンケルも同じ心境だったのか、なんとも微妙な表情で伊吹ちゃんとともに帰っていった。まったく失礼しちゃうぜ。

「なんかリユンケルに目をつけられちゃったみたいだけど、黒幕を暴かれないように頑張ってるね。俺は黙っててあげるから」

「その口ぶりからして、龍園君の言う裏の人物とやらの話を信じるようね」

「この前会長さんに勧誘されてた人でしょ？」

間髪入れずにそう答えると、ホリリンは僅かに動揺する素振りを見せる。あのとき君が生徒会室の外で盗み聞きしていたの、もしやバレてないと思った？そしてコージ、

君はほんと動じないね可愛くないなあ。

「……何の話かしら？」

「悪いけど俺に嘘や隠し事は通用しないよ。……まあそのせいで今回の試験が茶番に成り下がっちゃうんだけども」

「っーあなた、もしかして優待者も……!？」

「残念ながらすぐに見抜けるだろうね。でもまあ裏切らないから安心して。今回の試験で葛城には、落ちるところまで落ちてもらわないといけないからね」

そう言い残してその場を去る。

今回の試験じゃ、恐怖と暴力でクラスを支配しているリユンケルは圧倒的優位に立てる。他クラスの携帯を強引に見たりすれば退学だが、自分のクラスならグレーゾーンだ。優待者の情報が3人分も集まれば、おそらく優待者を選ぶ法則も解き明かせるだろう。

今回俺のやることは2つ……コージーが裏でどう動くのかを楽しみつつ、正解ちゃんがこの試験にどう取り組んでいくのか観察する。無人島試験では正直ガツカリさせられたから名誉挽回を期待してるよ、正解だけに。

昨日と寸分違わない昼食を済ませてから指定された場所……二階の兎と書かれたプレートがかけられた部屋に入ると、もう既に俺以外の11人全員が集まっていてクラス別に固まるように円形に並べられた椅子に座っていた。警戒やら敵意やら好意やらの視線を浴びつつ、俺は空いている席……確かBクラスの浜口君の隣に座る。程なくして試験開始の時刻を迎え、グループディスカッション開始のアナウンスが通達された。

「それじゃあ学校から指示されてる自己紹介から始めよつか。司会役の一之瀬帆波さん、どうぞ進行よろしくお願いしやす」

「にやつ!?!私!?!」

「そうだよ君だよ。ちよつと周り見てみ?仕切れそうなの君しかいないでしょうが」

「いや、率先して話を切り出した本条君も多分できるよね……」

「あのね、俺が仕切るの大好きだったらおとなしく有栖に従ってねーよ。もう四の五の言っていないでちやつちやと済ましちやおうよ」

「強引だなあ……でもまあ仕方ないか、本条君だし。それじゃあ任されたからにはしつかりやり遂げるよー!」

よし、丸投げ成功。わざわざ生徒会に志願するだけあって、やはり周りをまとめるのは嫌いじゃないらしい。しかしここで空気の読めないクラスメイト、町田が難色を示す。

「今さら自己紹介の必要があるのか？ したい奴だけやれば——」

「はい皆、今日からこいつのことはクソゲロって呼んでいいからね」

「はあ!? 本条お前っ！」

「いらん茶々いれんなバカモノ。自己紹介すらできない奴に人権なんて無いんだよ」

「流石にそこまで言わないけど……学校が指定した以上、町田君がペナルティを受けても文句は言えないよ？ それにもしかしたらグループ全体の責任になるかもしれないよね」

俺だけじゃなく一之瀬にも諭され町田はさすがごと引き下がり、そして始まる自己紹介タイム。無難な自己紹介（コージーのはひどかったが）が続く中、俺が自己紹介とともに全員のポケットからブルーシートが飛び出すマジックを披露したら凄く盛り上がった。

「さてと、これで学校からの言いつけは果たさせたことだし、これからどうしようか？ 強引に本条君に進行を任せられたけど、嫌なら遠慮せず言ってね」

そんなことを言われても、話し過ぎて余計なボロを出さないのが鉄則の今回の試験

で、進行役なんてやりたがる人などそういない。俺に丸投げされて嫌な顔一つしない卍解ちゃんの方がおかしいのだ。

「それじゃあ私が進めるけど、まず皆に聞きたいことがあるから質問させてもらうね。私としては皆で試験をクリアする……つまり結果1を追い求めるのが最善だと思うんだけど、みんなはどう思ってるのかな？」

はいダウト。

普段嘘をつかないからか凄くわかりやすい。もつとも態度にはいつさい出してないから、俺以外にはそうそうバレないと思うが。

周りのほとんどが卍解ちゃんに同意する傍ら、俺は彼女達Bクラスの方針について分析する。

結果1が最善というのが嘘だとしたら卍解ちゃん……いや、Bクラスが狙っているのは結果3か結果4。やはり結果1では大量のプラベートポイントが手に入るもの、下克上に必要となるクラスポイントには一切影響が無い。プラベートポイントに比較的结果3を狙うとなれば、これまで彼女が築いた清廉潔白な善人というイメージは崩壊する。それでは下手したら彼女の人徳で成り立っているBクラスの結末にも亀裂が入りかねないので、消去法で卍解ちゃんにとっての最善は結果4……もつと具体的に言えば

AクラスかCクラス、できればAクラスに裏切らせて外させることだろうね。……だけども果たしてそう上手くいくかな？

「その質問はするくないか？優待者でないなら報酬を期待するのは当然だ。それに堂々と裏切ると宣言する奴もいないだろう。これじゃまるで優待者であることを打ち明けないければ悪いと言っているようなものだ」

「試験としては妥当な質問じゃないですか？嫌なら答えなければいいだけです」

浜口君の切り返しにも町田は動じない。というか昨日葛城にあれこれ吹き込まれたのだとしたら、むしろここまでは想定内だろう。

「確かにその通りだな。なら俺達Aクラスは沈黙させてもらうことにする」

町田は腕を組んで拒否を示し、森重もそれにならない沈黙を決め込む姿勢のようだ。今回の試験も葛城が指揮を取るから、実は坂柳派だった森重が従うことは別におかしくない。しかし葛城め、今の崖っぷちの状況でも慎重かつ堅実な戦術を優先するとは……リーダーの座を死守することよりもクラスを第一に考えるか。そこまでいくと呆れを通り越して敬服するぜ。

……俺？誰が従うかよそんなつまらねー作戦。くだいようだけどそもそも俺そんな作戦聞かされてないしー。どつかのハゲにミーティングからハブられたしー。

グループディスカッション②

「あちゃー……ちよい責めすぎた質問だったかな？」

町田達のとった話し合い断固拒否の姿勢には、流石の正解ちゃんも思わず苦笑い。

「いえ、一之瀬さんの質問は至極普通かと。ただ想像以上に彼らの警戒心が強かっただけです。……この試験は話し合うことが解決に繋がる唯一の道でしょう。町田君達がそうして知らぬ存ぜぬを貫き通されては、最悪Aクラス抜きで話し合うことになりますよ」

「そうなると不本意だけど、場合によつては最終的に多数決になるかな。必然的に非協力的だった人が疑われるだろうし、たとえば君達の中から当てずっぽうで優待者を指名されても納得できる？」

ふむ、中々お上手に主導権を握りつつあるな。第三者が見ればどうしたって、非協力的な態度をとる町田達の心象が悪く見えるだろう。正解ちゃんの人望は、こういった乱戦も十分に力を発揮するらしい。でも残念……

「脅しのつもりか？ならば逆に聞かせてもらおうが、話し合いで優待者が誰か突き止めら

れると本気で思ってるのか？」

「他に方法があるなら教えてほしいな」

「ある。この試験を確実に、かつ簡単にプラスでクリアする方法……それは最初から最後まで話し合いを持たないことだ」

Aクラスは……というか葛城はBクラス君達が一番歓迎しないであろう方針を取るみたいだよ。突然の試験放棄宣言に、卍解ちゃんより先に浜口君が苦言を呈する。

「なかなかユニークな意見ですね。誰かもわからない優待者に勝ち逃げを許すんですか？これじゃ優待者がAクラスにいるの思われても仕方ありませんよ」

「どのクラスに優待者がいるかなど関係ない。全てのグループで話し合いを持たなければ、全クラスが平等に勝利できる。それが葛城さんの考えだ」

「葛城君の……？なるほど、ね」

葛城の名前を出されてようやく答えに辿り着いたのか、それとも危惧していたことが現実になってしまったのか、どちらにせよ歓迎すべきじゃない葛城の考えに卍解ちゃんは難しい顔になる。その一方、町田は理解できてないであろう生徒達にも説明し始める。

「この試験には4通りの結果しかない。その中で絶対に避けたいのは間違いない、裏切り者を生み出すことだ。裏切り者が正解しようと失敗しようと、必ずどれかの陣営に損

害が出るからな。……では逆に、それ以外の答えの場合はどうなる？」

町田は適当に指名するように、Dクラスの眼鏡をかけた男子生徒……確か幸村君に答えを求める。

「……マイナス要素が存在しない、と言うことか？」

「そうだ、残りの結果1と2にはデメリットがない。クラスポイントが詰まることも開くこともないし、大量のプライベートポイントが手に入り全陣営が等しく潤う。学校側には負担が無いのだから、下手に話し合って過ちを犯す方がよほど危険だ」

「ですが優待者がどこかのクラスに極端に偏っていたら、得られるプライベートポイントに大きな格差が生じますが？」

「それはない。試験前に公平性を嫌というほど強調していたし、前の無人島試験でも公平さは徹底して保たれていただろ？試験スタート時点で格差が出るなどありえない」

浜口君が反論するも町田は間髪いれず否定する。一見穴の無い完璧な理論に、周りも少しずつ賛同の声が上がる。葛城が背後にいる以上彼では力不足だ。曲がりなりにもこれまで有栖に張り合ってきた男に、いち生徒が理詰めに対抗できる筈もない。……奴の考えを切り崩せるとしたら、多分君だけだぜ？

「ほらほら正解ちゃん、さつさと反論しちやいなよ。このままだと多数決で町田……というか葛城の案が通つちやうぜ？」

「Aクラスの本条君が急かすのもどうかと思うけど、わかったよ。……町田君の考えは間違っていないと思うよ。でもよく考えたらそれはAクラスだから提案できる作戦じゃないかなって思うんだよね。全クラスに平等なメリットがあるってことは、下のクラスにとつては限られたチャンスを棒に振るってことなんじゃないかな？」

「それは……」

「卒業までに特別試験が何回行われるかわからないけど、その度にそんな作戦を続けていたら、クラスの位置もずつと変わらないうってことだよ」

その指摘に、さつきまで流されかけていた生徒達の顔が段々と強ばっていく。

そう、大前提としてこの学校はAクラスのみが勝者で、それ以外のクラスは全て敗者だ。どれだけ自クラスにメリットがあろうが、敵対するクラスもそれを享受するのなら差し引きプラマイゼロにしかない。下克上のチャンスを棒に振る行為と同義だ。

少し考えれば実に単純な話だが、簡単かつ確実にメリットのみ享受できると言われれば人は釣られるものだ。でなければ詐欺被害はあれほど拡大していかない。

「たとえ確実な成果が得られるとしても、私は貴重なチャンスを棒に振れないよ」

「僕達も一之瀬さんに同意見です」

「……言いたいことはわかったが、お前は結果1が最善だと言ったばかりだろ。それでは均等に大金を得るだけで、お前の望む結果にはならないぞ」

「それがそうでもないよ。このグループはCクラスとDクラスの人数が1人多い。結果1でクリアすれば上位クラスとの差を確実に詰められるってことじゃない?」

「自己犠牲を払って下位クラスに得をさせると? お前達に何のメリットがある?」

「そうしないと君達に逃げ切りを許しちゃうかもしれないからね。もし君達の中に優待者がいたら厄介極まりないし」

こんなこと言ってるが実際狙ってるのは、俺達の中に優待者がいたらCかDに指名させての結果3か、それ以外なら俺達に指名を外させての結果4なんだよね。だからこそ正解ちゃん達からすれば、Aクラスが結果2狙いで話し合いを拒否することは非常に困るわけだ。

「……先に言っておくが、すでにAクラスの方針は固まっている。お前達が結束して話し合うなら好きにしろ」

そう言って町田は立ち上がり部屋の隅に移動し森重もそれに続く。多分どのグループでもAクラスの生徒は同じ行動をしていることだろうね。

「さーてと、どうしたもんかなー。あつ、本条君は話し合いに加わってくれとを考えていいのかな?」

「あのね正解ちゃん、葛城のつまらねーチキン戦法に俺が賛同するわけ無いでしょ。有栖が不参加な以上坂柳派の大半は葛城の指示に従うしかないけど、あいつじゃ俺を従え

るには力量不足だ。自分より頭の悪い指揮官なんて従う価値もない」

町田が隅から敵意を飛ばしてくるが知ったことじゃない。格下を格下と言って何が悪い。

「力量不足、か……。ねえ本条君、もし坂柳さんならどういう方針でこの試験に臨むのかな？」

「まず最初にどう上手くやれば6000c p獲得できるかを考えるだろうね、うん」
「う、噂で聞いた通り葛城君と対極だね……」

有栖は葛城のようにいちいちリスクなど気にしない。今回の試験であいつにとつて最悪の展開は、先んじて他クラスに攻撃されて敗北することだ。試験の性質上リユンケルが凄く有利であることはすぐ見抜くだろうし、手がかりを掴み次第リスクなど度外視して殺られる前に殺るだろう。「石橋を叩いて渡らない」のが葛城、「石橋を爆撃機で消し飛ばす」のが有栖だ。

「しかしどうするんだ？ 本条以外のAクラスが参加しないんじや、確実に優待者を見つけるのは無理なんじゃないのか」

Aクラスの方針に焦った幸村が、問い詰めるように叩解ちゃんに文句を言う。別にいいけど君、さつきまで町田の甘言にあっさり懐柔されかけてたのに態度でかいね。

「もし私達の中に優待者がいるならそれでいいけど、あの2人のどちらかが優待者なら、

協力してどうにか突き止めないとね。……でもまあ試験は始まったばかりだし、これから対話でどうすればいいかゆっくり決めていけばいいんじゃないかな」

「……本条、Aクラスが話し合いに参加するようにお前から説得できないのか?」

「逆に聞くけどね幸村君。君がミスター……あ、高円寺のことね……に何か指図されたとして、おとなしくそれに従うのかい?」

こちらに矛先を変えた幸村君だったが、俺の指摘に思わず黙り込んでしまう。普段好き勝手している奴にあれこれ命令されても、よほど切羽詰まってない限りふざけるなどしか思わないだろうね。

「……ねえ軽井沢さんだっけ。ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

話し合いが難航し始めた途端Cクラスの女子生徒、たしか眞鍋ちゃんがDクラスの女子生徒、たしか軽井沢ちゃんに話しかける。思わぬ接触到に携帯を弄っていた軽井沢ちゃんは面食らい気味に顔を上げる。

「……なによ?」

「もしかしてなんだけど……夏休み前にリカと揉めた?」

「は?リカって誰よ?」

眞鍋ちゃん曰く、Cクラスの諸藤ちゃんが以前軽井沢ちゃんらしき人に意地悪されたと聞いたので、それが本当なら謝って欲しいとのことだが、表面上はそんなこと知らぬ

存ぜぬという態度で携帯弄りを再開する軽井沢ちゃん。

……うん、心当たりがあるみたいだね。

「……リカに確認してもらうけどいいよね？ 軽井沢さんじゃないなら問題ないでしょ」

その態度に苛立った眞鍋ちゃんも携帯のカメラを向けるも、軽井沢ちゃんは反射的にそれを手で払いのけた。結構強く飛ばしたなあ、壊れたらどうするんだろ。

「何すんによ!？」

「勝手にあたしを撮らないでよ。別人だって言ってるでしょ」

お互い一步も譲らず、しかもどちらの主張も一定の理がある。だから争い事が嫌いな正解ちゃんも迂闊に仲裁に入れない。

と、ここでCクラスの生徒二人が、眞鍋ちゃんに加勢するように軽井沢ちゃんへ詰め寄った。

「な、なによ……あたしが悪いっていうの?」

「別人だっていうならムキになって否定しなくてもいいじゃない。撮らせてよね」
「嫌だつてば……」

ふむ……いつも何かに怯えてる子だと思ってたけど、こうして誰かに詰め寄せられると特に顕著になるな。それからコージー、ここ来たときからずっと軽井沢ちゃんに意識がいつてるけどどうしたのさ?もしかして片思い……じゃないね見た感じ明らかに。な

んというか……家電製品の機能を確かめてるかのような無機質さを感じるね。

「後ろめたいことがあるから否定してるんじゃないの？とにかく撮らせてもらうから」
「嫌だつてば……ねえ本条君、この子に何か言つてあげてよ」

おつとここで俺に助けを求めに来たか。……いやいや彼氏持ちが気安く男の腕とか組んじやダメでしょ。これ有栖に知られたら破滅一直線だよ君。あの子意外と焼き餅焼きだから。

「はいはい君達喧嘩しない。一応今特別試験中ですよー？」

「ほ、本条君には関係ないでしょ……」

「関係あるなしは重要じゃないよ。助けを求められて特に断る理由が無ければ、とりあえず手を差し伸べるのが俺だし。友達思いなのは結構だけどさ、肖像権を侵害していい免罪符にはならないよ？」

「うっ、それは……」

「それに若いうちから横着しちやダメでしょ、ちゃんと本人連れてきて確認しなさいな」
真鍋ちゃんはまだ納得していない様子だったが、俺を理詰めで説き伏せる自信が無かったのか、おとなしく仲間と共に引き下がった。

「変な言いがかりやめてよね、まったく。」

……ありがとう本条君」

「それは別に構わないけどさ、もし本当に君が犯人だったらちゃんと謝るんだよー？」
「大丈夫だって、絶対私じゃないし」

ごめんね、俺が嘘とか隠し事を不条理に見抜けちゃう人間で。悠々と席に戻る軽井沢ちゃんに内心謝っておく。彼女が非を認めようとしないうちや、ずっと何かに怯えながらも無理に高圧的に振る舞う理由は、これまでの経験から推測するのはそう難しい。

俺が意味も無く軽井沢ちゃんの抱えるものをこっさり暴き出していると、何やら申し訳なさそうに正解ちゃんが声をかけてくる。

「仲裁を任せちゃってごめんね本条君」

「別に構わないってば。それより結局話し合いはどうすんの？」

「うーん……いざ話し合うとなると、難しいね」

「それじゃあ丁度良いテーマがあるよ」

「え？……あ、うん。何かな？」

「はい、ではこれより第一回！進路希望調査を始めたいと思いまーす！」

「……………え？」

グループ全員が呆気にとられる中、俺はお構い無しに変なテンションで話を進める。今からすることは何をおいても勢いが大事なので、いちいち立ち止まってられないので

す。

「この先俺らAクラスを見事引きずり降ろし、負け犬クラス計120名の犠牲を払いながら掴んだ栄光の下、君達が将来いつたいたいどんなことをしたいか聞いていきたいと思えます」

「何か嫌な言い方だなそれ……」

「甘いね幸村君。人生とは弱肉強食、人は誰しも何かの犠牲の上で生きてくものだよ。だいたい皆食事前に決まって『いただきます』とか言うけどさ、それを誰に向かつて言うべきかとか何一つ考えてないでしょ多分。これからは摘み取られた植物や屠殺された家畜とかをちゃんと想像しながら言わなきゃダメだよ?」

「いや食欲失せるわ!?!」

「はい、ギャーギャーうるさい眼鏡は放っておいてじゃんじゃん話進めますねー。それではまず前回の試験で見事1位に輝いたDクラスの皆さんから聞いていきましよう! トップバッターはコージ、君に決めた!」

「オレ……!?!」

突然指名されたピカチュウ……コージは、珍しいことに凄く動揺していた。生徒会長に殴られかけても平然としてたのね。

「え、えーと……とりあえず今は高校生活を平穏無事に過ごすことしか考えてないな」

「つまらん！0点！はい次、軽井沢ちゃん！」

「れっ……!?」

何やらシヨックを受けた様子のコージだが、構うことなくノンストップで話を進める。

「えと、何か楽しい仕事をしたいかな……」

「こけし職人ね、OK。はい次、幸村君！」

「それ楽しいの!?ねえ!?」

何か言ってるが無視無視。

「くだらん。何故そんなことをお前に話さなければなら——」

「じゃあ眼鏡屋さんに決定」

「おい!?」

「はい外村君！」

「ひえっ!?せ、拙者はパソコンが得意なので、それを扱う仕事か——」

「なるほど凄腕ハッカーか」

「ええっ!?……いやしかし、それも中々格好良いでござるな！」

「流石にこの学校もね、犯罪者の支援はしてくれないだろうから諦めてね」

「自分で振つといてそれはあんまりではござらんかっ!?」

「じゃあ次はBクラス！はい、正解ちゃんは何アテナダントになりたいのかな？」

「キャビンアテンダント以外の選択肢を潰された!?え、えーと……保育園の先生、とかかな」

「意外性ゼロ！30点！」

「30点!?!」

「じゃあ次、浜口君！君は優待者であることを守り通すでいいのかな？」

「いや優待者は僕じゃないで——」

「?!?!……?!?!」

浜口君は思わず咄嗟に口もとを手で押さえてしまい、すぐにそのことを後悔するよう顔を歪めた。とりあえずBクラスの人達はもうちよつと駆け引きの勉強をしようか。ポロつと言っちゃつても堂々としていれば、五分五分の確率で抑えられたのに。そんな風に狼狽えてちや誰も君を優待者だとは思わないよ。

ほとんどの人は一度浜口君に視線をやった後、ゆつくりと俺に向かって警戒と畏怖が混ざった視線を向ける。

「……とまあこんな風に、時間をかけて少しずつ優待者が誰か絞っていけばいいんじゃないかね？それじゃあ主導権は返すよ正解ちゃん」

「……にやはは。わかつてたけど、やっぱり一筋縄ではいかないよね」

グループディスカッション③

結局あの後には皆警戒しまくったせいで、ろくに進展も無いまま1回目のグループディスカッションは終了した。その後空き時間を利用して勉強に励んでいたが、ルームメイトの橋本からカジノに誘われたので同行することに。

「はいこれ全部6番」

今日もギャラリーの注目を浴びながらポーカーで荒稼ぎしてから、稼ぎのほとんどをルーレットに突っ込む。そしていつものようにルーレットの中を転がる玉がどこに止まるのかを確認もせず、俺は分けたチップをプライベートポイントに換える。橋本がなんか名残惜しそうな顔をしているが、俺が稼いだ分をどう溶かそうが俺の勝手だ。というかお前今日結構負けてたんだから自分の心配だけしてろ。

「つくづく思うが、ほんとギャンブル引くほど強いなお前。……そういやずつと姫様と勝負で引き分けてきたって前言ってたけど、ポーカーとかでも互角なのか？」

「ポーカーなんかそもそも勝負に含まないよ。俺も有栖も勝利に対してどこまでも潔癖だからね、運に助けられた勝利なんて何の価値も見出だせない。……それに俺は、勝負

を運で決めるなんて八百長の次に興醒めだと考えているしね」

「ふーん……まあそれはそれとして本条、優待者が誰かわかったのか？」

「ああ、Dクラスの軽井沢ちゃんだったよ。俺がちよつと周りに探りいれたらもの凄く動揺してたし」

表面上はどうか隠しきれていたが、『優待者』って単語を聞きたび逐一反応していたから間違いない。……やつば問答無用過ぎてシンキングもクソもねーよ。

「……一応聞くけど指名しないのか？」

「わかっているなら聞くなよ。今回限りで葛城派を解体するため、Aクラスには完膚無きまでに負けてもらわないと。だから残りの4回はもう、正解ちゃんがどうするか高みの見物だな」

それとコージも……と心の中で付け加えておく。こいつがコージのこと知ったら絶対に粉かけに行くだろうし、ここは友達のためにも絶対に黙っておくべきだろう。「一之瀬がどうするか、ね。それはちよつと難しいんじゃないか？町田が葛城の言い分けを破ると思えないし、森重だつてよほどの確証が無ければ裏切らないだろ」

「かといつてその余程の確証……例えば学校から送られてきた、その子が優待者であることを示すメールを見せたりすれば、Aクラスが勝つてそれで終わりだよね」

Aクラス以外が優待者のときの一之瀬ちゃん達にとっての理想は、Aクラスの誰かが

裏切りかつその指名が外す結果4だ。しかしそのためには葛城が提唱する全グループ結果2作戦をどうにかする必要がある。森重は坂柳派なので優待者である確実な証拠を提示されれば裏切るだろうが、それでは本末転倒だ。

「だったら卍解ちゃん達が取るべき手段は1つ。偽の優待者を用意してそれを信じ込ませることだよ」

「……いや、それこそ無理な話だろ。優待者であることを示す確実な証拠はメールだけだし、そのメールに手を加えると退学だぞ?」

「そこを何とかするのが彼女の腕の見せどころだよ。それで躓いてるようじゃ有栖の遊び相手は務まらない」

この2週間さぞや退屈していただろうからな、葛城派が没落するだけでは溜飲を下げないかもしれない。ここは何かしら手土産を用意しておくべきだろう。

「はいはい、相変わらず姫様思いなようで何よりだよ。まったく、なんでさっさとくつつかないのかねえ……」

「お前には死んでもわからないよ多分。……さて、そろそろ時間だね。お前も猿グループで頑張れよ、多分ミスターが勝つだろうけど」

あいつなら優待者が誰か推察するのは容易いだろうし、失敗したときにクラスが負うリスクなど屁とも思わないだろう。

「はつきり言ってくれるなあ……ところで本条、今回の試験どこが勝つと思う?」

「十中八九リユンケル達Cクラスだな。少なくともAクラスは確実に勝てないだろうよ」

後はリユンケルがどう動くかだね。なんかやたらとDクラスに執着してるし、無人島試験のリベンジがてら集中攻撃してもおかしくはない。

そして本日二回目のグループディスカッションが始まるが、相変わらず町田と森重は話し合いに一切参加しようとはせず、他のクラスの生徒達も情報を引き出されるのを恐れてやたらと警戒している。このままじゃつまらねーグダグダになりそうだね、まったく仕方がない……

「第一回! ジェンガバトル!」

「「……はい?」」

ポカンとする生徒達を尻目に、俺は部屋の中心に組み上げられたジェンガを設置する。

「話し合いの場はあと5回もあるんだし、とりあえず話し合いは適当に遊びを挟みながらにしようぜ」

「あの本条君……今どこから出したの？その組み上がったジエンガ」

「手品だ」

「いや、流石にそれは無理が——」

「手品だ」

何やら納得できなさげな冗解ちやんだが、実際にできてしまったのだから仕方がない。

「いきなり何をふざけたことを……今は特別試験の最中だぞ！ジエンガなどやっている場合ではない！」

「別にふざけてはいないよ幸村君。この中には将来どこかの企業に就職するのではなく、自分で会社を立ち上げ経営者になる奴もいるかもしれない。そのとき必要になってくる組織運営をはかる思考を養うのに、ジエンガは最適な遊びなのだよ」

「何……？」

怪訝そうな表情の幸村君に対し、俺はジエンガの組み木から一本抜き出す。

「組織運営に重要なのはジエンガと同じバランス感覚だ。役立たずの部下を左遷して窓際に送り……」

そしてそれを一番上に重ねる。

「しかし思い詰めないように、屋上で缶コーヒーでも奢ってちゃんとフォローしておく。……だいたいこれだけ覚えておけば組織は回る」

「会社経営舐めてるだろお前!? そんな簡単な理論で回るか!」

「まあ四の五の言わずやってみようや。それに、きみも他に代替案があるわけでも無いんでしょ?」

「む……」

「にははは、そうだね。本条君の言う通り、気軽に遊びながら話し合うのも悪くないかな」

俺の意見に卍解ちやんが賛同し、浜口君と別府君もそれに追従する。そして他の生徒も俺が口八丁に言いくるめて、最終的に町田と森重以外のジエンガに参加することになった。

「でも話し合いなんかして意味あんの? どう考えても優待者がズルすぎるっていうか、この試験難しすぎるって」

そんなズルすぎる優待者こと軽井沢ちゃんが一つ抜き出し、そのまま一番上に置く。

「言いたいことはわかるよ軽井沢さん。でもそれは考え方次第じゃないかな。1日2時間集まるって言ってもお喋りや携帯を触ったりも自由だし、授業のように息苦しくもないでしょ?」

「正解ちゃんも同じように抜き出して上に乗せる。その際若干塔がグラついた。」

「それはまあ……楽しいけどさ」

「でしょ？だからもつと気楽に話そうよ。殻に閉じ籠つちや苦しいと思うよ？現に町田くん達ずつと険しい表情のままだし」

二人の会話を聞き流しながら、俺はちよつとしたお茶目でわざと不安定になるように抜き出して上に置く。そんな中、正解ちゃんの話聞いていた町田が失笑する。

「優待者を見つけるなんて出来るはずないだろう。本条の使った手段も一回きりでもう通用しない。……それに、もしかしたらBクラスの中に優待者がいるかもな。その二人の話を用いできるのか？」

町田が正解ちゃんに揺さぶりをかける中、コージーは俺と同じく敢えてバランスが不安定になるようにジェンガを抜き出し上に置く。君も中々悪よのう。

「綾小路殿!?なんてことするでござるか!」

「それは町田君達にも言えるんじゃない？仲間を信用できる？」

「……当然だ。それに——」

「うぐう……どこを抜き出しても倒れそうな予感がピンピンするでござる……!」

「俺達Aクラスが優待者に拘る理由などない。毎月10万以上振り込まれるのに、たかが50万に固執すると思うか？」

「まったく仕方ないなー外村君は。ほら、ここを抜いてごらん?」

「そうかな?この特殊な学校じゃ、いくらポイントがあつたつて困らないと思うけど」

「むう、かたじけないでござる本条殿!」

「バカバカしい。ま、精々無駄な足掻きを——」

ガラガラガツシヤアアアンツ!!

「ぬうわあああああああ!!」

「そこ抜くと100パー崩れる☆」

「はかつたな本条殿おとおおとおおっ!」

「うるつつつさいなお前ら!?!今大事な話してるんだから静かにしろ!」

「ほうほう、大事な話……ねえ?ふーむ、葛城の指示で話し合いを拒否した奴の言葉とは

思えないなあ」

「っ!?!……くくくっ!!」

挑発を交えた俺の指摘に顔を真っ赤にした町田は、再び携帯に目を落として拒絶の意を示す。

「ありやりや、自分の殻に閉じ籠つちやつた。正解ちゃん邪魔しちゃつたかな?」

「……いや、そんなことないよ。むしろ本条君のおかげで糸口も見えてきたかもね」

なんかちよつと格好つけてるとこ悪いんだけどさ……あつさり主導権取られ過ぎや

しませんかね。しつかりしてくれよまったくもう。

その後は何故かひたすら幸村君がジエンガを崩し続け、あつという間に1時間が過ぎていった。最初は不満げだったのに後半凄いいムキになってたね君。

……それにしても眞鍋ちゃん、軽井沢ちゃんに対する不満とか怒りが収まるどころか悪化してたなあ。このまま何事も無けりやいいけど。

午前11時半。船外のデッキにて久し振りに天体観測を楽しんでいたら、学校側からメールが届いた。

『猿グループの試験が終了いたしました。猿グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動して下さい』

うむ、まず間違いなくミスターが裏切ったのだろう。あの自由人が何度も無理矢理拘束されるのを許容する筈がない。やっぱ橋本程度じゃミスターの相手は荷が重かったか……。

「……本条」

「んあ？葛城？」

これはまた予想外な人物。この船から見える幻想的な満天の星空がまるで似合わない、存在からしてロマンの欠片もない無骨で無粋な男がいったい俺に何のようだ？

「どうしたんだよ？お前の方針に従わないことへの苦情は受け付けねーぞ。そもそも俺ミーティングでハブられたし」

「特に用があるわけではない。お前が俺の指示に従わないことはもう割り切っている。ミーティングに呼ばなかったのはそのためだ。不快に思っていたなら謝ろう」

「ふむ、そういうことなら許してやろう。……せつかくだから聞いておきたいんだけど、なんでこんな戦略で臨む？」

「当然Aクラスにとつて最善の選択をしたまでだ。余計なリスクを廃し、堅実に勝ちに行く……それが俺のやり方だ」

嘘偽りなくそう思ってるようだが……いやいやいや。こいつ自分が置かれてる状況ちゃんとわかっているのか？それとも崖際に追い詰められてなお勝負ができない臆病者か？どちらにせよガツカリだが……

「あのね葛城、今の君の立場ちゃんとわかってんの？無人島の大敗とリユンケルとの契約のせいで君の派閥はもう虫の息だよ？この試験を無難に乗り越えたとしても、このま

まじや2学期から有栖に主導権を握られるだろうね。ここはリスクを伴ってでも勝負に出るべき——」

「俺は」

ちよつとした老婆心から諫めようとした俺の話を、葛城は手で制止しながら遮った。「クラスに降りかかるリスクを気にも留めない坂柳を批判し、そんな奴の方針に反対する姿勢を貫いてここまでできた。自分が追い込まれたからといって無鉄砲にリスクのある勝負に打って出ることとは、これまで俺を信じてついてきてくれた者への裏切りであるし、何より……俺の信念を否定することに他ならない」

……へえ。

「この前の無人島試験で、遺憾ながら龍園にそれを気づかされた。クラスのリーダーを坂柳に明け渡すのは、俺の愚かさが招いたことだと甘んじて受け入れよう。だからといってあの女に好き放題させるつもりはないがな。……遅かれ早かれ一之瀬あたりが説得を持ちかけてくるだろうが、意見を変えるつもりはない。クラスを任された者として、俺は俺の責務を全うする」

派閥争いで有栖に敗北したことを受け入れながらも、この男の闘志は衰えるどころかさらに増していた。要は有栖がリーダーになることを黙認しつつも、その過激な行動に対するストッパーになるということだろう。……全てはAクラスの生徒達のために。

「己の信念を貫き通す、か。堅実な手段ばかり選ぶつまらねー男だと思っていたが……中々頑固な男じゃないか。そういう不器用な生き方は嫌いじゃないぜ」

「お前に好かれたところでどうだという話だが……まあ素直に受け取っておこう」

「それじゃニツクネームはいつたい何にしようかなー?」

「は……?」

「だからニツクネームだよ。有象無象からアダ名呼びに昇格させてやるんだ、ありがたく頂戴するがいい」

「いや別に要らないんだがー」

「ふーむ……よし、アデランスに決定!」

「おい、どこを見てそう決めた?」

「お前の名前と頭」

まあ流石にそれは下手したら名誉毀損に該当しかねないので、紆余曲折の前を削って「ランス」に決定した。経緯を知らなければやたら格好いいな。

さて、ランスの考えは中々悪くない。この試験を無難に乗り越え大量のプライベートポイントを確認すれば、こちらに流れてかけている元葛城派の生徒も何人かは考えを改めるだろうし、派閥が縮小しようがある程度の人数を確保できれば、有栖も好き放題独

裁は行えなくなるかもしれない。それでも有栖主導であるためランスが仕切るよりは攻撃的になるだろうが、そのくらいはランスも妥協の範囲内だろう。

……問題があるとすれば、Aクラスがこのまま試験を無難に乗り越えられる可能性が、限りなく0なことだけだろうね。ごめんねランス、派閥の解体はもう決定事項なんだ。

グループデイスカッション④

特別試験試験2日目。昨日と同じようにマスミンと昼食を済ませた後、グループデイスカッションの場へと向かう。特に理由は無いがなんか気分が良かったので、コナンのメインテーマでも口ずさみながら。

「暢気なもんだな。つか縁起でもねえことしてんじやねえよ、船が爆発でもしたらどうするつもりだ？」

いつものように配下を連れたリUNKELが、呆れたように声をかけてきた。

「だとしたら犯人は君だね。なんかもう見るからに悪役だし」

「そういう場合明らかに怪しいような奴は逆にシロで、実はいつも鈴音という金魚の糞みたいな奴が犯人なんだよ」

うん、大正解。

リUNKEL本人はそんなつもりないかもしれないけど、実に見事な名推理だ。というか悪人面だって自覚あるんだね君。

「どうだ？優待者は絞り込めたかよ？」

「まあね。そういう君は？」

「俺の方はまだサツパリだなあ。俺のグループでどいつが優待者だと思うか、よかったら教えてくれよ？」

「別に構わないけどさ、そもそも君のグループには誰がいたっけ？」

「……知ってはいたが本当に今回の試験も流すみてえだな。どうりで教師共がお前を『竜』から外すわけだぜ」

そう言つてリユンケルは携帯をカチャカチャと弄つてから手渡してくる。画面には『竜』グループのメンバーがまとめられていた。

Aクラス：葛城康平 西川亮子 的場信二 矢野小春

Bクラス：安藤紗代 神崎隆二 津辺仁美

Cクラス：小田巧海 鈴木英俊 園田正志 龍園翔

Dクラス：榊田桔梗 平田洋介 堀北鈴音

わーお、とてもじゃないが無作為に選んだとは思えない人選。正解ちゃんが混じつてないのが不自然だけど、多分俺か、気づいているならコージの情報収集目的かね。星乃宮先生ってウチの担任と違って担当するクラスに肩入れしてるらしいし。……まあ

それはともかく、このグループの優待者はというと、

「櫛田ちゃんかな」

「……クク、どうやらハツタリじゃないみたいだな。でもいいのか？他クラスの俺に教えちまってよ」

「そりゃ君が本当に優待者を暴いてなかったら俺も拒否してたよ。俺の予想を根拠もなく信じたってことは、要はそういうことでしょ」

正直櫛田ちゃんじゃない可能性が1億分の1ぐらいあったが、リUNKELの反応から俺の推測した優待者の法則は正解だと確信した。

「……つくづくふざけた野郎だ。どうやったかは知らねえが、お前も優待者の法則を掴んでるらしい。だというのに試験を放棄するなんざイカれてるぜ」

「それはリUNKELもだろ？君こそ優待者の法則を掴んだなら、さっさとケリ付けて一人勝ちすりやいいのに」

「俺には俺のやり方があるんだよ。まあこのままテメエが何もしなきゃ、Aクラスはめでたく屈辱的な大敗を迎えるだろうな」

「へえ、そりゃ大変だ。葛城派も年貢の納めどきかね、可哀想に」

「可哀想の一言で片付けるあたり、お前も大概ロクデナシだな」

仕方ないじゃないか、これは優先順位の問題だ。有栖とランスが対立するなら俺は有

栖の肩を持つ……ただそれだけの話だ。

そして迎えた3回目の話し合い。

「第1回！クラス対抗ミルクパズルタイムアタ……ック！」

「あ、あはは……」

「……もう何も言うまい」

開始早々いつものように唐突にテーマを切り出す。そろそろ馴れてきたのか誰も異論を挟まなかった。それぞれに100ピースの真っ白なジグソーパズルが入った箱と、パズルを嵌め込むフレームを配る。

「今回はそれぞれのクラスの結束力が試される。それなら先の無人島試験で結果が出た

じゃないかと反論するかもしれないが、それぞれのクラスに頼れるリーダーがいたからこそまとまれたという可能性もある」

「Dクラス勝つには勝ったが、正直全然まとまりがなかったんだが……」

「しかし今回試されるのは、急造メンバーでも上手く連携を取れるかということさ。まあリーダーポジの卍解ちゃんがいるBクラスが圧倒的優位だけど、そこはまあうん、頑張つてね」

「急に雑だな!」

幸村君の指摘はもつともだが、だからといって卍解ちゃんを除け者にしたりしたらBクラスに恨まれそうだ。そんな中、当の卍解ちゃんは今回も隅っこで話し合いを拒否する町田達を見ながら俺に声をかける。

「ねえ本条君。クラス対抗といつても、町田君達は参加しないんじゃないかな?」

「当然だ、誰がそんなくだらない遊びに——」

「必然的にAクラスは俺一人になるね。まあ大丈夫だよ、最初から戦力にカウントしてないし」

ド直球の役立たず宣言に町田が顔をしかめる中、何を思ったか軽井沢ちゃんが椅子ごと俺の隣に移動してきた。

「流石に本条君でも一人じゃ不利すぎるでしょ。ここはあたしが手伝ってあげる」

わー、いらねー。すごくいらねー。

「もしもーしDクラスさん、お仲間が堂々と裏切り宣言してますけどいいのかなー?」

「俺達は別に構わん。軽井沢がいなくなったところで何の支障も無い」

「は?どういう意味よ?」

「お前がいたところで何の役にも立たんと言ってるんだ。……外村も綾小路も異論は無
いな?」

「拙者も別に構わんでござる」

「……2人が納得してるならオレも特に言うことはない」

「マジムカつく。アイツら見返してやろうよ本条君、実はあたしこういうの得意なんだ
から」

「信憑性の欠片も無いが……まあいいか、多少足枷が着いたところで結果は変わらな
い。」

「各クラス準備はいいね……それじゃあ、ゲーム開始iiiiiiiiいっ!」

掛け声と同時に俺は箱をぶちまけ、その中から隅の部分となるピースだけを抜き出し
ていく。

「それじゃあ軽井沢ちゃん、まずは定石通り隅から揃えていってね。それ以外は俺が
ちやつちやつとくから」

「わかったよ本条君、あたしに任せといて……って何これ!?全部真つ白じゃん!」

軽井沢ちゃんが初めて挑戦するであろうミルクパズルに悪戦苦闘する傍ら、俺は中の部分のピースを揃えながら各クラスの様子を伺う。

「むむむむむ……どれもこれも同じに見えて区別がまったくつかないでござるう……」

「……悪い幸村、オレもお手上げだ」

「軽井沢以外も役に立たないことを完全に失念していた……!」

Dクラスはコージーと外村君が早々にギブアップ。仲間への不満を隠そうともしない幸村君もかなり苦戦しているし、多分時間内に終わらないだろうね。名目上結束力を競う勝負なのに早々に仲間割れをするし、色々と問題外なチームだ。

「……このピースどこら辺だと思おう?」

「こんなのわかんないよ……」

「ちよつと伊吹さん、あなたも少しは協力しなさいよ!」

「ただでさえこんなチマチマした作業苦手なのに、あんた達なんかとやってちゃできるもんもできないわよ」

Cクラスは眞鍋ちゃん達3人は仲良くやっているが、伊吹ちゃんだけは早々にゲームを諦めている。その態度に眞鍋ちゃんは不満げだが、クラス内の力関係からか強くは言

えない様子。リユンケルという絶対的支配者がいないから、正直Dクラスと似たり寄ったりだ。

「浜口君は枠をお願い、別府君は私と中のピースを区分しよっか」

「わかりました」

Bクラスは正解ちゃんの的確な指揮のもと、効率的に作業に取り組んでいる。このまま順調に行けば時間内に揃えられるだろう。……全部予想した通りの結果か、つまらん。

「……………よし、できたよ本条君！」

「さんきゅー軽井沢ちゃん。後は仕上げに…………」

きちんと端のピースで囲われたフレームに、揃え終わった中の部分を嵌め込んでフィニッシュ。

「えっ、もう揃ったの!？」

「経験者が遅れを取るわけにはいかないからね、慣れたらそこまで難しくない作業だし。……ともかくこれで俺達の勝ちだね」

「やったあつー!ふん、偉そうにしてたくせに幸村君全然大したことないじゃん!」

「このつ……………!ほとんど本条が揃えたくせに……………!」

何やら幸村君が苛立つてるがそれでも負けは負けだ、甘んじて受け入れるがよい。

その後は軽井沢ちゃんと適当におしゃべりしながら残り時間を過ごした。よっぽど眞鍋ちゃん達に詰め寄られるのが怖いのか、どうにかして俺に好かれようと内心必死になってたな。前もって有栖のことを仄めかしておいたから、ボディタッチとかはしなかったけど。

うーん……俺の目の届くところなら庇ってあげてもいいけど、預かり知らないところで苛められても自分で何とかしてね。……いや、それともコージーが何かしら手を打つか？このゲーム中もずっと軽井沢ちゃんを観察してみたんだし。

結局何のサプライズもなく、Bクラスがギリギリ時間内に完成させた一方で、DクラスとCクラスは似たり寄ったりの結果だった。

「さてとー。ちよつと行ってくるね」

「どこへ、ですか」

「葛城君に話をね」

配ったミルクパズルを回収して懐にしまっていると、正解ちゃん達がそんなやり取りをしていた。籠城作戦をやめてもらうよう説得しにいくつもりなら、残念ながら徒労に終わるだろう。敵対する生徒に突っつかれたぐらいで心変わりするほど、ランスの信念は安くない。

「オレもついていっていいか？」

「全然いいけど、綾小路君も葛城君に？」

「堀北が葛城と同じグループらしいからな」

「なるほどー、じゃあ一緒に行こうか。あつ、本条君もどう？」

「興味にゃーい」

時間をドブに捨てるのは嫌なので、俺は苦笑いする。正解ちゃんを横を通り過ぎ部屋を出る。さてと、それじゃあ今日もカジノでノルマをこなすとするか。試験終了した橋本は迂闊に退学にならないよう部屋でおとなしくしてるし、今日からは余計な茶々を入れられずに済む。

カジノにていつも通りのルーティンを消化し終えた後、何やら正解ちゃんから少し話がしたいとのメールが来ていたので、指定されたデツキへと足を運ぶと兎グループのメ

ンバー3人が待機していた。

「やつほー卍解ちやんと愉快な仲間達、ついさつきぶりー」

「ええと、急に呼び出してごめんね本条君」

「別に気にしなくてもよろしい。それじゃ冷たいものでも飲みながら話そつか」

そう言つて俺は懐から花束をバラけるようにして上に放り投げる。卍解ちやん達は思わずそれに視線が集中し、気がついたときには彼女等の手にはアイステイーの入ったカップが握らされていた。

「ほんとすごいね本条君の作品……将来マジシャンでもやつていけるんじゃない?」

「あくまで趣味でやつてることだし、ビジネスにするつもりは今のところ無いかな。……それよりどうしたのさ?嫌でも今日あと1回は会うのにわざわざ呼び出したってことは、緊急の案件だったりする?どんな悪巧み?」

「悪巧み限定なんだ……いやまあ当たらずとも遠からずだけど、そこまで緊急の用件という訳じゃなくてね……本条君にお願いがあるの」

ふむ、お願い……?

優待者が誰か教えてとかだったら失望せざるを得ないけど、流石にそんなバカな女ではないだろうし……何を頼まれるのだろう?

「話し合いはあと3回残ってるよね?……最後の話し合い時に勝負に出るつもりだか

ら、本条君にはおとなしくしてほしいの」

「ふむ？なんでそんなことを俺にわざわざ頼むのさ？」

というかそもそも一回目のディスカッションで進行を君に任せただから、わざわざ断りを入れなくても好きにしたらいいいじゃないか。

「我ながら情けない話だけど……本条君と会話の主導権を奪い合ったら勝ち目がないって、これまでの話し合いで痛感させられたからね」

………おお！思い返してよく考えてみると、ほとんど俺が仕切ってたわ。これはびっくり。

「うん、別に構わないよ」

「代わりに次とその次の話し合いは好きにしていから……え？いいの？」

「どうやら難しいこと考えてたか知らないけど、俺がジェンガだのパズルだのを持ち出したのは、話し合いがグダグダになってつまらなくなるのが嫌だったからだよ。グループの主導権は気がついたら握っちゃってただけで」

多分正解ちゃん達の頭の中の俺は、表向きは町田といがみ合いながらも実はグループをコントロールして、Aクラス籠城作戦を妨害する輩を前もって摘み取る恐ろしい強敵にでもなっていたのだろう。

「頼んでおいてなんだけど、本当にいいの？多分Aクラスにとって不利になると思うん

「だけど……」

「そんなもん興味無いよ。有栖が参加してない以上、そもそも最初から真剣に取り組む気無かったし。卍解ちゃん達が何やら面白いことを企んでるなら、邪魔する理由はどこにも無いね」

「そ、そうなんだ……」

本音を言えばここは実力で俺から主導権を奪い取って欲しかったな。卍解ちゃんの善性は利点でもあり欠点でもある。わざわざ俺の提案に耳を傾けてしまうから、あつさりとペースを持つてかれる。有栖やリユニケルがグループにいれば、多分こんな簡単に場を支配することはできなかっただろう。……まあ最初から高望みし過ぎるのは良くないな、うん。人生妥協も大事だし、今後の成長に期待しよう。それに今回の試験ではたまたまマイナスに働いたからといって、不要と切り捨ててしまうのは時期尚早だろう。

グループディスカッション⑤

残る話し合いのうち2回は、これまで通り俺がレクリエーションを持ち込んで適当に時間を潰した。このままだと優待者の逃げ切りを許しそうだと幸村君が焦燥に駆られていたが、自力でグループをまとめあげられないなら逃げ切られても自己責任だとしてか言いようがない。

……それにしても軽井沢ちゃんには何があったのだろうか？あれだけ俺を味方につけようとあれこれ頑張ってたのに、5回目の話し合いでは借りてきた猫のようになくなっていった。軽井沢ちゃんの眞鍋ちゃん達の恐怖と、眞鍋ちゃん達の軽井沢ちゃん達への憎悪が、同じタイミングで鳴りを潜めたのは偶然ではないだろうか。もしかしたらインターバルを挟んだ日に当人達で和解を済ませたのかな？……うん、無いな。女の子同士の争いは俺達男よりも、遥かに複雑で恐ろしくてねちっこい。とりあえず殴り合えばいたい解決するほど和解は簡単ではないだろう。

となれば誰か第三者が盤外から干渉して強引に終息させたか……コージだな。確証は無いけど間違いなくコージだ、うん。なんかさりげなく眞鍋ちゃん達が軽井沢

ちゃんへの不満を募らせるよう誘導してたし。火に油を注いでおいて自分で消火するとか、何考えてんだらうねあの子？

……まあいいか。正直軽井沢ちゃんなんて欠片も興味無いし、解決したなら俺から言うことは特に無いかな。今はコージーよりもこれから始まる最後のディスプレイだ。卍解ちゃんがどうやって森重あたりを裏切らせるか、ワクワクが止まらねーぜ。

「……本条？」

「んあ？コージー？」

と想像したら兎グループの部屋の前でコージーと遭遇してしまった。俺から先手を奪うとは大した奴よ。

「随分早いな、始まるまでまだ30分もあるぞ」

「そっくりそのまま返したいなその質問。なんでも今回卍解ちゃんが勝負に出るらしくてね、楽しみでついつい早く来ちゃった。ほらアレだよ、遠足とかの前日に中々眠れなくなる現象みたいなの？」

「遠足か……いつかは行ってみたいな」

ほんとのこの子はどんな人生を歩んできたんだろうね？俺が嘘を見抜けなかったり、ドラえもんを知らなかったり、今度は遠足未経験ですかそうですか。基本他人の過去に興味無い俺でもちよつと気になるんだから相当だよ。

まあこのまま立ち話も何だからと部屋の扉をあけると、あらまビックリ卍解ちゃんのスヤスヤと眠っていた。

「すでに先客がいたのか……おい本条、その手に持ったマジックペンは何だ？」

「安心しろ、水性だ」

「いや、そういう問題じゃなくてだな……」

「敵の眼前で隙を晒したこの子が悪い」

先に予め断りを入れておくが、俺は何も面白がってこんなくだらないイタズラを決行するのではない。全ては卍解ちゃんの身を案じてのことだ。年頃の、容姿も性格もさぞや男ウケするだろう女の子が、人目の無いところで無警戒に眠りこけるなど、申し訳ないけど正気の沙汰とは思えない。今回たまたま無防備な卍解ちゃんに鉢合わせたのが、自他ともに認める草食動物な俺と、なんか自制心が強そうなイケメン紳士(笑)ことコージーだから大事にならなかつたものの、場合によっては取り返しのつかない悲劇が起きていたかもしれない。もし性的暴行なんぞを受けたなら、心の傷はそう簡単には癒えない。この先卍解ちゃんに痛ましい未来を訪れさせないためにも、ここは友人として自分が悪役になつてでも、卍解ちゃんに警戒心というものを身に付けてもらわなければならぬ。卍解ちゃんは聡明な子だ、多少痛い目にも遭えば過ちはもう二度と繰り返さないだろう。

……そんな誰にしているかもわからない言い訳が終わる頃には、卍解ちゃんの顔には歌舞伎役者顔負けの立派な隈取りが。

「よし完成。名付けて……」

『一之瀬團十郎 卍解 千本桜景義』

「なんというか、その……凄いな本条。堀北がAクラスに勝てる気が全然しなくなってきた」

何やらコージが戦慄してるが大袈裟な奴だな。以前有栖をシヤレにならないぐらい怒らせたときは、こんなチャチなもんじゃなかったぞ？有栖には俺の言いくるめも通用しないから、あのときはまあ大変だった。

中学時代のやらかしを思い出して感傷に浸りながら音楽プレーヤーを取り出し、音量をかなり上げて卍解ちゃんの耳にそっとイヤホンをつけ、再生ボタンを押す。

『うらめしやああああああああ』

「にやああああああああああ!!」

「またそれか……」

茜先輩と同じく驚いてその場で飛び上がるが、流石は1つの集団を束ねるリーダーだ

けあって、寝起きだというのに周囲を伺い原因を探り始めた。やがてどうしていいかわからず立ち往生するコージと、満面の笑みを浮かべて『ドツキリ大成功』という小さなプラカードを持った俺を見つけると、珍しく眼を吊り上げて詰め寄ってきた。

「起こすにつ、してもつ、やり方がつ、あるんじゃないかなあ!？」

「ごめんごめん。悪気はぶつちやけあつたけど、今は多分おそらくもしかしたら反省してる可能性があると思うかもしれない」

「反省の色がまるで見えないよ!言い回しはどこまでも半透明なのに無色透明だよ!」

涙目でポカポカと叩いてくるが全然痛くない。実にあざといな、これは男にモテますわあ。

その後どうにか上手いこと言いくるめ……もとい誠実な態度で誠心誠意謝って許しを貰えたので、試験が始まるまで楽しくお喋りでもして時間を潰すことに。

「クラスメイトには全員に聞いたことなんだけど、他クラスの子がどう考えてるのかは前から気になってたんだ。……綾小路君と本条君はAクラスで卒業したいって思いは強い?」

「そりやもちろん……というか、この学校に来たなら誰だつてそうなんじゃないか?」

「俺は正直別に。クラスの連中はAで卒業したいだろうから叶えてやろうとは思うけど、個人的に興味は無いね」

ぶっちゃけ有栖がここに来たって言ったから、カルガモよろしくついてきただけだしな。結果として楽しい奴等が盛り沢山だったからその選択は正解だったが、Aクラスの特権など最初からどうでもいい。

「にやはは、本条君らしいね。実力主義の学校だからこそ、勝ち上がれなかったというレッテルは決して軽くなさそうだけど……本条君には些細な問題なのかな？」

「裏付けされた実力を持つているなら、そんなレッテルなど容易く塗り潰せるからね。『挫折をバネにして大きく成長した』とか何とか、周りが勝手に都合良く解釈してくれるだろうさ。満足先輩も同じ考えだから、Aクラスで卒業できなさそうでもまるで焦ってなかったよ？」

「満足先輩?」

「2—Bの鬼龍院先輩。以前ちよつとしたきっかけで意気投合してね。あのときのボウリング対決は凄く盛り上がった」

「えっ……本条君その先輩とデートしたの!?坂柳さんというものがあるから!」

「何やら妄想逞しく修羅場を思い描いてるみたいだけど、ちゃんと有栖もいたからね?」

「そ、そうなんだ。それなら安心……つて、その先輩本条君達二人の間に平気で入れたの!?どんなメンタル!」

「女子版ミスターみたいな先輩だからね」

橋本曰く「お前と坂柳二人きりの間に入ると精神が衰弱していく」らしく、しかも俺達を知る奴等は皆同意見らしいが、満足先輩は実に楽しそうにボウリングを楽しんでいた。友人と遊ぶのは生まれて初めてだという悲しい補足もあったが。

「ところで一之瀬。ついさつき本条に聞いたんだが……この最後の話し合いで勝負に出るんだってな」

「……うん、まあね」

「ならこのグループ、どうやら勝つのはAかBかになりそうだな」

「それは蓋を開けてみるまでわからないよ。土壇場で本条君がその気になれば、あっさり負けちゃったりしてね」

「万に一つもあり得ないから安心しろ。俺はこの試験が始まったときから、最後まで適当にやろうと心に決めていたし」

「自信満々に言うことかそれは……」

ちよつとした探り合いをしつつ談笑を楽しんでると、幸村君と外村君がやってきた。

「なんだ綾小路、もう来てーゴホオッ!」

「ほほう、3人で何やら怪しい密だーブハアッ!」

「あ……」

「え?……え?」

……：：
ジーも完全に忘れてた。

俺から手鏡を渡された卍解ちゃんは顔を確認するや否や、俺とコージーは目が全く笑っていない笑顔の卍解ちゃんに部屋の隅に連れていかれ、無言で頬を思いつきり引つ張られた。

地味に痛い俺に関しては自業自得だから仕方ないとして、巻き込んですまんコージー……。

「あの、皆さんよろしいでしょうか」

デイスカツション開始と共に、Bクラスの浜口君が話を切り出す。なんでも彼曰く、学校から改変を禁じられている優待者かどうかを表すメールを見せ合えば、優待者を炙り出せて結果1を狙えるとのこと。

そんな誰もが一度思いついては即却下する案に、傍観者の町田は思わず呆れる。

「バカかお前は、見せた瞬間裏切られるとわかって誰がメールを見せる？」

「当然優待者はそうでしょうね。でもそれ以外の人はリスキーではありません。試験ももう終わりですし、ここで勝負に出なきや逃げ切りを許してしまいます。仮にどこかのクラスが誰も携帯を見せようとしなければ、そのクラスに優待者がいると絞り込めます」

「それで優待者が知れたとしても、誰かが裏切って終わりだ。それとも早い者勝ちの勝負でもするか？」

「なら黙っていてください。町田君は参加しなければ良いだけの話です」

そう言つて浜口君はポケットから携帯を取り出し、届いたメールを皆に公開した。それを確認してから、俺は浜口君の反対のポケットに手を突っ込む。

「えっ、ちよ、本条君!?!何を——」

「それじゃ俺もその案に乗ろうか。……じゃんじゃじゃやーン、実は俺も優待者じゃありませんでした♪」

浜口君のポケットから俺の携帯を取り出し、同じようにメールを見せる。

「え、えっ?なんで……」

「……本条君、人の不安を煽るような手品は自重しようね?」

「別に悪用して窃盗の冤罪を吹っ掛けようとか思つてないよ?」

「お願い、ね……………」

「……………まあそこまでお願いするなら構わないよ」

誰のせいかは知らないけど正解ちやんが何故か気落ちしたが、これまで常に主導権を握り続けてきた俺が賛同したことで、町田と森重……それと幸村君以外が次々と携帯を取り出し始める。そんな中、メールを見せようとした外村君の手を幸村君が掴んで止める。

「……………本当に見せることが正しいと思ってるのか？」

「あんたさつきから何びくついてるわけ。もしかして優待者だったりする？」

これまで優待者探しを真剣に取り組んできた幸村君の、不自然な反対の意思に伊吹ちゃんが指摘すると、幸村君の表情が露骨に強ばる。

うん、大根。

「いや、幸村は優待者じゃない。以前そう言ってたからな」

コージーはもつと大根。多分わざとやってるんだろうけど、もうちよつと何とかならなかったのだろうか。

当然周りは町田含め怪しがり、長い沈黙の後観念したのか幸村君は携帯を取り出す。

「……………わかった。見せればいいんだろ」

絶対に裏切らないよう皆に（特に町田達に）念入りに懇願しつつ、スムーズな操作で

携帯のロックを解除しメール画面を開く。

「嘘をついてすまなかった綾小路……俺が優待者だ……」

メールには確かに優待者だと記されている……なんか演技が小慣れてきたな、大根は返上してやろうかね。

クラスメイトにも黙っていたのか、外村君も軽井沢ちゃんも心底驚いている。軽井沢ちゃんが驚いている理由は別なんだろうけど。

町田が幸村君の携帯を念入りに調べるが、メールの改竄が禁じられている以上疑う余地はほとんど無い。携帯を入れ換えているのではないかと疑念を抱いても、目の前でスムーズにパスワードを入力する様子を見れば自然とその線は捨てる。……単純だがよく考えられた作戦だね。

「……これで全員が答えが俺だとわかっただろ。結果1を目指せる余地ができた筈だ」

「お願い皆、幸村君の勇気を無駄にしないために協力して」

「俺達2人は葛城さんの指示で動いている、勝手な真似はしない。本条にとつては50万など大した額じゃないだろうしな」

口ではどうとでも綺麗事を言えるが、試験終了後の空白の30分の間に、確実に誰かが裏切るだろう。……そして指名を外したことでDクラスの勝利となる。

ふむ……このまま流れても正解ちゃんの望む結果になりそうだけど、何だかなあ……

あれだけ自信満々だったのだから期待してたんだが、俺の見込み違いだったかな？

と、突然テーブルに置かれた幸村君の携帯の着信音が鳴り響く。慌てて回収しようとする幸村君より先に携帯をかつさらい、そのまま電話に出る。

「もしもし、こちら本条桐葉改め幸村輝彦。どしたの卍解ちゃん」

「にやはは、何でもないよ」

即座に電話を切り、真剣な眼差しで幸村君とコージを交互に見る卍解ちゃん。そんな彼女を怪訝そうな顔で見つめる町田。

「何がしたいんだ一之瀬」

「メールへの細工は禁じられてるけど、携帯はそうじゃないからね。……どうして綾小路君の携帯にかけたのに、幸村君に繋がったのかな？」

卍解ちゃんの指摘にグループのほとんどがDクラスの仕掛けた罠に気づいたところで、俺は携帯をコージに返す。

「で、でもおかしいだろ。幸村はパスワードをちゃんと解除していたし、個人メールや履歴も念のため確認したぞ」

「それはフェイクだよ。パスワードなんて事前に聞いておけば簡単にわかるし、他は少し手間だけど入れ換えは可能だしね」

そして今や蒼白になっている幸村君に語る。携帯入れ換え作戦の決定的な弱点……

電話番号だけはどうにもできないということを。なんでも携帯のSIMは端末ごとにもってロックされているので、外すと通話できなくなってしまうらしい。……へえ、知らなかった。

と、そこでタイムアップ5分前のアナウンス。速やかにグループを解散させ自室に戻るよう命じられる。

「……くそっ!」

「残念だったな幸村、意外といい線だったぞ」

町田達は作戦を看破された2人を嘲笑するように慰めの言葉を吐いた。次々と退出する人達に裏切らないよう正解ちゃん呼びかけながら、間違いなくそれは叶わないだろう……叶っても逆に困るだろうけど。

「お前の作戦に乗った俺が間違いだった……最悪だっ!」

コージーから自分の携帯を無造作に奪い取り、吐き捨てるようにそう言うから幸村君は退出した。やがて俺と正解ちゃんとコージーの3人だけになったのを確かめてから、俺はおもむろにパチパチと拍手をする。

「まずは祝辞を述べておこうかな? おめでどう、君達の完全勝利だ」

「……君達? 一之瀬達Bクラスはともかく、俺達は惨敗だっただろ」

「だってCかAは確実に裏切ってコージーを指名するよ? 優待者は軽井沢ちゃんなの

に」

うーむ、相変わらず動じないなこの子。ほんとにはロボットなんじゃないか？一方正解ちゃんは頬をかきつつ苦笑いする。

「なぜ軽井沢だと思うんだ？一之瀬の話聞いていなかったのか？」

「携帯のSIMがどうか探ろうとも思わなかったから、君がどんなトリックを使ったかは知らないけど……俺は惑わされないよ？間違ひなく優待者は軽井沢ちゃんだ」

「あー……無人島試験じゃノーヒントで千尋ちゃんがリーダーだと見抜かれたから、もしかしてと思つてたけど……やつぱり本条君は優待者が誰かわかつていたんだね。良ければいつわかったのか教えてもらえるかな？」

「初日の一回目だね、うん。悪いけど俺に嘘や隠し事は通用しないんだなこれが」

目の前の男は例外だが他の誰も優待者じゃなさそうなら、消去法でコージードと絞り込めるから問題無い。……改めて思うが『シンキング』関係無いなこれ。

「悔しいけど今回の試験、本条君にはまるで太刀打ちできなかつたな……真剣に試験に取り組むつもりが無いって言葉を信じるしか、打つ手が無かつたよ」

「俺も充分楽しませてもらったよ。正直無人島試験の結果にはガツカリされられたけど、まだ期待しておいてよさそうだ。……だから弱気なこと言つてちゃダメだよ？Aに上がりたいなら、（たぶん）俺より厄介な有栖に勝たなきゃならないんだからさ」

「にやはは、勿論Aクラスに上がるのは諦めないよ。私個人では勝てないだろうけど、結束力こそが私達の強みだしね」

「正解ちゃん、闘志が揺らいでいないことに俺が満足したと同時に、兎グループの試験終了を知らせるメールが3人同時に届いた。案の定誰か……Cクラスの生徒がリユンケルの意向を無視して勝手な行動を取るとは思えないし、十中八九ウチのクラスの森重が裏切ったのだろう。」

「あーあ、やっぱり誰かが裏切っちゃったか」

「1つ聞かせてくれ一之瀬。お前も優待者は軽井沢だと気づいていたのか？」

「普段気にかけない綾小路君に、何度も視線を送ってたからね。それもフェイクである可能性もあったから送れなかったし、Bクラスに優待者がいないとわかった時点で、CかAに間違えさせることしか頭に無かったからね」

「あれれー？結果1を求めるのが最善とか何とか、1回目話し合いでどこのどなたが言ってたんでしょうねー？」

「……本条君って意外と意地悪だよな」

「わざとらしく頭を捻る俺に、膨れっ面でジト目を向けてくる正解ちゃん。うん、可愛い。」

「拗ねる正解ちゃんに癒されていると、グループ試験終了を知らせるメールが4連続で

送られてきた。

「これ、どういうこと……？」

ふむふむ、最後の最後でようやく動き出したようだね……リユンケル。

4 卷エピソード

- 鼠……裏切り者の正解により結果3
- 牛……裏切り者の回答ミスにより結果4
- 虎……優待者の存在が守り通されたため結果2
- 兎……裏切り者の回答ミスにより結果4
- 竜……グループ全員の正解により結果1
- 蛇……優待者の存在が守り通されたため結果2
- 馬……裏切り者の正解により結果3
- 羊……優待者の存在が守り通されたため結果2
- 猿……裏切り者の正解により結果3
- 鳥……裏切り者の正解により結果3
- 犬……優待者の存在が守り通されたため結果2
- 猪……裏切り者の正解により結果3

以上の結果から本試験におけるクラス及びプライベートポイントの増減は以下とする。

Aクラス……	マイナス2000c p	プラス2000万p p
Bクラス……	変動無し	プラス250万p p
Cクラス……	プラス150c p	プラス550万p p
Dクラス……	プラス50c p	プラス300万s p

—————

【side:橋本正義】

午後11時。

いつものカジノにて学校から送られてきた特別試験の結果を確認したが、俺達Aクラスは惨敗に終わった。悔しさはまるでない。葛城が指揮を取るこの2つの試験でクラスに大きな損害を与えれば、おのずと葛城は求心力を失う……全て坂柳が想定した通りの結果だ。

本音を言えば最初からからクラスを対立させたりせず、確実にAクラスのまま卒業で

きる方針を取ってもらいたいものだが、まあ凡人である俺には天才様の考えなど理解できる筈ないか。問題なくAクラスで卒業できるのなら、俺も姫様に忠誠を誓い続けるだけだ。……そうでないなら話は変わってくるけどな。この先誰の下につくことになっても、最終的に俺がAクラスで卒業できればそれで構わない。

「AからDまでの関係性を無視するつてのは、クラスの区別なく名前の順に並び替えることで、優待者の法則はグループに割り振られた干支の順番に位置する生徒……か。わかつてしまえば単純な法則だが、それでも裏切るには相当な度胸がいるな」

「1億分の1くらいはクラスごとに法則がバラバラの可能性もあるし、より推理を確実にするには他クラスの優待者を最低1人は見抜きたいよね。……そうなるとリユンケル、随分早くから優待者を見抜いたんだねえ」

「初日の1回目で見抜いた奴が言つてもな……しかしCクラスが勝つたのは予想通りだが、なんだつて龍園はこんなAクラスだけを狙い打つ真似をしたんだ？」

「さあね、気になるなら本人に聞きに行けば？あの子意外と自己顕示欲強いから、今ごろDクラスのホリリンあたりに勝ち誇つてると思うよ」

「なんでD……ああ、そういうえば無人島試験の借りがあつたな。……じゃあなおさらなんでDクラスに攻撃しなかつたんだよ？」

「肝心の竜グループは結果1だし、ろくでもないことを企んでるのは間違いないだろう

ね……ほいフラッシュ」
「す、スリーカードです……」

屈辱に身を震わせるディーラーからチップを巻き上げるといふ、もはや見慣れたやり取りをする友人について考えを巡らせる。

本条桐葉。

もはや同学年で知らない奴はいないであろう、坂柳派の筆頭にして学年最優秀と名高い生徒。坂柳の下についている点では俺と同じ立場だが、自力ではトップになれないから勝ち馬に乗ることを選んだ俺と違い、あらゆる方面でトップに立てる資質を備えているにもかかわらず、性に合わないという理由で坂柳の下に甘んじている変わり者だ。普通こういう天才は自分の能力に自信があるから、人一倍プライドも高くて易々と人に従ったりしないんだがな。

……だがまあ俺からすれば好都合な関係ではある。万が一に備えて他クラスにもコネクションを構築しておくのは勿論だが、坂柳と本条……手を組んだこの2人が負ける光景は想像がつかない。本条が俺のスタンスを察しているのに何も警戒した様子が無いのは、俺が寝返るような状況にはならないと確信しているからかもな。

……さて、そろそろカジノでプレイできる回数の上限になるし、今日もいつものようにポイントをドブに捨ててお開きか……あーあ、今にもつたないおぼけがでるぞ。

「……って、何してんだ本条？」

「800万ポイント分チップに変えてきた」

「いや、それは見りゃわかるが……」

困惑する俺に構わず、本条はその1枚100万ポイント相当のチップを全て、いつものようにルーレットの賭け金を乗せるスペースに置いて……

ちよっつっつっつ!!

「24番に800万」

「おいしいiiiiiiiiiiii!!何してんだお前は!？」

「うるさいな橋本、いきなりはしゃぐな」

「はしゃいでねえよパニックってんだよ!おとおおまお前……自分が何やってるかわかってるのか!？」

既にベットしたからにはもう取り消しは不可能。ディーラーは困惑しながらもルーレットを回し始めた。

「……ところで橋本、この前俺のことを天才様だとか何とか言ってたっけ?」

「こんなときに何の話だ!?!お前ただでさえ坂柳派が龍園に支払うポイントを引き受けたばかりなのに、何して——」

「お前の言う通り確かに俺は天才なんだろうが、俺は自分が天才であることを誇りに

思ったことは生まれてこの方一度も無い。何故だかわかるかい？」

「は、はあ……？」

昨日までとは違い本条はすぐにカジノを退出しなかった。唐突な問いかけに俺が困惑している間もルーレットは回る。

「それは俺がたまたま多くの才能に恵まれただけだからさ。もし仮に俺以外の有栖やミスターといった天才達が、天才になるという運命を背負ってこの世に生まれてきたのだとしても……俺だけは違う。俺だけはただ運良く天才だったに過ぎない」

回る。

「……いや、そんな断言できるものじゃないだろ？ 姫様や高円寺がそうなら、お前だってそうなんじゃないのか？」

回る　回る　回る。

「いいや、他の天才達はどうかは知らないけど、世界中で少なくとも俺だけはただ運が良かっただけだと確信している。たとえば俺の両親は有栖の両親と違って、善良だが凡庸な人だから、才能を受け継いだって訳でもないし……」

回る回る回る回る回る回る回る回る回る回る回る回る回る……

「そして何より……」

そうしてようやくルーレットが止まり、中を転がっていた銀色の玉が1つの数字を指

し示す。

24

「!??!?!」

「……ほら、事実として俺は凄まじく運が良い」

俺が、ディーラーが、ポイントを換金する係の店員が、不正をしていないかチェックする警備員が……その場にいる全員が絶句する中、本条は何でもないかのようにさらりと言った。

ありえない……ルーレットの数字賭けが的中する確率は僅か3%未満。絶対に当たらないという程では無いが、全財産をつぎ込むような賭け方は正気の沙汰じゃない!それを平然と行ったことはもちろん、さっきの本条の会話の運びからして……当たることを確認していたとしか思えない……!

カジノ側はイカサマを疑い警備員はルーレットや本条本人、果ては一緒にいた俺までを入念に調べるが、当然ながら何も出てこない。まず本条はルーレット自体には一度たりとも触れてないし、そもそもルーレットを回したのもディーラーなのだから、どう

やってもイカサマなどできる筈もない。

「悪いんだけど俺、運が絡む勝負で勝とうと思つて勝てなかつたことも……生まれれてこの方一度も無いんだよね」

やがて観念したのか、顔を真つ青を通り越してお粥のように白くさせた店員から2億8800万ポイントを受け取り、未だに言葉を告げずにいる俺を連れてカジノを出た。

「この学校が安易に膨大なポイントを手に入れられる方法を見過ごす筈がない。こうして前例ができてしまった以上、来年からは賭けられる額に上限がつくか、ルーレットそのものがなくなっているだろうね」

「……最終日にこうすると決めていたのか？」

「カジノじゃ勝ち過ぎる客は嫌われるけど……もう縁が切れるなら嫌われても構わないしね」

「以前運が絡む勝負を否定していたのも、もしかしてこのためか？」

「そ。やったところで100%俺が勝っちゃうんじゃない。結果の見えた勝負なんて退屈なだけだよ」

プライベートポイントを2000万貯めればAクラスに上がることができる。たとえ途中でB以下にクラスを落としたとしても、卒業目前に移つてしまえば無事Aクラスで卒業できる。そんな誰もが一度は考え、そして誰もが非現実的過ぎて諦める偉業を、

たった1度の賭けで14人分も実現させやがった。それはつまり単純計算で、本条にとつて13番目以内の優先順位にいれば、勝利が約束されるということに他ならない。

「ねえ橋本」

俺が脳内でこれまでの方針をシフトさせ、どうやって本条から気に入られようと画策している、当の本条が何かを見透かした目をしながら話しかけてきた。

「この際だからはつきり言うけどさ、俺はお前のことを心底つまらねー男だと思ってる」
今の俺にとっては凶報かつ、しかし予想できていた事実を突きつけられる。本条は気に入った生徒を妙なアダ名で呼ぶ傾向があるが、同じ立場の神室や鬼頭とは違い俺だけはずつと苗字呼びのまま。だから内心俺のことはあまり好きではないと気づいていた。これまではそれでも別に構わなかったが、ここは何としてでも確実な安泰が欲しい。どうすればいい……

「お前のその、誰かに頼りきった勝利を求めるスタンスが心底理解に苦しむんだよ。さっきのでわかっただろうけど、俺はコイン1枚あれば人生の勝利が約束される。……でもそんな勝利はつまらないと思わないか？ やっぱ勝利つてのは自分の力で奪い取るもんだよ」

……本条の話を聞いているうちに、俺はいつの間にか手を力強く握りしめていた。

ふざけるな、それは『持つてる』側にしかわからない考えだろう。別にそんな豪運に

頼らずとも全てにおいて突出した才能を持つお前に、決してトップに立てない人間の氣持ちがわかつてたまるか。

「……まあでも価値観は人それぞれだし、お前がどうしてもそれを望むならくれてやってもいいよ。」

「……は？」

流石に言い返そうとした俺に、本条はあつさり俺の望みを叶えると言ってきた。

「お前が俺に望むのは『卒業間近でＡクラスじゃなかったときに２０００万ポイントを譲渡する』……でしょ？ いいよ、約束してあげる」

「……本当、なのか？ 悪いけど口約束だけじゃ信用は——」

「俺は約束を破らないけど、形に残る契約が欲しけりや面倒だからそつちで用意してね」「なぜだ？ なんで気に入ってない俺にそこまでするんだよ？ 意味わかんねえよ」

「以前も言わなかったっけ？ 求められて断る理由が無ければ、とりあえず手を差し伸べるのが俺だよ。……ただし一つ条件がある！」

良い笑顔でビシツと人差し指を突きつけてくる本条に、俺は思わず身構える。２０００万もの大金と引き換えにするほどの要求だ、決して軽いものではないだろう。

「お前が今続けてる蝙蝠外交だけ……」

「ああそれか？ もう続ける理由も無くなったし、言われなくてもちゃんと打ちき——」

「ダメ。誰にもこの2000万の件を打ち明けずに今後も続けること。それが条件」
「……は？いや、いったいなんのために？Aクラスにとつては何のメリットも無いぞ？」
「そっちの方が面白くなりそうだから。お前はつまらねーけどお前の行動自体は面白いしね」

あまりの変人具合にとうとう開いた口が塞がらなくなった俺を捨て置き、何故か世にも奇妙な物語のテーマを口ずさみながら自室に戻る本条。その姿が見えなくなつてから……俺は思わず脱力しその場に座り込む。

完全に俺の預かり知らない方向から、突然欲していたものが転がり込んできてしまった。あれだけ求めてやまなかつたのになんだこの脱力感……本条の言つてたことが少しだけわかつた気がする。確かに達成感も何も無いな。

桐葉と有栖の夏休み①

学生の夢と希望の結晶、夏休みも残すところあと3日。3日後からはまた血で血を争う実力主義の学校生活が始まる。

いつものように体内時計に従って4時に目を覚ますもすぐには起き上がることはせず、夏休みの出来事をじじむさく振り返る。

まず思い浮かんだのは2週間に渡る豪華客船の旅（偽）から帰ってきた直後。既に港で待機していた有栖が視界に入った瞬間、水面下で暴れ続けていた有栖欠乏症が一気に吹き出し、怒られるのを覚悟の上で高い高いを決行したら……

*

「有栖ひーさーしーぶーりー！俺がいなくても元気にしてたかー？というか以前よりさらに軽くなってるぞー？ちゃんとご飯食べてたかー？いえーい！」

啞然とする周囲などまるでお構いなしに、有栖の両脇を持って大きく抱え、以前茜先

輩にしたようにコマのように回りだす。さて、子供扱いされるのを蛇蝎の如く嫌う有栖がどのタイミングでぶちギれるのか、チキンレースの始まりだぜい!

「……桐葉、一旦回るのを止めてください」

「ほえ?……おー」

あれ?多分杖でしばかれると思ってたのに随分とおとなしいな。まあとりあえず言われた通りに立ち止まると、有栖は唐突に俺の頭を両手で掴み――

*

……自分のファーストキスがあんな奪われ方するとは思ひもしなかったなあ。しかも何か舌入れられたし。そしてやたらと長い間食われたし。

いったい何をトチ狂ってたんだろうねあのときの有栖は。公衆の面前ですよ?その場に同級生ほとんどいましたよ?リユニケルとか凄いにやにやしてたし夏休み中に一度会ったけど散々囃し立てられたし。やっと俺を解放したと思ったら涙目で「ずっとあなたがいなくて、平気だったわけじゃないですか……」じゃないんだよ可愛いかったけども。あの後俺がただ面倒な目にあっただけかわかってんのか口リス改めエ口リスは。どうでもいいけど何かテトリスみたいな響きだね。

……高い高いしたことはその後でしつかりボロクソに怒られたし。いやまあそれは自業自得だから良いんだけどね？

許してもらおう条件が夏休み中抱き枕になることって何なわけ？

すやすやと隣で気持ち良さそうに眠る有栖の髪を優しく撫でながら、それでも未だに疑問を抱かずにはいられない。

俺たちまだ付き合ってもないよ？いたって健全な主従関係だった筈だよ？初キスはベロチューだし気がついたら当たり前のように同衾して……いくらなんでも一氣に乱れすぎでしょ俺達。これを不純異性交遊と呼ばずに何と呼べと？なんで2週間会わないだけでこんな脳内ピンクになっちゃったのこの娘。俺が草食で寝相も良くなかったら危なかったよ、いやマジで。……というか今更だけどここの寮の規則おかしかね？夜遅くに男子が女子寮に行くのを禁止するならその逆もしつかり禁止にしようや。ほんとに不純異性交遊取り締まる気あるのこの学校？大丈夫か日本政府？

……………まあいいか！

政府がアレなのは今に始まったことでもないし、夏休みが終われば有栖も色ボケモードから立ち直るだろう……たぶん。

とにかく時間は有限、あれ以上のインパクトは無いとはいえ、まだまだ振り返るべき思い出は盛り沢山なんだ。

コージーがCクラスの伊吹ちゃんと一緒に（どんな組み合わせだ）エレベーターに閉じ込められたとメールがきたから助けに赴いたり、コージーから断水期間中にホリリンの手が水筒に嵌まって抜けなくなると相談されたから水を持っていったり……コージー何かあったら俺に頼み過ぎだろ。そういうのはクラスメイトを頼りなさいまったく。俺に敵意持つてるホリリン、羞恥で泣きそうになつてたよ可哀想に。

それからなんとなしに俺が引き合わせた有栖と茜先輩が、俺に対する不満で意気投合して仲良くなつたり……高い高いしたくらいでそんなグググ言わんでも良いじゃないかあ幼児体型コンビめ。……こんな呼び方したら殺されるかもね。

出場した空手のインターハイで筆舌に尽くしがたい激闘の末に見事優勝を果たしたり……何かクラスポイントが100も増えた。やったぜ。

その祝いに有栖主導で開かれたパーティにて、側近の皆とやったクトウルフTRPGで、俺のちよつとした悪ノリでシユブニグラスが降臨してしまい、俺の探索者以外が全員まとめて永遠の狂気に陥つたり……シレッと俺だけ連続クリティカルでどうにか切り抜けてクリアしちゃったから、パーティ主役なのに吊し上げられたなあ。仕方ないじゃん、「そこに旧支配者がいるから喚ぶんだ」って誰かも言つてたし。えっ、言つてない？じゃあごめん。

……とりあえず目ぼしい思い出はこんなところかね。振り返りも済んだことだし俺

は布団から起き上がり、花への水遣りを済ませる。ことあるごとに鉢を追加していったおかげで、今や俺の部屋は花粉症患者お断りなちよつとした花畑のようになってく。2週間空けたときも事前に頼んでいたの、ちゃんと学校側が欠かさず水遣りをしてくれたようだ。

その後筋トレと走り込みを済ませてから朝御飯の準備が終わる頃に、お騒がせ御嬢様が目を擦りながら、杖についてのそのそと起きてきた。

「おはよー有栖」

「おはようございませう桐葉。……おはようのキスをまだしてもらってませんよ?」

「さも当然のように爆弾ぶつ込んでくるね君」

もしかしたらもうこの娘はダメかもしれない。

「もう夏休みも終わるんだし、いい加減シヤキツとしなさいまったく。二学期からまた一人暮らし生活に戻るってちゃんと自覚してんの?」

「むう……あわよくばこのまま同棲を続けようと画策していたのですが、やはり流されてはくれませんか」

「だーめ。夏休みだから俺もそこまでとやかく言わなかったけど、嫁入り前の少女が実際もしていない男の部屋に入り浸ってるなんて、坂柳パイパーが聞いたら悲しむよ?」

「お父様ならたぶん、笑顔で赤飯を炊いてくれると思いますよが」

「はい揚げ足とらな—い。俺も正直そう思うけどそこはツツコまな—い。とにもかくにも、あまり踏み込んだことは正式にお付き合いをしてからにきなさい。文句は受け付けませ—ん」

「……………そう、ですね」

有栖はやや落胆しつつも、自分を言い聞かせるように俯いてそう頷く。……………確かにこの子と知り合ってから2週間も会わなかったのは今回が初めてだけだし、有栖がこんな打たれ弱いとは思ってもみなかったなあ。

「もし有栖が交際したいというなら、俺も断るつもりは無いけどさ……………不安なんですよ？ 決着をつける前に恋仲になるのが」

「……………ええ。貴方は自分のことだけは、どこまでも厳格かつストイックになる人です。1度した約束は破らないのではなく破れない。私が貴方に敗北すれば、何の躊躇いもなく私と敵対する道を選ぶでしょうね……………たとえ私達がどんな関係になつていようと」

「そ。だから早く俺に勝つてよ。そうすれば俺は結んだ約束通り、ずっとお前の下になければならなくなるからさ」

この先ずっと有栖のものになることに関しては特に不満も無いけど、だからと言って勝ちを譲るつもりは微塵も無い。それに俺も有栖も勝敗に関してどこまでも潔癖だから、勝利は完全なものでないと気が済まないし価値を見出だせない。たとえばチェスな

ら、不利である後攻側で勝たなければ意味がない。

「だからさあ、いい加減腑抜けんのはやめろや。俺から……この俺から完全勝利を掴もうってんだ。お前の全てを賭して挑んでこないと、何もかも失っちゃうぞ？」

「……ふふ。ご忠告感謝します桐葉。どうやら私としたことが、知らず知らずのうちに貴方の優しさに甘えていたようです」

そう言つて顔を上げた有栖からは色ボケた雰囲気は抜けていて、見知った方の笑みを浮かべていた。一見穏やかだがどこまでも好戦的で、敵を振じ伏せることに愉悅を見出だす……支配者の笑み。よかった、元の有栖だ。

「必ず貴方を地に這いつくばらせてあげますよ。貴方と愛を育むのはそれからでも遅くはありません」

「ん。楽しみにしてるぞ、地べたの味とやら」

朝食を食べ終えた後昼間まで自習タイムをとり、続けて昼食を済ませてから、会長さんに用があるので制服に着替えて2人で学校に向かう。ついてくる必要は無いみたいな野暮なことは言わない。

「なあ有栖。掛け算の九九つてさ、バトル物の王道を満たしてるとは思わないか？」

「……また脈絡も無くわけのわからないことを」

「いや学校につくまで暇だから軽い雑談をと」

「だからといって、せめて他にもっと何か無かったのですか？……まあいいでしょう、詳しく聞いてあげます」

「とりあえずゲームに例えるけどさ、1の段2の段……をステージ、最後の×9をボスだとするじゃん？」

「ふむ」

「主人公が1の段で1×9を、2の段で2×9を……という風に順調に強敵を倒して勝ち抜いていくじゃん？」

「ほうほう」

「そしたら最後に9の段に辿り着くと……なんとこれまで苦労して倒してきたボス達がいざ、皆復活して襲いかかってくる訳よ」

「……………なるほど」

「でも数々の死闘を繰り広げ成長した主人公は、一斉に向かつてくる過去のボス達を物ともせず倒していく。だがしかし……」

「最後に待ち構えていたのは最強の敵、9×9……なるほど、確かに王道に沿ったストーリーと言えますね」

「だろ？ だろ？ だから次のリレー小説のテーマは、九九をモチーフにしたバトルファンタジーにしようぜ」

「ふむ……たしかにそろそろ昔話モチーフも飽きてきましたし、中々面白そうですね」

今までとは違い完全オリジナルということもあって、その後は生徒会室につくまで設定と世界観の作り込みを話し合った。どうせ途中で2人とも悪ノリしてカオスになるだろうけど、基盤となる世界観とキャラ設定はちゃんと決めておかないとね。

生徒会室の扉をノックすると、会長さんと茜先輩が出迎えてくれた。

「まずはIH優勝の祝辞を述べておこうか。さほど部活動に力を入れているわけではないこの学校で、全国一を勝ち取ったのは偉業と言える。同じく武道を嗜むものとして、いずれはお前と手合わせしたいものだな」

「この学校を担当する政府の方も大喜びだったそうですよ。夏休み明けに表彰されるので、優勝者に恥じない振る舞いをしてくださいね？」

「そういうのちよつと面倒なんですよね……生徒会の権力とかで、優勝したの茜先輩

だったことになりませんか?」

「いやなりませんよっ!?生徒会をなんだと思ってるんですか!」

「大丈夫ですよ、なんかカンフーが得意そうな見た目してるじゃないですか茜先輩」

「誰の髪型がカンフーですか!」

「なるほどこれは何とも……桐葉がからかいたくなるのも領けますね」

「坂柳さんも賛同しないでくださいっ!」

「おっと茜先輩タンマ。見ての通り有栖はアブラゼミより弱っちいで、回転的鶴脚蹴は繰り出さないでください」

「誰が春麗ですか!」

「流石に怒りますよ桐葉」

だから天使と悪魔が結託すんなや。

収集つかなくなりそうな場を、会長さんは咳払いして沈静化する。茜先輩はしゅんとした表情で会長さんの後ろに下がる一方、有栖は平然とにこやかに笑っていた。

「……お前が坂柳か。こうして顔を合わせるのは初めてだな」

「そうですね。しかし今回私はただの付き添いですので、どうかお気になさらず。……興味が無いのはお互い様でしょうし」

「ほう」

意識：どうやら私はお前の眼鏡に適わなかったようだけど、それはこちらも同じことだからなカスガ。

流石は有栖、出会って早々意味もなく生徒会長に喧嘩売っちゃったよ。二人もそれを理解したらしく、茜先輩が慌てる一方会長さんは口角を少し吊り上げる。

「坂柳さん、もう少し発言に気をつけてくださいっ！この方は恐れ多くも、この学校の生徒会長ですよ！」

「そう言われても性分なもので」

「何か勘違いをしているようだな坂柳。俺がお前を生徒会に誘わなかったのは、誘ったところで断られるとわかっていたからだ」

「ええ、知ってますよ」

「……好戦的と聞いていたが、ここまでとはな」

有栖の清々しいほどの狂犬ムーブに流石の会長さんも呆れちゃったよ。

「まあいい、本題に入ろう。本条、俺に頼みたいことは何だ？」

「ケヤキモールに植物園を建てるよう学校に掛け合ってくださいますか？」

「……正直予想外の頼みだが、理由は？」

「俺が植物好きだからです」

「清々しいほど個人的な理由ですね!？」

ケヤキモールはこの学校の敷地内に存在する複合施設の名称だ。この学校の生徒は基本敷地内から出ることができないので生徒達はここをよく利用する。外の世界のようには無限の可能性は無く、限られた敷地の限られた施設……実に狭い世界だ。そんな限りある空間に学生から人気が出る筈も無い植物園が建設される機会は、待つていても決してやってこないだろう。

「俺に話を持ちかけてきたのなら知っているのだろうが、この学校の生徒会が持つ権限は決して小さくない。だが限られた敷地内に施設を建設するとなると、ただ俺が掛け合っただけでは受理される筈も無いことは言うまでもないだろう。……率直に聞くが、お前は交渉材料に何を差し出す？」

「2億」

携帯を取り出しつつそう答えると、さしもの会長さんも呆然とする。茜先輩に至っては開いた口が塞がらなくなった模様。提示した額に猜疑心を抱いていないようなので、この人達は俺のポイント保有額を把握していたみたいだ。また情報漏洩ですかそうですね。

「この学校のポイントは国の税金で賄われていますよね？想定外の出費……それも億単位ともなれば国の偉いさんも大慌てしたでしょうね」

俺がIHを制して大喜びしたのは多分それが原因だ。「将来を大いに期待できる生徒

への先行投資」という最低限の大義名分が得られたのだから大いに安堵したことだろう。

「だったら俺は2億ポイントを学校に返還しますので、その見返りに植物園を建設するよう交渉してください」

「しししし正気ですか本条君?! プライベートポイントがこの学校で過ごす上で、どれだけ重要なものかわかっているでしょう!」

「そうは言っても所詮あぶく銭ですし、適当に散財しても問題ありません。……なあ有栖?」

「ええ、私から言うことは特にありません。ポイントは多いほど今後有利なのでしょうが、有利過ぎても退屈ですしね」

「……わかった、受理しよう。それだけのものを差し出すならば、学校側も首を縦に振らざるを得ないだろう」

交渉成立ということ、俺は携帯を操作して会長さんに2億ポイントを送金した。

「ところで会長さん。先日正解ちゃん……一之瀬が無事生徒会に入ったそうですけど、どういう心境の変化ですか?」

「その件に俺は関与していない。一之瀬の生徒会入りは南雲の判断だ。……一年生からも役員を選ばないと、自分が生徒会になったときに困る。そう言われてしまえば俺も引

き下がるしかない」

ふむ……確かにその通りだ。会長さんはもうすぐ元会長さんになる。一年が生徒会入りしなければ将来の生徒会役員を育てられないし、それで困るのは会長さんじゃなくてその南雲先輩だ。……しかし会長さんの苦い表情からして、会長さんが卍解ちゃんを拒絶した理由と、南雲先輩が卍解ちゃんを生徒会に入れた理由は、きつと無関係ではないのだろう。

「来年からこの学校は大きく変わる。それも望まない方向に。その時に南雲に対抗できる勢力を構築しておかなければならない。……一応聞いておくが本条、坂柳。お前達は南雲に付かないと考えていいな？」

「そうなりますね。以前会長さんと南雲先輩に仲良くしないよう約束しました。しかしそんな面白そうな先輩と関わらずにいるのは勿体無い……だったら敵対するしかないでしょう」

「桐葉がそういうスタンスなら必然的に私もそうなりますね。まったく、好戦的な部下を持つと苦労します」

「お前にだけは言われたくねーよ」

「……南雲に付かないならばそれでいい」

自分が卒業した後のことなんていちいち気にしても仕方ないと思うけどね。……さ

てと、用件も済んだことだしそろそろ帰りましょうかね。

「それじゃあ会長さん、頼んだ件お願いしますね。それと茜先輩もストリートファイト頑張ってくださいね」

「だから誰が春麗ですかっ!？」

「それも彼なりの愛情表現ですよ。この先幾度となく橘先輩は振り回されると思いますが、どうか今後とも桐葉をよろしくお願いしますね」

「坂柳さんも不吉な予言しないでください!」

そしてその帰り道。

「しかし貴方の植物好きは筋金入りですね」

「植物はいい、動物と違って逃げないから」

「何か悲しくなるのでやめてください」

なんであんなに怯えるのかね? お陰で鳩を用いた手品だけは一向に上達しない。

「さてと……2学期からはようやく、クラス間の争いに本腰を入れられるな」

「ええ、2度に渡る失態で葛城派はほぼ壊滅。葛城君にできることはもう、行き過ぎた戦

術に苦言を呈する程度でしょう。……なんとも無駄な時間を過ごしたものです」

有栖が深く溜め息を吐く。よほどランスとの争いが退屈だったのだろう。コージは前に出たがらないしミスターは自由だから除外するにしても、リUNKELや卍解ちゃんなら有栖も少しは楽しめるだろうか。……ダメだったらもう噂の南雲先輩に喧嘩売りに行くしかないな。

「しかし橘先輩、以前お会いしたときも思いましたが……桐花とうかさんにそっくりですね」

「でしょ？あまりにもそっくりな反応してくれるから、俺もついつい可愛がっちゃうんだよ相手先輩だけど」

「……彼女も来年、この学校に来るでしょうか？」

「ふーむ、五分五分だな。本人は来たがっていたけど、両親は反対するだろうね。……多分俺と関わらせたくないだろうし」

何やら有栖が悲しそうにしているが、あの人達に避けられていることは別に気にしていない。あの人達が俺を心底恐怖し関わりたいがらないのは、別に誰が悪いという話でもないのだから。

桐葉と有栖の夏休み②

夏休みもあつという間に最終日。

明日からはまた血で血を洗うクラス間抗争へと身を投じることになるであろう。それも最も危険かつ重要な戦局へ放り込まれる形で。

そのこと自体には別にこれといって不満は無い。俺は有栖のクイーンであり、Aクラスのエースだ。最も過酷な道のりを歩むのは決められた運命だし、自らに課せられた義務と言つていいだろう。

しかし、しかしだ、しかしだよ。

そんな過酷な環境に放り込まれる前に俺にはこの長期休暇中に、まだやり残したことがあるのではないか？

そのことについて自問自答し、長きに渡る激しい葛藤の末実行することに決める。

そう……

有栖にセクハラしよう。

……もし世界のどこかに俺の思考を読み取れるエスパイがいたとしたら、たぶん今ごろノータイムで警察に通報しかけているだろうけど、お願いだから一旦待つてね。人間何事もまずは話し合いが大事だよ、うん。

それじゃあ順を追って説明しようか、何故俺がそんな言い逃れの余地の無い変態行為を実行しようと思ったのかを。

まず誤解の無いよう弁明しておくが、何も俺が有栖に対して劣情を抑えられなくなつたとかではない。断じてない。俺がそんな脆弱な精神の持ち主なら、夏休み中ひたすら有栖に抱き枕にされ続けて我慢できる筈も無い。あくまで俺は草食だもん。

しかしだ諸君、たとえ草食だとしても所謂性に対して全くの無関心というわけではない。不能でもない。

そりゃ俺だつてごく普通の多感な男子高校生だし、ときには男友達同士で猥談に興じたりしたいときもあるさ、人間だもの。しかし残念ながらリスクを考慮すれば、そんな

ことを気軽にできる筈も無い。例えばそうだな……俺が橋本と「ピー」とか「ピー」とかの話で大盛り上がりしたとして、口の軽いことに定評のある橋本がそのことをポロっと有栖に漏らしたら……地獄の幕開けである。

有栖が激怒して俺が物凄く酷い目に遭う分ならまだいい。俺どちらかと言えばM寄りだからまだ許容範囲だ。

しかし、だよ？ 仮に……もし仮に、1億分の1くらい確率で、自分以外の女性に欲情したことに対して有栖が悲しみのあまり泣き出したりしたら、もう取り返しがつかないよね。マスマン辺りは生ゴミを見る目になるだろうし、クラスでのヒエラルキーも最下位に転落……何よりも俺自身が俺を決して許せなくなるだろうね。俺は好きになつた女の子を傷つけて泣かすような男に成り下がりはたくはないし……ともかく、その手の「ピー」を「ピー」に用いるのはあらゆるリスクの面から避けるべきだ。

では男子高校生の溢れ出る「ピー」を如何にして鎮めるか……そりやもう有栖でなんとかするしかないじゃないか、背に腹は代えられまい。

うんうん、わかるよわかってるよ？ 180cm近い俺がああ純度100%の幼児体型に欲情することが、世間的に見て限りなくアウトに近いアウトなことくらいわかりきってるよ？ 絵面もヤバイって自覚してるよ？ どこからともなく「ロリコン乙」って嘲笑も聞こえてくるし……。

まあ確かに客観的に考えれば、俺にロリコンの気があるのはもはや否定できないかもしれない。はいはい認める認めますよ。でも仕方ないじゃないか。

有栖は可愛い。

よほどのひねくれ者でない限り、ほぼ全ての人が同意してくれるだろう。

有栖は賢い。

よほどのひねくれ者か桁外れの天才でない限り、ほぼ全ての人が同意してくれるだろう。

有栖は性格悪い。

よほどの聖人君子でない限り、やはりほぼ全ての人が同意してくれるだろう。

有栖は幼児体型。

間違いなく全ての人が同意してくれる。

そして……有栖はエロいのだ。

これについては多分意見が分かれると思うが、血の繋がった家族を除けば一番彼女と深く接してきた俺にとって、疑う余地の無い事実だ。普段はそうでもないが何かの拍子にネジが外れたとき、何か凄くエロくなると最近わかった。思考回路もエロいし有栖本人もエロい。あんなエロテロリストと同棲なんかしていたらおっぱい星人でも多少は揺れるぞ。まるで動かないとしたらそれは確実に生粋の男色だ、間違いなし（断言）。

つまり俺は元々ロリコンの気があるから有栖が好きになったのではなく、有栖と深く関わったからそういう嗜好になったのである。

閑話休題、それでは具体的に俺が何をしようというのか？押し倒して「ピー」して「ピー」するの？……否だ。というか論外だ。まず大前提として有栖にセクハラはしたいけど、あの子を傷つけたくはないし。それについて先日そういうのは正式に付き合ってからだと偉そうにお説教したばかりだというのに、その直後に俺がそんな過ちを犯したら確実にブチ殺される。本気で怒った有栖ちゃんはマジで怖いのだ。

ならばどうするのか。相手を傷つけないように行うセクハラ……一休さんでも投げ出しかねないような無理難題に対し、我が灰色の脳細胞を馬車馬のように酷使した末に出した答え、それは……

有栖が寝ているうちに、こっそり浴衣に着替えさせちやおう作戦。

はいストップ。まずはとにかく俺の話を聞いて欲しい。きつとこの作戦を聞いた男性諸君は必ず疑問を抱くだろう……衣装のチョイスがおかしいだろうと。

まずこの作戦を実行すればセクハラ認定を受けるのは間違いない。だって無許可で脱がすんだからな、一時的に有栖ほぼすっぽんぽんになっちゃうからな。だがこの程度

のセクハラならこれまでの経験から、有栖の心に深い傷を残すことはないと言言できる。……いやまあ勝手に剥いたら流石にボロクソに怒られるだろうけど、そこはまあ致し方ない。

しかし着替えさせる衣服に対して、ケチをつけたい人は多くいるだろう。だって浴衣って別にエロくないし。目の保養にはなるけどもよほどの玄人でなければ、浴衣姿に欲情するのは至難の技だ。あられもなくはだけさせたりすれば話は別なのだが、それだと浴衣である必要性が薄れてしまう。それ服なら何でもいいじゃんってなる。季節的にはドンピシャな格好だが、それなら水着で良いじゃないかと多くの人が考えるだろう。

……だが甘い！その判断はザツハトルテより甘いと言わざるを得ない！

浴衣だけならば確かにエロくはない。だが思い返して欲しい……この作戦を実行すれば、その過程で必然的にほぼ生まれたままの姿の有栖を目にすることになる。あとは優れた記憶力と豊かな創造力を複合させれば、可愛いらしい浴衣姿とそれを取っ払った格好のギャップから、十二分のエロスを醸し出すことができるだろう。逆にほとんど差の無い水着ではそれほど大したギャップは生じない。つまりこつそり着替えさせるというシチュエーションにおいては、浴衣は水着をも上回るポテンシャルを秘めているということである。

それに水着だとアレだ、下着まで脱がさないといけなくなるだろうが。草食系たる俺にそこまでの度胸は無い。

「……それで？何故このような愚行を犯したのか、何か弁明があるなら聞きましょう」
「有栖の浴衣姿が見たかったからです」

正座をさせられた状態で犬畜生を見る目をした有栖に正直にそう述べたら、側頭部を杖でぶん殴られた。……おのれワシントン、役に立たない教訓を残しやがって。

「はあ、貴方という人は……着て欲しいなら素直に頼んでください。貴方に頼まれたら私は断らないとわかっているでしょう？」

「夏休みも終わることだし、せつかくだから凄くアホなことをやりたくなくなった。作戦実行中のバレるかバレないかのスリルは最高でした」

またぶん殴られた。流石にめっちゃ痛い。

「まったく……いいですか桐葉、今回貴方のしたことは歴とした性犯罪ですよ？学校側

に包み隠さず報告すれば退学は確実。下手すれば警察沙汰なので、ポイントをいくら持つてようが問答無用でしょうね」

「多分そうだろうな。……まあやっちゃったもんは仕方ないっしょ」

有栖がこの件を学校側に訴えるつもりなら止めやしない。彼女には俺を糾弾する権利がある。

「……予想はしてましたがその態度からしてやはり、貴方を私のもとに縛りつける脅迫材料にはならないようですね」

「まあね。一度した約束を破るくらいなら、社会的に死んだ方がマシだよ」

「……………はあああああああ」

溜め息をつかれた。それはもう深い、深い溜め息だった。「こいつマジでどうしようもねえアホだな……」つて副音声で聞こえてきそうなくらいの。桐葉君泣いちゃう。

「まあいいでしょう……私が提示する2つの条件を呑むというのでしたら、今回の件は不問に致しましょう」

「マジで？ やったあ、有栖ちゃん大好き！」

「調子に乗らないでください、死にたいのですか？」

「生きていきたいです」

微笑と共に有栖から溢れ出した怒りのオーラに、危険を感じとった俺はおとなしくし

ておくことにした。今の有栖に対して悪ふざけは死だ。

「1つ目はもう金輪際二度と、退学になりかねないようなバカなことはしないと約束してください。私の心臓によくありません」

「マジか、由々しき自体だそりや。了解、本条桐葉の名に誓うぜ」

「2つ目は……」

以前橋本君も着たあのメイド服を、今ここで着てください」

………あや？

「あの有栖、いや有栖様？冗談だよな？冗談だと言ってお願いだから」

「いやですな桐葉、私がそんなくだらない冗談など言う筈ないじゃないですか」

「いやだつてさ有栖、あのメイド服お前にピツタリじゃん。180cmで割と着痩せする俺があんなの着たりしたら、それはもう橋本以上におぞましい絵面に――」

「だから罰になるんじゃないですか♪」

有栖はにこやかに笑みを浮かべてはいるが、目はまったく笑っていない。どうやら想定以上に彼女の怒りを買ってしまったらしい。正直凄く嫌だが仕方が無い、それで有栖の機嫌が直るなら……つてちよつとちよつと？

「なんで俺の服脱がそうとすんの？」

「貴方にされたことをそっくりそのままやり返すだけですか？」

「いやいやいや、俺はお前が寝てる間に全部終えてたから受ける精神的ダメージは決して等価じゃー」

「うるさいです、往生しなさい」

「ちよ、おま……」

有栖の体のことを考えると力づくで振り払うわけにもいかず、結局ろくに抵抗できず追い剥ぎに遭った。そして有栖が自分の部屋に取りに帰る間パンーで待たされ、メイド服に着替える様をじっくり観察された挙げ句にダース単位で写真を撮られた……わかつてはいたけどこの子、真性のサディストだ。

「あー酷い目にあつた。一時のノリに任せ過ぎるのもよくないね、うん」

ようやく許しを貰って帰宅し、今日の俺の奇行についてそう結論付ける。今から考えると我ながらトチ狂ったことをしたものだ。もしかして暑さで脳が沸いちやつてたか

もね。

……しかし意図しない収穫もあったな。俺にとっては決して歓迎するものではなかったけど。

俺が抱える欠陥は未だに、まるで改善の兆しすらないと今回はつきりした。このままでは遅かれ早かれ……

有栖は俺を凌駕し、どうあがいても追いつけなくなるだろう。

2 学期

2 学期が始まった。

一般的という概念をゴミ箱にダンクシュートしたかのようなこの学校でも、長期休暇明けはごく普通に始業式から始まる。誰が得するんだと問いたくなる校長の長い話はまあ仕方無いとはいえ、ちよつと全国大会で優勝したぐらいで全校生徒の前で表彰とか勘弁してほしい。俺が一心不乱に空手に青春を捧げていたなら胸を張れたかもしれないが、俺幽霊部員ですから。出稼ぎ目的で入部した傭兵ですから。肉体の鍛練こそ1日たりとも欠かさなかつたが、肝心の空手に関しては以前はまっていたときに身に付けた技術頼みだつたし、そんなんで栄光を掴んだとしても特に感慨も無いなあ……さつさと退部届け出しにいこつと。

しかし教師達の横に控えてる生徒会役員達の方から、やたら俺を値踏みするような視線をちくちくと感じる。ふむ……あのニヤニヤ笑つてる金髪のものすげーイケメンが噂の南雲先輩か。生徒の規範となるべき生徒会役員が金髪つてどうなのさ？……茜先輩の紫よりマシか。

午後の授業は2時間連続ホームルームになっている。次の特別試験の説明でもあんなのかね？

「今日から2学期に入るわけだが、これから1ヶ月間体育祭に向け体育の授業が増えることになる。今から新しい時間割と体育祭の資料を配るので、しっかり確認しておくように」

担任の真嶋先生が前の席の生徒に資料を回す間、運動の得意な生徒からは歓声が、苦手な生徒からは落胆の声上がる。うちのクラスは得意分野が学力よりな生徒が多いので、後者の方がやや多いかな。

「先生、この体育祭も特別試験の一環でしょうか」

「どう受け止めるかはお前達に任せるが、勿論クラスポイントに影響はある」

ランスこと葛城の質問に真嶋先生はやけに曖昧な返事を返す。相変わらずこの学校はひねくれた言い回しが大好きなようだが、クラスポイントが変動する以上適当にするわけにはいかなかった。しかしまた有栖が参加できそうにないイベントかよ。あんまりうちのお嬢様のやる気を削がないでほしいんだけど。

まあとりあえずルールの確認をと思い、配られた資料に一通り目を通してみるが……「資料を読み進めると気づくだろうが、今回の体育祭では全学年を2つの組に分けて競う方式を採用している。このうち赤組はAクラスとDクラス、白組がBクラスとCクラスという組み合わせになる」

ありやりや、ババ引いちゃった。

格差が無いよう分けるつもりなら真つ先に思いつくであろう組み合わせだが、正直ウチのクラスは総合的にそこまで運動が得意でない。その上味方になるDクラスはただでさえまとまりが無い上に、凄いポテンシャルを秘めた生徒は複数いるがどれも扱いにくい。須藤君はすぐカツとなるし、コージは手を抜くし、ミスターにいたってはまともに参加するかも怪しい。

味方にするなら柴田君やザキちゃんと優秀な駒を多数抱え団結力もある卍解ちゃん達Bクラスか、山田君を筆頭に肉体派が多くゲスくて狡猾な戦術を実行できるリウンケル達Cクラスが良かったけど……まあ、決まってしまったものはしょうがないか。人生切り替えが大事ということで、俺は肝心の体育祭のルールについて目を通す。

・全員参加競技の点数配分……個人競技については結果に応じて1位15点、2位12点、3位10点、4位8点が組に与えられる（5位以降は1点ずつ下がっていく）。団

体戦の場合、勝利した組に500点が与えられる。

・推薦参加競技の点数配分……結果に応じて1位50点、2位30点、3位15点、4位10点が組に与えられる（5位以降は2点ずつ下がっていく）。なお最終競技のリーグでは3倍の点数が与えられる。

・赤組対白組の結果による影響……全学年の総合点で負けた組は等しくマイナス100クラスポイント。

・学年別順位による影響……1位のクラスはプラス50クラスポイント。2位のクラスは変動無し。3位のクラスはマイナス50クラスポイント。4位のクラスはマイナス100クラスポイント。

……旨味少な。

赤組が勝ち学年で1位でもたつたプラス50なのに対し、赤組が負け学年で最下位ならマイナス200……実にハイリスクローリターンなイベントだ。全力で取り組む必要があるのに、これだけだとモチベーションも中々上げづらい。それについては学校側も理解してらしく、個人で活躍するとボーナス的なものも貰えるとも記載されている。

・個人競技報酬（次の中間試験に適應され、他人への譲渡は不可）……各個人競技で1位を獲得した生徒には5000プライベートポイント、もしくは筆記試験における3点分の点数。

2位を獲得した生徒には3000プライベートポイント、もしくは筆記試験における2点分の点数。

3位を獲得した生徒には1000プライベートポイント、もしくは筆記試験における1点分の点数。

最下位の生徒はマイナス1000プライベートポイント（所持ポイントが1000ポイント未満である場合は筆記試験における点数を1点減点する）。ただしこの恩恵で点数が100を超えることはない。

・反則事項について……各競技のルールに違反した者は失格同様の扱いを受け、悪質な者については退場処分やそれまでの獲得点数を剥奪も検討。

・最優秀生徒報酬……全生徒の中で最も高得点を獲得した生徒には10万プライベートポイント。

・学年別最優秀賞生徒報酬……学年で最も高い得点を獲得した生徒3名には各1万プライベートポイント。

やっぱ旨味少な。

特に俺にとつてはメリツトが無いに等しい。昨日学校に2億ほど返還したとはいえ、俺はまだ不必要なほど膨大なプライベートポイントを所持している。今さら5000だの10000だのをぶら下げられてもねえ……。

点数にしたつて他人に譲渡できない上に結局上限が100なら、自力で満点を取れる俺には何の意味も無いじゃないか。……いや、仮に上限が100を超えようが別に興味無いか。有栖との戦いは純粹な知恵比べでなくてはならない。運動能力の差が介入した上での勝利など興醒めもいいところだ。

さらにリターンがあるならば当然リスクもあるわけで、全競技終了後に学年で下位10名の生徒にはペナルティが科されるんだと。無人島試験で有栖が容赦なくペナルティを科されてたし、どうせ今回もそうなんだろうな。

「先生、ペナルティは学年ごとに異なるとのことですが、我々に科されるものはどのようなものでしょうか？」

「今年度の1年生に科されるペナルティは、今学期の中間試験における10点分の減点だ。どのような方法で減点されるかについては試験説明時に、下位10名の発表とともに通告する決まりになっている」

はい最悪。

ただの運動音痴な生徒なら中間試験までの間、自分にペナルティが科されるかどうかさぞややきもきさせられるだろうが、心疾患で競技に参加できない有栖はもう既にギロチンが振り下ろされているようなものだ。俺達の神聖な闘いにつまらねー横槍入れやがって。

「有栖、次の点数勝負はノーカンでいいぞ?」

「お気遣いは結構です。後で真嶋先生に中間テストの点数を10点分、売ってもらおうよう交渉しにいけますので」

「……ちなみに何ポイントで買えるんだ?」

「以前尋ねてみたところ、1点につき10万ポイントだそうです」

つまり100万か。おとなしく俺の提案を飲めば払わなくていい大金を敢えて払うあたり、相変わらずこの子は負けん気が強いね。

ひとまずルールについての説明が終わり、続いて競技の詳細について先生が説明していく。『全員参加』は文字通りクラス内全員が参加する種目で、『推薦参加』はクラスから選抜された生徒……要は運動ができる奴のための種目。推薦といってもクラスの合意があれば自薦も可らしい。

……BとCは普通に敵だが、学年別の総合点で勝つためにはDにも注意を払う必要があるな。こんな団結しにくい仕様にするなら普通に四つ巴にしたらいいのに。

「種目の詳細は全て記載されている通りだ。変更は一切無い」
「……これを、1日で？」

全員参加種目

- ① 100m走
 - ② ハードル競走
 - ③ 棒倒し（男子）
 - ④ 玉入れ（女子）
 - ⑤ 男女別綱引き
 - ⑥ 障害物競走
 - ⑦ 二人三脚
 - ⑧ 騎馬戦
 - ⑨ 200m走
- 推薦参加種目
- ⑩ 借り物競走
 - ⑪ 四方綱引き

⑫ 男女混合二人三脚

⑬ 3 学年合同 1200 m リレー

誰が呟いたのかは知らんが、なるほど中学の頃とは比べ物にならないほどギチギチなスケジュールになりそうだ。

「競技の多さに関しては当然学校側も配慮してある。この学校の体育祭では応援合戦や組体操などは一切用意していない。あくまでも体育祭は体力と運動神経を競う行事だからな」

逆に言えば適当に流せる種目は一つも無いということか。普段からちゃんと鍛えてない生徒は、後日筋肉痛で地獄の苦しみを味わうだろうな。

「それから非常に重要なことだが、今回の体育祭は競技に参加する人員や順番を全てお前達自身で決め、ここにある参加表に記入し担任の私のもとに提出することになっている」

「全てとは文字通りの意味でしょうか？」

「ああ。たとえば全員参加の1000m走なら、何組目に誰が参加するかまでお前たちが話し合っただけで決める必要がある。提出期限は体育祭の1週間前から前日の午後5時まで。それ以降は如何なる理由があっても変更は受け付けないし、もし提出期限を過ぎた場合

はランダムに割り振られることになるので注意するように」

……もし仮に参加表の内容がよそのクラスに漏れたりしたら、さぞや苦しい戦いを強いられることになる。リユニケルあたりが狙うならそういう方向性だろうなね。

「当日欠席者が出た場合はどのようになるでしょうか？個人競技ならともかく団体競技の場合は、競技そのものが成立しない場合がありますが」

『『全員参加』の競技において必要最低限の人数を下回れば失格となる。例えば騎馬戦であれば1騎少ない状態で対決することになるな。ただし体育祭の花形でもある『推薦参加』競技の場合は、特例としてポイントを支払うことで代役を立てることを認めている。必要な額は各競技につき10万プライベートポイント。高いと見るか安いと見るかは自由だ」

いや高いよ。最優秀賞生徒報酬が跡形もなく打ち消されるってどうなのよ。

その他、体調を崩したり怪我をしても余程の重症を除けば、棄権するかどうかは生徒の自主性に任せるそうだ。まあ今後社会へ進出すれば、体調を崩そうが休めない状況なんて掃いて捨てる程あるからね。

「これで説明は以上だ。……質問がないようならばここホームルームで打ち切る。次の時間は第一体育館に移動し、各クラス他学年との顔合わせとなる。この時間の残り30分はお前達で有効に使うといい」

「そう言つて真嶋先生が教卓から退くと、クラスの大半は無言で視線を有栖へと向けた。」

夏休みに行われた2つの特別試験で、クラスに大きな損害を与えたランスはリーダーの座から陥落した。今やランスに付き従うのは損得勘定抜きで彼を慕う戸塚のみ。鞍替えした者の中には内心有栖を快く思っていない生徒も多いだろうが、そいつらがAクラスで卒業したいと思うのなら、面と向かつて逆らうなどできはしないだろう。少なくともランスが良いように翻弄されたリユンケルに、その取り巻きでしかなかった奴等が太刀打ちできるわけないしな。

クラスメイト達からの視線を受けた有栖は、カツカツ杖をつきながら露骨に億劫そうに教壇にたった。あつ、こいつ今回真剣に取り組む気ゼロだ。

「今回の体育祭の方針ですが……私が皆さんに出す指示は2つだけで、あとはもう葛城君にお任せしようとおもいます」

開口一番に丸投げを宣言した有栖に、クラス中はざわめきを抑えられない。まあ無理もない、根回しして特別試験を2つも棒に振つてまでリーダーの座を掴んだというのに、またランスに指揮を取らせるといふのだから。

「……どういふつもりだ坂柳。この期に及んでまだ俺を陥れ足りないというのか？」

「陥れる、ですか？ 葛城君が何を仰りたいのかわかりませんが……知つての通り私は体

が不自由ですので、どの競技にも参加できません。必然的に全体参加競技も全て棄権しなくてはなりませんし、クラスに多大なご迷惑をおかけすることになります。……そんな人間に色々と命令されたりすれば、きっと皆さんも少なからず不満に思うでしょう？」

うーむ、いい感じにもっともらしい理論武装をしたけど……実際は自分が参加できないイベントの指揮なんて正直面倒だから、どうにかうまいこと言って丸投げしたいのだろう。ランスもそれを感じ取ったのか、深々と溜め息をついてから席を立ち、有栖の隣に移動する。

「いいだろう、任されたからには責務を果たす。……それで、2つの指示内容はなんですか？」

「1つは全体参加、推薦どちらも完全能力制で組み合わせを決めること。もう1つは……推薦競技全てに桐葉を出場させることです」

「……なるほど、どうやら本気で勝ちに行くつもりのようなだな。それを聞いて安心した。……しかし大丈夫なのか？参加競技全てに出場するとなると、いくら本条といえど体力の消耗がかなり激しいものになるぞ？」

「貴方の尺度で桐葉を測れるなどと思いきや上がらないでございます。……問題ありませんよ、私のクイーンに不可能はありませんから」

丸投げしといて当たり強いなオイ。

まったく、ウチのお嬢様はほんとに人使い荒いなあ……ただまあ好きな女の子がそんなだけ期待してくれんなら、それに応えるのが男の義務ってやつだよ、うん。

体育祭準備（前編）

2時間目のホームルームは全学年の顔合わせが行われる。総勢500名近くの生徒達と教師が体育館に集い、生徒達は赤組と白組でそれぞれ分かれていた。ウチのクラスは基本的に優等生揃いなので、集合するや否やクラスで固まっておとなしく並んでいる中、俺はというと……

むいー……むいー……

「……………」

たまたま茜先輩を見かけたので、後ろから忍び寄って両の頬を引っ張っていた。

「おおつ、すげーもち肌」

「………何の真似であんなおあええうあおんか本条君いおううん？」

「んー、後輩によるのどかなスキンシップーおつとあぶね」

不意に鳩尾めがけてエルボーが飛んできたので、頬から手を離して肘を受け止める。

「な・ん・で、今のを防げるんですか!? 空気を読んで当たってくださいよー!」

「結構無茶苦茶言いますね先輩。ハイハイわかりましたよ、今度引つ張ったときはおとなしく喰らいますから」

「いや今度とかありませんから!」

まったくもう、とぷりぷり怒って自分のクラスのもとへ戻っていった。相変わらず可愛いなあの人。

好き放題玩具にして満足したので、自分のクラスの有栖の下へ舞い戻る。身体の都合上パイプ椅子に座っているのですごくわかりやすい。

「相変わらず橘先輩と仲が良いようですね。でもあまり度が過ぎると、いずれ大変なことになるですよ」

「ああ大丈夫大丈夫。あの人優しいから、あれくらいじゃれ合いではいちいち目くじらを立てないよ」

「いえ、そうではなく」

「んむ……?」

「私の目の届くところであまり仲良くされては、私が彼女に何をしでかすかわかったものじゃありませんよ?」

なんか恐ろし気な警告をしたかと思えば、露骨に目線を逸らされた。よく見るとなか耳元も赤い。

「どしたー有栖？もしかして妬いてんの？」

「……いけないですか？」

「いけないないな、うん」

とりあえず可愛いからオールオツケー。

「……貴方と交際しているわけでもないのに束縛が過ぎると自覚していますし、橘先輩は堀北会長に懸想してらっしゃるから大丈夫だと存じ上げていますが……それでも胸が締め付けられる思いがします」

「いやマジかよ、緊急事態じゃんそれ」

心疾患持ちが胸を締め付けられるとかシャレになってない。今後二度と茜先輩と関わらない方がいいか……？少し寂しくなるが、有栖の体に障るなら背に腹は代えられない。

「……あくまで比喻ですのでご心配ならず」

「絶対ダメでしょお前がそんな比喻使うの」

「その点については申し訳ありません。……貴方に橘先輩と関わるなどは言いませんが、ああいったやり取りはできれば、私の視界に入らないようお願いします」

「ん、りよーかいりよーかい」

さて、ようやくどの学年どのクラスもまとまりだしたことだし、そろそろおとなしく

するか。

集められた生徒達が床に座ると、上級生らしき生徒数名が前に出てきた。

「俺は3年Aクラスの藤巻だ。今回赤組の総指揮を執ることとなった。……まず1年生には1つアドバイスしておくが、体育祭は非常に重要なものだと言いたい。この経験は必ず別の機会でも活かされる。これからの試験には一見遊びのようなものもあるだろうが、それら全てが生き残りをかけた重要な戦いになる」

教師だけじゃなく生徒までこうなのか。この学校では誰かにアドバイスするときは、必ず抽象的に伝えなければならぬ決まりでもあんなのかね？

「今はまだ実感もやる気も無いかもしれない。だがやる以上は勝ちに行く……その気持ちは全員が共通の認識として持っておけ」

前回と前々回の特別試験で勝つことを放棄した俺には耳の痛い話だぜ。反省反省。

「最後の1200mリレーを除き、どの種目も学年別のものばかりだ。今から各学年で方針を好きに話し合ってくれ」

藤巻先輩の言葉を皮切りに、AクラスのメンバーはDクラスのもとへ集まったので、俺も有栖をパイプ椅子ごと持ち上げて集団に合流する。

「奇妙な形で協力することになったがよろしく頼む。こちらとしては仲間同士の揉め事は避けたいと思っている」

「僕も同じ気持ちだよ葛城君。よろしくね」

平田君とランスはお互い友好的な態度で歩み寄っているが、仲間といつてもこれまで争ってきた相手と、いきなりおてつないで仲良しこよしとはいかないだろう。……ほら、Dクラス男子の大半から俺に向けられた敵意とか怨嗟の視線がそれを物語っている。原因はたぶん有栖の血迷ったペロチュー。

やがてランスがクラス間の協力関係について話を進めようとしたが、何やら突然白組サイドがやけに騒がしくなった。

「話し合いをするつもりはないってことかな？ 龍園君」

正解ちゃんの声が見ると、リユンケル率いるCクラスが体育館から立ち去ろうとしていた。正解ちゃんの問いかけに、両ポケットに手を突っ込んだイキリMAX状態のリユンケルは振り返って不敵に笑う。ちよ、やめて。ジャージ姿でそんな態度取られたら腹筋がヤバイから。

「こっちは善意で去ろうってんだぜ？ 俺が協力を申し出ようが、どうせお前ら信じねえだろ。ならばつきり言って時間の無駄だ」

「なるほどー。私たちのことを考えての判断なんだねー。なるほどー」

「そういうことだ。感謝するんだな」

「……ねえ龍園君、協力しないで勝てる自信があるの？」

「クク。さあな」

「正解ちゃんがどうか説得しようとするもリユンケルは鼻で笑い、結局Cクラスはさっさと引き上げてしまった。

「彼がCクラスの王様、リユンケルさんですか……なるほど、貴方からお聞きした通り随分と破天荒な人物のようですね」

「リユンケルも有栖には言われたくねーと思うけど……まあそうだね。きつと今回もさぞや悪辣な戦略を立てているだろうさ」

「となれば、一之瀬さん達との話し合いを拒否したのは英断かもしれないですね」

「リユンケルのやり口は基本ろくでもないからねえ、正解ちゃん達は間違いなく協力しないだろうね」

いつものように仲良く談笑していると、Dクラスの生徒達の関心がこちらの方……正確にはパイプ椅子に座る有栖に向きだした。ふむ……まあ立場上仲間だし、一言断りを入れておくべきかな？

「えー、Dクラスの皆。見りゃわかると思うが、有栖はボルボックスよりも弱つちいから戦力にカウントしないでくれ」

「貴方にとって私は微生物以下ですかそうですか。怒りますよ」

「いめんちゃい」

「まったくもう……」

俺の軽口を嗜めてから、有栖はDクラスに社交辞令スマイルを向けた。うん、実に白々しい。

「しかし桐葉の言う通り、残念ながら私は戦力としてお役に立てません。全ての競技で不戦敗となります。皆さんにご迷惑をお掛けすることについてまず最初に謝らせてください」

「謝ることは無いと思うよ。誰だってその点を追及することはないから」

おお流石平田君、実に紳士的な対応だ。無人島試験でたかがマイナス30ポイントされたぐらいで不満そうにしていた、どっかのバカとは大違いだぜ。おい聞いてんのか戸塚? んん? 」

その後平田君とランスの話し合いで、協力関係は互いに邪魔し合わない程度に留め、参加競技の擦り合わせなどは行わないことに決まった。まあ情報漏洩のリスクを鑑みれば、手堅いランスらしい譲歩の仕方だな。

放課後になり、俺達Aクラスはグラウンドにて体力測定を行うことにした。プライベートポイントに乏しく、毎回テストのたびに赤点スレスレの生徒を多く抱えるDクラスなんかは、入賞の際の報酬を巡って揉めに揉めるかもしれないが、俺達Aクラスが第一に優先すべきはクラスポイントなので、有栖の提案した完全能力制でいくことに誰も異議を唱えなかった。

そうと決まればすぐさま次のステップ、Aクラスの運動能力を測ろうと言うわけだ。

「さーて気合い入れろよマスマン、ファルコン。君達頭を使う試験じゃクソの役にも立たないんだからここで目立たなきや」

「蹴りたいの?」

「よせ神室、悔しいが的を射ている」

「ハア……面倒なのは遠慮したいんだけど」

「ダメですよ真澄さん。貴方は女子の中では推薦競技候補筆頭なのですから、しっかりしてもらわないと」

「勘弁してよ……」

本人はこの通り億劫そうだが、有栖の言う通りマスマンは美術部員とは思えないほど高い身体能力を有している。同性相手に遅れをとることはそうそう無いだろう。なん

だったら男子でも戸塚程度なら一捻りだ。

まずは綱引きや、もしかしたら騎馬戦でも重要になってくる握力。学校側から借りてきた測定器で順番に測ることになり、まずはリーダーのランスが挑戦することに。

「ぬうっ……………」

ランスは渾身の力で測定器を握り込むが、記録係を買って出た有栖が測定器に示された数値を覗き込むと、何故か呆れたように溜め息を吐いた。何事かと思いい俺も測定器に目を向けると……………うわぁ。

「49てお前……………」

「……………不服か?」

「不服ですよ。桐葉にも負けないその立派な体格は飾りですか?」

「こんなもん四捨五入したら0じゃないか」

「何故十の位を四捨五入した!?!」

「まったく情けねーな。……………それじゃここはゴリラから生まれた女、マスマン!その身に秘めた脳筋パワーで格の違いってもんを教えてやれい!」

「アンタいつか蹴るから、絶対蹴り殺すから」

俺が測定器を投げ渡すと、マスマンはぶつくさ文句を言いつつもおとなしく測定器を握りしめる。さてさて、どんなびつくり記録を叩き出すのか……………

「葛城より低いじゃねーか！38てお前……それでもゴリラウーマンか!?」

「女子にしては高いんだから別に良いでしょうが！あと誰がゴリラウーマンよ!?」

「しゃしゃり出てきてこの程度ですか。ガツカリですよ……ゴリラウーマンさん」

「喧嘩売ってるの？ねえ、絶対喧嘩売ってるでしょアンタら……!」

額に青筋を浮かべ拳を握りしめるゴリラウーマン。まあ彼女の言い分もまちがってはいないし、これ以上煽ると俺はともかく有栖が危険なので、測定器を回収し橋本に渡す。

「橋本か、さつさと終わらせろー」

「どうせ面白味も無い数値ですし、期待するだけ損でしょうね」

「アレ!?俺に対して凄いい塩対応!?!」

釈然としない思いを抱きつつも、橋本はおとなしく計測を行った。結果は57.5……予想通りのまああまあ高めの数値でやはり面白味が無い。

「それじゃ皆さんお待ちかね！Aクラスきつての武闘派、ファルコンの測定を行います！格の違いを思い知らせてやれ！」

「期待してますよ、鬼頭君」

「任せろ」

頼れる男ファルコンは有栖の激励にも、心を乱されることなく無言で測定器を握りしめた。……ここでも手袋は外さないんだな。

「79.6、か……」

「お見事です」

その気になればリングも潰せそうな圧倒的な数値に、クラスメイト達も驚愕を隠せない。流石はファルコン、頼れる男である。

「さーて次は……」

「お前だ本条」

ちよつとしたお茶目で戸塚あたりにでも振ろうと思つていたのだが、ファルコンはやや強引に測定器を握らせてきた。え？俺？

「このクラスで俺に張り合えるとしたらお前だけだ。お前の言う通り俺には学が無いが、筋力にはそれなりの自信と自負がある……俺の挑戦、受けてくれるな？」

「おいおい勘弁してくれよファルコン。そんな風に挑戦状を叩きつけられたんじゃ……真つ向から振じ伏せたくなるじゃないか」

何やら大きな思い違いをしているようなので、俺は測定器を全力で握りしめる。体格の違いから純粋な力比べなら俺に勝てるかと踏んだのだろうが……ブツシユドノエルくらい甘い考えだね。

計測し終わった測定器を返すと、示された数値にファルコンが目を見開いて驚愕する。

「数値……100……!?!」

「その測定器100までしか測れないから意外と不便だね。……握力は体格や腕の太さだけで決まるもんじゃないよ」

「……どうやら俺はまだ青かったような」

ファルコンが己の未熟さを自覚した後は恙無く測定が進み、四方綱引きは握力上位4名……俺、鬼頭、橋本、清水に決定。そしてその後も様々な測定を済ませ、推薦競技に参加生徒を選び終えその日は解散となった。

……蓋開けたら推薦競技はほとんど坂柳派の古参メンバーで埋まった。有栖が自身を抱えるハンデを考慮し、運動能力に優れた生徒を優先して派閥に取り込んでたから当然と言えば当然か。

体育祭準備（後編）

体育祭期間中は学校側の配慮か体育の授業が多くなり、なおかつその大半を自由に使っているとのことだ。そんなわけで俺達Aクラスはグラウンドにて参加競技の練習を行うことにした。放課後とかだと他クラスの偵察とかを警戒してノビノビやれないからね。

「〜♪」

「ぐっ……このっ……！」

「マジかよ……」

ただ今俺、橋本、戸塚の3人は仲良く競走を行っているのだが、浮かべている表情は余裕、焦燥、困惑と三者三様だった。……さらに俺と橋本は戸塚と違い、右足と左足と紐でがつちり括つているという状態だ。

「はいゴール。……戸塚さあ、もうちょっと速く走ってくれないと練習になんないじゃんか」

「うるせえ！なんでお前ら二人三脚なのにそんな速いんだよ!？」

「ただ君がトロいだけでしょー？」

「いや、正直俺も頭がついていかないぞ……言われた通り思いっきり走ったけど、なんでピツタリ合わせられるんだよ……？」

「そんなもんお前、まったく同じペースで足を動かせばいいだけだよ」

「なにそれこわい」

その後男女混合二人三脚のペアであるマスミンにチェンジして走ったが、やはり戸塚は大きく引き離されてしまいましたとき。

「ハア……ハア……バカな、俺が女子に負けた……う？」

「まあ2回目だし、マスミンも女子の中ではトップレベルに速いから情状酌量の余地はあるんじゃない？……情けねーことには変わりないけど」

「グボオツ!？」

「慰めたいのかトドメ刺したいのかどっちなのよ……というかペア変えてくれない？打ち合わせなしで寸分違わずピツタリ合わせてきて何か怖いんだけど」

「ワガママ言っつてはダメですよ真澄さん。他でも無い貴方だからこそ私もギリギリ我慢できるのです。今さら他の方に代わるとなると、いったい私がどうなってしまうかわかりませんよ？」

「一番ワガママなのはアンタでしょうが……」

有栖は随分とマスマミンを信頼してるみたいだね。マスマミンの方も口ではぶつくさ言いなながらも満更でも無さそうだし、意外と良いコンビかもね。

その後、まとめ役であるランスの指示で綱引きの練習を行うことになったが、ほとんどの生徒のモチベーションがいまいちだった。

うーん……どうやら特別試験において2度に渡る失態を犯したランスの指揮能力を疑問視しているようだ。仕方がない、今回は普通に勝ちに行くので俺がサポートを買って出るとするか。

クラスを半分ずつ分けて引つ張り合いをしている光景をぎつと見回してから……

「塚地、中島、西、練習だからって手を抜くなー、全部バレバレだぞー?」

「「えっ?!?……ご、ごめんなさい!」」

「それから竹本、島崎、里中、引つ張るタイミングが周りとズレてるぞー。パワー云々以前に基礎的なところからきっちりしていけー」

「「わ、わかった!」」

「なんで全部わかるんだよ……」

「……この際もう全部お前が仕切った方が良くはないか?」

呆れたようにランスはそう言うが、有栖じゃなく俺の方がクラスをまとめるのに相応しい……とか言い出す輩が湧いてきたら面倒じゃないか。俺は絶対リーダーなんてや

りたくない。シンプルに面倒だしつまらない。

そして放課後、再びグラウンドにて騎馬戦の練習を行うことになった。

騎馬戦のルールは男女共通で時間制限方式で、3分間の間に倒した敵の騎馬と残っていた騎馬の数に応じて点数が決まる仕組みだ。

各クラスから4人1組の騎馬を4つ選出（余った人は予備人員）され、8対8の形になる。最後まで生き残るか相手の騎手の鉢巻きを捕れば50点入り、各クラスに一騎ずつ存在する大将騎馬は倍の100点を保持する。

総じて、結果次第では一気に数百点をぶん捕れる体育祭の目玉競技だ。

まあ大将騎馬は当然Aクラス最強である俺が務めるとして、今回俺が勝つために騎馬役を選んだ3人は……橋本、司城つかさき、里中だ。俺の人選の意図を理解できないのか、ランスが怪訝そうに尋ねてくる。

「何故鬼頭を外したんだ？確かに3人とも運動能力は優秀な方だが、大将騎馬なら万全を期すべきだろう」

なるほどランスらしい堅実な意見だが……俺はリスクを負ってでも攻撃を是とする

坂柳派筆頭だぜ？大敗の可能性を上げてでも、圧倒的勝利を求めるのが美学ってもんだ。

「じゃあランスに1つ問題。俺を含めた4人の共通点は何でしょうか？」

「……女子生徒から一定の人気があることか？」

「ピンポンピンポン！正解したランスには飴ちゃんをやろう」

「いらん」

「干し柿味だ」

「いらんと言っている」

そう、俺達4人は例外無く女子にモテる。ある筋からの確かな情報によると、女子生徒達による学年イケメンランキングにおいて、里中が1位、司城が3位、俺が4位、橋本が10位なんだそうだ。まあ俺は里中や司城ほど顔立ちが整ってるわけじゃないし、何だったら5位のコーギーにもルックスでは劣っていると思うが、イケメンランキングなのに審査基準は顔だけじゃなく、色々と加点要素が多かったため4位なんだろう。まあ確かに顔だけなら司城が1位だろうしな。

閑話休題、とにかく俺達は女子から多くの支持を集めていて、こうして集まった現在女子側の大半から歓声が聞こえ、男子側の大半から昨日のDクラスと似たような敵意のこもった視線を多く感じる。

「練習でさえこうなんだ。きつと本番ではさぞかし目立つんだろうなあ、クラス学年間わず注目を集めるんだろうなあ、そうなれば野郎共はきつと面白くないだろうなあ」

「ま、まさか……」

「その上その騎馬が大将となれば、きつとまさにはぐれメタルのように血眼になって狙われるだろうね……それらを全て返り討ちにして鉢巻きを独占する」

「バカな!? 自信過剰にも程がある! いくらお前でも複数で囲まれて狙い撃ちされたらひとたまりも——」

「では、試してみたらいかがですか?」

「何……?」

「それもそうだね、論より証拠だ」

有栖がランスの言葉を途中で遮るや否や、俺は大將用鉢巻きを巻いて橋本達と騎馬を作る。

「男女は問わない、取り囲むのも自由、遠慮せずかかっておいで。俺から鉢巻きを奪うか騎馬を崩せたら、そうだね……報酬として100万あげるから」

クラスメイト達は困惑しつつも、高額報酬に釣られて各々が騎馬を組み、計8組の騎馬が俺達を取り囲んだ。数だけで考えれば本番で起こりうる最悪の状況と言えるね。

しかし俺は敢えて挑発的に笑い、騎馬を務めているランスに向かって腕を上げ、立て

た指を揃えて手前に三度深く傾ける。

「さあ、かかつておいでよナツパ」

「誰がナツパだ!？」

「もし俺に勝てたら本番はお前の言う通り、堅実な布陣で臨もうじゃないか」

「その言葉、違えるなよ……西川、元土肥、矢野、かかれ! 島羽、清水、町田、すぐその後に続け! 時間差で畳み掛けろ!」

ランスの号令と共に女子の騎馬が3騎、3方向からこちらに向かつてきた。そしてワ
ンテンポずらして男子の騎馬もバラバラの方向から3騎が続く。なるほど、相手が女子
と言えど3方向から狙われたら非常に厄介だ。仮に上手く切り抜けられたとしても、女
子の騎馬に手こずっている内に男子騎馬の追撃を受ける……ランスの奴め、この有利過
ぎる状況下でも確実性を取るか。

「うわあ、欠片も容赦ねえな葛城君よ……それで本条、俺達はどう動けばいいんだ?」

「とりあえず騎馬だけ崩されないように注意しつつ、その場でじつとしていいよ」

「「たか」」

さてと……………狩りの時間だね。

「よし、これなら本番でも問題無さそうだ」

「改めて思うが……化け物過ぎんだろお前」

何やら失礼なことをほざいている橋本は無視して、ぶん取った6本の鉢巻きを丸めて有栖に投げ渡す。

「お見事でした。葛城君の取った作戦は決して悪手ではありませんでしたが……ただ取り囲んだだけでは桐葉には決して勝てませんよ」

「おいおい有栖、なんかまとめに入ってるけどまだ終わった訳じゃないんだぞ？そこの2騎、ぼけっとしてないでさっさとかかって来なよ」

残る騎手……マスミンと戸塚に向かって手招きするも、マスミンはため息を吐いて騎馬から飛び降りた。

「おい、神室……」

「あんなの見せられて続けようと思う訳無いでしょ。それにむぎむぎ鉢巻き取られるよりは合理的な判断よ」

「む……」

何やら難しそうな表情を浮かべていたが、観念したのかランスも騎馬を崩した。見事完全勝利を収めたので俺も地面に降り立ち、有栖と一緒にランスへと近づくと、

「それじゃあ約束通り、俺の騎馬はあいつらで決定だよ?」

「……ああ、好きにしろ」

「それじゃこれ渡しとくから後は任せたま。有栖、帰ろっか」

「そうですね。葛城君、私からはこれを」

「は?……おい待て、どういうことだ!」

俺と有栖は一冊ずつ渡してさっさと帰宅しようとするも、察しの悪いランスは声を荒げて俺達を引き留める。

「どういうことって、ひと通り決めたしもういる意味が無くなったから帰宅するんだよ」

「坂柳は百歩譲ってそうだとしても、お前はこれから種目の練習をしないつもりか?」

「あのねランス、常日頃から欠かさず鍛練している立場から言わせてもらおうけどさ……一朝一夕で運動能力が向上してたまるかよ。体育祭までのこの短期間でお前らが重点的にするべきは、身体能力よりも技術面の向上だ」

そこで一旦言葉を切り、俺が手渡した方のノートに指を差す。

「そのノートにクラスメイト1人1人の改善すべき点と、各競技に必要なテクニクをまとめて書き記しておいた。それに従って真面目に特訓を重ねれば、勝率は大幅に上昇

する筈だよ」

やや半信半疑になりながらもランスはノートを開き軽く目を通していき、読み終わる頃には信じられないといった表情になっていった。

「1人1人の運動能力が、とても詳細にまとめられている……こんなものをいつたいいつの間に用意していたんだ？」

「昨日測った運動能力をもとにちやちやつとね。まあ少々手間もかかったけど、以前から有栖にも頼まれてたし丁度良かったよ」

「そして私が手渡したノートには、体育祭で仕掛けられそうなグレーゾーンの作戦をまとめられています。どうも葛城君は龍園君を非常に警戒しているようなので、その対策にでも役立ててください」

「わかっているとと思うけどそのノートはウチのクラスの最重要機密だから、絶対他のクラスに見せちゃダメだよ。なんだったらクラスメイトにも見せない方がいいかもね」

渡した物の説明も済んだことだし、今度こそ有栖を連れて下校しようとしたが……

「待て坂柳。……いったい何を考えている？ 今回のお前はあまりにも消極的過ぎる。このノートに記されたグレーゾーンの戦略にしても、お前なら躊躇いなく実行してもおかしくない筈だよ」

華の女子高生に対して随分失礼な物言いだ、まあ彼が不審に思うのも無理は無い。

自分が参加できないから、なんて理由ではとても納得できないだろう。証拠を掴んだわけではないが、少なくとも無人島試験での敗北に有栖が間接的に関わっているとランスは勘づいているだろうし。

だが当の有栖はにこりと笑みを浮かべてから、ランスに背を向けて歩き出す。

まず前提からして違うよランス……そもそも有栖にとつてこの体育祭は勝負ですらないのだよ。

「その疑問に対する答えは簡単、策を弄する必要が無いからですよ。龍園君達が卑劣な戦術を仕掛けてこようが、一之瀬さん達が団結してかかってこようが、堀北さん達が思わぬ伏兵になろうが……桐葉が全て振じ伏せます」

「ま、そういうことだ。それじゃあ頑張つてね、応援してる」

知恵比べなら張り合う相手に有栖がいるけど……ことスポーツで俺が負けるのは、今のところ想像はつかないかな。ミスターやコージーならもしやとは思うけど……あいつらが本気で取り組む訳無いだろうしね。

おそらく学年問わずどのクラスもほとんどの生徒が、体育祭に向けて猛特訓を重ねている中、俺と有栖はお構いなしに優雅に下校する。

「さーて有栖、今回の体育祭リユニケルは何をしてくすと思う？」

「何かをしてくすのは確定なんですね。あくまで私の推測ですが、おそらくリユニケルさんはDクラス……正確には堀北鈴音さんを狙い打つでしょうね」

「ふーん……ホリリンの裏にいる誰かを探るため？」

「ええ。貴方から聞いた情報を整理すれば……無人島試験での敗北から、リユニケルさんはDクラスには堀北さんを隠れ蓑に、陰で暗躍する人物がいると考えています」

「まあ典型的優等生タイプのホリリンとは思えない勝ち方だったしね」

「続いている優待者試験で、リユニケルさんは敢えてDクラスを狙わず堀北さんについて入念に観察し、その結果やはり無人島試験の作戦は堀北さんのものではないと確信しました」

「ホリリン良いとこなしだったからねー」

「となれば次にリユニケルさんが行いそうなことは、Dクラスの黒幕さんが隠れ蓑に利用している堀北さんを、徹底的に追い込んでその出方を見ることでしょう」

「まあそうなればあの子もホリリンを助けるために根回しが必要になるだろうね」

どういう心境の変化か知らないが、コージーはAクラスを目指そうとしている。しかし相変わらず目立ちたくはないようなので、自らの功績を全てホリリンに被せるような形で。

つまりホリリンが窮地に立たされればコージーも助けざるを得ない。たとえリユンケルに見つかるリスクが大きくてとも。

「……桐葉。やはりDクラスの黒幕さんについて何か知っていますか？」

「うん。本人に黙っててと頼まれたから口が裂けても言わないけど、知りたきや有栖も自分で暴くんだね」

「勿論ですよ。私も貴方と同じで、ネタバレされるのは嫌いですから」

「そりやそうか」

「ふむ、相変わらず仲睦まじそうで何よりだ」

後ろから聞き覚えのある声があったので振り向くと、先日仲良くなった先輩が優雅に髪をかき上げながら歩み寄ってきた。二年生きつての変人……満足先輩こと鬼龍院楓花先輩だ。またの名を女性版高円寺。

「お久し振りです鬼龍院先輩」

「満足先輩じゃないすか。クラスの皆が一生懸命体育祭のため猛練習してるのに、さつさと下校とは良い身分すね」

「そのセリフ、そっくりそのまま君に投げ返そうじゃないか」

「だがしかし俺はバットを取り出し、投げ返されたそれをジャストミートし場外へ！満塁サヨナラホームラン！」

「クツ……私達の甲子園への夢もこれまでか……！」

「桐葉の悪ノリには付き合わないでください。どこまでも収集つかなくなるんですから」

「そう目くじらを立てるな坂柳。君は優秀な生徒のようだが、社会に出てからはちよつとした悪ふざけはさらつと受け流す、柳のようなしなやかさも必要だぞ」

「坂柳だけになー」

「H A H A H A H A H A H A！」

「それじゃあ私は柳のようになやかに去りますね。お二人で延々とふざけていればいいじゃないですか」

俺達が肩を組んで意味もなくアメリカンな雰囲気を出していると、疎外感を感じたのか有栖がさつさと帰ろうとしたので慌てて引き留める。

「まあまあそう拗ねんなって。というかお前以外の女子と2人きりのとこなんて、誰かに見られたら二股野郎のレッテル貼られかねないんだよ。俺の名誉のためにも帰らんといってお願い」

「知りませんよそんなの。だいたい私と貴方は付き合ってる訳じゃないんですし、好きにしたらいいじゃないですか」

「お前があのととき一年ほぼ全員の前で公開ディープなんてやらかさなきや、こんなに気を遣う必要なかったんだよこのやろー」

「昨日橘先輩と楽しげにしてたばかりじゃないですか、いったいどこの誰がどう気を遣ってるのでしょうかねー?」

「茜先輩は別にいいんだよ、会長さんが好きなのほとんどの人にバレバレだから誤解されないし。というかなんで会長さん気づかないんだよありえないだろアレ」

「離れようとする有栖と引き留めようとする俺、2人の攻防はしばらく続いたのだが、身体能力の差から逃げ切れるわけないので、やがて有栖は諦めて溜め息を吐く。

「まったくもう、有栖のヤキモチ焼きは筋金入りだなー」

「今回のはヤキモチではなく、貴方達のしようもない駄洒落にイラツとしたからです」
「マジでか」

「マジです」

「まあ言われてみれば確かに寒かったな。でもまだ残暑も厳しいから丁度良くね?」

「良くないですよ。駄洒落の寒さで涼むとかどこの国の文化ですか」

「ありやまあ手厳しい。……それじゃあ満足先輩もいなくなつたし、俺達もそろそろ帰

ろうぜ」

「えっ……本当ですね。いったいいつの間……」

「俺達が揉めてるときにさつきと帰ってったよ？まったくあの先輩はマイペースだなー」

「鬼龍院先輩も貴方には言われたくないでしょうね」

体育祭開幕

烏兔匆匆とはよく言ったもので、いよいよ熱き戦いの日となった。

この1ヶ月の間、どうやらランスは俺の渡したノートを上手く活用したらしく、一通り俺がチェックしたところクラスメイト達の技術面は大幅に向上していた。他にも次期生徒会長のみやびん先輩との初接触なんかもあったが、中々有意義な時間だったんじゃないかな。

まあとにもかくにも体育祭だ。

お約束通りの全体行進から始まり、藤巻先輩の宣言とともに体育祭が幕を開けた。競技開始まで少しの間自由時間が設けられたので、俺はわざわざ見物に来てくれた敷地内で働く人達に、一人一人挨拶して回ることにした。いつだって礼儀と礼節は大事だからね。

一通り済んだところで赤組のテントへと舞い戻る。ちなみにこの日は競技中を除き、白組側とは一再接触できないようになっていた。曖昧な結論を避けるためか最初の100メートル走のゴール地点にカメラが設置されていたり、採点の難しい応援合戦など

は全て省かれていたり、やはりこの体育祭も歴とした試験であることが伺えるね。

第1種目・全員参加の100m走が始まるため、俺達1年男子はグラウンドに集合するが……案の定ミスターがどこにもいない。やはりサボりか。

競技は全て1年生から順番に行われる。最初は1年の男子から始まり3年の女子で終了するが、途中休憩を挟んでからは1年女子から始まり3年男子で終わるパターンに切り替わる。

各クラスは事前に提出したプリントを基に組み合わせが決まり、他クラスが誰をどの順番で走らせようとしているのかは、本番に初めて判明する。他クラスの組み合わせを事前に手に入れられれば勝率を大きく上げられるが、そのクラスの生徒が自分のクラスへの被害を度外視してでも裏切らない限り不可能なので、他クラスの組み合わせは基本的に推測と推理で予想するしかない。

今回組み合わせを決めたランスは、1組目には勢いをつけるため運動自慢が集まると予想したのか、参加者は森重と石田といったクラスでも運動が得意な面子をあてがっ

た……が、リユニケルや卍解ちゃんも似たようなことを考えたのか、1組目で速そうなのはまさかの須藤君ただ1人だった。とんだ出来レースだなこりや、須藤君をオツズに表すと1・0だ。

「ありやまあ、どうやらDクラスにとっては微妙なスタートかもね」

圧倒的大差をつけてゴールを決めた須藤君を見物しながらそう結論付ける。彼ほどのスピードなら大概の相手には勝てるのに、あんな勝って当たり前の面子だと駒損もいいところだ。だけどもまあ、これほどの圧倒的勝利ならクラスも勢いに乗るだろうから、ここまでなら悪い出だしというわけではなかった。

「……それじゃ悪いけど、彼等の勢いを止めてくるとしますかね」

2組目の俺は指定されたコースに入る。

ランスの目論見は実にシンプル。1組目を捨てることで生じた他クラスの勢いを、最強カードで確実に殺すこと。

Dクラスは本堂君と鬼塚君、二人ともそここの運動能力を持った生徒だ。おそらく須藤君が作った勢いにあやかろうとしたんだろうが……2組目に割り振られたメンバーを見るに上手くはいかないだろうね。

Bクラスは浜口君と柴田君。浜口君は論外だが柴田君はBクラスきつての快速、須藤君でも確実に勝てるとは言えない実力者だ。

Cクラスは小宮君と近藤君。どちらもバスケット部員なので運動能力はかなり高いと見ていい。

ちなみにAクラスのもう1人は戸塚。まるで期待はしていないが、せめて浜口君には勝ってほしいな。

……総括すると、1組目とは比べ物にならないほど死のグルーブだね。

「おつ、本条も2組目か！ペンキヨーじや勝てる気しないけど競走なら負けないうぜー？」
「ほほーう？足の速さに随分自信があるみたいだね柴田君」

「ふふん、何を隠そう……Bクラスの快速柴田マンとは、俺のことだぜー！」

「何その通り名ダツセエ。もうちょっと君ネーミングセンスを養った方が良いんじゃない？」
「い？」

「一之瀬のこと正解ちゃんなんて呼び方してるお前にだけは言われたくねーよ!」

むかちーん。俺のエレガントでアウトスタンディングなネーミングにケチを付けるとは不屈き者めー、君にはこの上無い屈辱的な敗北を与えてやるー。

2コースに入った俺はピストルの合図とともに最優のスタートダツシュを決め首位に立つ。柴田君も好スタートを切り猛スピードで俺を抜かそうとするが、たった30cmほどの差が一向に縮まらない。

「うおおおおおー！」

ゴール10m手前にて柴田君は、雄叫びとともに猛チャージする。が……それでも差はまるで縮まらず、彼はそのまま2着でゴールした。3位以下とは大差をつけてのゴールだったので、この組以外ならば余裕で1位を狙えただけに無念の結果だろう。

……いやまあタネは至極単純で、最初のスタートダッシュで先行して、それ以降は柴田君と同じスピードになるよう調節して走っただけなんだけどね。これぞ本条桐葉492の特技の1つ、メリーゴーランド走法だぜ。

「くっそー！本条お前、めっちゃくちゃ速いな！」

「でも惜しかったじゃないか。スタートダッシュで競り勝ってなきや結果は変わったかもね」

「次また一緒になったら今度は勝つからな！」

正解ちゃん率いるBクラスの生徒らしく、悔しそうにしながらも爽やかに笑いつつテントに戻っていった。なんだったら俺の意地悪に気づいてすらいない。……まあ元気だよらしい。

俺も後続の邪魔にならないようさっさとテントに戻り、残りのレースを有栖と共に観戦する。

ファルコンと橋本はそれぞれ1位、2位と期待通り高順位をマークし、ランスも3位と予想外の活躍を見せた。

「噂に聞く高円寺君はどうやらレースを辞退したようですね」

「さつき体調不良者用のコテージで髪型を整えるのが見えたぜ。あの分だと全競技不参加だろうね」

「競技に参加しさえすれば最下位でも点数が入りますが、不参加では強制的に0点……私も含めると、赤組は2人分のハンデを抱えることになりますね」

「まあ致命的という訳では無いし、有栖が気に病むことは……あーあ」

「どうしました?」

「須藤君が怖い顔しながらコテージに向かつてら。この後どうなるか予想つくし、ちよつと仲裁してくるわ」

「フフ、お気をつけてくださいね」

コテージへと向かう途中、慌ててテントから出てきた平田君とコージーと鉢合う。

「本条君? 君も手伝ってくれるのかい?」

「2人とも知らない仲じゃないからね」

「ありがとう、助かるよ!……」

3人でコテージの扉を開けると、須藤君が拳を握り込んでミスターに詰め寄っていた。対するミスターは須藤君のことなど眼中にないかのように、窓ガラスに映った自分にうつとりしている。うーん実にマイペース。

「殴られなきやわかんねえのか？」

「ダメだよ須藤君！もし先生に知られたらー」

「つせえな、クラス内での問題だろ。こいつが先生に泣きつきでもしない限り、殴つても別に問題にはならねえよ」

発想がリユニケルみたいだね。指摘したらキレるだろうから言わないけど。

「相変わらずむさ苦しいねえレッドヘアー君。見ての通り今日は体調不良でね、迷惑をかけないために辞退しただけさ」

「嘘つくんじやねえよ！練習だけならまだしも本番までサボりやがってー」

うん、明らかに嘘だね。ミスターには何の変化も無いけど、ここまであからさまだと無理も無いか……おっと。

「はいストーツ」

「……っ!？」

須藤君が堪えきれずミスターを殴ろうとしていたので、振り上げた瞬間に腕の手首を掴んで止めておく。

「前にも言ったけどさ須藤君、すぐ熱くなっちゃダメでしょうが」

「放せよ本条！これは俺達Dクラスの問題だ！部外者が首突っ込むんじやねえよ！」

須藤君は無理矢理振りほどこうと暴れるが、握力100オーバーの俺をそう簡単に振

りきれると思ったたら大間違いだ。

「部外者も何も、友達が殴られそうになってたら止めるのが人情だろうに」

「友達!?ここ、こいつと……!?!」

「お気遣いは結構だよクイーンボーイ。心配しなくてもレッドヘア君など私の敵ではない」

「ん、そうか」

本人が大丈夫と判断したなら、庇いたてる必要もないので手を放す。何やら戦慄していた須藤君だったが、ミスターの舐めた発言を聞き再び炎をたぎらせる。血の気多いなー、ちよつと献血にでもいってこいや。

「だったらかかってこいや。自慢の鼻へし折ってやるからよ」

「まったく、君といいクールガールといい……私に頼らないといられないみたいだねえ」

「クールガールってホリリンのこと?」

「今日まで随分と念を押されてね、体育祭には真面目に参加しろと。……それで私が従う筈無いのにな」

「だろうね」

たしかに無人島でのリタイアを知っているなら、何か手を打ってしかるべきだが……あの子ミスターを口で言い聞かせられると本気で思ってたのかね?。

「とにかく去りたまえ。重ねて言うが私は気分が優れないんだ」
「ダメエ……………」

再び詰め寄ろうとした須藤君だったが、平田君が割って入り仲裁を試みる。

「高円寺君の態度にも問題あるけど、体調不良なら休む権利がある筈だよ。何より暴力はよくないよ」

「んなもん嘘に決まってるんだろ。無人島のとくと一緒じゃねーか」

「それでは根拠に乏しいねえ。私は不調が態度に表れにくいんだよ」

……………コージーに続き、ミスターもか。

「残りの競技も全部サボる気かよ、ああ？」

「勿論この先体調が回復すれば参加しようじゃないか。もともと……………」

と、それまで自分の世界に入っていたミスターがこちらに向き直り、両の目でしっかりと俺を捕らえる。

「クイーンボーイ。もし君と競い合う機会があるのなら、多少の体調不良は構わずに参加するだろうがね」

「ふむ、可能性があるとすればハードル走か二人三脚か200mの3つ……………二人三脚に關してはどうせ君とは誰も組んでくれないだろうし、実質2つだね」

Dクラスも使い物になるかわからない生徒を、推薦競技に登録しているわけないだろ

うし……はつきり言つて望みは薄いなあ。興味はあるが残念ながら俺の幸運はそんな使い勝手のいいものじゃないし、ましてや組み合わせは葛城が決めたとなれば尚更だ。「須藤君、もうすぐ次の競技が始まるよ。リーダーの君が不在だと皆の士気にもかかわる」

「……わーつたよ、戻れば良いんだろ」

須藤君はイライラしながらも平田君の説得を聞き入れ踵を返すが、コテージを出る前に何か睨まれた。

「今回は絶対テメエにも負けねえからな……!」

そう捨て台詞を残して平田君とともにコテージを出ていった。最後まで血気盛んだね。

「悪いな本条。須藤は今回の体育祭でもし最優秀生徒になれば、堀北から名前で呼んでいいと言われててな、最有力候補のお前には少し当たりが強くなってるんだ」

「なるほどねー。別にホリリンの許可なんて取らなくても、好きなように呼べばいいのにな。なあミスター」

「同感だねえ。クイーンボーイがいる以上レッドヘア君の野望は露と消えるだろうし、彼の恋路は前途多難だろうね」

「須藤もお前達くらい凶太かったら苦労はしなかつただろうな……」

なんか失礼なまとめ方されたけどさ、俺から言わせれば君も大概だからねコージィ。

テントに戻ると、女子の1000m走は最終組がコースに入るところだった。とりあえず有栖から結果をざっくり聞いておくか。

「ただいまー。うちのクラスどうだった？」

「おかえりなさい。概ね下馬評通りの結果でしたよ」

「なるほどなるほど。……それじゃこのレースで締め括りだな。マスマインフアイトー、美術部の底力見せてやれー」

最終組でAクラスの参加は有栖とマスマイン。有栖は当然参加できないんだけどね。

それで他のクラスはというと、警戒すべきは多分ホリリンと伊吹ちゃんだけかな。

……まああの二人にしても油断は禁物っただけで、マスマインが負けるとは思わないけどね。最強の美術部員の力、とくと見せてやれ。

スタートの合図と共に女の子達7人は一斉に駆け出す。最も好スタートを切ったの

は当然マスマミンで、伊吹ちゃんとホリリンがそれに続く。

「もう9割方勝負は決まったなー」

「ええ。スタートダッシュで先行をとれなければ、真澄さんに勝てる女子生徒はほぼ皆無でしょうし」

俺達の予想通り、マスマミンの後を追う2人はどんどん距離を開けられていくことに。

何故かは知らないがマスマミンは元々文化部とは思えないほど高い身体能力を有していたけど、それに比べて技術面はやや拙く付け入る隙はいくらでもあった。だから俺はこの1ヶ月、ランスを通してひたすらスタートダッシュの練習と走るフォームの調整を徹底させた。今の彼女に勝てる女子は、せいぜい満足先輩くらいだろう。

圧倒的な差に勝ち目は薄いと判断したのか、ホリリンも伊吹ちゃんも間近で競っている相手に勝つことに焦点を切り換えた。

中盤辺りまでホリリンは先行する伊吹ちゃんの後ろをびったりと張り付いていたが、終盤のスパートでとうとう伊吹ちゃんを僅かに追い抜く。しかしそこから伊吹ちゃんも加速し距離を詰め、最終的にはほぼ同時でゴールした。

大接戦のためビデオ判定に持ち込まれた結果、ホリリンが2位、伊吹ちゃんが3位となった。

悔しそうに地団駄を踏んでる伊吹ちゃんは何とも微笑ましいが、まずはせつかく1位

だったのにニコリともしないで戻ってきたビシヨップを労ってあげますかね。

「マスミン1着おめでとー!」

「終わってみれば圧勝でしたね。それでこそ私の大親友です」

「いつから私はアンタの大親友になったのよ……まあアンタが抜ける分は、私らで補うしかないからね」

「おいそういうこと言うなよ、有栖はアキノエノコログサより弱っちいんだから仕方ないだろ」

「もう私は植物より弱い扱いですか、怒りますよ」

「ごめんちゃい」

「はいはい、今日も仲がよろしいことで」

何やらレース直後よりも疲れた表情で、マスミンは俺達から距離を置いた。

1年生の100m走が終わったところで、続いて2年生の番となる。2年の主な知り合い……みやびん先輩、満足先輩、この前主将に抜擢された瀬川先輩が見事1位を獲得していただくらしいかコメントするところが無い。

続いて3年生へと移るわけだが……

「フアイトです茜先輩ー!でも顔面からすっ転ぶとかでもそれはそれで美味しいですよー!」

「応援してるのか茶化してるのかどっちなんですかつ!?」

「これだけ離れてるのに的確にツツコミを入れてきましたね」

「天性のツツコミストだからなあの人」

その直後に周りに奇異の目で見られてることに気づいて、涙目で真っ赤になって俯いちやうとところとか芸術的に可愛いよね。口に出したら有栖が拗ねるから言わねーけど。

結果は可もなく不可もなくの4位。会長さんや元主将も予想通り1位だったし、100m走は全体的に下馬評通りの結果だったな。

全学年が終了したところで集計の後、次のハードル走が始まる前に点数が発表される。

赤組2043点、白組1849点。

有栖とミスター2人のハンデを抱えながらも今のところ赤組優勢だったが、まだ体育祭は始まったばかりだ。このままりユニケルが真面目に肅々とやり続けるとは思えないしね。

卑劣な戦略

第2種目はハードル競走。

100m走とは違いただ足が速ければ勝てるというものでもなく、ハードルを倒せば0.5秒、ハードルに触れただけでも0.3秒がゴールしたタイムに加算されてしまう。

ハードルは計10個設置されているため、全て倒せば5秒も加算され敗色濃厚だ。かといって接触を恐れてスピードを緩め過ぎては本末転倒なので、地味だけど中々難易度の高い競技だね。

「では次、2組目準備してください」

それじゃあ審判にも呼ばれたことだし、俺もコースに入るとしますかね。Dクラスは……平田君と幸村君か。

「お手柔らかにね、本条君」

「よりもよってこいつが相手か……!」

どうやら今回はミスターとは当たらなかったみたいだね、残念。B、Cからの参加は

特に目ぼしい生徒はいないようだし。この面子なら戸塚も最下位は免れられるかもね。

スタートと同時に100m走と同じくらいのスピードで走る。当然ハードルに接触するようなヘマをすることもなく、悠々とゴールテープを切った。

戸塚が意外にも5位に食い込んだことを見届けつつ、俺は有栖の元へ凱旋し、残りのレースを見物する。

「あちゃー、惜しかったけどファルコン2位か」

「相手が柴田君では仕方ありませんよ。足の速さではDクラスの須藤君に匹敵するでしょうし」

「橋本も2位か……なんか全体的にパツとしねーなアイツ」

「仕方ありませんよ。何事もパツとしないのが橋本君のアイデンティティですし」

「いやひどくね?」

テントに戻ってきた橋本がそう鼻白むが、全体的に器用貧乏なのは事実だし謝らない。

男子の組が全て終了し、続いて女子の番に切り替わるのだが……

「Cクラスの参加メンバー……少し妙ですね」

「そだね。矢島ちゃんと木下ちゃん、同じレースに組み込むのはちよつと不合理だ」

2人とも陸上部に所属しており、ウチのマスミンにも勝てる可能性のある生徒達だ。

そんなどのレースに組み込まれても1位を狙えるような2人を、同じレースで走らせて何のメリットがある？

「……Dクラスからは堀北さんが出場するようですね。私達の推測通り、リウンケルさんが彼女を狙い打つつもりで選出したなら辻褄が合いますが、しかしそうなる……」
「CクラスはDクラスの組み合わせを知っていることになるな。つまり……Dクラスの中に裏切り者がいる」

ホリリンは持ち前の負けず嫌いでもうにか食らいつこうとしたが、現役の陸上部には及ばず3位止まりとなった。

「まだ可能性の域ですが、もしそうだとすればDクラスの皆さんにとっては凶報になりますね」

「だな」

当然この体育祭の敗北はほぼ確定的になるし、それ以降の試験においても大きな足枷になるだろうね。この学校のシステム上、クラスに明確な裏切り者がいるのは致命的だ。

次の種目は棒倒し。現代では防衛大の体育祭ぐらいでしか開催されないような、武器を使わない戦争とも呼べる野蛮な競技だ。

「お前ら絶対勝つぜ！高円寺のアホがいない分気合い入れろよ！」

集まったDクラスとAクラスの男子達に、須藤君が大声で鼓舞する。相手は団結力に定評のあるBクラスと、卑劣な策略と山田アルベルト君が要注意のCクラス。これは中々ハードな戦いになりそうだね。

ルールは2本先取した方の勝ち。

俺達は事前の話し合いで、原則オフフェンスとディフェンスを交互にすると決めてある。そしてまず最初に攻撃を行うのはDクラス。

「まあ心配すんな。何人立ち塞がろうがぶっ倒してきてやるよ」

「倒すのは棒だからな？人じゃないからな？」

「保証はできねーな。こちとら高円寺のことでイライラしてんだよ」

見るからにフラストレーション全開の須藤君をコージは諫めようとするが、どうやら焼け石に水らしい。

「よし、打ち合わせ通りにフォーメーションを組むぞ。Cクラスが攻めてきた場合、ラフプレイには最大限の注意を払え」

クラスの男子達がランスの指示に従い、俺は棒から少し前に出て仁王立ちする。多分攻めてくるのはCクラスだし、山田君は俺かファルコンが引き受けるしかないよね。

試合開始の合図と共に須藤君を先陣にDクラスが突っ込んでいき、それと入れ違う形で予想通りCクラスが向かってくる。ちなみに攻撃陣同士のぶつかり合いはルールで禁止されているため、流石のリュンケルもDクラスにちよっかいは出さないだろう。

「アルベルト、潰せ」

「OK」

リュンケルの物騒な指示とともに、山田君は俺に向かって全速力で特攻してくる。うんうん、元気があってよろしい。

「……Oh!?!」

「でもちよっと迂闊だねー」

俺に掴みかかろうと伸ばしてきた手を両方とも握り、それとほぼ同時に俺は山田君を引っ張りながら素早く後退して転倒させる。そして片方の腕はそのまま握ったまま捻り上げ、山田君の背中にもう片方の手で力を込めて押さえつける。

「はいー人目ー」

「アルベルト!?!この野郎!」

石崎君が激昂しながら掴みかかってきたので、押さえつけていた方の手で石崎君の拳

を握り、山田君の背中に叩きつける。

「Ouch!？」

「うぐえっ!？」

「はい2人目。次はだーれだ?」

「クク、噂に違わない化け物っぷりだな。おいてめえら、棒の前にこいつから畳んじまえ」

リユンケルの号令と共にCクラスの男子が一斉に俺に飛びかかってくる。このまま相手をしてあげたいところだけど、何やらDクラスは手こずってるようだし……

「ランス、30秒でいいから持たせて!」

「!?!?!」

「お、おい待て本条!?!」

所詮は恐怖で成り立った継ぎ接ぎだらけの連携、緩急とハンドテックニックと足捌きを駆使してCクラスの包囲網から悠々と抜け出し、ランスの制止は無視して相手側の棒へ特攻する。

「なっ、本条!?!」

予想外の奇策による動揺でBクラスがほんの一瞬フリーズした隙に、俺はフィジカルに任せて多少強引にでも棒へ接近して構えを作り……

「破！」

震脚とともに棒目掛けて発勁を叩きこんだ。

成人男性を片手で軽々持ち上げられる俺の怪力に加え、震脚により威力が何倍にも引き上げられた俺の掌底が直撃した棒は、ペットボトルロケットの如く後方へと吹き飛んだ。

「よし、まずは一本先取だね」

「美味しいところ持つてくんじゃねーよ！というかなんでデيفエンスのテーマがここに
いるんだよ!？」

「防御陣が棒を倒してはいけないなんてルールは無かったしー。文句があるならさっさと倒せばいいじゃないか、無駄に手こずってからに」

「ああ!？」

「まあまあ須藤君、お陰で勝てたんだからいいじゃないか。今度は僕達を守りだよ
何やら囁みついてくる須藤君だが、平田君が肩を叩いてそれを諫める。

「……ちつ。そこまで大口叩いたからには次も絶対倒せよ」

「はいはい」

イライラからクラスメイトに軽い八つ当たりをしながら、須藤君はクラスを率いて棒の守りについた。入れ替わるようにAクラスの皆がこちらに来るが、まとめ役のランス

は苦い表情を向けてくる。まあ彼はこんな博打染みた奇策は好まないだろうから仕方がない。俺には何を言っても暖簾に腕押しなのと、結果は出していることから何も言うてこなかったけど。

続いてオフェンス側になった俺達だが、相手のデイフェンスはまたもやBクラス。よほど俺を警戒しているのか、Bクラスでも運動能力の高い5人が俺を棒に近づけまいと躍起になっていたが、適当にあしらっている内に鬼頭が棒を倒してフィニッシュした。確かに俺を棒に近づけたらアウトだけどよ、その対処に棒から5人も離れてちゃ守備力は大幅に低下するわな。

まあそんな風に俺達は危なげなく勝利したがDクラス……特に須藤君は、Cクラスが仕掛けたダーティプレイに大いに苦しめられたようだ。何でもリユニケルに背中を思いつき踏み抜かれたとか。うわあ想像するだけだ痛そう。

「あのクソ野郎、ブチ殺してやる……！」
殺しちゃダメでしょ流石に。

また平田君とコーギーが諫めていたけど、限界はそう遠くないだろうね。

続く女子の玉入れは、接戦の末に白組が勝利した。だいぶ惜しかったけど、これはまあ仕方無いかな。

そして間もなく競技は男女別綱引きが始まる。ルールは棒倒しと同じ2本先取制。

「龍園達はわざと綱を離して俺達を怪我させようと目論むかもしれない。Dクラスも気をつけることだ」

「……ありえない話じゃないね。1戦捨てても残りの2戦で取り返せばいいと、龍園君ならそう考えてもおかしくない」

ランスが有栖から受け取ったダーティノートに書かれていた、リユンケルが仕掛けかねない不安要素を忠告すると、平田君も神妙に頷いて肯定する。

俺達赤組が打ち合わせ通りクラス別に左右へ分かれ、縄にムラなく力が加わるよう身長が低い順に並び、一方、Bクラスは前方に背の高い順に並んでいるが、Cクラスはすごい適当な並び順だ。明らかにまた何か企んでるねこりや。

「へっ、図体デカイのを前に持つてくるとかわかってねーな」

「そうとも言い切れんぞ。綱を引く位置は高い方が有利だから」

「それでもまだこつちが有利なことに変わりはないよ。いくぞお前ら！」

須藤君の鼓舞とともに試合は始まり、一回目は順当に俺達が圧勝した。

「つしやあ！どうだコラ、ざまあねえな！」

目に見えて調子に乗る須藤君に対し、Bクラスは真面目に取り組もうとしないCクラスに不満そうな顔を向ける。

「なー龍園、流石に俺達も協力し合わないとヤバイぜー？」

「……よしお前らちよつと配置変えんぞ、チビから順に並べ」

Bクラスを代表して柴田がそう提案するが、リウンケルはあくまで自分達の好き勝手にするつもりらしい。……だけど勝負を捨てた訳では無さそうだ。

しかしその光景を見たこちらの面々は早々に楽勝ムードになってしまふ。ランスが油断するなと忠告するも糠に釘……あーあ、ダメだこりや。

そして始まる2回戦目。

俺の予想した通り、明らかに引つ張られる力がさつきより強い。

「おら根性出せお前ら。負けたら死刑だぜー」

リウンケルの暢気な警告と共に、引つ張られる力が一段と強くなる。これぞ恐怖政治の成果……だけではなく、あの弓なりの並び順は意外と力が伝わりやすいということ

「俺だつて間一髪で気づいたんだから仕方ないじゃん。だいたい綱を離してくるかもつてさっきランスも忠告してただろう」

「勝敗度外視してまでそんなことするとは思わねえだろ!？」

まあ確かに正論つちや正論だけど……リユンケル相手にそんな甘い考えでは、この後もつと酷い目に遭うかもね。

裏切り者

続く競技、障害物競走もあつという間に最終組……なのだが、今までで一番死のグループと言つても過言ではない。

Cクラスの2人は凄く弱いから置いておくとして、Dクラスからは須藤君、Bクラスからは柴田君、Aクラスからは俺と、1年生男子最強決定戦かつて面子が揃った。ここにミスターとコージーが加わったらオールスターだ。

「テメエには絶対負けねえ……！」

「今度は俺が勝つぞー！」

片や敵意剥き出しに、片や凄く友好的に接してくる俺の対抗馬2人。……他の5人？ お通夜みたいなテンションになってるよ。

そして始まる最終レース。

当然俺が最優のスタートを切り先頭に立ち、斜め後ろにいる須藤君に合わせてメリーゴーランド走法をしかける。

「うおおおおおっー！」

猛獣のような雄叫びと共に須藤君は早くもスタートをかけるが、俺もそれに合わせて同じ速度になるようペースを上げる。そして最初の障害である平均台へ到達する。

「待ちやがれクソがつ！」

「待てと言われてなんとやらつてね」

須藤君は体格に似合わず細い平均台を異様に素早く渡っていくが、やはり俺との差は一定のまま少しも縮まらない。

平均台を渡り終え、また短距離を駆け抜けてからグラウンドに敷かれた網をスイスイとくぐっていく。

「がるあああああつ！」

肉食動物のように唸りを上げながら突き進む須藤君だが、結局俺との差は縮まらないまま最後の障害物であるズタ袋まで辿り着く。……ふむ、ようやく彼にも焦りが見えてきたようだね。

「……しまつー!?!」

両足を袋に入れて全力で俺を抜かそうと奮闘したが、焦る気持ちが災いして須藤君は転んでしまう。

「お先ー」

「んなつ!?!」

その隙に後ろにいた柴田君が須藤君を追い越し、最後の50mにてそのまま俺にも迫ったが、最終的に1位俺、2位柴田君、3位須藤君という結果に終わった。

「ハアツ、ハアツ……畜生……！」

「俺を抜かせないことからくる焦りか、俺以外を眼中に入れなかった慢心か……君の敗因はそんなところかな。どちらにせよ心の鍛練が足りんよ心の」

「うるせえよ、クソが！」

俺に対して敵意に満ちた視線を向けてから、須藤君は肩を怒らせテントへ戻っている。せつかくアドバイスしてあげたのに失礼な子だね。……あれじゃいくら運動能力が高くても宝の持ち腐れ、リユンケルに玩具にされて終わるだろう。

「本条お前、さつきより速いじゃんか。もしかして手を抜いてたのかよ？」

「体育祭はまだ始まったばかりなんだし、最小限の労力で勝つに越したことは無いでしょう？ だったらスタートでトップを取りさえすれば、後は2位と同じ速度を保って走り続ければいい」

「2位と同じ速度でつて……簡単に言うけどよ、それが出来たら苦労はしないだろう？ まず誰よりも速く走れることが前提だし、そもそも相手のペースに合わせるなんて——」

「まあ、普通はそうだね」

敵対クラスにむぎむぎ情報を与えてやる必要もないため、俺は話を打ち切つてさっさ

とテントに戻る。

悪いけど柴田君、俺にとってはそう難しいことじゃないんだよ。誰よりも早くスタートを切ることも、相手と全く同じ速度で走り続けることも……『幸運』なんて他力本願なものとは違う、俺だけが持つオンリーワンの才能があれば造作もないことだ。

それから須藤君、負けて悔しいからってクラスメイトに当たるのはやめようね？

続いて女子の障害物競走では、またホリリンが矢島ちゃんや木下ちゃんと同じ組に入っていた……ふむ。

「そういや須藤君は2連続で野村君や鈴木君と同じ組だったつけ。となると……」

「9割方確定でしょうね。CクラスはDクラスの参加表を事前に入手し、狙い撃ちしているようです」

「須藤君のような最上位にはクラスの足手まといを、ホリリンのような上位には最上位の生徒をぶつけ駒損をさせ続けければ、最終的に泣きを見るのはDクラスだろうね」

「ええ。……ですがリUNKELさんの戦略は、より狡猾で非道なものそうですね」
「んー？……ああそういう……」

有栖が何かに気づいたようなので俺もレースに意識を向けると、死に物狂いで2位につけたホリリンが最後の50mで、やたらと後ろの木下ちゃんを何度も振り返る。その隙に追い抜かそうとした木下ちゃんは、ホリリンを巻き添えにして共倒れになった。

2人は倒れている隙にどんどん順位を落としていき、ホリリンは立ち上がって競技を続行したものの結局7位に終わる。一方木下ちゃんは最後まで立ち上がれず最下位に終わった。うーむ、一見どこからどう見ても不運なアクシデントだけど……。

「リUNKELのやり口はえげつないなあ」

「やはり貴方にはわかりますよね？」

「まあね、明らかにホリリンに向かって倒れ込んでたよ彼女。というかよくあんな危ない役回り引き受けたね」

「見返りに高額のプライベートポイントでも提示したのでしよう。リUNKELさんは私達のクラスとの契約により、懐に余裕がありますし」

これがただDクラスの戦力であるホリリンを、怪我させて弱体化させるのが目的ならばあまりにも愚策だ。この体育祭はどれだけ良い結果を出そうと大したリターンが無いのだから、普通に考えればあれだけ危険な仕事の見返りに払う分のポイントを回収で

きるとは思えない。……そう、普通に考えれば。

「ところで有栖、俺には木下ちゃんがやっただってちゃんとわかるけどさ……普通の人はどう見えるのだろうね？」

「大半の人はアクシデントだと疑いもしないでしょうが、もしあれが人為的だと誰かが指摘したら、そしてさらにDクラスにいるであろう裏切り者さんが口裏を合わせたら……堀北さんが意図的にやったと判断されるでしょうね」

「だね。事故の直前、不自然に何度も木下ちゃんを振り返っていたりと怪しまれることをしているし。リユンケルはそれを利用して……」

「堀北さんから大量のプライベートポイントでも筆取り取ろうという考えでしょうね」

半分は、と心の中でのみ付け足しておく。

もう半分は窮地に立たされたホリリンを救おうとする黒幕……コージの正体を掴むこと。どちらに転んでもリユンケルにとっては勝利といえるね。……ホリリンが大事なら上手いこと正体バレないまま切り抜けるよコージ。もし有栖の興味を引けば君の望む平穏は、さらに遠ざかっちゃうだろうから。

続いて男女別二人三脚。まあ俺と橋本のペアは当然の如く圧勝したのだが、俺達の次の組に入った須藤君と池君のペアが、なんとというか凄かった。

「どわあああ!？」

開始直後、池君は悲鳴を上げた。

ある意味では二人三脚究極の攻略法……須藤君が開始早々池君を持ち上げ、そのまま力任せに爆走するというものだ。

限りなくグレーゾーンだが見た目だけは二人三脚の体を成しているし、そもそも須藤君クラスの腕力が無ければ思いついても実行できない手段だ。まあこれも実力の範疇だろう。ファルコンのペアも頑張つちやいたが、須藤君達を抜かすことは叶わなかった。

「マジかよ須藤……俺達と組被らなくて良かったぜ」

「そうだね。最悪俺が全速力で橋本を引き摺りながら走るしか無かったぜ」

「組被らなくてホント良かった!」

続いてコージと平田君のペアが見事1位を獲得するが、その結果女の子からわーきやー言われたのは平田君のみ。ルックスは引けを取らないのにコミュ力の差でこうも扱いが変わるのか。

続いて女子の番に移るが、2組目に出場したホリリン・櫛田ちゃんペアがまた矢島

ちゃんのペアと当たるのはともかく、うちのマスマン・山村ペアともバッティングしてしまう……リユニケル抜きにしてもあの子運悪過ぎね？

「おやおや、あのようなアクシデントの直後に真澄さんとも当たってしまったとは……お気の毒ですね」

「そう思ってるならその楽しそうな笑顔引つ込めなさいこのサディストめ」

開始早々トップに立つマスマン達をホリリン達は追いかけるが、すぐに矢島ちゃん達に追い抜かれ安藤ちゃん・南方ちゃんのペアもホリリン達に迫る。

……なるほど。

「なあ有栖」

「どうしました？」

「Dクラスの裏切り者……たぶん櫛田ちゃんだ」

「それはまた随分と意外な正体ですね。……念のために伺いますが、その根拠は？」

「目の前の光景を視ればわかる。ホリリンはさっきのアクシデントで負傷したのかペースがかなり落ちてるのに対し、櫛田ちゃんのペースがやけに速い。……怪我が悪化するようにわざとやってるね」

「なるほど。そういえば彼女、件の竜グループの優待者でしたね」

流石有栖、いちいち順を追って説明しなくていいから楽でいい。

船上試験で優待者の法則を見抜くには、クラス3人の優待者以外に他クラスの優待者も最低1人は知っておく必要があった。もし櫛田ちゃんがあのときからDクラスを裏切っていた……つまり優待者であることをリユンケルに教えていたのだとしたら、全ての辻褄が合う。

竜グループの結果1で終わらせたのは、櫛田ちゃんに見返りを与えて信用を確固たるものにするためで、何かやたらとホリリンが集中的に狙われているのは、参加表を晒す見返りにホリリンを狙えと要求されたのだろう。

何故櫛田ちゃんがホリリンを陥れようとしているのかは不明だが……どうでもいいか。人が人を嫌い憎むのに、複雑な理由なんて必要ない。

最終的にレースはマスマン達か1位、ホリリン達は途中で追い抜かされ最下位となった。どちらもDクラス主戦力のペアだけに、この敗戦は痛いだろうな。

「ところで桐葉。Dクラスの黒幕さんについてはあんなに口が固いのには、今回はどうしてあつさりネタバレしたのですか？」

「だってあの子つまらねーし、有栖の遊び相手も到底務まらない。……有栖も葛城のときみたいに時間を無駄にはしたくないだろ？」

「なるほど、では放置しておきましょうか」

ようやく10分間のインターバル。

体育会系の面々はまだまだ余裕そうだが、ガリ勉系の中にはもう半死半生といった状態の子もいる。彼らもこれを機に理解してくれるといいな……将来何をするにしても体力は必要になってくると。

「しかし二人三脚は残念だったなフアルコン」

「……すまん」

「貴方が2位的时候は須藤君や柴田君が相手だったので、そう気に病むことありませんよ鬼頭君。気に病むべきは橋本君でしょう」

「俺!?!」

「二人三脚は桐葉と組んだのですから1位は当然として……ここまで1度も自力で1位を取ってないじゃないですか」

「かといつて3位以下には落ちてもない、と……率直に言つて何の面白味も無いな」

「まったくです。勝てないならせめて頭から地面にダイブするくらいのインパクトが欲しかったですね」

「お前ら俺に何を期待してんの!？」

「Aクラスのうっかり八兵衛たるお前に期待することなんてただ1つだろ？」

「そんな情けない通り名頂戴した覚えねえよ！」

じゃあAクラスの明智光秀か、明智光秀なら満足するのかコラ。

「……それに比べてマスミン、ここまで絶好調じゃん。このまま順調に行けば学年別最優秀狙えるんじゃない？」

「アンタがいる時点で狙える訳無いでしょ」

「大丈夫大丈夫、全学年最優秀とは重複しないってルールに書いてあったし」

「アンタならマジで取れそうなのがアレね……」

「当然でしょう。私の桐葉ですよ？」

對抗馬になりそうなのは、やっぱりみやびん先輩だろうね。クラス全体にまんべんなくチャンスを与えてる会長さんに対して、みやびん先輩は自分が大差でトップを取れるよう、自クラスだけじゃなく他の3クラスの組み合わせさえ調整しているようだ。以前小耳に挟んだみやびん先輩が2年全体を掌握しつつあるって話はどうやら眉唾じゃないらしい。

こりゃ俺もトップを取るためには、騎馬戦で相当荒稼ぎする必要があるそうだな。

「さて、そろそろ狩りの時間だな」

「激励……は不要でしょうね。今日まで準備してきたその左手もそうですし、何よりあの切り札が貴方にある以上敗北はありえないでしょうから」

「あのね有栖、必要無くても激励は欲しいの。男は例外無く皆バカな生き物だから、好きな子に応援されるとそれだけで凄くテンション上がんの」

「フフ、それは失礼しました。それでは……頑張ってください、貴方の勝利を信じていますよ」

「了解だぜい☆」

「士気が下がるから自重してくれない？」

「諦める神室ちゃん、完全に2人だけの世界だ」

「……慣れが大切だぞ」

言いたい放題だね君達。

眼

休憩時間が終わると男女の競技順番が一時的に逆転し、1年女子騎馬戦が幕を開ける。

クラス連合による8対8の真剣勝負。勿論今回もDクラスは味方だが、鉢巻き奪取による50点（大将騎馬なら100点）は奪取したクラスに加算されるので、総合順位で勝つためにはDクラスも競争相手と言える。

ちなみにうちの騎手はマスマシン、山村、田宮、福山。ゴリラウーマンことマスマシンを中心とした最強メンバーからなる大将騎馬に、正直戦力として心許ない余り物で構成された3騎。大将騎馬に対して苦戦するであろう相手を、周りから不意打ちで落としていこうというのがランスの戦略なんだろうが……はたしてそう上手くいくかね？

試合開始とともにCクラス・伊吹ちゃんの騎馬は迷わずホリリンの騎馬へと突撃し、他の3騎もそれに追従しホリリン達を取り囲む。ホリリンは大将騎馬でもないのにこの露骨な狙い撃ち……あの子ってば、よほど櫛田ちゃんの恨みを買ってたのかね。

Cクラスの狙いを把握したマスマシンは、ノータイムでDクラスを見捨ててBクラスの

騎馬へ襲いかかる。卍解ちゃんが騎手を務める戦力の充実した大将騎馬ではなく、まずは弱そうな騎馬に。

「うーわ、マスミン冷徹」

「先程の昼休憩中に、葛城君に内緒で指示しておきました。CクラスはDクラスを狙い撃ちしているので最初のうちは放置します。大将騎馬である一之瀬さんを狙わない理由は……」

「そりゃ協力とか連携とかを尊ぶ卍解ちゃんなら、Cクラスのフォローに向かうよね」

向こうが突っぱねてるんだからCクラスと手を取り合う必要なんてないのに、卍解ちゃん達は律儀にもホリリン達の援護に向かう軽井沢ちゃん達を食い止めようとしていた。結束力は卍解ちゃん達が勝るが、機動力は軽井沢ちゃん達が上。一進一退の名勝負に観客は頗るエキサイトするが……

「もたもたしている間に、堀北さんが鉢巻きを奪われてしまいましたね」

「まあホリリンじゃあ4対1は捌ききれないわな。……だけど卍解ちゃん、Cクラスのフォローしてる間にお仲間が全滅しちゃったよ?」

まあこつちも3騎失ったけど、皆鉢巻きを奪われる前に自分から騎馬を崩したから及第点だ。

Cクラスの4騎はその後にも統制の取れた動きで、軽井沢ちゃんを除く2騎を執拗に追

い詰め鉢巻きを強奪していく。一方マスマンはあえて卍解ちゃんが気づくように奇襲をかけ、卍解ちゃんが驚いてそれに気を取られた隙を突き軽井沢ちゃんが大将鉢巻きを奪い取った。

「真澄さんがその気なら、一之瀬さんに気づかれずに奇襲をかけられたでしょうね」

「ここまで奮闘した軽井沢ちゃんへ筋を通したのかな？あの子意外と義理堅いね」

「Aクラスの勝利を最優先にするなら、彼女の判断は間違いでしょうが……この後弄り倒せるので不問にしましょうか♪」

「だな♪ツンデレ乙と言ってやろ♪」

俺達がアホな会話を繰り返している間も戦いは続く。マスマンが軽井沢ちゃんに何か囁いてから、2つの騎馬は無傷のCクラス4騎へ突撃する。流石に多勢に無勢かと思われたが、マスマンと軽井沢ちゃんはそれぞれ自爆覚悟で相手の騎馬に飛びかかり、見事鉢巻きを奪ってから地面に降り立った。

そして得点の集計結果……Cクラスは大将を含む3つの鉢巻きを獲得し、同じく大将を含む2騎が生存したので獲得ポイントは350点と全クラス中トップ。しかしBクラスは全滅の上鉢巻きを1つも奪えず0点。Dクラスは軽井沢ちゃんが大将を含む2つの鉢巻きを奪ったので150点。そしてAクラスはマスマンが仲間を肉壁にしつつ4つの鉢巻きを奪ったので200点。あの子鉢巻き掠め取るのがやたら上手かったな。

下手したら将来スリで食っていけるレベル。

合計350対350でこの勝負引き分け。

……あーあ、こりや向こうのテントで卍解ちゃん、リユンケルに散々嫌味言われるよ絶対。

早々に敗退したことが堪えたのか、見るからに悔しそうな表情で陣地に戻ってきたホリリンに、須藤君はすぐさま声をかけにいく。

「気にすんな、今のは仕方ねえ。つかAクラスの奴等見捨てやがって……」

「Aクラスと私達は競争相手でもあるのよ、向こうの戦略にケチはつけられないわ。それに……神室さん」

「……何？」

間違はなくMVP級の活躍だったのに、相変わらず気だるそうに戻ってくるマスミンに、ホリリンは近づいて声をかける。あらためて並ぶとなんとなく似たタイプだねこの2人。友達少なそうな雰囲気こそつくりだ。

「軽井沢さんへのフォロワーに関しては礼を言っておくわ。あなたならその気になれば一之瀬さんの鉢巻きも奪えたでしょうに」

「……別に。横からかつさらおうって気になれなかつただけよ」

むず痒そうに手を振ってから俺達の元に歩いてくるマスミンを、俺と有栖は精一杯に

こやかに出迎える。

「はい、ツンデレ御馳走様ですー♪」

「素直になれない真澄さん、大変可愛らしかったですよ♪」

無言で俺と有栖に振り下ろされた拳骨はとりあえず止めておく。いきなり何すんねん。

「ほんとアンタら人を苛立たせる天才ね……」

「嫌ですね真澄さん、人を捕まえて天才だなんて。知ってます」

「マジで腹立つわねアンタ!」

「はいはい、どーどうどうどう」

「私は馬か!」

ひと通りマスミン弄りを楽しんでから、俺達男子も騎馬戦の準備を始める。

俺、司城、里中、橋本による通称イケメン騎馬が組み上がると、クラス学年問わずあちこちから女子達の黄色い声援が飛び交い、それを凌駕する男子達のブーイングと怨嗟が飛び交う。うむ、期待通りの光景だ。

対戦相手のB、Cの騎馬達からもちらほら敵意のこもった視線が……いや待てオイ、なんで味方のDクラスも敵意を向けてくる。

「おいコラ本条……大将騎馬のくせになんだそのふざけた編成は? 勝つ気あんのかよ」

「須藤君さあ、俺のはぐれメタル戦法にケチつけないでくれる?……どうせ君はリユンケルを殺りたいんだろ? わざわざその他大勢の雑兵を引き付けてやろうってんだ、感謝してもらいたいくらいだよ」

「……はっ、上等じゃねえか。せいぜい囷になってさっさとくたばっちゃまえ」
ありやりや、随分と嫌われたものだねえ。

Dクラスの大將は騎手に平田君、騎馬は須藤君と三宅君とコージー……考えられる最強の布陣だ。多少の人数差ならひっくり返せるポテンシャルを秘めている。

試合開始の合図と共にAクラスの騎馬3騎は、直前に葛城に指示されたDクラスの騎馬隊に混ざる。先程のような多勢に無勢になることを防ぐための作戦だ。

そして俺達大將騎馬だけは、その大きな塊から敢えて距離を取った。

「狙うはクソ龍園の首1つ!」

「よっしや行け橋本、Bの大將を狩るぞ」

「はいよ」

お互いの思惑は違えど取る作戦は同じだったようで、俺達と須藤君達はそれぞれの大將騎馬へ特攻した。

「迎え打て!」

Bクラス大將騎馬の騎手、ザキちゃんの指示で2騎の騎馬が前方斜め2方向から向かっ

てくる。

「ふーん、2対1か。いいよかかっておいで、遊んであげる」

「っ、舐めんな！」

俺が安い挑発をしたら、墨田君と渡辺君はいきり立つたように俺達に突撃してきた。俺はそれを警戒すらせず泰然と構えたまま見守り……

右斜め後ろの方向から俺の鉢巻きに向かって、伸ばしてきた別府君の手をノールックで掴む。

きつと前の2人に注意を引き付けて、死角から奇襲をかけるつもりだったんだろうけど……ごめんね、そこ死角じゃないんだ。

「えー」

何が起きたかわからず別府君が呆けた一瞬の隙を突き、俺は片手で彼を騎馬から力づくで引き離し、怪我させないよう両足で着地できるように地面に投げ降ろした。……勿論もう片方の手で鉢巻きを掠め取っておくのを忘れない。

「なっ……うお!？」

棒倒しから何も学んでいなかったのか、あまりに想定外の光景に足を止めてしまった

2騎に、俺は鉢巻きをポケットに入れつつ騎馬に指示してこちらから距離を詰める。目と鼻の先にまで近づいていた俺に対し、騎手の2人は反射的に俺の鉢巻きに向かって手を伸ばすが、

こちらに伸びてきた2本の腕の手首を俺はそれぞれ片手で掴み、やはり力づくで騎馬から剥がすように上に投げた。

「うわああああっ!」

俺の狙い通り2人も両足から着地したため怪我は無く、投げてから着地するまでの間に鉢巻きを2つとも掠め取った。最初の別府君も含めて3人とも、何が起きたか理解できずに呆然としている。俺は奪った鉢巻きをまたポケットに入れつつ、最後の獲物を見据える。

「……さてザキちゃん、Bクラスの残りはもう大将である君達だけだ。100点を奪われないよう自分から騎馬を崩すのも戦略的にはまあ有りつつや有りだけど……」

「……いくぞ、皆!」

「ああ!2連続で0点はマズいし、ここは何としても一矢報いないとな!」

ザキちゃんの決断に、柴田君を中心とした騎馬3人も同意して向かってくる。まあここで勝負を投げる真似をすれば総合最下位も見えてくるし、リユンケルをさらに調子づかせるだろうし、勝ち目が薄くても戦うしかないよね。

決して破れかぶれではなく闘志を秘めた目をしながら、全速力で向かってくるザキチン達に対し、俺はその場で待機し待ちの姿勢で迎え撃つ。あと数秒で騎馬同士がぶつかり合うという距離で俺はすかさず手を伸ばし――

マスマイン達のように捨て身で飛び掛かってきたザキチンの腕を掴み、鉢巻きを奪ってから地面にゆっくり降ろした。

「バカな……並外れた反射神経で防御が間に合ったならともかく、飛ぶ直前から待ち構えていただと!?俺の捨て身を読んでいたのか……!?!」

「別に読んでいたんじゃないよ、ただ視えていただけ」

「何……?」

世界は広い。

頑張つて探せば俺より頭の良い人はたぶんいるし、俺より身体能力の高い人もきつといる。

この学校という狭い範囲でさえ有栖、コージ、ミスターと、既に候補が3人もいるのだから間違いない。ちなみに俺より性格が良い奴や人間出来てる奴は探さなくてもいる。たぶん何十億という。

ただ……世界中探しても自分より優れた人はまあいないだろうという才能を、幸か不

幸か俺は2つ持つてこの世に生まれてきた。1つは幸運。そしてもう1つは……

眼の良さだ。

俺の視野はそれこそ草食動物の如く広大で死角がほぼ無く、なおかつ視界に入った物を全て隈無く俯瞰して見通すことができる。

そして俺の眼は集中して視れば如何なる些細な情報も逃さず見透かす。呼吸、心拍、汗、意識の波長、筋肉の収縮……俺の眼は相手の全ての動きの先を読む。いかなる奇策も封殺し、どんな不意打ちも仕掛けることすら許さない。

俺には相手の動きの未来が視える。

そして後天的に身に付けた話術を組み合わせて応用すれば、相手の嘘や隠し事も自由自在に暴き出せ、自分を視れば肉体の状態から最も効率的な鍛練と適切な栄養摂取を可能とする。

『幸運』と並び、あらゆる勝負事が成立しなくなるほどの反則的なまでの才能だけど、無能な人間が持つてもただの宝の持ち腐れで、使いこなせるかどうかはあくまで俺次第だから、『幸運』と違ってこちらの才能はある程度気に入っている。

「まあヒントは与えたり、謎解きは後でお仲間達とやってね」

困惑しながら退場するザキちん達を捨て置き、また鉢巻きをポケットに入れつつ戦況を俯瞰して視渡すと……Aクラスは1騎、Dクラスは2騎失ったものの、Cクラスはリユンケル達大将騎のみと王手をかけていた。

「オラオラ5対1だけ？この勝負貰ったな！」

ランスと平田君はアイコンタクトを交わして2騎でリユンケルを取り囲み、他の2騎も少し離れながらも突撃する準備が整っている。あの多勢の状況で1つ鉢巻きを奪っているでリユンケル達も相当強いんだろうが、彼が俺のように特別な眼を持ってない限りこの状況は詰んでいるように見える。

しかしリユンケルの表情に焦りはまるで見えず、それどころか自分が負ける筈がないと確信している……これは中々面白いシヨウが見れそうだね。

「またテメエか。確か須藤だったよな、さつき俺に踏まれて無様に呻いてた奴だっけか？」

「好きだけ言つてろ、さつきの恨みここで晴らしてやる」

「騎馬の分際で態度がでかいな。馬を見下ろすつてのは、中々どうして気持ちがいいもんだ」

「へっ、馬に乗ってる方が偉いとは限らねーんだよ」

「クク、随分デカイ口叩くじゃねえか。……ならタイマンでもしなきゃ意味ねーよな？」

「……………あ？」

おっとここでリUNKERの言いくるめロールが始まりました。相手が挑発に弱い須藤君だし成功率は多分9割強。

「5対1じゃなきや俺に勝てないなら仕方ないが、勝負つてのは単独で勝つてこそ意味がある。無謀にも本条の奴に張り合つてるようだが、アイツが単独でBクラスを全滅させたのに、テメエは大勢でリンチして勝ち誇るのか？ダッセエな」

「テメエ……………」

「須藤君、龍園君の挑発に乗るのはダメだ」

「……………わかつてんよ」

「何もわかつてねーよテメエは。どうせこいつらにも卑怯な手を使ったんだろ？信頼する俺の仲間が、テメエなんかにはやられるわけがないだろうしな」

そういうリUNKERを支える小宮君と近藤君は、1学期に須藤君と暴力事件で揉めたっけ。……………それよりリUNKERの口から唐突に信頼する仲間なんてワードが出てきたから腹筋がヤバイです。

「げっんな、そのカス共が弱かったただけだ」

「ならタイマンで来てみるよ？俺の仲間を真つ向から打ち破った証拠つてやつをここで見せてみるよ？なあ？もし俺に勝てたら土下座でも何でもしてやるよ」

「……上等じゃねえか。聞いたろ葛城、絶対手え出すなよ！」

「正気か須藤!?! 龍園の口車に易々と乗ってどうする! ……ここは確実に——」

「もし手え出したらお前からぶちのめすぞ!」

はい、言いくるめ成功。まさに思う壺、完全に頭に血が上った須藤君は数の利をあっさり捨ててしまいましたとき。

「はいAクラスの騎馬、こつちにしゅーごー!」

邪魔になつてはいけないので、ランス達に呼び掛けて騎馬を集めさせる。

「俺達を集めてどうするつもりだ?」

「とりあえず俺達の後ろに下がってて。リユンケルの自信満々な態度からして、普通に戦えば鉢巻きは取れないだろうから」

「……坂柳のノートに書いてあったあの作戦か。俄には信じられんな、もし証拠を抑えられたら間違いなく失格だぞ」

「そんなリスクを躊躇する男じゃないでしょ」

俺の予想した通り、全力で向かっていく須藤君達に対し、リユンケル達は力を温存したまま戦う。やがて騎手の平田君は1度リユンケルの鉢巻きに手をかけるが、不自然にすっぽ抜けてしまう。

「たぶん次がラストチャンスだぞ平田……死ぬ気で奪えよ!」

「……わかった。やってみるよ」

果敢な攻めで体力を消耗したのか、平田君達は息を整えて集中する。

「食らえええええ!!」

須藤君は最後の力を振り絞って体当たりをするが、山田君を中心とした強固な騎馬を倒すにはパワーが足りず、決死の覚悟で平田君は再度鉢巻きに手をかけたがやはりすっぽ抜け、カウンターの形で逆にリユンケルに鉢巻きを奪われてしまった。リユンケルが鉢巻きを高らかに上げると同時に須藤君は膝から崩れ落ち、平田君を騎馬から落としてしまう。

「惜しかったな」

「……畜生!」

須藤君は怒りのあまり立ち上がり嘲笑うリユンケルを睨めつけるが、コージーに背中を押され外へと出る。あのままジツとしてたらペナルティを食らったかもしれないし、グツジヨブだぜコージー。

残されたDクラスの騎馬はリユンケル達に向かっていくが、わざと無防備に構えたリユンケルの鉢巻きに手をかけ、やはり取り切れずカウンターで鉢巻きを奪い取られる。

圧巻の強さでDクラスを全滅させたリユンケルは、次の獲物である俺に視線を向けて

きたので、俺も拍手で褒め称えておく。

「お見事、惚れ惚れする見事な逆転劇だったよ。……さ、かかっておいで。お望み通りタスマンで相手したげるから」

「はっ、やなことだ」

リユンケルは俺の提案を一蹴し、不敵な笑みを浮かべて騎馬から地面に降り、自分が着けている鉢巻きを地面で拭う。

「ありや意外、俺の鉢巻きは欲しくないの？」

「別にいらねえよ。……運動前に爪の手入れを疎かにするような間抜けに構ってやるほど、俺は酔狂じゃねえんだ」

「ふむふむ、君って意外と目敏いんだね」

「さて、何のことだろうな」

勝利が確定したことで俺も騎馬から降りつつ、この1ヶ月ずっと伸ばしておいた左手の爪に視線を落とす。あーあ、せっかくの滑り対策が無駄になっちゃったな。

俺とリユンケルがスポーツマンらしく握手し形だけでも健闘を称えあっていると、須藤君が鬼の形相でリユンケルに詰めよってきた。

「おい反則だろ龍園テメエ！鉢巻きに何塗り込みやがった!?!」

「あ？知らねーよ。大方髪につけたワックスだろ。負け犬がピーピー喚くんじゃねえ

よ」

リユンケルは鬱陶しそうに須藤君に鉢巻きを渡すが、当然証拠は隠滅済み。審判が睨んできた辺りでコージーに諭され、須藤君は怒りが収まらないままテントへと戻っていった。

「テメエらも災難だな、足手まといクラスと組まされてよ」

「別に問題無いよ、勝つのは俺達だし」

「クク、相変わらず大した自信家だ。……まあ今回はそうだろうよ。今の内に祝勝会の段取りでも考えておきな」

そろそろ俺達にも注意が入りそうなので、それぞれお互いのテントへと戻る。……やはりある程度の勝敗を度外視してでも、リユンケルはDクラスを苛め抜きたいようだね。

女王V S 麒麟児

「マジでボコボコにしてやるあの野郎！」

用済みになった左手の爪を切っていると、そんな怒号が聞こえてきた。テントに戻っても須藤君の怒りは収まるどころかさらに勢いを増し、拳をボキボキと鳴らしながらCクラスへ向かうのを、平田君がどうにか宥めている。

「ありやりや、完全にリユンケルの手玉だね」

「愚かなことです。たとえ向こうが反則を行つていようと、明確な証拠を全て隠滅されては無意味だというのに」

ましてやあの粗暴な態度では、学校側も到底真面目に取り合つてはくれないだろう。それだけならまだしも、もしこんな大衆の面前で暴力沙汰なんて起きれば、須藤君一人の失格じゃ済まないかもね。

「邪魔すんなよ平田。体育祭の間リーダーは俺だろ」

「君がリーダーであることを僕は否定しないよ。……でも、クラスの皆を見てごらん？」
須藤君は周りを見渡すと、Dクラスのほとんどは怒り狂う彼に怯え、逆鱗に触れない

よう距離を置いている。ちなみにホリリンなんかは呆れたような視線を向けている。

まったく、世話が焼けるなあ……。

「有栖、ちよつと行つてくるわ」

「わざわざ貴方が手を貸す必要は無いのでは？このままDクラスが脱落しても、私達の勝負はほぼ確定していますよ」

「普段ならほつとくけど今回Dクラスは仲間だからねー、少しくらい手助けしてもバチはあたらないでしょ」

どうやら彼……ついでに彼女はリーダーという役割を正しく理解していないらしい。ちよつとした老婆心でそれを諭してやるべく、俺はDクラスのもとへ歩き出す。

「お前ら、なんだよその目は……俺はクラスのために必死になつて」

「本当にそうか？お前はクラスを勝たせたいって気持ちより、自分の凄さを見せつけたいと思つてないんじゃないか？感情に任せて行動して、運動が苦手な奴を役立たず扱いして……それで勝てるなら苦労はしないだろ。リーダーなら冷静な判断と的確なアドバイスをしたらどうだ？」

苛立つ須藤君に幸村君はそう指摘する。口調はきついものの言っていることは正しいが……今の彼にそんな正論は却って逆効果だね。

「るせえ……」

「僕も同じ気持ちだよ須藤君。君を頼りにしてるからこそもつと冷静になって、皆の気持ちに応えて欲しいんだ」

赤信号が点つたところで、俺は気配を消して須藤君達へ接近する。

「るせえよ……」

「君ならできる筈だよ須藤君。だから――」

「るせえつつてんだろ!」

目を血走らせた須藤君は怒りに任せて平田君を殴りかかったので、俺は寸前で彼の手首を掴んで止めた。

「ほ、本条君?!」

「またテメエか! 首突つ込むならテメエからぶつ殺すぞ!」

掴まれた腕を振りほどこうとしながら喰つてかかる須藤君に対して、俺はわざとらしく溜め息をつく。

「脆弱だね。何の信念も持たない奴の拳は、やはり羽のように軽い」

「あ、あ?」

「俺には絶対負けない……だっけ? このザマでよくもまあそんな大口を叩けたもんだ、ある意味感心感心」

露骨な俺の挑発にキレた須藤君は蹴りを浴びせようとするが、俺は須藤君の足裏が地

面から離れる寸前のタイミングでその足を踏む。あまりに想定外の出来事に須藤君の中で怒りを困惑が凌駕した隙に、彼の胸ぐらを掴んで無理矢理こちらに引き寄せる。

「いつまでもガキみたいに駄々こねてんじゃねーよ。ここまでの結果に納得がいつてないんだらうけど、こうなることを予想できなかったお前の負けだ」

「な、んだと……!」

軽く威圧しながら淡々とそう指摘すると、須藤君は若干気圧されながらも俺を睨み続ける。度胸だけは一丁前だね。

「お前はリUNKELがスポーツマンシップに則って、正々堂々戦ってくれなくても思ってたのか? ラフプレーや反則行為に対する心構えや対策を何もしてなかったのか?」

「そ、それは……」

「それでリーダーとは片腹痛いな。チームのリーダーを任された者に必ず求められるのはね、チームを勝たせるビジョンだよ」

有栖のように緻密な戦略を立てる。正解ちゃんのように仲間と団結して挑む。リUNKELのようにルールの裏をかく。

どれを好むかは人によるだろうけど少なくとも須藤君……それにホリリンは現状、リーダーとしてこの3人の足下にも及んでいないことは確かだ。

「君がいくら運動ができて、それにかまけて惰性で戦ってるようじゃあリーダーは務

まらんよ。クラスのためを思うならちゃんと言務を果たせ。それができないってんならさっさと辞めちまえ」

言うだけ言って胸ぐらから手を離すと、言い負かされた須藤君は八つ当たりとばかりにパイプ椅子を思い切り蹴飛ばす。物に当たるなよ。

「……上等だ、リーダーなんかやっつてられつかよ。体育祭なんてクソ食らえだ」

そう掃き捨てて須藤君は陣地を離れ、寮の方へ向かって歩き出してしまった。

「余計なこととして悪化させちゃったかな？」

「ううん、厳しい言い方だけど本条君の言ってることは間違ってるよ。……それと、さっきはありがとう。僕だって痛いのは嫌だから助かったよ」

半分くらいは俺のせいだDクラスの敗北は決定的になったというのに、周りを見渡しても俺を非難するような視線は全然無かった。どんだけ嫌われてんのあの子。

ともあれこれで須藤君の自尊心は跡形もなく砕け散った。運動と暴力……彼が抛り所にしてきた2つが俺にはまるで通用しなかったのだから、彼が感じた挫折感を決して軽くないだろう。

同時にこれはチャンスでもある。人は大きな挫折を乗り越えた先に進化の可能性を秘めている。もし彼が強い意思で立ち上がれたなら、将来Dクラスにとって重要な存在になりうるだろう。ただしここから彼が立ち上がるには、俺の見立てではホリリンの協

力が必要になってくると思うけど……戻る前に一応彼にも声をかけておくか。

「ねえコージ、ホリリンのことは任せていい？俺は嫌われてるから無理そうだし」

「ああ、このまま堀北が何もしないつもりなら俺が手を打つ。他クラスの本条にこれ以上頼るのもどうかと思うしな」

「それなら安心だね」

理由は知らないけど、コージはホリリンをクラスリーダーに据えようとしている。だが今のホリリンは須藤君と同じく、リーダーとしては問題外だ。さつき須藤君の醜態に他人事のように呆れてたけど、リーダーが背負う責務を正しく理解しているならあり得ない態度だ。

それにしてもコージ、俺の曖昧な問いかけに苦もなく答えたということは……

「ここまで全部君の予定通りかい？」

「否定はしない」

「今からでも君がクラスを率いれば？須藤君やホリリンより適任だと思うぜ」

「くどいようだが、俺は平穩に生きたいんだ」

「そりゃ残念」

「さつきはわざわざ損な役回りを引き受けてもらって助かった」

「別に気にしないでいいよ、仲間同士ちゃんと助け合わないとね。それに彼が対抗意識

を抱いていた俺が強過ぎたことも原因の一つだろうし、俺にも責任はあるからね」

「否定はしないがそれを自分で言うか……?」

さて、用も済んだし有栖のもとへ帰還するか。

コージはクラス内にいる裏切り者の存在に多分気づいているんだろうが、敢えて体
育祭で惨敗させてホリリンにリーダーとしての自覚を持たそうとはね……彼が表に出
てくれば俺も有栖も楽しめるだろうに、残念だ。

波乱の展開を迎えたDクラスと相反して、上級生達の騎馬戦は順調に進んでいった。
しかし騎馬戦が終わってもバックれた須藤君は姿を現さず、最も頼れる得点源を失った
Dクラスの士気は目に見えて下がっていた。

……でもまだ諦めるのは早いんじゃない? 少なくともこの種目では、須藤君より頼れ
る男がやる気を出してくれるんだからさ。

「はっはっは、クールガールはとてラッキーなようだねえ。……いや、ラッキーなのはクインボーイの方かな？」

「まあ運の良さでは誰にも負けないけどさ、組み合わせ決めたのランスだからこれに関して俺は無関係だと思うよ。……あえてロマンティックな言い回しをするなら、俺と君はここで戦う運命だったんじゃない？」

「中々面白い解釈だねえ、嫌いではないよ。流星はいずれ私の右腕になる男だ」

「相変わらず君は勝手だね」

「それが私さ」

そう、200m走レース目で俺とミスターがバッティングしたのだ。コテージにいた平田君とコージーだけは然程驚いてはいないが、それ以外のDクラスの面々はミスターが真面目に参加しているこの光景に、ありえないものでも見ているかのように戦慄していた。

ちなみに他の競走相手は……まあどうでもいいか。どうせ俺とミスターの一騎討ちになると決まっているのだから。

「……………ツ！」

スタートラインにてクラウチングスタートの体勢に入ると、これまでずっと悠然とした振る舞いをしていたミスターの雰囲気豹変する。

たちまち俺の本能は警鐘を鳴らし、ライオンに首筋へ牙を突き立てられる寸前の光景をイメージする。

今のミスターから感じる闘気は……野生の獣のそれと何ら遜色ない。有象無象なら感じ取っただけで言葉も発せられなくなるようなそれを、こともあろうか俺ただ一人に向けてきやがった。

「オイオイ随分と殺気立ってるじゃないか。こちとらいたいけな草食動物なんだしお手柔らかに頼むよー？」

「それはできない相談だねえ。まあ光栄に思いたまえ、それだけ私が君のことを高く評価しているというときさ。パーフェクトな私と言えど、手を抜いて勝てる相手じゃあない」

なるほど、これは厳しい勝負になるな……。

俺の眼を持ってすれば骨格や筋肉の状態から、他人の運動能力だろうがある程度想定することがができる。だから以前から薄々わかっていたことではあるのだが、同じ土俵に立ってあらためてはつきりと理解させられた。

刹那でも気を抜けば殺られる。

合図が鳴るとほぼ同時に、俺は最優のスタートダツシュを決め先陣を切る。審判が合図を出す未来を視ることが出来る俺は、必ず誰よりも早く動き出すことができる。

しかしリードを奪って尚、俺とほぼ同時にスタートダツシュを決め僅か10cmほど後方から迫るミスターに対して、俺の本能は絶えず警鐘を鳴らし続ける。

差が全く広がらない……！俺が全力で走っているのに、一向に引き離すことができない！こんなこと今までで一度たりとも無かった！

メリーゴーランド走法？そんな余裕などある筈が無い。それどころかほんの僅かでも速度を緩めれば、たちまち追い抜かれてしまうだろう。

一瞬たりとも気を抜ぬくな。

体中の毛穴をブチ開けろ。

己の全てをこの走りに懸ける！

全身の細胞1つ1つに意識を働かせ続け、俺とミスターはトップスピードのまま200メートルを駆け抜ける。

……結果的にメリーゴーランド走法が成立して形になり、0コンマ数秒差で俺がゴールテープを切り、このレースを制した。

高校生のレベルを完全に逸脱した俺達の走りに全ての人が言葉を失う中、レースの邪魔にならないようさっさとテントへ戻ろうとしたら、ミスターが上機嫌で高笑い出し

た。

「はっはっは、まさかこの私に打ち勝つとはねえ！……このスクールに来てから最も有意義な時間だった。今回は私の完敗だよ」

「ありや意外。超自信家の君にしては、随分あっさりと負けを認めるんだね」

「先程のレースから考えるに、どうやら私と君の足の速さはまったくの互角。であるならば現状ではスタートダッシュで勝る君には決して勝てやしないだろう。……君の眼は私でさえ持ち得ない才能だ」

特に教えた訳でもないのにたった一度の勝負で俺の眼を見抜くとは、大した洞察力だな。

「しかしいずれリベンジはさせてもらうよ。スタートダッシュで必ず遅れを取るならば、身体能力そのもので上回ればいいだけの話だからねえ」

「むむ、シンプルだけど手っ取り早い攻略法だね」

「私も君もまだ若く、己に秘められたポテンシャルを全て引き出せている訳じゃない。そして私は、自らのポテンシャルが至高であると確信している。……故に約束しよう。君のコンプリートを、私のコンプリートが凌駕するとね」

「揺らぐことのない自らへの信頼、そしてそれを裏付ける圧倒的な才能……うん、やはりミスターはそうでなくちゃね」

「六助だ」

「んあ？」

「君をオンリーワンのフレンドと認め、この私をファーストネームで呼ぶことを許そうではないか。当然私も今後はクイーンボーイではなく、桐葉と呼ばせてもらおうよ」

「強引かつ上から目線な友達だなあ……まあいいや、そういうの嫌いじゃないぜ六助」

俺にとって名前呼び、それも呼び捨てとなれば非常に特別な意味を持つものだけ……彼をそのカテゴリーに加えることに大した抵抗は無かった。ここまで敗北を強く意識させられたのは、これまでの人生を遡っても有栖以外一人もいなかったのだから。

拳を突き合わせ健闘を讃え合い、俺はテントへ、六助はコテージへと戻っていく。

200m走が終わり30分の昼休憩に入ると平田君に、どうやって六助と仲良くなれたのかを異様に熱心に聞かれたが、正直彼と仲良くなるのに特に苦労した覚えが無いので答えようがない。

そう答えたら話を聞いていたほとんどの人が、「ああ、変人同士波長があうんだな……」といった表情で勝手に納得した。なんでや。

……Dクラスからホリリンと榎田ちゃん、向こうのCクラスから木下ちゃんとリユケルの姿が見えなかったので、今頃リユケル達はホリリンに止めを刺しに行っている

の
だ
ろ
う
ね。
さ
あ
こ
ー
じ
ー、
ど
う
や
っ
て
切
り
抜
け
る
つ
も
り
な
ん
だ
い
？

体育祭閉幕

昼休憩も終わり体育祭は花形である推薦参加種目に突入するが、俺は一度も土をつけられることなく順調に勝利を重ね続けた。

借り物競走は『好きな人』というお題を引いたのでノータイムで有栖をお姫様抱っこでゴールまで運び、四方綱引きではファルコンと共に山田君擁するCクラスをパワープレーで下して勝利をもぎ取り、男女二人三脚は眼の応用でマスキンのトップスピードに合わせて駆け抜けた。これでもうAクラスの学年別総合優勝はもう確定的だね。

しかし順調に勝利を重ねるAクラスとは対称的に、Dクラスは完全にお通夜ムードに突入していた。結局昼休憩後も須藤君は戻らず、ただでさえ乏しいプライベートポイントで平田君が消費して彼の代役を立てて臨むも、絶対的エースを欠いた状態で挑んだところでもうどうしようもなく、最後の種目1200mリレーの番になる頃には総合最下位が確定していた。

ホリリンもどの道あの怪我じゃ不参加だっただろうけど、さっぱり姿が見えないのはおそらく須藤君の説得でもしているのだろうね。だけどこの様子だと結局最後まで連

れ戻せなかったか、残念ながら今回は俺の見込み違いだったのかも……

……いや、それでもなかったみたいだね。

「はあ、はあっ……悪い待たせた！今どうなってる!？」

息を切らせた須藤君がDクラスに戻ってきた。足を痛めているからか、彼より少し遅れるようにホリリンも。

……2人とも良い目をするようになったね。彼等の間に何があつたか知らないが、おそらく2人は今まで目を背けていた己の弱さから、逃げずに向き合うことができたのだろう。自分の弱さを認めることは、簡単なようできて中々できることじゃないし、それを取り越えた彼等の心は比べ物にならないほど強くなつたことだろう。

現に今、クラスの殆どから非難するような視線を向けられているというのに、須藤君は自らの過ちを認め素直に頭を下げている。戻ってくる前の須藤君なら天地がハンドスプリングしても有り得なかつた光景だ。

そしてホリリンにしても、私情で体育祭を投げ出した須藤君を連れ戻すなど、以前までなら絶対にしなかつただろう。

この2人の成長を見届けた俺は、今後Dクラスはさらなる飛躍を遂げることを予感しつつも、そろそろリレーが始まるためグラウンドの中央へと向かう。

「それじゃあ頼んだよファルコン。緊張して大暴投しちゃダメだからね？」

「無用な心配をするな。……この1ヶ月、俺は欠かすことなく鍛練を費やしてきた」
流石ファルコン、頼りになる男だぜ。

推薦競技最後の種目1200mリレーは、全学年全クラスが入り交じった12人同時スタートの6人によるリレーだ。12人分のレーンなど用意できないのでスタートは横並びで、レース中可能なら好きにインコースを取って構わないというルールになっている。

スタート同時に約1名が集団をこぼす抜きする。1年Dクラスは最強カードの須藤君をアンカーではなく敢えて1番手に回し、ぶつちぎりでリードを取ることで混戦を避けてインコースを取った……が、中盤に差し掛かるとどんどん追い抜かれていった。やはり序盤でリードを大きく奪うと余計なゆとりが生まれてしまうから、速い奴は後ろに回すべきだったと俺は思う。

ちなみに我らが1年Aクラスは巧みなバトンワークで中々の好順位につけている。この1ヶ月間、彼等は徹底的にバトン手渡ししの訓練を行ってきた。身体能力では上級生に対して不利になるのは百も承知で、そういった細かいタイムロスの削減を重ねてアドバンテージを取ろうという目論見だ。

しかし現実はその上手く運ばない。2年と3年のAクラスはそういった部分でもまるで隙は無く、さらに卍解ちゃん達も同じ方針だったのかバトン捌きにそつがない。結果、2年と3年のAクラスを1年Aクラスと1年Bクラスが後ろから追いつぐという形が続く。

しかしここで思わぬハプニングが発生。

4番手で走っていた3年Aクラスの先輩が途中で躓き転倒してしまう。その際に1年のAクラスとBクラスはその先輩を追い抜かすが、レースはもう2年Aクラスの独走態勢となった。ウチのクラスは懸命に追い継るも途中で3年Aクラスに追いつかれ、5番手の鬼頭が走る頃にはトップとは30mの開きができていた。

「どうやらこの勝負は俺達の勝ちっすね堀北会長。出来れば接戦で走りたかったですよ」

2年Aクラスのアンカーで次期生徒会長現副会長のみやびん先輩は、会長さんを見つめて笑いながら勝利宣言をしたかと思えば、その笑みを俺にも向けてきた。

「それに本条、お前もな。まだ1年でよくここまで個人成績で俺に張り合ったがこのリレーで俺の勝ちだ。……だが安心しな、ちゃんとお前の実力は認めてやるよ。どうやら堀北先輩が卒業した後も退屈しないで済みそうだ」

「……さてどうでしょうねみやびん先輩、勝ち誇るの少しばかり気が早いんじゃないですか？」

俺がそう指摘するとみやびん先輩は笑みを消し、途端に不愉快そうな表情になる。

「お前のクラスと俺のクラスには、既に30m程の開きがあるんだぞ？お前の足の速さは確かに驚異的だが、この俺も随分と舐められたもんだな」

「いやいや流石にそんだけリードされたら、いくら俺でもみやびん先輩を追い抜かすのは無理ですよ。……だったらそのリードを奪うまでつす」

「はっ」

怪訝そうなみやびん先輩に構わず、俺は後ろを向いて準備に入る。あともう少しで2年Aクラスの5番手走者、瀬川先輩がこちらに到着するだろう。

「この学校って面白いですよね。試験だつていうのに、ルールのいたるところに抜け穴が意図的に仕込まれている」

「……何が言いたいんだ？」

「少なくとも普通のリレーじゃ、こんなことしたら間違いなく即失格だ。それが許され

てるのは多分、俺達下級生が上級生と競い合うための救済措置なんでしょうね」

そして今まさに瀬川先輩からみやびん先輩へバトンが渡ろうというところで……

「ぬうううううおおおおっ！」

雄叫びと共に30m後ろから5番手走者ファルコンが、俺に向かってバトンを全力で投擲した。

「「なあっ?!」」

コージーと会長さん以外のアンカーが驚愕する中、俺は軌道が大きく逸れたバトンに素早く飛びついてキャッチした。……何が無用な心配をするのだよ、暴投もいいところだあのノーコン野郎。もしこの眼が無かったら取り零すところだったよ……まあ文句は後でたっぷりグチグチ言うとして、とりあえず今は勝ちに行くとするか!

「っ?!くっ……!」

俺は即座にターンして疾走し、みやびん先輩もバトンを受け取り俺に並走するように走り出した。

「流石に想定外だったぜ、まさか最後の最後でこんなビツクリ芸を用意してるとはよ! たしかに普通ならこんな暴挙、許される筈がねえ!」

「うちのお嬢様は用意周到でね、事前にルール確認も済ませてあるつすよ。だけど序盤から仕掛ければもしかしたら真似されるかもしれないし、ここ一番の奥の手つてわけです」

失敗すれば大きく順位を落としかねないリスキーな博打だが、仕掛けることにあのランスでさえ反対をしなかった。堅実に挑んだところで上級生との運動能力差は、そうそう埋められるものでもない。何よりこのリレーで勝とうが負けようが学年別総合優勝に揺るぎはないのだ、この局面ではたとえランスであろうと止める理由はどこにも無い。

俺とみやびん先輩は最初は並走していたものの、あつという間に差は開いていく。

「な、なんだと!？」

会長さん曰く優れた学力に高い運動能力に加え、突出した人心掌握力を兼ね備えた、やや危険な思想を抱いているが図抜けて優秀な人物らしいが……少なくとも単純な身体能力では、俺や六助には遠く及ばないようだ。

最終的に俺はみやびん先輩に10m以上差を付けてゴールテープを切った。遅れて2着でゴールしたみやびん先輩は、怒りと歓喜の入り混じったような目で俺を睨みながら睨んでくる。

真つ向から完膚無きまでに敗北した悔しさと、何やらずつと探していた物が見つかった。

たような喜び。

「やってくれたな本条。こんな屈辱は生まれて初めてだ。決めたぜ……次期生徒会長として、お前は来年俺がこの手で叩き潰す」

「来年って……屈辱とまで言う割に、随分と気が長いんすね」

「残念だが俺も今年は色々と忙しくなるから、お前の相手までしている余裕は無いんだよ。……それに堀北先輩が卒業する前に勝っておきたいしな」

「ふむ……でもあの会長さんはコージがお気に入りみたいですよ？」

「あ？」

おもむろに俺がグラウンドに視線を向けながらそう言うと、みやびん先輩は怪訝そうな表情で同じ方向を向き……凄いスピードで走るコージと、同じく凄いスピードで追いつける会長さんに、思いつきり目を見開いて固まった。

あつ、少し前を走っていた生徒が2人の驚異的過ぎる追い上げに驚いて転んでしまいコージの進路を塞ぎ、その隙に会長さんが追い抜いて4着でゴールした。しかしコージよ、下手したら俺や六助より速かったけど……目立ちたくないんじゃないの？
こんな大観衆の中であんな走りしたんじゃない、確実に有栖にも目つけられたよ？

……憶測なため断定はできないが、ある程度理由は推測することはできるけど、どうしてもやっちゃったな感が否めない。

「多少不本意な結末だが……まあ競技にアクシデントは付き物か」

「どういうことつすか堀北先輩。1年Dクラスは精々7着だった筈……なんでアンタが後ろから追っかけてたんですか？」

「後輩から興味深い挑戦状を叩きつけられたんでな、並走するために3着を捨てただけだ」

「それは随分と不公平な話ですね。俺の挑戦は全然引き受けてくれなかったのに……」

「それはお前が周りを巻き込みすぎるからだ。……それにもう俺だけに執着しなくても、楽しめそうな相手なら見つかっただろう？」

「そういう問題じゃ……ないんすよ……!」

俯くみやびん先輩に構わず会長さんはその場を後にし、コージーもいつの間にかさつさとテントに戻っていた。

「あいつはたしか綾小路……何故堀北先輩はあいつと……しかしあの走り、これまでの競技では……何かあるのか?……」

みやびん先輩が何やらブツブツ言い出し始めて、正直ちよつと関わりたくなかったので俺もさつさとテントに戻る。

するとテントでは有栖が、めったにお目にかかれないほど上機嫌に微笑んでいた。なんかもう幸せなオーラが物質として具現化しかけてるようだ。……ここまで喜んでい

る有栖は中学のとき、俺がこの子の下につくことを半分了承したとき以来かな。

体育祭で勝った程度でここまで喜ぶわけがないし、考えられるとすればコージか？やだ、ヤキモチ焼いちゃう。

「随分とご機嫌じゃん有栖、どうしたの？」

「以前桐葉にも少しだけお話しましたよね？私の信条にかけて、勝たなくてはならない人物がいると。……その方と今日巡り会えました」

「ふーん、それがコージ……つまり綾小路清隆ってわけか」

「……随分彼と親しいようですね。もしかして彼が例の黒幕さんなのですか？」

「うん、俺達ズツ友」

「……こんなことなら、他クラスの方々にも目を通しておくべきでしたね。そうとわかっていれば、葛城君に無駄な時間を割くこともありませんでしたのに」

「まあ、後の祭ってやつだね」

そして閉会式となりトータル得点数が発表される。まず勝った組は当然赤組で、1年の総合順位は……

1位 Aクラス

2位 Cクラス

3位 Bクラス

4位 Dクラス

これで俺達Aクラスはプラス50。Cクラスは白組が負けたことでマイナス100。Bクラスは総合3位のマイナス50と白組の負けによるマイナス100合わせてマイナス150ポイント。Dクラスは最下位によりマイナス100ポイント。一番スポーツマンシップに則って臨んでいたBクラスが一番損するという、何とも後味の悪い結末だ。

そして俺は見事全学年最優秀賞に輝き、1年最優秀賞にはなんとマスミンが選ばれた。おそらく騎馬戦での大活躍と最後のリレーが最大の決め手だろう。

これで須藤君のホリリンを名前で呼ぶという悲願は、跡形もなく砕け散ったわけだが……

「うおおおおおおおっしやあああああああ!!」

当の須藤君は割れんばかりの大歓声を上げていた。少し気になったので本人に聞いてみることにする。

「どしたの須藤君?何やかんやでホリリンが名前で呼ぶこと許してくれたの?」

「おう本条か、まさにその通りだぜ!色々あったけど、最高だぜ体育祭!」

「現金だね君も」

そんな感じて子供のようにはしゃいでいた須藤君だったが、急に静かになりまっすぐ

俺と向き合う。

「今日はお前にもかなり迷惑かけちゃったな……色々とすまんかった」

「別に気にしなくてもいいよ。大した手間でも無かったし」

「それに……俺の完敗だった。運動じや誰にも負けねえと、自分が調子に乗っていたことを痛感したぜ。上には上がいるんだな。……だが、次は負けねーぞ」

そう言つて須藤君は右手を差し出してきたので、当然俺も握手に応じる。

「ふむ、さつきとは違い力強い拳だ。何があつたかのかは知らないけど、今回の経験を経て大きく成長できたようだね。……よろしい、リベンジはいつでも受け付けているよケン坊」

「おうーケン坊!？」

「ある程度気に入った人にはニツクネームをつけると決めているんだ」

「だからつてケン坊はねーだろケン坊は!？ガキみてえだろうが!」

「癩癩を起こして体育祭バックレかけたんだから正しくガキでしょうが。なあコージー?」

「何故そこでオレに振る」

「ほら、コージーも反省しろクソガキだつてさ」

「捏造するな」

「デメエらあああ……!」

気が短いのは相変わらずなようで、俺とコージがキレたケン坊から逃げ回っていると、面倒そうにしながらマスミンが近づいてきた。……最優秀に選ばれたつてのに、ちつとも嬉しそうにしないねこの子。

「盛り上がつてるところ悪いけど、ちよつといい?」

「ん?どしたのマスミン」

「確かにアンタもだけど、そっちの……綾小路だっけ?この後着替えたら少しでいいから時間を頂戴」

「……どうしてオレが?」

「少し話があるから、5時になったら玄関に来て」

言うだけ言つてマスミンはさっさとその場を後にした。突然の出来事に、須藤君の怒りも消し飛んだようだ。

「なんだよ綾小路。お前にも春が来たのか?」

「本条も呼ばれているからそれは無いだろう。……本条、何か知っているか」

「うーんとねえ……多分呼んでいるのはマスミンじゃなくて、俺達Aクラスのトップだろうね」

「つまり……坂柳か」

「色々事情があるだろうけど、今回はやっちゃったねコージ。有栖に知られたからには、君の平穩はかなり遠ざかると思った方がいい」

変に希望を持たせないよう残酷な予言を残しつつ、俺もマスマンの後を追った。

5巻エピソード

〔Side:南雲雅〕

体育祭まで残すところあと1週間。

俺は既に同学年をあらかた手中に収めているため、2年Aクラスひいては赤組の勝利は既に決定事項。生徒会役員としての仕事も既に済ませてあるし、やることも無く丁度良い機会なので今のうちに、かねてから気になっていた後輩に接触することにした。

クラスメイトの瀬川に電話で呼び出させると、そいつは二つ返事ですぐにこちらへ向かうとのことだ。

「上級生の教室に来させるなんて、随分意地悪なことするじゃない雅」

「それは心外だぜな。以前瀬川からそいつのことは聞いているが、とてもそんなことで物怖じするような奴じゃない。だろ？」

入学して間もない頃に上級生からポイントを巻き上げるような奴が、たかだか1年早く生まれた奴等のホームで萎縮する筈がない。瀬川も俺に同意するように頷くが、何故かまるで苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「南雲。前もって言うておくけど、あいつは人懐っこくて割と礼儀正しいところもある

が……かなり変な奴だぞ」

「仮にも部活の後輩に対して、そりやまた随分とひでえ認識だな。だけど変つっても鬼龍院よりかはマシだろ？」

「いや、あいつとタメ張るレベルで変だ」

「……マジか」

「マジだ。具体的な例を上げるなら……俺達が団体戦でIH出場を決めた次の日、部員全員をグラウンドに呼び出したかと思えば、大会を勝ち抜くために戦いの神への祈祷なんて怪しげな儀式をさせられたりした」

「いや何してんだお前ら？そんな胡散臭いもん普通に断れよ」

「いやあいつ無駄に口が上手くてよ、気がついてたらなんか言いくるめられてた。今から思えば俺達何やってたんだろうな……」

さてどうしようか、なんか会いたくなくなってきたんだが。

「……その子、実は何かヤバイ宗教に嵌まっていたりはしない？」

「いや、それは無いと思うぞ朝比奈。始めてから10分くらいで『思ったより面白くなかった』とか言って中止したし」

「自由気ままか」

瀬川の話の聞いている内に、まだ会ってもいないのに俺となずなの警戒心が見る見る

うちに上昇していく最中、突然教室のドアが勢い良く開かれた。

「はいはい、呼ばれて飛び出てジャジャジャーン。桐葉君の到着ですよー」

扉の勢いと台詞のはっちゃけ具合に反して、やたらとのんびりした声色で黒髪長身の男が入ってきた。仮にも上級生の教室だというのに、行き着けの喫茶店のような気安さだ。

俺が今回呼び出した生徒で瀬川の部活の後輩……1年Aクラスの本条桐葉だ。

「瀬川先輩、今日はどしたんすか？心機一転してロン毛になる決断でもしましたか？」

「してねえよ!?今までもこれから俺は坊主を貫き通すわ!」

「ああよかった、それを聞いて安心しました。先輩の坊主頭をなで回さないと、俺も厳しい練習を乗り越えてはいけませんからね。はいジヨリジヨリ」

「だあああ!だから会うたびに頭を撫で回すんじゃねえ!だいたいなあにが厳しい練習を乗り越えるだ、ほぼ幽霊部員だろうがテメエ!」

教室に入るや否や、本条は周りの上級生など気にも止めず瀬川に近づき、軽く会話をした後後ろに回り込み執拗にあいつの坊主頭を撫で回し始めた。

少々生意気な後輩と面倒見の良い先輩、一見部活仲間同士の気安いやり取りに見える。……これだけ見ると、とても現主将と幽霊部員のやり取りとは思えないな。

「……つてそうじゃねえ。悪いが本条、今回お前に用があるのは俺じゃねえんだ」

「んあ?」

「俺が瀬川に頼んだんだ。回りくどい真似してすまんかったな本条」

俺がそう呼び掛けると本条は瀬川を解放しつつ、こちらに向き直る。

「おや? あなたは生徒会の……」

「南雲雅だ、よろしくな」

「ああ、たしか危険思想の持ち主だつて会長さんが警戒してる人ですね」

本条は手のひらに拳をポンと置きながら、喧嘩を売つてると思われても仕方ないようなことを平然と口にしやがった。俺に崇拜に近い感情を抱いている奴等が、不快に思つて詰め寄ろうとしていたので手で制しておく。

「堀北先輩に何を吹き込まれたか知らないが……心外だな、俺はこの学校をこの手で変えたいだけだ」

「なるほどなるほど、時代の変革者はいつだつて変わり者や危険人物扱いされますからね」

「ま、そういうことだ。伝統なんてものを大切にするあの人には理解されないが、俺から言わせればこの学校は温すぎる」

口では厳しいことを言うが救済措置を忘れず、ろくに退学者も出ない甘いルール。そして強者だろうが弱者だろうが、同じクラスであれば待遇に格差が生じない不平等な平

等、強者に寄生し甘い汁を吸うことがまかり通る、見せかけだけの実力主義……そんなものを後世に残す必要があるとはとても思えない。

「だから俺がこの手で作るんだよ……本当の実力主義の学校をな」

「ふむふむ、なるほど……色々と賛否が分かれそうな考え方ではありますが、俺はみやびん先輩を尊重しますよ。あなたは確かな信念を持って行動しているようですよ」

「尊重してくれるのはありがたいが、みやびん先輩つて何だおい」

「可愛いでしょ？ねえ？」

「え？あ、うん、いいんじゃないかな」

なずな、急に振られたからつてとりあえず同意するな。そして本条、「ほらね？」じゃないんだよそのドヤ顔やめろ。それから目を離れた際に黒板に桐葉参上!!とか書くな。やりたい放題かお前。

「まあそれはそれとして、俺に何の用すか？」

「体育祭が終われば俺は生徒会長になり、役員にもいくつか空きができる。そこで本条……生徒会に入り、俺と共にこの学校を変えてみないか？」

「……俺を誘う理由を聞いても？」

「学業では常に最優秀の成績を収め、スポーツではこの学校で初めて全国優勝を果たした。さらに帆波によれば、Aクラスは夏休みの特別試験ではどちらも結果が振るわな

かったが、お前がその気なら難なく勝てたそうじゃないか。さらに先日のポイント返還……誘わない理由はどこにも無いだろ？」

「皆してお喋りさんですね、俺の個人情報駄々漏れじゃないっすか」

呆れたように溜め息をつきながら、黒板に葛飾北斎みたいな波を描き始める本条。無駄に完成度高いのが若干ムカつく。

堀北先輩が卒業した後、こいつを俺の遊び相手にするのはもう確定している。それを抜きにしても、俺が生徒会長としてこの学校の未来を真剣に考えるなら、後継者は間違いないくこいつにするべきだ。

「ええと……誘っていたらだいて光栄なんですけど、丁重にお断りします」

「一応理由を聞いておこうか。俺の目指す学校は、お前のような生徒にとっては間違いないく過ごしやすくなるぞ？」

「それがですね、今の会長さんと以前約束したんすよ。ポイントを貸す条件として、みやびん先輩の味方になるなって。俺は生涯一度たりとも約束事を破らないと決めてるの
で……」

「なんだ、そんなことか。俺が堀北先輩にかけ合つて、その約束を取り下げてもらおうか？ いくらあの人でも後輩の意思をねじ曲げてまで、俺の邪魔をしようとは思わないだろ」

「残念ながらどちらにせよ生徒会は入りませんよ。俺が従うのは、今のところ有栖だけですから」

有栖……1年Aクラスの坂柳か。ずっと気になっていたし、この機会に聞いておくか。

「どうやら用件も済んだようなので、俺はこれにて失礼します」

「まあ待て本条。お前は何故坂柳に従う？総合力では圧倒的にお前の方が上だろうに」

「俺の上に立つ奴に俺が求めるのは頭の良さだけです。総合力がどうかは別に関係ありませんよ」

「その頭脳にしたってお前と坂柳の学力は互角だ。学力以外でも特別試験でのお前の立ち回りから考えて、坂柳に劣っているとはとても——」

「いえ、有栖は俺よりも賢いですよ。……俺と有栖の決着が未だついていないのは、能力ではなくあいつの心の弱さが問題ですから」

坂柳の心が弱い？集めたデータからは特にそんな印象が無かった、どこるかむしろ強いという評価だったか……。

まあそれは今度考えればいいか。

「最後に1つ聞かせろ。特別試験でお前は、何故勝つ気も無いのに無駄に色々と動いた？おかげでどのクラスもお前をかなり警戒してるだろうぜ」

「多少警戒させておいた方が俺も楽しめますからね。無警戒の相手に勝ったところで大して面白くもないですし」

そう言つて本条は教室から出たが、すぐに戻つてきて黒板を綺麗にしてから再び教室を出ていった。

聞いていた通りたしかに変人だったが、なるほどな……今回の邂逅で本条については色々とわかつた。ついこの間の始業式で、全国優勝を表彰されたのに特にまるで喜んではいなかったあいつを見てもしやと思つたが、やはり俺の推測は正しかつた。

あいつは俺の生き写しだ。特に苦勞することなくトップを取り続けたが故に、誰が相手だろうがどんな条件だろうが自分が負けるなどとは一切思わないし、勝つても当たり前だから特に喜ぶことはない。だからこそ戦いがいのある奴……勝てるかどうかかわらない奴に飢えている。俺にとつての堀北先輩が、あいつにとつての坂柳なんだろう。……唯一俺と違うのは、自分と競える奴が同学年ということだろう。

まったく、神様つて奴は随分不公平だな。

……この1週間後、俺は人生で初めて完膚無きまでの敗北を経験することになる。

【side：坂柳有栖】

午後5時前。

特別棟3階にて桐葉と共に、真澄さんが「彼」を連れてくるのを静かにじつと待ちます。

「珍しく少し緊張してるみたいだね有栖」

「フフ、やはり貴方に隠し事はできませんか」

「生憎と目が良くてね」

正直桐葉をこの場に同席させるのかは凄く迷いました。私と彼の（と言つても私からの一方的なものです）が因縁に最愛の人を巻き込んでよいのかと……。

ただ桐葉は私に近過ぎますし、彼とも親交深いと今日知りました。桐葉の眼と優れた洞察力なら、秘密にしていようといずれ辿り着いてしまうでしょう。……それに桐葉もご両親のことを考えれば、まったくの部外者というわけでもないですしね。

しばらくしてようやく、真澄さんが曲がり角から姿を現しました。向こうの廊下には、長年会うことを切望していた彼がもういるのでしょうか。

「私はもう帰るわよ」

「御苦労様でした真澄さん。それと最優秀賞おめでとうございます」

「はいはい」

おざなりに手を振って真澄さんは帰っていくのを見届けてから、私と桐葉は角を曲がって呼びつけた彼……綾小路清隆君と対面しました。

「よっ、さつきぶりコージー」

「ああ。……それで、坂柳だっけか。悪いけどー通だけメールを送っても構わないか？」

「どうぞ」

「すまん。……それで、オレを呼び出して何の用だ？」

「最後のリレーは大注目を浴びていましたね。……貴方の走りを見てあることを思い出したので、そのときの衝撃を共有したいと思ってつい呼び出してしまいました」

「ほうほう、なんか告白の前触れみたいだね」

「余計な茶々いれないでください。心配しなくても、貴方以外に告白するなんて絶対ありえませんか」

「うん、知ってる」

「……いちやつくならオレはもう帰っていいか？居心地が悪くてしょうがない」

まだ本題に入っていないので帰りたいそうにされたので、私は内心慌てて杖を鳴らしながら彼の隣に移動します。まったく、桐葉がいると緊迫感が死滅してしまうのが難点です

ね。

「お久しぶりです綾小路君。8年と243日ぶりですな」

「……人違いじゃないか？オレはお前なんて知らない」

「ふふ、そうでしょうね。私は貴方を知っていますが、貴方は私を知らないでしょう」

意識して杖を鳴らしながら綾小路君から遠ざかり、意味不明な言葉を並べる私にうんざりして、彼がその場から去ろうと歩きだしたところで私は――

「ホワイトルーム」

彼が絶対に聞き逃せないであろう単語を口にする、その言葉を呟いた途端足音がピタリとしなつたので、私はゆっくりと振り返り彼の背中を見つめます。

「随分と珍しいじゃんコージー、心拍も筋収縮も乱れてるぞ？」

「嫌ですよ、誰にも言っていない筈の情報を知られているというのは」

「……お前は……」

「懐かしい再会をしたんですから、挨拶をしなくてはいけませんよね？」

彼は振り向いて、警戒のこもった目で私を観察する。無理ありません、あのときお父様から聞いた話が真実なら、彼がこうしてあの施設の外にいること自体が異常事態な

筈。理由は不明ですが、彼は何かしらの方法であの施設を抜け出しここにいるのでしょう。つまりあの施設について知っている私は、あの施設から自分を連れ戻しに来た刺客の可能性が高いと考えるでしょうね。

「ご心配なく。私はただ貴方を一方的に知っているとだけで、あの施設とは無関係な人間です。……でも貴方がDクラスにいるというなら、特別試験でのDクラスの躍進も納得がいきます。堀北さんを隠れ蓑に、貴方が裏で糸を引いていたんですね」

「何のことだか。うちのクラスには優秀な参謀が何にもいる。オレの出る幕は——」
「とぼけなくて結構です。桐葉はおそらく貴方の希望を汲んで、貴方の正体については私にも徹底して伏せていましたが、貴方がしてきたことについては概ね把握しています」

「まあそんな俺の配慮も全部無駄になっちゃったけどな。誰かさんがリレーで大活躍なんてしちゃうから」

「……すまん」

綾小路君もその点については後ろめたかったのか、目を逸らしながら謝罪する。

「うん、許す」

「随分あっさり許すんですね」

「ある程度推測はつくからね。リユンケルは体育祭中に仕込んだ罠でホリリンを追い詰

める筈。もしそれを防いでしまえばリユンケルは当然、より本格的に黒幕であるコージーを探り始めるだろう」

「彼は体育祭以前から探っていたようですし、当然そうするでしょうね」

「それと同時期にコージーがリレーで桁外れの足の速さを披露すれば、はたしてリユンケルはどう思うだろうね？」

「ふむ……これまで何の取り柄も無いと周知されていた綾小路君が突然頭角を現す……そんなまさに疑ってくださいと言わんばかりの行動を取った綾小路君を、素直に黒幕だと断定するほど彼は純粹ではないでしょうね」

私と桐葉によるいつもの擦り合わせを、綾小路君は黙って観察するように聞いていく。

「リユンケルはおそらく別にいる黒幕がコージーに指示して、スケープゴートにしようとしたんじゃないかって判断するだろうね。つまりコージーは敢えて目立つことで、リユンケルを攪乱しようと思ったってわけ。……まあ全部憶測だし、黒幕がコージーじゃないなら話は変わってくるけど」

「それはありえませんが。綾小路君はあの施設の最高傑作、彼を操れる方がいるとは考えられません」

「どうやらお前は本当にオレを、あの施設を知っているみたいだな。……本条もなのか

「？」

「いや全然。そんな米国大統領公邸みたいな名前初めて聞いたぜ」

「ホワイトハウスではなくホワイトルームです。不必要な小ボケを挟まないでください」

「まあコージが特殊な環境で育つたことは気づいていたけどね」

「……参考までに聞いておきたいんだが、どうやって気づいたんだ」

「まずコージの肉体。俺のような特別な眼を持つていないのに、最も効率的な筋肉の付き方をしている。生まれつきではありえないのは勿論、よほど徹底して管理しなきゃこうはならない。それに俺が嘘を見抜けないってのも不審な点だ。普通の人は嘘や隠し事をするとき多かれ少なかれ異常が出るのに、何故か君はまったくの自然体だった。ただこれだけだと六助も該当するから断定はできないけど……」

そこで桐葉は一度言葉を切り、何故か綾小路君に呆れたようなジト目を向ける。

「この国で真つ当な育ち方をしていて、ドラえもんを知らない奴なんている訳ねーだろ。それに船上試験で遠足にもいつか行ってみたいとか言ってたよな？ 以上のことからから推測するに、そのホワイト企業とやらは――」

「ホワイトルームです。ちなみに雇用形態はグリゴリのブラックでしょう」

「そう、そこはおそらく外界と隔絶された教育施設。お前はおそらく一般的な学校に通

うことなく、そこで徹底的に高度な教育を叩き込まれた。それ故一般常識に欠けている……そんなところだろ？」

「……概ね正解だ。お前に隠し事が通用しないって本当だったんだな」

「まあね。……そう警戒すんなよコージ。お前の過去なんて正直どうでもいいし、秘密にしたい人なら黙っとくからよ」

「私も言うつもりはありません。……偽りの天才を葬る役目を、誰にも譲りたくないですし」

人工的に天才を生み出すことなどできない、それが私の見解にして信念です。

天才とは私のように両親から優れた遺伝子を受け継いで生まれるか、桐葉のように突然変異で生まれるか……どちらにせよ天才かどうかはこの世に生まれた瞬間に決まり、どれだけ環境に恵まれようとも凡人は天才にはなれない。

「そうか……なら、ひとつ聞かせてくれ。」

お前に、いや……

お前達にオレが葬れるのか？」

自らが敗北するなどとは微塵も思っていない、それでいて敗北することを強く望んでいるかのような、そして私達に強い期待を抱いているような……そんな矛盾を抱えた瞳でそう問いかけられた。

「……ふふ、ふふふ。すみません笑ってしまつて。貴方の発言は本心だとわかつています、貴方の凄さはよく知っていますので。……貴方のお父様の最高傑作を破壊してこそ、私の悲願も達成できるといふもの」

私にとって、ホワイトルームの理念は相反するものであり、その最高傑作に打ち勝つのは私の使命と言つても過言ではありません。

……私が己の信念を貫き通せたなら、あの悲しい施設が世に出回ることとはなくなり、お父様の懸念は杞憂に終わるのですから。

ペーパーシャツフル

10月中旬。そろそろ衣替えを検討しなければならないこの時期、全校生徒は体育館に集まり生徒会長の交代式に出席していた。

会長さん……いや、元会長さんが非常に短くまとめた辞任演説を肅々と済ませると、続いて次期生徒会長のみやびん先輩がマイクの前に立ち、途中までは非常に礼儀正しく就任の挨拶を行っていたのだが、不意に危ない気配を漂わせたかと思えば、生徒会の仕組みを一新すると高らかに宣言した。

役員の任期を在学中無期限化、規定人数制限の撤廃、不適切な役員への投票による罷免制度……つまりこれは、以前みやびん先輩が言っていたことへの第一歩なんだろうね。「ここに集まった生徒、先生方、そして前生徒会長の率いた生徒会の皆さんに宣言させていただきます……私は歴代の先輩方が情性で護ってきた、不必要な伝統を全て棄却し大革命を起こし、この学校を真の実力主義の学校に変えていきますので、どうぞよろしくお願いします」

これまでの元会長さんの活動を全て否定するような挑戦的な演説だが、終了後2年生

のほぼ全員が賛同するように大きな拍手を行った。流石みやびん先輩、どうやらカリスマだけなら元会長さんをも凌駕しているようだ。

「それでコージー、体育祭以降何かしら変化があつたんじゃない？例えばそれまで仲良くしていた男子と疎遠になったり、特に仲良くもなかつた女子から連絡先を聞かれたりとか」

「……お前は超能力でも使えるのか？寸分違わず当てられて少し怖くなつたんだが」

「うんにゃ、ただの予想。出し惜しみされてたと知ったら友達は多分良い顔しないだろうし、逆に女の子とかは意外とそういう部分にキュンときたりするもんだよ。……もしかしてコージー、たかが足の速さくらいとか高を括つてたんじゃない？」

「見通しが甘かつたのは否定はしない」

お花を摘みにいったら偶々コージーと会つたので、つれシオンがてらちよつとした雑談に興じる。彼は有栖の言うホワイトルームとやらの最高傑作らしいのだが、だつたら何故その施設はもう少し一般常識を教えてやらなかつたのだろうか。足の速い男子な

んてある程度モテるに決まってるでしょうが。……それにしても、

「わー、すげー」

「……どうした？」

「随分と日本人離れした凶悪なブツをお持ちで。……それもホワイトアスパラとやらの教育の成果なの？」

「ホワイトルームな。あとあまりジロジロ見るな気色悪い」

嫌でも勝手に視界に入ってくるんだから仕方ないだろ。ごめんね世界一眼が良くて。

「まあそれはそうとコージー、多分リユンケルは水面下で君のことも色々探っているだろうけど……もし俺が何故君をアダ名で呼ぶのか聞かれたら、俺より足が速いことを以前から知っていたと答えればいいのかなー？」

「話が早くて助かる。……でもいいのか？龍園なら何か隠してないか、暴力に訴えてくることも考えられるぞ？」

「水臭いなあ、友達じゃないか」

あんな破天荒なナリで意外と目敏いリユンケルは、俺の呼び方の法則に感づいていても不思議じゃない。何の取り柄もない生徒と周囲に思われていたコージーが俺に気に入られている理由について、遅かれ早かれ探りを入れてくるのはわかっていた。もしそうだったら口八丁にどうにか誤魔化そうと思っていたが、足の速さという逃げ道ができ

たからそんな必要も無くなった。……もしかしてコージ、それも折り込み済みだったのかね？

「だけど有栖に関しては自力で対処してね。あの子ずっと君と戦いたかったみたいだし、ちよつとやそつとじや逃げられないと思うけど」

「それも完全に計算外だったな……」

無表情で天を仰いで後悔するコージ。まあ有栖は平穩を求める人間が関わりたくない奴No. 1を争う逸材だろうからね。

「まあしばらくは気にしなくても大丈夫だよ。リユンケルとか櫛田ちゃんとか、君が色々面倒な案件を抱えてるのは有栖もわかってるだろうし、事を荒立てるような真似はしないさ」

「櫛田のことまで筒抜けか……もしかしてあいつは、既にお前達とも繋がってるのか？」
「んーん。あの子は他クラスと手を組んでまでホリリンを貶めたいんだろうけど、俺や有栖に取り入るのは多分最終手段だと思うよ。俺、あの子に嫌われてるし」

「お前もなのか……何か心当たりは？」

「さあ？知らないし興味も無い。つまらねー奴に嫌われてようがどうでもいいし」

あまり長時間話し込むとそろそろ誰かがやってくるだろうし、この辺で打ち切って手を洗う。

「それじゃあ色々頑張れよコージ。友達として、君が平穩を取り戻せることを応援してるから」

何かを探るような目でこちらを見るコージをスルーして、俺は男子トイレを後にした。

某日、中間テストの結果が発表された。

トップはいつも通り俺と有栖……だけでなくランスも満点で同率1位だった。今回は全体的に難易度が低く、あとランスは体育祭で入賞した報酬を点数に変えていたのでこういう結果になった。有栖は無条件で下位10名のペナルティを食らいマイナス10点されたが、学校に100万ポイント払うことで10点を補填していた。負けず嫌いもここまできると清々しい。一方何百万単位で結構散財してるのに何故か5月に俺が渡した500万からあまり減ってないことから、有栖は有栖で何かしらの方法でポイントを稼いでいるみたいだ。

ちなみに体育祭で俺の次に大活躍したマスマンは、報酬を全てプライベートポイントに変えていたにも関わらず、なんと真ん中に近い成績を叩き出していた。

1学期の頃はファルコンや戸塚と最下位争いしてたのに随分成長したねあの子も。時間を見つけて有栖がマンツーマンで勉強を見ていた成果だろうね。あの子はツンデレだから余計なお節介だとグチグチ言ってるけど。

……え？最下位？戸塚に決まってるだろ。ファルコンは報酬を点数に変えてたからアイツ以外いない。

「……さて、既に各教科の先生方から繰り返し聞かされているだろうが、来週期末テストへ向けて8科目の問題が出される小テストを実施する」

テスト結果が表示されたポスターを丸めつつ、真嶋先生は話を切り出し始める。二期は定期テストの間隔が非常に短い。

「この小テストは全100問の100点満点。内容は全て中学3年レベルの問題で成績には一切影響しない。0点だろうと100点だろうと取って構わん」

「つまり、次の期末試験に大きく関わってくるということですか？」

クラス全員が予想した内容を、代表してランスがそう質問する。こういうとき有栖は滅多に口を挟まないの、ランスが前に出ることがテンプレになりつつある。

「その通りだ、流石に額縁通りに受け取る者はもういないだろうな。……その小テスト

の結果に基づき、クラス内の誰かと2人1組のペアを作り、そして次の期末試験はそのペアが一蓮托生で挑むことになる」

その後真嶋先生はの期末テストのルールについて説明していく。内容をまとめると

- ・試験は8科目の各100点満点、各科目50問の合計400問。
- ・各科目でペア同士の点数を合計して、60点未満なら赤点となり2人とも退学。
- ・総合点もペアで合計して、学校が設定したボーダーを下回れば赤点となり2人とも退学。ボーダーは例年だいたい700点前後。

こんなところか。例年この特別試験……その名も「ペーパーシャッフル」ではおおよそ1〜2組の退学者が出ているらしいが……うちのクラスからはまあ出ないだろう。ビリの戸塚でさえ平均60前後あるし。皆もそう思ったのか、クラス全体で特に緊迫感を感じられない。

ペアがどう決まるかについては……まあ簡単に推測できるね。完全にランダムならDクラス辺りからもっと退学者が出てもおかしくない。

「そしてもう一つ。期末試験では出題される問題をお前達が作成し、その問題を他の3クラスのどれかに割り当てる……つまりどれか1クラスに対して攻撃を仕掛けるということだ。お前達と相手のクラスの総合点を比べ、勝ったクラスが負けたクラスから5

0ポイントを得るというルールだ」

おっと、自分好みのルールを聞いた有栖ちゃんの目が輝き出しましたね。攻撃大好きなこの少女は、今頃脳内でどのクラスを蹂躪しようか考えてるんだろうね。

「2クラスがお互いを攻撃した場合1度で決着が着いてしまいますが、その場合移動するポイントはどうなりますか？」

「直接対決になった場合は1度に100ポイント移動すると決まっている。また滅多に無いと思うが、総合点が同じの場合ポイントは変動しない」

「テストを製作する上での制限は何ですか？無条件ならとんでもなく高難度かつひねくれた問題がまかり通ってしまいます」

「提出する問題は私達が公平かつ厳正に審査する。指導要領を超えていたりよほど引っかけが悪質な問題等はその都度修正が指示され、そのチェックを繰り返すことによつて問題文と解答を完成させていくことになる」

合計400問、か。人数を分ければそれに比例して難易度にバラつきが生じるだろうし、有栖の性格から考えると問題は全て一人で、ないしは俺と2人で200問ずつ作ることになるだろうか？……いや、下手したらもつとハードな作業になるかもね。

「問題を作る際には特に制限は無い。他クラスの生徒を頼ろうが教師に相談しようがネットを参考にしようが、全てお前達の自由だ。万が一問題作成が間に合わなかつ

た場合学校側が用意することになるが、難易度がかなり低めになると肝に銘じておけ」

「我々が受ける期末テストも、当然他クラスの考えた問題ということになりますね？」

「そうだ。そして肝心のクラスがどこなのかだが……お前達が攻撃したいクラスを私以上に報告し、その際別のクラスと希望が被った場合は代表者を呼び出してくじ引きを行う」

そうなったら間違いなく俺が行かされるね、うん。

「逆に指名が被らなければそのまま確定し、そのクラスに問題を出題する。どのクラスを指名するかは小テストの前日に聞くので、慎重に考えて決めるように。……これ以上質問がなければ説明を終了する」

真嶋先生はそう締め括り、その日の授業は幕を閉じた。

「ペアについてはどういう組み合わせになろうと、絶対に赤点のボーダーは下回らないでしょうから考えなくてもいいでしょう。はつきり言って時間の無駄です。そして今回の試験で最も肝心要となる、攻撃するクラスについてですが……」

そのまま放課後になり、有栖は体育祭のときとは違って実に楽しそうな様子で教壇に立ち、今回の方針をクラスメイトに伝える。

「Bクラスを指名しようと思います」

「待て坂柳、それはあまりにもリスクが大き過ぎる」

有栖の決意表明にランスが早くも難色を示す。完全に野党みたいな立ち位置になっ
ちやつたね君。

「リスク、ですか？」

「これまでのテストの平均点から考えても、Bクラスの学力は俺達とほとんど差は無い。
そして当然Bクラスも俺達を攻撃してくるだろう。万が一敗北すれば一気に差を詰め
られて——」

「だからこそそのBクラスですよ。ここで勝てばBクラスを突き放し、一気に独走態勢に
入るでしょう？」

うーん……こればかりは永遠にわかり合うことは無いんだろうな。とにかく慎重
なランスはほぼ確実に勝てるDクラスを指名したがるだろうけど、ひたすら好戦的な有
栖はリスクを負ってでも一番迫っているBクラスを叩きにかかると。

どちらが正しいのかは知らないけど……このクラスでどちらが正義かは考えるまで
もない。

「葛城君。貴方はこれまでその堅実な方針でクラスを率いて、ちゃんと結果を残すことができたでしょうか？」

「何……？」

「桐葉が部活や体育祭で色々頑張ってくれたので、現時点でもBクラスとの差はそれなりにありますが……彼がいなければ、今頃Bクラスに降格していたかもしれませんね」

10月の始めに公開された各クラスのクラスポイントは、俺達Aクラスが1073、Bクラスが694、Cクラスが522、Dクラスが268ポイント。一見Aクラスが独走しているように見えるが、俺が1H優勝で得た計150ポイントが無ければ5月のときよりも減っている計算になる。船上試験での狙い撃ちが大分響いてるな。

「もとより貴方の意見など聞き入れるつもりはありません。私の方針にいちいち口を挟まないでください」

「くっ……！」

ランスは悔しそうに顔を歪めるが、これまで結果を残せていないのは事実なので押し黙るしかない。舎弟の戸塚は有栖に対してランス以上に苛立っている様子だが、確実に最も足を引っ張ってるあいつが抗議してもクラス中から総スカンを食らうだけだ。本人も流石にそれは自覚しているため、歯を食い縛って堪え忍んでいる。

「でもよ姫さん、Bクラスが手強いのは事実だぜ？俺達もみすみすクラスポイントを減らしたくないし、明確な勝算があるならもったいぶらずに教えてくれよ」

「わかっていますよ橋本君。私はもとより一之瀬さん達を振り伏せるため、最善を尽くすつもりです。まず試験問題400問は私と桐葉で作成します」

まあここまででは予想通り。

そしてたつた今、有栖は最善を尽くして勝ちに行くと言った。つまり……

「問題の作成を済ませましたら、放課後にクラス全員参加の勉強会を開こうと思います。そして今回その勉強では……」

私と桐葉が教鞭を取りましょう」

はい来たよ、中学以来になる地獄の幕開けが。

俺を馬車馬のように酷使しつつ、クラスメイト達も容赦なく勉強地獄に叩き落とし、ついでにBクラスの心も折りにかかる……やっぱこの娘、真性のサディストだ。

勉強会

植物庭園『ルビカント』。

夏休み終盤に元会長さんを通して学校側に申請し、つい先日によく設立された俺の楽園である。敷地内のスペースには限りがあるため、広さは精々スーパードラッグや控えめ。ちなみに施設名はスポンサー権限で俺が名付けた。理由は火を点けたらよく燃えるだろうから。

本来の植物園は大学や研究機関等が植物学研究のために用いる植物を収集・分類・栽培し、それらの標本を保管するための施設なので、ただ多種多様な植物を集めて管理しているだけの施設である。ここは厳密には植物園ではないのかもしれないが……まあ細けーことはいいだろう。

入場料は100ポイントと格安だが、遊びたい盛りの高校生がこんな地味な施設を好む筈も無く、また自習に利用するにしても図書館の方が適切であるため、オープンしてまだ数日だと言うのに俺と有栖、そして係りの人以外誰も入っていない。……多分俺の卒業か退学と同時に閉園になる運命だろうな。

俺と有栖は施設内に用意されたテーブルに座り、ペーパーシャッフル用の問題製作に取り掛かっていた。攻撃する相手がCクラスとかなら見張り用にマスマンを起用しただろうが、正解ちゃん率いるBクラスが相手ならそんなことに気を配らなくていいだろう。問題用紙を事前に盗み見ようとか、絶対しないよあの子達は。

「……ところで有栖。いやまあ大方予想つくけどさ、今回コージー達Dクラスに挑まなくて良かったのかい？」

「大方予想つくくらいいいち聞かないでください。何も考えず綾小路君に挑んでも、おそらくはまともに取り合ってくれないでしょう」

「まあそうだな」

今回のような試験で有栖に勝つ、そうでなくても互角に渡り合ったとなれば、それはすなわちコージーが学年トップクラスの学力を持つ動かぬ証拠になる。平穩を求めるあいつからしたら絶対に歓迎しないことだろう。

「それに、学力で彼と張り合うつもりはもとよりありませんよ。私は絶対に勝てないとわかっている勝負をするほど愚かではありません」

「……コージーってそんなスゲーの？」

「少なくとも知識、教養においては私も貴方も彼の足下にも及びません。人が一生をかけて学ぶ程の膨大な内容を、既に彼は習得させられているでしょうから」

「マジかよ、詰め込み教育ってレベルじゃねーだろホワイトナイツ」
「ホワイトルームです」

思ってたよりもスパルタな施設なんだな。まだ16年しか生きてない奴にそれだけの教育を施すとなると、人道的な手段では全然時間が足りない筈……教育というかもう虐待レベルじゃないかそれ？

「やっぱ世の中広いよなー、まさかそんな漫画の世界みたいな面白施設が実在してるなんてよ」

「……貴方も完全に無関係という訳ではないと言ったら、驚きますか？」

「んあ？」

やや居心地の悪そうな、何かを葛藤するように有栖はそう問いかけてきた。どゆこと？

俺が首を捻っていると、少し迷いつつも意を決したように有栖は言葉を続ける。

「綾小路君の父親にしてホワイトルームの責任者と私のお父様……そして貴方のご両親は、古くからの友人だそうです。お父様や貴方のご両親はその方を先生と呼んでいることから、決して対等な関係ではなかったようですが」

「へえ、そうなんだ」

凡庸ながらも善良に生きていた筈なのに、どこか後ろめたい感情をいつも抱えていた

のは、裏で何かヤバイことに関与してたつて訊ね。どうでもよかったから詮索はしなかったけど、流石に予想できなかつたな。

「……予想はしてましたが淡白な反応ですね。聡明な貴方ならホワイトルームが色々問題を抱える施設だと気づいている筈……それに、ご両親が関わっているかもしれないことに、何も感じないのでですか？」

「いや別に？あの人達はもう既に俺を我が子とは思えないだろうし、俺の方からも特に思うことは無いよ」

拒絶されている自覚はあるし、それに対して特に不満も無いが、あの人達のために脳のリソースを無駄遣いする気も無い。率直に言つて時間の無駄だろうしな。

……ただ俺の両親の話になると、決まつて有栖が悲しい表情になるから罪悪感が湧くんだよなあ……さっさと話題変えよ。

「そんなことより有栖、たつた今聞き捨てならないこと言つたよね？俺の両親と坂柳。パピーが昔からの知り合いって何？そんなこと初めて聞いたよ俺」

「え？……あつ」

「ということは有栖もしかして……中学で俺と会つたときには、実はもう俺のこと知つてたんじゃない？」

「えつと、その……そうなりますね……」

露骨に視線を逸らす有栖。脈拍も乱れ、何故か頬も上気し赤く染まっている。

妙だな……事前に俺のことを知っていたからと言って、だから何だと言われればそれまでの筈……なんでこの子、こんなラブレターを渡す前みたいな感情の乱れ方してるんだ？

「有栖、なんで黙ってたのか理由を包み隠さず正直に全部話さない。俺に隠し事はできないのは知ってるでしょ？」

「おや、桐葉こそ知ってるでしょう？ 私は貴方の眼を欺ける数少ない人間だと」

ある程度冷静さを取り戻したのか、あえて強気に微笑んでみせる有栖。ふむ、確かに一理あるっちゃある。

人は嘘や隠し事をするとき、完全に平静でいることは非常に難しい。表面的には取り繕えはしても呼吸や脈拍、筋肉の収縮には乱れが生じてしまうものだ。俺の眼はそれらの些細な異常を決して見逃さない。

しかし有栖はその病弱さ故に、普段からそれらがしよつちゆう乱れまくっている。これでは嘘や隠し事をしていいのか、ただの素なのか、判別することが非常に困難を極める。

……とは言ってもだね有栖、

「そんなあからさまにボロ出されたら、眼なんか頼らなくても普通に気づくわボケい

「さあ話せ今すぐ話せ！」

「も、黙秘権をつ、全ての人に平等に与えられた権利を行使しますっ」

「えーい往生際の悪い幼女め！おとなしく話さねーとその可愛らしい顔に鼻フック食らわせんぞー！」

「誰が幼女ですかぶん殴りますよーってちよつ、なんですかその手は、やめてくださいっ。年頃の女性に鼻フックとか貴方正気ですかっ」

「有栖の顔面崩壊まで、3・2・1……」

「待つて待つてストツプツ……うう……話しますよ、話せばいいんでしょう……！」

有栖の恥ずかしい秘密を暴くチャンスを利用してなるものかと、少しばかり強引な手段で聞き出すことに成功した。後でたつぷりとツケを払う羽目になるだろうが……慌てふためく有栖という非常に珍しい光景も見れたことだし、安い代償だ。

「……実を言うと私は、元々あの私立中学へ進学する予定は無かったんですよ」

「へ？いや何の話……もしかして、予定を変更してあの学校に通うことになった理由とやらが……」

「……お父様経由で貴方のことを色々と伺って、どうしてもお会いして仲を深めたくなって、貴方と同じあの学校に入学しようと決め、まし……」

最後まで言い切ることができずに、林檎のように顔を赤くさせて俯く有栖。

これはあれだ、幼少期に「大きくなったおじさんと結婚するー」とか言っていたことを、確固たる証拠を添えて親戚本人から指摘された並の羞恥が有栖を襲っているのだから。率直に言つて今の有栖は死ぬほど可愛い。

庇護欲を大いに刺激された俺は黙つて有栖の後ろに回り、優しく抱き締めて耳元で静かに囁いた。

「発想がストーカー予備軍」

思いつきりぐりで殴られた。

大して痛くはなかつたけど、ややデリカシーに欠けていたかなと少し反省。

そして迎えた小テストの日。

他クラスに出題する問題もようやく提出し終わり、明日の放課後から地獄の勉強が聞かれる。まったく、忙しいったらないぜ。

ちなみに攻撃するクラスの指名は一切被ること無く、AとB、CとDがそれぞれ直接対決する構図となった。まあCクラスがDクラスを指名することはわかりきっていたけど……Dクラスが榎田ちゃんという裏切り者を抱えながらCクラスを指名するのは、何か考えがあつてのことなんだよな？ ホリリン、そしてコージ、頼むからガツカリさせないでくれよ？

肝心の小テストは問題なく終了し、翌日の4時間目には早くも返却された。ちなみの俺のペアはファルコンで、マスミンはランス、橋本は元土肥ちゃん、そして有栖は戸塚だった。何やらぎやーぎやー喚いていたが有栖は無視していた。

真嶋先生曰くペアは点数の最大点と最小点の差が広い生徒から順に組み、点数が同じ場合はランダムで選ばれるそうだが……まあ正直どうでもいいな。俺と有栖が教鞭を取る以上、たとえばファルコンと戸塚が組んでも赤点になることはなかっただろうし。

そして迎えた放課後。

クラスメイト達を机に座らせ、有栖は本来教壇のある場所に、自分の机を俺に移させてそこに座った。それぞれの机には自前で用意させた数学の教科書とノート、そして今日の勉強会のために有栖が作成した、応用問題をまとめた冊子が置かれている。

「それでは期末試験に備えての勉強会を始めたいと思いますが……葛城君、山村さん、西川さん、的場君、森重君、石田君、島崎君、司城君、真田君……以上の方々は帰って自習で構いません」

開始早々、有栖は人数の削減を行った。当然クラスメイト達は困惑し、やはり代表してランスが質問する。

「坂柳、それはどういった理由でだ？」

「私も桐葉も、凡人を秀才レベルに引き上げることはできても、貴方達秀才を私達と同等のレベルにまで引き上げることはできません。学年でも屈指の成績を誇る方々には、自習してもらった方が助かります」

凡人はどこまで行っても秀才止まりという有栖の持論からすれば、ランス達に勉強を教えるなど時間の無駄だろうしな。

「そうか……ならば帰らせてもらう」

今回の勉強会の目的は、クラスの学力アベレージ向上。それを理解したランス他8名

は、おとなしく帰り支度を始める。

「個人的にはそう上手くいくとは思えないがな。お前や本条の優秀さは知っているが、たった2人で30人も生徒を指導するのは決して容易では—」

「忠告感謝いたしますが、心配ご無用です。私だけなら流石に骨が折れたでしょうが……今回は桐葉がついていきますので—」

ランスの意見をいつものように一蹴し、勉強会が幕を開ける。有栖が教科書を開くことなく、テスト範囲かつ授業で受けたよりも高難易度な内容を口頭で説明し、俺はそれに合わせて黒板に板書をしていく。

そしてある程度進めたところで、俺はクラス全体を眼で観察し……

「戸塚、沢田、清水、田宮、鳥羽、里中、マスマシン、ファルコン。どうやら理解が遅れているみたいだね」

「「っ!?!」」

「はい席替えー。今呼ばれたメンバーは教科書とノートを持って、前の人達の席とチェンジしてね。今からしばらく置いてかれかけてる子達に教え直すから、他の人達は配られた冊子の応用問題を解いててね」

教師は俺にとって天職の1つだと思う。

何十人も生徒を一度に教えるのは決して容易なことではないし、ましてや1人1人

にきちんと注意をいき渡らせることなど至難の技だ。全ての教師がそれを実行できるなら劣等生などそうそう生まれてこないだろう。一見ちゃんと授業を受けているように見えても、実は心ここにあらずで集中していないケースなど珍しくもなく、授業への理解が遅れているかどうかなど本人から直接聞かなければ普通わからない。

……だが俺の眼を持つてすれば、それらの問題は全て解決する。どれだけ集中して授業を聞いているか、きちんと内容を理解しているのか、俺なら一目見ただけで手に取るように理解することができる。

「痛っ!？」

「俺の目を盗んで教科書に落書きとはいいい度胸だな橋本、チョークミサイルの刑だ」
「こつちの方全然見てなかったのに、なんでわかるんだよ……」

その後、勉強会は6時まで続いた。ただ漠然と勉強させるのではなく無駄な時間を極限まで削り、ゆとり教育を完全否定するかのよう詰込みまくった。まあまだ初日故にこの程度で済ませたが、これから徐々に難易度も一定ずつ上げていく。安息など片時も無く絶え間なく試練を与え続ける。

俺と有栖が教鞭を取る以上、一切の妥協は認めない。

……やっぱ俺教師は向いてないかも。こんなスパルタ教育今時流行らねーよ。

天運の証明

「ああしんど……受験シーズンでも無いのにノイローゼになっちまうぜ……鬼頭も神室ちゃんも大丈夫か？」

「うっさい、今話しかけてくんない……」

「……」

期末試験まで残すところあと一週間。今日も今日とて地獄の勉強会を終え、有栖と側近4人で帰宅していた。この勉強会は学力の低さに比例してきつくなる仕組みなので、クラスでも上の方の橋本はまだ愚痴る元気はあるものの、マスマインとファルコンは会話すら拒否するくらい満身創痍だ。一方有栖は生粋のDSなので、悶え苦しむクラスメイト達を満喫して非常に元気でいらっしやる。

「なあ本条、流石にスパルタ過ぎないか？ Bクラスが侮れないのはわかるけどよ、これまでのテストでも平均点は僅差とはいえずと俺らの方が上だっただろ。今日まで散々死に物狂いでやってきたんだし、後は自習でもいいんじゃないか？」

まったく……いずれこういう軟弱なことを言い出す奴が出てくるとは思っていたが、

よりもよつて側近のお前かよ。嘆かわしいぞこのゆとりっ子が。

「じゃあ逆に聞くけどさ、橋本は何のために勉強しているのかな？」

「は？目的？」

「あつ、将来の進路がどうかずつと先のことは置いといてね。テスト勉強は何のためにするのかつて意味」

「えつと、そりゃあテストで高い点を取るため……とかじゃないのか？」

「うんうん、まあそうだよ。君達はそうなんだろうね」

「君達は、つて……お前は違うのかよ？」

「違うよ？俺も有栖もいちいちテスト勉強なんかしなくても、授業ちゃんと聞いてるだけで99%の問題は難なく解ける」

「なんだ自慢かよ……はいはい、天才様は頭の出来が違うんですねー」

何やら呆れたように肩を竦める橋本だが、別にマウントを取りたくてこんな話を切り出した訳ではない。

「……でもそれはつまり、才能に胡座をかいてるだけじゃ1%を取り零すということだよ。ね？なら俺はその1%を断じて見逃す訳にはいかない。そんな妥協は断じて認められない」

「……ああ、そういう……」

「だから俺は常日頃から勉強を欠かさないし、俺と張り合う有栖も当然そうだろうね……わかるか橋本？俺達にとって勉強なんてのは、満点を取れないならただの時間の無駄なんだ。それをなんだお前は、ある程度のレベルで満足して勝手にモチベーションを下げよつてからに。普段なら価値観は人それぞれだからとやかく言わないけど、今回指導を任されたからには問答無用で無理強いするつもりだから覚悟したまえー」

「……マジかよ」

「桐葉はいい加減なように見えて、時間や約束や自分で決めたルールは絶対に守つたりと、大事な部分は意外ときっちりしています。……きっちりし過ぎてまるで融通が利きませんが」

「な、なあ姫様。アンタの方から口添えしてやれば、本条も少しは手加減してくれたりとかしないのか？」

「聞き入れてくれるでしょうが、しませんよ？少しでも勝率を上げることには私も賛成ですし……何より貴方達が必要に頑張る姿は見ていて気持ち良いですからね♪」

「満面の笑みで言い切りやがった！明らかに俺達が悶え苦しむ様を楽しんでるのに、何かいい感じの言い回しで誤魔化しやがった！」

そう、俺と有栖が共同で勉強会を開く……その真の地獄は一切脱出不可能という点だ。俺は手を抜けないし有栖は手を抜かない。哀れなクラスメイト達はテスト本番ま

で際限無く、学力を無理矢理引き上げられ続ける運命なのだ。……まあクラス全員が満点かそれに準ずる点数を取れるようになるとは、俺も有栖もハナから思っっちゃいない。勉強とは日々の積み重ね、この短期間で俺達が無理矢理引き上げるにはどうしても限界がある。そうでなかったら有栖もランス達秀才止まりを自由にさせたりしなかっただろうし。……おつと？

「クク、随分と楽しそうじゃねえか。ちよつと俺も交せてくれよ？」

りゅんける が あらわれた ▼

和気藹々と下校している最中に突然エンカウントしたヤンキー上がりに、先程までぐったりしていたファルコンは意識を覚醒させ、有栖を庇うように一歩前に出た。流石はAクラス一の武闘派のうきん、荒事の気配を嗅ぎとるや否や急にイキイキしだしたね。……あわよくばテスト勉強での鬱憤をリユンケルで晴らそうって腹積もりじゃないだろうね？

「お心遣い感謝致しますが鬼頭君、ひとまずは下がっててください。……こうして直接お会いするのは初めてですね、リユンケルさん」

「次そのふざけた呼び方したら殺すぞ。……そういうテメエは坂柳だな。話に聞いてた通り、女王様気取りでいいご身分だな」

「そういう貴方こそ、普段引き連れているお仲間はいらっしゃらないんですか？あちこ

ちから恨みを買っておられるのですから、1人でうろつくのは危ないのでは？」

「ハッ。雑魚共が報復しに来たところで、俺は全て返り討ちにする自信があるんだよ。誰かに守られてねえと怖くて外も出歩けないテメエと違ってな」

「なるほど、これまでその程度の小物しか苛めてこなかったのですね」

「はいストップ・ザ・お前ら。エンドレスで煽り合ってんじゃないよまったく」

多分そうなんじゃないかと薄々わかっちゃいたが、この2人とにかく相性が悪い。たぶんどうあがいても絶対に手を取り合えない……というか2人とも、こうして争うこと自体を楽しんでさえいるから始末に負えない。

「ククク、まあ確かに俺も暇じゃない。今用があるのはテメエじゃなくて本条なんだよ。今日は見逃してやるから精々隅っこで震えて失禁してろ」

「噂に聞くDクラスの黒幕さんの正体も掴めていない方が、随分と大きな態度を取るのですね。今も血眼になって手がかりを探しているようですが、そんなに無人島試験で踊らされたのが悔しかったのですか？」

「だからキリがないからやめろって言ってるでしょうが。お前らあんまりしつこいと橋本と無理矢理キスさせるぞ？」

「一時休戦だ坂柳」

「ええ、是非ありません」

「お前ら俺をどう雑に扱っても傷つかないって勘違いしてないか? というか俺だつて願
い下げだし!」

埒が明かないので最強カードをちらつかせて無理矢理黙らせる。俺はもうさっさと
帰つてご飯が食べたいのだ。

「それで俺に何の用なのさ? もしかしてコージューのことも聞きに来たの?」

「わかつてんなら話が早え。テメエがある程度気にかけている奴をふざけた呼び方で呼
ぶことは知つてる。問題はこれまで鈴音のケツを追いかけてるだけに過ぎなかつたあ
いつを、何故お前が気にかけてたかつてことだ」

「コージューを気に入つた理由は、彼の足の速さを既に知つていたからだけど? 俺は大概
のことでは誰にでも勝てるから、俺が負けるかもしれない人材つてのは貴重なのさ」

「なるほど、確かに一見辻褃が合う。……が、本当にそれだけが理由か? あいつは俺がか
ねてから探つていた、Dクラスの陰で暗躍してきた奴……Xの最有力候補なんだよ。何
か隠してんじやねえだろうな?」

「誰を気に入ろうが俺の勝手でしょ? 何より友達の情報俺が売ると思う? 随分と見く
びられたものだね」

リユンケルはしばらくの間俺を睨み続けていたが、やがて凶悪な笑みを浮かべて踵を
返した。

「フン、まあいい。テメエから無理に聞き出せなくても、既に色々と材料は出揃ってる。Xの正体を突き止めるのはもう時間の問題だ。……Dクラスを潰したら次はBクラス、そして最後にお前らだ。精々それまで学校生活を楽しんでおくんだな」

「ええ、楽しみに待っていますね。……それまでに貴方が蹴落とされていなければですが」

「クク、万に一つもありえねえよ」

去っていくリユンケルを見送るが、俺は心の中で合掌しておく。有栖から色々聞かされたコージの正体が誇張でないなら、リユンケルじゃ彼には決して勝てないだろう。

「井の中の龍、大海を知らずつてところかね」

「どんな井戸ですかそれは」

華麗なるダイナータイムを済ませて習慣である走り込みをしてみると、噴水の傍でコー

ジーとランスが楽しげに……いや別に楽しそうではないが何やら話し込んで。なんというか、意外な組み合わせだね。

「おーいランスとコージー、何してんのー？」

「……本条か」

「何やら隠れて密談？知らないうちに随分大胆な男になったもんだね」

「誤解するな、Aクラスが不利になるようなことをした覚えはない」

「ふーん……まあどうでもいいけど」

フランスの統治は有栖の管轄なので俺の知ったことではないというのが俺の見解だが、何故かランスは気分を害したみたいだ。見た目と違って繊細だなこのハゲ。

「……俺ごときがどう足掻こうと恐れるに値しないということか」

「そりやまた随分と卑屈な考え方だね……」

「話を聞く限り、Aクラスは以前までとは随分変わったようだな」

「まあ大衆の評価はシビアだからねえ。夏休みの特別試験で散々だったランスと、体育祭でクラスをトップに導いた有栖……そりやあ求心力も変化するさ」

「そうは言っても坂柳は競技に参加していないし、体育祭で勝利できたのはほとんどお前のお陰だろ？」

「兵の功績＝将の功績だよ。それに俺は有栖以外の指示には従わないと公言しているし

ね」

「ああ、尚更俺を支持する理由が無くなるだろうな……」

「ランスがリーダーの座を勝ち取るには有栖が慢心して、俺の行動を制限しているうちにあの子を蹴落とす必要があった。その機をみすみす逃した以上、もうランスは有栖に張り合うこともできないだろうね」

変に希望を持たせても可哀想だから、あえて厳しい現実を叩きつけておく。ランスはそんな俺に何も言い返すこと無く、気まずい雰囲気の中俺達は寮へと戻る。……随分と腑抜けちゃったなあ。このままAクラスに置いておいてもつまらねーままだろうし、いつそのこと2000万ポイント出してリユニケル辺りに引き取ってもらおうかね？ ……いや、戸塚が慕っているうちはランスが了承しないか。まったくどこまでも邪魔な奴だねアイツも。

いつそのこと退学にでも追い込んでやろうかあの足手まとい。

……なーんてね。いくらつまらねー奴だからって、大切なクラスメイトにそんな惨い仕打ちできるわけないよな。桐葉君そんな極悪非道じゃないもん。

そんなこんなで寮に着くと、何やらロビーには人だかりができていた……全員が困

惑、あるいは何やら怒っている様子だ。またその内の生徒が俺に対して、何かを疑うような視線を向けている。なんか鬱陶しいな。

「何やら随分と騒がしいな」

「誰かに聞いてみるか……なあ博士、この騒ぎは何があつたんだ？」

「綾小路殿でござるか」

コージが近くにいたクラスメイト……外村君に声をかけると、1年生全員のポストと同じ手紙が送られているらしいとのこと。コージ達は人混みを掻き分けてポストへ向かい、四つ折りにされたプリントを持って戻ってきた。コージが開いたプリントを覗いてみると、

『1年Bクラス・一之瀬帆波、及び1年Aクラス・本条桐葉は、不正な手段でポイントを集めている可能性がある。 龍園翔』

何とも愉快的な文章が印刷されていた。

当事者である俺が暢気にそんな感想を抱いていると、自分のポストに灰ついていたランスが困惑するように呟く。

「丁寧の名前まで書いて、どういうつもりだあの男は。これがまったくのデマなら訴えられても可笑しくないぞ」

「少なくとも、多少なりとも根拠があつて実行したつてことか？」

「そうでないなら愚策も良いところだが、奴らしいやり口だ。本来なら名誉毀損もいところだが、そんなことを気にする男ではない。……念のために聞いておくが本条、心当たりは無いだろうか？」

「さて、どうだろうか？……と、面白そうなのであえて不透明な言い回しを試したり」「おい」

俺の悪ふざけをランスが嗜めていると、どうやらこの騒ぎの主役がご帰還したようだ。

「おい龍園、どういうつもりだ！」

リユンケルがロビーに入ってくるなり、Bクラスの渡辺くんが掴みかかる勢いで詰め寄る。

「あ？いきなり何だ？」

「しらばつくれんな、この手紙のことだ！」

「……ああそれか。面白えだろ？」

……ふむ。

「何が面白い！こんなデタラメ吹聴しやがって、やっていいことと悪いことがあるだろ！」

「へえ……だったら今ここで証明しろよ。そいつらが不正をしていないって事実をよ」

おっと、卍解ちゃんが騒ぎを聞き付けてリユンケルの元に向かつて。……せつかくだし俺も便乗しようか。

俺と卍解ちゃんが肩を並べてリユンケルに対峙すると、彼は邪悪な笑みと共に手紙を突き出し問いかける。

「どうなんだ？一之瀬、本条」

「今ここで私達が何を言っても、多分龍園君は信じないよね？」

「ああ、それを判断するのは学校だからな」

「だよ。……皆ごめん、変な疑いかけられちゃったみたい。だけど明日先生に報告して、龍園君の勘違いだって証明してみせるから」

卍解ちゃんは堂々とした態度でそう主張する。彼女らしい実に高潔な立ち振舞いだと感心するけど……少々興が乗った。だったら俺はあえて力づくで証明ねじふせしようかな。

「ちなみに俺の方はあながち的はずれではないんだよね。この学校でなきや違法な手段と言えばそうだろうし」

「あ？随分と回りくどい言い方じゃねえか。ならお前はどんな手段で大量のポイントを集めたんだ？」

「博打」

「「……………」」

俺達の周りを取り囲むギャラリーのほとんどが、宇宙に放り出された猫みたいな表情で呆気に取られる。

「だからギャンブルだよ、ギャンブル。夏休みの特別試験のとき、俺達豪華客船に乗ったでしょ？そのカジノのルーレットで思いきって全財産つぎ込んで大勝ちしたんだよ」

「果てしなくあぶく銭だった!?!」

「クク、そんな突拍子もない話を信じろつてか？テメエが常識外れの額を所持するのはわかってんだ。それだけの額をルーレットで稼ぐとなると、相当無理な賭け方をする必要がある。生命線ともいえるプライベートポイントを、運否天賦に任せて全額かけたなんて、とても信じられるわけが――」

「じゃあ無理矢理信じさせるまでだよ」

「あ?」

そう言つて俺は懐から10個のサイコロを取り出し、リUNKELに手渡す。

「1〜6までで好きな数字を1つ選んで振りなよりUNKEL。1個でも外したら自主退学してあげる」

「……クツ、クハハハハハハ！正気かよテメエ!?!これだけの証人がいるんじや、振つた後でやっぱ無しじゃ済まされねえぞ?」

「御託はいいから早く言いなよ。さっさと帰つて日課の自習しなきゃならないんだから」

「さ」

「面白え……。ならーだ、精々神様にでも祈るんだな」

「別にいちいち祈るまでも無いよ」

リUNKELは片手を無造作に振り、ロビーの床を10個のサイコロが転がる。確率にして60, 466, 176分の1、確かに天文学的とも言える数値だが……。別に問題ない、俺がギャンブルで負ける筈がないし。

やがて全てのサイコロが止まり、出た目は当然全て1。周りの人間が騒然とする中、リUNKELがサイコロを蹴飛ばそうとしていたので足で踏んで防いでおく。

「釘を刺さなかった俺も悪いけどさ、1度出た目を後から変えようだなんて許されないよ?それに蹴ったところでどうせまた1が出るだろうしやるだけ無駄さ」

「……クク。どうやら化け物は運まで規格外みてえだな。それに見た限りイカサマサイコロでもなさそうだ……。いいぜ、テメエの言い分は信じてやるよ」

「そりゃよかった」

俺はサイコロを全て拾い集めてから、エレベーターのスイッチを押す。

「待てよ本条、一之瀬が不正をしてるかどうか気にならねえのか?」

「欠片も興味が無いかな。不正をしてようがしてまいが財力で俺に敵う訳が無いし……。多分してないだろうしね」

「にやはは、信じてくれてありがとう本条君」

「どういたしまして。それじゃあテスト頑張つてね、応援してる」

エレベーターに乗り込み今の出来事について考える。一応正解ちゃんを視たが、間違いなく疚しいことは何もしていない。むしろ気になるのはリユンケル……ではなく、リユンケルの名を騙つてあの手紙を出した奴だ。リユンケルは面白がつて話を合わせていたが、間違いなく覚えがなかった筈だ。彼は割と嘘をついても乱れが少ないが、それでもまったくわからないというわけではない。

ではいったい誰なのかとなると、放火魔の理論からして多分あの現場にもどこかにいただろうし……

消去法でコージーしかないよなあ……。

ちなみに後日学校から、卍解ちゃんが不正を行っているいと発表された。知ってた。

期末テスト

繰り返される容赦ない勉強地獄に、クラスメイト達が段々と生ける屍になり始めつつも、最上位クラスのプライドからか誰一人音を上げることなく勉強に励み続け、ついに期末テスト当日となった。

俺はいつものように4時に起床し、いつものようにルーティーンをこなした後、これまたいつものように寮のロビーにて有栖と合流し学校へと向かう。

しかしアレだな、男子の制服はカッチリし過ぎて夏場が大変だが、女子の制服は冬場がキツそうだ。もう12月になるのにスカートとか、見ているこっちが寒くなってくる。おまけに下にジャージを穿いたりするのは校則で禁止されてるときだ。アレか？世の中は平等であるべきだから、男女共に平等に制服の不便さに苦しめつてことか？そんな平等さは誰も幸せにしないだろうに。……いやまあ目の保養にはなるから俺達男子としては大歓迎だけどね。

「桐葉、何かよからぬことを考えてますね？何やら私の足にいやらしい視線が向いたを感じました」

「たつた今感じたなら間違はなく気のせいだな。だって一緒にいるときは常時エロい目で見てるし」

杖でふくらはぎをシバかれた。なんでや。

「少し自重を覚えてください。貴方、高校生になつてから変態的な言動がちよくちよく増えてますよ?」

「男子高校生なんてみんな変態なんだよ。基本的に思春期まつさかりで、一見クールな奴でも頭ん中はだいたいピンク一色だから」

「まったくああ言えばこう言う……いいですか桐葉。いやらしいことを考えるなどは言いません。それなら私も貴方にとやかに言えませぬし……ただ、もう少し外面を気をつけなさい。ただでさえ貴方は色々と目立つのですから」

「えー?お前の頭の中での俺、どんだけすごい目に遭わされてんの?きやー、有栖ちゃんてばだいたーん」

思いつきり股間を蹴り上げられた。

しかも痛みにも悶絶してその場に蹲る俺の頭を踏みつつ見下ろすオプシオン付き。

病弱キャラのくせに俺をめる時だけやたらアグレッシブになるよね君。

まあこちらでも起き上がるついでに、行き掛けの駄賃代わりにスカートの中はしつかりと確認しておく。転んでもただでは起きないの精神である。ちなみに見た目に反して

結構大胆なブツをお召しになつていた。マセガキとか言つて茶化したら確実に塵にされるからお口チャツクさせてもらうけど。

「とか心外だね、俺だつてちゃんと世間体は気にしてるし。有栖以外にはこんなセクハラ発言、うっかりでもやらかささないよ」

「私にもやらかささないで欲しいんですけどね。どこで誰が聞いてるかわからないんですから」

「俺の眼を掻い潜つて盗み聞きできる奴なんていると思う？」

「む……それは、そうでしょうけど……」

「よし不安要素も無くなつたことだし、存分にセクハラされるがいい」

「あまり度が過ぎるとお父様に報告しますよ？」

「調子こいてすんませんでした」

「まったく……」

とまあそんな感じでいつものように、ひたすらアホな会話を繰り広げながら学校に向かつていたのだが、学年を代表する優等生2人がテスト前にする会話として流石にどうなん？と少しばかり反省し、ちよつとだけアカデミックな内容でも振つてみることにする。

「それで有栖、今回の期末テストだけど……勝率はどれくらいかね？」

「ふむ……私の目算では、95%〜99%といったところででしょうか？」

「おや、随分と振幅があるね」

「知つての通り今回一之瀬さん達と争う際に、私が用いた戦略は2つ。その内の1つはもしかしたら一之瀬さん達も行うかもしれない手段であり、もしそうなれば95%まで下がります」

「まあ正解ちゃん達なら十分ありえるけど……それでも9割5分ウチの勝ちなんだ？」

「私と桐葉が教鞭を取つたのですよ？ 対等な条件なら純粋な学力の差で振じ伏せられませぬ」

まあ特に異論は無い。あのクラスの美点にして最大の弱点は、正攻法でしか戦いを挑まないし挑めないこと。だからリUNKERと戦つたら多分後手に回つてしまうだろうし、地力で劣る相手には番狂わせもなく順当に負ける。

「私としてはある程度張り合つてもらえた方が嬉しいですね。綾小路君が龍園君達を何とかしている間、暇潰しに一之瀬さんで遊ぼうと思つているので」

「うーわ……こんな性悪女にロックオンされるとか、正解ちゃんも災難だなあ。友人として同情するぜ」

「知つてて止めない桐葉に性悪扱いされる筋合いはありません。友人ならば守つて差し上げればいかがですか？」

「俺は卍解ちゃんを信じてるからね、彼女ならお前の意地悪くらいきつと乗り越えてくれるさー……乗り越えられず潰れちゃったらそれはまあ、仕方がなかったということ
で」

「冷徹ですね」

「俺だってお前に言われる筋合いはねーよ」

有栖が遊ぶと言ったからにはそれは本当にあくまで遊びの範疇で、全力で潰しに行くというわけではない。その程度のことを自力ではね除けられないなら、どっちみち卍解ちゃん達はAクラスに上がれはしないしね。

そして始まるテストの時間。

予鈴のチャイムが鳴ると共に、生徒達は筆記用具を残して後ろのロッカーの勉強道具

を仕舞う。

決められたペア2人で取るべき総合点のボーダーは1600点中692点。俺と有栖はクラス全員を、たとえばパートナーが0点だろうと試験を切り抜けることを目指してひたすら鍛えあげた。……戸塚とかファルコンが少々怪しいが。まあ少なくとも、どのペアも退学はほぼあり得ないと考えていいだろう。

「これより期末テストを行う。1時間目は現代文だ。開始の合図まで用紙を裏側にしておくように。試験時間は50分。体調不良やトイレは極力控えるように。どうしてもという場合は挙手をしてから申告すること。それ以外での退出は一切認められない」

真嶋先生が1人1人にプリントを配りつつ、テスト直前のお決まりの注意事項を述べる。

程なくしてチャイムが鳴り真嶋先生が開始の合図を出すと、俺達は一齐にプリントを裏返した。

Bクラスが作成した問題文に一通り目を通した結果、俺と有栖は1つの結論に辿り着いた。

どうやら正解ちゃん達は俺達と同じように、学校に対してドア・イン・ザ・フェイスを仕掛けたようだ。

問題を作成する際の注意点として、明らかに難易度が高過ぎる問題やひねくれ過ぎた問いかけの問題は、提出しても学校側にハジかれる。つまり俺達を作成するべき理想の問題とは、学校側からギリギリボツを食らわない問題だ。

しかしだ、問題の是非を審査するのは機械ではなくあくまで教師達人間の手で行われる……それはつまり心理的な駆け引きを仕掛ける余地があるということだ。

俺と有栖が1週間で作成した問題は計1200問。その内最初に提出した400問は、たぶん全てハジかれるであろう高難易度の問題にした。そして次に提出した400問もおそらくは受理されないであろう、かなりひねくれた問題にしておく。それから800問は提出した真嶋先生の見ている前で、修復不可能なレベルでバラバラにしてから破棄した。

そして捨て石である800問の後に提出した400問は、難易度も出題の仕方もある程度抑えられた問題を揃えて提出し、多少の修正の末はあつたものの難なく受理された。……ちなみにおそらく最初にそれを提出していたら、多分ギリギリハジかれていたくらいの難易度だと思う。

ドァインザフェイス
譲歩的要請法……最初にあって大きな頼みごとをして断らせることで、相手に罪悪感を抱かせることにより、次に提案した小さな頼みごとを相手に受け入れ易くさせるとい

う、交渉術の基礎中の基礎だが、有栖はこの方法を用いて考えうる限り最高難易度のテストを受理させた。

が、俺達の作成したものと遜色無い難易度のこの問題を見る限り、どうやら向こうも同じ手法を取ってきたらしい。これで条件は五分五分、勝敗は純粋な学力勝負に持ち込まれた。……だがそれでも俺達の勝ち揺るぎない。正解ちゃん達がどれだけ奮闘しようが、俺と有栖が組めば負ける気はない。

……まあクラスのことや正解ちゃん達のこととは一旦忘れて、今はこの高難易度なテストを解くことに集中しよう。もしかしたら俺と有栖でも満点を逃すかもしれないし、そうなれば長きに渡る俺達の戦いに終止符が打たれることになる。

さあ、かかってこい有栖……！

【二学期期末テスト成績優秀者一覧】

1位	Aクラス	坂柳有栖	800点
1位	Aクラス	本条桐葉	800点
3位	Dクラス	堀北鈴音	756点
4位	Dクラス	幸村輝彦	733点
5位	Aクラス	葛城康平	728点
6位	Aクラス	的場信二	715点
7位	Cクラス	椎名ひより	708点
7位	Aクラス	山村美紀	708点
9位	Bクラス	一之瀬帆波	702点
10位	Dクラス	王美雨	697点

「結局今回も決着は付かなかつたな」

「そうですね」

「しかしお前ら、あの高難易度テストでも満点かよ……頼もしいやら恐ろしいやら」

「敵対しなくていい分、俺達は恵まれている」

「〜♪〜♪」

ペーパーシャッフル結果発表日の放課後、俺達幹部5人は祝勝会がてらカラオケに来ていた。普段はノリが悪いつてレベルじゃないマスミンが、テスト期間に溜まったフラストレーションを晴らすかのごとくノリノリで熱唱していた。歌唱力に関しては本人の名誉のためにもコメントは控えさせてもらおっかな。

「ともかくこれで2位だったBクラスは失速し、ひとまずAクラスは独走態勢に戻ったね」

「そうだな。結果の内訳もBクラスの平均点が72.3に対し俺達は80.7……圧勝と言つていいんじゃないか?」

「たかだか8点の差で受かれてはいけませんよ橋本君。私としては20点差くらいの圧勝が目標だったのですから」

「いやいや姫さん……Bクラス相手に正攻法でそれは、流石に無茶だと思うぜ?」

「ええ、でしょうね。目論見が外れたのも私達の落ち度というより、一之瀬さん達が奮闘した結果でしょうし。圧倒的力の差で心を折るつもりでしたが、こんな中途半端な勝ち方じゃかえってBクラスを奮起させてしまうでしょう。困りましたね」

「うん、本気で困ったのならその邪な笑顔よこしまを引つ込めよっか」

「邪とは酷い言われようですね、私のガラスハートが傷ついてしまいました。療養のため膝枕を要求します」

「はいはい、有栖ちゃんの仰せのままにと」

「よし鬼頭ちよつくらデュエットしようぜ！何かこう、甘ったるいムードが消し飛ばすくらいすげえハードなやつ入れろ！」

「任せろ、ハードロックの真髓を披露してやろう」

有栖の頭を膝の上に乗せ、髪の毛を優しく撫でながら今後について思考を巡らせる。もう長い付き合いだし、今回期待以上に食らい付いた卍解ちゃんに対して、有栖がやりそうなことくらい想像がつく。……正攻法で打ちのめせないなら、今度は相当エグい掬め手を使って心を折りにかかる筈だ。俺と同等かそれ以上の話術を駆使した情報収集力で彼女の弱みを握り、抉って抉って抉り殺そうとするだろう。

問題は肝心の卍解ちゃんに、この学校の関係者のほぼ全員が善人だと太鼓判を押すであらうあの子に、握られて困るような弱味があるかという………残念ながら心当た

りはある。

船上試験のときもその片鱗はあつたし、あのときの様子からして完全に吹っ切れているとは到底思えない。……おそらくそれこそ正解ちゃんがBクラスに配属された理由だろう。

俺としてはそんな過去なんぞに興味無いが、正解ちゃんが有栖に潰されなかったためには彼女自身がそれを乗り越えられるかどうか、Bクラス全体が彼女のそれに向き合い受け入れられるかどうかにかかっているだろう。

まあそれはともかく、CクラスとDクラスの結果は少し予想外だったな。櫛田ちゃんという悪性腫瘍を抱えたDクラスがCクラスに勝つには、どうにかして櫛田ちゃんを排除するしかないと思つていたけど……Dクラスは勝つたのに、櫛田ちゃんは今も何事も無かつたかのように学校生活を送っている。一体どうやって櫛田ちゃんの裏切りを阻止したんだろうね？いくつか対策案は思い浮かぶけど、それだとCクラス側から何人か退学者が出てもおかしくない筈……ダメだな、推測しようにも材料が全然足りないや。今度コーギーに会つたら聞いてみようかな。……素直に教えてくれる訳ないか。

6 卷エピソード

【side：一之瀬帆波】

「それじゃ皆、無事退学者を出すこと無く期末テストを乗り越えられたことを祝して……かんぱーい！」

「「かんぱーい！」」

事前にケヤキモールにある焼肉屋さんにて、私達Bクラス一同は『ペーパーシャツル』の&慰労会を開いていた。もし私達が勝てていたら祝勝会の予定だったんだけど……

「いやー、やっぱりAクラスの壁は高いねー」

「一之瀬の考えた戦略は決して悪いものじゃなかった。敗因はシンプルに地力の差だろう」

神崎君の見解にクラスメイト達も同意する。

そう、今回の試験で私達はAクラスを指名し、向こうも私達を指名してきたので直接対決という形になった。結果は平均点で8点以上差をつけられての完敗。学校側に敢

えて800問ほど弾かせることで、高難易度の問題を受理させ易くするって試みは上手くいったんだけど当日受けたテストの難易度からして、どうやら坂柳さん達も同じ方法を取ったらしい。

「しかし今までの定期テストだとそこまで差が無かったのに、今回一気に引き離されたよな。今回俺達もすげー勉強頑張ったのに……」

「Aクラスは試験期間中、ほとんどの生徒が教室で勉強会を開いていたらしい。それだけなら別に普通のことだが、今回はAクラスのトップツーツーが直々に指導を行ったそう
だ」

「トップツーツーってことは坂柳と……本条か」

柴田君が彼の名を口にする、クラス中のほぼ全員が苦虫を噛み潰した表情になる。

無理もない……無人島試験から今回のペーパーシャッフルまでの全ての試験で、私達Bクラスは彼一人にただ翻弄されるだけだった。

本条桐葉

Aクラスの最終兵器、貴公子にして奇行士、自称草食系、ナチュラルボーンエンターテイナー、ミスターパーフェクト、1年生二大変人のまだ話の通じる方……とさまざまな通り名を持つ、坂柳さんの懐刀にして同学年で最優秀と名高い生徒。

文武両道で少々変わり者だけど社交性も高く、本人が意図せずとも集団の中心に立つ

カリスマ性も備わっている。堀北会長が言うには、歴代でも最高峰の逸材との呼び声も高いそうだ。

私は彼の友人として親愛と、尊敬と……そしてほんの少しだけ苦手意識も抱いている。

「やっぱり俺達がAクラスに勝つには、とにかく本条を何とかしないとなー」

「だがそれは容易なことではない。正攻法では数の利すら覆されるし、かといって龍園のような卑劣な手もまるで通じなかったそうじゃないか」

「体育祭の棒倒しするとき、山田君や石崎君を子供扱いしてたもんね……」

「それで勉強もできて、さらに人に教えるのも上手とか……」

「難攻不落過ぎっしょ。同じ人間なのになんでこうも差があるのかなあ……」

本条君のあまりの規格外さに、クラス皆の士気がみるみる低下していく。……曲がりなりにもクラスのリーダーを任せている以上、ここは私がしっかりしなきゃね！

「みんな聞いて！たしかに本条君は手強いし個人ではどう頑張つても勝てる気しないけど……私達の戦いはいつだってチーム戦だから、1人で立ち向かう必要なんてないんだよ」

「で、でもさ一之瀬……体育祭では俺達あいつ1人に蹴散らされたようなもんだぞ？」

「だったら私たちがより団結して、1人1人が成長していかなきゃね。高校生活はまだ

折り返しですらないんだし、ここで勝負を投げ出すのはまだ早いよ」

「……そうだな一之瀬。まだ2年以上も残ってるのに、こんなところで諦めたらダメだよな皆！」

「うん！」

「当面の目標は打倒本条！だな」

何の根拠もない私の精一杯の強がりに、クラスの皆は疑うこと無く応えてくれる。そのことを心から嬉しく思いつつも……心の底では少し後ろめたく思う。

こんなに優しい人達の先頭に立つ資格が、私なんかにあるのだろうか。

クラスの皆と別れた後、彼から少し用があるとメールが来ていたので、学生寮の近くにある噴水に向かう。こんな時間に1人だと危ないからと千尋ちゃんが同行を申し出てくれたが、どうにか根気強く説得して折れてもらった。できれば1人が望ましいと書

かかれていたし、無人島の件で彼女はトラウマに近い感情を持っているようなので、ついてきてもらうのは心苦しい。

そして指定された噴水場に到着すると……

「ひやつほおおおう！ イエイエイエイッ！」

……私を呼び出した人物、桐葉君が凄くアクロバティックに折り畳み自転車を取り回していた。ウィリー状態で高速回転したり、自転車から降りて逆立ちしながら両足で自転車だけを回転させたり……いや何してるの本条君!?

「あ、あの……本条君？」

「おお、来たか正解ちゃん」

本条君は逆立ちしたまま自転車を大きく蹴り上げ、瞬時に起き上がるや否や落下してくる自転車を手で掴んで折り畳んだ。

「ええと、何してたのかな？」

「何って……待ってる間少し暇だったんで、ネットで購入した折り畳み自転車で曲芸乗りの練習でもしてただけだよ？」

「そ、そうなんだ……」

本条君とはもう結構長い付き合いになるが、彼の行動には未だに謎が多い。そんな何当たり前のことを聞くんだ？ みたいに見えるけども反応に困る。

「しかし自分で要求しといてこう言うのもなんだけど、こんな時間に女の子一人で会いに来るとは感心せんない。危機感が足りてないようならまた歌舞伎役者に仕立てあげろぞー？」

「危機感が足りないんじゃないよ、本条君のことを信じてるからだよ。……でもまたアレをやったら本気で怒るからね？」

「おっと怖い怖い」

「まったく……それで用事って？」

私がそう質問すると、本条君はひとまず折り畳み自転車を懐にしまう。……以前も思ったけど、どうやって収納してるんだろう？ どう見ても学生服の内側には収まるサイズじゃないよね？

「1つはちよつとした確認かな？ 今回の対決で心でも折れてないか友達として心配だったんだけど……どうやら取り越し苦労だったみたいだね」

「にやはは、私達もそこまでヤワじゃないよ。しっかりベンジさせてもらうから覚悟してねー！」

「うんうん、元気でよろしい。……それで本命の2つ目だけど、今回予想以上に善戦した

君にウチの有栖が興味を持つてね、是非一度暇なときに会つて話をしたいそうなんだ。あつ、嫌なら断つてくれて構わないよ」

「え?……あ、勿論私はオツケーだよ。ちよつと待つてね……この日なんかどうかな?」
私は予定をまとめているメモ帳を取り出し、まだ空いている日を本条君に伝える。坂柳さん、か……色々と苛烈な人物だつて噂は聞くけど、仲良くしたいと言つてくれるなら断る理由はないよね。

「うん、いいんじゃない? 有栖にもそう伝えとくよ。……それから最後に1つ、忠告しておこうかな」

「忠告?」

「君も色々と噂を聞いているだろうけど、有栖は極めて攻撃的な子でね、人の弱味をついつい抉り倒してしまふ生粋のサディストだ」

「じ、自分の彼女に対して凄いい評価だね……」

「だから気をつけること。特に……」

心の奥底で君が抱えているそれを、絶対に見破られないようにね?」

真つ直ぐに私を見据えながら言つた彼のその言葉に、私は全身に冷水を浴びせられた

ような感覚に陥った。

「え……本条、君……？」

「なんで知ってるのかつて？ 以前も言ったじゃないか、俺に隠し事は通用しないって」
「っ……！」

「まあ君の過去なんて興味無いから詳細までは知らないけどさ、それが君にとつてのアキレス健になりうることは視ててわかるよ。……だけどね、咄解ちゃん、どれだけ目を背けようが過去は消えて無くなったりはしない。自分の弱さと向き合わなきゃならないときははずれ来る。それを乗り越えられるかどうかは君次第だよ？」

助言めいた言葉を言い残して、彼は固まって動けない私を捨て置きその場を後にした。

私が彼に感じていた苦手意識……全てを見透かされているような感覚は、気のせいで
はなかつたみたいだ。

【side:橘茜】

皆さんこんにちは。3年Aクラスの橘茜と申します。つい先日まで生徒会書記職を務めていた者です。

2学期の期末試験も無事乗り越え、テスト明けの息抜きに今度堀北君にお食事でも誘おうかなと思いつつも、どうやって自然に切り出せばいいか、つい先ほどまで思い悩んでいた筈の私は今……

「飛ばすぜええええええ！」

「ひいやああああああああつ!?!」

……後輩に殺されかけています。

ケヤキモールをぶらぶらしていたら偶々本条に会ったまでは良かったのですが、何の説明も無しに折り畳み自転車に連結されたりアカー（怪我防止のためかクッションが敷き詰められている。気を遣うところが間違ってます）に乗せられたかと思えば、気がついたらとんでもないスピードで連れ回されていました……一から振り返ってみてもまるで意味がわかりません!?

「本条君ブレーキ！ブレーキツ！」

「ブレーキ？知らないっすねそんな機能。男はアクセルだけ覚えときゃ生きていけるんですよ」

「あなた将来絶対に免許取らないでくださいね!?!」というか危ないからもう少しスピード落としてください！」

「バカ言っちゃいけませんよ茜先輩。俺達を縛るものはもう何も無い。俺達はようやく本当の自由って奴を手にいれたんだ。いこうぜ先輩……スピードの向こう側によおっ！」

「あなた一人で行ってください！行ったまま帰って来ないでください！いやああああああああ!?!」

「バカなんですか!?!いえやっぱり聞くまでもありませんバカですな本条君はこの学校ーバカです間違いありませんこのエンドレスおバカっ！」

「痛っ……ちよ痛い痛い痛い!!?こめかみをグリグリしないでマジで痛いです!」
「痛くしてるんだから当たり前ですっ!」

本条君の部屋にて、ようやく絶叫マシンから解放された私はおバかな後輩を情け容赦の無い私刑にかけていた。

「ああ痛かった……まったく、相変わらず頭が固いですね茜先輩は。もうすぐ卒業してしまう敬愛する先輩に対する、構ってほしい後輩からのちよつとしたお茶目じゃないですか」

「あなたは相変わらず頭が液化化してますね!あれは拉致って言うんです!私じゃないかっ!たら学校に訴えられて、下手したら停学ものですよ!」

「何だかんだでちゃんと許してくれる優しい茜先輩が大好きです」

「黙らっしやいこのウルトラおバカ!……だいたい私と一緒に遊びたいなら、始めからそう言えば良いじゃないですか。男子の部屋に入るのには確かに少し気後れしてしましますが、あなたとはもう知らない仲では無いのですし、普通に了承しましたよ私は」

「いやまあ、そう言われたらそうなんすけど……なんかそれだとエンターテイメント性が足りないかなっつと」

「ふんっ!」

「鳩尾!」

私の黄金の右を食らい悶え苦しむ本条君に対し、思わず深い溜め息を吐いてしまふ。なんでこの子はいつもこうなんだろう？堀北君に勝るとも劣らないほど凄い人物の筈なのに、何故か私と接するときだけ果てしなくバカになつている気がする。堀北君は当初彼が南雲君に同調しないかと危険視していたようですが、こんな子南雲君でも持て余すに決まつてる。

……それにしても、

「今日は坂柳さんは一緒じゃないのですか？」

「有栖はなんかみやびん会長に用があるらしくつて……なんかモヤつとするから俺も女の子部屋に連れ込んでやろうと思ひまして」

「なんですかその見下げ果てた理由……」

「あつ、当然後でちゃんと正直に言いますよ？隠れてこそこそするなんて性に合わないし。まあ茜先輩だつたら有栖もさほど気にしないって打算はありますけどね」

何の打算ですかそれは……あれ？

「おかしくないですか？私と本条君はケヤキモールで偶々会つただけですよね？」

「それが茜先輩、俺達の携帯には位置情報サービスつて便利なシステムがございましてね……」

「……やっぱり学校に報告していいですか？」

「どうもすみませんでした、憐れな後輩にどうかご慈悲をくださいませ」

「はいはい、わかりましたよ。まったくもう、調子がいいんですから……」

思わず溜め息を吐いてしまうが、不思議と怒りとかは湧いてこない。色々と手を焼かされることも多いが、（私は一人っ子だが）実の弟のように懐いてくるこの子は、何だかんだで可愛い後輩だ。散々悪戯されて振り回されて迷惑をかけられてきたが、どうしても嫌になれそうもない。

……が、年下に一方的にからかわれまくる現状は先輩としての沽券に関わるので、せつかくだからこちらからも意地悪してみようかな。

「それにしても、坂柳さんが南雲君に用事ですかー。南雲君格好いいし……もしかしたら乗り換えられちゃうかもしれないねー?」

「や、それは無いですね。100パー無い」

ちよつとだけ不安にさせてやろうとしたのだが、真顔であり得ないとキツパリ断言された。普段の彼等のやり取りを何度か見ている限り正直私もそう思うが、少しは不安になつてもいいのに。よほど坂柳さんを信頼してるのだろうか。

「随分あつさり否定しましたけど、何か根拠があるのですか?」

「いやだつてみやびん会長つて、女の子をアクセサリーとしか思つてないドクズな面があるじゃないですか?」

「清々しいほどストレートに侮辱しましたね!」

「信頼できる先輩からの確かな情報なんで間違いないですよ。……まあそんなみやび先輩にとっては、自分に従順にならない女の子は興味の対象に入らないでしょうね。従順な有栖とか気色悪いですし」

「この子本当に坂柳さんが好きなんだろうか?あまりにあんまりな言い分にちよつと自信無くなってきた。」

「さて、それじゃあ本題に入りましょうか」

「本題?」

「今回先輩を拉致……お連れした理由はただ一つ。ずつと気になってたんでこの際ズバリ聞きますが……茜先輩はいつ元会長さんに告白するんですか?」

「……ふきゅつ!」

あまりに予想外な質問に、思わず変な声を出してしまった。

「な、ななな何を言い出すんですか本条君!?!なんで私が堀北君にここに、告白なんて……」

「いやもうそういうのはいいですから。本人以外のほぼ全校生徒には既に、茜さんの気持ちはバレてるんで」

「へあつ?!?!」

「生徒会に所属してる間はお互い忙しいだろうし、期末テスト後がちょうどクリスマス前だから告るとしたらベストは今だろうと、先日星之宮先生と盛り上がったんですが……なんか何も無さそうなんで肩透かしを食らいましたよこっちは」

「知りませんよそんなこと！というかなんで他クラスの担任とコイバナで盛り上がってるんですかあなたは!？」

「もう見てるこっちが焦れたいんすよ。四の五の言わずにガツとやって、シヤララーンと押し倒しちゃいましょうよ」

「シヤララーン!？」

その後なんでさつさと告白しないのかだの、このままズルズル行くとあつという間に卒業式だとか、正直耳の痛くなる指摘をピシバシと受け、帰宅する頃には私は精神的にボロボロになっていた。

これに関しては100%善意でやってきている分、怒ろうにも怒れないからタチが悪い……。

「ああそれと先輩、最後に1つだけ」

「なんですか、もう私は満身創痍ですよ……?」

「無事Aクラスで卒業してくださいね。間違っても退学になんてならないように」

……フフフ。まったく、生意気な後輩ですね。

「あなたに言われるまでもありませんよ」

「ほんと頼みますよ？もし茜先輩が退学なんてなったらたぶん凄い悲しいですから」
「いやそこは普通に悲しんでくださいよ。たぶん何ですかたぶんて」

「いやまあそればかりは、実際に先輩が退学になってからののお楽しみってことで」
「人の退学で楽しまないでくださいっ!？」

綾小路グループ

今年も残すところあと2週間。

金曜日の放課後、有栖は正解ちゃんで遊ぶために色々と下準備で忙しいとのこと、俺は久し振りに植物庭園『ルビカント』に向かう。

施設の中に入ると5人の生徒が何やら仲良く談笑していた。珍しいな、ここに訪れる物好きな学生なんてそういないのに。それに加えて……ってあれコージーじゃん。

「おーい、コージー」

「本条か。珍しい場所で会うな」

「それはこつちのセリフ。試験中は色々と忙しかったから来るのは久し振りだけど、もしかして俺が来れない間に常連になってたりする?」

「まあ、そんなところだ。期末試験中は主にここで集まって勉強会を開いていた」

「ふーん……しかしまあ随分と珍しい集まりだね。三宅君、幸村君、佐倉ちゃん、長谷部ちゃん……君も含めてあまり人付き合いが得意じゃない面々だ」

「試験期間中にちよつとした縁でできたグループでな、居心地がいいから関係を続けて

いる。……しかし以前関わりのあつた啓誠や愛理はともかく、明人や波瑠加のことまで知っていたのか？」

「やだなあコージ。流石に同じ学年の生徒くらい皆覚えてるよ」

ぶつちやけ面倒だったけど、有栖に絶対覚えると言われて渋々暗記したことは伏せておこうつと。……それにしても啓誠？話の流れからして幸村君なんだろうけど、複雑な事情をお持ちなのかな。

「あ、あの、本条君！」

「んあ？どしたの佐倉ちゃん」

「あの……一学期のとき、ハンカチありがとうごさいましたっ！」

「ハンカチ？……ああ、暴力事件のときのことね。気にしないでいいよ、泣いてる女の子の涙を拭ってあげるのは男の義務だしね」

「うーわ、そんな物凄くこつ恥ずかしいセリフを躊躇なく言い切っちゃうんだ……流石全校生徒の前で坂柳さんに愛の告白した人は違うねー。ゆきむーじや絶対無理だよ」

「俺に飛び火するな」

「坂柳と言えば本条、今日は一緒じゃないのか？」

「有栖は悪だくみで忙しいから今日は別行動だね。……というか三宅君、放課後は別にいつも一緒にいるわけじゃないからね？俺のフットワークに合わせてたら、有栖の体が

持たないし。あの子ロツゲンシユロートより弱っちいから」

「お前の中の坂柳はライ麦パンにも負けるのか……」

最初らへんは少し警戒していたようだけど、不快にならない距離感を保ちつつ適当に雑談している内に、長谷部ちゃんや三宅君とも仲良くなれた。やや気難しいけどホリリンよりは与し易いかな。

「そういやこの間のペーパーシャツフル、Cクラスに勝つたんだよね。こりやクラス昇格も時間の問題かな？」

「そうなるな。……そっちも危なげなくBクラスに勝利したと聞いている」

「まあね。これで卍解ちゃん達は大きく減衰、もしかしたら近い内に君達に追い抜かれちゃうかもねー」

「もちろん、追いつき追い抜くつもりだ」

それまで口数が少なかった幸村君が、眼鏡をクイツとさせながら突然一歩前に出てきた。

「そしていずれはAクラスになる」

「ほほう、大きく出たね。元気でよろしい」

「……できもしないことを口にするなどでも言いたげだな」

「いや？むしろ一番可能性があるんじゃないかな？六助を相手にすると、いく

ら俺でも常勝とはいかないだろうしね」

そしてコージも……と心の中で付け足しておく、何故か幸村君は苦虫を噛み潰したような表情になる。

「六助、つて高円寺のことか？アイツが真面目にクラスに貢献するわけないだろ」

「うん、そうだろうね。……でも体育祭のときのように相手が俺の場合に限り、彼は君達の力になってくれる筈だよ」

「そんなまさか、いや200m走では確かに……」

「……まあそれでAクラスに勝てると思ったら大間違いだけどね。俺達に挑むときは気を引き締めなよ？有栖は（たぶん）俺よりも手強いからさ」

俺の言葉を聞いて、コージ以外の子達が臆したような表情に変わる。船上試験や体育祭を通して俺の圧倒的な力は身に染みてわかっているだろうし、有栖がそれ以上と言われれば嫌にもなるだろう。

「……ところで君達、さっきから監視されてることは気づいてる？」

「ああ、Cクラスの小宮だろ」

俺達以外に植物園内にいる2人について指摘すると、三宅君はその内の1人だけに言及してきた。この態度からしてあの子には気づいてないのかな？……と思っているとコージがさりげなくアイコンタクトを飛ばしてきた。なるほど、黙ってろってわけ

ね。

「最近やたらとCクラスに見張られてるんだ。俺弓道部なんだけどよ、あいつら今日も部活にも顔出してきやがった。見学ってことで先輩達は認めてたけどよ、四六時中俺の方を睨んでたせいでやりづらかったぜ。何がしたいんだアイツら……」

三宅君はうんざりしたように肩が凝るポーズを取った。Cクラスの見張り……裏には確実にリユニケルがいるとして、いったい何のために？

「Dクラスの成長に関係があるんじゃないか？早々にクラスポイントで0にした俺達が、気がつけばCクラスと立場が入れ替わりかけている。龍園も相当焦っている筈だ」
幸村君がそう指摘するが、多分リユニケルはそんなタマではないだろう。彼は過程がどうなろうと最終的に勝てばそれでいいと考えるタイプだし、Dクラスに落ちたくらいで凹む筈がない。

「そういえばそうだよねー。あれだけ馬鹿にしてた私達に追い抜かれそうだし」
「……でも本当なら、まだ追い抜けなかったんだよね？」

佐倉ちゃんの言う通り、今回のパーパーシャツフルで100ポイントがDクラスに移動しても、Cクラスとの差はまだ80ポイントほどあった。が……

「ああ。詳細は不明だが先日Cクラスに重大な違反行為があったらしく、そのペナルティでマイナス100ポイントされたそうさ。それがなければ、俺達はまだDクラスの

ままだっただろう」

「何やらかしたらそんな大事になるんだか。まあCクラスらしいけどね」

何やら呆れてるけど長谷部ちゃんさ、Cクラスも1カ月で1000ポイント失った君達には言われたくないと思うよ？

「クラスの変動はそう頻繁に起こるものじゃないだろうし、最初に大きく出遅れたクラスに追い抜かされそうとなれば焦るのも無理は無い。龍園が急成長の理由を探ろうとしているなら辻褄も合う」

「普段偉そうにしている龍園君にとっては、メンツ丸潰れだもんねえ」

「なるほどな、あいつらが必死になるのも無理は無いか」

悔しがるリユンケルでも想像したのか、三宅君もある程度の溜飲を下げたようだ、

しかしこのメンバーのほとんどはDクラスの躍進に関わりの無い生徒だったので、(表向きは)ホリリンの私兵として行動しているコージが、これまで特別試験でホリリンがどう立ち回ったのかについてその軌跡をメンバーに共有することになった。ちなみに敵対クラスである俺がいるのは色々と不味いため、一段落するまで離れていることに。

「まあだいたい知ってるんだけどね」

しばらく疑似森林浴を満喫しているとコージから連絡が入ったのでグループに合

流する。

「話はまとまったの？」

「ああ。堀北の八面六臂の大活躍ぶりを再確認し終えた後、今はこのグループで誰もクリスマスと予定が入っていないという話で盛り上がっている」

「そんな悲しい内容でどう盛り上がるのさ……」

「うわ、憐れみの目で見られちゃった。やっぱり可愛い彼女持ちがいると違いますな。やっぱりイブの日は坂柳さんと2人きりで甘い夜を過ごすの？ やらし〜」

「女の子にあるまじきゲスい発想だね長谷部ちゃん。ご期待に添えず申し訳ないけど、24日は毎年有栖がパーティーでも企画するのが通例になってるね。イブがどうか以前にその日は俺の誕生日だし」

かの神の子と同じ誕生日と言えば聞こえがいいがこの日に生まれた人は、高確率でクリスマスやお正月とひとまとめにされるといふ悲しい運命を背負うことになる。俺は幼少期から物欲があまり無かったから特に気にしなかったけど。

「へえ〜、坂柳さんときりぼんつてこの高校に入る前からの付き合いなんだ？」

「まあね、中学時代からあの子の我が儘にはそれはもう散々振り回されて……きりぼん？」

「桐葉君だからきりぼん。私仲良くなる時はあだ名から入るから。きよぼんとは以前か

ら友達みただし、お揃いでいいかなって……ダメ？」

「んーん、別に構わないよ。……しかしコージー、アダ名が2つもあるとややこしくて面倒じゃない？ 今後は俺もきよぼん呼びに変えよっか？」

「お前は今後ともコージー呼びで頼む。女子からでも大概恥ずかしいのに、男子からそう呼ばれるのはちよつと耐えられそうにない」

「どうか本条はそういうの全然躊躇わないんだな……体育祭のときのアレといい、どんな心臓してるんだ？」

「無尽蔵の自己肯定感さえあれば、周りの評価などに左右されないものだよ三宅君。六助とかもそうでしょ？」

「……お前と高円寺が仲良くやれている理由が何となくわかった気がする」

うーむ……予想以上に打ち解け過ぎてしまったかな？ コージーを除く4人の内、幸村君と佐倉ちゃんはまあギリギリ合格ラインとして、他の2人は正直欠片も興味が湧かない。

でもさっきの口振りからして今後もこの『ルビカンテ』を拠点にするみたいだし、とりあえず仲良くしておくに越したことは無いかな？ 無いよね？ うん、無いってきめた。

「あ、あの……清隆君は、ク、クリスマスの予定とか入ってるの？」

脳内で今後の方針を定めていると突然佐倉ちゃんが、このタイミグだと人によつて

は告白とも取られかねない質問を投げかけた。

「うわ愛里、きよぼんを誘ってるの？ だいたーん」

「ち、違うよ、そういうのじゃなくて！……違うからね!？」

「などと容疑者は供述しておりますが、長谷部氏はいったいどう思われますか？」

「そうですねきりぼん氏、きよぼん氏はいっ先程フリーであると述べたばかりですので、

これはもう誘っていると見て間違いないでしょう」

「お前ら打ち合わせでもしたのか……？」

「だからそうじゃなくってえ！……ほら、その、一人でクリスマスを過ごすとき、何をしてるのか気になったからっ」

わざわざ眼を使わずとも嘘だと断定できるくらいの慌てっぷりだが、流石に可哀想なのでこれ以上は追求しないでおくか。

「なるほど確かに少し気になるかも。みやっちは部活として、ゆきむーは？」

「俺は勉強してるだろうな。これからは追うだけでなく追われる立場にもなるし、クラスに学力の低い生徒も多い。運動で役に立てない分、学力では牽引していききたい」

「そこまで勉強する努力は俺には無理だな……任せたぜ啓誠」

「任せるのはいいがな明人、もしAクラスで卒業できても地力が無ければ自滅するだけだぞ」

「逆に言えば俺のように地力があれば、B以下で卒業しようがどうとでもなる」

「確かに本条なら実際どうにかなりそうだな……けどそれじゃ、Aクラスで卒業する意味って薄くなるよな」

三宅君は何やら不満そうだが、俺から言わせればAクラスの恩恵なんてものをあてにする方が間違ってる。人生とは自らの手で切り開くものだし、もし彼等が俺や有栖を蹴落とせるだけの実力を身に付けたなら、尚更国の補助輪なんて必要無い。

「それで、愛里が気にしてるきよぼんは？クリスマスはやっぱり1人？」

「多分そうだな。特にすることも無いし、部屋でおとなしくしてるんじゃないか？」

「やること無くて暇ならチクタクバンバンでも貸そうか？」

ちよつとした親切心で、以前ネットで注文したブーツを懐から取り出してコージーに手渡す。

「……ちよつと気になるから借りておこう」

「なんで持ち歩いてるんだそんな古いオモチャ……」

やだなあ、ちよつとしたお茶目心じゃないか。

「折角集まったんだし、皆で晩御飯食べて帰ろうよ。あ、きりぼんもどう？」

「誘ってくれてありがたいけどごめんね、基本的に外食はしない主義なんだ。それじゃあ皆、また近い内に会おうね」

そう言って懐から花束——チョイスした花は友情を意味するアイリス——を放り投げて全員の視界を塞ぎ、花が全て地面に落ちる頃には姿を消しているという、最近習得したマジックを披露する。造花にはメアドが書かれたメモを添えておいたし、いい感じにミステリアス感を残しつつ退場できたぜ。

……それにしても、マスミンも気の毒な子だなあ。多分有栖の指示でコージーを尾行してたんだろうけど、たぶん全部バレてるよねアレ。

綾小路先生

その後も『ルビカンテ』にてコージー達の集まり……通称綾小路グループと幾度かエンカウントした。なんでも人が少ないし待ち合わせ場所に都合が良いらしい。植物をこよなく愛する俺としては、この施設がそんなハチ公みたいな扱いをされることにやや複雑な思いだが、まあ大して意味が無さそうなのにコージーを尾行させられているマスマンに免じて見逃してやろう。

しかし彼等のCクラスに対する愚痴りようからして、リウンケルはDクラスに潜む黒幕に対して本格的に絞り込み始めたようだ。Cクラスの生徒達はリウンケルの指示でDクラスの生徒をずっと監視しているみたいだが、おそらくそれはフェイク……好機と見るや否やリウンケルはコージーに対して本命の攻撃を行うだろう。

有栖は有栖で何やらみやびん会長と接触して、正解ちやんを追い詰める準備をしているみたいだし、3学期になる頃にはクラス間の勢力図が大きく変動していることだろうね。

「その君。すまないがちよつといいかね？」

「ふむ？俺ですか？」

「そう、君だ」

ある日の昼休み。いつものように決まりきった食事を決まりきったペースで食べ終えた俺は、適当にメンバーを集めてキックベースでもしようかなと思っていたところで、スーツを着た40代くらいの男性に声をかけられた。

「応接室に用があるのだが、どこにあるのか教えてもらっても構わないか？」

「ああ、そうなんですか。口で説明するのも面倒なんで直接案内しますよ」

「わざわざすまんな」

「いえいえ、困ったときは助け合おうのが人情です」

おじさん先導しつつ思考を巡らせる。

見かけない顔だ。少なくともこの敷地内で会ったことは1度たりともない。……が、身に纏うその雰囲気はどこことなく友人の1人と重なる。

それに加えてこの人の鋭い眼光は、桁外れに強い意志と信念を宿している。身体を視る限り運動能力は凡庸そのものだが、片時たりとも警戒を解いてはならないと俺の本能が告げている。表面上の能力よりも心の強さを重視し、またそれを見抜くことが特技であり趣味である俺をして……これまで会ってきた人々とは比べ物にならない程に抜きん出ていると断言できる。この人はたとえどんな障害が立ち塞がろうと、またどれだけの犠牲を払おうとも歩みを止めることは決してないだろう。そしてこの特徴もその友人と若干重なる。

……ふむ、少し興が乗ったな。

「ところでおじさん、1つ聞きたいことがあるんすけど」

「別に構わんよ。何を聞きたい？」

歩きながら周りに聞き耳を立てている人がいないか、あえて大きさに確認してから俺は極力小さな声で尋ねた。

「綾小路清隆を連れ戻しに来たんですか？ ホワイトルームの責任者さん」

瞬間、空間が軋んだかと錯覚するくらい凄まじい重圧が俺の身にのし掛かった。おお

すげえ……気の弱い人なら卒倒しかねないほどの高密度のプレッシャーだ。

「……誰から私のことを聞いた？」

「おや、しらばつくないんすか？」

「その単語を知ってる以上隠す意味は無い。それよりも何故お前が私を知っていることの方が重要だ。両親に聞いたという訳ではないだろう？ 奴等はどこまで行っても中途半端な人間だ、私の機嫌を損ねるような大それたことはできまい」

おやまあ、急に尊大な態度になったね。

「件の施設についてのざっくりした概要と、彼の父親がその施設の責任者だつてことは有栖が教えてくれました」

「有栖……ああ、坂柳の娘か。しかしその娘は私と顔を合わせたことは無い筈だが？」

「別に確実な根拠があった訳じゃないんすよ。アンタの心拍、意識の波長……そして目的のためなら手段を選ばない鉄の意志に既視感を感じたんで、ちよいとカマかけただけです」

「……成程。話に聞いていた通り、とても本条と八神の間に生まれた子とは思えんな。その極めて特異な眼を抜きにしても、この平和ボケした国でぬくぬくと育つたとは思えない、強靱な精神を持っているようだ」

何やら満足したように頷くコージーパピー。いつの間にか圧も弱まっている。思え

ば死ぬほど警戒心が強いところもそっくりだな。

「いずれ勧誘するつもりだったが、この際丁度いいだろう。……本条桐葉、私と共に来い。お前がいれば予定よりも早く計画の遅れを取り戻せるだろう」

「……それはつまりこの学校を退学して、そのホワイトルームって施設で働けと？」

「色々と教育を施す必要もあるが、当面はそうなるな。だが清隆ははずれ私を超え、この国を動かしていく存在になるだろう。そのときお前にはあいつの右腕となつてもらふつもりだ」

六助といいこのオジサンといい、なんでどいつもこいつも俺の進路を勝手に決めるたがるかね……だけどそれもまた面白い。

「申し訳無いけど、丁重にお断りさせてもらいます。所詮俺はまだ一介の高校生だし、この学校でやるべきことも残ってますので」

「バカバカしい。お前ほどの逸材がこんな所で何を学ぶというのだ。はつきり言つて時間の無駄だろう」

「ほう、アンタの下でならここよりも有意義に過ごせると？」

「私の用意する道以上のものなど、この世には存在しない」

「そうまではずきり断言するとは、中々面白い方ですね……そこまで言うなら一つ勝負をしませんか？」

「……何？」

ああ、もう駄目だ。

この間有栖から話半分で聞いた内容が真実なら、この人は決して怒らせてはいけない人種だ。気分を損ねてしまえば、俺ではなく俺の周りに危害が及ぶ。しつかりした後ろ盾のある有栖はともかく、俺の家族を破滅させることなど赤子の手を捻るよりも容易いだろう。そしてそれを躊躇うような倫理感を持ち合わせていないときた。

危険だとわかつているのに、本能が絶えず警鐘を鳴らしているというのに……ああ駄目だ、挑んでみたいという欲求が止まらない。どうしても好奇心を抑えきれない！

「あなたの本来の目的は、清隆君を連れて帰ることですよね？彼とはこの半年多少なりとも親交があったのである程度予想はできますが、残念ながら彼が了承することは無いでしょう」

「あいつが拒否しようが関係無い。親である私がそれを希望する以上、学校側は直ちに遂行する義務がある」

「まあ普通の高校ならそうなんでしょうけど、果たしてそう上手くことが運びますかね？アンタの息子は徹底したりアリストだ。そう簡単に連れ戻されるなら、初めからこんな袋小路には逃げ込まないでしょう」

綾小路。パピーは俺の推測に肯定も否定もしなかったが、半年以上経つてようやく接触

してきたことからしてほぼ間違いないだろう。この人はとても大きな権力を持つてるようだが、少なくともこの学校に対して好き放題できる程のものではない。

「清隆がどれだけ反抗しようとするかは結果は変わらん。自分の意志でここを去るか、私の手で強制的に去るかの違いでしかない」

「でしようね。彼がこの学校に守られているというのなら、学校が彼を庇いたてられなくすればいい……つまり何かしらの介入をして、彼を退学処分追い込もうとするでしょうね」

「できればそんな無駄な労力は払いたくないが、最悪の場合はそうすることも視野には入れている」

「俺の持ちかける勝負つてのは、まあそういうことです。……どうしても俺をスカウトしたいなら、力づくで奪い取ってみろやオッサン」

暗に退学させられるものならやってみると、あえてわざと挑発的な口調でそう告げると、刃のように鋭い瞳で射抜かれる。……俺がもう少しまともな人間だったらさぞや身が竦んでいたことだろう。しばらく睨み合った末、やがて綾小路パイパーは薄く笑った。

「たかが15の若造が、よもやこの私に勝負を挑んでくるとはな。……まあいい。私がお前に求めるものは主にその唯一無二の眼と、極めて特異な精神構造の2つ。多少無駄な時間を過ごそうが特に支障も無いだろう」

「おや、俺の勝負を引き受けてはくれないんすか？」

「お前の予想した通り、清隆があくまで私に逆らうというなら検討だけはしておこう」
「なるほど、それじゃあ楽しみにしてますよ。……おつ、見えてきた。あそこが応接室ですよ。それじゃあ俺はこれで」

仲良く談笑している内に目的地に辿り着いたので、俺は教室へ戻るため踵を返す。我輩の辞書に遅刻の文字は無いのだ。

「最後に1つだけ忠告しておく。過ぎた好奇心はいずれ己を滅ぼすぞ」

「それならそれで別に構わないっすよ。どれだけ危険だろうと何もせず無難にやり過ぎず俺なんてありえない。飽くなき好奇心こそが俺のアイデンティティですから」

「——とまあ、そんな感じのやりとりがあった訳よ」

「アホですか貴方は」

みやびん会長との悪だくみがようやく済んだのか、放課後久し振りに一緒に下校している有栖に昼休みの出来事を話し終えるや否や、深い溜め息とともに罵倒された。なん
でや。

「彼のお父様がどれだけ危険な人物なのかは、この前ちゃんと教えた筈ですよ？ なの
になんで躊躇いもなく喧嘩を売ってるんですか？ 好戦的にも程があります」

「いやお前にだけは好戦的とか言われたくねーよ。……だいたい体育祭でのコージーと
のやりとりからして、お前 ホワイト W ボールとやらに否定的なんだろう？」

「ホワイトルームです。ええ、確かに私はあの施設を絶対に認めることはできません」

自らの才能に絶対の自信を持つ有栖ならば、環境さえ整えれば凡人が天才を凌駕する
なんて考えは意地でも叩き潰そうとするだろう。

「つまり有栖は遅かれ早かれあの人と敵対する運命にあるわけだ。……だったら配下で
ある俺が喧嘩売っても問題無くね？」

「大有りですよバカなんですか？ わざわざ自分から地雷を踏みに行かなくてもいいで
しょうに……」

「好奇心の為せる業」

「疑つてどうもすみませんでした、貴方は紛れもないバカです。……もしその方が貴方を退学させようと本腰を入れたらどうするつもりですか？」

「勿論自力で対処できるならそうするけど……もしやばくなったら頼りになる有栖ちゃんに助けてもらおっかな？」

「……………まったく、調子が良いんですから」

再び呆れたように溜め息をついてはいるが、内心満更でも無いことを隠しきれてないぞ有栖。

俺はなまじー人で何でもできるので人に頼ることが滅多になく、それは有栖に対しても例外ではない。だからたまにこうしておねだりすると、眼を使う必要が無いくらいあからさまにソワソワし始める。うん、可愛い。

「ところで話は変わるけどさ、正解ちゃんを追い詰める算段はついたの？みやびん会長にあれこれ接触していたみたいだけどさ」

「ええ、彼女の決定的な弱味は手中に収めました。丁度今週の日曜日に貴方がセツティングしてくれた一之瀬さんとの話し合いですので、握った情報が真実かどうか彼女本人を揺さぶって確かめようと思います」

「ふーん………で、真実なら即攻撃を始める」と

「その予定でしたが、今の貴方の話を聞いて少し予定を変更しようと考えています」

ふむ？……ああ、そういうやコージも卍解ちゃんとは仲が良かったつけ。

「あの子を壊すのはやめて、コージを釣り出す餌にしようってわけか」

「ええ、綾小路君のお父様はいずれはこの学校にも何らかの干渉を行ってくる筈。そう
なれば彼もその対処に迫われ、私と戦っている余裕など無くなるでしょう」

「どういう訳か有栖は、コージの平穩を乱すことを避けている節がある。手段を選ば
なければコージが戦わざるを得ない状況に追い込むことも不可能では無い筈だが、あ
くまでコージの意思で自分の挑戦を受けてくれるよう誘導しようとしている。」

話を聞く限りホワイトルームとやらは倫理的に相当アレな施設らしいし、そこで実験
動物のように育てられたコージに何か思うところがあるのかもしれない。確かに有
栖は真性のサディストで性格も悪いが、だからと言って血も涙も無い外道というわけ
はないのだ。

「この学校のルールに則って彼を退学させようとするなら、おそらく来年の新入生に刺
客を紛れ込ませると思われまます。ですのでそれまでには、彼と戦う約束を取り付けなけ
ればなりませんね」

「とはいえコージは今リユニケル達Cクラスの対処で忙しそうだ。まあ最近の彼らの
動きようからして、2学期のうちにはケリが付きそうだけど」

「となれば3学期に入ってから、入念な下準備のもと攻撃を仕掛けようと思います」

「ぶーん……話を聞く限り俺の出番はどうやらなさそうだし、精々楽しませてもらうとするさ」

緻密な謀略に基づく作戦を行う際には、有栖はあまり俺を頼ってこない。すぐ飽きちやうし、そのときの気分次第で適当に引つ掻き回すとわかっているからだ。

真つ当な人間ならこうして毒牙にかかろうとしている正解ちゃんを助けるべきなんだろうが……残念ながら彼女は有栖より優先順位が低いし、特に止めようとも思わない。

そんな俺の考えを誰かが聞けば人でなしだと俺を非難するだろうが、実際わざわざ自発的に助ける価値も無いのだから仕方ないじゃないか。おそらく彼女ではどうなるうが、

たとえ目の前で惨たらしく殺されようが、俺の心が揺れることはきつとありはしないのだから。

ドラゴンボーイ（笑）

土曜日の夜、この地方に初雪が観測されたというニュースが流れた。まあほんのちよつとしか降らなかつたようで、朝方にはもう溶けてしまつていたのだが。せつかく雪だるまを作れるかもと内心ワクワクしていたというのに……おのれ温暖化め。

ちなみに休みの日は大抵有栖と仲良く遊んでいるのだが、今日あの子は正解ちやんと親睦を深める（笑）予定が入っている。そういう日は適当にどこかのグループにちやつかり紛れ込んで暇を潰すことにしている。今回も例に違わずケヤキモールをぶらついで獲物を探していると、ボウリング場付近でケン坊、池君、山内君の通称Dクラス三バカトリオに出くわした。この呼び方聞いたときも思つたけど、三とトリオで意味被つてもうてるやんけ。

友好的なケン坊とは対照的に池君と山内君は露骨に敵意を向けてきたが、奢るからボウリングでもどうかと誘つたらあつさり手の平を返して友好的になつた。Dクラスだから懐にあまり余裕無いんだらうけど、だからと言つて現金過ぎやしませんかね君達。……で、案の定ケン坊にどちらが高いスコアを取るか勝負を挑まれた。うんうん実に

男の子してるね君は、そういうの嫌いじゃないよ。

俺の眼には確実にストライクとなるコースがはつきりと見えているので、それを目掛けて転がせば容易にパーフェクトを狙える……が、それでは何が面白いのかわからない作業になってしまうので、ボウリングをするときは転がす直前に両目を瞑るとい縛りを課すことにしている。舐めプと言われれば否定はできないが、金払ってる以上は俺にも楽しむ権利があると思うんだ。

そんなこんなで最終フレームを終え。池君と山内君はそれぞれ115、108とパツとしないスコア、ケン坊は俺に挑んできただけのこととはあり236と中々の成績。で、俺はというと……

「はっはっは、惜しかったなケン坊」

「大して惜しくねえだろイヤミかコラ!？」

「268つてお前……」

「逆に何ができないんだよこいつ……?」

「俺だつて苦手なことぐらいいあるよ。例えば金魚掬いとか」

アイツら俺がポイを持って近づくと、蜘蛛の子を散らしたように物凄い必死で逃げるのだ。どうにか頑張つて掬つても30分くらいすればストレスか何かで皆死んでしまうのだ。掬えるけど救えないのだ。

「……ところでケン坊、最近Cクラスの子達にしつこく絡まれてるらしいけど大丈夫なの？」

「だからケン坊はやめろ!!……まあ確かにムカつくけど大したことはねえよ。猿だのバカだの、ガキみたいな挑発をワンパターンに繰り返してくるだけだ。……思い出したらやっぱムカついてきたぜあのクソ龍園……!」

「十分効いてるじゃん。リユンケルに対してストレスが溜まつてるならさ、彼が交通事故とかで惨たらしく死ぬところを想像してみ? スツとするから」

「いやしねえよ!! お前涼しい顔してなんて猟奇的な提案してくんだよ! 普段そんなことしてんのか……!?!」

「いや適当に思い付いただけけど。ああでもこの方法使うなら誰にもカミングアウトしちやダメだよ? 間違いなく危険人物認定されるから」

「今まさに俺達がお前を認定したところだよ!」

ちよつと興が乗つたのでケン坊を好き放題振り回していると、池君と山内君が何やら何とも言えない表情でこちらを見てくる。

「ほ、本条つて思つてたのとキャラ違うんだな……」

「ああ……女子に人気あるらしいから、てつきりどうせ平田みたいないけすかないイケメン野郎だとばかり……」

「クラスメイトに対して随分な言いようだね山内君……でもまあこの通り、俺は平田君とは似ても似つかない性格だよ。君達のクラスでなら、六助に近いんじゃないかな？」

「六助って……高円寺のことだよな？」

「前から気になってたんだけどよ本条……お前なんであの自己中野郎と仲良くできんだよ？ある意味龍園よりムカつく奴だぞアイツは」

「俺はクラスが違うから特に実害は受けてないしね。それにある程度ゆとりを持って接したら結構愉快な奴だよ？」

友人として形だけでもフォロワーしておいたが、ケン坊達は明らかに納得がいかない様子だった。……普段彼がどれだけ好き放題してるのかがよくわかるね。

終業式目前の日の放課後、何やらDクラスの教室付近がやけに騒々しいので、有栖が側近兼使いっぱしりの橋本に何があったか事情を聞きにいかせたとこ、リユニケルを

含むCクラス荒事担当の5人がホームルーム直後に教室に乗り込んできたかと思えば、さっさと帰宅した六助を追跡しているらしいとのこと……いや、どゆこと？なんで六助？

「龍園君の意図は不明ですが……中々面白そうですね。桐葉、少し見物しに行きましよう」

「はいはい、相変わらず揉め事とか大好きだね君」

俺は携帯お馴染みスマートフォンの位置情報サービスを用いて六助の位置を割り出し、有栖を抱えながら向かうと、六助は寮の近くにある並木道の休憩スペースにて荒くれ者集団に取り囲まれていた。カツアゲの現場みたいだね。

ちなみにDクラスのホリリン、ケン坊、三宅君、幸村君、コージも居合わせていた。コージがいるってことは……やっぱり少し遠くの方に面倒そうなマスマンもいたよ。今日もお疲れ様です。

「はいピピー。世界の平和を守る会参上」

「胡散臭いことこの上無いからやめなさい。……随分と面白そうな集まりですね龍園君」

「坂柳と本条か……ハッ、まるで計ったようなタイミングで湧いて出やがったな」

あたかも偶々出くわしましたみたいな態度を取る有栖だが、リユンケルは1ミリも信

じない。まあ当然と言えば当然の反応だが、湧いて出たってなんだよ。人をゴキブリみたいに言いよってからに。

「それにしても錚々たるメンバーですね。クリスマスパーティーのご相談でもなさっていたのですか？」

リユンケルがクリスマスパーティー……似合わないってもんじゃないね。想像するだけで笑えてくる。

「お呼びじゃねえんだよ、引つ込んでろ」

「つれないですね、パーティーの人数は多い方が面白いですよ？ 私達もお仲間に加えていただけませんか？」

「……邪魔したらただじゃおかねえぞ」

「心配せずとも、主催者の顔に泥を塗るような真似は致しませんよ」

そう言うのと有栖は俺の手を引いてリユンケル達から少し距離を取り、休憩スペースのベンチに腰を下ろす。……流石有栖、隙あらば茶々入れてやろうとしたのに未然に防がれちゃった。

「私も暇じゃないんでね、そろそろ話を進めてもらえるかな？ そうでないなら帰らせてもらおうよ」

「そいつは悪かったな高円寺。それじゃあそろそろ本題に入るとするか」

「やれやれ、仕方がないねえ。……どうやら君はCクラスの邪魔になる者、もしくは他クラスをまとめる者を倒すことに躍起になってるみたいだね？」

「そうだな。目障りな人間は全てぶっ潰す」

「そしてDクラスから君を邪魔する正体不明の存在を知り、それが誰なのかをどうにかして突き止めたがっている」

へえ……唯我独尊を地でいく男が、随分とリユニケルについて詳しいじゃないか。

「そういうことだ」

「だったら私が絡まれる理由は無いですねえ。私はクラスの行く末など正直どうでもいいし、これまでの試験でも特に何かを成してきたつもりはない」

「そいつはおかしな話だな。干支試験でのことはどう説明する？しらばっくれでもネタは上がってるんだよ」

「おやおや、随分と物知りだねえ」

干支試験で確か六助は橋本と同じ猿グループで、話し合い1日目でDクラスの誰か（まあまず間違いなく六助だが）が優待者を密告し結果3となった。……視た限りリユニケルは確実な証拠を掴んでいたわけではないようだが、六助は彼の指摘を否定しなかった。

「だがあの試験についても、別にクラスに貢献しようとしたわけではないからねえ。面

倒な集まりに何度も参加する気になれなかったから、さっさと終わらせて自由の身になっただけさ」

「だったら干支試験以外にも参加していた可能性もあるってことじゃねえか。つまりお前がDクラスを支配していないって保証はどこにもねえんだよ」

「ふむ、確かにそうなるが……そう結論付けるならば、所詮君はその程度の間抜けということにもなるねえ」

どこまでも不遜な六助に石崎君が突つかかろうとするが、リユンケルは笑ってそれを引き止める。……ふむふむなるほど。こんなに因縁つけているのに、どうやら彼は六助が黒幕だとは微塵も思っていないようだね。

「クク、つまりテメエは俺の障害にならない存在ということか」

「オフコース、その通りさ。物分かりが良いのは嫌いじゃないよドラゴンボーイ」

こゝら有栖、笑っちゃ失礼でしょ。俺も我慢してるんだから君も堪えなさいまったく。

「なら俺がコイツらにテメエをリンチさせたらどうする？干支試験の逆恨みで、何の利もない無意味な暴力で支配しようとしたら？」

「それはまた実にナンセンスな質問だが……もし君がその選択を選ぶのなら私は身を守るため、向かってくる者を全員ノックアウトすることになるだろうねえ」

「テメエ一人で俺達全員に勝てるか？」

「勝てない理由はどこにもないねえ」

石崎君あたりは大いに不満そうだけど妥当な判断だね。六助を暴力で振じ伏せるとなると、俺でもかなり手を焼きそうだ。

「……どうやらテメエじゃないようだな。俺が追っている奴は、俺と似た思考回路を持つ狂った人間だ。テメエも狂っちゃいるが方向性が全然違う」

「誤解が解けたようで何よりだよ」

「最後に1つ聞かせろ高円寺。テメエじゃないのなら誰だ？ 間抜け面でノコノコついてきたこの中にいるのか？」

なるほど、明らかに違うと確信しているのに今回六助に詰め寄ったのは、探してる黒幕が焦って尻尾を出させるためか。……黒幕を頭がキレる人間だと考えてる以上成功するとは思っておらず、半分以上はただの精神的嫌がらせなんだろうけど。

「ふむふむ、中々面白い話をされてますね。ドラゴンボーイ・リUNKELさんが正体を隠しているDクラスの誰かを血眼になって探しているという噂は聞き及んでいましたが、はたして本当のことなのでしょうか」

「黙つてると言つた筈だ坂柳。それと次そのふざけた合体ネームで俺を呼べば殺すぞ」

「ふふ、どうやらお気に召さないようですね。……話を戻しますがこの学校のクラス間闘争においては、暗躍することも立派な戦術の内でしょう？ 1度や2度Dクラスに遅れ

を取ったからといって、こうして無関係な方々を巻き込んでまで暴こうとするのは見苦しいだけですよ?」

「確かに俺の計画を狂わされたがな、裏でコソコソ動いて俺の邪魔をしている奴は、どんな手を使ってでも引き摺り出すだけだ」

「だとすれば見苦しい上に無能ですね。桐葉から聞き及んだ限りの情報を整理すれば、無人島での貴方の失態に高円寺君が無関係であることは明白な筈では?そもそもDクラスで正体を隠している方とは本当に実在するのですか? 貴方が堀北鈴音さんに負けたのが信じられなくて、都合の良い妄想に取りつかれているのでは?」

あーあ、また始まったよ……。

実情をわかりにわかってるくせに、無意味な挑発をし始める有栖は生粋の狂犬属性だと思う。獲物であるコージをリユンケルに奪われないため攪乱しようとした……とかろうじて言い訳できなくもないかと思っただが、リユンケルがコージに勝てるとは微塵も思っていないだろうし、とどのつまり単なる嫌がらせなんだろう。言ったら2人とも怒るだろうから言わないけど、こいつら似た者同士だね。

売り言葉に買い言葉でリユンケルも無人島試験でAとCが結んだ契約を引き合いに出して有栖を間抜け呼ばわりするが、有栖は有栖で全てランスが勝手にやったことだと、言い分は間違っていないが悪徳政治家みたいに責任逃れして気にもとめない。

……突つついたところで不毛だとお互いわかつてるだろうに、君達そんなに争うのが好きか。ほら、六助も呆れてるよ。

「どうやら君達はじゃれ合いが好きなようだねえ。別に気のすむまでやつてくれで構わないが、私は失礼させてもらうよ。これ以上私の貴重な時間を無駄にされたくはない」
「待てよ高円寺、まだお前の答えを聞いていないぜ」

「Dクラスの中で頭のキレる存在、だったかな？正直考えたこともなかったが……君がリスクを冒してでも追い求めているなら、どちらにせよ私は答えない方が良いのじゃないかい？君の楽しみを奪うような無粋な真似はしたくないしねえ。……私はここで青春を謳歌している。唯一認めた友と競い、美しき女性たちと恋に落ち、互いを高め合う。そして己の美を追求し続ける。それが私のスタンスさ」

「つまり、お前はクラスの抗争には関わらないと？」

「マイフレンド桐葉が相手なら戦うのも吝かではないが、そうでないならそのつもりさ。はつきり言つて君達では退屈なのだよ」

「なんだと!?龍園さん、コイツさつきから俺達のこと舐めてますよ!」

リユンケル石の舎弟崎その君1が怒りの炎を燃やすが、それがライターに思えるほどの業火が有栖の胸の内に宿つたみたいだ。……フレンドだというならあまりウチの負けず嫌いお嬢様を刺激しないでくれよ。

「やや聞き捨てなりませんね。ドラゴンボーイ・リUNKERさんはともかくとして——」
有栖がそう発言しかけた直後、リUNKERがこちらに距離を詰め有栖の顔に遠慮なく蹴りを繰り出してきたので、とりあえず俺も足で受け止めておく。ケン坊に負けず劣らず血の気が多いね君も。

「おいおい何考えてんだドラゴンボーイ・リUNKER——深緑の墓地」
グレイブヤード

「コナンのサブタイトルみたいなんまで追加すんじゃないやねえ。俺はもう一度呼んだら殺すといったはずだぜ？」

俺に対してもお構い無しに暴行を加えてくるが、全て眼で見切つて捌いていく。彼の身体能力では未来を視る俺を捉えることなどできないし、先に体力が尽きるの多分リUNKERの方だろう。

「いい加減にしなさい龍園君。これ以上暴力行為を続けるなら学校に報告させてもらうわ」

しかしホリリンが横槍を入れたことで、リUNKERは鬱陶しそうに舌打ちしながらも矛を収める。余計な手間が省けて助かったぜ。

「ごめんなさい龍園君、からかいが過ぎましたね」

「まったくだぜ。有栖は三色ボールペンより弱っちいんだから、ヤンキー上がり刺激すんなよな」

「とうとう無機物以下になり下がりましたか怒りますよ?……話を戻しますが私も含めて退屈、とはどういうことなのでしょう?」

「私の言葉が気に障ったようだねリトルガール」

あ、それ禁句。

「クク、リトルガールか。なかなか良いネーミングセンスじゃねえか」

「高円寺君、貴方英語の使い方を誤ってますよ? 私は幼女ではありません」

「ふっふっふ、それを決めるのは君ではなく私さ。君がガールと呼ぶにふさわしい年齢と体型になればそう呼ばせてもらうのだがねえ」

「えっ、年齢はともかく体型も? じゃあ未来永劫リトルガールじゃん」

思ったことをそのまま口にしたら、案の定杖で脛を思いつきりドツかれた。ごめん有栖、ここで火に油を注がない俺は俺じゃないんだ。

「Aクラスに用はねえ、今はすっこんでろ」

「彼の言動、その訂正くらいはさせて貰えませんか」

「ふふふ、私を巡っての争いは悪いものではないがねえ。我が友という例外はいるが、基本的に私は年上には興味が無いんだよ」

有栖もリユンケルも優秀な人間だが、六助の非常識さに上手く付き合うにはゆとりが必要だ。二人とも無駄に血の気が多いからだからこうして振り回されることになる。

「……もういい。お前はさっさと片づけておいてよかったようだ。さっさと行け」

付き合うだけ徒労だと言うやく悟ったのか、結局これといった進展は何一つするなくリユンケルは六助を解放する。

「終わった？ 終わったよね？ よし帰るよ有栖」

「え、ちよっ—」

有無を言わず有栖をお姫様抱っこしてその場を離脱する。六助が自分の発言を撤回するとは思えないし、リユンケルと同じ空間にいたらいつまでも喧嘩し続けるに決まってる。いい加減もう飽きた。

……しかしあのときのリユンケル、ひたすらコージと幸村君だけに意識が向いていたね。

探っている黒幕をコージ達のグループの誰かに搾り込んでいるなら、三宅君がアウトオブ眼中なのは不自然だ。そうなるとあの2人だけの共通点といえば……千支試験で同じグループだったことかな。なんで外村君を外したのかは不明だけどリユンケルはあの2人を黒幕、もしくは黒幕の持ち駒だと確信している。

実際探してる黒幕はコージなわけだしその推理は正しいんだろうけど、では何故リユンケルがコージの尻尾を掴みかけてるのだろうか？ 正直彼が既にあそこまで核心に迫りつつあるとは思わなかったな。

うーん……今から手がかりを苦勞して集め直すのは億劫だし、ちよつとずるいけど眼で拾い集めた手がかりから逆算して考えてみるか。となると……

……あれ？これって……

あ、ヤバい。

このままだと近いうちに、軽井沢ちゃんがりユンケルの毒牙にかかる。

……ならば俺はどうしよつか。

興味の無い子がどんな目に遭おうが知ったことじゃないと言えばそれまでだけど、こ

うして色々と推測した上で何もしいとなると、何だか時間を無駄にしたような気がして少し癪だな……となるとここは当事者のコージに密告して何とかしてもらおうとするか。

そう思つて彼にこのままだと軽井沢ちゃんがピンチだとメールを送ると、すぐに返信が返つてきた。

『問題無い。全て予定通りだから、余計なことをしないでくれると助かる』

……うーむ。このメールをどう判断するべきか。

軽井沢ちゃんを助ける算段が既についてるのか、ここで彼女を見捨てるつもりなのか……それとも彼女は、リUNKELを潰すための餌なのか。

……余計なことすんなと釘を刺してくるあたり、3つ目っぽいなあ。

ドラゴンボーイ……

「以上でホームルームを終了とする。冬休み中も当校の生徒、そしてAクラスとしての自覚を持ち節度を守って過ごすように」

担任の真嶋先生がそう締め括る。

とうとう2学期も終業式を迎えた。この日は午前中で授業が終わり、さらに部活動も休みであるため校内に残る生徒はほとんどいないだろう。……リユンケルが軽井沢ちゃんに何かを仕掛けるとすれば多分この日かな。

コージー曰く問題ないらしいしそもそも軽井沢ちゃんから助けを求められた訳でもないから、わざわざ俺が首を突っ込む必要もないし放置でいいよね。すまない軽井沢ちゃん、コージーが君にとつての白馬の王子様になってくれることを陰ながら願っておくよ。

「さて、特に用事も無いですし帰りましようか」

「あ、ごめん有栖。図書館に『世紀末探偵1』返却しに行かないと」

「……そのシリーズ小説、ミステリーとしての完成度は下の下という評判だった気がし

ますが」

「終盤で犯人は実は地球外生命体だと判明したりするからね。……だけど有栖ならわかるでしょ？ミステリー小説は多少カオスなくらいが一番楽しめる」

「……まあ否定しませんが。では私は桐葉についていくので、真澄さん達は各自ご自由に下校してください」

有栖にそう言われるや否や、マスミンは光よりちよつと遅いくらいの速さで帰り支度を済ませ、別れの挨拶すらせずさっさと教室を出ていった。あんなバイタリテイの溢れるマスミン久々に見たな。

「……有栖さあ、ここ最近ちよつとマスミンをこき使い過ぎなんじゃね？」

「どうやらそのようですね。おそらく綾小路君にも気づかれていますし、そろそろ尾行の任を解きましようか」

いやマジで何のために尾行させてたんだろうねこの子。日頃のコージの振る舞いからして有益な情報なんて手に入らないのは一目瞭然だし、そもそもすぐバレてるんじゃないの意味も……ああなるほど、マスミンとコージの接点を作っておくことが目的か。

「最初から正解ちゃんは餌にするつもりだったってことね」

「ふふ、ご想像にお任せします」

ここまで回りくどい根回しをすると、この子よっぽどコージーと全力で戦いたいようだね。それと卍解ちゃんを追い詰めることに何の因果関係があるかはまだわからないけど……まあ有栖なら上手いことやり返すだろう。俺は口を挟まず事の経過を楽しんで見物していればいい。

図書館についた俺は返却手続きをする前に、この小説の続きを借りるべくミステリーコーナーへ向かう。長期休暇中は一度に借りられる量がいつもより多くなるし、返却期限も普段より長くなるので、館内には結構な人ばかりができています。人ごみが苦手な有栖は外で待つてるとのことだが、だったら教室で待つてればよかつたじゃないかあの寂しん坊め。

「あの……」

「んあ？」

『世紀末探偵』の2～10巻を本棚から手に取っていると、隣にいた銀髪の少女に声をかけられた。

Cクラスの椎名ひよりちゃん。髪色や言葉遣いなどからどこもなく有栖と似た少女だが、あの子と違って別に好戦的なわけではない。それどころかクラス間の争い自体に興味があるかすら疑わしく、極めて内向的で暇さえあれば図書館に通っているほどの生粋の文学少女だ。何度か図書館で擦れ違ったけど、こうして話しかけてきたことは初めてであるため、俺も少なからず驚いている。

「差し出がましいかもしれませんが本条君……そのシリーズはミステリー小説としては、あまりおすすめでできる内容ではありませんよ？」

「うん知ってる、だからこの本を選んだんだ。あいにくと真つ当なミステリーほど楽しいめないタチで」

「と、申しますと？」

「椎名ちゃんミステリーが好きなら、『ノックスの十戒』については知ってるよね？」

ノックスの十戒……イギリスの推理作家、ロナルド・ノックスが1928年に提唱した、推理小説を書く上で守るべき10のルール。

犯人は物語の始めに登場させること、探偵方法に超能力を用いないこと、犯行現場に秘密の抜け穴・通路が2つ以上作らないこと……まあ総じて、謎を解く材料は全部読者

に提示しておくべきという訓戒だ。

「ええ、勿論です。ミステリー小説を読み手に謎を解かせるゲームと考えるならば、作家も最低限守らなければならぬルールがあるという考えですね」

「残念ながらそのフェアプレー精神が守られている小説は、トリックが早々にわかっちゃうから退屈なんだ」

だいたい半分くらい読み進めた頃には犯人が特定できちゃうし、散りばめられた伏線は全て想定通りの回収のされ方をする。万人が驚くようなどんでん返しも全て予定調和に感じてサプライズ感ゼロ。だからこそ俺は多少駄作でも意外性のある小説を好んで読む。十戒？知らん、大いに逸脱したまえ。

「なるほど、それならば……少しお待ちください」

彼女の要求通り少し待っていると、本棚から本を3冊ほど取り出して俺に差し出した。きた。

「お待たせしました。トリックがすぐにわかってつまらないなら、少し趣向を変えてこういうのはどうでしょう？」

「んー？……フランシス・アイルズの『殺意』、リチャード・ハルの『伯母殺人事件』、それとF・W・クロフツの『クロイドン発12時30分』か」

「倒叙ミステリと呼ばれるジャンルです。何も犯人を暴くだけがミステリーではありま

せん」

たしかこれらは全て主人公が犯人の小説だったつけ。ふむ……ミステリーの肝がトリックではなく心理戦にあるなら、俺や有栖でも十分楽しめるだろう。中々悪くない着眼点だ。

「それじゃせっかくだから借りておくよ。わざわざアドバイスありがとね」

「いえいえ。……それでよろしければ今度感想を聞かせて貰えないでしょうか？」

「ん、別に構わないよ。……ところでCクラスは今日勝負を仕掛けるみたいだけど、図書館でのほんとしていいの？」

「たしかに龍園君は何かを企んでいるようでしたが、私は元々争い事には興味が無いので」

へえ……少し興が乗ったので本来極秘な筈のリュンケルの計画について指摘してみたけど、一切動揺することなく自分の知ったことではないと言い切ったね。もし俺が学校側にリークしたりすれば、クラスポイントが大幅に減らされるかもしれないのに。

六助のようにクラスメイトのことなどどうとも思っていない、という雰囲気でもないし……もしかして俺が特に関知しないことを読み切っていたりして。そうだとすればこの子は、リュンケルより厄介で恐ろしくて興味深い存在にもなり得るかもね。

「ふーん、そっか。でもまあ変な因縁つけられないよう気をつけてねピヨリン。君達の

クラスって色々と恨みを買ひ易い立場だし」

「お氣遣い感謝します。……ピヨリン？」

「話してみたら結構面白い子だったから、とりあえず友好の印にアダ名をと。……嫌だった？」

「そんなことはありません、私も本条君とお友達になれて嬉しいです。……では私も何かアダ名で呼んだ方がよろしいでしょうか？」

「氣持ちは嬉しいけど名字でお願い。周りの人に二股野郎とか思われちゃう」

俺がアダ名で呼ぶ分にはもう誰も氣にも留めないだろうし、長谷部ちゃんみたいに仲のいい人皆アダ名呼びなら特に問題は無かった。しかしおそらくピヨリンは友達が少なく、大概の相手には名字呼びの中俺だけアダ名で呼ばれてるとなれば、確実に色々と良くない誤解を生むだろう。あと有栖が拗ねる。可愛いけど面倒だ。

やんわりと拒否すると目に見えて落ちこんじゃったので、呼び方で距離を詰めた氣になつてもそれはまやかしだとか何とかで上手いこと言いくるめて、またお薦めの小説があつたら教えて欲しいと言つて機嫌を直してから、本を借りて図書館を後にした。少々天然入つてたけど、高校生にしては随分と邪氣の無い子だったなあ。

……結局待たせ過ぎたせいで有栖が拗ねちゃったんだけどね。完全に忘れてたのは正直すまんかったと思つてる。

冬休み1日目の早朝8時。

今日は昼から有栖の部屋にて皆でクトウルフの新シナリオをプレイする約束があるので、朝の内にトレーニングを済ませておこう。前回は他3人の苛烈な妨害のせいで神話生物が降臨しなかったから、今日こそは世界を混沌に沈めてやるから覚悟するがよい。

「……ってあれ？リユンケルと伊吹ちゃん？」

走り込みをしていると、300mほど向こうの並木道で2人が何やら言い争っていた。それだけなら大して珍しい光景出もないが、やけにリユンケルがボロボロなのと、伊吹ちゃんの今にも凍えそうな様子が少々気になる。

好奇心に駆られてそちらに向かう途中、なんと伊吹ちゃんはリユンケルを殴り倒した。

「あー……これでスッキリした。辞めるならさっさと辞める、私はもう知らない」

スツキリしたと言いつつ何やら複雑な表情を浮かべつつ、寒さに体を震わせながら伊吹ちゃんを寮に戻っていった。うーむ……あっちも気になるけど、今は倒れたまま動かないリユンケルを助け起こそうかな。

「大丈夫？ 酷いことするねあの子も」

「本条か……最後の最後に会いたくもねえ面を拝ませやがって……」

「大丈夫？ 立てる？」

善意で手を差し伸べるが案の定無視され、リユンケルは自力で起き上がった。ただしその動きは非常に緩慢で、俺をはたいた力も非常に弱々しい。

「その様子だと手酷くやられたみたいだね。しかしコージも容赦無いな」

「ちっ……やっぱテメエ全部知ってやがったな」

「全部は知らないよ。俺や六助と同等かそれ以上の身体能力の持ち主なのはわかってたけど、まさか戦闘技術も超一流とはね」

「まるで現場を見ていたかのような口ぶりじゃねえか。もしや隠れて覗き見でもしてたのか？」

「そんなことしなくても今の君を視ればわかるよ。全身に隙間無くかなりのダメージが入っているけど、その一方で骨は1つたりとも折れてなさそうだ。時間をかければ痣や後遺症が残ることなく全て完治するだろう。……人体の構造を熟知していなければそ

んな痛めつけ方はできない筈だよ」

「……クク、最早オカルトの域だな。ただ見ただけでそこまでわかんのかよ」

「これでも世界一眼が良いと自負してるからね」

「坂柳だけじゃ力不足だろうが……テメエもいるならあの野郎も倒せるかもな。見届けられねえのが少し残念だが……まあ精々頑張りな」

そう言うとりュンケルは俺に背を向け、足を引きずりながら学校へと向かう。彼が部活動なんて爽やかなものに取り組む筈も無いし、彼の口ぶりからしてこの学校を辞めるつもりなんだろう。

「リベンジしなくていいの？君は1回や2回の負けで挫折はしないだろう？」

「テメエにはしらばっくくれても無駄だろうから教えてやる。暴君が許されるのは成果を出している間だけだ。勝利に導けないどころかアキレス腱に成り下がった以上、もう誰も俺にはついてこねえだろうな。だったらもう全てどうでもいい」

……なるほど。敗北しただけでなく、何かしらの方法でコージーに弱味を握られたのか。それもリュンケル一人の首では済まない、Cクラスにとって致命的とも言える程の弱味を。

「二応聞いておくが、俺がこれまで集めたポイントをテメエにくれてやろうか？伊吹の奴にでも渡そうとしたがアイツが拒否した以上、このままだと死に金だ」

「いらぬよ、たかだか数百万のはした金。ただでさえ多過ぎて持て余してるのに」
「……ククク。断られるだろうとは思っていたが、まさか数百万をはした金扱いとはな。どうやら綾小路の言う通り、俺は戦う順番を間違えたらしい」

何やら意味深な捨て台詞を残して去っていくリユンケルの背を見送りながら、俺は思考を巡らせる。

この短いやり取りの中で、俺は一つの確信を得た。

リユンケルがコージーに対して、微かながら恐怖を感じている。

一方的にボコボコにされたのだから普通ならば当たり前なのだが、彼に限っては普通の俺が当てはまらない。

おそらくリユンケルは生まれてきて一度も恐怖を感じたことがなかった。というのも俺の視てきた限り彼がこれまでの試験でハイリスクな戦術を取るときも、心に一辺たりとも揺らぎが無かったからだ。普通なら失敗したらどうしようとか、多かれ少なかれ不安になるのが人間であり、心の強さとはそれらの恐怖を乗り越える力を持つことを指す。

だからリユンケルがコージーに恐怖を感じたことに対して、俺は軽蔑もしないし失望

もしない。むしろそれは彼が人としてあるべきものを取り戻せた証拠なのだから祝福すべきことなのだろう。

そして、だからこそ彼がリタイアしてしまうのは残念でならない。その恐怖は彼が大きく成長できる兆しでもあるのだから。

……その一方で、この事實は俺にとつても大きな収穫だった。俺が抱える問題は彼よりもずっと根深いものだが、それでもようやく解決する糸口が見えてきた。

俺は必ず、失ったものを取り戻してみせる。

……程なくして、Cクラスの石崎君が革命を成功させたという噂が1年生全体に広まった。

結局リユニケルは退学しなかったが、完全に孤立し日陰者になったそうだ。

……コージはこういう意図で、どんな手段で彼の退学を引き止めたのかね？

7 卷 エ ピ ロ ー グ

〔side:綾小路父〕

まったく……あの忌々しい連中の妨害による施設中断の影響もそうだが、松雄の愚行がよもやここまで私の計画に支障をきたすとはな。

くだらない反抗期を迎えおつて清隆の奴め……あのような烏合の衆に混じることに何の意味があるというのだ。不要なものをいくら学んだところで時間の無駄だということに。いずれホワイトルームの、ひいてはこの国の主導者となる自覚に欠けている証拠だ。

まあいい、抵抗するなら無理矢理連れ戻すまでだ。あいつはどうやらあの学校に圧力をかけても無駄だと高を括っているらしく、忌々しいことにそれはある程度の射ている。政府がバックにいる以上、今の私ではあまり強引な手法は取ることができない。

……だがあの学校が磐石の守りとして機能するには、坂柳がトップの座にいることが前提となる。少々危ない橋を渡ることになるが奴を一時的にも経営から退かせてしまえば、清隆を退学に追い込むことも可能になるだろう。万全を期すためには坂柳を完全に失脚させてしまうのが一番だろうが、そう容易く葬れるほど奴は甘い相手ではない。

でつち上げの不祥事では精々停職に追い込むのが限界だろう。

だが私の権力を十全に使えば、理事長代理に私の息のかかった者を据えるくらいのこととはできるだろう。その者が清隆を退学に追い込めるのならそれでよし、手こずりそうなら来年の新入生に刺客として五期生の成績優秀者を送り込む。清隆という前例がある以上理事長の権限があれば1く2人くらいはねじ込めるだろうし、教師側と生徒側の二方向から追い込めば、いかに清隆が最高傑作といえど一生徒でしかない以上切り抜かれまい。

となるといったい誰を送り込むべきか……とりあえず奴は確定だ。

八神拓也

本条桐夜と八神涼香を親に持つ試験管ベビーであり、五期生の中で……それどころか清隆を除けば歴代トップの成績を叩き出した逸材。あの凡庸な2人の遺伝子を受け継いで生まれたことから、人間の能力は才能ではなく環境によって決まるというホワイトルームの理念を体現している。

そして担当している職員から、唯一自身を上回る成績である清隆に対して並々ならぬ憎悪と対抗心を抱いているという報告が上がってある。ならば自尊心を煽った上で放り込めば、嬉々として清隆を退学に追い込もうとするだろう。

問題は憎悪が暴走するあまり清隆を殺そうとする可能性があることだが……まあ良

かろう。そんな短絡的な手段に不覚を取るようでは、奴は最高傑作などと呼ばれてはいない。そう易々と殺されるような半端な教育を施した覚えはない。

……不安要素があるとすれば、むしろ奴の存在だろうな。

本条桐葉

本当にあの両親と血が繋がっているのかと疑いたくなるほどの傑物。多少裕福だが平凡な環境で育った筈なのに身体能力はほとんどのホワイトルーム生を凌駕し、ともすれば清隆にも匹敵しかねない才能の権化。後天的な教育では決して習得することができないオンリーワンの才能を複数持つ、生まれながらの絶対強者。

血縁上では弟である拓也とは正反対に、ホワイトルームの理念を覆しかねない存在だ。

……しかしだからこそ、清隆が桐葉と手を組む可能性は限りなく低いと考えていいだろう。清隆にはどんな手を使ってでも己の勝利を、己が生き残ることを最優先に考えろと徹底的に教育を施した。些細な反抗期程度でそれを違えることはありえない……自らを脅かしかねない能力を持つ存在を、奴が信用する筈がないだろう。

……だがもし、もしも清隆と桐葉が何らかの理由で手を組んでしまったら……そのときは計画の大幅な変更を余儀なくされるかもしれない。

となれば桐葉を退学させるのは少なくとも、万全を期すために本命である清隆を退学

させてからになる。遺憾ながら生まれながらの天才である奴にホワイトルームの教育など不必要だろうし、そもそも清隆の右腕として私が奴を推す最大の理由は、誰よりも優れた眼とその極めて特異な精神構造にある。極論2〜3年遊ばしたところで何の支障も無い以上、しばらく泳がせておいても問題は無い。

だがいずれ奴も気づくことになる……私の用意した道を歩むことが正しい選択だとな。

【side：綾小路清隆】

色々と不安要素もあつたが、どうにか計画通りに事を運ぶことができた。これでCクラスには最低限の警戒だけしていればよくなるだろう。

軽井沢にしてみればさぞや災難続きの数カ月だっただろう。些細なトラブルから生

じた真鍋達による虐められ、オレを暴き出す目的で行われた龍園達に虐められる。過去のトラウマに土足で踏み入れられ、挙げ句の果てにはその全てがオレの仕組んだマツチポンプであると突きつけられたのだ。心の弱い者なら精神が崩壊してもおかしくなかった。

……しかし軽井沢は過去の呪縛を乗り越えた。裏切ったオレの正体を最後まで龍園に吐くことなく、これまで築いた地位と引き換えにしても最後までオレという宿り木から離れなかった。この先もオレが存在する限り、軽井沢の心が砕けることは決してない。

素早く助けることで確実に軽井沢を依存させるという手もあつたが、それでは軽井沢の価値を正しく測り切ることがない。最初の段階であえて助けるのをギリギリまで引つ張ることで、オレも軽井沢がそう簡単に裏切らない駒だと信じることができた。……仮にもし吐いていればそれはそれで、『罪悪感』という首輪をつけることができるので問題無かつたがな。

先日父親が来訪したことで、これまで退学を盾にAクラスを目指すようオレを脅迫していた茶柱の嘘が発覚した。Dクラスがこれだけの健闘をしている今、堀北や啓誠と同じかそれ以上にAクラスに上がることに固執しているあの教師に、クラスから退学者を出す勇氣はないだろう。

当初は利用できないならオレを道連れにする覚悟があつたかもしれない。だからオレは父親とのつながりに対して半信半疑ながらも、100%嘘だと断ずることができなかった。オレは本条のように特異な眼を持つてゐるわけではないし、1%でも不安要素があるなら警戒心を解くなど他でもないあの男から教わつたからな。

しかしオレがいなくともAクラスに上がれる余地のある今、希望を捨てることなどできなくなり、退学をちらつかせてオレに対して命令する力は完全に失われたといえる。

普通の学生として3年間過ごすことが目標であるオレにしてみれば、これ以上クラスへの深入りは余計な面倒ごとにつながるだけだ。茶柱に従いつつどうにかオレが介入しなくても他クラスと渡り合つていけるように、クラスの地力を向上させるよう根回ししていたが、その必要も今日無くなつた。

まだ利用価値がある故に手を回して自主退学することは防いだが、龍園という脅威は一旦取り除いた。一之瀬もオレの能力に興味を抱いている節があるが、今フェードアウトに成功すればすぐに興味を失つてくれるだろう。

そして坂柳に関しては……奴のオレへの対抗心など正直知つたことではないが、こちらの平穩を乱さないよう準備と配慮をするのであれば、1度くらいなら受けて立つても構わないと考えている。

だがすぐには承諾せず、しばらくは興味が無い姿勢を貫く。それで興味を失つてくれ

るならそれで構わないし、それでも執着してくるのなら条件を提示する。

その条件は……勝負でオレが勝てば、本条にオレの平穩を守るために協力させること。

本条桐葉はオレにとって天敵に近い存在だ。オレはあいつに対してまるで打つ手が無いと言つても過言ではない。

その桁外れの能力と実績故に直接ぶつかればオレに対して確実に周りの注目が集まってしまうし、策略を用いないため自滅するよう誘導することもできず、第三者をけしかけようがあつさりと見抜かれるだろう。

しかしその一方であいつを駒として扱えるのなら、その有用性は堀北や軽井沢などとは比べ物にならない。

あの男はオレを連れ戻すため、近い内に何らかの手を打ってくるだろう。そのときに備えて軽井沢という駒を手放さないでおいたが、あの男に逆らう以上万全を期すに越したことはない。

本条はかなり早い段階でオレの能力に気づいていたようだが、オレの意思を尊重してクラスのリーダーである坂柳にさえも限界まで黙ってくれていたことから、人格面も9割方信用できる。それでも僅かな不安要素が残ってしまうが、教師を立ち合いに契約を結べば反故にされることもないだろう。

本条の極めて特異な眼にはオレも強く興味を引き付けられたんだ。あの男が知れば確実に本条も手に入れようとするだろう。友人を俺の問題に巻き込むことには少し抵抗はあるが……仕方がない。どんな犠牲を払おうとも、最後に勝つてさえいればそれでいいのだから。

……あいつらは本当に俺を葬れるのだろうか。俺が抱える虚しい矛盾を、あの男の掲げる野望を……ぶっ壊してくれるだろうか。

Aクラスの殺伐としたクリスマススイブ

12月24日、クリスマス・イブの早朝4時。

冬休みだからといって当然生活習慣を乱したりはしない。今日もいつものようにノルマをこなした後、朝食をテーブルに並べた頃に有栖が目を擦りながら杖をついてのそのそと起きてきた。……冬休みが始まった途端ごく自然にまた同じ布団で寝るようになったことに関しては、多分もうツツコンではいけないのだろう。

「おはよー有栖」

「おはようございませう桐葉。それと……」

有栖は俺に近づき既に着席している俺の頬に手を添えたかと思えば、なんか唐突に唇にキスしてきた。

「誕生日おめでとうございませう」

「ん、ありがと。でも唐突に唇奪うのはやめてね。いきなりされたら俺でもビツクリしちゃう」

「おや、それはおかしな話ですね。貴方の眼は未来を視ることができるとはでしょう？嫌

ならどうとでも抵抗できた筈ですが?」

「ははは、何が言いたいのかわかりませんな」

俺は生粋の草食系男子。

両想いとはいえまだ交際してもいない体の清い女の子を布団に連れ込んだり、ましてや唇を貪るなんてはしたない真似などできる筈もない。桐葉君はモラルや倫理を重んじるのだ。

……だがしかし思春期まつさかりの有栖が何かしらアクションを起こしてきたなら、俺は別に拒否とかはせずそのまま受け入れる。というより拒否とかできない。

仲睦まじい関係を築いているとはいえ、俺と有栖は将と兵、主人と従者、肉食と草食……明確な上下関係が存在しているのだ。まだ完全な決着がついていないとはいえとりあえずは有栖の下につくと決めた以上、従属関係を覆すような行動は避けなくてはならない。だから俺は有栖に逆らえないし、求められれば拒否するわけにはいかないのだ。

……実は有栖がキスしてくれたり添い寝してくれたりするのが嬉しくて、何かいい感じにそれっぽい理屈を並びたててどうにか正当化しようとしている、とかでは断じてないことをここに宣言する。

「誤魔化しても無駄ですよ。貴方ほどではないにしろ私も嘘を見抜くのは得意なんです

から。正直に答えてください……私にキスされてどうでしたか？」

「めつちや幸せな気分になりました。なんだつたらもつとねちつくく貪られ続けたいです」

「ふふ、正直によく言えました♪(褒美です♪)」

有栖の仕掛けた高度な誘導尋問にまんまとひつかかった俺は、非常に上機嫌になった有栖になすがまま口内を蹂躪される。

「ごめんなさい嘘つきました。ほんととは長期休暇特有の頭のネジが緩んだ有栖による、ちよつぱり過激なアプローチの1つ1つが愛おしかったりします。」

いやだつて仕方なくない？ 言い訳させてもらえるならさ、俺の立場で考えてみてよ全国男性諸君。大好きな女の子がなんか唐突にキスしてきたり添い寝してくれたりして、果たしてノーと拒絶することができますかね？

少なくとも俺は無理です。どちらかと言えば襲うより襲われる方が好きだから尚更無理です。いやまあ男としてどうなんだと自分でも少しは思わなくもないけども、有栖は性格上間違いないく襲う方が好きな超肉食系だろうから、丁度良いといえば丁度良いじゃないか。

有栖も一応は淑女だから流石に交際前に一線を越えようとはしないだろうし、とりあえずはされるがままでも問題無い。無いよね？ 無いって決めた。

結局、哀れな草食動物は恐ろしい獣におよそ30分くらいひたすらしゃぶり尽くされてしまうのでした。いや確かにねちっこく責められたいとは言ったけどさ、そこまで執拗にやるかね普通……。

そんなこんなで朝の9時。いい感じに雪が降り積もっており、辺り一面見渡す限り銀世界へと様変わりする中、この間六助とリユンケル達が揉めていた休憩スペースにて、1年Aクラスの生徒30人ちよいが集結していた。

「第1回、Aクラス雪合戦バトルウウウウー！」

いえーいとハイテンションに拳を振り上げるが、有栖を含む何人かが拍手をしてくれるのみで、ほとんどがレスポンスに困っている有り様だった。せつかくのクリスマスだってのにノリが悪いね君達。

「……えつと本条、どういうことだよ？俺達姫様がクリパ開くって聞いて来たんだけど」「それに関しては有栖がちゃんと準備しているし、夕方の5時頃から『ルビカンテ』を貸

し切って開催するので安心したまえ。……イブの日だし恋人と過ごす奴もいるだろうから正直そこまで集まらねーだろうなと思ってたのに、まさか予定がガラガラの奴がこんなにいるとは思わなくてちよつとビビった」

「「ほつとけ!」」

来てないのは戸塚にランス（有栖が企画したパーティーとか、自由参加なら来るわけねーよな）、里中と司城（あのイケメンコンビの予定が空く訳も無し）、あと山村ちゃん
の計5人か……そりゃ俺達Aクラスは他クラスからは親の敵のように敵視されてもおかしくないし、クラス内ではこれまで有栖とランスどちらを支持するかで散々いがみ合ったりしてきたけどさ、それにしたって独り身率9割なのは華の高校生としてどうよ？

「まあそれはともかくとして……とりあえず周りを見てみなさいよ橋本。これだけ見事に雪が積もったんだよ？これは俺達に雪合戦しろという神の啓示と言っても過言ではない」

「いや過言だろ!?!ただ単にお前が雪合戦したくて呼びつけただけだろ!」

「ええいやかましい、貴様らに拒否権などない。何故なら俺は今日誕生日だからな。誕生日の人は周りの人間を自分の都合で好き放題振り回しても許される権利が発生するのだ」

「その持論にもツツコミ処は山ほどあるが、お前普段から割と俺達を好き放題振り回してるよな!」

あーあー、聞こえない。自分に不都合な意見になんか聞く耳持たない。

既に何人かの空気読めない連中が帰ったそうになっているが、俺は気にも留めず足下の雪を丸める。冬休みだからってだらしないなあ……大幅に予定を変更することになるけど仕方ない、多少強引にでもちよつと気を引き締めてもらおうか。

「それじゃあルールを説明するからちやんと聞くように。それから有栖、ちよつとこつちに来て」

「? どうしたのですか桐」

バシャアアンツ!!

不思議に思いながらも無警戒にノコノコ近寄って来た有栖の顔に、俺は丸めた雪玉を思いつきりぶつけた。ごめんね有栖、ついやっちゃった☆

「?!!?!」

クラスメイト達は有栖を崇拜している者、内心気にくわないと思ってる者、残忍きわまりない性格に恐怖心を抱いている者等様々だが、それら全員が例外無く言葉を失っ

た。特に最後のカテゴリーに分類される子は、今にも気絶しそうなほど顔色が悪くなっ
ちやつてる。

「……ふふ、ふふふふ。桐葉、どういうつもりか説明して頂けますよね?」

ぶつけられた勢いで地面に落ちたトレードマークのベレー帽を拾って被り直しなが
らそう尋ねてくる有栖は、いつものように微笑みながらも目はまったく笑っていない、
そして言葉遣いこそ丁寧であるものの「覚悟はできてるんだろ? なあ、アテムエ」と心の声
が聞こえてきそう。やっという何だか怒ったらむっちや怖いねこの子。

「制限時間は正午まで。チーム分けは俺VSその他34人。今からこの激オコ有栖ちや
んの指示に従って団結し、今やったみたいに俺に一撃でもぶち当てられたらそっちの勝
ちだ。はいルール説明終わり! それじゃあ頑張つてね有栖、応援してる」

(俺が)より楽しめるよう入念に作戦を練つてから攻めてきてほしいので、言うこと全部
言い終えた後はさっさとその場を立ち去る。

さあ有栖、たまには思いつきり喧嘩しようぜ。毎回毎回仲良しこよしじゃマンネリだ
ろ?

さっきの場所から少し離れた並木道にて、せつせと雪玉を丸めながら皆が攻めてくるのを静かに待つ。コソコソ隠れたところで俺はクラスの結構な人数と友達登録を済ませるので、毎度お馴染み携帯のストーカー機能ですぐに位置を割り出されるだろう。そもそも隠れてやり過ぎすなど退屈極まりない。俺はさぞや怒り狂ってるであろう有栖の考えた、それはもうえげつない戦術を思う存分楽しみたいのだ。

「っ、本条がいたぞ！取り囲め！」

町田の号令と共に11人が俺をぐるりと取り囲んだ。全部視えてるのに妨害もせず待つてやっつたんだ。ひたすらがむしやらに雪玉を投げまくるだけ、なんてつまらねー戦法は取らないでくれよーオイ待て貴様ら。その手に持つてる空き缶がいっぱい入った袋は何だ？

「「食らえええええええ！」」

「ちよっ、おまつ……!?!」

学友達は後ろ手に隠し持っていた袋から空き缶を取り出し、俺目掛けてバンバン投擲してきやがった。投げるタイミングも飛んでくる空き缶の軌道も全部視えてるので余

裕で避けられるけどさ、当たったら結構痛いんだぞ？

「オメーらなんつーもん投げてきやがる。雪合戦はどこいったよ雪合戦は」

「いや俺らもおかしいとは思うけどよ……雪玉以外をぶち当ててはいけないルールなど無い、というのが坂柳の見解らしい」

空き缶なんてぶつけられても負けにはならないけど、逆に言えば何度ぶつけられても勝負が終わらない。つまりこういう指示を出すことは、よっぽど俺を痛い目に遭わせたがってる訳で……

「わーお、有栖ちゃん予想以上にキレてる」

「そりゃキレるわあんなことしたらー！」

今更ながらちよつと罪悪感が湧いてきたが、だからと言ってこのままやられてやるつもりも無い。空き缶による弾幕攻撃を躲しながら、あらかじめ作っておいた雪玉を堅実に1人ずつ顔面にぶち当てていく。

「ぐわっ!？」

「へぶうっ!？」

無事全員仕留めたので俺は懐からごみ袋を取り出し、散乱した空き缶を回収していく。まったく、好き放題散らかしやがってわんぱく坊主共め。

「ぬうううううおおおおっ!？」

遠くの方からファルコンが空き缶を投げってきたがひとまず無視。彼の鍛え抜かれた強肩により、とんでもないスピードで空き缶がこちらに飛んでくるが……残念ながら俺から5mほど離れた木に激突した。

「ノーコンの君がそんな遠くから当てられる訳ないだろうに……」

呆れつつ空き缶を回収している間に、何を思ったのかファルコンは俺に背を向け一目散に逃げていった。

ふむ……

まあいいか。

俺は空き缶を詰めた袋を背負いながら、逃げるファルコンを追跡する。

空き缶が大量に入った袋に、色々と仕込んでいるせいで実はすごく重いスーツ等、複数のハンデを抱えながら学年でもそこそこ速い方のファルコンを追いかけるのは結構骨が折れたが、そろそろ俺の雪玉射程圏内に――

「うおつとあぶね」

咄嗟にしゃがむことで飛来したBB弾を躰し、同時に別の角度から飛んできたBB弾は空き缶袋ではたき落とす。

飛んできた二方向に目をやると、およそ50m先からマスマンと橋本がそれぞれがエアガンを構えていた。もうなんでもありだね君達。少しは雪も投げてこいよ。

それにスナイパーは不意を討ってなんぼだよ？こうして位置を把握できたらじつくり近づいて……

……あ、詰んでるわこれ。

いつの間にか残りの20人があちこちの物陰から、1人1人エアガンを構えながら姿を現した。

俺の眼ならその気になれば10km先にいようが余裕で捕捉できるが、流石に遮蔽物に遮られては見落としてもする。……完全に対策を立ててきたね。

そしていくら未来が視えようが、流石に20もの方向から一斉に撃たれては避けることも防ぐことも難しい。スーツ内に仕込んである道具を駆使すればどうにか切り抜かれるだろうけど、俺まで好き勝手しだしたらいよいよ雪合戦ではなくなってしまう。

さてどうしようかと悩んでると……有栖が物陰から満面の笑みを浮かべながら、左手で杖をつきつつ右手に雪玉を握りしめながら無警戒にこちらへ向かってくる。

試しにしゃがんで雪を掴もうとすれば、引き金に添えられた20人の人差し指に力が入った……はいはい、抵抗すると蜂の巣にすることね。

そうこうしている内に、有栖は俺の目と鼻の先まで接近してきた。この子を盾に活用

すれば切り抜けられなくもないけど……流石にそれはあまりに無粋だよね。

「チエックメイト、ですね」

「そうだね。……一応聞くけど、土下座して謝るから許してくれない？」

「ダメです♪受けた苦しみと屈辱はちゃんとお返するのが私の流儀なので」

「ですよー。……それじゃどうぞ自由ー」

言い終わらない内に、顔面に雪玉を叩きつけられた。フィジカル弱者の有栖が投げたものなので大して強くはなかったが、ここは見映えを意識してあえて勢いよく後ろに倒れる。エンターティナーの悲しい性だぜ全く。

「さて桐葉、何か言いたいことがあるなら今なら聞いてあげますよ？」

「参りました有栖様。意地悪してごめんなさい、深く反省しています」

「はい、許してあげます♪」

午後5時。前もってポイントで交渉して貸し切っておいた植物庭園『ルビカント』に

て、有栖主催のパーティが開かれた。Aクラスを維持できたことを祝して、そして来年度も過酷なクラス争いを勝ち抜くための英気を養うため……と、建前はそんなところだ。

「それで有栖、どうするの？」

ジュースで乾杯を済ませた後、各々が用意された御馳走（まあ全部俺が作った料理だけど、腕によりをかけたと自負している）に群がる中、気になっていることを有栖に尋ねる。

「？ どうする、とは？」

「いやほら、朝にやった雪合戦対決で俺がめでたく完全敗北を喫したわけじゃん？ 長きに渡る俺とお前の戦いに終止符が打たれたと考えちゃっていいのかな？」

「冗談じゃありませんよ。あんな私に有利過ぎる条件で勝っても全然嬉しくありません。……貴方との決着は言い訳の余地の無い、完膚無きまでの勝利でなくては何の意味もありませんから」

「そうかい。相変わらず潔癖症だね君も」

その高潔さを尊いと思いつつも、同時にちよつと面倒臭いなあとか思っちゃったり。

「桐葉にだけは言われたくありませんよ。……そもそも貴方、最初から負けるつもりだったでしょう？」

「ふむ、どうしてそう思うんだい？」

「あんな見え見えの囃作戦に貴方が引つ掛かるわけが無いでしょう。不自然に逃げる鬼頭君に無警戒についてきた時点で、今回桐葉には勝つ気が無いと気づきました」

「あーりやりや……まあ流石にバレルよね」

今回有栖に喧嘩売った時点で最終的にボッコボコにされることは予め決めていたけど、向こうが雪じゃなく空き缶を投げてきた辺りで何か違うなど感じちゃって、もうさつさとケリをつけてもらおうという方向にシフトしちゃった。

「おかげで入念に考えた作戦が8つほど使わず仕舞いになりましたよ。……どうして負けるつもりだったのか伺ってもよろしいですか？」

なんだそんなことか。別にわざと負けて有栖の不安要素を取り除いてやりたいとか、そういう狙いがあった訳では断じてない。今回俺が負ける気満々だった理由はただ1つ……。

「いやだつてさ……女の子の顔面に雪玉思いつきりぶち当てておいて、何のお咎めも無しとかありえないでしょ普通に考えて。……有栖さん頬をつねらないでください、痛いっす」

「だつたら初めからやらないでくださいアホなんですか貴方は？」

好奇心には勝てないんだよ。

クリスマスデート（という名の総集編）

「今年ももう終わりだね」

「月日が経つのは早いものですね」

12月25日、クリスマス。

ケヤキモール辺りでは多分めでたくカップルになった子達や、それに近い関係の子達で溢れかえっているだろうけど、そんな混雑した場所に体の弱い有栖を連れていくのは気が引けるため今日は1日お家デートの予定だ。

「しかしアレだね、心なしか年をとるごとにどんどん1年過ぎるのが早くなっている気がするよね。この調子じゃ年寄りになる頃には音速で一年が過ぎちゃうかも」

「縁起でもないこと言わないでください。要はそれだけ充実した1年を送ったということじゃないですか」

「ふむ、そういう解釈もありっちゃありか。……よし、いい機会だからこの学校に入ってからの出来事を振り返ってはいかがか」

「……………」

「おろろ？ 不服なの有栖ちゃん」

「……別に構いませんが、クリスマスにすることがそれですか」

「えー？ それじゃあ本来熱帯地域に生息するポインセチアが、ただ色合いだけでクリスマスの代名詞みたいに扱われることが、はたして正しいのかについて議論しよつか？」

「これまでの出来事を振り返りましょう。貴方に植物を語らせたら日が暮れてしまいません」

「ありやいや、それは残念……とところでもうこの体勢やめていい？ いい加減飽きちゃった」

俺は有栖を膝の上に乗せつつ、後ろから抱き締めた状態……所謂あすなろ抱きの体勢のまま、かれこれ2時間が経過しようとしている。なんでも「女の子がされたら恥ずかしいけど、一度はされてみたい抱きしめ方ランキング第1位」らしく、やり始めた最初ら辺は有栖も顔を林檎のように真っ赤にしてすごく可愛かったけど、もう慣れたのか今はすごくリラックスした様子だ。これはこれで癒されるが、じつとしているのはあまり好きじゃないのでそろそろどいてほしい。あと性的に意識しないよう我慢するのも楽じゃないし。

「ダメです。今日はクリスマスなんですから、少しくらい甘えさせてください」

「クリスマス関係なく最近結構頻繁に甘えてきてるよね君」

「何か言いましたか？」

「イチゴ牛乳に使われる着色料って実は虫の体液らしいよ？」

「クリスマスマードを粉微塵にしかねない雑学を披露しないでくださいぶん殴りますよ？」

「なるほどなるほど。それじゃあ殴るためには、俺の膝から一旦どく必要があるよねえ」

「……いじわる」

頬を膨らませ拗ねたように顔を背ける有栖。そのあざとい仕草にまんまとハートを射抜かれた俺は彼女をぎゅっと抱き締めながら、耳元で思いの丈を囁く。

「意地悪してごめんね。有栖ちゃん大好き」

「つゝゝゝ……どうして毎度毎度私だけが一方的に恥ずかしい思いをしなくちゃならないんですかっ。不公平ですっ」

膨れっ面のまま真っ赤に染まっちゃって、いよいよ林檎みたいだね有栖。よし、ジョナゴールドモードと命名しよう。あと俺が羞恥心を投げ捨てられるのは、生まれつきなんだからどうしようもない。

しかし夏休み辺りから加速度的に魅力的になってるねこの子。体型はまるで成長してないのに大したものだ。

「桐葉？ たった今何か極めて失礼なことを考えてましたよね？」

「はて、皆目見当もつきませんな」
女の勤ってすごい。

「それじゃあまず、自己紹介にて俺のエンターテイメントが炸裂した入学式の日から順に振り返っていきましょうか」

「冷静に考えてみればキザッたらしいにも程がありますけどね。……ところであの頃の貴方はことあるごとに、その人にピッタリの造花を配ってましたけど、最近だと全然していませんね」

「ああアレ？もう飽きた。造花いちいち買い揃えるのも結構面倒だし」
「ああそうですか……」

そもそもあれは初対面でその人の本質にどれだけ近づけるかが醍醐味だ。既にある程度仲を深めてから渡したところで、別に面白くもなんともない。

「しかし真嶋先生の仰ったこの学校についての説明には、明らかに不自然な点が多々あったにもかかわらず、ほとんどの人は支給された10万ポイントに浮かれて見落とし

ていましたね」

「毎月支給されるポイントが変動することと教室に、仕掛けられた監視カメラに気づいたのが、俺とお前を除けばランスだけだったってのも悲しい話だよな」

その時点でランスがクラス内で頭角を現してくるのは容易に予想できたので、超好戦的かつ決して誰にも従わないことが信条の有栖と対立するのは規定事項だった。加えて5月初頭の真嶋先生によるSシステムの詳細な説明から、格下クラスよりは同クラスのランスの方がまだ楽しめるだろうと判断し、クラスが真つ二つに分かれるよう誘導した……のだけど、

「今思えばとんでもない判断ミスをしたと後悔しています。他クラスには葛城君などよりも私を楽しませてくれる方がいっぱいいましたのに……」

「ポイントを使って夏休みに有栖が参加できない特別試験があると知ってたから、途中からはむしろランスの派閥の勢力を削がないよう細心の注意を払う必要があったよね」
「まったく、敵対している相手に丁重に扱われてるようじゃ話になりませんよ」

ランスの派閥にケチが付き始めたのは、生徒会入りを元会長に断られたあたりだろうな。元会長さんはランスがみやびん先輩に同調してしまうのを危惧して断つたらしいけど、何とも余計なことをしてくれたものだよ。みやびん先輩がランスの後ろ楯になっていれば、有栖ももう少し楽しめただろうに。

「……そういえば桐葉はこの頃には既に、綾小路君と親しかったんですよ。自分だけずるいです」

「仕方ねーじゃん本人から口止めされてたんだから」

それにあの頃のコージは事無かれ主義を自称し、争いごとには微塵も興味が無さそうだった。過去に色々要因縁があることもまだ知らなかったし、思考回路が世紀末霸王な有栖が興味を持つ相手ではないと判断しても仕方ないだろう。

「そして迎えた2つの特別試験では、対抗馬である私が不参加ということもあり葛城君が全体の指揮を取り……ものの見事に大敗を喫してくれたそうですね」

「何かすげー他人事だけど、派閥メンバーに色々裏工作を指示してたの知ってたからね？」

「結果的に杞憂でしたけどね。私の干渉が無かったところで、葛城君では龍園君や綾小路君には勝てません」

無人島試験でランスはリユンケルと、Aクラスを支援する代わりにCクラスに毎月プライベートポイントポイントを振り込む契約を結んでしまった。リユンケルは当然用意した契約内容の穴を突いてAクラスを攻撃し、さらにこの頃から何故か陰ながらAクラスを指し始めた節のあるコージからも攻撃され、その結果Aクラスは3位というしよっぱい結果に終わった。リユンケルとの協定で毎月プライベートポイントを搾取されるよ

うになったこともあり、ランスの求心力は大いに低下してしまう。

しかし続いている干支試験でも指揮を取ったランスは、手柄を立てて名誉を挽回することよりも、あくまでリスクの少ない堅実な作戦を貫いた。当初は彼に失望もしたけど、後にランスが自身の地位よりもクラスメイトと己の信念を優先したと知り考えを改めたっけ。……まあでも結局リユンケルに食い散らかされてしまったんだけどね。ランスの作戦も別に悪くなかったけど、世の中堅実にやっても大失敗することだってある。「ちなみにコージーは干支試験では、軽井沢ちゃんを手駒にするために色々と画策してたっぼいよ?」

「軽井沢さんを……なるほど、女子グループをまとめ上げる人材を調達したのですね」
「だろうね」

常に自分が頂点の有栖や孤高の女(笑) マスミンのような例外を除き、女の子は俺達男よりも遥かにカーストや力関係を重要視する傾向にある。もし最上位に位置する子を意のままに使役できるようになれば、実質女子グループほぼ全体を指揮下に置いたようなもの。コージーもおそらくそう考え、軽井沢ちゃんに目をつけたのだろう。

Aクラスを目指してはいるが依然として目立つことを避けているコージーは、どうやら目先の勝負より自分抜きでも他クラスと戦っていける基盤の構築を優先したようだ。「ともあれ体育祭の頃には葛城君の地位は完全に失墜し、私がクラスの指揮を取ること

に反発する人間はせいぜい戸塚君ぐらいとなりましたが……」

「その体育祭は自分が参加できないという理由で、ランスにほとんど丸投げしちゃったんだよね」

「桐葉が本腰を入れて取り組む以上、負ける方が難しいですからやる気も無くなりますよ。ただ真澄さんが学年最優秀に輝いたのは親友として喜ばしく思いましたね」

このセリフをマスミンが聞いたら苦々しく思うんだろうなあ……ただまあ体育祭で結果を残せたおかげで、マスミンの地位は大幅に向上しただろうね。美人だけど愛想がまるで無く、なのにクラスの中心にいる俺や有栖と仲が良いマスミンはさぞや同性から嫌われていただろうし、苛めに発展しなくて良かった良かった。

「やれやれ、女の子の妬み嫉みはおつかないね。……そういうや有栖も中学のときも苛めのターゲットにされそうになったっけ」

「ああ、そんなこともありましたね。あるときはとても楽しかったです」

容姿に恵まれ、才能にも恵まれ、そして体に障害を抱えている……そんな有栖はマスミンの比では無いくらい苛めのターゲットにされやすい人物だろう。事実、これまでの人生で彼女は4回ほど標的になりかけたらしい。……色々とエグい方法とかを使つて全部事前に潰してきたらしいけど。

まあ有象無象が有栖を妬み卑劣な手段で陥れようとしたところで、より卑劣な手段で

地獄に突き落とされるだけだろうね。

「しかし綾小路君と再会できただけでも、体育祭は有意義な時間でした。あの頃の龍園君はDクラスの堀北さんを執拗に潰そうとしていたようですが、おそらくは彼に色々とは妨害されたのでしょうか」

「確実な証拠が無いから断定はできないけど、まあそうだろうね」

リユンケルが軽井沢ちゃんに目をつけていたことから推測すると……おそらく真鍋ちゃん達は干支試験中に軽井沢ちゃんに何かしら狼藉を働き、そしてそのコージーにその現場を抑えられ脅迫され、Cクラスへのスパイ活動を強要されたのだろう。

そしてリユンケルならクラスにスパイがいるとわかればどんな手を使ってでも炙り出す。その結果リユンケルは軽井沢ちゃんを襲ってコージーを誘きだし……こてんぱんに敗北して弱味まで握られたというのが、おおよそのシナリオだろうね。全部計画の内だとしたら末恐ろしい子だよ。

「で、最後にペーパーシャツフルがあるけど……特に振り返るべきところが一つも無いな」

「そうですね。相手が一之瀬さん達でしたから、真つ向からぶつかり合い順当に私達が勝ちました」

何せ取った戦術までまったく一緒なのだから、俺が全力で鍛え上げた以上負ける筈も

ない。それどころか下手に健闘したせいで有栖の興味を引いちやっただいたいだし……ボロ負けした方が正解ちゃんにとつて良かったんじゃないかな。

「……とりあえずはこんなところでしょうね」

「こうして振り返ってみると、俺達大分適当な特別試験の取り組み方してるね。手抜きとパワープレーしかしてないよ」

「3学期からはそうもいきませんよ。彼の父親が余計な干渉をしてくる前に、綾小路君と戦う約束を取り付けなければなりませんし、彼が相手では単調な戦略は通じないでしょう」

「……それで？コージに負けたら当然リベンジするんだらうけど、もし勝ったらどうするつもりなの？」

「どこかの誰かさんが面倒な相手に余計な喧嘩を売ったそうなので、そのバックアツプをしなくてはなりませんね」

「これなら退屈しないでしょ？感謝するがいい」

「あまり調子に乗らないでくださいこの愉快犯」

わーお辛辣。

「さてと……振り返ることもなくなっちゃったし、あとはどうやって時間を潰そうかな？」

「気のせいでしょうか？著しくデリカシーに欠如した台詞が聞こえてきたのですが？」

「よし、それじゃクリスマスマスらしく……昔のドラえもん映画でも観ようか」

「質問に答えなさい。だいたいそのどこがクリスマスマスらしいんですか」

「それじゃあ不朽の名作、鉄人兵団から行ってみよう。普段こまっしやくれてる有栖も号泣間違い無しだ」

「だ・れ・が、こまっしやくれてるですって？だいたいこの私がアニメなどで泣く筈がないでしょう」

「……その言葉、忘れちゃダメだよ？」

「リルルさんっ……そんな、あんまりです……！」

約2時間後、マイルームにはハンカチで涙を拭うリトルガールの姿が！

……普段冷酷無情の愉悦部員のくせに、ちよつとボロを出せばほんとあざと可愛いな
この子。

混合合宿

3学期が始まってすぐの木曜日の朝、12台のバスが高速道路を疾走する。

1年〜3年全校生徒の大移動……ジャージを着用することと、予備のジャージや替えの下着を用意することを指示されただけで、それ以外の詳しい説明は一切されていないという恒例の不親切ぶりだが、まあ十中八九この先特別試験が俺達を待ち構えていることだろう。

移動時間は3時間ほどと結構な長旅であり、バス内ではクラスメイト達が持ち込みを許可された私物で時間を潰していた。持ち込み自由とはいえっても最上位の優等生クラスらしくほとんどの生徒がおとなしく読者をしている中、俺は隣の席の橋本（ちなみにバスの席順は五十音順）とEカードに興じていた。

ちなみにハンデとして俺が常に奴隷側かつ必ず先にカードを出しているにもかかわらず、戦績は19勝0敗で俺が勝ち越している。

「……いくぞ、『皇帝』！」

「はい残念、『奴隷』は20度刺す〜♪」

「ちくしよおおおおおおお！」

「橋本うるさい。周りに迷惑でしようが」

「なんで俺が『皇帝』出すときに毎回ピンポイントで奴隷伏せてんだよ!?!もしかしてイカサマしてるんじゃないだろうな？」

「ははは、何をバカなことを」

「いやだつてどう考えてもおおかしいだろ……」

「してるに決まってるじゃないか」

「おい」

不服だろうが見抜けなかったお前が悪い。負けた方に罰ゲームを付け足さなかった時点でおかしいと気づきたまえよ。

だいたい目を瞑つてランダムに出せば100パー勝ちなのに、わざわざそっちに勝ち筋を残してやってんだからむしろ感謝してもらいたいね。

「……それではお前達も気になってるであろう、今回の特別試験についての説明をこれから行おうと思う」

やたらと長いトンネルを抜けた直後に、ハンドマイクを手にした真嶋先生が突然話を切り出した。特別試験があるとはまだ一言も聞かされていなかったが、この期に及んで察していない生徒などたとえDクラスにもいないという判断からの短縮だろう。……おつといけない、あの子達は既にCクラスだったね。

「あと1時間もしないうちに」とある山中の林間学校へ到着する。部活に所属していない生徒を除けば、普段の学校生活では上級生と触れ合う機会は少ないだろうが、今回の特別試験は学年の垣根を超えての集団行動を7泊8日の日程で行う。特別試験の名称は『混合合宿』……全て口頭で説明するのは合理性に欠くので、これから試験に関する資料を配布する」

前の席からから回ってきた20ページ程もある資料を、適当にパラパラとめくってひと通り目を通し……

「わー、やる気でないー」

「幸先不安なこと言うなよ……」

自身のモチベーションが著しく下がったことを実感する。

露骨にテンションの下がった俺のことなどお構いなしに、全員に行き渡ったことを確認した真嶋先生は説明を再開する。

「資料はバスから下車するときに回収するので、ルールは今のうちにしっかりと把握する

ように。……今回の合宿は諸君の精神面での成長を目的としている。社会で生きていく上で必要なことを始め、普段関わらない人間とも友好的な関係を築けるかを各自それを学んでいくこととなる」

うん、まあ……俺の得意分野だね。

自分で言うのもどうかと思うが、俺のコミュニケーション能力はえげつないほど高い。初対面だろうが年上だろうが、適当に5〜10分会話すれば大概の相手とは打ち解けられると自負している。俺より交遊関係広いのつてたぶん同学年だと櫛田ちゃんくらいだろうし。

自分に有利過ぎる分野だということが、この特別試験が気に入らない理由の1つ。……まあこっちはあくまでおまけの理由だけだね。

「目的地に辿り着き次第男女別に分かれ、お前達には学年全体で話し合い6つの小グループを作ってもらおう。なお詳しい内容は5ページに記載しているので、しっかりと目を通しておくように」

5ページに書かれている内容は、小グループを形成する上での人数の上限と下限。退学者の数に応じて必要人数は変化するのだが、1年生は男女ともに80人ずつなため10人〜15人だ。

そして1つのグループ内には最低でも2クラス以上の生徒が存在しなければならず、

グループ結成は満場一致の反対者のいないものでなければいけないそうだ。

「他クラスと組んでの試験、か……体育祭以来だな」

「そうだねー。それも体育祭のような競技中だけの一時的なものじゃなくて、炊事洗濯入浴就寝の日常生活を全て共にするらしいよ?」

これまで散々いがみ合わせておいて今度は仲良く共同生活をさせるとは、相変わらずこの学校は意地が悪いね。それとも船上試験のように裏切りが発生する要素がほぼ無いだけ恩情なのかな。

「特別試験の結果は林間学校最終日に行われるテストによつて決められる。内容は7ページに記載してあるのでチェックしておけ」

テストで求められる能力は道徳、精神鍛錬、規律、主体性の4つ……どれも明確な答えの無いテーマであり、試験の内容については一切記載されていなかった。

それにしても道徳、か。有栖ヤベーじやんどう頑張つても落第は確実……

ウソウソちよつとしたジョークだから、前の席から目が全く笑つてない微笑みをこつちに向けんといつてマジで怖いっす。そして女の勘相変わらずヤベー。

「6つの小グループは一心同体で、いかなる理由であつても脱退及びメンバーの入れ替えは不可能だ。もし仮に途中リタイアする生徒が出れば、グループ全員でその穴埋めを行い1週間を乗り切らなければならない」

つまり仲違いしたり敵対し合つてゐるようじゃ、この合宿は乗り切れないってわけね。それだと余計なリスクを負わないために、どのクラスも極力同じクラスの生徒で構成されたグループを作ろうと考えるだろうが……そうならないために複数のクラスで構成されたグループを作るメリットを用意したんだらうなあ。

「1年生の中で6つの小グループを作り終えたら、同じく6つの小グループを作った上級生と合流し、最終的に1〜3年からなる6つの大グループが出来上がる」

他クラスとの協力つてだけでもそこそこハードルが高いのに、ほとんど接点の無い上級生とも組むことになる。精神面の成長を目的としていただけのことはあるね。

「肝心の試験結果は、大グループのメンバー全員の『平均点』で評価される。そして1〜3位の大グループには生徒全員にプライベートポイントが支給され、クラスポイントが与えられる。逆に4位〜最下位になった場合はペナルティを課されるが、詳しい内容は9ページに記載してある」

指定されたページに記載された基本報酬は…

- 1位…プライベートポイント1万、クラスポイント3
- 2位…プライベートポイント5000、クラスポイント2
- 3位…プライベートポイント3000、クラスポイント1

以上がグループの生徒1人ずつに支払われるとのことだ。シケた額のプライベートポイントはまあどうでもいいとして……例えば10人中9人が同じクラスの小グループを作り1位を取れば27クラスポイントを得られるが、逆に10人中9人が他クラスなら3ポイントしか得られない。

そして4位以下が負うペナルティは……

4位……プライベートポイント5000、クラスポイント2

5位……プライベートポイント1万、クラスポイント3

6位……プライベートポイント2万、クラスポイント5

以上が大グループのメンバー全員から没収され、仮にポイントがマイナスになる場合、累積赤字として記録されるそうだ。体育祭と同じくリターンよりリスクが大きい上に、これまでと違い所謂借金制度が追加されている。

そして先程と同じく例を上げると、10人中9人が同じクラスの小グループを作り最下位なら45クラスポイントも没収されるが、逆に10人中9人が他クラスなら5ポイントで済む。

つまりここまでのルールで考えれば、クラスの優秀な15人でグループを組みトップを狙い、無能な5人を他クラスに分配し盛大に足を引っ張ってもらうことがセオリーに思えるが……そうはさせまいと学校側も色々考えているようだ。

「また、小グループ内でのクラス数に応じて報酬が倍に増えていき、さらにグループの総人数の多さに応じて倍率が増加する。これらは上位の報酬にのみ適応されるので安心しろ」

これが他クラスで組むメリットだ。小グループが3クラス構成なら報酬は倍になり、4クラス構成なら3倍になる。さらに10人の小グループを基準に0.1ずつ倍率が上がり、15人の小グループなら1.5倍されるとのことだ。

ふむ……つまり12人を同じクラスかつ他クラスから1人ずつで構成された小グループが、1位になった場合の168ポイントが理論上の最高の数値か。まあそんなグループを組むには他クラスの完全な協力が必要になってくるし、目指すだけ時間の無駄だな。……実現しても興醒めだし。

「また、最下位になった大グループにはペナルティが課せられる」

「ペナルティ……『退学』でしょうか？」

「そうだ。しかし退学になるのは最下位かつ学校側の用意したボーダーラインを、小グループの平均が下回ってしまった場合に限る」

順位には大グループの平均点を参照し、退学か否かのボーダーには小グループの平均点を参照するのか。少しややこしいけどこれならば、仮に1つの学年の小グループが盛大に足を引っ張ろうと、理不尽な巻き添えを食うことは無くなる。

「そしてボーダーを下回った場合、小グループの『責任者』は退学となる。ちなみに責任者は予め小グループ内で話し合って選任してもらう」

「責任者を務めるメリットは何でしょうか？」

珍しく有栖が真嶋先生に質問する。確かに何の見返りも無しに退学するリスクなど誰も抱えたくないし、何かそれ相応のプラス要素がある筈だよな。

いつも質問役を買って出るランスはリスクを嫌う性分だし、静観していたら流されると判断したのかね？

「責任者を務める生徒のクラスのグループ報酬はさらに2倍される」

ふむ……つまり理論上は、最高で336のクラスポイントを得られる訳だね。でもまあやっぱり机上の空論だろうけど。

「責任者の決定期限は明日の朝までで、もしそれまでに決めることができなければその小グループは失格……つまり全員に強制退学してもらうことになる。まあ流石に前例は無いがな」

学校側が決めるのではなく、あくまで俺達が話し合って決めろってことね。それで上

手くまとまらず揉めまくるようじゃ、その後の共同生活に禍根を残しちゃうだろうね。

「また退学になった責任者は、グループ内の人物一人を連帯責任として退学を命じることができる。わざと赤点を取ったり試験をボイコットしたりなど、平均点のボーダーを下回った原因の一因であると学校側から認められた生徒のみに限るがな」

この道連れルールがあれば、他クラスの足を引つ張らせるといふ行為はほほできなくなるだろう。それでも資金力が潤沢な俺達Aクラスなら、他クラスの優秀な生徒をデリートするという作戦を使えなくはないが……

「そしてもう一つ重要なことだが、退学者を出してしまったクラスには相応のペナルティが課される。内容は常に変化するが、今回の試験では退学者一人につきクラスポイントが100ポイント減少する」

「退学の取り消しに必要なポイントはいくらでしようか？」

「課されたペナルティに加えクラスポイント300、プライベートポイント計2000万が必要になる」

合計400ものクラスポイントを失うんじや、道連れさせる旨味は全然無いな。今までと違って今回学校側は、徹底してダーティプレイを規制するみたいだね。……とりあえず有栖、露骨にガツカリするのはやめなさい。

「説明は以上だ。目的地までもうすぐだが、この時間をどう使うのかは自由だ。先程

言った通り資料は到着後に回収する。それから携帯電話は1週間使用禁止、同じく後ほど回収する。私物の持ち込みは食料品を除いて持ち込み自由だ」

優等生が揃っているAクラスでも、携帯没収には多くの生徒が思わずげんなりとする。現代人にとって携帯電話はもはや肉体の一部だというのに無体なことをするね。

そして林間学校中、男女は2つの棟に分かれて1週間生活し休み時間や放課後も基本的に外出禁止、接触する機会は1日1回だけ男女共同で食事を取る1時間のみのと。

……これが今回モチベーションの上から最大の原因だ。せつかくの上級生との交流の機会だったのに、1番仲の良い茜先輩とはほとんど交流できないばかりか、有栖ともほぼ別行動とかどうテンション上げると？

やる気の出ない俺と同じ気持ちなのか、有栖はつまらなそうな表情で真嶋先生からマイクを借りて前が出る。今回の試験でのウチのクラスの方針を発表するんだろうけど……あの様子だと今回は適当に流すみたいだね。

グループ決め（前半）

今回の試験は男女別ということもあつて、有栖は男子側の方針をランスに丸投げした。有栖が指揮を取らない以上俺は好き勝手に動くつもりだが、いい加減ランスも慣れてきたのか特に言及もしなかった。

バスが目的地に到着すると駐車場へ停車し、俺達は真嶋先生に資料と携帯を提出してから五十音順に下車する。

「山岳地帯だけあつてかなり寒いね。それに少し年季の入った校舎が2棟……なんか殺人事件でも起きそうだね」

「縁起でもないこと言うなよ……」

全員が下車し終わるとすぐに整列が始まり、特に面識の無い先生の引率のもと、男女に分かれてそれぞれの校舎に向かう。今日から1週間会えるのは1日1時間だけか……。

「有栖大丈夫かなあ……ここ寒いし風邪とか引いたりしないかなあ……性格悪い子に苛められたりしないか」

「お母さんかお前は!？」

「だってあの子ケサランパサランよりか弱いんだよ？俺抜きで特別試験受けんのも初めてだし、そりゃ心配くらいするだろうよ」

「……体調はともかく、あんな凶悪な女を虐められる奴がいるわけないだろ」

「今のセリフ、一言一句そのまま有栖に報告してもいい？」

「どうか聞かなかったことにしてください」

「今回だけでぞー？」

橋本の迂闊な発言を聞き流しつつ本棟と呼ばれる校舎の中に足を踏み入れると、ある木材特有の良い香りが鼻腔をくすぐる。……悪くないな、林間合宿。

「しかし相変わらず無駄に金がかかっているねー。市民の血税をなんだと思ってるんだか……」

「そうか？確かに清潔感はあるし管理は行き届いてるけど戦後の学校みたい建物だし、教室にはストープはあるけどエアコンすらついてないぞ」

「お前の目は節穴か？机は古めかしく見えるけど使われている木材は檜だし、校舎も大部分は杉だけでも重要な箇所は檜葉、樺といった高品質の木材で構成されてるじゃないか」

「いや植物オタクのお前じゃないんだから、見ただけで木材の判別とかできないから」

誰が植物オタクだ失敬な。

全学年の男子生徒が体育館らしき場所に集められると、学年ごとにそれぞれ集まり静かに指示を待つ。やがて3年Aクラスの担任である椿先生がマイクを持って壇上に立ち説明を始める。

「ではこれより小グループを組むための場と時間を設ける。学年別で話し合い全部で6つのグループを作るように。大グループの作成は午後8時から行うことになっている。……ちなみに大小問わずグループの作成において、我々学校側が関知することは一切無いと補足しておく」

説明が終わると同時に各学年別ごとに話し合いが始まる……前にランスが13人のクラスメイトを集め、他クラスの生徒達に告げる。

「見ての通り俺達Aクラスは、この14人で1つの小グループを組む。他クラスからあと1人加わればグループの規定を満たすので、加入希望者を募集する」

ランスに指揮を任せられた時点でこうなるのは予測がいたが、はいそうですかと納得し

てくれる訳もなくケン坊がさっそく嘯みつく。

「いきなり何勝手なことしやがる。お前らだけ汚えだろうが」

「別にルールを違反をしているわけではないし、この方法では仮に1位を取ったとしても報酬は最低限になるというデメリットが存在する」

「い、いやでも14人つてのはずるいだろ」

「ならばお前達のクラスも同じような構成のグループを作ればいいだろう。」

「そう、なのか？」

一見論理的な主張に思えるが干支試験のときと同じで、報酬が少なくても構わないのはクラスポイントで独走しているAクラスだけだ。他のクラスが同じ手法を取れば退学のリスクこそ減らせるが、同時に限りあるチャンスを棒に振ることになる。

駆け引きが苦手なケン坊はまんまと丸め込まれたようだが、各クラスの中心人物達は気づいているのか難しい表情をしている。

「ちなみにAクラスで残った6人は、たとえどのグループに配置されても文句は言わない方針だ」

「待て葛城。何故そのグループに本条を含まない？ いったい何を企んでいる？」

Bクラスの神崎隆二……通称ザキちゃんが警戒するのも無理は無い。自分でいうのも何だけど、今回の試験内容がどうであれ俺を外す理由は何処にもない。……でもね、俺

にも拒否権というものがあるのだよ。

『他クラス他学年との交流がテーマなのに、小グループ内のほとんどが同じクラスとかつまらない』と本条が駄々をこねたからだ……」

「……お前も大変だな」

「親切心で忠告しておくが、安易な考えで本条をグループに引き込めば後悔することになる。足手まといにはならんだろうが、奴の手綱は坂柳にしか握れない」

「その忠告は素直に受け取っておくが……どちらにせよすぐの決断はできないな」

「だよなー。本条や他の5人がわざと足を引っ張る、とまでは言わないけどよ……」

柴田君もザキちゃんに同意したため、Bクラスは慎重に事を運ぼうと提案を保留にする。そう判断することは予想済みなだったので、ランスはさらに餌を放り投げる。

「ならば今から5分以内に限り特別枠を設けよう」

「特別枠？」

「俺達が我が儘を押し通そうとしていることは事実。なのでこちらも妥協点を用意しよう。このグループの責任者は俺が務めるが万一最下位となり俺が退学することになっても、わざとグループの足を引っ張るような行為をしていない限り、このグループに入ってくれる他クラスの生徒を道連れにしないと約束しよう」

「ま、マジかよ……」

この妥協点は各クラスの中心人物……つまり能力の高い奴等には特に旨味も無いものだが、退学する可能性を危惧している生徒達にとっては大いに価値のある代物だ。そんな生徒達にとってはAクラスの独走を止めることや下克上よりも、自分が試験を安全に乗り切ることが最優先だからだ。

「しかし有効期限は5分以内だ。それを過ぎて参加を決めたとしたら、このグループが最下位を取った場合容赦なく道連れにさせてもらう」

「面白い提案だが逆に言えば5分過ぎれば、お前達は道連れにされる可能性の高い地雷グループとなる。入りたがる生徒は誰もいなくなるだろう」

「だな。んなグループに誰が入るかよ」

「お前達がどう考えようと結構だが、俺達は方針を変えるつもりは無い」

ザキちゃんとケン坊はそう突っぱねるが、ランスは毅然とした態度でグループを引き連れ話し合いを拒否する姿勢を表した。

「無視して構わないだろう。グループは満場一致でなければ成立しない以上、いずれ向こうから話し合いに戻って来ざるを得ない」

「だな」

どうやらザキちゃん達Bクラスは、俺達Aクラスが守りに入るのをどうにかして防ぎたいようだけど……考えが甘いね、やはりあのクラスは卍解ちゃんがいないと大して脅威

ではない。君達のクラスは退学になりかねない生徒がないから強気に出られるけど……ほら、クラス内の生徒の能力差の大きいCクラスは不安な生徒を守ってもらおう方針に片寄ってくる。仲間想いな平田君なら、5分以内には必ずランスの提案を受け入れてしまおうだろう。

このままだと俺達の逃げ切りを許してしまうだろう……と、残り2分を切ったところでそれまで静観していたDクラスの眼鏡の子……金田君がザキちんの下へ近づいていった。

「神崎氏、ここは勝負に出るべきチャンスだと判断します。彼等の提案を飲めば残るAクラスの生徒は好きに配置できる……つまりこちらは全てのグループを最高倍率の4クラスにできるということです。上位を取ればAクラスとの差を大きく詰められます」「そのチャンスはAクラスのグループに勝つことができれば、という前提でのものだ。先の試験で完敗を喫したばかりの俺達にそんな樂觀視はできない」

「確かにリスクはありますが、彼等の切り札である本条氏をこちら側に引き入れられるのなら、ここは打倒Aクラスに動くべきでしょう」

金田君の提案には慎重なザキちんの心も揺れ動く。これまで散々俺に辛酸を舐めさせられてきたBクラスにとって、俺と敵対しなくて済むのは決して無視できないメリツトだろう。

その直後に平田君も賛同し、肝心の特別枠についてはCクラスの何人かが壮絶なジャンケンの末、勝利した山内君が加わることになった。……Aクラスだけで構成されたグループで1週間過ごすのは居心地が悪いだろうなあ。

真嶋先生に報告しに行くランス達を見届けてから、いよいよ本格的な話し合いが始まる。

「これで残った我々が好きにグループを作れるわけですが……彼等のようなグループの組み方はせず、先ほど申し上げたように4クラス複合を提案しましょう」

「奴等の提案を飲んだ以上そうするべきだろうな」

「勝ちに行くなら必要なことだね。それには反対しないよ」

3クラスによるAクラス包囲網……一見危機的状况かもしれないが、Aクラスが話し合いに参加していたとしても同じ結果になっただろうとランスは考えている。

何せ3学期始めに開示された各クラスのポイントは俺達Aクラスが1169ポイント、正解ちゃん達Bクラスが602ポイント、コージー達Cクラスが358ポイント、リユンケル達Dクラスが311ポイント……これだけ離されてなおAクラスの座を諦めてないなら、独走を防ぐためにも他の3クラスが結託するのは自然な流れだ。

ならばランスは強引に守りに入ることで、敢えて無理矢理結託させてしまおうという腹積もりのようだ。

進んで手を組むのとなし崩しで手を組むのでは意味合いが全然違ってくる。裏切ったり抜け駆けしないか猜疑心を捨てきれず、まともに足並みを揃えることなどできない。ましてやこれまでいがみ合ってきたクラス同士だし、放つておいても勝手に反発し合うだろう。

現に今も各クラスから信用できないあのあいつとだけは組みたくないだの、様々な不安が飛び交っている。

守りの姿勢自体は変わらないものの、あの堅実一辺倒だったランスが随分と成長したもんだ。

しみじみと感慨に耽っていると、どうやら手探りでいいからグループを作っているという流れになったみたいなので、俺も適当に一石を投じておくか。

「ねえ平田君、金田君、ザキちん。俺の入るグループは各クラスの生徒の割合を極力均等にしたいよ」

「お前達6人はどのグループに配置されても文句は言わないんじゃないやなかったのか？」

「うん、だからこれは単なる提案。俺達Aクラスのクラスポイントが抜きん出てる以上、今後の試験でも君達が手を組む機会は何度もあるだろうね。そのための禍根は残したくないでしょ？」

「禍根……？ どういうことですか本条氏」

「俺の所属したグループは上位になるけど、もしグループの生徒の割合がどこかに偏ってたら、得る報償に格差が出て抜け駆けになってしまおうでしょ」

「上位になるのは確定なんだね……」

「そりゃあこんな俺に有利過ぎる内容じゃね……俺と戸塚×9くらいのハンデを背負わない限り負ける方が難しい。」

「まあどうするのかは君達の自由だ、気が済むまで話し合いたまえ」

さて、あとは成り行きを見守るとするか。

……グループ決めに難航するようなら、たまには前に出るのも一興かね？

グループ決め（後半）

グループ決めは難航を極めた。

打倒Aクラスを掲げ手を組んだ3クラスだが、やはり優先すべきは自クラスから退学者を出さないことと、自クラスの生徒の割合が大きいグループを上位にすることだ。よってグループ作りは有力者を引き入れることは勿論、足を引つ張るような生徒を他所に押し付けることが重要になってくる。

何が言いたいのかという……

「俺は龍園とは同じグループになりたくない」

「ああ、あいつとだけはごめん」

誰もリユンケルと組みたがる人がいないため、グループ決めが一向に終わらない。心優しい平田君が手を差し伸べようとするも、同じグループの生徒はこれでもかと猛反対する。

これまで散々えげつない手段で暴れまわってきた彼は当然周りからよく思われていないし、退学のかかった試験で不用意に爆弾を抱えたがる者はいない。彼が一線を引い

たことは既に知れ渡っているが、これまでの行いからフェイクだと疑う人も多いし、尚更信用なんてできないだろうね。

当の本人はキングボンビー扱いされていることに気にも留めず孤高を気取ってるし、色々事情があるのかこれまでリユンケルを慕っていた石崎君や山田君も彼を遠ざけている……仕方ない、ここは俺が一肌脱いであげよう。

「ねえザキちん達、手詰まりなようだから助けてあげようか？」

「何……？」

「残る5つのグループの内3つはザキちん、金田君、平田君を中心とした15人のグループでしょ？残る10人からなるグループの2つの内の1つを俺に任せてくれたら、リユンケルを引き入れるし責任者になってもいいよ」

「守りに入ったAクラスの生徒であるお前が、わざわざリスクを抱え込むだと？……何を企んでいる？」

「ふざけんよ本条！葛城さんの方針を無視する気か!？」

「戸塚うっさいでしゃばってくんな。ランスの方針なんて俺の知ったことじゃないし、そろそろこのグループ決めの時間飽きた」

「相変わらず自由奔放ですな本条氏は……」

試験内容が不明なんだから適当にパパッと決めりゃいいものを、グダグダと無駄に時

間を浪費しよってからに。

「それに俺には策略とか必要ないからね。誰がメンバーでもどんな試験内容でも勝つ自信あるし。……それで返答は？」

「勿論僕達Cクラスは賛成するよ」

「我々Dクラスも異存ありません」

「……いいだろう。ただしグループ内のAクラス生徒はお前1人にしろ」

「よし、交渉成立だね♪」

ザキちんの出した条件は仮に俺が有言実行して上位になっても、Aクラスへの恩恵を最小限に抑えるためだろうね。

もとよりクラスへのメリットなど度外視していたので二つ返事で承諾し、リユンケルのもとへ向かう。

「まあそんな訳で、よろしくねリユンケル」

「わざわざ俺を引き入れるとは酔狂な奴だぜ。……俺はこの学校に特に未練を持つちゃいねえ。道連れ覚悟でテメエを退学に追い込むかもなあ？」

「そんなときやポイントを払って免除してもらおうよ。プライベートポイントは持て余してると、400クラスポイントはちよつと痛いけど……君が去った後のDクラスから筆り取ればいいさ」

「クク、自爆しようが俺が犬死にするってわけか。だがお前以外はどうか？ 他に入りたがる奴をどうやって見繕うつもりだ？」

「まあ何とかなるんじゃない？ 露骨に足引つ張らなきや道連れなんて出来ないルールだし。……そうだ、せつかくだから抱えるだけ抱えてみよっか」

「ああん？」

怪訝そうな顔をするリユンケルを捨て置き、優雅に爪の手入れをしている六助に近づく。

「やつほ六助、俺のグループに入らない？」

「やあマイフレンド。勿論構わないよ、君がいれば少しは退屈せずに済みそうだ」

立て続けに問題児を集める俺に周りが唾然とするのもお構い無しに、今度は山田君と石崎君に狙いを定める。これまでリユンケルの手下として悪行を尽くしてきた彼等は、リユンケル程じゃないにしろ敬遠されているからね。

「なあ本条」

「おや、幸村君とコージー。どしたのき？」

「俺達もお前のグループに入ってもいいか？」

「別に構わないけど……中々のチャレンジャーだね。俺はこれからただ自分が楽しみたいがために、地雷グループを作るつもりなんだけど」

「お前の常軌を逸した実力は十分知っている。どんなメンバーだろうと上位を狙う余地は十分にある。それに打倒Aクラスを目指すなら、お前の情報はできるだけ集めておくべきだ」

なるほどね……多少のリスクを飲んでも積極的に勝ちに行くとは、どうやら幸村君はよほどAクラスの座に執着してゐるらしい。

だけど俺にとつては嬉しい誤算だ。コージーは目立つのが大嫌いだから俺から声をかけにくいのは避けようと思つてたけど、これなら友達である幸村君に意見を合わせたという大義名分が成り立つ。

その後石崎君達も俺の勧誘に応じ（彼等がほんの一瞬リユニケルに意味深な視線を向けたが俺はあえて見逃す）これでC・Dクラスの人員は揃い、残るBクラスも幸村君の話聞いて考えを改めたのか、墨田誠君、浜口哲也君、別府良太君の3人が加入し合計10人のグループが完成した。そして俺が不穏分子を独占したおかげで残る4グループもスムーズに決まる。

「はい、それじゃあ学校側にグループ結成の報告に向かうので、軍隊のように統制のとれた動きでついてくるように」

「さつき出来たばかりの寄せ集め集団に無茶言うな!？」

「宮さん宮さんお馬の前にヒラヒラするのは何じやいな」

「軍歌も歌わんでいい！」

「あくれは朝敵征伐せよとの錦の御旗じゃ知らないか〜」

「清隆も乗つかるな！」

「一天萬乗の一天萬乗の帝王に手向いする奴を〜」

「龍園まで!？」

「トコトンヤレ、トンヤレナ〜」

「合唱するな腹立つ！だいたいなんでお前らそんなに軍歌詳しいんだよ!？」

流石幸村君、怒濤のツツコミ捌きだね。ニツクネーム枠に昇格まであと一息だよ。

「……ある程度のリスクは覚悟していたが、ちゃんとやっていけるか怪しいグループだ」

幸村君は溜め息をつきつつ項垂れるがまあ無理もない。石崎君達はリユニケルのみならずコージーのことも避けてるし、六助は相変わらず他のメンバーのことなど気にも留めずに自分に酔っている。……現状チームの完成度は間違いなく最下位だろうね。

「……なあ本条。高円寺はこれまで特別試験を一度として真剣に取り組んでこなかった奴だ。取りにいったからにはちゃんと制御する方法があるんだよな？」

「え？そんなの無いよ」

「……は〜」

何やら呆然としてるけど幸村君、そんな都合のいいものがあると思ってたの？それと

もまさか、彼を制御する方法が知りたくてこのグループに入ったの？……だとしたらとんだミステイクだね。

「さつきも言ったじゃないか、自分が楽しむためにグループを作るって。ちよつと興が乗ったからジョーカーをコレクションしただけさ。というか誰かに制御される六助なんて気色悪いでしょうが」

「流石はマイフレンド、私のことをよくわかっているようだねえ」

「……入るグループ間違えたかもしれない」

特別試験だからってちよつと肩肘張り過ぎだね幸村君。もつとゆとりを持って行動しないと。

真嶋先生に報告を終え、上級生を含む既にグループを作り終わった生徒達が集まっていたのでそちらに向かう。

全ての小グループが完成したことを確認し、みやびん会長が俺達一年生……というか俺に声をかけてきた。

「意外に早くグループが作り終わったな。ちよつど時間もあるし、これからすぐに大グ

「ループも作らないか？」

「学校側が許可してくれますかね？」

「それくらい融通は利く筈だ。夜決める予定だったのは小グループ結成に時間がかかると予想した学校側の配慮だし、早々に小グループが決まったならこのまま移行した方が得だろ？」

大グループを作り始める雰囲気を感じた先生達が何やら慌ただしく動き始めている。小グループ結成が早く決まる場合のパターンくらい想定しておけると思わなくもないが、もう16才になった桐葉君はいちいち揚げ足を取らないのだ。

「それでいいですよね？堀北先輩」

「ああ、それで構わない」

「決まりですね。……ところで大グループの結成方法ですけど、野球のドラフトみたいに1年の代表者6人に、俺たち上級生のグループを指名させるってのはどうすか？じゃんけんで勝った順に2、3年の小グループを指名していけばすぐに大グループが決まりますよ」

「それでは公平性に欠けるだろう。1年の持つ情報量は少ない」

「それは仕方ないでしょ会長さん。人脈構築や情報収集力も実力の内ですよ」

「……なるほど、一理あるな。だがな本条、会長はもう南雲だ」

「おつといけない元会長さんだった。……元会長さんって言い方がモヤつとするのでアダム変えましょうか」

「俺の知ったことではない。今は大グループの決め方を話してるんだ、関係ないことは」

「みやびん会長何かいい案ありますか？」

「聞け」

「堅物先輩とかどうだ？堀北先輩にピツタリだ」

「南雲も乗っかるな」

「ふむ、悪くないですね……じゃあちよつとアレンジしてコランダム先輩に決定」

「おい」

「だはははは、全然原型とどめてないじゃねえか！」

「……」

「硬さはダイヤモンドの方が上だけど……何かこう、しつくりきませんよね」

「ああ確かに、何か成金みてえなイメージで堀北先輩には合わな」

「いい加減にしろ」

俺とみやびん会長の額目掛けて振り下ろされるコランダム先輩の拳。

「……痛えつす堀北先輩。元とはいえ生徒会長が暴力に訴えるのはどうかと思います」

「コランダムだけに拳も硬いっす」

「噂するなバカ共。……どうやら異論も無いようなので、大グループ決めを始めるぞ」

「どうやら俺達がおちやらけてる間に、1年生に不満が無いか聞いてきてくれたらしい。」

俺達はそれぞれの小グループに戻り、1年生のグループからは責任者6人……俺、ランス、ザキちゃん、金田君、平田君、三宅君がそのまま話し合いの場に出る。そして厳正なるじゃんけんを行い、まあ当然今までじゃんけんで負けたことの無い俺が一番最初に指名することになる。

「じゃあみやびん先輩達のグループで」

「即決だな。グループメンバーと話し合わなくていいのか？」

「責任者は俺なんだからこれくらいの横暴は許されるでしょ」

意気揚々と自分のグループに戻ると、ある程度上級生に詳しいBクラスの墨田君が苦い顔をしている。

「なんで相談も無しに決めたんだよ？というかグループ内の面子で考えると、選ぶなら普通堀北先輩のグループだろ」

コランダム先輩とみやびん会長どちらが優れてるかは置いておくとして、グループ内の面子には確かに開きがあった。

「そだね。みやびん会長のグループは何故かC、Dクラスの生徒がやけに多い。噂ではみやびん会長は2年全体を掌握しているのにあの微妙な人選……どう考えても何か企んでること山の如しじゃないか。だからこそ敵に回すべきではないと判断したのさ」

「そ、それは……」

「そして、できれば警戒していることも、あの人には悟られたくない。この学校の生徒会長の権力は絶大だし、敵に回さないために万全を期すべきだ。だったら敢えて考え無しに適当に決めたと思わせて、見くびってもらった方が都合がいいでしょ？」

「そ、そこまで考えていたのか……」

もつともらしい理屈で上手いこと言いくるめたけど……当然何か面白そうという理由で選びました☆

俺の適当な口八丁に惑わされないリユンケルやコージはジト目を向けてくるけど、どちらも墨田君に指摘してあげるようなお人好しじゃない。六助？大グループ決めなくてどうでもいいとばかりに髪を整えてるよ。

その後グループ選択は粛々と行われ、やがて6つの大グループが完成した。

グループ交流……？

「堀北先輩。偶然にも別々の大グループになったことですし、ここは一つ勝負をしませんか」

大グループが完成して早々、みやびん会長が挑戦状を叩きつける。コランダム先輩は警戒するようにみやびん会長を鋭く睨む一方、他の3年生達からは「また始まったよ……」みたいなげんなりとした雰囲気の流れ出す。

そして体育祭で代表を務めていた藤巻先輩と、元空手部主将さんの二人の間に割り込む。

「南雲、これで何度目だ。いい加減にしろ」

「君がことあるごとに堀北に勝負を挑むことに、これまで俺達は口出ししてこなかったが、今回は全学年による大規模な特別試験だ。個人のオモチャにするような行為は看過できない」

「随分と酷い言われようですな藤巻先輩に緒方先輩。個人に対して宣戦布告することは、この学校では別に禁止されてるわけじゃないでしょ」

「ルールではなく基本的なモラルの問題だ。書かれていなくてもやっていいことと悪いことがある」

「俺はそうは思いませんけどね。それにむしろ全学年共通の試験だからこそ、他学年とも積極的に競い合うべきでしょう？」

「……なるほど。今回の試験のルール作成に、君が積極的に携わったことにはそういう魂胆があったのか」

「アララ、よくわかりましたね緒方先輩。堀北先輩の友人だけあって生徒会の権限についても詳しいようですが、俺がルール作成に介入したことまでご存じとは……どこかにおしゃべりな奴でもいたんですかね？」

「別に知っていた訳ではない。君の人となりを考慮すれば十分予想できる範疇だ」

ほう、この学校の生徒会長の権限は強いとは聞いていたが、まさか試験のルールに事前介入できるほどとはね。

そしてみやびん先輩は自分の身近に内通者がいることを疑っているようだが、俺の見た限り元主将さんは一切嘘をついていない。……まあそれはそれとして内通者は実在しているようだ。一見平静を装ってるが内心焦りまくってる桐山副会長で間違いない。

「生徒会長になったからといって勝手に手が過ぎるぞ南雲。越権行為だと自覚をしろ」

「だったら自覚させてくださいよ。なんなら藤巻先輩も相手にしましょうか？ 総合力は

緒方先輩に劣るとはいえ、立場上は一応3年Aクラスのナンバー2つスよね」

みやびん会長の明らかに見下した態度からの挑発に藤巻先輩は顔をしかめ、元主将さんは目を細め、彼等のクラスメイト達はみやびん先輩に詰め寄ろうとするが、コランダム先輩は先んじて一步踏み出し、みやびん会長に向かい合った。

「南雲、俺はこれまでお前の要望に首を縦に振らなかった。……何故だかわかるか？」

「そうっすねえ……友人達の中には俺に負けるのが怖いからなんて思ってる奴もいるようですが、流石にそれはないでしょうね。たぶん緒方先輩達のように、無益な争いを望まないからですよね？」

「お前の望む争いは俺とお前だけの話で収まらない。お前は無関係な他人を意味もなく巻き込み過ぎる」

「それがこの学校の醍醐味だと思うんですが、まあこれは見解の相違でしょうね……何にせよ体育祭のリレーでも勝負の機会は逃してしまいました。意図しない収穫はあったものの、あなたとの決着はまだついていない。あなたが卒業してから奴に借りを返すためにも、心にわだかまりは残したままにしたくない。……あなたを越えることができたのか試したいんすよ」

あー……やっぱリレーのこと根に持ってたかー。こりや来年は相当執拗に絡まれるだろうね。まあみやびん先輩なら退屈はしなさそうだし別にいいか。

「……何をもって勝敗を決めるつもりだ」

「堀北……」

みやびん先輩の挑戦を受けそうな流れに、元主将さんは僅かに目を見開き他の3年生達も動揺する。

「どちらがより多くの生徒を退学させるか、というのはどうですか?」

「南雲、堀北は冗談が苦手だからそういうのはやめておいた方がいい」

「別に苦手ではない。勝手なことを言うな」

ちよつとした親切心で忠告する元主将さんを、コランダム先輩は心外だとざかりにやや不機嫌そうに睨む。ほほう、あの二人って思ったより仲良かったんだ。

「まあそれも面白そうですが、堀北先輩のお気には召さないようなので今回はやめておきましょう。真面目に提案させてもらうなら……どちらのグループが高い平均点を取るか、でどうですか?」

「それならば受けても構わない。……だが1つ約束しろ。俺とお前の個人的な戦いに、決して他の誰も巻き込むな」

「正々堂々と実力での勝負以外認めないってことつすね。相手グループの足を引っ張るよう仕向けるのも1つの作戦だと思うんですが」

「条件が呑めないのならこの話は無しだ。そして今後もお前の勝負を受ける気は無い」

……なるほど、コランダム先輩が挑戦を受けようとしたのはそういう理由か。

「……わかりました。どうやら勝負を望んでるのは俺だけのようですし、その条件を飲みます。あくまでも正々堂々と、どちらのグループの結束力とやらで高い点数を取るか……そういう勝負をすると約束します」

……………ふむ。

「……あ、そうだ。堀北先輩と違うグループに入っていることだし、せっかくだから緒方先輩もこの勝負に加わらないっすか？」

「生憎と俺は多少空手が得意なだけの器用貧乏な人間だ。君と堀北の一騎討ちに割って入れるような器じゃない」

「謙遜もやり過ぎればただの嫌みっすよ？ 第一それに同意したら、あなたを慕っている瀬川に俺がぶん殴られます」

「……なに？ すぐ暴力に訴えようとする性格は部活を通して徹底的に矯正した筈なのに、まだ性懲りもなくあの野郎……」

「や、冗談、言葉の綾って奴です。瀬川に罪は無いですキレイなください」

元主将さん、暴力とか人道にもとるようなこと大っ嫌いだからね。今では空手部主将

の瀬川先輩も、入部したての頃は初期のケン坊みたいなチンピラだったらしいから、相当しごかれて牙を抜かれたらしい。

その後俺達は学校側の指示に従い体育館を離れ、小グループ別に寝泊まりする部屋に連れて来られた。

部屋の中には木製の2段ベッドが計5組設置されていた。ちやうどグループの人数通りか……とりあえず、2段ベッドとなるとやることは1つだね。

「はい、誰がどのベッドを使うのかは早いもの勝ちね。それじゃあレディーファイ」
「は………」

俺が手を叩いて合図を出しても、状況を理解できていない幸村君は呆けた表情を浮かべるだけだったが、六助とリユンケルは目にも止まらぬ速さで梯子も使わず上段のベッドに飛び乗り占有する。そんな二人を見て石崎君も慌てて上段のベッドに向かい、山田君は体格の関係から上段に上がるのは苦勞すると判断したのか、石崎君の下のベッドに

腰を降ろす。

「な、何考えてんだ本条!?! こういうのは話し合いで決めるべきだろう!」

「君、六助と同じクラスでしょ? あいつがそんな話し合いに参加すると思う?」

「そ、それはっ……」

「だったら最初から早いもの勝ちでちやっちやと決めるべきでしょ。……しかしなんで若人はこうも上のベッドが好きなかね?」

「……言われてみれば、何でだろうな? こう、という明確な理由を答えられん」

「そーいやマンシヨンとかも上の階の方が人気だし、高い所が好きなのはバカに限らないのかもね。……ところで幸村君、暢気の俺と談笑している間にほぼ決まっちゃったみたいだよ?」

「えーああっ!?!」

「君はもうちよつと視野を広げるべきだね」

愕然とする幸村君を捨て置き、誰もが嫌がるだろう六助の下のベッドに腰を下ろすと、さつきからひそかに俺に注意を向けていたコージーがその隣のベッドを選ぶ。幸村君はしばらく俺を恨みがましく睨んでいたが、やがて残ったベッドに向かう。

……さて、今の攻防でそれぞれの生徒の性格や能力がある程度掴めたね。

リユンケルと六助はグループメンバーのことなど一切眼中に無く、ひたすら我が道を

貫いている。そして状況判断能力に優れ、他の生徒よりも抜きん出て行動が早い。

石崎君と山田君は表面的にはリユンケルと仲違いしたように振る舞っているが、やはり内心ではまだリユンケルのことを慕っている。現にさつきも俺が合図を出した直後リユンケルがどうするのか、いち早く視線を彼に向けていた。

Bクラスの3人は残りの上段ベッドが2つになったので、とりあえず2人が2つの上段ベッドを抑えてから、誰が下段になるか律儀にじゃんけんして決めていた。結果抑えた内の1人が下段を使うことになったが、それに対して特に不満に思っていないときた。流石正解ちゃんのかラスらしく協調性が高いね。

幸村君は真面目で誠実だけど少々頭が固い。予想外の展開や緊急時に対応が遅れるタイプ。

そしてコージーはベッドを取りに行こうともせず、幸村君と駄弁っている間もひたすら俺に注意を向けていた……と。

自分で揃えておいて何だけど、一癖も二癖もありそんなラインナップだね。

ちなみにこの日はこれ以降完全に自由時間となっているので、真つ当なグループならこの間に生徒同士で親睦を深めるなどして結束を強めるのがセオリーなんだろうけど……たかが1日でこの私の強い面々の親睦が深まるわけないしやるだけ無駄だね。そもそも俺は他人と親睦を深めるのは得意だけど、他人同士の親睦を深めるなんてやった

「こともない。」

「……まあ無理に仲良くしなくてもいいよね。」

「はい皆ちゅーもーく。とりあえず責任者なんてもんになっちゃったことだし、明日からのグループの方針を説明するからちゅーんと聞くように」

ベッドから立ち上がり全員に呼び掛ける。

ふむ……真剣に聞き入っている奴が5人、興味なさそうなふりしているが内心気になつていいる奴が1人、全然興味無いけど耳だけは傾けている奴が2人、話を聞きつつも俺の一挙手一投足を入念に観察している奴が1人か……まあ上々かな？

「とりあえずメンバーがメンバーだし、無理に仲良くする必要は無いかな。個人個人がそれぞれ頑張つて、誰かが躓いたら余裕のある奴がその都度いい感じにフォローするという方針で」

「はあ？ いや別にこんな奴等と仲良くするつもりは無えけど、責任者のお前ががそんなんでいいのかよ？」

「おや石崎君、興味無い振りはもういいの？」

「っ、うるせえよ！」

「僕もそれはどうかと思うな。今回の試験はグループの結束がものを言う筈だよ。それなのにそれを最初から放棄するなんて……」

「そうは言うけどね浜口君、明らかに集団の輪を乱しそんな奴から優先的に獲ってったんだからしょうがないじゃん。この面子で結束とかそういう正攻法な取り組みができると思ってるの？」

「それは、そうかもしれないけど……」

俺の指摘に浜口君は言葉に詰まってしまふ。Bクラスの参謀との呼び声高い彼だが、きつとこのグループの親睦が深まった場面はまるでイメージできないだろうね。

「待て本条。お前の方針は一見合理的に聞こえるが、真面目に試験に取り組んだ上で躓いた奴ならともかく、真面目に取り組もうともしない奴のフォローなど誰もしたがらない。それどころか他のメンバーの士気にも関わってくるぞ」

Bクラスの眼鏡と入れ替わるように、Cクラスの眼鏡が六助に視線を向けながら異論を唱える。まあ確かに自分が真面目にしているのに、横でサボられたらやる気も無くなるだろうね。

「ああ六助なら大丈夫。真面目には取り組まないだろうけど、道連れにはできない程度の成績は取るだろうよ」

誰かが試験をボイコットしたせいでグループが最下位になり退学のペナルティを受けても別に恨みはしないが、真面目に取り組んだ他のメンバーの気持ちも汲んでそいつは容赦無く道連れにさせてもらうつもりだ。そしてその可能性を考慮に入れないほど

六助は愚鈍ではない。

「マイフレンドよ、少しいいかね？」

「何？」

「どうやら君の中での私は必ず退学を避けようとするとは確定しているようだが、そうだとおもうに至った根拠は何かかな？」

「んー……この学校に入学したから、かな？」

六助は日本有数の大企業の跡取り息子。この学校最大の売り出し文句、Aクラスにのみ与えられる特権など彼にとつては塵芥程の価値も無い筈。にもかかわらず六助はこの学校に入学したということは、彼にはこの学校に通う何かしらのメリットがあると考へていい。この学校に何の価値も無いというなら、彼の性格上卒業を待たずしてさっさと自主退学してもおかしくないだろうしね。

……そういう意味を極力ぼかして答えたのだが、意図はちゃんと伝わったらしく六助はパチパチと拍手をする。

「ブラボー、君のご明察通りさ。たしかに私は退学になるつもりはない。今回の試験も必要最低限の結果は残すつもりだから安心したまえ」

「はいよー。……はい、これで解決——」

「まだ解決はしていないぞ。試験そのものをボイコットしなくても、どの道手を抜くこ

とには変わりないだろ。責任者のお前がそれを認めてしまうと、他のメンバーが手を抜いても咎められないぞ」

「うん、そうだね。だから誰が手を抜いても別に咎めやしないよ?」

「つ!?それじゃあ勝てないだろ!……それとも何か、これまでのようにお前1人でどうにかなるでも思ってるのか?そうだとしたら流石に思い上がり過ぎるぞ」

「別にそこまで自惚れちゃいないさ。グループ全体の平均で優劣をつけるんだから、たとえ俺が満点でも君達があまりにも不出来だと流石にどうしようもない。しかし六助の手抜きを容認するからには、君達が同じことをしても咎められない」

「それがわかっているなら高円寺を――」

「だから君達が六助なんか無視して頑張れるように、毎日成績に応じて順位をつけようと思う」

「「はっ。」」

幸村君のみならず、話を聞いていたグループメンバーの何人かが呆けているので、丁寧に説明をしてあげるとするか。

「明日から合宿が始まる。きつと多種多様な試練をグループ全体で乗り越えていかなきゃならない。だからそのときの君達の働き、グループへの貢献度を俺が点数化し格付けをして、毎晩寝る前に君達に発表する」

「……それで、成績の悪かった奴に何をしようってんだよ？」

話を聞いていた石崎君が、不機嫌そうにそう問いかけてくるが……

「いや、別に何も」

「……はあ？」

「ただ順位を発表するだけー」

「おちよくってんのかテメエ!? そんなことして何の意味があるってんだ！」

「いやいや意味ならちゃんとするよ。特に君みたいな子には効果的だ」

このグループには集団の輪を乱すほどの、極めて私の強い面々が集まっている。……
だけど私が強いってことは、それだけプライドも高いってことだ。

「……? どういうことだよ？」

「それじゃあ想像してごらん? 令和のジャイアンの存在である石崎君は、不真面目な態度で特別試験を適当に取り組んでしまいます」

「なんかムカつくんだけどその語り口調!? あとジャイアンは令和でもバリバリ現役だろ
!」

「グループの取り決めによりその夜に順位が発表されますが、散々グループに迷惑をかけまくった石崎君は当然最下位です。ぶつちぎりで足手まといです。てんで役立たずです。ゴミです」

「言いたい放題かテメエ!」

「勿論自己チューな石崎君は、そんなこと知るかとまるで反省する様子もありませんでした。しかし翌日の昼くらいに、色んな生徒にくすくす笑われ、または生暖かい目で見られていると気づきます」

「ああ……?」

怪訝そうにしながらも石崎君は……彼だけじゃなく六助とリユンケル、コージー以外は俺の話に聞き入っている。

「手近にいる生徒を捕まえて聞き出してみると……」

なんと、グループで断トツビリだったことが全学年に広まっているじゃないですか」

「「っ……………!?!」」

石崎君達の顔が強張る。どうやら俺の意図をようやく察してくれたらしい。

「…………もうわかったよね?もし露骨に手を抜いたりしたら俺は持てる人脈を十全に使えるだけだけ多くの生徒にその悲惨な成績を拡散するつもりだよ。『この人威張ってるけどビリッケツなんだな……』と他人から生暖かい目で見られたくなかったら全力で頑張ってね」

「ふざけんなよ本条!だったら手を抜くって公言した高円寺の野郎も!」

「もちろん六助も特別扱いはせず拡散するよ？彼が気に病むとも思えないけど」

「当然さ。周りの凡人達が私をどう評価しようが、私が最強にして最高であることは私自身がよくわかってるからねえ」

「……とまあこのように、周りからどう思われても気にしないなら遠慮無く手を抜くといいさ。重ねて言うけど、俺はそれを一切咎めやしないよ」

ふむ……俺に対して不満や警戒を抱いてはいるけど、これでほとんどのメンバーは六助が好き勝手しても手を抜いたりしなくなっただろう。ヤンキーは舐められたらおしまいだし、順位をつけられると大抵の人は上位を狙いたくなるものだしね。

合宿の幕開け

そんなこんなで初日の食事、バスを降りてから初めて女の子達と交流できる時間がやってきた。

全校生徒が集まっても問題ないように食堂はかなりの人数を収容できる造りになっていて、普通なら携帯が無いこともあり特定の人物と合流するのも一苦労するのだろうが、俺には足の爪先くらいは人外の領域に踏み込んでいるんじゃないかという疑いのある眼力があるので実に容易い。

茜先輩にもちよつかいをかけておきたいところだが、とりあえず今日はすぐに有栖と合流しよう。拗ねられると面倒なことになりかねないし、何よりやつぱりちよつと心配だし。

既にマスマンと一緒に席についている有栖を捕捉し、食事のトレーを持って向かいの席に腰を下ろす。

「やつほ有栖。体の調子は大丈夫？」

「ええ、今のところ何の問題もありません」

「ここ山岳地帯だしやたら寒いから暖かくして寝るんだよ？あとグループのメンバーに苛められたらすぐに俺に相談してね」

「アンタはお母さんか」

「やつほマスマシン。橋本と同じツツコミだったね」

「……最悪」

呆れたように溜め息をついたかと思えば、この世の終わりかのような凹み方をするマスマシン。流石にそれは橋本に失礼じゃないかな？別にいいけど。

「まあAクラスの母ことマスマシンがいるし、確かに取り越し苦労かね」

「一度たりとも呼ばれたことないわよそんな通り名」

「真澄さんの美点はクラスの方々にもまだ認知されていないですしね。……しかし桐葉、少々私を見くびり過ぎではありませんか？確かにこの身は脆弱ですが、だからこそ体調の管理を怠ったことは今まで一度としてありませんし、私に悪意を向ける輩は知恵と謀略を駆使して全て振じ伏せてきたと自負しています」

「いやまあそうだけだよ……有栖はコエンザイムQ10より弱っちいんだから、心配の1つや2つしちゃうってどうしても」

「あなたにとつて私はサプリメント以下ですかそうですか怒りますよ？」

「ごめんちゃい」

「まったく……」

頬を膨らましてそっぽを向く有栖。桐葉君は空気が（読もうと思えば）読める子なので、彼女の耳元が赤くなっていることや若干頬が緩んでいることは見なかつたことにする。「ほんとは俺が身を案じていたことに少なからず喜んでいたので？」なんてデリカシーの無い指摘もしない。

「まあ時間はあまりないし、そろそろ本題に入ろうかな。……なんで有栖、Bクラスの女の子達から敵意向けられてんの？」

何気なく俺が指摘すると近くにいた女子生徒達がビクリと身を震わせ、苦い顔を浮かべながらそそくさと俺達から遠ざかっていく。小橋ちゃん、津辺ちゃん、二宮ちゃん、南方ちゃん……やはり皆Bクラスの生徒だ。

「なんとまあ、意気地の無い方々ですね」

「トラウマでも残ってるんでしょ。Bクラスは特別試験のたびに本条に蹂躪されたみたいだし」

「蹂躪とか人聞きの悪い言い方しないでよ。……それで有栖、いったい正解ちゃんにどんな悪意をぶつけたのさ？」

「貴方も人聞きの悪い言い方をしないでください。小グループ決めの際、一之瀬さんは信用できないから組みたくないし、私のお友達を任せたくもないとはつきり言っただけ

ですよ。肝心の理由については敢えて曖昧にしましたが」

「……この試験が終わったら仕掛けるんだね？」

「理解が早くて何よりです」

以前より有栖は卍解ちゃんを壊す予定を立てていたが、今回の合宿中に布石を打っておくつもりだろう。卍解ちゃんは同学年で最も周りから信頼されている生徒と言っても過言ではない。有栖がそんなことを言い出したら周りの子、特にBクラスの子達から顰蹙を買う。それを差し引いてでも卍解ちゃんの信頼を貶めるようなことをした理由は……

ちらりと結構離れたテーブルにいる卍解ちゃんの方に視線を向ける。どういう意図か彼女の近くでひっそりと聞き耳を立てているコージーは置いといて、周りにいる生徒の大半は彼女に心配そうな視線を向けている中、ほんの微々たるものとはいえ疑いの目を向けている生徒も僅かにいるようだ。

「……どうやら目論見は上々のようだね」

「そうですか、それは良かったです」

「何にも良くないわよ。アンタが余計なこと言ったせいでグループ決めはグダグダになるし、一之瀬の取り巻きはヒステリー起こすし、他のクラスのほとんどから私まで白い目で見られるし……巻き込まれた私からすれば散々よ」

「と言いつつ進んで私と同じグループに入ってくれる真澄さんが私は大好きです」

「流石マスミン、ツンデレ乙」

「マジでぶん殴るわよアンタら……!」

おっと、マスミンの血圧がいい感じに上がってきましたな。流石に気の毒だからそろそろ自重してあげよう。

「そっちはグループ決めに手こずったみたいだね」

「ええ、揉めに揉めて円満に決まった頃にはお昼を過ぎてました。……橋本君から聞きましたよ、難物ばかりのグループを結成したそうですね」

「うん、悪い?」

「私は別に構わないですが、クラスの方々の……特に葛城君の不満は貴方が受け止めてくださいね」

「あいあいさー」

グループのメンバー1人ずつに報酬が支払われるため真にクラスのことを考えるならば、大半がAクラスの生徒で構成されたグループが1位になることこそ最善だが……そんなこと知ったことじゃない。クラスへの旨味が限りなく低かろうと俺はトップを取りに行く。

有栖も俺がそうするとわかっているみたいだが、俺のグループがトップを取る前提で

忠告してくるとは、よほどダンスを舐め腐ってるのかそれだけ俺を評価してくれているのか……両方だね、たぶん。

その後はジブリ映画の最高傑作は何かについて熱い議論を交わしつつ昼食を終えた。俺と有栖の間で起きたこの手の議論は終結した試しが無い。不毛だとわかっていてもやめられない止まらない。

翌日の早朝6時過ぎ。

室内はまだ暗く、薄いカーテンの向こうからは差し込む日の出も見えない。

バスで目を通した資料によると、あと少ししたら室内に目覚まし用のアラームが鳴り響くらしいが、せっかくなのでここで少しばかりお茶目さを発揮しておこう。持ち込んだフライパンとおたまを持って、設置されたスピーカーから音がしたとほぼ同時に……「右手におたまを！左手にフライパンを！横たわりし者に正義の鉄槌を！秘技、死者の

目覚め！」

カンカンカンカンカン！

「うぐああああ!!?……うるせえんだよ!本条 teme エ何しやる!」

「Are you crazy?! Noisy Shut up!!」

安眠を妨げられたDクラスの2人が怒りに任せて、枕だの布団だのを投げってくるが全て華麗に避け、虎視眈々と隙を伺っていたリユンケルも目配せして牽制しておく。はいそこ、舌打ちしない。

おっと、荒くれ3人衆ほどではないが最悪の起こされ方をしたグループメンバーのほとんどが、恨みがましい視線を向けてくるではありませんか。

「はい皆、ジャージに着替えて指定の教室に集合だよ。あまり時間に余裕も無いからキビキビ動いてね」

「いや何事も無かったかのように移行してんじやねえよ!!?なんだあの非常識な起こし方は!」

「ぎゃーぎゃー文句言うけどね石崎君、アラームが鳴っても起きない寝坊助な君達が悪いんじゃないか」

「ほう?そいつは妙だな。あのスピーカーから音が鳴ったとほぼ同時に teme エがふざけだしたような気がするんだが」

「リユンケルの気のせいだね間違いない。まあ見た感じ皆不服そうだし、明日からは普通を起こすよ」

「「最初から普通に起こせ！」」

「どうかこのためだけに、そんな嵩張る物を持ち込んだのか……?」

何やら理解不能な目で見てくるけど幸村君、エンターティナーであり続けるコツは手間を惜しまないことだぜ?

「やおおはよう諸君」

皆が支度をしている途中、健康的に汗をかきながら爽やかな笑顔で六助が部屋に入ってきた。

「どこ行つてたんだよ高円寺」

「ふふ、今日は良い目覚めでね、朝のトレーニングに精を出していたのさ」

「今日からどんな課題が待っているかもわからないだぞ。無駄に体力を浪費する真似は——」

「まあ大丈夫じゃない?」

六助の好き勝手を咎める幸村君を遮りつつ、六助の顔面目掛けて軽めに蹴りを放ち、六助はそれを悠々と片手で受け止める。

「いきなりご挨拶だねマイフレンド」

「ね？ 咄嗟にこんなことできる奴が体力面で遅れは取らないでしょ」

「いや待っていきなり何やってんだお前は!?! そんな龍園みたいなことする奴じゃなかっただろー!」

「俺を引き合いに出すんじゃないやねえよ眼鏡」

「だから時間が無いって言ってるでしょ。四の五の言わずにさっさと行くよ、朝ご飯が俺達を待っている」

「あ、ああ……」

何やら釈然としない思いを抱きつつも、幸村君は支度に戻る。……よし、どうにかカオスにして誤魔化せたな。ついさつきまで六助のトレーニングに付き合ってたのバレたら俺まで巻き添えになるところだったぜ。

リユンケルとコージーだけは何か言いたげな視線を向けてくるが、何も言わないなら放っておく。

俺達は部屋を出て、大グループごとに指定された教室に集合する。年上の威厳を示したかったのか既に2、3年の生徒は集まっていた。六助とリユンケルは完全に無視する一方、それ以外のメンバーは軽い挨拶を済ませる。そして俺は同グループになったみやびん会長に近寄っていく。

「はよぎーすみやびん会長」

「流石に崩し過ぎだ。ほんとに物怖じしない奴だなお前は」

「そいやなんで瀬川先輩と別のグループなんですか？ やっぱ友達だと思ってたのは瀬川先輩だけだったんですか？」

「やっぱりつてなんだやっぱりつて……俺にも色々事情があるんだよ。あいつが恋しいならドラフトであいつのグループを選べば良かっただろうが」

「別に進んで獲得したい訳でもないですし。瀬川先輩は俺にとつて鶏肋のような存在ですから」

「お前あいつのこと舐め腐ってんのな……」

そんな感じで2年の先輩達と雑談にはなを咲かせていると、ようやく3—Bの小野寺先生が教室に入ってきた。

「これより点呼を行った後、毎朝の日課として外に出て指定された区画と校舎の清掃を行う。それから今日からの授業には学校の教師の他、様々な課題を担当する方々もいらつしやるので、しっかりと挨拶し粗相の無いよう心がけるように」

そんな短い説明を受け、俺達のグループは清掃へと向かった。さてと、笑いあり涙ありの特別試験の始まりだぜい。

混合合宿①

小野寺先生によって案内された場所は、晝の敷き詰められた道場のような部屋だった。どうやら他グループの一部とも同時に課題が行われるらしく、橋本がいつものように軽薄な笑みを浮かべてこちらに歩み寄ってくる。

「はいストツプ。橋本、晝の縁踏^{へり}んじやダメだよ行儀悪い」

「は？へり？」

「緑色の部分のこと。理由はまあ色々あるけど、踏むのは無作法にあたるから注意してね」

「これそんな名前だったのか」

「今は特別試験中だし、減点されかねない行動は慎まなきゃね」

俺達の会話が聞こえていたのか、集まった生徒は露骨に足下に気を配り始める。課題を担当するいかつい顔のおじさんはその様子を何やら満足そうに眺めていたが、ほどなくして話を切り出す。

「今日から君達には毎日、朝と夕方にここで座禅を行ってもらおう」

「座禅とは、人生で初めてでござるなあ……………な、なんでござろうか?」

外村君の何気ない呟きを見咎め、強面のおじさんは彼に近寄り圧をかける。……ああ、やっぱりそういう内容か。

「お前のその口調は生まれつきか?それとも、何かしらやむにやまれぬ事情があるのか?」

「そ、そういうわけではござらんが……」

「そうか。どんなつもりで使っているのかは知らないが、ここではそれも減点対象だ」

「な、なんですと?」

「初対面の相手にそんなふざけた口調で話しかけられたら、相手がどう感じる思う?これから社会へ出ていく以上、他者への配慮が欠けた言葉遣いは矯正することだ」

あまりにドストレートな正論かつ圧のある指摘に、でかい図体を思いきり縮こませてしまう外村君。何をしようかとオール自己責任というスタンスの学校に慣れちゃった子には、結構カルチャーショックが大きいだろうね。

そしておじさんは外村君のみならず、集まった生徒全体にも勧告する。

「社会の中で個性を出すなどは言わん。しかし相手を思いやる気持ちは決して忘れてはならない。ここではそういったメンタルに影響を及ぼす授業を行う。その一つが座禅だ。言葉や動作を止め集団に溶け込む。相手を配慮し考えるのだ……自分はどんな人

間か、何をすべきなのかをな」

そしてグループごとに座らされ、座禅の仕方やこの部屋での色々なルールの説明を受ける。

そして実際に座禅を行うのだが、意外とできない生徒が多いみたいだ。コージー、六助、リユンケル、山田君あたりが特に問題も無く結跏趺坐（あぐらを組んだ後、それぞれの足を太股の上に乗せた状態）を組んでいた。この4人、特にリユンケルがおとなしく座禅を組んでいる様子は大変腹筋によろしくないが頑張つて耐えた。他の5人のうち石崎君と墨田君は痛そうにしながらもどうにか形だけは何とか取り繕っていたが、浜口君と別府君と幸村君はどうしても組めず、半跏趺坐（片足だけを太股の上に乗せた状態）から始めていた。股関節の柔軟が必要だね。

初回は大半を説明に費やしたため5分という短い時間だったけど、おそらく本番の試験ではちゃんと結跏趺坐を組めるかどうか評価の分かれ目になるだろうね。

朝の清掃と座禅を終え、朝7時になったところで皆お待ちかね朝食タイム。

案内された室外には広々とした食事スペースが用意されていた。複数の調理場も用

意されていることからして、たぶん自分達で作れってことだろうね。

「今日のところは学校側が提供するが、明日からは朝食は各自グループ内で作ることになる。人数や分担方法は全体で話し合って決めるように」

「おいおいマジかよ。飯なんて作ったことないぞ」

「おいおい石崎君、これまで家庭科の時間何してたのさ？」

「わ、悪かったな！中学んときは少しばかり荒れてて、そんなもんロクに受けてこなかったんだよ！」

いやいやそんなさも今は品行方正に生きています、みたいな弁明されてもねえ……。

明日以降の調理方法の説明を受けながら朝食の準備が進められていく。献立は一汁三菜を基本としたシンブルなもの。

食べ盛りには少々物足りない内容に石崎君がげんなりとする一方、無人島のとくに比べれば全然いいと幸村君は安堵していた。このあたりは特別試験を早々にリタイアした子と、最後までやり遂げた子の差だろうね。

食事中に俺とみやびん会長と石倉先輩ら3人の責任者の話し合いにより、食事当番は各学年2回ずつ、1回ごとに交代するローテーション方式に決まる。

それで誰が担当するか、だけど……

「まあ俺は責任者だからやるとして、あとは何人が適当にクジで選んでもいいんだけど、

進んで立候補してくれるというカインドネスに満ち溢れる人がいたら手をあげて……意外にいたね」

Bクラスは3人とも、Cクラスはコージーと幸村君、そしてDクラスは意外にも山田君が手を上げた。

「お、おいアルベルト。お前料理とかできたのかよ?」

「Of course, I usually cook for myself.」

「は、え……?」

「普段から自炊してらんだってさ」

「わかるのか本条!」

「むしろ今のわからないの石崎君……?」

朝食を済ませた後は大グループごとに普段の教室よりも広い教室に集まり、本格的な授業を受けることになる。

席順は自由かつ上級生の小グループはまだ来ていないので、どこに座ろうが構わないのだが……

「どうする皆?別に適当に座ってもいいんだけど、たまには先輩達の顔を立てるために待つてあげよっか?」

「何様だお前と言いたいところだが、確かにその方がトラブルが少なくて済むな。……」

だから勝手なことにはするなよ高円寺に龍園」

「ククク、別に構わねえよ」

「席が自由なら好きに座るべきだと思うがねえ」

絶対に好き勝手に座ると思っていた二人は、意外にも先輩達を待っていた。無法ではなく自分の決めたルールで動く六助はともかく、ここまで不気味なほどおとなしいリュンケルに何人かの子が警戒しているね。彼とコージの間にあつたこと知らないなら仕方のない反応かもしれないけど。

やがて上級生が来て席順を決めることになったのだが、だいたいは小グループごとに固まる中、自分の隣で授業を受けないかとみやびん先輩からお誘いがあつた。面白そうだったので二つ返事で了承する。

「お前らのグループ構成を見て少々心配もしていたんだが……見た感じ特に苦もなくまとめられてるようだな」

「まあこういうのは別に苦手じゃないですからね。あまり好きじゃないだけで」

「念のため釘を刺しておくが、この俺に勝った奴が退学になんてなるなよ?」

「それはまあ、彼等の頑張り次第ですね」

要約すると勝ち逃げは許さないってことだろうけど、俺達の話聞いていたであろううちのグループには良い刺激になったかもね。リュンケルや六助、コージのような心

臓に毛が生えてる連中でも無ければ、この学校で生徒会長に目をつけられたくはないだろうから。みやびん会長ぐつじよぶ。

授業の内容はやはり施設の説明やこの一週間で学んでいくことの説明に大半が費やされたが、昼からはグラウンドにて持久走をメインとした基礎体力作りだった。最終日の試験では駅伝も行われるらしく、数日後にはコースにも出るとのことだ。

「はあ、はあっ……」

持久走が終わった直後、見た目通り体力の無い幸村君は膝をついてどうにか息を整えている。

「おいおいこの程度でへバンのかよ。あまり俺らの足引つ張んなよな」

呆れたように溜め息をつく石崎君だが、ここで放置するのは後に禍根を残しそうなので彼に詰め寄る。

「な、なんだよ……っ?」

「さっきの侮辱はちよつと見過ごせないな」

「アイツが足手まといなのは事実じゃねえか」

「彼が体力不足なのは怠惰によるものじゃなく、これまでほとんどの時間を勉強に費やしてきたからだよ。……遊びもせず寝食も惜しんでね」

「うっ……!」

本人から聞いたわけではないが普段の成績や利き手の人差し指にできたペンだこ、それに長時間に渡り机作業をしてきたであろう股関節の硬さからして間違いないだろうね。

「おいそれと馬鹿にしていることじゃあないよ。まあ……それでもなお意見を変えないというなら、もういいけどね」

「ひっ」

彼は少々無神経かつデリカシーが無いけど、決して下衆ではない。優しく諭すとわかってくれたのか、少々顔を青くしながらも石崎君は幸村君に近づいていく。

「えつとその、なんだ……悪かったな。事情も知らず好き放題言つてよ」

「……いや、別に構わない。俺もこの学校に来てから何度も体力不足を痛感させられている」

うんうん、仲良きことは美しきかな。

なんか石崎君に怯えられたり、何故かコージーからの警戒度がかなり上がっちゃった

みたいだけど、まあ些細な問題だ。

今日も有栖達と夕食を済ませてから、有栖に承認を貰ってから茜先輩に構ってもらいに彼女のもとに向かうと、何やら俯きながら一人でご飯を小動物みたいにちまちまと食べていた。

「……………」

念のため茜先輩の周りを観察し、これがみやびん先輩の策略であると確信を抱きつつ、予定を変更してごく普通に隣の椅子に腰を下ろす。

「どしたんすか茜先輩？」

「っ?!本条、君……………」

俺がそう問いかけると茜先輩はびっくりしたように即座に顔を上げたかと思えば、毅然とした表情を取り繕う。…………つくづく思うけど、嘘や隠し事が見抜けるって良いこと

ばかりじゃないよね。

「な、何がですか？」

「いや、『私、困ってます』って顔に書いた状態で不味そうにご飯を食べてたんで何事かと……」

「私は別に何も困ってませんよ。不馴れな環境でちよつと食欲が無いだけです」

「ふむ、なるほどそうですか。それじゃあ俺は忙しいのもう行きます。試験頑張ってくださいね」

「……？今日は随分とまともですね。いつもならもつと滅茶苦茶に私を振り回すのに」

「ははは、流石に体調が良くない先輩に狼藉は働けませんよ」

「体調が万全でも先輩に狼藉は働かないでくださいっ」

。ぶんすかとかあざとい怒り方をする茜先輩に癒されつつ、俺は食堂を後にする。

茜先輩は意外と頑固な人だし、ああなつたら説き伏せるのは少々骨が折れる。ここはコランダム先輩や元主将さんにでも報告……あれ、有栖？

「ごめんごめん、大丈夫？」

「ええ……心配要りません」

廊下で数人の男女が集まっており、その中心には尻餅をついた有栖と申し訳なさそうに手を差し伸べるCクラスの山内君。

エベレストよりプライドの高い有栖は彼の助けを借りることをよしとせず、自力で立ち上がるうと杖を掴み壁に背を向けるようにしながらゆつくりと立ち上がった。……ありやりや、内心大分キレてますなうちのお嬢様。こんな悪目立ちは不本意も不本意だらうし。

山内君はどことなく居心地悪そうに手を引つ込め、一言残して離れていく。集まった生徒達も騒動にならなかつたことに安堵しながら散つていく中、

「坂柳ちゃんつて可愛いけどさ、ちよつとどんくさいよな」

山内君はとんでもない一言を呟いた。

呟いてしまった。

……あーあ、御愁傷様。

心疾患持ちを転倒させておいて言うことがそれか？とか、常識で考えれば他に色々言うべきことも多々あるんだろうが、何よりもまずは彼を憐れんであげるべきだろう。

意外と地獄耳な有栖はその最低な呟きもバツチり拾つたみたいだし、今も偶然通りかかったコージーと仲良く談笑しつつも、内心は間違いなく怒り狂っている。

山内君がこの学校を無事卒業できる可能性が完全に潰えたことに合掌しつつ、コラんだム先輩達のもとへ向かおうとしたものの……少々予定を変更して、真嶋先生を探すことに。下手すれば茜先輩に一生口きいてもらえなくなるかもしれないが、どうしても確

かめておかないことができてしまった。

単なる偶然か持ち前の幸運体質のおかげか、真嶋先生は割とすぐに見つかった。

「先生先生、ちよつと相談があるんですけど」

「お前が誰かに相談とは珍しいこともあるものだな。まあいい、担任としてできる範囲で力になろう」

「あざっす。あ、その前に一応確認しておきたいんですけど……」

この学校って、大抵のものはポイントで買えるんですけどよね？」

混合合宿②

消灯時間まであと1時間。

俺は共同部屋にて結跏趺坐を組めなかつた子達へ実践を踏まえたアドバイスを行っていた。

「……よし、とりあえず君達2人はある程度は形を取り繕えたね。あとは今日から毎日朝昼晩と入念に柔軟を行えば、もう少し洗練されるんじゃないかな」

「ありがとう本条君。……でもいいのかな？ 今日教えられたやり方と微妙に違う足の組み方だけ」

「念のため確認しておいたけど、明らかに無茶苦茶でなければ構わないってさ」

骨盤とか足の長さとか身体構造は人によってバラバラだ。画一的なやり方に拘り過ぎるのは不平等が生じるし、それに座禅において何より大切なのは心の平静を保つことだしね。ともかくこれで浜口君と別府君はもう大丈夫だろうし、あとは……

「うむ、なんていうか……マジで体固いね幸村君」

「すまないな本条……」

「いいっていいって、君が真面目に取り組もうとしてるのはわかっているから。……しかしこれだけ固いとなると、よほど勉強に打ち込んできたんだろうねえ」

「ああ、俺は今まで勉強しかしてこなかった。年の離れた姉にいつも生徒役みたいなものをやらされていた。……明らかにおかしい難易度の問題を出してきたり、結構無茶苦茶な姉だったな」

「なるほど、それで幸村君はそんなに勉強ができるのか」

別に聞いてもないのに何か語り出した幸村君に、浜口君が納得したように頷く。眼鏡同士通ずるものがあるのか、この二人は今日一日である程度親睦を深めたいらしい。

「それもあるが、スポーツ選手にでもなる人間以外は運動能力なんて伸ばしても意味が無いと思うっていたからな。元々運動が得意でなかったこともあり、ひたすら長所である学力を伸ばすことに重きを置いた。……この学校に来た当初は、何故勉強の出来る自分がAクラスじゃないのかと納得がいかなかった」

その時を思い出すかのように、幸村君は閉口して俯いた。……なんかどつかの誰かとカブツてるね。

「だがこの学校では、かつて切り捨ててしまったものも必要になってくる。足手まといだと思っていた須藤が、無人島や体育祭では俺なんかよりもよっぽど役に立ってた。輝いてる姿を、傍で見させられた」

「……」

「今回の試験もそうだ。きつと俺は運動面ではことごとく足を引つ張つてしまふだろうな……」

「そだね、だから頭脳労働は期待してるよ。運動面はまあ、そういう方向でしか頼りにならない子にでもカバーしてもらえばいいさ。……というわけで石崎君ガンバ！」

「おい待て!? 誰が肉体労働専門のバカだコラ！」

えー? でもリユンケルも「事実だろうが」と言いたげな表情してるし概ね間違つてないよね?」

「じゃあ石崎君に問題。おばあさんは帽子を1つ編むのに1時間かかります。そのおばあさんが50人いたとして帽子を50個編む場合、何時間かかるでしょう?」

「あ? そんなもん50時間に決まつてるだろ」

「「……」」

「な、なんだよお前ら……」

石崎君が頭脳労働ではまるで役に立たないと証明されたところで、部屋の扉が軽くノックされた。

消灯時間間近に誰が来たのかと皆が不思議がる中、入ってきたのはまさかのみやびん会長。

「まだ起きてるか?」

「見ての通り寝てます」

「バツチり起きてるじゃねえか」

みやびん会長が呆れたような表情を浮かべる中、彼に続いて副会長の桐山先輩に3年の石倉先輩と津野田先輩も部屋に入ってきた。

「どしたんすかゾロゾロと」

「同じグループとして様子を見に来たのさ。悪いがちよつとお邪魔するぞで」

「邪魔するなら帰ってください」

「新喜劇か」

「随分と肝の据わった1年だな。……それで南雲、1年生の部屋にまで連れてきてどう親睦を深めるつもりだ?」

石倉先輩はそう問いかけるが、みやびん会長が答える前に話の流れにまったく付いていけないグループメンバー達を代表して、幸村君がおずおずと口を挟む。

「あ、あの南雲先輩……親睦とは?」

「グループとして様子を見に来たって言ったろ?ここじゃあパソコンだの携帯だの娯楽らしい娯楽はまるで無いが、まったく遊ぶものが無い訳じゃない」

ニヤリと笑いつつみやびん会長はジャージのポケットから小さな箱を取り出した。

「ほう、百人一首ですか」

「チヨイスが渋いなオイ。トランプだよトランプ、合宿で定番と言えばこれだろ」

「適当に空いているスペースに腰を下ろしつつ、みやびん先輩は未開封の箱のビニールを剥がし開封する。」

「これからゲームを盛り上げるために何か賭けようと思うんだが、何かいいアイデアは無いか？」

「最下位の人は全裸で校舎一周」

「ペナルティ重すぎるわ。問答無用で退学だバカ」

「じゃあ死ぬまで語尾に『私は幸福です』と付け続けなければならない」

「何のカルト宗教だよ。ペナルティでえつつつてんだろ」

「となると最下位は生徒会長にドロップキックで決まりつつね」

「決まらねーよ。どうあがいても俺が痛手を負う羽目になるだろうが。……朝食当番を

この賭けで決めるというのはどうだ？連敗に次ぐ連敗をすれば最悪合宿の最後まで朝食を作り続けなければならないし、逆に勝ち続ければ1度も食事当番をしなくて済む」

「おい南雲、それは大グループ全体で話し合うべきだろう」

「たかが朝食当番なんだし、これくらい融通は利かせてくださいよ。……それにこのままだと本条が提案するろくでもない罰ゲームに決まっちゃいますよ？」

「……わかった」

いつものみやびん会長とはかけ離れたマジトーンの忠告に石倉先輩も引き下がり、幸村君達も同意するように無言で頷く。ちよつとしたジョークだったんだけどなあ。

まあ我らが傍若無人コンビは知ったことかとばかりに無視していた。

「高円寺と龍園、お前らはトランプで決めることに反対か？」

放っておけばいいのに、何を思ったのかみやびん先輩は2人に近づいてそう問いかけた。この人後輩の態度にいちいち目くじら立てる人じゃないのにどうしたんだろうね。

「あ？知るかよ、勝手にやってる」

「私も興味無いねえ。すでに多数決の答えは出ているようだし、好きにしたまえ」

予想通り敬意の欠片も無い2人の態度に、しかしみやびん先輩は愉快そうに笑う。

「生徒会に入らないか高円寺？お前みたい面白い奴は是非とも迎え入れたい。聞いた話じゃ能力もかなり高いらしいしな」

「あいにくと生徒会などにも興味は無いのでね。それに私は色々忙しいので、暇であろうドラゴンボーイを誘ってはいかがかな」

「ドラ……？ああ、龍園のことか。嫌いなタイプじゃないが、俺の生徒会とは合わなそうだ。すまんな龍園」

返事を返すのも面倒になったのか、リユンケルは何の反応も示さない。六助は六助で

先輩達などまるで眼中にありませんと言わんばかりに爪の手入れをしている。

その不適な態度が嫌いなクラスメイトと重なったからか、桐山先輩が不快そうに顔を歪めるのを手で制しながら、みやびん会長が二人から視線を外し戻ってくる。

「それじゃあゲームを始めようか」

「何やるんですか？ ナポレオン？」

「マイナーだし複雑だし、ルール説明しているうちに消灯時間になっちゃうわ。シンブルにババ抜きでいいだろ。参加するのは各学年から2ずつで、全6試合だ」

ふむ、ババ抜きか。……………ババ抜き、かあ。

「参加する生徒の交代は自由だが、ゲーム中に代わるのはやめてくれ」

「うーむ、とりあえず1人は責任者の俺がするとしてもう1人は……………幸村君、君に決めた！」

「俺かよ!？」

みやびん先輩がカードをシャッフルする中、俺は手近にいて色々都合がいい幸村君に手招きして呼び寄せる。

みやびん先輩のシャッフルが終わると細工防止のため石倉先輩にカードを回し、やがて俺にも回ってきたのでデールシャッフルを華麗に決める。

「手慣れたもんだな。それだけ手際がよけりやいくらでも細工できそうだな」

「心配ならもう一度切ってもらってもいいですよ?……結果は一緒でしょうけど」

俺の呟きに怪訝そうにしながらも、カードを受け取ったみやびん先輩はもう一度念入りにシャッフルしてからカードを配っていく。

「1回目は俺が配るが、2回目以降は最下位の奴がシャッフルして配る役だ」

「なるほど。じゃあここは俺から引きますね」

「いやなんでだよ、そういうのはちゃんと……よしわかった、お前から引け」

配られたカードからペアの数字を場に出していくとあら不思議、ゲームが始まる前に手札が1枚になってしまいましたとき。ここで他の人からスタートすれば、俺はゲームに参加することなく上がってしまうので妥当な判断だろう。みやびん会長もそれを理解したのか、ややひきつった笑みで手札を向けてくる。

「それじゃあ勝たせてもらいますよ」

「初手には恵まれたようだが、そう簡単には」

「はい、あがりです」

「……噂には聞いていたが、豪運にもほどがあるだろ」

「今回はまだマシな方ですよ? 結構な頻度で配られた時点でカードが無くなっちゃいますし」

「もういい、それ以上は言うな。頭痛くなってくる」

俺の幸運は運に依存する勝負であればある程不条理さを増す。特にババ抜きと神経衰弱でははつきり言つて負ける気がしない。

「だがこのゲームはチーム戦だ。まだ勝負はついちやいないぜ」

「何を言つてんすかみやびん先輩。この、圧倒的優位の状況から！学年でも屈指の頭脳派たる幸村君が！不覚を取るわけないじゃありませんか！」

「無駄にプレッシャーをかけるな！どっちの味方だお前!？」

何故か味方である筈の幸村君から怒られちゃったので、仕方がないからおとなしく戦況を見守る。

「あがりだ」

やがて石倉先輩が手持ちを全て吐き出し、続いて桐山先輩、みやびん会長があがる。

「ゆーきーむーらーくーん？もたもたしてるから2年生二人ともあがつちやつたよー？」

「し、仕方がないだろ運否天賦なんだから！」

この子のクラスつてリユニケル達のクラスとバチバチやつてきた筈だよな？なんでそんな平和ボケした考えができるのかね？ほら、リユニケルに密かに嘲笑されてるよ。

残つたのは幸村君と津野田先輩の2人。どうやら幸村君がジョーカーを握っているようだが、津野田先輩にジョーカーを引かせることができれば勝負はまだわからない。

しかし俺の予想通り、先輩はジョーカーではない方のカードを引き当てた。

「よし、これであがりだ」

「……すまん、本条」

「気にしない気にしない♪」

適当に励ましつつ彼の手元に残ったジョーカーをひったくって、わざとらしくしげしげと眺める。

「ところでみやびん会長、なんでジョーカーに目印みたいなのが付いてるんでしょうね？」

「[[[[っ!]]]]」

「ほう……」

「……え？」

幸村君が呆ける傍らみやびん会長は愉快そうに口元を歪め、他の先輩達はポーカーフェイスを保ちつつも脈拍を乱れさせた。……わかっちゃいたけど先輩ら全員グルかい。

混合合宿③

「目印って……どういふことだ本条」

「簡潔に言えば先輩達はイカサマをしてたつてことだよ、はい証拠」

話についていけず困惑する幸村君にジョーカーを返すと、受け取った彼はカードを調べてマーキングされていることに驚愕し、そしてみやびん先輩を非難するように睨む。

「……どういふことですか南雲先輩」

「どういふこと？何がだ？」

「とぼけないでください！こんなつ……こんな卑劣なことをしてまで勝ちたいんですか！？」

見た目通り真面目で潔癖気質の幸村君は、生徒会長ともあろう人物が平気で不正をしたことに憤るが、当のみやびん会長は余裕そうに薄笑いを浮かべながら肩を竦める。

「おいおい、随分と不躰だな幸村。そのジョーカーを見る限り確かに誰かが不正をしていたのは事実なんだろうが、何故俺がやったと決めつけるんだよ？」

「つ、こ、このトランプは南雲先輩の――」

「ああ、俺が合宿用に買った新品のトランプだ。さっき包装を剥がすところはお前も見
てた筈だよな？だから事前に細工するのは不可能だし、包装を剥がしてからマーキング
するにはペンが必要だ。……さて、俺はこの部屋にペンなんて持ち込んでいないんだ
が」

ジャージのポケットをひっくり返して潔白であることをアピールするみやびん会長
に、幸村君はわかりやすいくらい狼狽える。ほんとこの子簡単に言いくるめられるなあ
……。

「まったく、俺は悲しいぜ。せつかくグループの親睦を深めようとあれこれ腐心してい
たのに、心無い後輩から卑劣な人間扱いされるなんてよ」

「すつ、すみま——」

「はいストツプ、謝る必要なんてないよ幸村君」

「……え？」

慌てて謝罪しようとする幸村君を手で制しながら、俺は無関係を装っている石倉先輩
にゆつくりと近づく。普段ならたぶん放っておいただろうけど……曲がりなりにも責
任者なんて立場になったんだし守ってあげなきゃね。

「石倉先輩」

「な、なんだ本じよ——なっ!？」

ゴネられたら面倒なので問答無用で石倉先輩の左ポケットに手をつ込み、トランプの束を取り出す。

「残念でしたね先輩、俺に嘘や隠し事は通じないんですよ」

「ま、まさかそれは……」

「そ。こつちが未開封だったトランプだね」

心理的な駆け引きこそ不得手だが、幸村君は決して頭が悪いわけではない。こうしてヒントを提示してやれば1から説明しなくても察してくれる。

トリックは極めて単純。

マーキングをついたジョーカーの入ったトランプと、それと同じタイプかつ未開封のトランプ……合計2つのトランプを用意しておき、隙を見てトランプをそっくりそのまますり替えただけだ。

……ぶつちやけるならみやびん先輩が六助を生徒会に勧誘しつつトランプをすり替えていたことと、シャツフルしたトランプを石倉先輩に渡しながらも1つのトランプを彼のジャージに入れていたこと……ちゃんと全部見てました☆

どちらもマジシャン顔負けの手際で周りの注意を逸らしつつ行っていたが、残念ながらどうあがこうと俺の眼からは逃れられないのだ。……追い詰められたかどうかは別問題だけだね。

「南雲先輩、やはりあなたが……!」

「だからなんで俺を疑う? 石倉先輩のポケットから証拠が出てきたんだから、普通に考えればイカサマを行ったのは石倉先輩だろ」

「なっ?! 南雲、お前っ……!」

幸村君だけじゃなく、話が違えばかりに石倉先輩もみやびん会長を睨みつけるが、やはりみやびん会長は余裕を崩さない。

みやびん会長が用意した新品のトランプと、石倉先輩の用意したイカサマジョーカー入りトランプの柄が偶然まったく一緒だった……なんて荒唐無稽な話は普通あり得ない。少なくとも石倉先輩とみやびんはまず間違いなくグルだったことは想像に難くない。

しかし残念ながら、みやびん会長がイカサマをやったという明確な証拠は無い。俺がこの目で見た……なんて証拠として成立しない。トランプの購入経路を調べようとしても用意周到なみやびん会長のことだから、いざというときは石倉先輩をスケープゴートにするため、彼がトランプを買っていたと偽の証言をしてくれる協力者をちゃんと用意している筈だ。

みやびん会長を糾弾したければトランプをすり替えている現場を抑える必要がある……けどまあすり替えるときのみやびん先輩は、表面的には涼しい顔のまま実は非

常に警戒していた。現場を抑えようと誰かが何かしらの素振りを見せれば、その時点で実行に移さなかつただろうね。

さて、茶番はこのくらいにしよつか。

「はいはいこの辺で手打ちにしよつか幸村君。同じグループメンバーで争つても何の得にもならないし」

「なっ、何を言ってるんだ本条!?先輩達は卑怯な手を使って俺達を陥れようとしたんだぞーこのまはま引き下がれるか!」

「ただ朝食当番押し付けられかけただけだし、何もそこまで目くじら立てなくてもいいじゃないか。潔癖なのは仕方ないけど少しはゆとりも持とうよ。……それに目上に対してちよつと口が過ぎるかな。石倉先輩はともかく、みやびん会長が荷担した証拠は無いんだよ?」

「つ……し、しかしだな!状況証拠から考えれば明らかに!」

「どんなに怪しくても疑わしくは罰せずだよ。……という訳で残念ながら明確な証拠を捕まれてしまった石倉先輩、1戦目はペナルティとして3年生の負けつてことで構わないですよね♪」

「あ、ああ……糾弾は甘んじて受け入れよう」

その後幸村君は絶妙な勝負弱さで2回ほどビリになったものの、結局は各学年が2回

ずつやることになった。結果論とはいえ賭けた意味も無かつたし、学年同士の親睦どころか溝が深まった気がするけど、まあ人生なんてそんなもんさ。

あ、あと今日の小グループ順位付けは見送った。ほとんど説明だったし仕方ないね、うん。

日曜日と違って明日も休みであることから、巷ではパーフェクトホリデイとの呼び声高い土曜日だが、林間学校滞在中は午前中だけ授業がある。

木曜から始まった特別試験も早三日、大半が前途多難に思っていただろう我々のグループはまずまずの仕上がりになってたと言っただろう。

最大の懸念事項だったリユニケルと六助も、六助がちよくちよくサボってはいるがどういう気まぐれか必要最低限の働きはしてくれている。2人のスペックから考えれば手抜きもいいところなレベルだが、それ言い出すとコージーとかもそうだしこの際贅沢

は言うまい。

跳ねつ返りの強そうだった石崎君も、先日のトランプで上級生の思惑を粉砕した俺に何か思うところがあつたのか、とりあえずは指示におとなしく従ってくれている。何やらコージーに対して苦手意識があるみたいだけど、どうやら第三者には触れてほしくなさそうだから放置でいいかな。

現在午前中の3時間目の3階教室、教科は道徳。

「これからお前たちには自己紹介を行ってもらう。勿論ただの自己紹介ではなく授業の一環だ。今日からこの授業では毎回、学年ごとに決められたテーマに沿ったスピーチを行ってもらうことになる。判断基準は『音量』『姿勢』『内容』『伝え方』の4つとなっている。」

これだけしっかりルールが決められていることからして、林間学校における試験科目の1つだろう。俺の見解ではスピーチで必要なのはやはりコミュニケーション能力……ではなく自己肯定感だろうね。俺達1年生はこれまで学校で何を学び、そしてこれから何を学んでいきたいかというテーマだけど……

「では何人かにスピーチを行ってもらうおうか。内容を考える時間を取るので準備が出来たら手を上げ——」

「はいセンサー、準備オツケーです」

「ず、随分早いな……」

「まあ責任者ですし、グループの皆に大まかな流れを把握させておこつかなつて。それじゃ始めますね……えー、私が本校に入学してから最も感銘を受けたことは――」

まず聞こえの良いスピーチ内容を適当に構築し、あとは『自分はすごい』と信じ抜くことができれば、『伝え方』も『姿勢』も『声量』も意識せずとも自然と何こう、いい感じになる。

「――第一学年も残すところあと僅かとなりますが、信頼できるクラスメイト達とともに研鑽を積んでいこうと思います。1年Aクラス本条桐葉。……こんなもんでどうですか？」

「うむ、非の打ち所の見当たらない素晴らしいスピーチだったが……何故か白々しく感じてしまうな」

「そりやまあ一から十まで適当にでつちあげた内容だから仕方ないですよ」
「正直でよろしい」

休み時間になるとスピーチに苦手意識のある何人かの生徒（先輩も含む）に相談を持ちかけられたが、「自分を信じてやればできる。うまく行かなくてもそれはあなたのせいじゃなく世間が悪い」などといい加減なことを言い聞かせていたら桐山先輩から大目玉を食らった。まったく、これだから頭の固い人は……。

……。しかしアレだね、うん。

「リーダー飽きた」

「知るかボケ」

「ふふ、とりつく島もありませんね」

その日の夕食時、有栖と合流してトレーを受け取りつつ席を探していると、一人寂しく食事をしていたりリユンケルがいたのでこれ幸いとウザ絡みをすることに。

「いやほんと凄いわ君達。普段からよくこんな役回りをあんな楽しそうにできるね」

「他人を思いのままに操ることが好きだというのもありますが、私は誰かの下につくことに耐えられる性格ではありませんからね」

「プライドが高いねえ。身長は低いのに」

軽口を叩くや否や足の小指を杖で強打される。

めっちゃ痛い泣きそう。泣かないけど。

「怒りますよ?」

「怒ってから警告すんなし」

「まったく……橘先輩のことはよろしいのですか?」

「普通に対処しても良かったけど、好奇心には勝てなかったよ。でもまあ一応手は打っておいだから大丈夫だよ。……もう一生口利いてもらえないかもしれないけどね」

「……なるほど、随分と無駄遣いをしたものですね」

「やっぱ付き合いが長いだけあって理解が早いね。」

俺の取った手段、そして何故そうそんな不合理なことをしたのか……俺という人間を理解しつくした有栖だからこそ導き出せる答えだろうね。

「……はたして彼女は、貴方を揺さぶれるでしょうか?」

「さあね。正直既にあまり期待できそうにないけど、期待するのはタダだろう?」

さて、この後グループの何人かにスピーチ内容の製作を手伝う約束をしていることだし、そろそろ戻るとしますかね。ああつまらねーし面倒だ。

しかしリユニケル、さりげなくいつの間にかドロンするとはほんと丸くなったねえ。以前まで有栖と出会ったら延々と言い争ってたのに。有栖ちゃんも内心残念そうである。

混合合宿④

三日目の夜、これより一日の疲労をリフレッシュする入浴タイム。大浴場は相当な広さであるためグループ別に入浴する決まりは無いけど、向かう途中たまたまコージーと出くわしたので、世間話でもしながら仲良く大浴場へと向かう。

「……しかし幸村君の潔癖さには参っちゃうね。あれからちよくちよく怖い顔で睨んでくるし桐葉君怖い」

「とても怖がつてるようには見えないぞ。……お前が先輩達のイカサマをなあなあで済ませたことは間違った判断だとは思わない。それにグループで内輪揉めしたところで何のメリットも無い。啓誠も頭ではそれを理解しているだろうが、そう簡単に割り切れないんだろう」

「そりやまたなんとも生き辛い性格だね。……ずっと思ってたけどなんで啓誠？」

「ある理由で輝彦という自分の名を嫌っていて、啓誠と呼んでくれと頼まれたんだ」
「なるほど、そう名付けた親がろくでもない人間って訳ね」

自分の名前を誰かに呼ばれることすら嫌っていて、その理由を勝手に他人に話せない

となると、その名前を付けた親に恨みがあるか死ぬほど嫌ってるしか無いよね。

「……頼むから俺がベラベラ喋ったとか啓誠には伝えなくてくれ。俺の信用問題に関わる」

「それは構わないけど、だったらもう少ししらばつくれたら？あくまでただの推測なんだし」

「お前に嘘は通じないんじゃないか？」

「君と六助みたいに、どんなときも脈拍や意識の波長が揺らがない奴は例外かな。あと是有栖みたいに体質的に普段から乱れまくってるのも……まあそんな訳で、俺の眼は君が思ってるよりかは意外と抜け道が多いんだなこれが」

「……そんなこと他クラスのオレにペラペラ話して良かったのか？」

「別に隠す必要が無いしね。特にコージューは人の言ったことを考え無しに鵜呑みにはしないですよ？」

交流する機会はそう多くないけどまあまあ長い付き合いだし、嘘は見抜けないけど性格くらいはある程度見抜ける。

この子はランス以上にリスクが嫌いで、1%でも不安要素があれば入念な対策を怠らない。

ただでさえ有栖には宣戦布告をされたんだ、最も近い立ち位置にいる俺がひけらかし

た弱点など信用する筈が無いだろうね。

そんなこんなで大浴場につくと、ある一角にクラスもバラバラな数人の男子生徒が集まって盛り上がっていた。少し距離があるが勿論俺はここからでも何しているかバツチリ見える。

うん、なんていうか……完全に男子中学生のノリだね。

と、Bクラスのザキちゃんが何やら不思議そうにその集団を見ていたが、浴場に入ってきた俺達に気づいて近づいてきた。……のは良いけど、微かに俺に対して敵意と警戒を感じるのは何でだろうね。予想はつくけど。

「綾小路に本条か。そっちのグループは順調か？」

「まあ概ねそうなんじゃない？ ねえコージ」

「ああ。いくつか不安要素はあるが、さほど深刻なものではない」

「浜口達からも報告は受けている。龍園は意外と大人しいようだが、高円寺には少々手を焼いているらしいな」

「まあ彼は他者が制御できるような奴じゃないから仕方ないよ。そもそも最初から戦力にカウントしてない」

「クラスメイトのオレからすれば、アレでもむしろ普段よりは真面目にやっているんだがな」

まあ無人島や体育祭に比べれば品行方正と言つていいレベルだね。この差異は友人である俺の退学がかかっているから……なんて殊勝な理由では勿論なく、もし退学になったら俺に容赦なく道連れにされるからだろうね。別に彼のせいで退学になったところで恨みはしないけど、ケジメはちゃんとつけてもらわないとね。

だから六助は今後も道連れにされないギリギリのボーダーで、この合宿を取り組むだろう……というのが俺の予想だ。当たるも八卦当たらぬも八卦だけど。

「ところで本条。うちのクラスの女子から、一之瀬が坂柳に不当に貶められたと報告を受けたんだが……お前達はいったい何を企んでいる？」

「いや知らんよ。たぶん何かしら悪巧みもしてるんだだろうけど、俺の協力が必要無いときは機密保持のためいちいち教えてこないし」

別にいちいち教えられなくてもだいたい推測できるから、知らないというのは嘘なんだけど。

俺の返答に納得しなかったのかザキちゃんが難しそうな顔をする中、例の集団からBクラスの柴田君とDクラスの山内君が呼び掛けてきた。

「おつ、神崎やつと来たか。こつちこつち！」

「綾小路に本条、お前らも来いよ〜」

手招きされ2人は無警戒に近寄っていき、興味は無いけど別に忌避感も無いので俺も

それに続く。

「どうした？」

「いやさ、実は山内達とちよつと変なことで盛り上がっちゃつてさ」

「変なこと？」

「誰が一番アレが大きいのかつて話になつたんだよ」

「アレ……」

「まあ要するに「ピー」のことだろうね」

遠回しに言うなら男の子は皆持つてて女の子は誰も持っていない器官のこと。

あまりにくだらな催しに呆れた2人の視線を感じ取つたのか、柴田君は弁解するよ
うに手を振る。

「いや俺だつてガキみたいだなと思つてたんだけどさ、意外と盛り上がるんだよなコレ
が」

「こんなことで盛り上がっちゃつたら、ガキ呼ばわりされても文句言えないでしょ君達」
俺の意見に二人が同意するように頷いた後、俺達はタイミングを見て距離を置くこと
に決める。

柴田君達が談義を再開した瞬間俺とザキちゃんはその場を離れ、少し遅れてコージーも
離れようとしたみたいだが――

「今のところ誰が暫定王者だ？」

話を聞きつけたのか、やけに自信満々な態度のケン坊に捕まってしまった。がっちり両肩を捕まれていてアレは逃げられそうにない。心なしかコージーが恨めしげな視線を俺に向けてきているが無視する。すまんコージー、お察しの通りケン坊の接近にはちゃんと気づいていたけど、我が身可愛さについて君のことデコイにしちやった☆

でもクラスメイトなんだから、責任を持って君が相手をしてあげたまえ。

他クラス同士の友情の儂さを憂いながら入浴のため頭と体を洗っていると、暫定王者らしい金田君とケン坊の戦いが始まったようで……

「っしやあー！」

ケン坊が勝ったようだ。……ありやりや、興味無いのに勝手に視界に入ってくるよ。視野が広過ぎるのも考えものだ。

ふむふむ……金田君の戦闘力が150に対し、ケン坊の戦闘力は200か。その若さで大したものだよ。

自分が王者だと勝ち誇るケン坊に、何故か戸塚が食ってかかっている。……いや君の戦闘力せいぜい100だし、ケン坊に挑むのは無謀だと思うよ？

「お前なんか敵にもならねえよ！王者はDクラス、じゃなくてCクラスの須藤健様だ！」
「ドンケツから1つ上がっただけの落ちこぼれが、Aクラスの葛城さんに勝てると思う

なよ！」

他力本願かい。

ちようど頭を洗おうとシャンプーに手をかけていたランスは、戸塚の啖呵を聞いて露骨に嫌そうな表情をしている。桐葉君は空気が読めるので、ランスがシャンプーを使うことに関しては何も言及しない。

「さあ葛城さん！男のプライド、いえ、Aクラスの威信にかけて勝たなければ！」

「そんなくだらない争いに俺を巻き込むな」

「それでもないぞ葛城」

鬱陶しいくらいノリノリな戸塚に、何故か関係ない橋本まで説得に参戦した。ちなみに橋本の戦闘力は120と何の面白味も無い数値だ。

「戸塚の言う通りAクラスのプライドがある。鬼頭はもう入浴を済ませてしまったし、うちのクラスで須藤に立ち向かえるのはもうお前のソレぐらいじゃないか？」

そんなプライド捨ててしまえとか、なんでお前はクラスメイトの戦闘力を把握してるんだとか、言いたいことは色々あるけど、ちよつと面白そうな流れになってきたのでシレッとコージーの近くまで移動する。

さつき見捨てられた恨みからか、何やらジト目を向けられたが気にしない。男が昔のこと引きずってんじゃないよ。

「まったく、このままでは落ち着いて頭も洗えん」

ランスはギリギリまで嫌がっていたがやがて周囲の生徒達まで囃し立て出すと、さつさと済ませた方が早いと判断し重い腰を上げた。

「勝負は一瞬だ葛城」

「……………好きにしろ」

「ハ、これは…………!?!」

ふむ、ランスの戦闘力もおよそ200だろうね。

審判役の山内君から見ても甲乙付け難いようで、しやがみこんで2人の「ピー」をまじまじと観察する。

わー、物凄く汚ねー絵面。

「判定は…………ドロー!」

山内君の出した煮え切らない判定を不服に思ったのか、結構多くの人間が近づいて確かめるが、皆どちらが上か判断に決めかねている様子。

…………私見ではケン坊の方がコンマ数ミリ大きいと判断するが、下手に首突っ込むと審判役押し付けられかねないのでお口チャックしておく。

「…………もういいだろう」

見せ物扱いにうんざりしたのか、強引に元の位置に戻っていった。となると2人とも

暫定1位ってことになったが、ここで石崎君が不敵な笑みを浮かべて輪に入っていた。

「中々の死闘だったけど……まだまだだな！」

「はっ、笑わせんな。お前じゃ相手にならねえよ」

ちなみに石崎君は戸塚と同じく100ほど。戸塚と同じか……なんかもう嫌な予感しかしない。

「相手をするのは俺じゃねえ。……アルベルト！Dクラス究極の切り札と呼ばれたお前の出番だ！」

やっばり他力本願かい。

「お、お前それはずるいだろ!？」

「学年1を決める試合なら、アルベルトが参加しちやいけないルールなんて無い筈だぜ？」

生まれついでの人種、骨格の違う相手と比べること自体野暮だとは思いますが、石崎君の主張も間違っっちゃいない。

浴槽からゆつくり上がってきた山田君の戦闘力は、タオル越しからでも相当なものだとわかる。……というか風呂場ではサンングラス外せや。

「かかってこいやあー！」

体格差からして敗色濃厚であると感じつつも、ケン坊は恐れずに前に出る。体育祭の経験を得て一皮剥けただけのことはあるね。いやいや下ネタじゃないですよ？

見かけによらず意外とエンタメをわかっているようで、山田君は無言で佇みバスタオルを取る作業は石崎君に任せた。

「刮目しな……これが、山田アルベルトだ！」

「へ、これは……!?!」

とうとうベールを脱いだ山田君の戦闘力。

訪れる静寂。そして……

「負け……た」

王者ケン坊、膝から崩れ落ちる。判定を行うまでもない圧倒的な差がそこにはあった。ふむ、戦闘力300……流石はメジャー級と言っておこう。言わねーけど。

「これがアルベルト……ラスボスの強さかよ!?!」

あまりの戦力差に柴田君（130）、池君（90）、山内君（70）も戦意を失いその場に崩れ落ちる。

2人ほど彼に勝てる人物に心当たりはあるけど、2人ともこんなしようもない戦いに参戦してくれる訳ないしねえ……。

お開きムードが漂い始めたそのとき、

「はっはっは、君達はチルドレンのような愉快なことをしているねえ」

心当たりの1人である六助が湯船から声をかけてきた。おや珍しい、さつきまでまるで興味無さそうにしていたのに。

「んだよ高円寺、お前は悔しくないのかよ!? 見ろよ健のこの無様な姿を!」

普段のケン坊なら即山内君に蹴り入れているレベルの侮辱を受けたが、心に大きなダメージを負ったケン坊はorzのままピクリとも動けずにいた。

「知っているさ。健闘していたようだが、レッドヘアー君には荷が重かったようだねえ」
「……なんだと? てめえなら、アルベルトと戦えるとも言うのかよ?」

「愚問だよレッドヘアー君。私は全てにおいて完璧な男だ。争うまでもないなら、無益な戦いなどしないのさ」

「……とか言つて、アレの方は大したことなかったりするんじゃないの?」

「実に愚かだねえ。……しかしせっかくの合宿だ、たまには君達の兎戯に付き合ってみるのも一興か」

旅先ではみんな開放的になるって逸話、まさか六助にも該当するとは驚きだ。

「それで私の対戦相手は、アルベルト君でいいのかな?」

伸ばし棒は別に付けないでいいですよ。

「面白え……圧倒的な戦力差というものを教えてやるぜ! なあアルベルト!」

石崎の呼び掛けに軽く頷き、山田君は六助の前に立つ。彼の戦闘力を目の当たりにした六助は、面白そうに口元を歪めて拍手する。

「ブラボー。なるほどなるほど、さすがは世界レベル、どうやら伊達でチャンピオンを名乗ってはいないようだね」

「わかったか高円寺。自分がどんだけ道化だったかってことがよ」

さつきからずっと思つてたけど、なんで石崎君が勝ち誇つてるの？道化は君だよまったく。

「本来、男に見せる主義ではないのだがねえ。1度きりのサーブスだよ」

六助は傍にあつたタオルを腰に巻いて股間を隠し、ゆつくりと湯船から立ち上がる。

「や、やる気かよ……」

「勝負するまでもなかつたが、ここにいる全員が生き証人だ」

六助はポーズングを決めながらヴェールに包まれたタオルを取る。……へえ、下の毛があつてことは、六助の金髪つて地毛なんだ。

俺がそんな見当違いなことを暢気に考えている傍ら、周囲の生徒達は六助の人間離れたその戦闘力に言葉を失い、暫定王者だった山田君は「Oh my God……」と呟いて膝をついた。戦闘力は400と言ったところか。インフレも甚だしいね。……おや？

「これで私が完璧な存在だと証明されたねえ」

「お、お前ほんとに人間かよ……」

規格外とでも表現すべき六助の圧倒的なパワーに周囲が圧倒される中、俺の曇りなき眼は湯船に浸かり成り行きを見物していたリユンケル（170）の不穏な気配を見逃さなかつた。すかさず周囲を隈無く観察し彼の狙いを察知し、ここには余計な巻き添えを食らうと判断。

「それじゃ、あとは頑張つてねコージー」

「は？」

怪訝そうにこちらを見るコージーを捨て置き、俺はさつさと湯船に浸かる。

その後は概ね予想通りに進行した。コージーに色々と煮え湯を飲まされていたリユンケルが、唯一彼だけがまだ戦闘力を隠したままにいることに着目し、周囲を扇動して六助に挑ませた。まありユンケルとしてはコージーに恥をかかせてやろうという腹積もりだったんだらうけど、俺は知っている……彼の戦闘力もまた規格外であることを。

「ま、マジかよ綾小路の奴……」

「信じられねえ……」

「これはこれは……正直驚いたよ綾小路ボーイ。まさか日本人で私と互角に渡り合える人間がいるとは思わなかつたよ」

誰かが思わず呟いた……まるでTレックスの喰らい合いのようだ。

……その後湯船に入ってきたコージーに見捨てたことをグチグチと責められた。仕方ないじゃん、俺の戦闘力は持ち主に似て謙虚な奴なんだから。仕

混合合宿⑤

とても女の子には話せない世界一お下劣な聖戦が終わり、入浴を済ませた俺はちやつちやと寝室に戻りたいところだが、話があるらしいのでランスと共に指定された空き部屋に向かう。グループメンバー達が今日の成績ランキングを楽しみにしているだろうから、手短に済ませてほしいなあ。

「それで話って何?」

「単刀直入に問う。お前はこの特別試験、1位を取りに行くつもりか?」

まあ、その件についてだろうね。ランスが望んでいる返答も予想できるけど、残念ながら期待には応えられないかな。

「勿論そのつもりだよ?やるからにはトップを取らないとね」

「本気か?お前達が勝てばAクラスは不利になるだけだ。それに気づかないとは言わせんぞ?」

俺の返答が気に食わなかったのか、たぶん子供が泣くであろう強面で睨んでくるラン

今回の試験の報酬はクラスポイント含めて、グループメンバー1人1人に支払われる。Aクラス生徒が1人しかいないグループが1位を取ったところで他の3クラスに差をつめられるだけだから、クラスのことを第1に考えるなら大半がAクラス生徒で構成された、ランスのグループが所属する大グループに勝ちを譲るべきなんだろうね。元より俺が楽しくないから知ったことじゃないけど、一応大義名分は振りかざしておこうかな。

「あのねランス、君達って確かコランダム先輩と同じ大グループだったよね？」

「そうだな」

「そして俺達はみやびん会長と同じグループ。で、あの2人が今回グループの順位で勝負してるわけじゃん」

「ああ」

「何でもこれまで散々挑んでは袖にされ続けてきた末に、ようやく勝負を受けてくれたらしいよ。そんな大事な大事な戦いで俺達が足引っ張って負けちゃったら、みやびん会長に恨まれちゃうよ」

「……」

「知ってる？あの人と敵対した生徒は、必ず退学しちゃうっておそろしいジンクスがあるらしいよ。ああ怖い怖い、試験でわざと負けるなんてとてもとても——」

「つまらない建前は必要ない。もう1年近くの付き合いなんだ、お前がそんなことを恐れるような奴ではないと俺もわかっている」

せつかく引き下がる理由をあげたのに、ランスは依然として厳しい表情のまま。まったく、これだから潔癖な奴は面倒なんだよ。……仕方ない、もう手心を加えるのはやめにしよう。

「そもそもお前は体育祭のリレーで南雲先輩を打ち破っている以上、既に目をつけられていると考えていいだろう。ならば――」

「ここはクラスの利益を優先して勝ちを譲れっか。……あーあ、やっぱり君は有栖に歯向かう資格なんて無かったとつくづく思うよ」

「……何だと?」

「君の小グループは大半がウチのクラスの生徒で占められたグループだろ? 対して俺の小グループは俺の趣味で揃えた、結成時のイーグルス並みの寄せ集めグループ。これで勝てないようじゃ……Aクラスの男子は束になっても俺に及ばないということになっちゃうよ?」

「……それは……」

「そもそもそんなに俺達が1位を取るのが不満なら、真っ向から振じ伏せてみなよ。……少なくとも有栖ならそうするだろうぜ」

何やら難しい表情のまま考え込むランスを捨て置き、俺は部屋を後にした。

ランスといい卍解ちゃんといいなまじ有能な子は、高い知能が災いして俺との力の差に無意識に心が折れてしまっている。何とかして殻を破らなきゃ、有栖の遊び相手にはなり得ないんだよね。もうコージという極上の獲物がいるからあれこれと導いてやる義理は無いけど、獲物は多ければ多いほど良いから頑張つてね。

さて、それじゃあ部屋に着くまでに今日の採点を済ませとこつかな。

今回の特別試験において、まず間違いなく評価対象となる項目はおおよそ4つ。

『禅』……座禅開始までの作法、座禅そのものの姿勢などの採点。

『駅伝』……評価の基準は多分シンプルに順位とタイムになると思われる。

『スピーチ』……大グループの1人1人がスピーチを行い、声量、姿勢、内容、伝え方で採点される。

『筆記』……道徳問題中心のペーパーテスト。評価基準はまず間違いなく点数の善し悪し。

各項目それぞれ20点満点、あとは『清掃』や『朝食』など加点要素の可能性のある作業や真剣に試験に取り組む姿勢を総括して20点満点、合計100点満点でグループメンバーを採点すると……1位俺、2位浜口君、3位墨田君、4位山田君、5位別府君、6位コージ、7位幸村君、8位石崎君、9位リユンケル、10位六助と言ったところ

かな。

やはりBクラスの生徒はバランスが良いから上位に食い込むね。最下位の六助も何とか50点はギリ超えたから、今日もペナルティは無しでいいかな。

うむ、悪くはない。悪くはないが良くもない。2位の浜口君が70点未満は、全体でトップを取りに行くにはちよつと心もとない。コージー、リユンケル、六助のハイスベック問題児がもう少し本気でやってくれるなら話は別だけど、皮算用に頼るのは趣味じゃない。さて、俺は責任者としてどう取り組もうかね？

寢室に戻り成績発表を済ませた後、枕の下に『25』と書かれた紙を見つけたが見なかったことにして捨てた。夜更かしはお肌に大敵なのだ。

その後も合宿は俺主導の下、概ね順調に進んでいく。

一口にリーダーと言っても色々なタイプがある。例えば有栖のように優れた頭脳とカリスマで統率する、ランスのように手堅く堅実な方針で安心感を抱かせる、卍解ちゃんのように魅力と人徳で自然と団結する、リユンケルのように恐怖と暴力で支配する、

(厳密にはコージが裏で糸を引いているんだろうが) ホリリンのように目に見える実績で信頼を勝ち取る等様々だ。

性格的に向いていないことはさておき、リーダーとして俺はこの中だとホリリンに近い性質だろう。友好的な子もそうでない子も、ケチのつけようのない実力と実績で黙らせる。合宿中に様々な課題に直面したが、その度に俺は先陣を切ることでグループメンバーの道標となり、誰かしらが遅れを取ったり壁にぶつかったりすればその都度フォロワーを入れ示した。

流石に1週間程度で基礎体力が向上したりはしないので、幸村君や浜口君は運動面で活躍することは無いだろうが、座禅に関しては皆及第点レベルまでに仕上がったと言っているだろう。石崎君も含めて筆記の成績はかなり向上したし、コージのスピーチも……まあ、うん。

懸念事項があるとすれば、大グループ全体での交流がほぼ皆無なことだね。先日のバ抜きを根に持っているのか、3年グループは他学年と露骨に壁を作っているし、コランダム先輩との勝負がかかっている筈のみやびん会長率いる2年生グループも、勝つ気があるのか全体的にやけにのんびりとしている。で、俺達1年生グループの子達もイカサマでカモられかけたせいとか、歩み寄ろうとしていたのはBクラスの3人のみ(そして当然袖にされていた)という有り様だった。

フアルコンによるとコランダム先輩が所属する大グループは、あの人を中心に1年から3年まで非常に統率の取れた団体となつてゐるそうだ。もし評価対象にグループ全体の団結力があつたら惨敗だなこりや。まあこの学校は結果の伴わない仲好しこよしを評価した試がないから、流石に無用な心配だろう。

……しかしみやびん先輩もひねくれ者だよ。ようやくコランダム会長が勝負を引き受けてくれたつてのに、まともに勝負しにいかないなんてさ。元主将さん曰く生徒会は特別試験のルールにある程度口出しできるらしいし、あの不自然なルールからしてコランダム先輩が勝負を受けようが受けまいが、最初からこうすると予定されていたんだろう。

茜先輩からすれば完全なとぼつちりで実に気の毒だけど、銀の弾丸はもう打ち込んであるので最悪の事態にはならないだろう。……その代償にみやびん会長にはさらに敵意を抱かれ、茜先輩にはもしかしたら嫌われると思うと、思い付きで行動したことを少し後悔してしまうなあ……いつものことか。

そんなこんなで迎えた7日目の早朝。

明日の朝になれば即試験が始まり、それが終わればこのグループとの関係も終了する。アットホームとは言い難いがまずまずの結束力のグループだっただけに、名残惜しむ子も少なくないだろうね。六助やリユンケルは当然腫れ物扱いされてるし、石崎君は

コージーに対して嫌悪感が強いけど、この辺はまあ仕方がない。社会に出ていく以上は嫌な相手とも折り合いをつけなければならぬときもあるだろうし、良い勉強になったとポジティブに考えるしかないだろうね。

「はい皆ちゅーもーく。これから明日の駅伝について話すので最低限耳だけは傾けてね」

俺が軽く呼び掛けるとグループ内のほとんどが姿勢を正し、リユンケルや六助も一応意識だけは向けてくれている。

ちなみに駅伝の試験はリレー形式、山岳地帯のコースを往復計18キロを小グループ全員で走りきるというルールだ。

「俺達は10人グループだから、普通に考えれば不利なように思えるよね」

「?そりやそうだろ。人数が多い方が1人1人の負担が少ないしよ」

「走る距離を均等に分ければ、ね。最低1人1.2km走る必要があるから15人グループだと均等にせざるを得ないけど……俺達10人グループは運動に自信の無い子は1.2km走るだけにしておいて、自信のある子が多めに走るといふ戦略が可能なんだ」

「な、なるほど……」

「確かに、やりようによってはそれなら1位を狙えるかもしれないね」

全員が俺の説明に納得したようだし、出し惜しむ必要もないので俺の考えた必勝戦略

を伝えようか。

「それじゃあ皆1. 2 km頑張つて走つてね。残りの7. 2 kmは俺が走るから」

「ちよつと待て!?!」

即座に石崎君と幸村君からストップが入る。他にも周りを観察すればコージー、リユンケル、六助以外はこの作戦を良しとしないみたいだ。もうすぐ清掃の時間だからこんなことにあまり時間を割きたくないんだけどなあ。

「ありゃ? 何かご不満?」

「いや不満っつーかよ……なあ?」

「ああ。責任者とはいえ、お前だけに負担を押し付けようとは思わん」

「えー。大事なのは良識よりも実績だよ?……それとも何、たかだか7キロちよいで俺がバテると思われてる? 心外なんですけど」

「そ、それは……」

一斉に言葉に窮してしまう幸村君達。今ごろ体育祭での蹂躪劇が脳裏を駆け巡っていることだろう。

「……まあどうしても言うなら石崎君、君は2 km走つてよ。どうせ筆記とかスピーチじゃ活躍はできないだろうし」

「一言余計なんだよお前は!?!……わかったよ、任せろ。何なら3 km走つてやってもいい

ぜ？」

「それは遠慮しておくよ、やるからには確実にトップを取りに行かないやね。石崎君このグループの中じゃ速い方だけど、全体で見るとそこまで突出してないし」

「ほんとに齒に衣着せねえなお前は……」

しょんぼり顔で石崎君が引き下がったところで、俺は六助に視線を向ける。

「それで走る順番だけど……アンカー手前は俺が走るから、アンカーは六助に任せるよ」
「「待て待て待て!?!」」

先程よりも強く引き止められる。今度はリユニケルも少なからず驚いているみたいだ。当の六助は相変わらず優雅に髪を整えてるけど。

「何考えてんだ本条!こんな最下位ゴリラにグループの命運を預けるとか正気か!」

「考え直せ本条!そもそも真面目に走るかどうかも怪しいのに、よりもよって何故アンカーに……!?!」

「逆だよ。むしろアンカー以外は不安だから絶対に任せたくはないかな」

「ど、どういうことだ……?」

俺の主張を理解できず困惑する周囲を捨て置き、一応六助に歩み寄って確認しておく。
「ねえ六助。どうせ君はこのグループのために一生懸命走るなんて有り得ないだろ?」

「愚問だねえマイフレンド。君が統率する以上、誰かが露骨に足を引つ張らない限り最下位は有り得ないだろうし、私はこれまで通り必要最低限のことをこなすつもりさ」

「だよねえ……それはそうと六助、誰かに追い抜かれて平気でいられる性分かね？」

「ふむ、どういうことかな？」

「体育祭もあつたし、この学校の男子生徒がどれだけ走れるかは全員分頭に入ってる」
「今さらつとんでもないこと言つたぞアイツ……」

石崎君が何やら言っているが関係ないので無視。

「それでシミュレートしてみたところ、よほどのアクシデントが起きない限りアンカーの君にバトンが渡る頃には十分なりードで1位になりそうなんだよ。そこから誰かに追い抜かれることを君が良しとするかい？」

「ふむふむ、中々興味深い意見だねえ。……だけどそれだけで私にアンカーを任せるのは危険じゃないかね？私が君の思惑通りに動くことを良しとせず、あえて追い抜かせたりするかもしれないよ？」

「だつたらそれは君にアンカーを任せた俺のミスだ、責めやしないさ。ただまあ……」

そこで一度言葉を切り、挑発的に六助を見据えながら言葉を続ける。

「絶対的優位な状況で勝ちを取り零すような奴には、俺の上に立つ資格なんて無いけどな」

これは紛れもない本心。

六助が俺を欲しがっていることが本心だとしても、意地を優先して負けることを選ぶなら、俺はこいつに対して完全に興味を失うだろう。

しばらく無言で値踏みするように俺を見ていた六助だったが、やがて愉快そうに口を歪めた。

「君の想像した通り、誰かに追い抜かれるなんて美しくないことはお断りだ。君がトップでバトンを回してくるなら、そのままトップでゴールするつもりだよ」

「それだけ確認できれば上々だよ。皆もそれで納得したね？それじゃあご飯前の清掃に行こうじゃないか」

明確な実績は無条件の信頼を生む。俺が勝つと断言したからには、それを疑いはしないだろう。

合宿終了

試験を前日に控えた、最後の夕食の時間。

いつものように有栖と合流しようとしていたら、珍しく何やらどんよりとした雰囲気の出解ちゃんが目についたので声をかけてみる。

「随分と辛気臭い顔してるね出解ちゃん」

「え？ ほ、本条君。ううん別に、ちよつと考え事をしていただけ」

「有栖の悪意は慣れてないと疲れるでしょ？」

時間も惜しいのでつまらねー弁解を遮り核心をつくつと、出解ちゃんは一瞬怯えた様子を見せたがすぐに取り繕つて苦笑いする。

「にやはは……やつぱり本条君には隠し事はできないかー。でも悪意ってほど大袈裟じゃなくて、ちよつと坂柳さんから快く思われてないなっただけだよ」

「ふーん……まあ詳しいことは聞かないでおくよ。正直興味無いし」

「は、はつきり言うんだね……」

「俺は有栖と違つてサゲイストじゃないけど、だからと言って聖人君子でも無いから。それじゃ明日の試験頑張つてね、応援してる」

そう言い残して有栖の元へ向かう。

有栖の性格を考えれば、おそらくこの合宿中ではこれ以上正解ちゃんを追い詰めようとはしない。あくまで彼女という器に罅を入れるだけに留まる。そして合宿明けてすぐに、大量の液体を注ぎ込んで自壊させようとするだろうね。

「本条、少し時間いいか？」

「ありやコージー？いいけど、どしたのさ？」

夕食を済ませ、グループメンバーの何人かに筆記試験とスピーチの指導を行った後、入浴しに大浴場へ向かおうとしたところをコージーに引き止められた。

「たしか本条は、元生徒会の橘茜と仲が良かったよな」

「そうだねー、俺が一番尊敬している先輩と言っても過言ではないかな」

「橘の現状についてはどれくらい把握している？」

「ほぼ全部かな。同じグループの生徒から酷い扱いを受けていることや、コランダム先輩達に迷惑をかけないため誰にも助けを求めていないこと……そして状況的にもうほ

ぼ詰んでいることまで、全部」

この一週間さぞや地獄の日々だっただろう。夕食で見かける度日に日に焦燥していったことや、グループメンバーである先輩達が皆軽い罪悪感らしきものを抱えている様子からして、やはりどこかの生徒会長さんが裏で意図を引いて茜先輩を攻撃していたようだ。酷いことするぜまったく。

「……助けなくていいのか？」

「実はもう既に手は打ってあるんだ。茜先輩がクラスメイトに嫌われてたら流石にどうしようもないけどね」

コランダム先輩にはもう合宿中すれ違ったときに伝えてある。「もし必要無かったら後で返してください」って。当然怪訝そうな顔をしていたが……最終日には嫌でも理解することになるだろうね。

「……なるほど、まさにお前だけに許されたパワープレーだな。しかし本条、お前なら桶を傷つけない解決策もあつたんじやないか？」

コージの言い分はもつともだ。俺はいくつかある選択肢の中でも最低最悪、茜先輩が最も傷つくであろう手段を選び取った。徹底した合理主義者であるコージが理解できなくても無理は無い。

「んー……そうだね、今はちよつと後悔してるよ。随分と落胆と失望させられた」

「落胆？失望？……まさかと思うが、橘が自力で解決できると思ってたのか？」
「なわけないでしょ。この件は凡庸な茜先輩にはどうしようもない悪辣さだし」

俺は何も茜先輩の能力に一目置いている訳じゃない。あの人の素晴らしさはその『献身』であり、彼女はどこまで行っても凡庸の域を出ない。

そもそも俺が失望や落胆をしたのは、茜先輩に対してではなく他でもない俺自身にだ。あれだけ慕っていた筈の茜先輩が、こうして悪意に晒されもがき苦しんでいたというのに……俺の心はちつとも揺らがない。

「コージも余計なことに首突っ込んでないで、グループで断トツビリなスピーチの練習でもしてなよ」

「……善処する」

おいこら視線を逸らすなバカタレ。……なんでこの子はこうもスピーチが下手なんだろうね。コージ・パピーはこんなのに日本の命運を預けていいの本当に？

そして迎えた最終日、グループの優劣を決める戦いの日がやってきた。

各グループそれぞれ様々な過ごし方をしただろうけど、たぶん俺達ほどドライなグループも早々無いだろうね。

自由時間はそれぞれ他グループの友人と過ごしていたり、壁を作って自分の世界に入っていたり、メンバー間の親密さはこれといって深まらず、かといって険悪という訳でもない絶妙な距離感で過ごしてきた。せいぜい自由時間にポケモン映画はどれが最高傑作かで熱く語り合ったくらいだ。

勝つためにお互いを利用し合い、勝つためにお互いの欠点を補うビジネスライクの結束。俺達が共有すべき志はただ一つ。グループの勝利だけではない。……約2名は共有していないが、まあ仕方ない。

試験そのものは小グループか学年ごとに行われ、大グループは集計時の順位にのみ用いられる。全校生徒一斉に試験するには人手もスペースも足りないから当たり前前だけどね。

試験内容は想定通り『禅』、『スピーチ』、『駅伝』、『筆記試験』……1つくらい想定外が欲しかったところだけど、まあ贅沢は言わないでおこう。

俺達1年は座禅、筆記試験、駅伝、スピーチの順番。駅伝による疲労が後々に影響することを考慮して、眼鏡コンビの順番を早めにしておいてよかったぜ。

朝食を済ませ座禅場に1年生が全員集合し、小グループごとに分かれて教師達の説明を聞く。

「ではこれより座禅の試験を開始する。採点基準は2つ。道場に入ってから作法・動

作と、座禅中の乱れの有無だ。終了後は次の試験の指示があるまで各自教室で待機するように。名前の呼ばれた順に整列し試験を始める。Aクラス、葛城康平。Dクラス、石崎大地」

おつといきなり変化球。これまで何回も座禅をさせられてきたが、順番はいつも一緒だったので急な変更に周囲から思わずざわめきが起こる。

「早く整列しろ石崎。次、Bクラス浜口」

戸惑う石崎君は慌てて整列に向かう。ふむ、グループの何人か……幸村君や別府君が少し動揺しているみたいだね。

「はいはい慌てない。ただ順番が変わっただけで揺さぶられてちや向こうの思う壺だよ？ 今回の特別試験は心の成長がテーマだし、こういう意地悪もあるんでしょ」

「あ、ああすまない。もう大丈夫だ」

俺が優しく宥めると2人も落ち着きを取り戻し、教師に名前を呼ばれるとしっかりと返事して道場の中へ入っていった。その後すぐ俺も名前を呼ばれ道場の中へと入る。中では多くの教師がボールペンを持って立ち歩き、和室の景観を損ねるカメラが数台セツトされていた。たぶん採点に確実性を持たせるためだろうけど……うちのグループは俺が入念に指導したから大半が満点に近い成績を取れるだろう。動揺してた石崎君がちよつと怪しいけどね。

座禅を終え、俺達のグループは指定された教室へと集まる。

「すまない本条……本番中足が痺れて、少しマイナス査定を食らったかもしれない」

「はいはい、いちいち気にしなさい。失敗を忘れるのも実力の内だよ？今から筆記試験だしそこで挽回しなさい。……他の皆も、俺の渡した筆記試験対策用紙の内容はちゃんと暗記してきたよね？」

「そりゃできる限りのことはやったけどよ……ほんとにあてにして大丈夫なんだろうな？」

「む。学力グループ内断トツビリな石崎君の癖に生意気な」

「うるせえ放つとけ!？」

「教師達も別に俺達を退学にしたいわけじゃないからね、ばつちりテストに出る部分は教え方に熱が入る。俺の眼はそれを見逃さないよ」

まあ普段の俺ならこんなヤマ張りみたいな教え方は絶対しないんだけど、残念ながら時間が足りないからその場凌ぎに頼るしかない。

その後各小グループが集合し、試験が始まる。難易度は大して高くもないのでちゃつ

ちやと答案を埋めて、カンニングを疑われないよう頭部を一切動かさず他の人の様子を伺う。……真面目に勉強してきた生徒は余裕があり、そうでない生徒は余裕をなくしている中、うちのグループの面々は概ね大丈夫そうだ。

テスト終了後リユンケルと六助以外が集まり自己採点を行うと、俺と幸村君と浜口君が満点、コージと別府君が95点、山田君と墨田君が90点、石崎君が80点という結果だった。

「疑って悪かった本条！おれこんな高い点数取ったの生まれて初めてだ！」

「いやむしろ点数落とし過ぎだろう……本条の対策用紙を真面目にやっていたら90は固い筈の問題だったぞ？」

「真面目にやっつてこれなんだよ悪かったな！」

……ふむ。座禅でも皆ある程度しつかりとこなしていたし、筆記もさほど難しくなかった……たぶん今のところ1位だけど大した差はついていないだろうね。

「それじゃ皆。次は駅伝だけどあまり頑張り過ぎないよう適度な速さで走るように。途中で怪我して完走できなかつたら失格なのは勿論、ここで体力を使い果たしたら次のスピーチがしんどくなるからね」

「だけど本条、そんな悠長にして駅伝で負けたら本末転倒じゃないか？」

「全くもって問題無し。足の速さで俺と勝負になるのは同学年ではコージと六助だけ

だけど、2人とも同じグループだから対抗馬は誰もいない。俺にバトンが回ってくる頃にしたとえ最下位でも、まとめてぶち抜いてあげるよ。ただか7km弱でバテるような柔な鍛え方してないしね」

その後、駅伝はコージが予想したよりも頑張ってくれた（それでも全然本気を出しちやいなと思うが）おかげで2位と僅差の3位でバトンを受け取るや否や、前を走っていたBクラスの時任君と戸塚を抜き去る。あとはもう差が開いていく一方で、アーカーの六助に回る頃にはもうどうあがいても追いつけないほどのリードを保っていた。そして六助は流すように走って優雅にゴールテープを切った。

『駅伝』の後のスピーチも、六助のいかに自分が美しく完璧な存在かを熱く語ったスピーチに多くの人が疑問を抱いたものだが、それ以外のメンバーは無難に終えることができた。何人かの子にスピーチの内容まで考えてあげた甲斐があつた……今さらだけど俺働きすぎじゃね？まあいいけどさ。

特別試験終了後、全校生徒の大半が疲労で满身創痕になる中、男女共に体育館へと集

められた。いざというときはポイントで退学を回避できるよう、初日に回収された携帯は既に返却されている。

「林間学校での8日間お疲れ様でした。内容は違えど数年に一度開かれる特別試験ですが、全体的に前回よりも評価の高い年となりました。ひとえに皆さんのチームワークが良かったことが要因でしょう」

「この林間学校の責任者と思われるお爺さんがそう告げる。表面上は笑顔ではであるが、内心では何かつらいものを押し殺している……きつと心の優しい人なんだろうね。「先に結果に触れますと、男子生徒の全グループがボーダーラインを超え退学者は0という、これ以上無い締め括りとなりました」

「そう発表された瞬間、男子達からは安堵の声漏れ聞こえてくる。……男子生徒のつてことは、まあそういうことなんだろうね。」

「それではこれより男子グループの総合1位を発表しますが、ここでは3年生の責任者の名前のみを読み上げます。まずグループ1位……石倉健介君が責任者を務めるグループです」

よっしゃ、予定通りうちの大グループが1位だぜい。

発表直後2年生のほぼ全員が歓声を上げみやびん会長の勝利を祝福するが、当のみやびん会長はにこりともせず複雑そうな表情を浮かべている。……全容を知っている身

からすれば気持ちにはわからなくてもない。勝つ気が無かった勝負でどうしても勝ちたかった人に勝ってしまったらまあそうもなるだろう。ちなみにコランダム先輩の大グループは2位……ということはランス達もか。どうにか面目は保てたようでよかったね。

「堀北先輩」

気まずげな表情のまま3年生の集団に近づいていくみやびん会長に、藤巻先輩が敵意を向けるが元主将……何かしつくりこないからチカちゃん先輩でいいか……チカちゃん先輩とコランダム先輩に手で制される。

「お前の勝ちだ南雲」

「んー、何か俺が勝ったって気がしないっすね……勝因はたぶん本条のグループが1年の中で突出してたからでしょうし、もしあいつが堀北先輩のグループを選んでたら結果は逆だったと思いますよ?」

「それも引つくるめての勝負だ。あれだけ執着していたのに、勝ったら勝ったで面倒な奴だなお前も」

ふむ……パツと見では呆れたようにみやびん会長を諫めているけど、内心めっちゃ悔しがってるな。コランダム先輩も負けたことなんてほとんど無いだろうし当たり前か。「執着してるからこそ俺の力で勝ちたいんすよ。……だから『男子』の方の勝負は保留にしといて貰えませんか?」

「男子は？女子は関係ないというルールだろ南雲」

「ええ、関係ありませんよ。俺と堀北先輩の勝負には、一切ね」

不可解なみやびん先輩の言葉遊びに、コランダム先輩達の表情が険しくなるが……もう遅い。

お爺さんが女子グループの順位を発表していく途中、心苦しそうな表情で残酷な現実を突きつける。

「……誠に残念なことではありますが女子グループには、平均点のボーダーを割ってしまった小グループが1組存在します」

男女共にその発表を聞き凍りつく。喜んでいた生徒も静まり返る。この特別試験でボーダーを下回る……それはつまり1人、もしくは2人の生徒の退学になるということ。

「最下位のグループは……3年Bクラス、猪狩桃子さんのグループです。そしてボーダーを割ってしまったグループは……」

一部の女子かは悲鳴が上がる中、コランダム先輩は何かに気づいたようにみやびん会長を見る。先ほどまでの気まずげな表情とはうって変わって、非常に凶悪な笑みを浮かべているみやびん会長を。

「……同じく3年Bクラス、猪狩桃子さんの小グループです」

……告げられたグループは予想通り茜先輩が所属しているグループだった。ルールにより責任者の猪狩先輩は退学し、コランダム先輩達のAクラスでの卒業がより磐石になったことになる。しかし俺の眼前では藤巻先輩達が凄い剣幕でみやびん会長に詰め寄っている。

理由は明白……連帯責任として退学させられるのは、まず間違いなく苛め同然の扱いを受けていた茜先輩だからだろうね。あのグループは大半がBクラスとDクラスで構成されている。合宿中での茜先輩の扱いを知らずとも、道連れ相手に彼女が選ばれることなどコランダム先輩が予想できない筈がない。

半ば部外者だったコランダム先輩が気づくんだから、当の本人が気づかない筈もなく、茜先輩は己の運命を悟り声を押し殺して泣き出してしまふ。

そんな敬愛する先輩の痛ましい姿と、このことを仕組んだであろうみやびん先輩を交互に見て、俺は内心で落胆するように溜め息をつく。

茜先輩ならもしかしてと思ったが、結局は無駄な試みだった。俺は目の前で打ちのめされている茜先輩を見てもまるで心が痛まないし、茜先輩に悪逆を尽くしたみやびん先輩にも何一つ憤りを感じられない……この悲劇を防げたのに放置していたことに対しても、まるで罪悪感が湧いてこない。

真つ当な人間なら間違いなく怒りと悲しみを抱く筈の状況においても、俺の心が揺らぐことは無かった。

8巻エピソード

「side：堀北学」

「何をした南雲！」

「まだ結果発表は終わってませんよ藤巻先輩。そもそも何を怒ってるんです？ Bクラス生徒が退学になるだけです、むしろライバルと差がついて良かったじゃないですか」

「ふざけるな！」

白々しい笑みを浮かべる南雲に、藤巻はさらに声を荒げて詰め寄る。教師が面前であるため藤巻を諫めるべきだと頭ではわかっているのに、俺も緒方も怒りを堪えるのに精一杯で動けずにいた。

「えー、一部お静かにお願います。残念ながら、グループの責任を取って猪狩さんの退学が決定しました。グループ内で連帯責任を命じることもできますので、後程私のもとへ来てください」

続いて女子の順位が発表されるがもう耳に入らない。ここまでくれば嫌でも理解させられる……南雲の挑戦状は、この悪辣な罫の隠れ蓑であったのだ。

解散が命じられ、バスの準備が整うまで自由時間が設けられる。南雲は退学を命じられた3年Bクラスの生徒、猪狩を手招きしてこちらへ呼びつける。

「猪狩先輩、教えてくださいよ。一体グループ内の誰を道連れにするんですか？」

猪狩が口を開くまでも無く、俺は誰が道連れにされるのかを予想できてしまう。それぞれのグループに誰が所属しているかなど当然把握している。猪狩のグループは主にBクラスとDクラスの生徒だが……たった一人だけAクラスの生徒が所属している。俺のよく知るその女子生徒は己の置かれた状況を悟っているのか、声を殺して泣きながら立ち尽くしていた。

「決まってるでしょ。散々グループの平穏を乱した、Aクラスの橘茜さんよ」

最悪の予想は裏切られることなく、全員に言い聞かせるように猪狩はそう吐き捨てた。

俺はクラスの代表として確実にAクラスで卒業するため、そしてクラスから退学者を出さないため、責任者にはならないよう皆に指示を出した。

しかし道連れルールがある以上どうしても確実性には欠ける。周囲を巻き込むことに躊躇いの無い南雲にいつ狙われてもおかしくない。だからこそ俺は正々堂々と戦うことを条件に奴の挑戦を受けた。

南雲は逆らう者に容赦せず、反則紛いの手段を講じたことも少なくないが、約束を

破ったことはこれまで一度も無い。俺はそのことを信頼して第三者を巻き込ませないよう約束した。

だが南雲は前提を覆した。

合宿中内密に接触した綾小路が、特別試験のルール制定に生徒会が介入できるか聞いてきた意味がようやく理解できた。おそらく男女の交流を最低限にすることと、退学者の道連れルールは南雲の介入で追加されたもの……こいつは初めから試験中俺の目の届かない女子生徒で、なおかつ俺と最も親しい橘を嵌めるつもりだったのだろう。

おそらく橘以外は試験でかなり手を抜きボーダーを割ったのだろう。橘が手堅い成績を残していれば道連れ対象にはならないが、南雲の悪意にそんな甘い考えが通用する筈がない。橘が夜中に騒いで眠れなかった、橘の間違った助言を聞いたせいで試験結果が芳しくなかった等、橘以外のグループメンバーが結託し口裏を合わせれば裏付けが取れてしまう。

Bクラスは退学になってしまう猪狩をちゃんと救済するという条件で協力したのだろう。同学年を掌握する南雲なら2000万ポイントをかき集めるのはそう難しいことではない。そしてこの時期にわざわざ下位クラスを指名する理由は無いし、放つておけば上位2クラスが共倒れする以上C、Dクラスに断る理由も無い。

「南雲……堀北が君の勝負を受ける条件に、第三者を巻き込まないと約束させた筈だろ

う」

「待ってくださいよ緒方先輩、俺は無関係ですよ」

「白々しい！」

「藤巻先輩も落ち着いてください。橘先輩がグループの足を引っ張ったせいで平均点のボーダーを下回り、道連れにされただけじゃないですか」

緒方と藤巻の糾弾を、南雲は薄笑いを浮かべながら意にも介さない。俺も思うことは色々あるが、今は南雲よりも優先することがある。

俺は泣きながら俯いている橘の元へ向かう。……合宿前と比べて随分とやつれてしまっている。この7日間、相当つらい思いをしてきたのだろう。

「堀北君、ごめんなさい……！」

「何故だ橘……何故俺に相談しなかった。お前なら嵌められたことに気づいていたはずだ」

「それは……堀北君の、負担になることがわかっていたから……」

思えば合宿中1度も橘と顔を合わせる事が無かった。それは偶然ではなく橘の方が俺を徹底して避けていたのだろう。俺が南雲の策略への対処に集中できるよう、自身が退学することを受け入れてまで……何が歴代最優秀の生徒会長だろうか。結局のところ俺は南雲のことも橘のことも何一つ見えてはいなかった。

「奇想天外、いや規格外の戦略でしたでしょう？俺の手を読める人間なんて誰もいません。堀北先輩、あなたを含めてね」

何が面白いのか大笑いしながら南雲は俺達に近寄り、橘に向かって煽るように問いかける。

「教えてくださいよ橘先輩。3年Aクラスの卒業間近に退学していく気分はどうですか？そして堀北先輩、きつとこれまで感じたことない苛立ちに包まれてるんじゃないですか？」

「……何故俺を狙わなかった」

「今回の手をあなたに用いても防がれるでしょうし、別に俺はあなたに退学してほしいわけじゃないですからね。そこで橘先輩に人柱になってもらうことにしたんです。彼女が脱落すれば、いったいどんな顔をするのか見てみたかったんで」

「思想こそ危ぶんでいたが、お前には一定の信頼は置いていた。これまで常に有言実行してきたお前なら、勝負事には真っ直ぐに向き合う男だと……しかしそのくだらない好奇心のために、お前は大きなものを失ったぞ」

「自分から捨てたんですよ。後輩思いの先輩にちゃんと理解してもらうためにね」

約束は守る、約束は守られる。そんな根底を南雲はあっさり塗替えた。きつと今回のことはただの前哨戦……おそらくは最後の特別試験辺りで、南雲は再び俺に牙を剥

くだらう。だが……

「残念ながらお前の思い通りにはいかないぞ。俺達は橘を退学させたりなどしない」
「ま、待つて堀北君！」

橘は慌てて止めに入るが聞く耳は持たない。クラスのために自身を犠牲に出来るお前を見捨てるわけにはいかない。きつと緒方達も同意見だろうと信じ、自身のポイントを橘へ送金すべく携帯画面を開き……

「まさか、吐き出すんですか？この時期に大量の金とクラスポイントを？」

「お願いやめて堀北君……私がダメだったのは自己責任だから——」

「淋しいことを言うな橘。俺達は君を見捨ててのうのうとAクラスで卒業するような薄情者ではない」

「お、緒方君……」

「遠慮することは無い、使え使え」

「藤巻君まで……」

「……待て皆。どうやらポイントを賄う必要は無さそうだ」

携帯画面のポイント残高が目に入った俺は、様々な感情が駆け巡る。喜びや感謝よりも、困惑と怒りが先行する。どういふことかは後で本人に問い詰めるとして……

「南雲、自分の手を読める人間なんて誰もいないと粹がついていたな？」

「……？ ええ、それがどうかしましたか？」

「残念ながら、少なくとも1人いたようだ」

俺は携帯画面を向けると、南雲は怪訝そうにそれを見て……驚愕に目を見開いた。

「な……あ、あり得ない！いくらアンタでも、個人でそんな額のポイントを所持している筈が……！」

「答える義務が無い……と言いたいところだが、少し考えてみればカラクリはすぐわかるだろう」

南雲も決して愚鈍では無い。俺の言葉を理解したのか、目に見えてイラつきながら奴を探す。が、残念ながらももう既にバスに乗り込んだようだ。

俺は南雲を無視して橘の携帯に退学取り消しに必要な額……2000万ポイントを送金した。

高度育成高等学校へと帰還後、夜の自室にて……

「……とまあそんな訳でみやびん先輩の目論見に気づいた俺は、ポイントを払って一時

的に携帯使う許可をもらって2000万ほど送金したわけです、はい」

色々々聞きたいことがあったので、俺は本条を呼び出していた。何やら用事があったらしく2時間ほどしてから本条はやってきた。……頬にくつきり残った紅葉マークがとても気になったが、まあ何があったか薄々予想できる。

「まずは礼を言っておく。どの道橋は救い上げるつもりだったが、最終試験に備えてプライベートポイントを残すことができた。借りた2000万は必ず卒業するまでに返却するので安心してくれ」

「別に返さなくてもいいですよ？特に使い道も無いあぶく銭ですし」

「お前が良くて俺達が駄目だ。後輩から大金を借りておいてそのままなど、人の道から外れた行いは許されん」

「ふーん……まあ気長に待ってますね。」

それじゃあ、そろそろ本題に入りましょうか」

そう言つて俺を見据える本条は今まで見たことが無いような、まるで綾小路を彷彿させる無機質な表情を浮かべていた。

「では率直に聞こう。合宿二日目にポイントを送金したと履歴に残っているが、そのときには既に南雲の企みに気づいていたということになる」

「ええ、そうなりますね」

「普段から橘と親しいお前が、橘を助けようとしても不自然ではないが……もつと他にやり方がなかったのか？」

「勿論ありましたよ？あなたに迷惑をかけたくないっていう、茜さんの気持ちを汲んだとしてもやり様はいくらでも……例えばあなたに送った2000万を猪狩先輩に渡して交渉すれば、茜さんが無為に傷つくことは無かったでしょうね」

「では、何故そうしなかった？」

「みやびん先輩と同じ好奇心ですかね。……たぶんあの先輩と俺は、本質的には似た人種なんですよ」

南雲と本条はよく似ている。奇しくもそれは4月の入学式にこいつと邂逅したとき、他でもない俺の抱いた感想と同じだった。

「……橘が苦しむ所を見たかったと？だとすれば心底お前を軽蔑せざるを得ないが」

「有栖じゃあるまいし、俺にそんな趣味はありませんよ。まあ特に隠すことでも無いし打ち明けますが……俺、怒ったり悲しんだりできないんですよ」

「………何？」

突拍子もなく本条はそんなことを宣ったが、流星に理解が追いつかない。こいつは何を言ってるんだ？

「より正確に言うなら、強い悪感情を抱けないんです。信じる信じないは自由………と言

いたいところですが、信じてもらわないと話を進められないので信じてください」

「随分と強引だがまあいい……それで、橘を見殺しにしたことと何の関係がある？」

「この欠陥は生まれつきそうだった訳ではなく、いつの間にかそうなったもので、俺はどうにかして失ったものを取り戻すべく、色々と試行錯誤を重ねてるんです。……残念ながら成果は上がってませんが」

「今回のこともその一環だと？」

「ええ。茜さんは有栖を除けば最も親しい人……そんな方が理不尽な悪意で苦しみ傷つけば心が痛むのではないか、またその元凶であるみやびん先輩を憎むことができるのではないかと。残念ながらどちらも徒労でしたけどね。残念無念」

つまらなそうに言う本条を見て、俺はこいつに抱いていた懸念が正しかったことを悟った。

本条が南雲と接触すれば、下手をすれば南雲以上の学校の脅威となりかねない。そう危惧した俺は恩を売りそれを引き換えに南雲に味方しないよう約束させた。その判断が間違いではなかった……本条桐葉の危険性は南雲をも凌駕している。こいつの好奇心は敵対する者のみならず味方をする者さえ犠牲にしかねない。

「……とまあ今話したこと全てを茜さんに包み隠さず全て話し、もう二度と彼女に関わらないでおく旨を伝えた結果が、こちらになります」

そう言って本条はくつきりと紅葉のついた頬を指差す。やはりここに来る前に橘と会っていたのか。

「人の信頼を裏切れば、必ずそれ相応の代償を払うことになる。甘んじて受け入れるんだな」

「それがそう単純な話じゃないんですよ。茜さんが俺を拒絶したなら想定の内だったんですが……逆に絶対に逃がさないと宣言されたのは完全に想定外でしたね」

「逃がさない、だと?」

「彼女の言い分を要約すると、『私が助けくれなんて誰も頼んでないのに、後輩が一丁前に責任なんて感じてんじやねえ。絶対にそのひん曲がった性根を叩き直してやるから覚悟しろ』だそうです。……いやはや、素晴らしい先輩を持って俺は幸せですよ」

「そう、か……橘はお前を、そして南雲すらも恨んでいなかったか」

「あんな優しい子他にいませんよ? 絶対手放しちや駄目ですからねコランダム先輩」

手放しちや駄目?……ああ、こいつもその口か。

「何か勘違いしているようだから訂正しておくが、俺と橘は別に男女の仲があるわけではないぞ」

「……はあ」

「おい、なんだそのバカにしたような溜め息は」

「いや別に、どうせならいつそのことガツカリすることも無かつたらなんて思ってますよ。それじゃあもう帰りますね」

そう言つて肩を竦めてから本条は部屋を出ていった。……何だったんだ？

Aクラスの陰謀

混合合宿から数日後の放課後。

俺は有栖からの指示で空き教室を借りて、Cクラスのある生徒と椅子に座って向き合っていた。

「まあまあそう固くならないでよ。何も取って食おうって話じゃないんだし」

「あ、ああ悪い……それで、物凄い儲け話があるって本当か？」

誘っておいてなんだけども、こんな胡散臭い誘い文句に釣られて一人でノコノコやってきたらダメでしょ。将来変な壺とか買わされそうだねこの子。

「ああ、とびつきりの儲け話さ。……君はAクラスに上がりたい？」

「は？ いや、そりゃ勿論上がりたけれど……これだけポイントに差があるんじゃ、Aクラスは流石に無理なんじゃないか？」

ランスが指揮を取っていた頃はリUNKELやコージーに遅れを取り続け大きく後退してものだが、有栖に代わってからは連勝に連勝を重ねBクラスとの差は5月よりも広がっている。並の生徒なら心が折れ始めてもおかしくはない。

「ああごめんごめん、誤解させたようだから言い直すね。クラスを裏切つてでもAクラスに上がりたいと思う？」

「……はあ? どういうことだよ?」

俺の言葉の真意をまるで汲み取れていないのか、アホ面を晒して首を傾げている。俺は負の感情が欠落してるから別に気にならないけど、きつと日頃から何度も周囲を苛立たせてるんだろ? うなあ。

「Cクラスを裏切つて俺達と手を組まない?」

「……え?」

「まあ簡単に言えばスカウトさ。うちのお嬢様は1つ下のBクラスよりもむしろ、成長著しい君達Cクラスを警戒している。大半のクラスメイトはまだまだ君達を軽視しているが、このまま俺達の脅威になる前にさっさと摘み取つておこうって腹積もりでね」

当然そのような事実は一切無いが、まあこの子ならこんな穴だらけの説明でも鵜呑みにしてくれるだろう。

「なるほどなく。まあ確かに、坂柳ちゃんか俺達の急成長に危機感を覚えるのも無理は無い。でもなんで俺がクラスを裏切らないといけないんだよ? そんなことしてなんのメリットが——」

「メリットなら用意してあるよ。この学校の生徒のほぼ全ての生徒が欲するであろう特

権をね」

携帯のポイント残高画面を見せると、彼は驚愕して大声を出しそうだったので手で抑えて塞いでおく。まったく、この交渉の場は極秘なんだからしつかりしてよね。

「……………ぷはあつ！な、なんで6000万ポイントもあるんだよ……………!？」

「俺は本条桐葉だよ？」

「……………そ、そうか。それなら有り得る、のか……………?」

いやほんと大丈夫か君？もう高校生なんだからこんな適當過ぎる説明で納得しちゃうダメでしょマジで。

「2000万ポイントと引き換えに、生徒はどこでも好きなクラスへ移ることができるのは知ってるよね？そして俺は君をAクラスに迎え入れても、何ら痛手ではない程の財力を持っている。……………もうわかったよね？」

「Cクラスを俺の手でボロボロにすれば、その見返りで俺はAクラス、てことか……………!」
「その通り。……………まあクラスメイトを裏切りたくないなら、別に無理強いはいしないさ。他の子にこの話を持っていくだけだから、ちゃんとよく考えて決断をしなよ」

「あ、ああ……………少しだけ考えさせてくれ……………!」

そう言つて俺の前で差も重苦しそうな表情を作つて悩み出すが、俺の眼は彼が完全な平常心であることを見抜いている。彼の中ではもう私欲でクラスを裏切ることが決

まっつているようだ。……別にいいけど清々しいほど我欲の塊だねこの子。

「……わかったよ、俺はお前達につく。散々悩んだけどき、温い馴れ合いがしたくてこの学校に来たわけじゃないもんな」

どうせこの子は甘い謳い文句を疑いもせず、この学校にノコノコやってきたんだろくなあ。

「それで、俺は何すればいいんだよ？」

「その辺はうちのお嬢様が決めるから、しばらくは待機かな。たぶん行動するのは主に特別試験の時だね」

「ど、どんなことをすればいいんだ？」

「方法はこちらから指示するし、そう難しく考えなくてもいいと思うよ。例えば2学期にやったペーパーシャッフルなら、試験前にCクラスが用意した問題を俺達に流してくれば十分でしょ？」

「おお！そんな方法が……！」

榎田ちゃんがりユンケルと手を組んでいたことからして、水面下で問題の流出に関する攻防が行われていたんだらうけど、案の定この子は蚊帳の外か。

「一応言つとくけどここで話したことは誰にも言つちや駄目だよ？ 目論見がバレちゃつてるスパイほど使いねーものは無いし」

「わ、わかつてるよ……」

「俺に嘘や隠し事は通用しないから注意してね。もし誰かにバレたらこの件は無かつた」と……」

「わかつてるって言ってるだろ。俺の言うことが信用できないのかよ？」

うん。

「あと、なんで俺にこの話を持ってきたか聞いてもいいか？」

「うちのお嬢は人の本質を見る目に長けているからね。表向きにはホリリンや平田君の活躍が目立つけど、これまでのＣクラスの躍進には君が欠かせない要因だと、しっかりと見抜いているのさ」

「さ、坂柳ちゃんが俺のことを……いや、やつぱりわかる人にはわかっちゃうか。まあ確かに、Ｃクラスのリーサルウエポンと言えば俺のことよ。無人島の合宿のときなんて俺の機転が無ければ――」

……うーむ、半分ふざけて言っただけどまさか真に受けるとは。しかも明らかな虚言を並べてるのに嘘をついている様子が見られない……まさか本気でそう思い込んでるのかね？ まいったな、有栖、コージ、六助に続く俺の眼を欺けるリストにこの子は加えたくないんだけど。

このままこの子の虚構の自慢話に付き合っても時間の無駄だし、さっさとおいとます

るとしよう。

「それじゃあスパイ活動頑張つてね。応援してるよ……山内春樹君」

「ふーやれやれ。あんなに騙し甲斐の無い子は初めてだよまったく」

下駄箱で靴を履き替えながら思わず嘆息する。あー無駄な時間だった。まったくく
栖ちゃんは体だけでなく器も小さいんだから……聞かれたらぶっ殺されるなコレ。

今頃山内君はAクラスになってからの勝ち組の学校生活に胸を膨らませているだろ
うが、残念ながら彼に栄光が訪れることは5000%無い。本来あんな小物を有栖がわ
ざわざ潰しかかることはまず無いし、あつたとしても雑草を抜くようにサクツと仕留
めるだけなのだが、蛇よりも執念深いあの子は合宿中に突き飛ばされたことを相当根に

持つてるのか、俺を登用してまでとことん念入りに潰しにかかるみたいだ。俺の推測ではたぶん山内君は裏切り者であることをクラス全員に糾弾され、嫌われ者としてこの学校を去る末路が待つてるだろう……我ながらどうしようもない悪女に惚れちゃったものだね、うん。

「なあ本条、少し話があるんだけどいいか？」

「ふむ、柴田君と……白波ちゃん？珍しいね」

学校から出た直後、Bクラスの2人に呼び止められた。ここ数日Bクラスの生徒に下手な尾行をされていたけど、痺れを切らして直接接触してきたか。

俺に対するトラウマが払拭されてないのか白波ちゃんは少したじろいだが、どうか堪えて俺を睨みつける。柴田君も普段の人懐っこさが鳴りを潜め、かすかに敵意のこもった視線を向けている。随分と殺伐としているね。

これから有栖ん家に向かうところだったので、携帯を操作し有栖に『Bクラス@里予 尤z匹レニ口齒る㊦カゝれナニ@て少しえ犀れます』とメールを送ってから彼らの要求に応える。さてと、適当に口八丁で煙に巻くか。

「うん、構わないよ。それで何の……いや待って、せっかくだから当てたげるよ。最近出回ってる卍解ちゃんの悪い噂について、俺や有栖が首謀者じゃないかって問い詰めに来たんでしょ？」

合宿終わってから舌の根も渴かない内に、学年全体で卍解ちゃんに対する噂が蔓延し出した。暴力沙汰だの援助交際だの薬物だの強盗だの……卍解ちゃんとは縁の無い名誉毀損ものの噂が大量に。

「な、なんで何も言っていないのにわかるんですかっ。疚しい心当たりがあるからそう思うんじゃないんですか!？」

「いや？簡単な推理だよ。俺に苦手意識のある白波ちゃんが来たってことは、まず間違いない卍解ちゃん関係だとわかる」

この子明らかに卍解ちゃんに懸想してるからね。こんなもんどつかの朴念仁会長以外はずぐわかる。

「彼女の人徳からして、きつとクラス中が例の噂の出所について探っていたんだろうね。そしてたぶんだけど最初に噂を流したのは、俺達Aクラスという可能性が高いと判明した。そうなると黒幕の可能性が高いのはクラスを掌握している有栖、もしくはそのすぐ下にいる俺だと推測。ここ数日にしてたストーリーキングはそれを探っていたんだろうね」

「き、気づいてたの!？」

「生憎と生粋の草食動物なもんで、視線には目ざといのさ。……残念ながら俺や有栖から手がかりを掴むことが出来ず、長引けば卍解ちゃんが苦しむと思ひ、業を煮やして直

接問い詰めに来た。……さて、違うかな？」

「ひっ……！」

真つ直ぐ目を見つめながら淡々と目論見を語つてあげると無人島でのことがフラツシュバツクしたのか白波ちゃんは震える肩を抱き縮こまり、そんな彼女を庇うように柴田君は前に出る。流石はBクラス屈指のモテ男、行動の1つ1つがイケメンだね。

「あまり白波を追い込むな本条。お前そういう気遣いができる男の筈だろ？」

「ごめんごめん。でも誰だつて身に覚えの無い罪で糾弾されたら腹も立つでしょ？」

まあ嘘だけだね。残念なことにその程度では俺の心には何一つ響かない。

「身に覚えの無いって……本条はこの件に関わつてないのか？」

「有栖は代役が務まるような仕事を俺に割り振つたりはしないよ。俺が直接動くようなときは、それだけ重要な局面つてことさ。Aクラスを目指すつもりなら今後のために覚えておくといい。それから有栖がこの件に関わつてるかどうかについては……わかんないかな」

「hgc」

怪訝そうな顔になる2人。さつきまでの白波ちゃんならきつと噛みついてきただろう。あらかじめ心をへし折つといて正解だったね、うん。

「いやいや、あんだだけ仲良いのに知らないつてことはないだろ！しらばっくしてくれてんのか

!？」

「実際知らないんだからしようがないでしょ。別に悪巧みの一から十まで俺に話してるわけじゃないんだよ？有栖は性格が悪いからこの件に関わっていても別に不思議じゃないけど、俺に伝えてないってことは仕事を割り振るつもりが無いんだろうね」

「せ、性格が悪いって……俺もそう思うけどお前がそれを言っているのかよ？彼女なんだから？」

「俺はあの子のそういうところも含めて好きになったから別にいいの」

あとまだ彼女じゃないんだけどね。いちいち否定するメリットは無いからスルーしておくけど。

2人は当然納得がいかないといった様子だったが、俺が知らないと言っている以上追求も難しい。無理矢理聞き出そうにも俺に対して力づくが愚策と気づかないほど愚かでも無し……完全に手詰まりなようで、特に白波ちゃんは悔しそうに歯を噛み締めている。

「……ただまあ、君達も手ぶらじゃ帰りづらいか。俺も呼び止められておいて何も無いんじゃない時間を無駄にしたようで癪だし、1つだけアドバイスをあげる」

「アドバイス……？」

「もし今回の首謀者が有栖だと仮定するなら、やっていることが不自然過ぎる。俺の眼

から視ても卍解ちゃんは、今噂で流れているようなことをする子じゃない」

「と、当然だよ！帆波ちゃんがそんなことする筈無い！」

「そうだね。生徒会役員も務めている彼女の人は、学年のみならず全校生徒が知っている。彼女が事実無根と否定すれば皆それを信じるし、この件はタチの悪いゴシップで終わってしまうだろう。……生粋のサディストである有栖が、そんなチャチな嫌がらせで満足する筈が無い」

「お前ほんとに坂柳のこと好きなのかよ……？」

「大好きだよ？……まあともかく今流れている噂は何かの布石であり、この事件はまだ序曲である可能性が高い」

「っ!？」

このままでは卍解ちゃんはより強い悪意に晒される……ようやくこの深刻さを理解した2人は顔をひきつらせた。

「まあ全部有栖が首謀者であるという前提ありきの推測だけど、備えとくに越したことは無いだろうね。卍解ちゃんが大切ならちゃんと守ってあげなよ？」

そう言い残し俺は踵を返し2人のもとから去っていく。少し塩を送り過ぎた気がしないでも無いが、口止めされてないってことは想定済みなんだろう？

「……まあそんな感じで山内君の懐柔は成功。それとBクラスの子達がお前の尻尾を掴もうと鼻息荒くしてゐるみたいだよ」

「ご苦労様でした。Bクラスの方々の行動については概ね予想通りですので、放置してもらつて構いません」

「さいますか」

有栖の部屋にて、以前俺がプレゼントした熊のぬいぐるみ（命名：鮭之介）を弄りながら報告を終える。……有栖は何か抱きしめながらじやないと寝付きが悪くなるらしいんだけど、合宿中はいつたいたいどうしてたのかな？まさか鮭之介を持ち込んだんじゃないよね？そんなことしたらリトルガール呼ばわりされても文句言えないんじゃないやあ……。

「桐葉？今何かとても失礼なことを考えていませんか？」

「いや別に？高校生にもなつてぬいぐるみ抱いて寝てるのはかなり痛いとか微塵も（ゴ
ンツ!!）あうっ!!」

「殴りますよっ？」

「殴つてから言うなし……」

減らず口には容赦なく振り下ろされる愛の鞭（鈍器）。避けようと思えばどうともなるけど、それやったら有栖が露骨に拗ね出してめんど……非常に心が痛むので甘んじて受ける。

「……ところで有栖、いったいどうしたのさ？」

「？ どうしたの、とはどういう意味ですか？」

「目元に涙跡が残ってるから、何か悲しいことでもあったのかなって」

「ツ!？」

咄嗟に目元に手をやってしまう有栖。……この子がこんな子供騙しに引つ掛かるってことは、よほどのことがあつたんだろうね。

「つ……私を謀るとはいい度胸ですね」

「はいはい凄んで誤魔化さないの。眼に頼るでもなく、今のお前はわかりやすいくらい落ち込んでるように見えるよ。……抱え込まずに話してごらん？お前は気が強いけど打たれ弱いんだから、心身ともに」

「……ふふ、一言余計なんですよいつもいつも。そこまで大袈裟なことではありませんよ。なんでもお父様にとつて不利なものがたくさん出てきたらしく、つい先ほど停職が決まったと連絡を受けただけです」

「ファザコンの有栖ちゃんからしたら一大事じゃん」

「誰がファザコンですか」

膨れっ面でポカポカと殴られる。和むなあ……。

しかし、坂柳バピーが停職ねえ……あの人はこの娘の親とは思えないほど清廉潔白な人物だから、誰かに嵌められたと考えた方が現実的だ。そしてあの人はこの娘の親だけあって非常に優秀で、そんなじよそこの有象無象に遅れを取るとは思えない。ましてや政府という後ろ楯があるあの人を、リスクを冒してまで陥れようとする人となると……「なるほど、綾小路バピーか」

「……ええ。綾小路君のお父様、もしくはその息のかかった人物の仕業かもしれません」なるほど……大好きなお父様がホワイトなたらとかいう非人道的な施設を運営している狂人に付け狙われてるんじゃない、不安に思うのも無理は無い。

内心不安でいっぱいな筈。泣き出してもいいくらいなのに気丈に振る舞う有栖を、俺は黙って優しく抱き寄せる。

「き、桐葉……？」

「ここには他に誰もいないし、俺も目を瞑ってあげる。……坂柳。パピーはそう簡単に潰されるような人じゃないけど、心配で気が気じゃなくなるのは何もおかしくない。片意地張ってないで泣きたいときには泣いてもいいじゃないか、俺にはできないことだけだ」

「……まったく、桐葉の癖に、生意気ですよ」

「はいはい、すみませんねお嬢様」

結局有栖は涙の一つ流すことなく、毅然とした態度を崩さなかった、と主張しておいてあげよう。泣かせた俺がそう主張するのだから、それで間違いないのだ。

胎動する悪意

翌日の放課後。

有栖と俺は暇潰しに10文字以上縛りしりとりでもしながら仲良く下校していた。何度かやっているがお互い語彙が豊富過ぎて、寮につくまでに決着がついた試しがない。実に不毛な戦いだ。

「クリサンセマム ムルチコーレ」

「歴史的風土特別保存地区」

「クレマチス・アンスンエンシス」

「スリランカ民主主義共和国」

「クレマチス・ヴィオルナ」

「ナイジェリア連邦共和国」

「く攻めうぜーな有栖。クレマチス・フォステリー」

「桐葉こそクレマチス系統で凌ぐのは姑息ですよ。立盟館大学」

「クレマチス・アツプルブルッサム。……ところで有栖、随分とつけられてるね俺達」

「武庫河女子大学。そうですね、ざっと見た限り……7人でしようか？」

「そうだな。あからさまにわかりやすい子4人の裏に、しつかり隠れながら尾行している子が3人。ちなみに全員Bクラスの生徒だよ」

「やはり一之瀬さんはクラス中に慕われているようですね、羨ましいことです」

「クラスメイトを駒としか思っていないお前がそんなこと言ってもな……」

「クラスメイトを有象無象としか思っていない貴方にだけは言われたくありません」

失礼な。ランスやマスマシンやファルコンにミキティと、注目している奴も何人かはいらぞ。それ以外？知らん、興味ない。

しかし昨日の今日でこうも露骨にマークしてくるとはね。この隠す努力が見受けられない布陣……重要な局面では俺が動くと言ったことをクラスで共有したらしく、正解ちゃんへの攻撃には絶対に加わらせないといい鉄の意思を感じる。なるほど中々悪くない手だけど、尾行されれば撒きたくなるのが人のサガ。

「有栖、先に帰ってて。今回の勝負は預けておくよ」

「何もわざわざ撒かなくても、彼等は私達が不審な行動をしない限り何もしてこないと思いますよっ！」

「うん、だろうね。ちよつと興が乗っただけだから」

「つまりいつもの悪い癖ですか、まったたく……」

呆れたように嘆息する有栖。念入りな下準備と緻密な策略を是とするこの娘からしたら、俺の思い付くままの生き方は死ぬまで賛同できないだろうね。

そんなことをしみじみ思いながら俺は制服の懐に手を入れ、アワモリシヨウマ（花言葉は自由気まま）の花束を四方八方に散らばるように上に放り投げる。俺達を監視していたBクラスの生徒達の意識が宙を舞う花に逸れた瞬間、俺は全速力で手頃な隠れ場所……あの茂みでいいか……に身を潜めた。

「……ん？あ、あれ!?!本条が消えた!?!」

「何!?!……坂柳は、まだいる……いい、いったいどこへ……!?!」

慌てて周囲を探し出す8人を注意深く観察しながら、視線による包囲網を避けるように落ちていた小石を明後日の方向に全力で投擲。カッーンと小石が地面にぶつかる小気味良い音に、彼等が反応し完全に気をとられた内にその場から立ち去る。

俺の消失マジックを体感した人はまるで煙のように消えたと感じるだろうけど、実際はこつちも失敗と隣り合わせのギリギリの綱渡りなのだ。

「ここまで来れば大丈夫だよね。……おやピヨリン、こんなところで奇遇だね」

「ど、どうも本条君……なんで後ろも見ないでわかったのですか?」

「んー、第六感?」

「そ、そうなんですか。凄いですね……」

いや納得しちゃうのかよ。こんなぼやぼやした天然ちゃんが、あの荒くれもの集団の中で上手くやっていけてるのか心配になるけど……意外と図太そうだし大丈夫か。

「でも本条君に相談したいことがあったので丁度良かったです。近くにカフエがあるので、よろしければ寄っていきませんか」

「おやまあ大胆なお誘いだね」

有栖との仲がほぼ全校生徒に知れ渡っている以上、無意味に誤解を招くようなことは避けるべきなんだけど……こちらを見る彼女の真剣な様子からして、そんな浮わついたお誘いでないことは明白。相談事……そういえばこの子確か、混合合宿では卍解ちゃんと同じグループだったっけ。

「……最近蔓延してる噂についてかな？」

「はい。……それも第六感でしょうか？」

「いいやこっちは推理。ダニエル・ネイサンの生まれ変わりと呼ばれる俺にはこのくらい造作もない」

「エラーリー・クイーンシリーズの作者、フレデリック・ダネイの本名ですね！かのシリーズは名作揃いですが、私は特に『シャム双子の秘密』が――」

わーお、急に生き生きし始めたねこのミステリーオタクちゃん。あの作品は非常に完成度の高いロジカル推理小説だから俺はあまり好きじゃないんだけど、せっかく楽しそ

うにしているのに水を差すのは気が引けるので、歩きながら適当に話を合わせてあげる。2、3分くらい歩くとケヤキモールの中でも特に繁盛してるカフェに辿り着い……あれ？窓際の席に座ってるのって……

「コージと、王美雨ちゃん？あの2人って同じクラスって以外に何か接点あったっけ？」

「え？みーちゃんと……あ、綾小路君？」

この天然ちゃんですら驚くくらいだ、珍しいなんてもんじゃない奇特な組み合わせであることなのは間違いない。

しかし『みーちゃん』か。仲の良い生徒は王ちゃんのことをそう呼んでいるそうだけど、ピヨリンと何か接点が……あつたね、そういえば彼女も合宿で同じグループだった。コージは軽井沢ちゃんと仲がいいので可能性は極小だけど、下手したら馬に蹴られる可能性があるがどうしても好奇心には勝てない。俺達は無言で目を合わせると店内に入り、適当にエスプレッソでも注文してから2人に近づく。

「やつほーコージに王ちゃん」

「こんには、綾小路君にみーちゃん」

「本条とひよりか」

「あ、ひよりちゃんと……本条君もこ、こんには」

おっとわかりやすいほど怯えていますね。

俺は大抵の子とすぐ仲良くなれるという自負してあるが、王ちゃんは例外にあたる人で、何度か話したことはあるけど何故か少々怖がられている。俺の目付きが悪いのか、よほど人見知りの激しい子なのか……それとも俺の本質に気がついているのか。

「もしかして、デートというヤツでしようか？」

「ちちち、違うよひよりちゃんっ」

はいはい違うのはわかったから、そんなわざわざ立ち上がりながら身ぶり手振りまで交えて全身全霊で否定しなくてもいいじゃないか。心なしかコージー落ち込んだりしてるとるよ可哀想に。

「それを言うならひよりちゃんも本条君とー」

「違うよ（います）」

余計な噂が立つと面倒なのできつぱりと否定しておく。どこで誰が見聞きしてるかわからないからね、いやわかるけども。

「ではお邪魔してもよろしいでしょうか？」

「もちろんだよっ。……綾小路君もいいかな？」

「ああ」

許可が出たので俺はコージーの隣に、ピヨリンは王ちゃんの隣の席に座る。

「にしても随分と奇妙な組み合わせだね。何の話してたのさ？」

「え、ええつとね、その……」

顔を赤くしながら、非常に答えづらそうにする王ちゃん。さつきコージーとのそういう仲を過剰に否定したことから内容は容易に推測できる。この子は確か平田君に好意を寄せてたし先日彼は軽井沢ちゃんと別れたらしいから、クラスで比較的平田君と仲の良いコージーに色々相談していたのだろう。……だけどそれを指摘するのはちよつとデリカシーに欠けるよね。

そんなことをぼんやりと考えていると、コージーが助け船を出してくれた。

「中国に興味があつて、少し話を聞いていたんだ」

「なるほど、それで中国人の王ちゃんにどこがお薦めか相談してたんだね？」

俺がコージーの嘘に乗つかると、王ちゃんは慌てたように二度、三度と頷いた。正直大根甚だしかつたが天然ピヨリンは騙されてくれたらしい。

「いいですよね、中国。私も万里の長城とか凄く興味あります」

「まあ中国と言えばそれだろうが、個人的には平遥古城に行つてみたい」

「俺は泰山や九寨溝の溪谷、武陵源かな」

丹霞や武夷山、三清山国立公園等も外せないぜ。

「ふ、二人ともよく知ってるね……」

「聞き齧った知識だ」

「俺は植物をこよなく愛する男だからね、自然遺産は余すところなく網羅してるんだよ」
中国は世界で最も自然遺産登録数が多い国だし、いつか是非とも訪れようと思う。
……有栖ついてきてくれるかな？あの子俺が植物について語り出すと露骨に面倒臭
そうにするんだよね。

「ところで3人は、友達なの？」

「はいっ。2人とも大切な読書友達です」

「ありや意外、コージもこの子のミステリー布教の餌食になつてたの？」

「何か言い方が引つ掛かるが、まあそうなるな。……その口ぶりからして本条もか」

俺達の何とも奇特な関係に王ちゃんは首を傾げていたが、すぐに前向きな考えに変
わつたらしく笑顔になる。

「クラスを越えて友達ができるのっていいよねっ」

「私もそう思います。争うだけが学校生活ではありませんし」

俺は以前からそうだったけど、あの合宿以降クラスを越えて打ち解け出す生徒も増え
出したようだね。今後学校側に無理矢理敵対させられたらどうなるからわかんないか
ら、一概に良い傾向とは言えないかもしれないけど。

……それにしても橋本の奴、とうとうコージの異質さに気づいてストーキングし始

めたか。俺の指示した人脈作りをちゃんとやっているのはいいけど、あまりコージーに深入りすると有栖の不興を買っちゃうよ？

「それで話つてのは何だ？」

カフェでしばらく話し込んだあと寮へと戻り、王ちゃんと別れてから俺達はロビーに集まっていた。

「先ほどはみーちゃんの手前、お聞きするのが憚れたのですが……一之瀬さんのこと、何か聞いていますか？」

「妙な噂のことなら一応知ってる」

「俺もー」

「ええ、そのことです。どなたが言いふらしたことなのか、ご存知でしょうか？」

「いや……わからない」

「Bクラスの子達はAクラスの誰かではないかって疑ってるみたいだけど……とりあえず俺は身に覚えがないし、有栖からは何も聞かされてないかな」

面倒だからしらばっくれようとも思ったが、どうやらピヨリンはある程度の情報は掴

んでいる様子だったので、勘ぐられないようある程度真実を織り交せておく。

「……私は一之瀬さんが苦しんでいるなら、何か力になつてあげたいです。正直争い事は好きじゃありませんが……友達を守るためなら、時には戦う必要があると思つています」

へえ、この人畜無害ちゃんにここまで言わせるとは……どうやら卍解ちゃんの人徳と人柄は、クラスの垣根さえも超越しているみたいだ。

「一之瀬さんを助ける方法は、まだ思い付きませんが……協力してもらえませんか？」

彼女の言う協力とは、4クラスが協力して卍解ちゃんを貶める不屈き者を炙り出そうつてことなんだろうけど……これは流石に引き受けるわけにはいかないよね、うん。

「んー、残念だけど無理かな」

「……そうですか。やはり、敵対するクラスの問題だからでしょうか？」

悲しそうにしゅんとするピヨリンに多少罪悪感が沸くが、ここは心を鬼にして断然なめてはならない。

「さつきも言つた通りBクラスの子達はAクラスを疑つてるから、俺達が協力を申し出ても相手にされないよ。でも同盟を結んでるCクラスなら大丈夫だと思つし、協力してあげなよコージー」

「Cクラスをまとめるには、平田か堀北の力が必要だが……一応話だけでも振つておこ

うか？」

ピヨリンはしばらく考え込んでから……

「すみません、やはりまたの機会にしましょう。下手に話を広げれば、一之瀬さんに迷惑をかけてしまうかもしれませんし……」

「そう、だな……そうかもしれない」

ふむふむ、まあ正しい判断だろうね。有栖は易々と尻尾を掴ませないだろうから、この件は卍解ちゃん本人が訴えるくらいしか解決方法は無い。……もつとも、それをしないと確信しているからこそ有栖は仕掛けたんだろうけどね。

それから数日間卍解ちゃんの悪い噂は日増しに広がっていき、金曜日にはおそらくもう全校生徒に知れ渡っていた。

しかし卍解ちゃんは学校側に被害届を出すことなく、日々を当たり前のよう過ごし

ているようだ。

降りかかる火の粉を払わない姿勢が正しいのかどうかは知らないけど、少くとも周囲は卍解ちゃんの毅然とした態度から、やはり出回っている噂は所詮デマカセだったという認識になっていった。ただでさえ学年末試験が差し迫り、さらにその10日前には仮テストが控えていることもあり、卍解ちゃんを陥れる策略は不発に終わるとほとんどの人が確信しただろう。

『一之瀬帆波は犯罪者だ』

そんな一文が印刷された手紙が、金曜日の放課後1年生全員のポストから見つかるまでは。

……黒幕は有栖として、誰がこれを投函させられたんだろ？万が一卍解ちゃんが学校側に訴えられたら特定されて退学ものだろうし……やっぱり弱味握られてるマスマシかな？いつもいつも御苦労様です。

「それでザキちゃん、俺に何か用かい？」

「つ……その手紙のことで話がある。悪いが少し付き合ってもらうぞ本条」

振り返ってみればあらびつくり。ザキちゃんを筆頭にBクラスの生徒10人くらいが、やや敵意のこもった視線を向けているではありませんか。これからどこへ連れてかれるんだろ。いやんこわーい。

おとといきやがれ

植物庭園『ルビカソテ』。

植物愛好家である俺の夢と希望の詰まった安住の地へ、俺はBクラスの子達に罪人のごとく連行されてきた。

「……俺の楽園に殺伐とした雰囲気持ち込まないでほしいんだけど」

「それについてはすまないと思うが、この話し合いのことは一之瀬には聞かれたくない」

「あの子が例の件に君達クラスメイトを巻き込みたくないからだね」

「ああ。ここなら滅多に人が立ち寄ることもないし、万が一後から誰か来ても説得して帰ってもらおうつもりだ」

「俺の楽園をうもれ木呼ばわりした挙げ句、堂々と営業妨害かい」

「俺の楽園って、別にお前のじゃないだろ……」

柴田君は呆れたようにそう指摘するが、この施設は俺が大金を払って建設してもらったんだし、実質俺の物と言って差し支えないんだよ。……そのことをわざわざ教えてあ

げる義理も無いけどさ。

俺と共に入園したのはザキちゃん、柴田君、渡辺君、網倉ちゃん、白波ちゃんの5人で、残る5人は外で待機するみたいだ。……白波ちゃんも俺が怖いなら外で待つてればいいのに。

園内の椅子とテーブルが並べてある広場に着いたので、俺は懐から取り出した大きな布をテーブルに被せつつ椅子に座る。

「さて、それじゃあ話を聞こうか。紅茶でも飲みながらね」

俺が布を取っ払うと、テーブルにはアッサムが注がれたティーカップが6つ並べられていた。目に見えて狼狽えるザキちゃん以外の4人。

「……どしたの？毒なんて入れてないよ？」

「いやなんだコレ、どうやったんだ今の!？」

「マジシャンが手品のタネをバラすわけじゃないでしょ」

カップを手に取り一口飲む。うーむ、やはりちゃんと淹れたやつに比べたら味は落ちるね。

しかしこの子達随分と青いねえ。そんなにわかりやすく動揺してるようじゃ、クラスの間の腹の探り合いに参加するなんて10年早いよ。

「……それで、俺に何か話があるんだったね。どんな内容か当てたげよつか？」

「いや、せつかくだがちゃんと俺の口から話す」

それに比べてやっぱりザキちゃんは中々見所がある。前回柴田君達はまんまと引つ掛かったけど、ここでみすみす思惑を指摘させたりしたら、その後の会話の主導権をあっさり奪われることになる。

「話というのはここ最近立て続けに起きている、一之瀬への根も葉も無い誹謗中傷についてだ」

「だろうね」

「俺達はクラスを挙げて噂の出所を調べ上げ、犯人はまず間違いない1年Aクラスの間である突き止めた」

「ふむふむ、それで俺がその犯人と判断して問い詰めに来たと。失礼しちゃうねまったく」

「違うと言ひ張るのか？ここ数日お前のことはマークさせてもらったが、それら全てをお前は途中で撒いている。何か疚しいことを隠してるんじゃないか？」

「あのねザキちゃん、大勢につけ回されてずつと監視されてたら、普通は不快に思うってちやんとわかつてる？君達将来ストーリーキングに手を出しそうで桐葉君心配」

俺がそう指摘すると、5人ともややバツが悪そうに目を逸らす。どうやら似たようなことをリユニケル達が散々やってきたから麻痺していたようだね。……まあ不快云々

は真つ赤な嘘なんだけど。むしろ今日はどうやって出し抜こうかみたいな感じで楽しんでさえいたけど。

「つまらねー駆け引きはやめにして、さっさと本題を話さない。俺もそう暇じゃないんだよ? テスト前だし」

「……わかった。確かに俺達が犯人だと疑っているのはお前じゃなく、坂柳だ」

「へー。その根拠は?」

「Aクラスの1生徒が、坂柳に無許可で他クラスに喧嘩を売るとは思えない。加えて坂柳は混合合宿のグループ決めの際、謂れの無い罪で一之瀬を糾弾したと報告を受けている。……全て状況証拠とはいえ、疑って然るべき相手だろう」

「なるほどなるほど、それで俺から情報を吐かせようって腹積もりか。……有栖がこの件に関わってるかどうかなんて知らない、この前柴田君達に言った筈だけどなあ」

「悪いが、とても信じられんな」

「だったら直接有栖を問い詰めたらいじやないか回りくどいなあ」

「当然そうした。……だが――」

「あつさり言い負かされたか、上手いこと言いくるめられたってわけか。言っちゃ悪いけど頼りないね君達」

有栖は純粋な話術力なら俺以上、駆け引きで渡り合えるのはBクラスだとギリギリ出

解ちやんくらいだ。ザキちんじやちよつと力不足、卍解ちやんにおんぶに抱つこのそれ以外は話にならないからまあ仕方がないね。

しかし何か気にくわないうことでもあつたのか、渡辺君は怒りに任せてテーブルに拳を叩きつける。……ちよつと紅茶溢れちやつたじやないか勿体無い。

「いい加減にしるよ！お前といい橋本といい坂柳といい、口八丁で言い逃れやがつて……お前らが一之瀬を苦しめてるのはもうわかつてるつて言つてるだろ！」

「お、おい!?落ち着けよ渡辺！」

「だげどよ柴田！」

「随分とカルシウムが足りてないね。紅茶にミルクでも入れようか？」

「ッ！お前！」

人のちよつとした親切心を挑発と捉えたのか、渡辺君は怒りの形相で俺に近づき俺の胸ぐらを掴もうとしてきたので、彼の伸ばしてきた腕の袖を掴まんで思いつきり引つ張つて転ばせる。

「ぐあつ!?!」

「『渡辺(君)!!』」

「随分と乱暴だね、いつから君達はリユンケルになつたのさ」

いや、それだけ卍解ちやんのことで冷静さを欠いているつてことなのかな。うーん

……仲間想いなのは結構だけど荒事は好きじゃないから、ここはちよつと念入りに釘を刺しとくか。

俺は起き上がろうとした渡辺君の首根っこを掴んで起き上がらせ、間近で彼の目を真つ直ぐに見据える。彼の瞳に怯えが宿る……きつと今の俺は人間とは思えないとても無機質な目をしているんだらうね。

「ひっ……!?!」

「有栖曰く、みやびん会長はコランダム先輩と違つて学生に喧嘩は付き物つて考えで、以前と違つて多少の喧嘩沙汰は咎められなくなるらしい。だから脅して言うことを聞かせようとしたのは別に悪手とは言えない。でもね……」

恐怖からか渡辺君は俺から視線を外そうとしたけど、俺はそれに合わせて彼の視線の先に回り込む。残念だけど、俺の眼からは逃げられない。

「噛みつく相手はちゃんを選びなよ」

「う、うわあああ離せえええええ!」

とうとう耐えきれなくなったのか、渡辺君は俺の掴んだ手を強引に振り払つて大きく後ずさる。呼吸脈拍とも乱れ2月だというのに汗だくになり震え上がっている。

そんな彼の身を案じBクラスの面々が慌てて駆け寄り、彼を庇うように立ち塞がり俺を敵意のこもった目で睨む。……ザキちゃん以外（特にあまり気の強くない網倉ちゃんと

トラウマ持ちの白波ちゃん)には多少の怯えが見られるのに友達を守ることを優先するとは、ほんと人間できてるねこの子達。でも……

「話し合いはもうお開きでいいよねザキちん。渡辺君がその調子じゃ君達も気が気じゃないだろうし、俺としてもせつかく振る舞った紅茶に口をつけもしない、無粋な連中に協力する義理も無い。おとといきやがれ」

「坂柳のやつていることは決して許されることではない。一之瀬が学校に訴えれば、後悔するのはお前達なんだぞ」

「だったらそうすれば良いじゃん。以前までの噂話と違って、今はこうして決定的な証拠があるんだし」

例のプリントを突き付けると、ザキちん達は苦虫を噛み潰しような表情で押し黙る。「寮のポスト付近にも監視カメラは当然ある。学校側に申告して調べてもらえば、これを投函した人間は容易く炙り出せる。……それで解決する筈なのに何故しないんだい？」

「生憎と一之瀬に止められていてな。こんなことをする輩にも、同情の余地はあると思っっているだろう」

「だとしたらあの子、リーダー失格だね」

「何……?」

ザキちゃんが不快そうに僅かに顔を歪める一方、他の4人は先ほどまでの恐怖が消し飛んだかのように敵意を向けてきた。卍解ちゃん喜びたまえ、君はこんなにも彼等に愛されてるよ。

「君達の話信じるとしたら、犯人は俺達Aクラスの人間だそうじゃないか。こんな悪質なことやらかしたと学校に発覚したら、クラスポイントは大きくマイナスされるだろうね。……つまりだ、あの子は大きく広がった俺達との差を縮めるチャンスを無視してることになる。それはリーダーとして正しい判断とは言えないよ」

「……」

俺の指摘にそれぞれ驚愕、困惑、悔しさを滲ませるBクラスの面々……流石に苛めすぎかな、反省反省。

俺は手品でティーセットを片付けつつ、卍解ちゃんのフォローをしておく。

「とはいえ、賢いあの子がそんなつまらねー判断ミスするとは思えない。つまりだBクラス諸君……卍解ちゃんが学校に訴えないのは、何か重大な理由があるってことさ」

「重大な、理由……!?!」

「何なのそれは!?!教えてよ本条君!」

「敵対してる生徒に助けなんか求めないの。それを解き明かすのが君達の仕事だよ網倉ちゃん。それができればたぶんこの問題は解決するだろうから頑張つてね、応援して

る」

この子達じゃ絶対に解き明かせないと確信しつつも、形だけ激励を送りつつ『ルビカ
ンテ』を後にする。

ああ無駄な時間だった。他人に踏み込むことを躊躇しがちなザキちゃんや、正解ちゃんを過剰に神聖視する彼等じゃ毛ほどの役にも立ちやしないのに。

この問題はやはり本人にしか解決できないとつくづく思う。あまり失望させないでよ正解ちゃん。一見先日の合宿の件とよく似ているけど、君のそれは茜さんのような『献身』じゃない……ただの『逃避』だよ。

2月14日、月曜日の朝。

いつものルーティンをこなしてからロビーにて有栖と合流……ありや？今日はマスマンもいるんだ。

「おはよー有栖、マスマン」

「おはようございます桐葉。今日はバレンタインデーですね。どうぞ受け取ってください」

有栖は抱えた鞆から綺麗にラッピングされた箱を取り出し、やや恥ずかしそうにしながら俺に手渡した。……なんか無駄にあざとかったので茶々を入れてみる。

「石鹸の詰め合わせね、いつもお世話になります」

「乙女の純情を軽んじるようでしたら、溶かして鼻から流し込んで差し上げましょうか？」

「すみませんっした、慎んで頂きますハイ」

「まったくもう……」

「……さっさと済ませてしまおうと思っただけど、やっぱり学校で渡すんだっした」

俺と有栖による恒例の茶番を見て溜め息を吐いた後、マスマンは鞆から取り出したチョコを俺に投げ渡した。

「一応確認するけど義理だよな？じやなかったら無意味な争いを招くことになる」「心配しなくても義理よ、クラスの女子一同からのね。……多く貰ってもアンタは喜ばないって坂柳が言うから一まとめにするのは別に良いとして、なんで私が渡さなきゃいけないのかしらね？」

「それはまあ、私を除けばクラスで最も発言力のある女子生徒だからでしょうか」

「以前は元葛城派の西川ちゃんだったけど、体育祭で最優秀に輝いたことで株価が急上昇し逆転したんだろうね。よつ、ゴリラウーマン」

「流石は私の親友ですゴリラウーマンさん」

「アンタらほんとしばき回すわよ!」

久し振りのマスミン弄りも楽しんだことだし、久し振りに3人で登校する。途中平田君や里中が女子生徒によるチョコのクラスター爆撃に遭っていたが、まあフリーのイケメンが背負いし宿命だと思つて堪え忍べ。

「それで有栖、今後はどうするつもりだい？」

「私から仕掛けることはもうありません。真澄さんをお願いして餌はもう撒きました、食いついてくれるかは五分五分でしょう」

「なるほどなるほど。マスミン毎度ご苦勞様」

「ほんとに苦勞したわよ……」

もう懲り懲りだと不満そうに溜め息をつき肩を落とすマスマンに対し、有栖は楽しそうに笑っている。残念ながら今後も彼女は苦勞させられそうだ。

結論から言うとな今回の件の真の狙いは、正解ちゃんを潰すことではない。有栖にとつて正解ちゃんは割とどうでもいい相手だからだ。本命は彼女を助けようと彼が動いてくれるかにある。……彼の性格を考えると、正解ちゃんに利用価値があると判断すれば動いてくれるだろうか。

「おや、茜さんだ」

「橘先輩……？どこにいらっしやるのですか？」

「校門の前。どうやら誰かを待つてるみたい」

「わかるわけないでしょ、まだ学校まで何百メートル離れてると思つてんのよ……」
視えちやつたんだから仕方ないじゃないか。

やがて学校まで辿り着くとまだ校門の前にいた茜さんは、俺達を見つけると小走りでちよこちよこ駆け寄ってきた。……毎度思うが本当に高校生かね？この人と有栖――

「ふんっ！」

第六感でも働いたのか、二人は前と後ろから非常に息の合った連携で俺にクロスボンバーを浴びせる。どちらも平均的な女子高生以下の筋力とは言え首を狙われたら結構痛い。

「ひどいねえ、いきなり何するのさ」

「何か失礼な気配を感じました」

「同じくです」

なんてこった、どうやら俺の思想・良心の自由はこの娘らに剥奪されているらしい。悲しくても桐葉君は泣かない、男の子だもん。

「まあいいや、おはよつす茜さん」

「むっ、随分と馴れ馴れしい挨拶ですね。先輩に対する敬意が欠けてます」

「後輩から2000万借金する先輩に払う敬意なんてこんなもんでしょ」

「……そう、ですね」

「冗談だからしよげないですよ。茜さんは今でも俺の一番尊敬する先輩だから。何かいい感じの弱味ができたんで、好き放題玩具にしようと思ってるだけだから」

「最悪ですこの後輩!？」

うがーつと両手を振り上げて怒りを露にする茜さん。この人からはストレスを和らげる成分が絶えず分泌されてると思う。ストレスなんて感じたことしばらくねーけど。

「それでどしたの？教室の行き方わからなくなっちゃった？」

「あなたに大恩はありますが流石にメますよ!?!……これ、この前お世話になったお礼です」

そう言っつてやや頬染めつつ明後日の方を向きながら、茜さんは包装からして義理だとわかるよう配慮の行き届いたチョコを手渡してきた。

「当然義理ですからねっ。そこんところ勘違いしないように！」

「そんなツンデレのテンプレみたいな釘刺されなくても知ってるよ。じゃなかったらどっかの誰かさんの怒りを買って、また退学に追い込まれかねないよ？」

「失礼なこと言わないでください。私はそんな器の小さい女ではありませんよ」

「はいはい、目が全然笑ってないよまったく。……というかそんなことどうでもいい。コランダム先輩にもちゃんと渡すんでしようね？」

茜さんの両肩を掴んで問い詰めると、顔を真っ赤にして露骨に動揺し始める。

「も、勿論ですよっ」

「ちゃんと本命のヤツでしょうね？」

「ほっ!？」

この反応の時点で九分九厘確定したが、念のため彼女の鞆に手を入れコランダム先輩宛のチョコを取り出したが……

「ああつ、何するんですか!？」

「……茜さん、どういうことですか？ラッピングといい形といい大きさといい、俺宛のチョコとほとんど同じものに見えるんですけれども」

「……ほ、堀北君にはいつもお世話になつてるけど……私がそういうチョコを渡しても迷惑に思われるだけだと思ふし……」

何やら言い訳染みたことを、顔を真っ赤にしてごによいと並べる茜さん。実はそうじゃないかと危惧してたけど、まさかここまで……ちゃんと準備して良かつたよ。

俺は天を仰ぎ一度大きく深呼吸してから、コランダム先輩用の義理チョコを……

「さんの……」

バカタレがああああああああああ！

「にやあああああああああああああああ！？」

バツキバキに砕けるように茜さんに叩きつけた。

背中を蹴り飛ばせ

「な……ななな、何んてことしやがるんですかあなたはあああああああー！」

愛しのコランダム先輩のために用意したチョコ（義理）を粉碎された茜さんは、当然のごとく激昂して俺に詰め寄る。元が元なので怒り狂っていても大変可愛いですが、今回ばかりは和んではいけない。

「やかましいこのヘタレ団子が！」

「ヘタレ団子!？」

「有栖とマスマイン先に教室行つといてー。このおバカな先輩に少し活入れてやらなきやならないから」

「わかりました。行きますよ真澄さん」

「……まあ、私らには関係ないか」

校舎に入っていく2人を見届けつつ、予想外の狼藉に呆気に取られている茜さんを容赦なく責め立てる。

「なあ茜さん、アンタらもうすぐ卒業だぜ？この後学年末テストやら最後の特別試験や

らが控えてるんだから、実質今日が想いを告げるラストチャンスなんだぜ？だというのが義理チョコで置きにいくってアンタさあ……引くわ」

「引くんですか!？」

「いや引くでしょ。この期に及んで日和るとかチキンにも程があるわ」

「で、でもですよ！本条君も言った通り3年生には最後の特別試験が控えていて、私達はAクラスで卒業できるかどうかの瀬戸際で、堀北君はとつても忙しい筈です！私と堀北君は卒業後も関わりがあるので、何も高校の内に行動しなくても——」

「二の足を踏む理由を他人のせいにするなよ」

往生際の悪い茜さんの言い分をバツサリと斬って捨てる。目の前にあるチャンスをみすみす逃す奴は、この先どれだけチャンスがあらうと逃し続けるだけだ。

「あのさ茜さん……なんで卒業後もコランダム先輩がフリーで居続けるなんて甘い考え持ってるの?」

「そ、それは……」

「容姿端麗、文武両道、社交性やカリスマも申し分無い男を、世の女性達が放っておくわけないでしょうが。むしろ高校3年間フリーだったことが奇跡に近い」

「っ……」

まあ女子の先輩方に聞き込み調査をしたところ、コランダム先輩が茜さんを差し置い

て誰かと交際するとは思えないからだっただけ。

「茜さんがモタモタしてる間にどこぞの馬の骨がコランダム先輩と添い遂げたら、きつと死ぬまで後悔するよ？ 違う？」

「違……」

……わないに決まっていますよ！ ええそうです認めます、私は堀北君のことが大好きですよ！ 一年生の頃からずっと好きでしたよええ！ あの人が他の誰かと添い遂げるなんて、考えただけで胸が苦しくなります！」

抑え込んでいた感情が爆発したように、茜さんは俺の胸ぐらを掴んで怒鳴り散らす。興味深そうに見物していた周囲の生徒達がギョツとなつてのけ反るが、茜さんは構わずに押し込めていたものを全て爆発させる。しかし……

「……だけど、どうして私が告白なんてできませんか！ 誰よりも堀北君がクラスのために自分を犠牲にしたか知っていながら、誰よりも堀北君の足を引っ張ってしまった私に……そんな資格ある、わけ……」

勢いは最後まで続くことなく萎んでいき、とうとう彼女の目からは涙が零れ落ちる。

俺の眼はあらゆる隠し事を見抜く。

先日の混合合宿でみやびん会長に嵌められクラスに膨大な不利益をもたらしたことによる罪悪感が、茜さんの心の内に巢食っていたことも勿論知っていた。そして、だからこそ俺は心底感服させられた。そんなものを抱えておきながら、みやびん会長の暴挙に気づいていたのに好奇心で止めようとしなかった俺を、拒絶しなかったこの人に。

……それらを踏まえた上で俺がこの人にかける言葉は、やはりこれが相応しいだろう。

「ゴチャゴチャうるせえ。四の五の言っていないでさっさと当たって砕けるバカ」

「「ええー！？」」

茜さんも野次馬していた周囲の生徒も、予想外の返答に開いた口が塞がらない様子。茜さんは強い人だから薄っぺらい慰めなんかで絆されたりはしないだろうし、だからって根気強く説得なんてしていたら日付が変わってタイムオーバーだ。

極論この人が抱える罪の意識なんて今はどうでもいい。そんなものは適当にコラんだム先輩にでも丸投げすればいい。

今俺がすべきは彼女の背中を、理屈を無視して無理矢理蹴つ飛ばすことだ。

「なんか『告白しない理由』ばかりポコポコ湧いてくるみたいだから、俺が『告白しなければいけない理由』をプレゼントしてあげる」

「は……告白、しなければならぬ？」

「茜先輩さ、結果として俺の2000万で退学を免れたよな。アンタはあのとき『そのことには感謝してる』と言っていたけど……そのことに偽りは無いよね？」

「え？も、勿論無いですけど……」

「感謝してるなんて口で言うだけなら簡単だけども、ちゃんと行動で示してもらいたいわけ」

「ま、まさか……」

俺が何を言いたいのか察したのか顔を青ざめさせながら震えだす茜先輩に、俺は鞆から綺麗にラッピングされたハート型の箱を手渡す。

「こんなこともあるのかと本命チョコは俺がちゃんと用意しておいたから、今日中にこれ渡して告白するように。あ、これはお願いじゃなく命令だから拒否権は認めないよ」

「やつぱりいいいい!!おかしいでしょどう考えても!私が告白することが、どうしてあなたへの感謝に繋がるんですか!？」

「俺はいつ茜さんがコランダム先輩に告るんだろうなああって、それはもう凄く楽しみにしてたんだよ？つまりあの2000万は、そのために支払ったと言っても過言では無い。……アンタが行動しないままなら、あの2000万は完全に無駄金になっちゃうのさ」

「うぐつ……！」

金を貸した側は借りた側よりも圧倒的に優位に立てる。こんな穴だらけの理論でも容易く言いくるめられてしまうほどに。

「で、でも本命のチョコを他の人が用意するのはマズいでしょう!? こういうのは自分で手作りしないと意味が——」

「学生の手作りなんて市販のチョコレートを溶かして、ちよつと形を変えて固め直しただけの手作り（笑）だろ？そんなお手軽なものに付加価値なんて生まれえないよ」

「わあああー!? 言ってはいけないこと言った! この男絶対言ってはいけないこと言っちゃいましたっ!?!」

「想いつてやつは作るべきじゃなく、渡すときに込めるべきでしょ。どうしても俺の手製が気に入らないなら本命チョコは俺のせいでグチャグチャになったことにして、その辺のコンビニで既製品でも買って渡せばよろしい」

こう言っつけば心優しいこの人は、俺の作ったものを無下にはできなくなるだろう。

ちなみに俺の用意したチョコはハート型の形かつ、表面にホワイトチョコで『I love you』と大々的に書かれた、言い逃れの余地の無いド直球の本命仕様となっている。これならあの腐れ朴念仁も茜さんの好意を疑えまい。

さてそろそろ朝礼の時間だから、最後に発破をかけておこうか。

「あまり失望させないですよ？このままで俺、告白1つできないようなつまらねー女のために、2000万ドブに捨てた愚か者になっちゃうよ。……信じてるよ茜さん、アンタは俺が最も尊敬してる先輩なんだから」

俺の嘘偽りない心からの激励に茜さんは目を丸くし、やがて可笑しそうに笑い出した。

「……ひどい人ですね、あなたは」

「知ってる」

「礼は言いませんよ。義理とはいえ苦労して作ったチョコを爆砕されてますし」

「いらない」

「……ほんとに玉砕したら、たぶん私泣いちゃいますよ?」

「フラれたらチカちゃん先輩にでも慰めてもらってね」

「焚き付けるだけ焚き付けて、あなたは慰めてはくれないんですね……」

「ごめんね、俺好きな人いるから」

「やっぱりひどい人ですね」

「だから知ってるよ」

そう言い残し門を潜りつつ、眼で茜さんの心境が変わったかちゃんと確認しておく。……やれやれ、どうやらやつと腹を括ったみたいだね。世話の焼ける先輩だよまったく。

……その日の放課後、『ちゃんとしっかり考えた上でお前の気持ちに答えたいから、少しでも待っていて欲しい』と返事を保留にされたら茜さんからメールが来た。眼鏡カチ割ってやろうかと割と本気で思ったのは内緒だ。

そして翌日の朝。

今日は学年末テストを見越した仮テストが行われる。成績には反映されず、あくまでも現在の自分の学力を試すため、学年末テストの難易度を理解するためのテストらしい。

当然全ての生徒が真剣に取り組むべきテストなのだが、何故かそれぞれの教室が随分と騒がしい。

「なんか随分浮き足立ってるね」

「そうですね。教室に入ったら橋本君に聞いて見ましょう。私が頼んでもないのに色々調べてるでしょうし」

「最近はなんかコージーをつけ回してるっぽいな。足が速いだけじゃあいつの興味を引くとは思えないから、きっと彼の実力の片鱗を嗅ぎつけたんだろうけど……アレ放つといていいの?」

「別に構いません。彼程度なら容易にあしらわれるでしょうし」
酷い言われようだな橋本も。

教室に入るとAクラスも例に漏れることなく、他の3クラスほどではないが少しざわついていた。……妙だね、何人かがやけに不安そうにしている。

有栖はこのクラスの中核を成すメンバー……マスマン、ファルコン、橋本を自分の席に呼び寄せ、誰か聞き耳を立てていないか調べると俺に目配せする。俺は教室中の生徒、特に今も有栖と敵対しているランスと戸塚を念入りに観察した結果、大丈夫だと判断し有栖に右手でオーケーサインを見せる。

「それでは橋本君、何があつたか教えてください」

「また真偽不明の噂話が、今度はAクラス以外のクラスの掲示板に書き込まれていたそう。しかも今度は一之瀬ではなく、やはりAクラス以外のクラスの奴等は無差別にな」

そう言つて橋本はBクラスの掲示板が表示された携帯画面を見せてくる。……Bクラスの浜口君はカンニングをしている、Cクラスの真鍋ちゃんはイジメを行つていた、Dクラスの本堂君はデブ専……噂の種類や悪質さの程度、真偽が全部バラバラで統一性がまるで無いね。共通しているのは精々、Aクラスの生徒の噂は1つも無いってことだけか……。

「1億分の1くらいは俺の予想が外れてるかもしれないから、まあ一応確認しておくけど……これ、有栖の指示じゃないよね？」

「はい、私も今初めて知りました」

「なんだ、そうだったのか。……まあ確かに姫さんが糸を引いてるなら、こんなAクラス

を疑ってくださいと言わんばかりの方法は取らないか」

橋本は一瞬意外そうにするも、すぐに納得したように頷く。先日の話し合いでの渡辺君の台詞からして、Bクラスは橋本が坂柳の指示で今回の件に深く関わっていると思っ
ているようだ。まあこんな胡散臭さが全身から滲み出ている軽薄な男を普通は疑わな
い方が難しいし、有栖も問い詰められてもあえて疑われるような態度ではぐらかせと指
示していたらしい。

結論を言えば主な実行犯はマスミンともう1人で、橋本は回ってきた噂を右から左へ
流しただけ……俺と同じく単なるデコイだったりする。散々見当違いの相手に振り回
されたBクラスはご愁傷さまだ。

「それで、どうするんだ？このままじゃBだけでなく、CとDも敵に回すことになるぞ。
かと言って否定したところで信じちゃくれないだろうし……」

「いえ、せっかくですからこの成り済ましも利用させてもらいましょう」
「はっ？」

やや焦ったように問う橋本に、有栖は満面の笑みで橋本に返事する。まあそりや嬉し
くなるだろうね……ここまで自分の思惑通りにことが進めば。

「真澄さんと鬼頭君はしばらくの間、寮にいるとき以外はずっと私と行動を共にしてく
ださい」

「はいはい」

「……わかった」

要するに実力行使や闇討ちに備えたボディガードということだろう。有栖は己の弱点を誰よりも理解しており、だからこそ易々とそれを突かせはしない。

「橋本君はこれまでと同じく持ち前の軽薄さを活かして、口で否定しつつも掲示板の実行犯が自分であるかのように振る舞っていてください」

「いい加減怒ってもいいと思うんだ俺。……だけど手が早いDクラスの石崎や伊吹ちゃん、Bクラスと違って暴力も辞さないぜ？それにアルベルトに出てこられたら、俺じゃどうしようもねえよ」

「その点は心配入りません。……桐葉、お手数をかけてしまえますが頼めますか？」

「あいあいさー。正直やる気が起きないけど、まあ仕方がないから引き受けたよ」

「頼むぞ本条、学年末テスト前に怪我とか御免だし」

とりあえずAクラスの方針は決まったが……さて、この先どういう結末を迎えるのかね？

肝心の仮テストは、まあ多分いつも通り満点だろう。

これまでの試験と比較しても難易度はかなり高くなっていたが、俺や有栖の学力は今さら高1の範囲で躓くようなレベルをとうに超えてしまっている。クラスメイト達も流星は最上位クラスだけあって、間違っても赤点なんて無様な成績を取ることは無いだろう。

「桐葉、私はBクラスの方々に用事があるので先に帰っててください」

「あー、卍解ちゃんのこと？」

「はい。昨日から続けてご病気でお休みなされているようなので、落ち込んでいます。なら励ましの言葉でもかけようかと」

「お前本当に性格悪いね」

「ふふ、よく言われます」

そう言つて有栖はマスマシンとファルコンを連れて教室を出た。

なんでも卍解ちゃんは風邪を引いて体調を崩しているらしいが、タイミングがタイミングだけに真偽は定かでは無い。自分が追い込んだことが原因かもしれないのに、あの娘は相変わらず清々しいほど外道だね。

……まあ、別にどうでもいいか。このまま呪縛を克服できず潰れるようなら彼女はそ

れまでだ。多少気に入つてはいたが有栖や茜さんほどじゃないし、あれこれ世話を焼いてあげる義理も無い。自力で解決できないなら彼が上手くやってくれることを祈つておくといい。

今俺がやるべきことは、10日後に行われる学年末テスト対策だ。高1のレベルでは躓かないと自負してはいるけど、些細な気の緩みは失点に繋がるからね。ほんの僅かな時間すら疎かにはできない。

……だと言うのに、

「よう石崎、話がしたいなんて何の用だ？」

「何の用だ、じゃねえよ橋本。本条まで連れてきてどういうつもりだ。俺は1人で来
いって言った筈だ」

「そつちこそアルベルトを連れてきてるだろ。なあに、ちよつとした用心のためさ」

なんで俺は橋本と2人で、見るからにご立腹なDクラスの生徒達（と何故かコージ
グループの面々）に囲まれてるんだろうね。というか最近よく四面楚歌な構図になるの
は気のせいかな。

消えない罪と逃げない勇氣

2月18日 金曜日の放課後。

俺と橋本は学校の敷地から離れた場所に呼び出され（まあ呼び出されたのは橋本だけなんだけど）、Dクラスのピヨリン、伊吹ちゃん、石崎君、山田君と対峙していた。そしてそんな俺達を何故かCクラスのコーギー一行が、不安そうに見守っているという謎の構図だ。今回の事件の中心であるBクラスが蚊帳の外つても滑稽な話だね。

「しかし、なんだこのメンツ。三宅達まで呼び出してどういうつもりなんだ？」

「知らねえよ。お前が呼んだんじゃないかねえのか」

「ここに来る途中の俺達を『偶然』コーギーに見られてたから、心配してついでに来てくれたんじゃない？ 橋本お前、先日もザキちゃんと揉めたそうじゃないか」

明らかにこの場で浮いているCクラスを不審に思う2人に、ちよつとした皮肉交じりの推測を話してからコーギーに視線を向けると、白々しいことに彼は無言で頷いた。

「……まあ何でもいいさ。用件を聞こうか」

「言うまでもなく例の噂の件です。あれはあなた達のAクラスが流したものですよね

「？」

ピヨリンが一步前に出て橋本にそう問いかける。血の気の多い石崎君や伊吹ちゃんじゃ橋本の軽薄さに辛抱できず、話し合いそのものが成立しないから妥当な人選だ。……山田君？やだよ、俺がいちいち翻訳して間を取り持つなんて面倒過ぎる。

「いやいや、なんで俺にそんなことを聞くんだよ？」

「んなもん——」

「抑えてください石崎君」

怒りに任せ食って掛かろうとする石崎君を、ピヨリンは優しく制止する。その様子はさながら猛獣使いだ……つて言ったらやっぱり怒られるかな？

「あなたが一之瀬さんの噂を広げているところを、神崎君が見たとお聞きしました」

「あいつも口が軽いねえ。それともその2人か？」

橋本が視線を向けた先にはコージと三宅君が。しかしピヨリンはそちらを向きすませず橋本を問い詰める。

「答えてください」

「……ま、そつちの二人は聞いていたから素直に言うけど、あくまで俺は又聞きした噂を右から左へ流しただけさ。ちよつとした好奇心でな」

やれやれと肩を竦めながら言い放つ橋本。ちゃんと嘘偽りのない真実を述べている

のに、こどもも胡散臭く振る舞えるのはもう一種の才能だね。

「この期に及んでそんな言い訳がまかり通ると思ってるのかよ？」

「言い訳？ 事実さ。だいたいなんで無関係なお前らDクラスがしゃしゃり出てくるんだ？ もしや……例の噂はお前らが流したのか？」

「ふざけんな！ 坂柳が噂を流させたなんてことはもうわかってんだよ！」

「おいおい決めつけんなよ。確かに姫さんは好戦的な性格だから疑いたくなるのも無理は無いけどよ、今回はあいつも俺達も何の関係も無いんだよ。実際証拠は何も無いんだろ？」

橋本の白々しい態度に、目に見えて苛立つ石崎君。まあ橋本の言う通り、罪を認めさせるだけの証拠を有柄は掴ませていない。特に彼らが気にしているであろう今回の噂は実際何もしてないから、たとえ天地がハンドスプリングしても証拠なんて出てくるわけない。

「しかしちよつと意外だな、お前らが一之瀬の肩を持つなんてよ」

「誤魔化そうとしても無駄なんだよ。俺らの根も葉もない噂までベラベラ流しやがって」

「はー、やっぱりな。一之瀬なんてどうでもよくて、Dクラスのあることないこと好き放題言われているのが気に入らないだけなんだろ。たしか石崎は……小学生に悪戯して

ネンシヨにぶちこまれたんだっけ？」

ロリコン呼ばわりされた石崎君は当然のごとくキレて、ピヨリンは慌てて飛び掛かりそうになる彼の腕を掴む。それを見て橋本は楽しそうに挑発を続行する。

「よくもまああんな噂を並べ立てたもんだぜ。どうやって調べ上げたか教えてくれよ」
「ざけんなテメエ！」

「よせ石崎」

ピヨリンでは抑えきれないと判断したのか、慌てて三宅君が止めに入る。

「止めんな三宅！これ以上好き勝手させるかよ！」

「やめとけよ石崎。随分と喧嘩に自信があるようだが、こつちも結構やるんだぜ？なあ本条」

「えー？散々挑発しといて俺に頼るのかよ。自分の蒔いた種くらい自分で回収してほしいなー」

まあ助けを求められたら手を差し伸べるのが俺だし、仕方がないから一肌脱ぎますかね。

しかし俺が懐からメインウエポンを取り出そうとしていると、三宅君は咎めるような視線を向けてくる。

「お前らやめとけよ。この学校じゃ喧嘩は厳罰化されるつてもうわかってるだろ」

「以前まではそうだったが、今の生徒会長は多少のいざこざは大目に見てくれるらしい——ぜ。」

橋本は距離を詰め石崎君目掛けて蹴りを繰り出すが、三宅君はそれを左腕で受け止める。……かなり喧嘩慣れしてるね三宅君。実は昔はリユニケルみたいな子だったのかもね。

「つ……マジかよ。どうかしてるぜあの会長」

「やるな、止めようと口出しするだけのことはある」

橋本は距離を取って構えを解く。……お前のせいで余計殺伐とした空気が流れちゃったじゃん嫌だなあ。

「喧嘩はダメです」

「わかってるよ椎名ちゃん。今のは自衛する力があるって証明しただけさ」

「もういいでしょひより。平然と嘘をつくこいつらには、直接拳で聞き出すしかないの」
待つて伊吹ちゃん、ナチュラルに一括りにしないですよ。嘘は平然とつくけど。

「おいおい伊吹ちゃん、俺らが争ったところで何の得もないぜ？」

「喧嘩売ってきておいて随分調子がいいじゃないの」

「俺達は無関係なんだよ、信じてくれ」

ヘラヘラと笑う橋本に対し、伊吹ちゃんは怒りを堪えるように歯軋りしている。この

子に関する噂は確か……リユンケルに告白してふられた、だっけ？そりゃキレるわ。

「お前ら、龍園……が脱落したからって俺達を舐めてんじやねえよ」

我慢の限界を超えたのか石崎は三宅を押し退けて前に出る。それに合わせるように伊吹ちゃんも隣に並び臨戦態勢に入る。

「一之瀬の噂の件と俺達への噂の件について、坂柳に詫び入れさせろ。それか、今すぐ噂を取り消せ」

「だからどちらでも俺達は無関係なんだって。わっかんない奴だな」

呆れたようにわざとらしく肩を竦め溜め息をつく橋本に、石崎君は怒りのボルテージをさらに上昇させる。いったいどういう人生を送ってきたらこんな憎たらしく振る舞えるようになるんだろうね？

「だったら直接坂柳と話をさせてもらおうぜ」

「姫さんがお前なんか相手にする筈ないだろ。……本条、どうやらやるしかないかもな」
「まあ、そうだね。橋本だけならともかく、有栖に危害が及ぶならちよつと見過ごせないかな」

俺が懐から数本の^{メイソウ}ワイヤーを取り出すのと同時に、石崎君は俺にタックルを、伊吹ちゃんは橋本に飛び蹴りを仕繰り出した。伊吹ちゃんはひとまず橋本に丸投げするとして俺は石崎君の突撃をひらりと避けつつ、すれ違い様に彼の両手と両足をワイヤーで

ぐるぐる巻きにして拘束する。

「うわっ!?!……な、なんだこれ、外れねえぞ!?!」

「まったくこの前のBクラスといい君達といい、皆して随分血気盛んだーね」

「What!?!」

後ろから殴りかかってきた山田君の拳をノールックで掴み、彼が驚愕して硬直している隙にそのまま一本背負いで投げ飛ばして地面に叩きつけ、慌てて起き上がろうとする彼の両手両足も拘束する。

「本条、テメエ……!」

「damn it!」

拘束を解こうと2人はもがくが、巻き付けられたワイヤーはビクともしない。見た目通り腕力が自慢のようだけど、俺が考案した桐葉式ワイヤー拘束術は力任せでどうにかなるほど甘くはないよ。

「つ……石崎!?!アルベルト!?!」

「さて、あとは伊吹ちゃんだけだね。流星に女の子をぐるぐる巻きにするのはマズいし、お願いだからこころ辺で手打ちにしてくれない?」

「アイツといい、アンタといい……!私を見下してんじやー!」

「待ってください伊吹さん!……本条君の言う通り、皆さん喧嘩はやめてください」

激昂する伊吹ちゃんを遮り、ピヨリンが俺達の間割り込みながら強い口調で言い放った。

「見た限り喧嘩では本条君には勝てないようですし、よしんば勝って自白させたとしても坂柳さんが主犯という証拠にはなりません」

「だったら何、泣き寝入りしろっての？」

「気持ちわかりますが今は耐えてください。……必ず報いは受けてもらいます」

この場をセツティングしたのはやっぱりピヨリンか。先日卍解ちゃんのために協力してあげたいって言ってたしね。

「本条君、石崎君達の拘束を解いてくれませんか？」

「いいよー。はいちよつとの間じつとしてね、今解いて上げるから」

「……まどろっこしいな、ハサミか何か持ってねえのかよ？」

「あるけどこれ今後も使うつもりだからダメ」

みやびん会長もろくでもない提案してくれたもんだ。喧嘩弱い者イジメや暴力は好きじゃないってのにまったくもう……。

月日に関守なく、学期末試験までいよいよあと1日となった。流石に皆もくだらねー噂等に気を取られている余裕など無く、せつかくの昼休みだというのにクラスメイト達は一心不乱に最後の詰め込みに夢中になっている。

「桐葉、少しついてきてください」

そんな中有栖は席から立ち上がり、不審な視線を向けるランスを気にも留めず俺を引き連れて教室を出る。

「どした？Bクラスに用でもあんの？」

「ええ。一之瀬さんがようやく復帰なされたので、少々お話をと」

あれから1週間以上姿を見せていなかった卍解ちゃんやんが、ようやく学校に登校してきたらしい。……あの子を潰すことには拘っていないとはいえこの子は結構几帳面な性格だから、おそらく形だけでも決着を付けに行くんだらうね。

Bクラス教室前の廊下にて、やってくる俺達の姿を見たBクラスの生徒の一人は慌てて教室に入ると、入れ替わるようにぞろぞろと敵意剥き出しの生徒がたくさん出てきた。

「何しにきたんよお前ら！」

「そう怒鳴らないでください柴田君。私は皆さんを救いに来ただけですよ！」

「俺は付き添いだから特に用は無い」

「本条君はともかく、どういふことかな坂柳さん」

教室の奥の方から、白波ちゃん達に囲まれた正解ちゃんが声をかけてきた。

「待てよ一之瀬、お前が相手する必要ないって！」

「そうだよ帆波ちゃん、行っちゃダメ！」

白波ちゃんは彼女に抱きつき、是が非でも有栖に接触させまいとする。……まあ病み上がりでこんな危険人物の相手させたくないわな。

「何やら桐葉に対して不愉快な気持ちになりましたが、まあ今はいいでしょう。……まず体調が回復なされたようで安心しました。私達も心配していたんですよ？」

「うん、ありがとう」

「正直俺はそこまで心配してなかったけど、まあ健康なようで何より」

「う、うん、正直な感想ありがとね……」

白々し過ぎる有栖の態度と露骨にどうでもよさそうな俺の態度に、Bクラスのほぼ全員が苛立ちを募らせる。しかしこの程度のアウェイでは俺は何も感じないし、争い事が大好きな有栖に至っては凄く楽しそうだ。そんな俺達に対して、ザキちゃんがクラスを代

表して一歩前が出る。

「救いに、といったな坂柳。つまり自分が噂の元凶だと認めるといふことか？」

「いいえ、噂を流したのは私ではありません」

「……なら、何をもって救うと言うんだ」

「以前、一之瀬さんと桐葉が大量のポイントを所持しているという噂が持ち上がりましたね。あのときはすぐに鎮静化してしましたが」

「それがどうした」

「私の推測に過ぎないのですが……一之瀬さんはBクラスで共有するポイントを管理する、金庫番のような役割を担っているのではありませんか？」

「そんなこと、答えられるわけないだろ」

Bクラスの戦略に関わってくる部分だ。たとえ同盟相手でも、ましてや敵対する相手に教えられる筈もないよね。

「ええ、私も別に回答は求めています。ですがもし私の推測通りなら、それは非常にリスクのあることだと思つたのです。……一之瀬さん、私の言つてゐることは間違つていますか？」

目の前にいるザキちんではなく、教室の奥にいる正解ちゃんに向かって挑発的に首を傾げる。

それに対して「お解ちゃん」は友達の制止を振り切つて俺達へと距離を詰め……しかし最後に俺達ではなくクラスメイト達へと向き合つた。

ふむふむ、なるほど……どうやらこの子は、己の過ちと向き合えたようだ。

「……みんな、ごめん！」

「な、何を謝つてるんだよ一之瀬!?!お前が謝る必要なんて——」

「無粋だね柴田君、女の子の話は聞いてあげなきゃダメだよ?」

……正直もう結末までだいたい読めてしまったので、さつさと終わらせてもらおう。

「私、今までずっとみんなに隠し続けてきたことがあるんだ……」

「待て一之瀬、何もこの場で話す必要は——」

「違うよ神崎君、これは包み隠さず皆に話さなきゃならないことだから。……ここ最近、

私のことで変な噂が広がつたよね。勿論そのほとんどはでっち上げだけど……私が犯罪者だつてことは本当なの」

先程までのざわめきが、みるみるうちに静まり返つていく。Bクラスの子達だけでなく、話を聞きつけいつの間にか集まっていた他のクラスの子達も、到底信じられない様子だ。まったく驚いていないのは既に情報を掴んでいた有栖と、そもそも過去に興味の無い俺、そして……

「どうやらここにいる方々は見当もつかないようなので、詳しく教えてあげてください。」

あなたは一体、どんな『罪』を犯したのですか？

人のもがき苦しむ姿が大好きな有栖は、何ともまあ楽しそうである。卍解ちゃんは一度躊躇するように喉を鳴らし、意を決して言葉を紡ぐ。

「私はみんなに黙っていたことを、今から全部告白します。私の隠してきた犯罪……」

それは——万引きをしたこと」

え、しよぼ……。

ええと、彼女の語ったことを簡潔に纏めると……

一之瀬家めっちゃ貧乏、だけど仲良しかつ幸せ↓しかし母親が過労で倒れる↓原因は妹の誕生日プレゼント代を稼ぐため無理をしたせい↓気の毒に思った卍解ちゃん、魔が差して万引き↓母親がそれに気づいて激怒、彼女を連れてスーパーに謝罪に赴く↓店側

は不問にしてくれたが、卍解ちゃんは罪の意識に苛まれる↓彼女が万引きしたことが学校中で噂になり居場所を無くす↓半年ほど引きこもっていた卍解ちゃんに、担任が極めて閉鎖的なこの学校について教える↓1からやり直そうと決心し入学↓なんだかんだあつて今ココ

こんな感じである。

なんとまあ、散々勿体ぶつておいてしょっぱいものが出てきたもんだ。もし大罪なんて犯したら卍解ちゃんの性格上ぬけぬけと学校生活なんて過ごせないだろうから、どうせ小さな過ちに対して勝手に罪の意識に苛まれてるだけだとは予想はしてたけど、それにしたってねえ……

俺が思わず脱力する一方、話を終えた卍解ちゃんが改めて頭を下げる。

「ごめんねみんな、こんな情けないリーダーで……」

「そんなことないぜ一之瀬。今話を聞いて確信した。やつぱり一之瀬は良いやつなんだってさ」

「うん、確かに帆波ちゃんのこととは決して誉められたものじゃないけどー」

何か良い感じにまとまりそうなところを、隣の幼女は空気を読まず杖を床に強くついて音を響かせる。そろそろ帰りたいからあんま長引かせないでよ……。

「くだらない茶番ですね。同情を引きたいのか知りませんが、どんな境遇だろうと万引きは万引き。私利私欲で盗みを働いた貴女に、同情の余地などありません」

似たような犯罪を常習的にやっつてるであろうマスマシンと仲良くしてるくせに、よく言うよ。

「うん、その通りだね」

「貴女がクラスメイトから預かっている大量のプライベートポイントも、卒業間際に盗み取ってしまうのではありませんか？普通ならそんな詐欺行為は学校側も認めないでしょうが貴女は賢い人ですから、たった今やったような同情を誘うやり口を使えばどうとでもなるでしょう」

「そう、だね……どれだけ頑張っても、私の努力は全て偽善かもしれない。一度犯した罪は二度と消えることは、無いんだよね」

ネチネチと執拗に口撃を畳み掛ける有栖。……この子は凄く頭が良いから、この場で卍解ちゃんを潰すのはもう不可能だと察している筈なのだ。それでもなお苛めを続行するのは単なる趣味だろうね。

「皆さんもおわかりになったでしょう。彼女のような人をリーダーに据えている限り、Aクラスには……私や桐葉には決して勝てません。今すぐ預かっているプライベートポイントを生徒に返し、Bクラスのリーダーを降りるくらいのはして頂けないで

しよつか？それぐらいしななければ、貴女に貼られたレットルは消えませんか？」

有栖の執拗な揺さぶりに対し、正解ちゃんは一度目を閉じて深呼吸し……

「これで私の懺悔は終わり！」

俺と有栖に笑顔を向けた。

どんな手を使ったかは知らないが——まあだいたい想像はつくけど——正解ちゃんの心は以前よりも遥かに強靱になっている。もう、己の過ちから目を背けることは無いだろう。

「私のしたことに関情の余地はないし、それから逃げるつもりもない。でも私は実際に刑罰に問われたわけじゃないから、償うべき罪は本来存在しないものだよ」

「うんまあ、一理あるね」

「黙っててください桐葉。……随分と厚顔無恥ですね、万引きをした悪人とは思えない開き直りです」

「かもしれないね。でも私はもう振り返らない。過去に縛られない。

……こんなどうしようもない私だけ——みんな、最後までついてきてくれないかな
……？」

……この子は決して楽観視していたわけじゃない。己の過ちと向き合えたとしても、周りが罪を犯した自分をどう思うかまではわからない。

糾弾されることを憂いただろう、拒絶されることを想像しただろう、非難されること
が怖かっただろう。……それでもこの子は最後まで逃げず。

まあ残念ながら、それらは全て取り越し苦労だよ正解ちゃん。1年間も苦楽を共にし
てきた仲間が、君の苦悩と勇氣に気づかないわけないじゃないだろうに。

「ついていくに決まってるだろ！なあ皆！」

笑顔で叫んだ柴田君に、Bクラスの生徒全員が同調し彼女にエールを送る。一部始終
を見ていた他クラスの生徒達も、もう正解ちゃんを犯罪者として見ることは無いだろ
う。

改めて実感するが、正解ちゃんの人望が故成り立つこの結末は、多少の懸念はあれど
非常に強固だね。……ちらりと横を見ると、明らかに引き下がる気のない幼女の姿が。

「ねえ有栖、後は俺に任せてもらえる？」

「おや珍しいですね、貴方がこんな些事に口出しするなんて」

「正直ね、一連の噂騒動にはもう飽きた。お前の当初の目的は達成したんだからもうい
いでしょ、さっさと綺麗さっぱり終わらせて来る」

「まったく……相変わらず貴方は飽き性ですね」

「お前は相変わらずサディストだよ」

俺は今からあの子に3つの道を示す。彼女は白か、黒か、それとも灰色か……誰の目

から見ても一目瞭然となる。

黒はまあ無いとして、これから俺達Aクラスと戦っていくならたぶん灰色がベストアンサーだ。

……しかしそれでも白を選ぶことを期待してしまうのは、俺も内心ではあの子が本物の善人だと信じたいのかもしれないね。

9 卷エピソード

〔side：一之瀬〕

心優しいクラスの皆が私を受け入れてくれたことに、私は感極まって泣いてしまいそうになるのを堪えていたそのとき……先ほどまでとてもつまらなそうにしていた本条君が、パチパチと拍手をしながらこちらに近づいてきた。

私は、いや私達は思わず姿勢を正し身構える。……おそらく今回の件に本条君は何も関与していない。それどころか今朝神崎君に聞いたから考えるに、本条君は今回の件を解決するにはどうすればいいかを遠回しに教えてくれていたらしい。いや、もつと言うなら二学期末には既に私に対して助言してくれていたっけ……。

ともかく有栖ちゃんと私、どちらの顔も立てつつもずっと一歩引いた位置から成り行き見守っていた彼が、ここに来て前に出てきた……何をするつもりなのかまるでわからず、どうしても体が強張ってしまう。

「君はこの一年自分がリーダーとして求められることに対して、どこか後ろめたさをずっと感じていたね。……そのつまらねー柵は今日無くなった。そのことをまずは祝福しておくよ」

「あ、ありがとう……?」

私の抱えていたものが本条君に筒抜けなのはもう今更だとして、彼は何が言いたいのだろうか?

「でも一つだけ問題が残ってるよね? たった一つとはいえバラ撒かれた噂を肯定してしまつた以上、有栖の言つたようなことを君がしでかすのではつて疑念は、このまま根強く残つちやうだろう」

「それは勿論覚悟してるよ。しばらくはそういった疑惑の目で見られるかもしれないけど、少しずつ払拭していけたら——」

「うんうん、たしかにそれが無難な解決法だろうね。……でもさ、ぶつちやけ面倒じゃない?」

本条君は何か携帯を弄りながらそんなことを言い出した。どうしよう、話がまつたく見えない……。

「め、面倒?」

「学年末テストだけの一年生最後の特別試験なので色々で大忙しなこの時期に、そんな回りくどいことにかかざらわなきゃならないなんて……正直嫌でしょ?」

「え、ええと、でも……」

「言い淀んだつてことは、やっぱり多少はそう思ってるんだね。だからちよつとした親

切心で俺が解決方法を提示してあげるよ。確証の無い噂なんて、明確な実績で振じ伏せればいいのさ。……はい送信つと」

彼がそう言い終わるとほぼ同時に私の携帯が震えた。明らかに無関係ではないので軽く断りを入れてから携帯画面を開くと……桐葉君から2000万プライベートポイントが送金されていた。

「えつと本条君……これ、どういうことなの？」

「たつた今送つたそのポイントは、どう使おうと君の自由だ。何ならそれで今すぐウチのクラスに移動してきてもいい」

「「なっ!?!」」

本条君の発言から送金した額を察した周りの生徒達が騒然とする。当然だろう、過去のこの学校で2000万もの大金を個人で集めた生徒は一人もいないという話は有名だ。だというのに同級生がもう既に集めていたことも……そしてそれをあっさり手放したことも、私達からすれば理解できる次元を完全に超えてしまっている。

「いくら有栖でも自分に従う子を無意味にイジめるほど外道じゃないし、優秀な君ならウチのクラスメイト達もきつと仲間として迎え入れてくれるよ。まあこれまで築いた人徳や信頼は二度と戻らないけど、どうしてもAクラスの恩恵を得たいと思うなら安い代償でしょ？」

「本条、お前！」

「おっと悪く思わないでよ柴田君、あくまで選択するのは彼女だ。……さて正解ちゃん、君はその金をどうするんだい？」

そう言つて試すように不敵な笑みを浮かべる本条君。……もう何度も身をもつて知つたことだけど、この人に隠し事は一切できない。私がどうしてもAクラスで卒業したがつてゐることは、きつとバレてゐるんだらうな。

「勿論どういふ使い方をしようと文句は言わないよ。どうせあぶく銭だし」
「そつか。……じゃあ、選ばせてもらうね」

不安そうに見守るクラスメイト達、固唾を飲んで見届けるC、Dクラスの人達に囲まれながら、私はこの悪魔の誘惑と言ふべき問答に対する答えとして……

送られてきた2000万を、そっくりそのまま本条君に送り返した。

「……ふむ、それが君の選択か」

携帯画面を確認しポイントが戻つてゐることを確認した本条君は、とても愉快そうに笑つた。

「誘つてくれたことはとても嬉しいけどごめんね、私はこのクラスでAを目指したいんだ」

「それはまあ予想通りだけどき、だったらポイントは俺達と戦うための軍資金にでもすればいいじゃないか。これだけ証人がズラリといるんだし、俺が騙し取られたって学校に泣きついたところできつと相手にされないだろうに」

「うん、クラスのリーダーとして考えるならそうするべきだつてわかつてる。でも……私を信じて悪評を晴らそうとしてくれる人のポイントを利用して、やっぱり私にはできないや」

確証の無い噂を明確な実績で振り伏せる……全クラスの生徒が見ている前でこうすれば、私にかけられた疑惑はあつという間に風化するだろう。2000万という大金を手放してまでする必要があるかどうかは、人によって判断にわかれるかもしれない。

けれど……私を信じてくれた本条君を裏切るなんて、私には到底できっこない。きつと坂柳さんや龍園君にはリーダーとして不適格と判断されるだろうけど、それでも私は私のやり方でAクラスを目指すんだ！

「なるほど、それが君の信念なんだね。なら……ちゃんと最後まで貫き通しなよ？」
「うん、もちろんだよ！」

「……というわけだ有栖。結論として卍解ちゃんは疑いの余地の無い、お人好しのおバカちゃんだったよ」

「おバカちゃん?!」

「どうやらそのようですね。……すみません一之瀬さん、噂に踊らされて貴女にあらぬ疑いを向けてしまったようです」

「えっと、別に気にしてないよ坂柳さん。私が過去に罪を犯したのは事実なんだし、そう疑つちやうのも無理はないよ」

ベレー帽を被りペコリと頭を下げてくる坂柳さんに、私はそう返すしか無かった。

……いくら私でも坂柳が本当に申し訳なく思っているとは考えない。現に彼女は噂を流したのは自分達じゃないというスタンスを崩していない。そこを追求してしまえば、どちらか一方が倒れるまで争い続けることになるだろう。……改めて思うけど、非常に手強い相手だ。

「何だか良い感じにまとまったみたいだけど……皆ちゆうもーく」

話が一段落したところで私達の担任である星之宮先生が、茶柱先生と南雲会長を引き連れてやってきた。

……私は生徒会に入る条件として、私がBクラスに振り分けられたであろう理由……自分の犯した過ちを南雲先輩に教えている。坂柳さんが私の過去を知っていたのは、おそらくはそういうことなんだろう。

……それでも私が生徒会に入ることができたのはこの人のお陰だし、別に恨んでるわけじゃない。元はと言えば全て私が蒔いた種だ。

「生徒会長が教師と共に一年生の教室にやってくるとは、何か問題でも発生したのですか？」

「問題と言えば問題だな。お前ら一年の間で行われてる無根拠な誹謗中傷の応酬が、もはや無視できないレベルになってきているな。これ以上の無意味な噂の吹聴した者は今後、処罰の対象となると先ほど決まったそうだな」

「……なるほど。学校側が動いたのであれば、後は任せておいて問題は無さそうですね。桐葉、帰りますよ」

「はいはい」と

もうここに用は無いと判断し、坂柳さんと本条君が去っていった。

全クラスを巻き込んだ噂ともなれば、当然学校側に訴える生徒も出てくる。そうなれば学校側も事態を重く受けざるを得ない。……坂柳さんほどの人がそんなことを考慮していないとは考えづらいし、やっぱり私以外の噂を拡散させたのはAクラスじゃなく、誰かが私を助けるために危険を承知で行ってくれたようだ。

そしてその誰かはおそらく……

沸き立つクラスメイト達に囲まれながら、私はそれぞれのクラスに戻っていく生徒達の中の一人……綾小路君の背中を見つめた。

【side：綾小路】

教室に戻り明人達にさっきの出来事の一部始終を話していると、事件の元凶である坂柳から電話がかかってきた。何やら話があるらしく一階の玄関前に呼び出されたので警戒しつつ向かうと、その場には坂柳と本条が待っていた。

「実にお見事でした。綾小路君」

「何の話だ？」

「いくつか謎は残っていますがもう時間もありませんし、後で桐葉に聞いておきます。ただ、何故一之瀬さんを守ろうと思ったのですか？」

「話が見えないな」

「貴方が一之瀬さんを救ったからこそ、彼女はあの場で立ち直ることができたと思えます。……おそらくは事前に誰かに対して、自分の過去を告白していたのでしよう」

「その相手がオレだと？」

「そうです」

坂柳の推測した通りオレは昨日の内に一之瀬に直接、自分が過去に罪を犯したことを打ち明けさせていた。いずれ坂柳が一之瀬の心を折ることがわかっていたからこそ、あえて事前に折っておいた。

閉じ籠る一之瀬は罪への恐怖から最初はオレを遠回しに拒絶したが、何度も何度も通うことで絶えず圧をかけつつ、彼女の罪を既に知っていることを仄めかし、自発的に吐き出させた。己の過ちに無理矢理向き合わせ、声押し殺し泣き出しても慰めも叱責もせず話を聞き続け……そして過去の柵を乗り越えた一之瀬は見事坂柳の攻撃を受けきったというのが、今回の騒動の裏側だ。

……まあオレの動きが坂柳にバレていたことは別に不思議ではない。そもそも一之瀬の心を開かせるには、事前に彼女の罪を知っておく必要があった。そしてその情報をおレに伝えたのは他でもない――

「オレを動かすために神室を使ったな」

「真澄さん？」

「一之瀬が万引きをした過去を、あいつは事前にオレに流していた」

「それは彼女の独断です。一之瀬さんのような善人が自分と同じ罪を抱えていたことに、何か思うところがあつたのでしょうか」

「えー、マスミンも万引きしてたの？いいがーい」

「白々しいですよ桐葉、どうせとうの昔に察していたでしょうに」

「まあ常日頃から監視カメラや人の目に注意を割いていたり、体育祭でハチマキを掠めとる動きがやけに手慣れてたりと、気づかないほうが無理な話だよな」

普通はそんな些細な手がかりから他人の抱える秘密を暴くことなどできないが、本条の眼は常識を超越した道筋から答えを導き出せるため驚きはしない。ただ、今はそれよりも……

「いや、それは違うな。あのとき神室に、自分が万引きをしていた証明としてアルコールの缶を差し出したが……あれはあの日盗んだ物ではなく、入学当初お前が奴の弱味を握ったときの物だ」

「ふむ、その根拠をお聞きしても？」

「神室と別れた後コンビニで同じ銘柄の賞味期限を確認したが、4ヶ月以上も差があった。お前に弱味を握られた際に盗んだアルコール缶は、お前が処分すると言って渡したと聞いていた。つまりあらかじめお前が保管していた缶を、事前に受け取っていたということになる」

その時点で神室が一之瀬の過去を話すことは、坂柳の策略の一部だと推測できる。

「何故私が、そんな回りくどいことをする必要が？」

「オレを誘い出すためだろ？でなければ今回の一件、オレは静観していただろうからな」
考えてみればなんとまあ酷いマッチポンプだ。自分で一之瀬を追い詰めておいて、オレが一之瀬を救うよう裏で働きかけていた。本気で一之瀬を潰したかったならば、あれだけ本条を遊ばせておくとは思えない。

「ふふ、流石は綾小路君ですね。一之瀬さんが壊れようが壊れまいがどうでもよかったです。貴方が介入してくる可能性を残しておけば、それに乗ってくれるのではと期待しました。可能性は半々でしたが……理想の展開になりました」

坂柳はゆつくりとオレとの距離を詰め、闘争の色を宿した目で真っ直ぐにオレを見据えた。

「私と勝負してください、綾小路君」

「受けなければどうする？」

「そうですね……龍園君がずっと探していたCクラスを率いる黒幕は貴方であると、桐葉に暴露してもらいます」

「あ、ここに俺が出てくるのね」

……まあ、そうくるとは思った。オレが坂柳の立場でもそう脅すだろう。数々の特別試験を経て、他クラスの本条への注目度と警戒度は学年1と言つていい。そんな本条がオレを警戒している、などと言われてしまえば全学年がオレに対して関心を寄せてしま

うだろう。

「……何を以て勝ちとする。クラス間の差ならば既に歴然だ」

「次の試験内容は存じませんが、その順位で争いましょう。私が負ければ貴方の秘密は誰にも明かさず、そして二度と勝負を持ちかけることもないと約束しましょう。保証相手として学校を立会人にしても構いません。貴方にもリスクを背負っていただくために、私が勝てば黒幕だということは公表させてもらいますが」

そのリスクは、オレが棄権したり手を抜いたりしないための保険といった所だろうか。ホワイトルームの理念がよほど気に入らないのか知らないが、どうしてもオレを潰しておきたいらしい。……ねじ込むならこのタイミングだな。

「……引き受けてもいいが、1つだけ条件を加えてもいいか?」

「おや、何でしょうか? 可能ならば検討しましょう」

「詳細は伏せるが、近いうちにとんでもない面倒ごとを抱え込むことが確定している。その際に本条の力を貸してくれ」

「なるほど……桐葉、かまいませんか?」

「ん、別に良いよ。コージは警戒心が強いから、有栖が負けたときは正式な契約書を作ればいいかね?」

「ああ、よろしく頼む」

「引き受けてくれてありがとうございます。これでやっと私もこの学校に来て良かったと思えそうです」

坂柳は満足そうに去っていき、本条もそれに続こうとしたところをオレは引き止める。

「なあ本条……お前はオレが裏でどう動いていたか、どれだけ知っているんだ？」

先ほど坂柳は、いくつか謎が残っているが本条に話を聞くと言っていた。本条は今回の件にほとんど関わりを持たなかった筈なのに、オレの思惑がどれだけ見抜かれているか少し気になった。

「んーとね……1から全部話すのは時間が足りないから、1つだけ質問させてもらおうね？」

「質問？」

「うん、別に答えなくてもいいよ。」

ちゃんと櫛田ちゃんの弱味は握っておいた？」

チリ、と後頭部に微かな電気が走ったのを感じた。

「……」

「答えたくないみたいだし、それじゃあね」

鼻歌を歌いながら機嫌良くさつていく本条の背を、オレは黙って見送った。

……一之瀬が何も訴えない以上、学校側は噂の件について動かさない。だから動かざるを得なくするために、全クラスの噂を流出させるといふ手法を取った。

まったくのデタラメばかりでは信憑性に欠けるので、真実をいくつか織り交ぜる必要がある。だからオレは今後自分に入るプライベートポイントの半分を渡し続けることを条件に、榊田が握っている弱味——榊田にしか打ち明けていないような重いものではなく、何人かには知られているような軽度なもの——を聞き出していた。

安くない代償を支払うことになってしまったが、今回の取引は榊田を始末する際にとっても役に立つことになる。

正直言つて、今回の件に介入しようと思ったのは別に一之瀬を助けたいわけでも坂柳の邪魔をしたかったわけでもなく、学年1と思われる榊田の情報収集力の厄介さをこの機会に知っておくことと、奴を始末するための材料を手に入れておこうと思つたからなんだが……まさかそこまで見抜かれているとはな。

幸い本条は龍園や坂柳のように好戦的ではないから、さほど注意しなくてもかまわないが……もしこの先敵対するようなことがあれば、どう対処すればいいのだろうか。

頭脳や身体能力だけなら然程懸念しなくてもいい。どちらも脅威的だが、オレならば

どうにか対処できる手立てがある。……だがこいつの眼は、あらゆる見通しを容易く覆しかねない。

本条、お前の眼はどこまで視えているんだ？

クラス内投票

学年末試験が終わって数日が経ち、今日からついに3月となる。試験の結果が伝えられる3月1日月曜日の早朝、俺は瀬川先輩に頼んで貸してもらった道場の隅でマスマイン、ファルコン、橋本のAクラス3幹部に格闘技を教えていた。ここ最近始めた日課だが、脆弱王有柄が自身の弱味を補うために選別したメンバーだけあって、3人とも中々上達が早い。

「……はい、今日はここまでだよ。最初の頃はお粗末だったけど、段々と動きが良くなってきたね」

俺の体を壊さないギリギリのラインを攻めたハイパスパルタ特訓を受け、その場に倒れ伏し肩で息をする3人にそう告げると、マスマインが俺に恨みがましい視線を向けてくる。

「ハア……ハア……ま、毎回思うけどさ、こ、こんなことする……ハア……意味あんの？」
「だから前に有柄も言ったでしょうが。みやびん会長が学生同士の多少の喧嘩を緩和されたってことはだよ、これからは荒事を乗り切る能力がより重要になってくる筈さ。ね

え瀬川先輩」

「え？あ、ああ。たしかにあいつが意味のないことをするとは思えねえし、十分ありえるかもな」

朝練を終えて片付け作業に入っていた瀬川先輩に尋ねると、やや肯定よりの返事を返してきた。

「でも本当に良かったのか？そんな隅っこを貸すだけで1日1万ポイント払うなんてよ」

「大した出費でもないし構いませんよ。この特訓はあまり他クラスには知られたくないっすから、遠慮なく部費に……つと、今年は対外試合で大きな実績を出したから、部費は潤沢だったっすね。ある程度貯まったら部員の皆さんの小遣いにもすればいいんじゃないですかね？」

「おいなんで急に投げ遣りになった？……まあ確かに、今年の空手部は凄く活躍したよなあ。団体戦でも1Hに行けたしお前は個人戦で優勝したりと、高育始まって以来の快挙だとウチの担任にも誉められたよ」

中学運動部で目に見える実績を出した生徒は、大抵スポーツ推薦で設備の整った私立に行くので、うちの運動部はどちらかか趣味の範疇に収まっている。そんな中、高校総体出場ひいては優勝を果たした空手部は、確かに歴史的快挙と言っても過言ではないだ

ろうね。……まあひとえに俺やチカちゃん先輩のお陰なんだけど。

「でも来年はどうすつかなあ。緒方先輩達は引退するしお前は辞めちゃうしで、全国に行くなんて夢のまた夢だぜ。……なあ、大会のときだけでいいから戻ってきてくれねえか？」

「丁重にお断りしますね。元々手っ取り早くポイントを稼ぐために入っただけだし、勝つとわかりきっている勝負ほどつまらねーものは無いっすから」

「そうか……そうかあ」

普段はケン坊のようなオラオラ系の先輩が、本気で部の未来を憂いているのかいっぴなく落ち込んでいる。

うんまあ確かに、全国行きを決めた団体戦のメンバーで残っているのはもう瀬川先輩だけだし、その瀬川先輩にしたって地区大会後半ではほぼ毎試合負けてたしで、来期は早々と地区予選で敗退するかもしれないね。

チカちゃん先輩に比べたら実力リーダーシップ共に大きく劣ることを、この先輩が内心気にしていることは勿論知っているけど……武道家なんだから自分で立ち直って欲しいというもあるし、特に助け船を出すことなく3人を連れて道場を出る。

まあ全国出たことだし、今年の一年生に有望な新人がいる可能性は低くはない。そう悲観したものでもないだろう。……たぶん。

「……なあ本条、一つ聞きたいんだが」

「んむ？何だいフアルコン」

「俺には空手、神室には合気、橋本には柔道を重点的に教えていたが……お前、どれだけの種類の格闘技を修めているんだ？」

「んー……結構多いんじゃない？小さい頃から飽き性で、ある程度できるようになるとすぐ別の競技に手を出す、つてのを何回も繰り返していたから」

だから純粋な空手の腕前では瀬川先輩はともかく、チカちゃん先輩やコランダム先輩とかには劣ってたりする。まあ致命的な程開いてるわけでもないから、身体能力差と「眼」でどうとでもひっくり返せるんだけど。

【学年末テスト成績優秀者一覧】

1位	Aクラス	坂柳有栖	900点
1位	Aクラス	本条桐葉	900点
3位	Cクラス	幸村輝彦	833点
4位	Cクラス	高円寺六助	829点
5位	Bクラス	一之瀬帆波	825点
6位	Aクラス	葛城康平	823点
7位	Cクラス	堀北鈴音	821点
8位	Aクラス	的場信二	803点
9位	Dクラス	椎名ひより	798点
10位	Bクラス	二宮唯	795点

学年末テストが返却された。難易度は過去最高だったがどのクラスからも退学者は出なかったとのこと。真島先生曰く、誰1人赤点をとることなく1年を終えたのは俺達
が初めてだそうだ。めでたいめでたい。

成績上位陣の顔ぶれはほとんど変化していないものの、注目すべき点はいくつかあ
る。

1つ目は幸村君の躍進。彼はこれまで運動を伴う試験では満足な結果を残せなかった分、得意とする勉強でクラスに貢献しようと思死で努力したのでだろう。あと、コージー達と頻繁に勉強会を開いているのも要因かな。2つ目は正解ちゃんの奮闘。試験前に主に有栖のせいで色々と大変なことがあって、とても試験勉強が捗るような精神状態じゃなかった筈なのに、しつかりとベスト5に食い込んできている。

そしてうちのクラスはというと、俺と有栖の決着がまた付かずじまいだったのは置いていて……とうとう戸塚がファルコンの点数を下回り、名実ともにAクラス1の称号を獲得した。何やら色々と見苦しいことを喚いてはいたが、負け犬の遠吠えというやつだろうね。あとマスマシンのクラス順位が18位とクラスの平均点をかろうじて上回っていた。まあ有栖の趣味をかねた執拗なマンツーマン指導の賜物なので、本人はちつとも嬉しそうじゃなかったけどね。

それから肝心のクラス平均点は当然4クラス中トップだったが、懸念事項が1つある……Bクラスとの差が以前よりも縮まっている。有栖が全力で指揮を取った2学期末のときは当然にしても、2学期中間よりもその差がずっと小さくなっている。俺と有栖を除外して勝負すれば、かなり良い勝負なくらいには。

Bクラスが奮闘したことも一因ではあるけど、それ以前にうちの子達の緊張が大分緩んでできてしまっているのだろう。まあクラスポイントが1つ下と500ポイント以上

離れてちゃ、危機感が欠如しちやうのも無理ないかな。あまりに目に余るようなら有栖から何かするだろうし、当面は放っておくか。

そして発表が一段落してから真島先生は、最後の特別試験が3月8日に行われると俺達に伝えた。

昼休み。いつものメンバーと食堂にて昼食を共にした後、1度お花を摘みに別れたので1人で教室に向かつてる途中……

「フライドチキン♪フライドチキン♪カロリーのには軽くない♪フライ(級)のボクサー
まず食べない♪……おや、ホリリンじゃないか」

何やら思い悩んでる様子ホリリンが歩いていたので声をかけると、心の底から嫌そうな視線を俺に向けてきた。相変わらず嫌われてるようだね。

「……いつも能天気そうで羨ましいわね。わざわざ呼び止めて何の用かしら？ つまらな
い用件なら帰らせてもらおうわ」

「ありやりや、いつにも増して刺々しいね。どしたの、おにーちゃんとまた何かあった
？」

「つ、なんであなたがそれを……!?まさかどこかで覗いてたの!」

「今の君を見ればすぐわかるよ。焦燥と諦め、自分への怒りが入り混じったような表情だ」

「……話には聞いていたけど、プライバシーも何もあつたものじゃないわね。勝手に心の奥に土足で踏み荒らされた感じがして、とても気分が悪いわ」

「俺は何も心が読めるわけじゃないんだから、あつさりと見抜かれたのはわかりやすい君が悪いのさ」

侮辱ともとれる俺の返しにホリリンは不愉快そうに顔をしかめる。既に嫌われてる相手になら配慮する必要も無く雑に扱えるから楽だね。

気丈なこの子が見えて落ち込んでいる光景は、1学期中間前の初対面時、コラシダム先輩とのイザコザがあつたとき以来1度も見ていない。あのときの様子からして兄妹間の仲はお世辞にも上手くいっていないようなので、大方ろくに相手にもされず氣落ちしていたのだろう。

「しかしコラシダム先輩も冷たい男だねえ、何の意味があつて妹を拒絶なんてしてるのやら」

「何も知らないくせに勝手なことを言わないで」

いつもの数十倍敵意のこもつた目で睨まれる。……薄々わかつていたがこの子相当

なブラコンだね、あの娘を思い出して何だか懐かしい気持ちになるよ。

「確かに君達の間は何があつたかなんて知らないけどさ……兄が妹を拒絶し遠ざけるなんて、よほどの理由が無ければ決して許されざる暴挙だよ？俺も一人の兄としてそこは譲れないかな、うん」

「……あなた、妹がいるの？どう見ても末っ子にしか見えないのに」

失礼な。

「いるよ、1つ年下のかつわいい子が。身内鼻肩かもしれないけどホリリンの1. 25倍は可愛いね、うん」

「身内鼻肩ならそんな控えめにしなくてもいいでしょ……だいたいなんで刻んだのよ？」

「じゃあ何さ、100阿僧祇倍可愛いとも言えば満足かい？」

「そういう問題じゃ……もういいわ、あなたと話していると頭痛が酷くなる一方よ」

こめかみを押さえて何かを諦めたように深く溜め息をついた後、ホリリンは何かを決意した表情で真つ直ぐに俺と向き合った。

「1年生最後の特別試験は勝たせてもらおうわよ。あなた達Aクラス……いえ、兄さんが注目しているあなたに勝つことができれば……！」

「注目というよりは警戒に近いと思うけどね。まあかかっておいでよ、相手したげる」

どちらにせよ次の試験はコージーとの約束があるため、Cクラスとバチバチやり合うことは確定事項だ。コージーや六助ならともかく、この子が俺に勝つのはまず不可能だろうけど……まあ挑戦するのは自由だからね。是非とも頑張ってほしいものだ。

そして放課後になり、俺は有栖に連れられて彼女の部屋に来ていた。

「それで話ってなんだい？ 今度の特別試験の対策、はまだ詳細が分からないし違うか」「いえ、今度の特別試験対策で合っています。行われるのは明日からだそうですが」

ふむ？ 確か真嶋先生は3月8日って言ってた筈……何らかの事情でもう1つ余分に追加されたってこと？ だったら1年生に伝わってる筈だし、対策ってことは有栖は試験の詳細まで知っている、となると考えられるのは……

「例の、坂柳パピーが失脚したと情報を送ってきた奴かい？」

「察しが良くて助かります。ええ、急遽特別試験が追加されることと、その試験の内容について……そしてその試験で綾小路君を退学に追い込めという指示をメールで受け取りました」

「その指示内容からして……コージーパピーがもう動き出したみたいだね」

「でしようね。おそらくこの指示を送ってきたのは、お父様を陥れ後に理事長に座るであろう人物でしょう」

ややファアザコンの気質がある有栖は父親を嵌めたことがよほど許せないのか、握りしめた杖でミシミシという嫌な音を出す。おい、病弱キャラ捨ててんじやないよ。

しかし、コージーたった一人を退学させるためだけに、無関係な159人を巻き込むとは……あの人はよほどコージーにご執心なんだね。

「コージーを退学か……1億分の1くらいを考慮して聞くけど」

「言われずとも勿論従いませんよ。綾小路君は私の獲物ですし、お父様にオイタをしたような方の命令など聞きたくありません。そもそも誰にも従わないからこそその坂柳有栖ですから」

「うんうん、有栖がいつも通りで安心したよ。……それで俺に何をさせるつもりだい？ こうしてわざわざ話すつてことは、結構重要な役割を務めるんだろうね」

「ええ、今回はあなたがキーマンとなります」

俺は有栖から試験の詳細について、そして俺にして欲しいことを全て説明され……思わずやれやれと肩を竦める。ほんとこの子はもう、次から次へと悪いことを思いつくね。

今回の試験、有栖の思い通りことが運ばば……3人の生徒がこの世の地獄を見ることになる。

そして翌日の朝、ホームルームのチャイムと同時に真嶋先生が、いつもより明らかに険しい表情で教室に入ってきた。実情を知っている俺や有栖はともかく、何も知らないクラスメイト達はその異様な雰囲気困惑しているようだ。教壇に立った真嶋先生は少しばかり躊躇したそぶりを見せた後、やがて重々しく口を開いた。

「——お前たちに、伝えなければならぬことがある」

教師の意地なのか冷静に振る舞おうとどうにか取り繕っているが、喉の奥から絞り出されたようなその声から、生徒達の多くは内心の葛藤を察したようだ。

「3月8日から始まる特別試験が、1年度における最後のだとお前達に伝えた。試験の内容は異なれど、それが例年通りの流れだ。……しかし今年は、去年までとは少しだけ状況が異なる」

「状況、ですか……」

「本年度はまだ1人も退学者が出ていない。この学校の歴史上一度も無かったことだ」
「……?何か問題があるのででしょうか?まるで退学者が出ていないことが、学校側に何か不都合であるかのような言い方ですね」

ランスのもっともな指摘に、しかし真嶋先生は辛そうに顔を歪める。あまり突っついてやるなよ、きつと真嶋先生としても納得がいてないんだからさ。内心では辛いんだよこの人も、共感はしてあげられないけど。

「退学者を出さないことを理想とするのは、我々としても当然のことだ。しかし時には私達教師の予測すら越えた事態になることもある」

これまで試験に対する不平不満に対して全て毅然とした態度で切り捨ててきた真嶋先生に、こうまで歯切れの悪い反応をされれば、これから伝えようとしていることに彼

が内心ではまるで納得していないとランス達も察した。

でも残念ながら彼はあくまで学校という組織に属する教師。学校の意向をねじ曲げられたりはせず、できることはただ俺達に指示を伝えることだけ。

「学校側はお前達1年生から1人も退学者が出ていないことを考慮し……」

特例措置として追加の特別試験、『クラス内投票』を今日より行うことが急遽決定された」

信念はときとして地獄の扉を開く

「な、なんですかそれは！誰も退学者が出なかったから特別試験を追加なんて……いくらなんでも理不尽過ぎますよ！」

不満を隠しきれず戸塚が喚くが、真嶋先生はそれを咎めようともせず視線を逸らす。他の生徒も戸塚を諷める余裕もなく不満と困惑、そして恐怖を隠し切れないようだね。

どんな内容でも特別試験は、生徒にとって負担がかかるものだ。下位クラスなら下克上を狙うチャンスが1つ増えるのでともすれば歓迎するべきかもしれないけど、最上位クラスの俺達にとってはただ余計なリスクを増やすだけ。それに退学者が出ないことが原因で行われる特別試験など、嫌な予感しかしないだろうね。

しばらくクラス中がざわついていたが腐つてもAクラス、真嶋先生の辛そうな表情からこの人にとつても不本意であることを察し、いつものように代表してランスが尋ねる。

「先生、その『クラス内投票』とはどういう内容なのですか？」

「……試験の内容は至ってシンプル。お前達は5日後にクラスメイトに対して評価を付

け、自分が最も高く評価したクラスメイト3名に『賞賛票』を、逆に最も低く評価したクラスメイト3名に『批判票』を、そして他クラスで最も評価している生徒1人に対して『賞賛票』を1票投じる……大まかな試験内容は以上だ」

「……そ、それだけですか？」

「ああ」

戸塚は呆気に取られているようだが、ランスを始めとしたクラス内でも頭の回る生徒は今のシンプルな説明だけで、この試験の全容が見えてしまったようだね。

真嶋先生はチョークを必要以上に強く握り絞め、試験内容を黒板に書き進めていく。

「そして投票の結果獲得した賞賛票が最も多かった生徒には、特別報酬として新しく導入される新制度……『プロテクトポイント』を与える」

今まで聞いたことのないポイント。名前の響きからしてなんか自身を守ってくれそうな謎の制度に、クラスのほぼ全員が興味を示した。

「プロテクトポイントを所持した生徒は、犯罪行為等よほど悪質な理由でない限り、1度退学処分を受けてもそれを取り消すことができる。ただしこのポイントは他者への譲渡はできない」

「た、退学を取り消せる!？」

「実質2000万プライベートポイントに匹敵、あるいは凌駕する程の価値があるだろう。まあ退学する心配の無い生徒、あるいは自力で退学を取り消せる生徒には然程価値が無いかもしれんが」

真嶋先生がチラリとこちらを見る。

ふむ、確かに俺からしたら特に欲しいとは思えない。そして退学に片足浸かっているような生徒や卍解ちゃんのように生真面目な生徒が持っていたところで、プロテクトポイントを真に使いこなせはしない。反面有栖やリユンケル、みやびん先輩のような外道共が持てば極めて恐ろしい武器となるだろうね。……有栖、足踏まないでよ痛いな悪かったよもう。

「それほど破格な報酬をわざわざ用意するということは、下位に選ばれた生徒は……」
「……ああ。すでに説明した通り、今回の追加特別試験は『退学者が出ていない』という事態を解消するために実施されるものだ」

実情は少し異なるのだけど表向き学校側としては、この追加特別試験で退学者を出す必要があるというスタンスを取っている。それを達成するためにどんなペナルティが設定されたか、察することのできない生徒はこのクラスには1人もいない。それでもどうか予想が予想が外れて欲しい、抱いた最悪の懸念が杞憂であって欲しいと、ほとんどの子がそう願っていることだろう。

だけど残念……現実はそのような甘い願望を、いとも容易く打ち砕く。

「クラス内で最も批判票を集めた生徒には……この学校を退学してもらおう」

【追加試験・クラス内投票】

試験内容……5日後の投票日に賞賛票、批判票をそれぞれ3票ずつクラスメイトの誰かに投票し、首位にはプロテクトポイントが与えられ、最下位は退学処分となる

ルール①……賞賛票と批判票は互いに干渉し合い、賞賛票から批判票を引いた票数がその生徒の評価となる

ルール②……自身に投票することはできない

ルール③……同一人物へ複数回投票すること、無記入、棄権等の行為は一切不可

ルール④……首位と最下位が決まるまで試験は何度でも繰り返し行われる

ルール⑤……他クラスの生徒にも1賞賛票を1票投票する。こちらも無記入は認められない。

ルール⑥……唯一の抜け道として、プライベートを2000万ポイントで退学を免除できる。

ルール⑦……他クラスの生徒からポイントを借りる、または貸すことのできる額は500万ポイントを上限とし、この規程を破った生徒は退学処分とし、クラス内投票はその生徒を除いて行われる。

以上が真嶋先生の説明した内容だ。抜け道は2000万ポイントを用意することのみで、例えば賞賛票と批判票をコントロールして全員の評価を0で揃えようが再投票となるだけで何の意味もない。

「後はお前達が話し合い、結論を出すことだ」

真嶋先生が話を終え教室から出ていくと、クラスのほとんどが有栖の判断を仰ごうと視線を向ける。

既に戸塚とランスを除けばこのクラスは有栖の支配下にある。仮に自身が生け贄に選ばれたらその生徒は猛反発もするだろうが、一先ずは有栖がどういう考えなのかを仰ごうとする。……そして勘のいいクラスメイト達は、有栖がどういう答えを出すか薄々予想している。

「今回の試験、葛城君に退場していただきます」

立ち上がることもなく名指した有栖に対し、当然予想していたのかランスは目を閉じ腕を組んだまま黙っている。そんなランスに代わって囁みつくのは勿論隣の席に座

るこの男……

「ふざけんなよ坂柳！」

「やめろ弥彦」

「やめませんよ！誰一人退学することなく試験を終えられるのに、なんで葛城さんが退学しないといけないんだよ！」

「誰一人退学することなく、ですか」

「この期に及んでしらばつくれんなよ坂柳！本条が2000万以上ポイントを持つてることはもう知れ渡ってんだ！それを使えば——」

「何故わざわざ葛城君のために、そんなことをしなければならぬのですか？」

首を傾げながら心底理解できないと言わんばかりの有栖の態度に戸塚は二の句を失い、しかしその一方ランスは有栖の返答を予想していたのか相変わらず目を閉じたまま。

「今回の試験は一見、クラスメイトを無理矢理切り捨てさせられる理不尽な内容でしょう。しかし少し見方を変えれば、クラスにとつて不要な生徒を何のリスクも無く取り除くチャンスでもあります」

「何を、言ってるんだお前!?!葛城さんが……不要な生徒だと!?!」

「葛城君が指揮を取った2つの特別試験で彼はクラスに大損害を与え、その後私が指揮

を取ってからもずっと私の方針を批判し邪魔をしてきました。言うまでもなく私が指揮を取った試験では全て好成绩を終えることができたので、葛城君の妨害はクラスにとって有害にしかならないと判断せざるを得ません」

「そんなの結果論だろ！ クラスのリーダーだからって、何をやっても良いと思うなよ！」
「クラスの為を思えばこそ、ですよ。それに彼が退学すれば龍園君と結んだ契約も無効になり、無用なプライベートポイントの流出を抑えられます」

ランスを慕うが故に感情的に喰って掛かる戸塚を、有栖は理論を纏い次々と冷徹に切り捨てていく。

……さて、そろそろ良いかな。

「このように葛城君を切るメリットは多々あれど、残すメリットは何もありません。わざわざ桐葉が頑張って貯めた財産を投げ打つなんてどこにも——」

「はいストップ有栖。たしかに彼は君にとって不要な存在なんだろうけどさ、彼にもう一度チャンスを与えてやりなよ」

「……と、言いますと？」

首を傾げる有栖の質問に答えることなく、俺は今もなお目を閉じたままのランスと戸塚の席へと歩み寄る。そして彼等に向かって優しく語りかける。

「もしこの学校に残りたいなら助けてあげるよ」

「ほ、本当か本条!？」

「まあはした金だし、助けを求められたら手を差し伸べるのが俺だしね。……ただまあ、俺からすればはした金でも2000万はやっぱり大金だ。それを肩代わりしてもらうんだから、当然これまでのようなスタンスでいることは許されない。……何が言いたいかわかるよね？」

「……今後一切坂柳のすることに異を唱えず、黙って従い続ける……そう言いたいんだろう?」

「流石ランス、話が早いね」

ランスは早くから有栖の邪悪さを見抜き、派閥争いに敗北してからも己の信念に従い有栖にずっと反発し続けてきた。今回の試験で退学者を出したくなければ、その掲げた信念を捨てる必要がある。

個人的に信念を持った人は大好きだけど……今回ばかりはその信念を投げ捨てることをお勧めするよ。

「そ、そんなことで良いのか!？」

「うん、約束するよ。何だったら今この場で2000万を渡しても構わない」

「引き受けましょう葛城さん!坂柳や本条は気に入りませんが、今はとにかく退学を避けるべきです!」

戸塚お前さ、助けを請う相手に対してちよつと正直過ぎない？まあ俺は別に気にしないけどさ。

目に見えて嬉しそうな戸塚に対し、ランスは目を開き申し訳なさそうな視線を戸塚にやつてから、毅然とした表情で俺を真つ直ぐ見据える。……まったく、男の子してるなあ。

「悪いが断らせてもらおう」

「か、葛城さん!?! どうしてですか!?!」

「俺は自分の掲げた信念が正しいと信じて坂柳と対立した。満足の行く結果を残せはしなかったが、奴のやり方が間違っているという考えは今も変わらん。……坂柳の走狗に成り下がってまで、俺は生き残りたいとは思わない」

「で、でも……!?!」

「それにこの条件を飲んでしまえば、坂柳の悪事の片棒を担がなくてはならなくなるかもしれない。先日の一之瀬にしたようなことを、な」

ランスは真面目で誠実、非道な行いに対して嫌悪感を覚える絵に描いたような好青年だ。先日の正解ちゃんへの仕打ちのようなことを自分が行うなど、考えただけで身の毛のよだつ思いを抱くだろうね。

「ふむ、実に見上げた志だね……でもいいの？俺が手を差し伸べるのはこれっきりで、当

日気が変わっても絶対に助けてあげないよ?」

「結構だ。俺が退学する方針に異論は無い。……だが1つだけ約束をしてくれないか? 俺を退学させた後は弥彦を排除しようとしたり、非道な行いを強要するようなことはやめてくれ」

「ふーん……だつてさ有栖」

「ええ、構いませんよ。葛城君の意向を汲んでそのように致しましょう」

人柱になる者が早々に決まったことで、まるで追加試験など無かったかのように教室がいつもの空気になる。

ランスは1人になるため席を立ち廊下へ向かおうとするが、それを戸塚が引き止める。

「葛城さん、本当にこれでいいんですか!？」

「ああ。俺が我が身可愛さで非道な行いをすれば、両親や妹はきつと悲しむだろう。……お前にはこれまで幾度と無く助けてもらったな、感謝する」

「葛城さん……」

「だがこれからは坂柳についていけ。お前はそのままAクラスで卒業し、栄光を掴むんだ。……それが俺からの最後の指示だ、弥彦」

「……………う、くっ……………!」

優しく肩に手を置きながらそう諭すランスに対し、悔しさと顔を滲ませながらも戸塚は必死に首を縦に振った。

これまで共に歩んできた友人同士の別れ……それを目の当たりにした俺の心は、これ以上無いくらい冷めきっていた。

別にこの手の人情話が嫌いな訳ではない。お互いを想いやる偽りの無い信頼関係、それは尊び慈しむべきなのだろう。

だけど、俺は彼らの末路を知っている。

残念だけどランス、お前は選択を致命的に誤った。お前がどうしても有栖に迎合したくないのなら、不義理だろうが俺の2000万で免除された後に自主退学すべきだった。

もう俺にはどうすることもできない。選択を間違えた代償は重く、5日に彼らはこの世の地獄を見ることになる。

昼休み。今日もいつものような有栖達とご飯を食べる予定だったけど、食堂で一人寂しく本なんか読んでいる可哀想な子を見かけたので、ドタキャンするとメールしてから彼の向かい側の席に座る。

「……お前か。俺に何か用かよ」

「もしかしたらもう会えなくなりそうだから、親睦でも深めようかと思って」

「クク、もうすぐ退場する相手と仲良くなろうってか？ 酔狂も度を越せばただのバカだな」

龍園翔、通称リユンケル。

彼は間違いなく退学候補筆頭だろうね。これまでの恐怖政治にはクラスの子達もうんざりしてるだろうし、我慢してついでに行った結果がDクラスへ転落。批判票を投じても罪悪感の湧かないという素晴らしい人材だ。

「しかし食堂で弁当なんか広げやがって。営業妨害も良いところだな」

「いいじゃないか別に。俺は昔から自分の口に入るものは、極力自分で作ることにしてる」

「普段あれだけちゃらんぼらんぼな生き方しておいて、一丁前に潔癖気取りか？ 笑わせる」
「何さその言い方。俺は最適な栄養を摂るために10年以上、ほぼ毎日同じ食事を食べ

続けるくらいきつちりしてるんだよ？」

「そこまで行くともうただの病気だ」

外部から称赞票を集めようにも、この子は他クラスから嫌われてるし警戒もされてる。彼が退場して欲しい生徒は数多だが、残って欲しい生徒はほぼ0だろう。

そして何より本人に残るつもりが欠片も無いことが致命的だ。退学がほぼ決まってるというのに、俺の眼を通して視ても彼は欠片も動揺していない。

「ねえリュンケル」

「あ？」

「返答はわかりきってるけど一応聞くな、助けてあげようか？」

「はっ、寝言は寝て言え」

「だよね。それじゃごちそうさま」

食事を終えた俺は席を立つ。

俺が手を貸さずとも助かる手立てはある。これまでクラスポイントよりプライベートポイントを重視してきた彼なら、既に思いついてもおかしくはない。

ただ彼は何もせず裁かれるだろうね。誰のためかは知らないけど―たぶん表向きリュンケルを引きずり下ろしながら、今もなお彼を慕っている石崎君のためだろうけど―、彼はクラスの望むままこの学校を去ろうとしている。

ここで消えるには惜しい人材だけど、彼の意思を尊重してあげるべきだろう。死に行くものにかまけてないで、俺は俺のやるべきことを遂行しようではないか。

俺は携帯電話を取り出し今回のイベントの主役に、放課後会いたいという旨のメールを送る。予想通り余裕を無くしているらしく、了承の返信はすぐに帰ってきた。

容赦できませんので

そして放課後。正解ちゃんとおちよつとした話し合いをしてから下校し、有栖と2人でケヤキモールのカラオケルームで待つこと数分、今回の試験のメインキャスト……自称1年Cクラスの中心人物こと、山内春樹君が恐る恐る入ってきた。

「やあ、随分と早かったね」

「ま、まあな。……あれ？坂柳ちゃんもいるの？」

「おや、私がいてはいけませんでしたか？」

「いやいや全然オツケーさ！むしろ野郎2人でカラオケボックス、なんて地獄みたいな構図にならなくてよかったですよ！」

「今日話す内容が内容なんでわざわざ来てもらったんだ。……あ、ちよつと待っててね」
今回の話を第三者に聞かれたら全てがおじやんなので、ドアを開けて周囲を観察する。……ふむ、どうやら誰もいないようだね。

「桐葉、どうでした？」

「とりあえず盗み聞きしてる奴はいなかったよ。一応聞いておくけど山内君、誰にも尾

行されたりしてない？」

「あ、当たり前だろう。俺がそんなハマすると思うのかよ？」

うん。

「……まああんな試験内容を聞かされたんじや、尾行なんて不穏な行動は誰もしないかな」

「ええ、ひとまず気にする必要はないでしょう。……それでは山内君、貴方に来てもらったのは今日通達された追加試験についてです」

「つ……ええ、えつと、どういうこと？」

「君、もしかしたら退学させられるかもよ？」

「たいがつ……いやいやいや！クラスに必要な無い人間が選ばれる試験だろ？優秀な俺に批判票が集まるわけないって！」

山内君はまず間違いなく退学候補の1人だし、本人も内心では自覚しているんだろうが、この子は見栄なのか普段から嘘をついてまで自分を大きく見せる傾向があるので、どうせそう答えると思っていた。……この後のことも考えて、ここは納得させつつ彼の自尊心を満たしてあげよう。

「逆だよ山内君、ときには優秀だからこそ排除されることもある。出る杭は打たれるってね」

「……へ？」

「以前桐葉から聞いていると思いますが、私達はCクラスの躍進に貴方が大きく貢献していると考えてます。だからこそ貴方に取引を持ちかけました」

「い、いや、そんな大袈裟な……だけどまあ、それほどでもあるかなー？」
ないよ。

「だけど君の活躍が公に出回ったことは一度も無い。……これってつまり、君のことを妬んで手柄を奪っている輩がいるってことじゃない？」

「っー」

「いやいやいや、そんな「そうだったのか……」みたいな顔されてもさ。明らかに事実無根なのになんで少しも違和感を覚えないの？あと有栖、気持ちはわかるけど困惑を表情に出さない。全部バレちゃうでしょうが。」

「そして今回、そいつはこれ幸いとばかりに目障りな君を排除しようと画策している……違うかい？」

「……そこまでバレてるなら、もう隠しても仕方ないか。実は、そうなんだよ」
そうじゃないでしょ。

あと有栖、笑いそうになるとこ悪いけど何とか堪えてね。マジでバレちゃうよ？
「対Cクラス用の切り札にして近々私達のお仲間になる山内君を、みすみすここで脱落

させるわけにはいきません。ですので私達が貴方に秘策を伝授いたします」

「ひ、秘策？」

「クラスの約半数ほどを集めてグループを秘密裏に作り、1人にターゲットを絞って批判票を集中させてください」

「で、でもそんなこと持ちかけたら、俺が狙われちゃうんじゃないか……」

ふむ、流石にそこまで考えなしじゃないか。

「うん、その懸念はもつともだね。誰だって投票するなら罪悪感の薄い奴を選びたがるだろうし、作ったグループの子達が本番の日に主導した君にも批判票を入れるかもね」

「だ、だろ？」

「だったらグループを作るのは誰かに任せればいいのさ。クラス中に慕われてて、憎まれ役を引き受けてくれそうで、なおかつ君のことを誰かに告げ口したりしない心優しい子に……Cクラスだとそうだな、榎田ちゃん辺りが適任かな？」

「いやいやいや。桔梗ちゃんがそんなクラスメイトを嵌めるようなこと、引き受けないだろ……」

彼女のつけた仮面に気づきもしない山内君は、俺の提案に難色を示す。……せつかくだから彼女の仮面を利用してもらおうかな。

「ところがそうでもないんだよ。彼女は少し優し過ぎるから、友達から頼み込まれたら決して断れない。自分に称賛票が大量に集まるなんて考えもしないから、憎まれ役を買うことで自分に批判票が集まればいいとさえ考えるだろう」

「た、確かに枯梗ちゃんなら自分が犠牲になればって考えてもおかしくないかも……」
実際は100パー考えないだろうけどね。

「君が必死に頼めば引き受けてくれる筈だよ。何だったら泣き落としすれば確実さ」

「そ、そんな格好悪いことするわけないだろ！」

うん、だったら「その手があつたか！」みたいな表情するのはやめようね？

「さらに2段構えとして私達Aクラスは、称賛票を全て貴方に投票します」

「マジで!?!……あれ?それだったらなんで批判票を誰かに集中させる必要があるんだ? 40票も入るなら俺絶対に助かるじゃん」

「こんな露骨な組織票を突っ込むんじゃ、俺達と君がつながってるって確実にバレちゃうでしょ。だから近い内に任せるつもりだったスパイ任務は白紙、試験終了後すぐに君をAクラスに移籍させることになったの」

「そ、そうなのか……」

「ですが幸いなことに今回の試験では、プロテクトポイントを各クラス1名に配布されます。よってせっかくですのね貴方に獲得してもらってから引き込もうかと。グルー

プ内でお互いに称賛票を入れ合えば、貴方へ集まる批判票もある程度相殺できます。その上で称賛票がプラス40されるのですから、十分トップを取れるでしょう」

「プロテクトポイントは使い方次第では非常に厄介な武器になる。それを奪い取れるならそれだけで、2000万ポイントに見合った働きだよね」

「なるほど……」

俺達が山内君を高く評価していると、彼は信じ込んでしまっている。その上で称賛票を全てつぎ込むだけの（一見）合理的な理由を説明されては、彼は俺達が手を差し伸べることがをまう疑いもしないだろうね。

「さて、それじゃあ君のクラスの誰を追い込むか、だけど……称賛票があまり集まりそうにない子の中からランダムに選ぶよ」

「えっ？」

困惑する山内君をよそに、俺は独断で選別したCクラスの生徒10人にそれぞれ0〜9まで番号が割り振られた紙と、TRPG用の十面ダイスを懐から取り出す。

「運命のダイス・ロール☆」

決め台詞と共にサイコロを振り、コージーに割り振られた9番で止まる。……言うまでもないけど勿論狙いました。

「あーあ、コージーか。御愁傷様」

「待て待て待て！そ、そんな決め方でいいのかよ!？」

「クラスメイトを切り捨ててるんだし、どうせ誰を選んでもしんどくなるさ。ここは無関係な俺がランダムで選んだ方が、君も気が楽でしょ」

「それに、あまり山内君もあまり気に病まなくてもいいでしょう。貴方はこの試験直後に、プロテクトポイントを持ち逃げすることになります。必然彼等には恨まれるでしょうし、交遊関係はこの機会に一新されるとも考えてください」

「……そつか、そうだよな……俺はもうAクラスみたいなもんだんだし、あまり気にすることないよな」

あーあ……前にも思ったけどさ、ここまで手玉に取りやすいと逆に騙し甲斐が無いよ。

「では今日は解散しましょう。……それと山内君、近々クラスメイトになる貴方には最後に一つ忠告しておきます」

「へ？忠告?」

「私の指示をしくじるならともかく無視するような方は、残念ながらAクラスには必要ありません。もし貴方がグループ作りと綾小路君への票集中を怠るようであれば、私達は貴方を助けませんのでどうかお気をつけて」

「わ、わかってるって!」

黒い笑みを浮かべながら遠回しに脅す有栖に、山内君は姿勢を正しつつそう答える。
……敢えて黒い部分を明け透けに出すことで、自分は嵌める側だと思ひ込ませたね。正直彼を騙すのにそこまで念入りをする必要があるか疑問だけどね。

ようやく今日の話し合いが終わり明日再びここに集まると約束して解散する。有栖と2人で寮に帰りつつ、俺はしみじみと物思いに耽る。

あーあ。結局は有栖の目論見通り、3人とも地獄を見ることになっちゃったな……。

翌日の昼休み。

俺はメールで生徒会室に呼び出され、デスクに座るみやびん先輩と向かい合っていた。た。

「コランダム先輩が会長の頃はTHE・堅物みただったこの部屋も、なんか随分とご

「ちゃごちやした様相になったすね」

「坂柳も以前似たようなことを言っていたな。仲が良いようで何よりだが、主従揃ってこの部屋がお気に召さないようだ」

「何か息苦しいです。もつと花とか観葉植物とか置きませんか？」

「何が狙いで法外なプライベートポイントを支払ってまで植物園を設置したのか以前気になっていたが、まさかただの趣味だったとは流石に予想外だったな。……とても賢いポイントの使い方とは言えないぞ」

別にいいじゃないか、所詮あぶく銭なんだから。

「まあいい、さつさと本題に入ろう。今日呼び出したのは他でもない……お前ら1年だけ追加された特別試験に関することだ」

「俺の心配してくれてるんですか。嬉しいな」

「そんなわけないだろ。なんで俺が絶対安全圏にいるお前を心配しなくちやならない？」

「ですよね」

総合的な実力、実績ともにAクラスのトップである俺に批判票を入れる理由など微塵も無いし、1億分の1クラスが結託し俺を嵌めようとしたところで、自力で退学を免除できる。満場一致で俺が最も安全圏にいる生徒だろうね。

「これは他言無用だが、俺はある生徒に条件付きで多額のポイントを貸すと約束している。……この情報だけで俺がお前に何を言いたいのか、わかるか？」

「正解ちゃんこと一之瀬帆波ちゃんに交際を条件にポイントを貸すことになってるから、俺はでしゃばるなってことですな」

「正解だ。まあ坂柳は以前のことをお前に話してるだろうし、ある程度予想できていただろうがな」

以前みやびん先輩は有栖に正解ちゃん秘密……過去に万引きしたという情報を与え、有栖がその情報を活用し精神的に追い詰めた正解ちゃんを慰め、自分を彼女の寄り処にすることで交際に持ち込もうというマッチポンプ計画を企ててたらしい。正直倫理的にどうかとは思うけど、本人が後ろめたく思っていないなら俺から言うことは特に無い。

「この前といい今回といい、随分と彼女にご執心なようっすね」

「あいつは俺が女に求めるルックスを満たしている。私物として側に置けば見栄え的価値があるからな」

「うーわ、黒い部分を隠しもしませんね」

「お前に隠し事は通用しないんじゃないか？」

「おやおや、これは一本取られた」

「それで、お前の返答は？」

軽薄な笑みを浮かべつつ、みやびん先輩は試すような眼差しでこちらをまつすぐ見据える。

うーん……釘を刺されるまでもなく、実はもう昨日の放課後に彼女の頼みを断つてんだよね。「つい先日俺の譲渡を拒んでおいて、困ったからポイントを貸してほしいなんて虫の良い頼みごとを受け入れるわけがないだろう」みたいな理由を適当にでっち上げて。

普段なら二つ返事でオーケーしてあげるんだけど、俺がポイントを貸したらある生徒の退学が確定しちゃうからね。勿論みやびん先輩が貸しても確定しちゃうんだけど……そこはまあしようがない、そういう運命だったと諦めよう。

だから返答は……そうだね、興が乗ったしこれでいこうかな。

「別に構いませんが、一つ条件を付けて良いですか？」

「ほう、生徒会長である俺と一丁前に交渉しようってか。つくづく今年の1年は面白い奴が多いな。……条件つてのは何だ？内容次第では聞き入れてやる」

興味深そうに聞いてくるみやびん先輩に対し、俺は浮かべていた友好的な笑みを消しながら言い放つ。

「二度と茜さんに悪意を向けなくてください。一度は見逃しましたが、次は俺も容赦できませんので」

敢えてプライドを刺激する言い回しをした俺に、みやびん先輩は浮かべていた笑みを消し忌々しそうに俺を睨みつける。高校生にしてはなるほど大した圧力だが、残念ながらこの間の綾小路パピーに比べたらそよ風にも劣る。

……幾多の根回しと下準備を重ね、コランダム先輩の鼻を明かすためだけに用意した策略を台無しにした俺に対して、みやびん先輩が良くない感情を抱いていることは勿論わかっていた。それでも今はもうすぐ卒業してしまうコランダム先輩に勝つことに集中したいから、来年じっくりといたぶれると俺に対する悪感情を抑え込んでいたことも当然把握していた。……だからこそ好奇心が湧き出てくる。つい逆鱗を抉りたくなってしまう。

しばらく俺を睨み続けた後、みやびん先輩は嘲笑するように吐き捨てる。

「……随分と調子づいているな本条、ここまで俺を舐めた奴は初めてだぜ。坂柳と違ってお前は、この学校で生徒会長と敵対する意味を、まだ理解できてないらしい」

「さてさて、何のことやら。それでみやびん先輩、条件は飲んでくれるんですか？」

「……………ああ、別に構わないぜ。どうせ堀北先輩に同じ様な手は効かないだろうし、橘先輩なんてもう狙う価値も無いからな」

「そうですか、それは良かった。……それじゃあ用件も済んだことだし、俺はもう帰りませぬ」

「まあ待て」

踵を返した俺をみやびん先輩は呼び止める。……ふむふむなるほど、俺の視野の広さまでは知らないのか。後ろを向いて油断したのか、煮えたぎる怒りを抑えきれなくなっている。

「お前こそ、随分と橘先輩にご執心じゃねえか」

「そうですね、もし有栖に会ってなければ惚れちゃつてたかもしれません」

「ほほう？あくまで本命は坂柳ってわけか。だったらあいつを条件に含まなくて良かったのか？」

「ええ、ご自由にどうぞ。有栖は他人から悪意や敵意を向けられていないと生きていけない人種ですし……あの娘が遅れを取るとはとも思えませぬしね」

「つ！テメエ！」

「それじゃあコランダム先輩との戦い頑張ってくださいね、応援してますから」

適度に火薬を放り込みつつ、俺はみやびん先輩の制止を無視し振り返ることなく生徒会室を後にした。きっと部屋の中で荒れていることだろう。

来年からは執拗に狙ってくるだろう……学校生活も随分と楽しくなってきたぜい。

江戸の仇を長崎で

そして放課後。久し振りに有栖とマスミンと3人で仲良く下校……の前に有栖がコージーに用があるらしく玄関前で待機。やがてコージーがやってくる。と尾行期間に色々あったのか自然と警戒態勢に入るマスミンに対し、俺と有栖は友好的に話しかける。

「やつほコージー」

「こんにちは綾小路君。申し訳ありませんが、少しだけお時間を頂けないでしょうか？」

「別に構わないが、立ち話でいいか？」

「ええ。ですがここでは人目につきますので、少し移動しませんか？」

「ただでさえコージー目立つの苦手だもんね」

「配慮してくれて助かる」

俺も有栖も、何だったらマスミンも人目を引くタイプだからね。有栖としても自分の獲物を奪われたくないだろうし、万が一に備えて隠蔽工作には協力を惜しまない。

人気の無い場所への移動しながら、俺達はちよつとした世間話に花を咲かせる。

「それにしても皆さん、今回追加された試験はとても理不尽な内容だと思いませんか？」
「だね。退学者が出てないから無理矢理出させる……なんて説明されたけど、そもそも学校側は極力退学者を出すべきじゃないだろうに」

「そう言われてみれば、そうね。いつも冷静な真嶋先生も動揺を隠しきれていなかったし」

「うちの担任もいつもより取り乱していたな」

「それにはちゃんと理由があるんですよ」

「……アンタ何か知ってるわけ？」

「私事で恐縮なのですが、つい先日父の停職が決まりました」

「あんたの父って……確かこの理事長よね？」

「ありや意外、パピーのことマスマシンに話してたんだ。」

「まだ詳しくは聞いていませんが、何でも父に汚職の疑いがあるとか」

「あのルールや秩序に人一倍厳格な人が、そんなことするとは思えないけどね」

「ええ。勿論私や桐葉が見誤っていた、という可能性もありますが……何者かが父を引きずり下ろすために策略を企てたのかもしれない」

「ファザコン有栖による突拍子も無い陰謀論……に見せかけた、さりげないコージーへの情報提供と忠告。君の父親」

既に水面下で動いてるぞってね。

「ふーん……で、それが試験と何の関係があるのよ」

「退学者が出ていないことを考慮したとはあくまで建前で、その実特定の誰かを退学させるために用意された試験……と考えられませんか？」

「特定の誰かってまさか……」

Aクラスのゴリラ女子枠とはいえこの流れでコージがまったく関係ないと思うほど、マスマンはおめでたい思考回路をしていない。

「今まで気にしないようしてたけどさ、なんでアンタは綾小路に目をつけてるわけ？」

「おや、今までは気にしていなかったのですか？」

「……当たり前でしょ」

「桐葉」

「うん嘘」

「だあああつ、相変わらずプライバシーつてもんが無いわねアンタは！」

頭をガシガシとかきながら俺に食って掛かるけどマスマンさ、機械じやあるまいし理由も説明されず散々尾行させられた相手に、まったくの無関心でいられるわけないでしょうが。

「以前から彼を知っていたから、では納得できませんか？」

「……つまりここで偶然に再会したってこと？どんな確率よそれ」

「確率はあくまで確率ですよ。ね、綾小路君」

「そうだな、サイコロを10個振って全て1が出ることに比べたらずっと現実的だ」

「そういうやそんなこともあったねえ。いやはや、時が経つのは早いもんだ。」

「だつたら手強いのか？綾小路には悪いけど、とてもそうは見えないわよ」

「これまで誰に対しても無干渉無関心な貴方が、今日は随分と踏み込んで来ますね」

「誰だつて気になるでしょ。アンタがそこまでこだわる相手なんて、それこそ本条しかないなかつたんだし」

「ふむ、そうですね……例えば彼が、桐葉をも上回る実力者だと言つたら貴方は信じられませんか？」

「流石に信じられないわよ。……え？まさか本当に？」

「まあ違いますか」

「アンタねえ！」

「今のは信じる方が悪いだろ。本条に対抗できるとしたら、それこそ高円寺しか思いつかないぞ」

何か白々しい謙遜してるコージューだが、「人工的に天才を作る」なんて常識からボール30個は外れた研究の最も成功した個体だけあつて、そのスペックは俺や六助と比べて

も決して劣らない。

有栖曰く学力は俺達より遙かに上。服の上からだとは正確には視えないけど、たぶん身体能力も俺より僅かに上。頭脳面も有栖が執着するくらいだから相当優秀、と。戦う内容にもよるけど、勝つには相当骨が折れそうな相手なのは間違いない。……社交性と人脈構築力は下の下だから、その手の勝負だと話にならないけど。

色々と話し込んでる内に目的の場所……特別棟に辿り着いた。

「……なら邪魔も入らないでしょう。……さて真澄さん、申し訳ありませんが先にご帰宅なさってください」

「……あつそ」

「毎度苦労してるねマスミン」

「このくらの理不尽さはマジだと思っちゃった自分を殴りたくなるわ……」

薄々わかっていったのか、特に文句も言わず階段を下りていくマスミン。背中が煤けて見えたのはきつと気のせいではない。またアロマキャンドルでも送つといてあげよう。

「それで、神室を先に帰してまで何の用だ？」

「私と綾小路君の勝負に關してです。以前次の試験で戦うと約束しましたが……もし良ければ、次回に見送っていたいでよろしいでしょうか？」

「内容は仲間同士の蹴落とし合いだし、とても勝負は成立しそうにないからね」

「オレとしては別に構わないが」

「ありがとうございます、これで心置きなくAクラスの内情に集中できます」

もう試験の結末まで確定させておいてどうどうと嘘を吐くねこの子も。病的に用心深いコージーならAクラスの内情なんて調査済みだろうし、100パー信じないと君もわかつてるだろうに。

「ただ、停戦だからこそ確実に信用してもらうためにも1つ約束をします。私は今回の試験で綾小路君に対してマイナス要素、つまり批判票は決して与えません。万が一私が何かしらCクラスに関与し綾小路君が損害を被れば……そのときは私の負けで構いませんし、今後の勝負も無視して頂いても結構です」

現在進行形で山内君を唆してコージーを嵌めようと画策している人間から出たとは思えない、もはや自殺行為にも等しい条件付け。勿論有栖が急にトチ狂ったわけでも、コージーと戦って負けることが怖くなった訳でもなく、ちゃんとしたカラクリがあるけどね。

「今回オレを退学に追い込もうとしないのはわかったが、お前が手下に裏切られて退学したらどうするつもりだ」

「そんなときや俺が助け船（金）を出すだけさ。……もつとも、そんな無駄に有栖の怒りを買うことをあの子達がするわけないだろうけど」

「試験が発表された段階で、私は皆さんの前で誰を切り捨てるか伝えておきました。クラスの方々には不要な精神的負担はかけたくありませんし」

「退学を突きつけられた奴からしたら、たまったものじゃないけどな」

「いや、ランスはアツサリと受け入れてたよ？」

そして自分の信念を守るために差し伸べた俺の手を振り払った。……その代償は4日後支払うことになる。

「葛城か……まあ妥当なところか」

「クラスに2人の頭は必要ありませんし、夏休みの試験で彼が龍園君と結んだ契約を不満に思っている生徒も多いですから」

「Cクラスはどう？六助とか危ないんじゃない？」

「当然候補の一人ではあるな。……悪いがそろそろ時間だ。友人を待たせてるのでな」

「そうですね、今日はこの辺にしておきましょう。貴方が退学にならないことを祈っていますよ」

有栖は一瞬監視カメラに視線を移してから、俺を連れて特別棟から出る。

……見られているかもしれないとはいえ、忠告1つするのもいちいち回りくどくて嫌になるね。

「ところで桐葉、BクラスとDクラスはどう動くと考えていますか？」

「Bクラスは誰も退学者を出さないだろうね。E解ちゃんが取るのであろう手段は2通り程あるけど、少なくとも誰かが切り捨てられることはありえない。Dクラスは……まあ99%リユンケルだろうね」

「彼はクラスの内外問わず嫌われていますし、私達としてもあの不利な契約を破棄できるので都合が良いでしょう。……それで残りの1%は？」

「コージが彼を助けようとした場合かな。リユンケル本人に聞いたけど、コージは1度自ら退学しようとする彼を何らかの手段で引き留めている。2度目が無いとは言い切れないでしょ？」

「なるほど……彼が助かる手段に1つだけ心当たりがありますが、プライドの高い彼がそれを受け入れるでしょうか？」

「ま、それはDクラスの人達の頑張り次第じゃない？」

少なくともコージが持ちかければリユンケルは確実に拒絶するし、石崎君達舎弟軍団に頼み込まれてもたぶん首を縦に振らないだろうね。……となるとやはり、リユンケルにはバレないようこっそり救うしかないかな。

昨日に引き続きカラオケルームにて、俺と有栖と山内君は悪巧みを再開する。ノートに書き留められた、コージーと親しくない生徒を俺と有栖が一人一人チエックしていく。

「……以上計21人、綾小路君に批判票を入れるグループの方々ですね」

「たった1日でよくそれだけ集めたもんだね」

特定の人物をターゲットにして退学に追い込む……口で言うのは簡単だが、相当上手い立ち回りを要求される。特定の誰かを退学にしようなんて言い出したら、逆に退学に追い込まれてもおかしくはないからね。誰だって仲間を切り捨てるよりかは罪人を裁く方が抵抗なくできるだろうし。

「やはり櫛田さんに仲介役を頼んで正解でしたね」

「まあ、ね。2人の言う通りだったよ」

「それで結局どういう風に頼み込んだの？泣き落としはやったの？」

「だ、だからそんな格好悪いことするわけないだろ！」

泣き落としをしたらしい。

「それではまた明日、これからは誰を引き込めばいいのかは私の方から連絡致します」
「わかった」

山内君が部屋から出ていった後、チェスでも指しながら今後の方針について話し合
う。

「さて、このままいけばコージーに批判票が集まってめでたくゲームオーバー……とは
いかないんだよね」

「ええ。用心深い彼はもし自分が狙われていると知らなくても、試験の性質上何かの
きっかけで自分に批判票が集まる可能性を排除しない。となれば間違いなく試験前日
辺りに対策を打つでしょう」

「クラスに不必要な生徒がいることを皆の前で証明する、とかね」

成績不良や素行不良だと該当者がいくつか出てきちやうかもしれないけれど……例
えば他クラスの生徒と結託して、自分のクラスに損害を出そうと考える生徒なんてのが
もしも存在したとしたら、これほど都合の良い生け贄はいないよねえ。

「はい、ここにルークでビショップを狩る」

「……リザインです。また負けてしまいましたね」

「今回は俺が先攻だったからな。後攻ならどうせ結果は逆だっただろうよ」

「では私達もそろそろ帰りましょうか」

「はいよー。……それと有栖、ウチのクラスの票操作はもう済んだの？」

「ええ。貴方と葛城君と戸塚君以外の37人には、誰に賞賛票を入れて誰に批判票を入れるかで細かく指示を出しておきました。皆さんがちゃんと指示を守ってくれたらプロテクトポイントは私が受け取り、退学者は予定通り彼になります」

「ちゃんと俺に30票くらい批判票入れると言った？俺がプロテクトポイントなんて貰ってもただ持て余すだけだろうし」

どうせ有栖が退学したら俺もさっさと辞めるんだし、プロテクトポイントなんて無駄極まりない。

「ええ、その点は抜かりありません。順当に行けば他クラスからの賞賛票は貴方と一之瀬さんが双璧でしょうし」

有栖も似たような理由でプロテクトポイントなど別に欲しがらないんだけど、コージーを退学させるよう指示してきた人物のことを考えれば、持つておくべきだと判断したようだ。この試験をコージーが乗り切った場合、最後の特別試験も退学が大きく絡む内容になるだろうからね。

寮に戻った俺達は一度ロビーに寄り、ある人物のポストにボイスレコーダーを投下してからエレベーターに乗る。最後の仕込みも終了したことだし、後は野となれ山となれだ。

そして有栖の想定通り山内君が泣きついてきたのは、投票日前日の放課後のことだった。

「なるほど……私達が協力して綾小路君を退学にしようとしていたことも、貴方をこの試験後Aクラスに迎え入れることも、全てバレてしまいましたか」

なんか神妙そうに頷いちやいるが、少なくともコーギーが狙われていることがバレたのは、例のグループに軽井沢ちゃんを加えるよう薦めた有栖のせいだったりする。彼の話ではホリリンが全てを見抜いて、クラスの前で彼を晒し者にした……という内容だが実際は毎度恒例コーギーの仕込みで、軽井沢ちゃんからリークした情報をそのままホリリンに流したのだろう。

榎田ちゃんと並び女子の中心である軽井沢ちゃんを引き込めば、コーギーへの批判票を一気に集められると唆したが、実はコーギーの持ち駒である彼女にそんな裏工作を説明すれば秒でバラすに決まっている。グループに誘う過程でコーギーやそのお友達に告げ口したら標的にする……なんて脅しをしようが、その程度ものともしないくらいには彼に依存しているみたいだし。そして……

「しかし君をAクラスに引き入れることまでバレてるとはビックリだ。……そのことは俺達3人しか知らない筈なのに、どうして漏れたのかね？」

「な、何が言いたいんだよ!? さっきも言ったけど俺は誰にも喋っちゃいけないからな！」

「うるさいな、そういきり立たないでよ。君が嘘をついていないことくらいわかってるさ。……考えられるのはこのカラオケルームでの密会、それも混合合宿直後にした取引を盗み聞きされてたつてことかね。それ以降の密会を知られてたなら、俺達が君に賞賛票を入れることまで漏れちゃってる筈だし」

「だ、だからなんだってんだよ！俺は悪くねえからな!？」

「わかってるから少し落ち着きなよ。盗み聞きを見逃した俺にも落ち度はある。心配しなくても今回の件で君に責を問わないよ」

このタイミングで俺達に愛想を尽かさされればゲームオーバーなので、山内君は必死に自己保身に走って責任逃れしようとしているが……一昨日俺がコーギーのポストに取

引の一部始終を録音したボイスレコーダーを投入したことが原因なので、マジで彼に責任はこれっぽっちもない。

しばらく目を閉じ考えを巡らせ（るフリをし）ていた有栖が、目を開けつつ溜め息をつけて山内君を見据えると彼は露骨にビビり散らした。……楽しそうだねこの娘。

「仕方がありませんね、この辺りが引き際でしょう」

「ひ、引き際ってなんだよ？まさか俺を見捨てるつもりじゃ……！」

「そんな訳ないじゃないですか。あわよくばプロテクトポイントも回収しておきたかったのですが、ここから山内君がトップを取ることは流石に不可能だから諦めましょう……という意味です。後は予定通り私達Aクラスが貴方に賞賛票を入れて守り、試験終了後に2000万ポイント支払い貴方を引き入れましょう」

「な、なあ……そんな回りくどいことしなくても、今すぐ俺をAクラスに入れてくれないか？それなら——」

「投票日にAクラス中の批判票が集まりかねないよ？これまで仲間だった生徒よりも、これまで敵だった生徒を切る方が心情的に楽だろうし」

「ええ、たとえ私達が呼び掛けても流石に耳を貸してくれないでしょうね」

「うぐっ……わ、わかったよ……！」

結局最後まで不安そうにしたまま、山内君はとぼとぼとカラオケルームを後にした。

もう彼は崖っぷちの状況にある。俺達Aクラスが投じると約束した賞賛票しか抛り所が無い。大丈夫、俺はAクラスに守られてる……そう信じて投票日を迎えるしか道は残されていない。

そして彼は裏切られ、崖から転落する運命にある。

ことの発端は混合合宿で有栖を誤って突き飛ばして転ばせ、あまつさえ有栖をどんくさい呼ばわりしたこと。

恨みは蛇よりも執念深く根に持つことに定評のある有栖は、コージーと事を構えるまで暇だったこともあつて復讐を計画した。ただ退学させるだけではつまらない、彼にはこの世の地獄を味わってから脱落してもらおう……と。

薄汚い裏切り者の烙印を押され、クラスの全員を敵に回した挙げ句、最後には裏切られてこの学校を去る……それが彼の味わう地獄だ。

「ところで有栖、ネタバラシは今でも良かったんじゃない？人が絶望に落ちるところが大好きなのに、その瞬間を見なくてもいいの？」

「たしかに大好きなのは否定しませんが彼の性格上、プライドを投げ捨ててみっともな
く許しを請う光景が目には浮かぶでしょう？私、見苦しいのは嫌いですので」

「なるほど、酷い女だ」

「ふふ、よく言われます」

脱落者

いよいよ迎えたクラス内投票の日。

他クラスがどうかは知らないけど、Aクラスは皆冷静に投票を終え集計が終わり発表されるのを静かに待っていた。クラスのリーダーによって脱落者が初日に決められ、当の本人であるランスがそれを受け入れているのだから騒ぐ必要もない。当初はあれだけ取り乱していた戸塚もようやく覚悟を決めたのか、別れのときが来るのを悲痛そうな表情で俯いて待つ。このまま予定通りランスが退学すれば、何の波乱も無く試験が終わるだろう。

……先に結論を言っちゃうと、Aクラス最大の波乱が巻き起こるだろうけどね。

チャイムと共に真嶋先生が、何やら焦燥を隠せない表情のまま教室へと入ってくる。この学校に勤めて何年になるかは知らないけど、教え子が退学してしまったことなんて両手の指でも足りない筈。……だからと言ってここまで不合理的な退学を通告するのは、きつと初めてなんだろうね。

「これより追加特別試験の結果を発表する。まずは賞賛票を一番多く集めた生徒は……」

35票で坂柳、お前だ」

「ありがとうございます。まさか私が選ばれるとは思いませんでした」

清々しい程白々しい有栖の謙遜に、きつと真嶋先生を含む40人の心が1つになっただろう。この女ぬけぬけと……つてね。

とうかウチのクラスで有栖に賞賛票を入れたのは、ランスと戸塚以外の全員で37。そこからその2人が入れたであろう批判票を引くとぴつたり35、つてことは……外部からの賞賛票0じゃないかこの娘。後で好き放題おちよくつてやる。

「続いて……最もクラスからの批判票を集めた者を発表する。そのものは退学となり、この後すぐ荷物をまとめ私と共に職員室まで来てもらうことになる」

さて、いよいよ地獄の幕開けだ。

ちらりとランスを見やると、目を閉じたまま平静を保っている。恨み言1つ吐くことなく退学を受け入れたことには見事な精神だと感心するけど……君はこれからこれ以上無く取り乱すだろうね。

だつて……

「最下位は36票を集めた生徒……」

戸塚弥彦」

退学するのは君じゃないんだから。

「バカな、どういふことだ!？」

先程までの平静さが嘘のように、ランスは立ち上がりながら声を荒げる。

「……………え……………?なんで、俺、え……………?」

一方の戸塚は何が起こったのか理解できずただただ呆然とするばかり。真嶋はそんな2人を悲しげな目で見つ、全ての生徒の賞賛票・批判票の結果が書かれた紙を黒板に張り出した。ランスは戸塚の1つ上、批判票30票という結果だった。さて俺は、と……票操作しといて良かった。案の定外部から40票以上入れられちゃってるよ。

やがて事態が飲み込めたランスは、間違いなく元凶である有栖に食って掛かる。

「どういふことだ坂柳!」

「どういふことも何も……………別に貴方は最初からターゲットではありませんよ?」

「ふざけるな!お前は確かに言った筈だ、この試験で俺を切り捨てると!」

「ああ、そのことですか……………あれは嘘です」

憎たらしいほどにこやかな笑みで一ミリも悪びれることなくほざいた有栖に対して、ランスは怒りよりも困惑を隠しきれない様子だ。以前有栖が説明したランスを切り捨てる理由が、割と妥当に思えるから尚更だろうね。

「戸塚君を切り捨てる理由は、彼を残すメリツトが無いからですよ。学力はクラス最下位、運動能力も下の下……トップである私に噛みつく割にクラスに何も貢献もしていません。不要な人間を処理するこの試験で葛城君、貴方のような優秀な人間を切り捨てるほど私は愚かではありませんよ」

「何故、こんな回りくどいことをした……!?!」

「リスクを避けるのは当然でしょう? 万が一彼が自力で賞賛票を集められていたら退学にはできませんから」

他クラスの策略で能力の低い戸塚を残留させようと賞賛票が集まる可能性も0ではないけど、ランスを切ると公言しておけば誰も戸塚に賞賛票など入れないだろうね。

「……な……なあ本条……!」

ようやく状況を飲み込めたのか、戸塚は絶望した表情を浮かべながら力の無い足取りで俺の席まで近寄り……土下座をして俺に縋り付いた。

「助けて……お願いだ、助けてくれよ本条! 俺は退学なんてしたくないんだ! 今まで突っかかってたことなら謝るし、なんならもう二度と葛城さ……葛城に味方なんかしな

いから……お願いだ、見捨てないでくれよお！」

涙さえ流しながらの、あまりに都合の良い命乞い。これまで慕っていたランスへの義理も何もあつたものじゃない、救いようのない見苦しいものではあるが、今の彼の姿を笑える者はそうそういないだろう。特に以前ランスについていた生徒達は……彼がいなければ自分が狙われてたかもしれないのだから。

「つ……俺からも頼む本条！虫の良い話なのは承知しているが、どうか弥彦に手を差し伸べてやってくれ！」

戸塚のあまりにも悲痛な慟哭を聞き、ランスも即座に地に足着けて俺に頭を下げる。

これまで慕ってきた人間を見限つてまで、プライドを捨てて敵対していた俺に縋り付く戸塚。そんな戸塚に何も恨むことなく、自身の退学を天秤にかけても守つた筈の信念まで投げ捨ててまで懇願するランス。

そんな彼らに対して俺は……

「うん、駄目」

容赦無く断頭台ギロチンを振り下ろした。絶望に顔を歪ませる彼等にも構わず、俺は有栖の思惑通り淡々と現実を突きつける。当然そのことに罪悪感など一切湧かない、湧く筈もない。

「俺は言った筈だよ？手を差し伸べるのは1度きりで、当日に気が変わろうがもう遅い……そう約束したよね。俺が約束を破らないのは君もよく知ってるでしょ？」

「だがあれは俺が退学になった場合……っ……っ……！」

「ようやく気づいたようだね……俺はねランス、君を助けるなんて一言も言った覚えはないよ？」

「っ……っ……！」

今回の件でランス最大の落ち度は間違いなく、自分を退学させるという有栖の言葉を疑いもせず信じてしまったこと。

いつもの用心深いランスなら、もつと言えば1年間に有栖と学校生活を過ごしてきたものなら、彼女の言動の1つ1つや俺の不自然な助け船に対して疑いを向けていた筈。しかし彼は自身が犯した失態を気に病むあまりそれを怠った。責任感が強過ぎるが故に起きた過ち。

「フフ……葛城君、よろしければ感想を聞かせてもらえませんか？信念、意地、私への反骨心……そんなものを優先したせいで、自分を慕ってくれるお友達が犠牲になってしまった感想を」

「ツツツ！坂柳、貴様あああああ！」

ランスとて馬鹿ではないので普段の俺なら、あのような不透明な提案を自発的に行わ

ないとわかつている。間違ひなく有栖が裏で糸を引いていると確信したランスは、とても楽しそうな笑みを浮かべる有栖に詰め寄ろうとして……腕を掴まれ引き止められる。何事かとランスが後ろを振り向くと……

憎悪、悲しみ、絶望……俺がなくなってしまうた感情を無理矢理ごちゃ混ぜにしたような表情を浮かべた戸塚が、止めどなく涙を流しながら睨みつけていた。

「……んな……!」

「や、弥彦……!?!」

狼狽えるランスの胸ぐらを力強く掴み上げ、戸塚はあらん限りの負の感情をぶちまける。

「ふざけんなよ葛城! お前が余計なことしたせいで、俺は見捨てられちまったじゃねえか! どうしてくれんだよ! なあ、なんで俺が退学しなきゃいけないんだよ!?! お前、退学しても良いって言ってただろ! 代われよ! なんとかして代わってくれよおおお!」

「つ……弥彦、すまない。俺の、せいで」

「謝んなよ! 謝んじゃねえよ! 申し訳無さそうに、するなよ……今さらお前に謝られても、もう俺は……うう、畜生……畜生……!」

感情の赴くままランスを罵倒していた戸塚だが、ランスの悲痛な表情をみている内に次第に勢いを無くし、やがて彼の胸ぐらから自然と手が離れ、その場に崩れ落ちて嗚咽

を漏らす。

戸塚とてそこまで愚かじやない。

ランスを恨むのは筋違いだと理解している。

ランスに悪気が無いことなど知っている。

ランスが心の底から悔いていることを察している。

ランスがもし自分を守るなら、退学を引き換えにしても迷わないことをわかっている。

この1年で生まれた彼等の絆は、決してまやかしでは無いのだから。頭ではそれはわかっているが湧き上がる絶望は抑えられず、結果として彼はランスを罵倒し慟哭するだけに留まっている。

真嶋先生を含むクラスの大半はこの光景を痛ましそうに見るしかなく、生粋の外道である有栖は何が楽しいのか微塵も共感できないが満面の笑みを浮かべており……負の感情が欠落した俺はどうとも思わず、どうとも思えずただ冷めきっている。

失意のまま真嶋先生に連れられて教室を出ていく戸塚を、ランスはただ見送ることしかできなかつた。

自らの信念を貫いた結果最も親しい友を犠牲にし、責められながら友を見殺しにするしかなかつたランス。

最も慕っていた友のせいで助けてもらえず、彼を恨み憎みながら脱落していく戸塚。有栖の気まぐれでこの世の地獄を味わった2人だけど、果たしてどちらがより悲惨なんでしょうね。

ともかくこれで、ランスは有栖に完全敗北した形になる。今回の件を恨んで報復を企めば有栖はかつてランスについていた生徒……例えば町田辺りを排除するだろうし、自主退学をすればクラスポイントを大きく減らすことになる。常にクラスのことを考えて行動してきたランスは、もう何もできることはないだろう……このクラスにいる限りはね。

全クラスの試験が終了し、各クラスの結果が一階の掲示板に貼り出された。

クラス内投票結果

プロテクトポイント獲得者

Aクラス 坂柳有栖

Bクラス 一之瀬帆波

Cクラス 綾小路清隆

Dクラス 金田悟

退学者

Aクラス 戸塚弥彦

Bクラス なし

Cクラス 山内春樹

Dクラス 真鍋志保

「ほほう、これはまた……」

可能性としては低いだろうと思われた結果に感心していると、おそらくはその立役者であろうコージが階段から降りてきた。

「やあコージ、賞賛票1位おめでとう」

「お前からAクラスのお陰だ。山内の件のことも含めて、色々と助けられたな」

そう言つてコージは、ポケットからボイスレコーダーを取り出し俺に返す。……俺が水曜日に彼のポストに投函した、混合合宿後にした山内君との取引の一部始終が録音されたものだ。

「君なら俺らのお節介が無くても切り抜けられただろうけど、一応どういたしましてと言つておくよ。よくこれの持ち主が俺だとわかつたね」

「お前が設置された盗聴機や、隠れて録音する奴を見逃す筈がない。だったら消去法で録音したのはお前だ」

「ありやりや、それは盲点だったね。……しかしとんだ大判狂わせだね」

俺が掲示板に視線を移すと、コージも続いて結果を確認する。……たぶんこの結果全て予想通りだったけど、万が一に備えて確認しに来たんだろうね。

「やはり坂柳の言つたことはフェイクだったか」

「まあ不必要な子を切る試験でランスを切るメリツト無いよね。それにランスを切つても彼は肅々と受け入れちゃうから、生粋のサディストである有栖としては何も楽しくないだろうし。……しかし正解ちゃんの賞賛72票は圧巻だね。批判票0かつクラス内からは39票、クラス外からも33票入れられてるよ」

「それを言うならお前のクラス内賞賛票0、批判票30、クラス外賞賛票42も大概だろ」

「俺にプロテクトポイントなんて無駄の極みだし、そりや多少は票操作もするさ。まあそんなことよりー」

俺が最大の大判狂わせについて話を切り出そうとした直前、その話の中心人物であるリユンケル……あとランスが、ほぼ同時に姿を見せた。ランスは一瞬俺に強く敵意のこもった視線を向けたきり、なるべく俺の方に意識を向けないようにした。ありやりや、嫌われたもんだよ。

「お前も退学しなかつたのかよ、葛城」

「……こちらの台詞だ。貴様だけは確実に消えると思っていた」

「クク、どうやら死神が俺の味方をしたらしい」

「死神、だと？」

「お前には関係無え話だ。しかし坂柳も随分と面白い手を打つたな、お前の唯一の味方を狙うなんてよ。……なあ本条、助けようと思えば助けられたお前に見捨てられた戸塚は、お前を恨まなかつたのか？」

「んーとそれがね、有栖のエグい策略でランスのせいで助けられなくなつたって状況に誘導されたから、むしろランスを恨みながら脱落していったよ」

「ひやはははは、それは痛快だな！その現場に立ち会いたかつたもんだぜ！」

戸塚の無念を嘲笑うリユンケルを、ランスは鬼気迫る表情で睨めつけた。この国が法

治国家でなければ、殺しかかってもおかしくないほどの殺意がこめられている。

「……なんだ、お前にもそんな顔が出来るんだな。今のお前なら本条は無理でも、坂柳には一矢報いれそうだ」

「……そんなことをして何になる。それより貴様はどうするんだ？また坂柳や一之瀬、堀北に挑むのか？」

「生憎と興味ねえな。幸いお前らとの契約は切れなかつたし、俺は今後も搾取を続けながら適当に遊ばせてもらうさ」

リウンケルとランス、どちからが脱落していればあの契約も反故にできたが、両方生き残ってしまったからには契約は続行だ。……もうそろそろ元葛城派の子達の分も肩代わりしてあげようかな。

一足先にさつきとランスがその場を去ると、リウンケルはコージー……それと何故か俺を校舎裏に連れていった。

「いつからお前は聖人君子になったんだ、綾小路」

「ああ、やっぱりコージーの作業なんだ」

「……お前らにはシラを切つても無駄だろうな。オレが何かしたというより、龍園を慕う連中が行動しただけなんだけどな」

クラス中のほとんどからからリウンケルに批判票が集まる事が確実な以上、彼が生

き残るには他クラスからの賞賛票を集めるしかない。と言つても彼が賞賛票を入れてくれと頼み込んだところで誰もいれないだろうから、それ相応の対価を差し出して取引をするしかない。そして、その取り引き相手としてうつつつけなのが……卍解ちゃん達Bクラスだ。

あの仲良しクラスは退学者を出すことを許容できず、2000万ポイントによる救済を迷いもなく選択した。だけど自前で集めたポイントでは足りなかったようで、他クラスの誰かに不足分を借りることを卍解ちゃんは決意。一番手近な俺に断られた彼女は次にみやびん会長に嘆願し、彼との交際を条件に貸してもらえることになった。

……とはいってもできることならその条件は飲みたく無かった筈だろうね。彼女は生粋の乙女だからそんな経緯の交際に少なからず忌避感を持つだろうし、どうにも先日の件以降無自覚だけどコージーに対して特別な感情を抱いている節がある。最終的にはクラスのために自分を犠牲にするだろうけど、他に借りるあてがあれば即座に飛びつくだらう。……そしてリユンケルはランスと結んだ契約で、俺達から500万ほどポイントを搾取している。

つまりリユンケルのポイントをBクラスに差し出す代わりにBクラスの称賛票をリユンケルに注ぎ込めば、リユンケルは生き残るし卍解ちゃんもみやびん会長の毒牙にかからずに済んでめでたしめでたし、という訳だね。

まあだからと言って既に退学を受け入れたリユンケルがわざわざBクラスに出向いてそんな交渉を持ちかけるわけがない……となると、石崎君達がコージに泣きついて知恵を貸してもらったのだろう。

「本気を出せば退学を避けられる、と断言したのはこの手があつたからだろう？」

「ああ、Bクラスがポイントを貯めこんでるのはわかつてたからな。あのお人好しがリーダーならたとえ俺でも交渉の余地はある。……伊吹の奴にそんな知恵は無いから俺も安心して預けたんだが、まさかお前が絡んではな」

……えっ、伊吹ちゃん？あの子リユンケルのこと死ぬほど嫌ってた筈だけど、どういう風の吹き回しなんだろう。

「オレが直接出向いたら作戦を見抜いて、ポイントを渡さなかつただろうからな」

「あいつに何も説明しなかつたのは正解だったな。……真鍋をターゲットにしたのはお前か？」

「それは伊吹の提案だ」

ああ、あの2人仲悪かつたからね。

だけど手駒である軽井沢ちゃんにとって邪魔な存在である真鍋ちゃんが脱落してるから、間違いないくコージが裏で糸を引いてると確信したんだけど……珍しく推測が外れちゃったかな？

「あいつにしちや思い切ったな。さつきは真鍋の奴、随分と阿鼻叫喚だったぜ」

Bクラス以外はどこも地獄だっただろうね。

「何にせよ、ありがた迷惑な話だぜ」

「そうかもな。……次も同じような試験があつたら、お前はどうするんだ？」

「クク、さあな」

「ありや、何もしいとは言わないんだ？」

「前線に戻る気も無さそうだから放置したけど、これはひよつとすると……。」

不敵に笑つて去つていくリユンケルの背を見ながら、Dクラスはもう死んだという評価を一応改めておく。

10 卷エピローグ

【side：坂柳有栖】

特別棟にて待つこと数分……桐葉が綾小路君を連れて階段を上ってきました。

「有栖おまたせー」

「いえ、私も今来たところです」

不毛な茶番に二人とも思わず笑ってしまいます。こういうデートの待ち合わせみたいやり取り、一回やってみたかったですよね。普段は私の身体を考慮してわざわざ迎えて来てくれるので、いざしようにも機会が全然……おつといけない、綾小路君が何やら居心地悪そうにしていますね。

「すみません綾小路君。お呼びしたのは、一応今回の件についてご説明しておこうと思います。……と言っても、余計な心配だったようですね」

試験期間中に私は、今回の試験で綾小路君のマイナス要素になることはしないと約束しました。やむにやまれない事情で山内くんを利用して彼に批判票を集めざるを得ませんでした……

「勝負を持ち越したいと直談判してきた時点で9割方信用はしていたが、念には念を入れ手は打たせてもらった」

「存じています。……ですが、約束を破ったことにはなりませんよね?」

「そうだな。多少精神的には負担になったが、マイナスを与えないことには偽り無かつたし大して気にしてない」

「ありがとうございます」

「よかつたね有栖」

精神的に負担をかけたことを槍玉に挙げられてはどうしようかと危惧していたのですが、あまり気にされていなかったことに内心安堵しています。

「それはそうと……戸塚君の批判票は葛城君以外の38票入っている筈だったんですが、結果は36票でした。もしかして……」

私は期待するような視線を綾小路君に向けます。……正直可能性としては五分五分、また桐葉の悪い癖が出ただけかもしれないかもしれません。私の最も信頼するパートナーは、どうも刹那的な生き方が大好きなようですし。

「なんかデイスられた気がする」

うるさいです桐葉。

……ですがもし綾小路君が戸塚君に賞賛票を入れていたとしたら、私の策略を見抜い

ていたということになります。

そして彼は、私の視線に対して肯定するように頷きました。

「確信は無かったがお前の判断はどうにもブラフに思えたからな。そうになると狙われるのは唯一の取り巻きである戸塚だ。……賞賛票1票でどうにかなるものでもないけどな」

「素敵です。倒すべき相手だと定めた私の目に狂いは無かったようですね」

「……それで今回の件に関しては、単に俺をからかいたかっただけか？」

「多分そうじゃない？」

「違いま……すとは言い切れませんが、勿論ちゃんとした理由もあります。以前にも似たようなことを話しましたが、この試験は何者かが貴方を退学にさせるため用意したものののです。事実、私にメールを送ってきた人物は貴方を退学させるよう指示してきましたので」

父を陥れた人物の関係者、そんな得体のしれない相手に、この私が命令される……これほど不愉快な話はそうそうそう無いでしょう。思い出すだけでも杖を握る手に力が入ります。

「……メール？」

「はい、父を停職に追いやった学校側の人間と思われまます。……この追加試験にしても、

他クラスには賞賛票ではなく批判を投じるといふ理不尽なルールだったそうですから、まず間違いないでしょう」

「もしそれがまかり通れば、どんな生徒でも結託して退学させることが出来るな」
「たぶん俺に批判票が集中するね」

Aクラスを目指すならば桐葉ほど邪魔な生徒は他にいませんから、下手をすれば3クラスが手を組んでまで総攻撃されるでしょうね。

「もちろん現職員達も猛反発し、その事態だけは避けることが出来たようです。どちらにせよそんな無粋な輩に協力して貴方を退学させるなんて、何一つ面白くありません。よって私は葛城君と戸塚君以外のクラスメイトの賞賛票を全て貴方に入れると決めました」

「とはいえこんな監視カメラだらけじゃ、もしかしたら見張られてるかもしれないよね？だから寸前までちゃんとコージーを退学させようとしていると思わせたって訳。余計な心配させてごめんね」

「さつきも言ったが大して気にしてない。……それで山内を狙った理由はなんだ？どうやらこの追加試験前から仕込んでみたいだが」

桐葉から受け取った録音を聴けば、流星に偶々狙った訳じゃないってわかりますよね。

「合宿の際に彼が私にぶつかって失礼な態度を取ったことを覚えていますか？その意趣返しですよ」

特に恨んでいるわけではないですが、一度転ばされたのだから私にも一度転ばせる権利がありますよね？……だから恨んではないと言ってるでしょう桐葉、その憎たらしい笑みを私に向けないでください。

「しかし私はきつかけを作っただけ。あくまで自分の意思で裏切った彼が、クラスを敵に回し排除されただけです」

「そっちな」

もし仮に私が何も関与していなくても、高確率で彼は戸塚君と同様の理由で脱落していたでしょうね。クラスで浮いている高円寺君に批判票が集まる可能性も低くはなかったので万全を期しましたが。

「総じて今回のような試験は、私と貴方との決着を付けるのに相応しくありません。一刻も早く父が復帰し、正常な学校運営に戻ると良いのですが――」

「有栖、来たよ」

桐葉に遮られて周囲に注意を向けると、スーツを着用した40代くらいの男性がこちらに歩いてきました。……もしメールを送ってきた者の関係者が、監視カメラを通じて私を監視していたのなら、この人気の無い特別棟で綾小路君と頻繁に会えばいずれ誘き

出せるという狙いがかりましたが……とうとう引つかかってくれましたか。

「やあ、こんにちは。この学校に来るのは初めてでね、職員室がどこにあるか教えてくれるかい？」

「職員室とは、随分と見当違いの場所をお探しですね。……失礼ですが、どちら様でしょうか？」

「私は、今度理事代行を務めることになった月城と申します」

務めることになった……などと白々しいことを言うこの男に苛立ち、私は無意識に杖を強く握ったところで桐葉に肩を叩かれ、落ち着きを取り戻して仮面を被り直しました。

「フフ、そうでしたか。しかし校舎すら違うここに偶然迷い込むとは、どうやら相当な方向音痴のようですね。あるいは……監視カメラから私達を見つけて様子を探りに来たのですか？」

少し揺さぶりをかけて様子を見ましたが、桐葉はさりげなく右手の人指し指だけを伸ばしていました。

私と桐葉の間で決めたハンドサイン……私が精神的に揺さぶりをかけたとき、どれだけ動揺しているかを彼が見抜きそれに応じて指を伸ばす。5本全部伸ばした場合はこの上なく動揺していて、逆に1本だけは平静そのもの……どうやら一筋縄ではいかない

お相手のようですね。

「面白いことを言う子だね。愉快的学校だと聞いているが、皆君達みたいな生徒達のかな？ それじゃあ失礼するよ」

何を考えているのか、理事長代行は私達と綾小路君の間を通るように歩いてきました。

「ですから職員室ならこのことは別の校舎なので、引き返して下に――」

私の言葉が言い終わる前に、代行は笑顔のまま私の杖を蹴り飛ばそうとしてきました。流石の私も不意を突かれましたが、彼の動きの未来を視た桐葉が蹴り飛ばされる直前、私ごと引き寄せ抱き抱えたことで彼の蹴りは外れました。

「おっと」

しかし代行は片手の塞がった桐葉に追撃を加えてきました。40前後の中年とは思えない激しい猛攻を桐葉は片手で捌き続けますが、防戦一方となりあれよあれよと壁際に追い詰められ、そして決定的な一撃が桐葉の顔面に入る……直前に代行は突然拳を桐葉の鼻先で止めました。

「……………」まで、ですね」

代行は拳を収めながら後ろを振り向くと、携帯を構える綾小路君の姿がありました。おそらくは録画しようとしてたのでしよう。

「お友達がやられているのだから、助けに入ろうとは思わなかったのですか？ 噂で聞いていた割には、大したことのない普通の対応ですわね」

「……随分と野蛮なことをなさりますね、代行」

「君には彼を退学させるようにと指令が行かなかった筈だけどね」

「やはりあのメールは貴方のお仲間の差し金でしたか。元より私は誰の命令も聞きませんし……理事代行ともあろう方が生徒に暴力行為をして問題にならないとでも？」

「ああ、その心配はいらないよ。ここの監視カメラはダミー映像に差し替えてあるから」「細工済みなら別のカメラを使うまでつすよ。なあコージー」

「ああ」

綾小路君と桐葉は同時に携帯を代行に向ける。どちらかに襲いかかればもう一方がその決定的な場面を映像に収められる布陣に、代行は降参とばかりに肩を竦め綾小路君に向き直る。

「私が正式にこの学校で活動するのは来期からです。今日のところは君の父上からの伝言だけ伝えて引きましょ。『これ以上子供の遊びに付き合う気は無い。すぐに帰ってこい』とのことだそうです」

そう言って代行は特別棟から去って行きました。

「賢い判断でしたわね、2人とも」

私と言う足手まといを抱えていた桐葉はともかく、万全の状態の綾小路君ならあの代行でも振じ伏せられたでしょう。ですが……

「相手は代行とは言え理事。下手に攻撃を加えればどうなるかは想像がつく」

「ちなみにダミー映像の件は嘘だったよ。……すぐくわかりにくかったけど」

理事代行に暴力行為を働いた映像だけ切り抜かれていれば、間違いなく退学に追い込まれていたことでしょう。……立場が上の相手というのは思ったよりも厄介なようですね。

「坂柳」

「なんででしょう?」

「次の試験、正式にオレと勝負しよう」

……驚きましたね。私と戦うことにあまり乗り気でなかったこの人が、まさか……

「どういった心境の変化でしょうか? そのように面と向かって言ってくれるとは思いませんでした」

「あの男が4月から関与してくる以上、長々と相手をしてる余裕も無さそうだ。……さっさと白黒つけて、それで終わりにしたい」

「ええ、勿論それで構いません。私も4月から桐葉を守らないといけませんしね」

「……本条を?」

「えっとねコージ、2学期末に職員室がどこにあるか迷っていた君のパピーを道案内したのが俺なんだけどね……その際にあの、退学してホワイトシンドロームに来ないかってスカウトされてね」

「ホワイトルームな」

桐葉の極めて特異な眼を知っているなら、手中に収めたいと思っても不思議ではありませんからね。しかし……

「あろうことかこの男、欲しければ綾小路君同様力づくで退学させて見ろ……と、貴方のお父様に喧嘩をふっかけまして」

「……………」

流石の綾小路君も絶句しますよね？

綾小路篤臣……その素性を知るものからすれば、桐葉が考えなしにした行為は卒倒ものでしょう。刹那的にも程があります。

「正気の沙汰とは思えないな……家族を破滅させる、といった脅しをかけられなかったか？嘘だと思っているなら大きな間違いだぞ」

「いや？そんな脅しされてないよ。俺の両親はあの人と知り合いみたいだし、パピーとマミーを通じて俺のこともよく知っているらしいから、脅しにならないと知っていたんじゃないかな」

「……さつき故意に無抵抗で殴らせようとしていたことといい、やはりお前もかつての龍園のように……」

おつといけない、あやうく見過ごすところでした。

「それでは綾小路君、対決を楽しみにしています。私はこれから桐葉に小一時間お説教をしなくちゃいけないので」

「え、何それ。聞いてないよ?」

「黙りなさい、文句は受け付けません」

彼の手を強引に引つ張りながら特別棟を後にする。

まったくこの人は……いくら厄介な権利を持つ代行を早々に排除できるからと言って、普通無抵抗で顔面を殴らせようとはしますか? ハンデを背負っているからと言って、貴方がああも一方的に追い詰められる筈無いでしょうに。

負の感情を忘れてしまった彼にこんなこと言うのは不毛だとわかってはいますが、それでも言わなきゃ私の気が収まりません。……もし私が足を引つ張つたせいで貴方に消えない傷が残つたことを想像すると、私の心は引き裂かれそうになるんですよ?」

「あ、それから有栖」

「……なんですか?」

「さつき君を片手で抱っこしたときのことなんだけどさ……」

間違つて胸とか触つちやつてたらゴメンね。有栖全然無いから判別がつかない」
言い終わらない内に私の拳が桐葉の顔面に突き刺さる。殴られても構わないよう
ので私が殴つてもいいですよね？

選抜種目試験

3日8日、月曜日。

クラス内投票を終えた俺達Aクラスの教室には、先週まで40あった机が1つ減っていた。

戸塚弥彦の退学。

有栖の指示に従うままに彼を蹴落としたクラスメイト達も、大抵はどことなく憂鬱そうな様子であった。

みんな自身の将来のためAクラスで卒業できるように有栖に従っているし、戸塚がクラスにとって最も不必要だということを否定する者も、たぶんランスを除けばいないだろうけど……だからと言って退学してほしいほど嫌っていたわけでもないんだろね。

戸塚に対して全く何も思うところがないのはせいぜい、自己中の極み橋本、どこまでも他人に無関心なマスマシン、生粋の畜生こと有栖……そしてある意味有栖以上に畜生な俺の4人くらいかな。

どことなく重苦しい雰囲気か払拭されることなく、ホームルームを告げるチャイムが鳴り真嶋先生が入ってきた。

「ではこれより、今年度最後の試験を発表する。今回の特別試験はこの1年間の集大成となる。知力、体力、連携、はたまた運……様々な能力が求められることになる」

なるほど、随分とごった煮感が強い試験みたいだね。

「各クラスの総合力を競う『選抜種目試験』……パーパーシャツフルのときと同様、ルールに従って対決クラスを決めて行われることになる」

おつ、幸先良いな。

有栖はコージーとの一騎討ちを求めている以上、BクラスやDクラスは正直邪魔ではないからね。もしバトルロイヤル形式なら、また俺が馬車馬のごとく働かされてたよ多分。

「お前達に分かりやすくするため、これらの白いカードと黄色のカードを用いて説明していく」

そう言って真嶋先生はトランプサイズの2種類のカードを黒板に貼り付け並べていく。10枚の白いカードは何も書かれておらず、38枚ある黄色いカードには1枚ずつに生徒の名前が書かれているけど……有栖の名前だけ見当たらないのは何でだろうね？

「まず先に説明するのは白のカードだがここには好きな種目を計10個、お前達が話し合いを経て好きに書き込んでもらう。種目の内容は両クラスへの公平性が保たれていれば……例えばほとんどのものが知らないマイナー競技やゲームといった提案者に有利すぎるものや、ルールがあまりにも難解なもの、決着が付くまでに何日もかかるもの以外なら何でも構わない」

なるほど……エクストリームアイロンがけとか、99年桃鉄対決とかはダメってことね。いやはや、それにしたってこれまでと違い随分と自由度の高い試験だ。

「それと引き分けも起こらないようルール調整が必要になる。たとえば将棋で千日手が生じた場合持ち駒の数で勝敗を決まる等、ちゃんと白黒付くよう徹底してルールを決めなければ採用されないと思え」

ふむ……ここまで勝ち負けに拘るってことは、種目で決着が付くことにクラスポイントが変動するんだらうね。

「実際にわかりやすく再現しよう。そうだな……本条、どんな種目を選ぶ？何でも良いから言ってみろ」

「じゃあゴボウしばき合い対決で」

「あんな、確かに何でも良いとは言ったが……まあいい」

何やら呆れたように溜め息をついた後、真嶋先生は白紙のカードに『ゴボウしばき合

い対決』と記入した。……おいこら橋本、笑ってんじやないよ失礼だな君は。

「仮にこれを種目として……勝ち負けはどう決める?」

「先に降参するか、決められた枠内から出てしまった方の負けで」

「若干物議を醸しそうだが比較的知名度が高く、ルールも至ってシンプル。おそらくは採用されるだろう。……これを9回繰り返し返すだけだ。そして試験の日程だが、大きく分けて3段階となる」

真嶋先生は日程を黒板に書き記していく。

特別試験

3 / 8 特別試験発表日。同日対決クラスの決定。

3 / 15 10種目の確定。対決クラスの10種目及びルールの発表。

3 / 22 試験当日

「そして決めてもらう種目は10種類だが、3月22日の試験当日にその内の5種目を提出してもらう」

なるほど……つまり5種目はブラフで、種目が発表させる15日に敵対するクラスに對して駆け引きを仕掛けられるというわけだ。例えば公開された種目に『アメフト』を

のだろう。

「何だ？」

「1度決定された種目は変更できますか？」

「不可能だ」

「では、1人の生徒はいくつまで種目に出ることが出来ますか？」

「原則1人1種目だ。……口頭だけでは理解しがたい部分もあるので、詳細を記載したプリントを1枚配布する。後でコピーするなり好きにするといい」

ふむ、1人1種目か……やはり1年の集大成となる試験には、突出した個が集団を覆しかねないルールを選ばないか。今回は割と楽できそうだね。

「そしてお前達には種目以外にも『司令塔』という役割を1人用意しなければならない。司令塔は種目に直接参加できないが、大人数を束ね臨機応変な対応が求められる重要な役割だ。全ての種目に関与し補助をするライフラインと捉えればいい」

真嶋先生の説明を聞いたクラス中全員の意識が、俺の隣にいる銀髪鬼畜幼女に向いた。このクラスの司令塔はこの子だろうからまあ仕方ない。真嶋先生もそれをわかっているから、有栖のカードを用意しなかったんだらうね。……あと有栖、杖で足の甲をグリグリしないで。心の声を察知するほどに幼女扱いが嫌か。

「司令塔が関与する方法もお前達に決めてもらう。例えば将棋であれば『10分間アド

バイスができる』や『1度だけ指す生徒を交代させることができる』など、お互いに平等な関与であれば構わない。そして

司令塔はクラスが勝利した際個別にプライベートポイントが与えられるが……敗北時には責任を取って退学してもらおうことになる」

前回から引き続いての強制的な退学となると、まず間違いなく例の理事代行さんが関与しているね。有栖が反抗したせいでコージーはプロテクトポイントなんて厄介なものに守られているから、どうにかして守りを剥がしたいのだろう。

だけど今回の試験でコージーと戦う予定の有栖にとつては、この上なく都合の良い条件が整ったことになる。実力を隠している普段のコージーなら、司令塔なんてポジションに抜擢されるわけがない。だけど誰だって退学なんてしたくないだろうし、必然的にプロテクトポイントを持つ生徒が司令塔に据えられる。……ここまでは有栖の筋書き通りだね。

「司令塔になった生徒には今日の放課後、多目的室に集まってもらい、くじ引きで選ばれた1人にクラスを選んでもらうことになる。くじに勝った時にどのクラスを選ぶのか、クラス全員でよく相談して決めておくように。ちなみに……」

真嶋先生は現在のクラスポイントを書き連ねていく。対戦相手選びの参考にしろということだろうかね。

3月1日時点のクラスポイント

Aクラス……1278ポイント

Bクラス……613ポイント

Cクラス……396ポイント

Dクラス……334ポイント

CクラスとDクラスは拮抗しているから、今回の試験の結果次第では元の位置に戻っちゃうかもね。そしてAクラスとBクラスだけど、想定していたよりも差は大きくなかった。正解ちゃん達がとても頑張ったからなのか、それとも俺達が緩んでいたからか。

「そして肝心のクラスポイントの変動に関してだが……1種目につき30ポイントが勝ったクラスに移動し、最終成績で勝利したクラスに学校側から100ポイントが与えられる」

つまり最大で310ポイントか。全敗しても俺達が下位に落ちることはないけどこれまでリードを大きく失い、他のクラスにいたってはどろどろ落ちてもおかしくないという愉快な状況だ。……まあうちのお嬢様は今、とにかくコーギーを打ち倒すこと

以外はいつでもいいんだろうけどさ。

なお真嶋先生が去った後配布された冊子に目を通すと、種目を決める際の細かいルールは……

・対決種目の条件

マイナー過ぎる種目や複雑すぎる種目、またはそのようなルール設定は不許可とする場合がある。基本ルールを逸脱し改変する行為は禁止。

筆記問題などを種目にする場合、学校側が問題を作成し公平性を保つ。

・使用できる施設

試験当日は多目的室にて司令塔が種目進行を行う。学校内の施設は一部の例外を除き使用可能。

・出場人数

種目に参加する人数は交代要因を除き申請する10種目で全て違っていなければならない。最大人数は20人（交代要因を含む）で最少は1人。

必要参加人数が10人以上の種目は2つつまでしか登録できない。また、種目の人数が同じものは設定できない。

・参加条件

各生徒が出場できる種目は原則1つまでだが、クラス全員が種目に参加した場合は2回目の参加を、クラス全員が2回種目に参加した場合は3回目の参加を許可する。

・司令塔の役割

司令塔は全ての種目に関与する権限を持ち関与方法は種目を決めるクラスが定め、学校側が承認して初めて採用される。

以上となっている。

種目の決め方によつては俺が2〜3回参加することも理論上可能だが、あまりにも運に依存しているため有栖はそういう戦略は取らないだろうね。この娘はアホみたいにならなければ、運良く勝てただけなんて評価は屈辱以外の何物でもないだろうし。

そして肝心の、こういった形でコージーと対決するけど、種目及び司令塔の関与方法を選べるという自由度の高さに加え、有栖が何を好み何を得意としているかを考慮すれば、推察するのは別に難しくない。

だけど狙い通りの種目が選ばれる確率は70%……まあまあ高いけど樂觀視するには不安が残る数字だ。パワプロなら怪我が怖くて絶対に練習コマンドは選べない。

「桐葉」

「んー？」

「二度10面ダイスを振ってくれませんか？」

「……ああ、そういうことね」

有栖のお望み通り懐からダイスを取りだし転がしてみる……9か。俺の幸運は際限なく万能なものでは決してないが、この程度の範囲なら割と融通が利くと昔色々と検証してわかっている。

これで9番目に決めた種目は間違いなく採用されることが決定した。

「すみません桐葉、貴方がその才能を好んでいないと知っていながら頼ってしまつて……」

「このくらいのサポートなら別にいくらでも構わないよ。それよりも司令塔の役目を果たしなよ、皆待つてるからさ」

「それもそうですね」

有栖は席を立ち、クラスメイト達の注目を浴びながらいつものように教壇の前に立った。これから自分が司令塔であることと、Cクラスと戦うことを伝達する。そしてどちらも抵抗なく受け入れるだろう。

プロテクトポイントを持つ有栖が退学のリスクを孕む司令塔になるのは妥当な判断だし、そうでなくても彼女が誰かに従う光景は誰も想像できない。

そしてCクラスと戦うことに関しては、多分赤子の手を捻るよりも説得が容易だろう。

……つい先日までCクラスの中心だった平田洋介君の、リストラを告げられたばかりのサラリーマンのような有り様を見れば、絶好のカモだと誰もが判断するだろうからね。

麒麟児からの挑戦状

「まず始めに、司令塔は私が務めます」

教壇に立った開口一番そう宣言する。下手をすれば退学なんてポジションに進んで就きたい者などいる筈がなく、またクラスの皆も性格はともかく有栖の指揮官としての能力は微塵も疑っていないので異論は無さそうだ。仮にランスが以前までの状態でも退学のリスクを考慮し、プロテクトポイントを持つ彼女が適任と判断するに違いない。

「そして私が対戦クラスを指名できる場合、Cクラスを選ぼうと考えています」

「……どのクラスが相手だろうと負けはしらないと思うが、何故Cクラスにするんだ？」

「大した理由ではありませんが、特別試験では1度もCクラスを打ち倒せていないことが少し気になりました」

鬼頭の疑問に、有栖は用意していた建前を説明する。

まあ確かに言われてみれば無人島試験と干支試験では有栖の策略もあり惨敗、体育祭では味方だったため倒したとはいえず、ペーパーシャツフルではそもそも無関係、混合合宿ではクラス間同士の戦いではなかった……と、確かに1度もCクラスをねじ伏せて

はいないことになる。こう言っとけばとにかく攻撃的で有名な有栖が、Cクラスを狙うことに違和感を持つ者はいなくなるだろうね。

「先日の追加試験で配布されたプロテクトポイントは、おそらく今回の試験で重要な役割を持つと予想していましたので、対Cクラスに備えて事前に布石を打っていたのですが……あの様子だと、どうやらその必要も無かったかもしれないですね」

「ああ。平田がああなったんじゃ、まとまるものもまとまらないだろうな」

誰よりもクラスの和を尊び、あの協調性の無い面々をまとめるべく奮闘していた平田君は、クラスメイトを見殺しにしまったことがよほど堪えたのか、完全に生ける屍と化してしまった。学年屈指のイケメンだけあった彼を心配する女の子は多いが、もはや誰の呼び掛けにも応じることも無くなったらしい。

個性豊かで癖の強い面子が揃うCクラスの中心は、間違いなく平田君だっただろう。厄介さで言えばホリリンやコージーには劣るけど、あの2人は社交性が無いから平田君の助けが無ければクラスをまとめるのにも難航する筈……コージーというジョーカーを知らない人からしたら、誰もが格好の獲物と考えるだろうね。

「なるほどねえ、俺らの他クラスへの賞賛票を1人に集中させたのはそういう理由か」「ええ。順当に行けば平田君や榎田さん、もしくは堀北さんにプロテクトが渡っていたでしょうから」

「……綾小路にした理由は偶々か？」

「ええ、箸にも棒にもかからない生徒をリストアップしてランダムに決めました。平田君があのようなになるとわかっていれば彼を選んでいたかもしれないませんが、それは結果論ですし仕方ないですね」

混合合宿以降コージーを探っている橋本はさりげなく有栖を探りを入れるも、橋本程度が純粋な話術では俺を凌ぐ力量の有栖から情報を引き出せる筈もなくあつさり流される。

俺との契約でAクラスの卒業が約束されている橋本は、これ以上の深入りは有栖の不興を買うと判断し黙って引き下がった。

「さて、そろそろ授業が始まりますね。試験について皆さんにしてもらいたいことについては、昼休みに伝えます」

……以前までならクラス全員での話し合いの場を設けようとしないう栖に、ランスが苦言の1つでも挟んでいたんだけどなあ。いざ無くなると寂しいもんだ。

「—そんな感じでランスはせっかく生き残ったのにすっかり腑抜けちゃってるよ。まっ

たく見ちゃいられない」

「知らねえよ、何ナチュラルと一緒に飯食ってんだ。どっか行けコラ」

「冷たいこというなよりユンケル、俺と君の仲じゃないか」

「生憎俺とてめえの關係は友達未満他人以下だ」

「えー、メル友ですらないのー?」

「一方的に送られるだけの關係はメル友とは言わねえだろ。だいたい『シンデレラ的な話』強引に打ち切ったこと、俺はまだ許してねえからな」

「飽きたんだから仕方ないじゃん」

「世の作家共に土下座でもしてろ」

迎えた昼休み。

いつもなら多くの生徒が行き交う食堂だが、どの学年も特別試験に備えてクラスで話し合い等をしているのか、俺とリユンケルの2人しかいないというガラガラ具合だ。ちなみに話し合いなんかに参加しないであろう六助や満足先輩は、そもそも食堂を利用しない。

「それにしても、特別試験が迫ってるのに随分と余裕そうだね君は」

「あ?んなもん興味ねえし俺の知ったことじゃねえよ。……それを言うならてめえはどうなんだ? Aクラスの切り札様が俺と無駄話に興じてる暇なんてあるのか?」

「今頃教室では有栖が試験までの期間に何をするか、一人一人に細かく指示してるけど俺には必要ないからね」

「クク、誰が相手だろうがどんな種目だろうが負けねえってか。せいぜい図に乗って足鞠われねえよう気をつけるんだな」

恐るべきペースで焼き魚定食を食べ終えたりユンケルはさつさと席を立ちその場を去ろうとするも、何故か急に歩を止めた。

「それで本条、今回テメエらの標的はCクラスか？綾小路に40票近く入れたのは、消去法でテメエらしいねえだろうからな」

「うん、正解。君達Dクラスとしては願ったり叶ったりでしょ？二重の意味で」

指名するクラスはくじで決めるそうだけど、おそらくどのクラスがクジを引き当てようとA対C、B対Dの組み合わせになるよう根回ししている筈だ。先日のやり取りからしてコージも受けて立つつもりみたいだし、先日の件を引き合いに出せば正解ちゃんや石崎君は容易に懐柔できる。

「二重の意味だと？あたかもDクラスがBクラスと戦いたがってるかのような口ぶりじゃねえか。全ての能力が平均以上の、結束力では抜きん出ているBクラスとな」

「Dクラスの強みを活かすならどう考えてもB一択でしょ。……もつとも、他でもない君が動かなきゃ絵空物語になるけどね」

「……はっ、バカバカしい」

振り返ることもせずその場を去るリユンケルの背を見届ける。……俺に嘘は通じないんだよ？まあ、本人すら自覚してないだけかもしれないけどね。

授業は恙無く終わり、放課後に。

「それでは多目的室に行つて来ますね。まだルールの把握ができていない方は配布されたマニユアルを読み込んでいてください。真澄さんと橋本君は私が帰るまで待つていてくださいね」

「はいはい」

「Cクラスの偵察はしなくていいのか？」

「あまり効果が無いと思うので推奨はしませんが、したいのならご自由になさってください。精神的負担をかけられるかもしれないし」

「有栖、俺はー?」

「桐葉は試験当日までご自由にしてください。橋本君に1からチェスを教えたり等、放課後しばらく私は色々忙しくなると思いますので」

「はいよー」

有栖を見送つてから帰り仕度をしようと思始めると、マスミンが胡乱な目でこちらをじつと見てくる。

「どしたのマスミン」

「アンタさ、ちよつとは焦つたりとか妬いたりしないの?」

「?」

「いやそんな『何言つてんだこいつ?』みたいな顔されてもね……いい?という理由かは知らないけど、坂柳は今日からずっと橋本にマンツーマンでチェスを教えるつてのよ?」

「そりや『種目』を自由に選べるなら有栖がチェスを選ばないわけないしね。このクラスでもとにもチェスを指せるのは俺と有栖だけだけど、俺は間違いなく敵さんの選択した種目に放り込むだろうし、誰かもう1人指せるようにならないと」

「いやそんなことはどうでもいいのよ。……アンタ、坂柳が好きなんじゃないの?」

「ん?大好きだよ?」

少なくとも両親と天秤にかけられても、特に悩みもせずあの娘を選んで両親を見捨てるくらいには。

「私の言いたいのはそのんな子を、こんな胡散臭さが呼吸してるような奴と2人きりにしていいのかってことよ」

「ストレートに酷いな神室ちゃん……」

「別に大丈夫でしょ。自己保身にかけては学年1の橋本が、一時の気の迷いで不埒な真似なんてしないよ」

「褒めてないだろそれ」

「……一緒にいる内にこいつに目移りするとか危惧したりしないの?」

「有栖が? 橋本に? ……ないない、天地がハンドスプリングしてもあり得ないよ」

「俺だつて願ひ下げだけどそこまで言うか!?!」

橋本に対する有栖の評価は「使い勝手の良い手駒」……それ以上でも以下でもない。友達以上の関係どころか友達になることも多分ない。

仮にそういった危惧をするのであれば、該当するのはむしろあれだけ倒すことに執着しているコージーだろうね。

彼に懸想……というか重い感情を向けている子は最低でも既に3人はいることだし、その上有栖までそうならさぞや混沌とした修羅場が生まれて面白……おつといけ

ないいけない。懸想してる相手が他の人に構ってたら、立場上俺は焼き餅の1つでも焼いとかなきやいけないんだよね。でないとまた有栖が拗ねちやうだろうし。

……有栖が俺を捨てる筈がないと高を括っているだけなのか、それとも仮に捨てられようがどうとも感じないから焦りたくても焦れないのか判別できないな。改めて思うけど、ストレスは感じなけりや感じしないで不便だね。

というわけで1人寂しく下校タイム。

Cクラスはケン坊がいるから多分バスケを種目に選ぶだろうということで、今頃猛練習に励んでいるファルコン達を手伝っても良いのだが、生憎と俺は俺で忙しいのだ。9割義理とはいえホワイトデーのお返しの手配や、4日後に迫った有栖の誕生日用のプレゼント製作、そして結局3月14日まで待たされた茜さんの告白の返事に対するお祝い or 慰めばーちーの準備と、忙しすぎてしばらくは夜も眠れない。いやまあ夜は寝るけ

ど。……おや？あの自分大好きオーラを振り撒きながら優雅に練り歩いているのは、

「おお、マイフレンド桐葉じゃないか。これはまた奇遇だねえ」

「よう六助。クラス内投票で脱落するんじゃないかと少し心配だったけど、乗り切れたように安心したよ」

「はっはっは、無用な心配だったねえ。不要なゴミを切り捨てる試験でパーフェクトなこの私がデリートされるわけがないだろう？」

よく言うよ下から4番目だったくせに。

「相変わらず自由人なように何よりだけどさ、やつぱ今回の試験も手を抜くつもりかい？多分俺達Aクラスと当たるから、下手したらこつこつ貯めたクラスポイントが半分以下になっちゃうよ？」

「司令塔以外は何をしようと退学しない以上、私が手を貸す理由は無いさ。プライベートポイントにしても、どうしても必要というわけではないしね」

へえ、0ポイント生活になっても構わないのか。ボンボンなのに儉約を苦しめないんだ。ボンボンなのに。

「……しかしだマイフレンド、もし君と相見えることになればその限りではないよ。そろそろ体育祭での借りを返しておきたいからね」

常日頃の憎たらしいほど優雅な佇まいからは想像もつかない、凶暴凶悪な笑みを向け

る六助。感じる圧はみやびん先輩とは比べ物にならず、下手すれば綾小路パピーに匹敵しかねない。もしかして挑戦状のつもりかな？ 凄く心惹かれはするけど、この試験は有栖の自由にさせたいしー

「ふーん……俺としては望むところだけど、今回は有栖に全部丸投げしてるからなあ。俺も有栖に言つとくけど、そっちもコージーやホリリンに伝えておいてよ」

「御安いご用さ。クールガールはこの期に及んで私に力を貸せと呼び掛けているから、このことを引き合いに出させてもらおう」

もし戦う相手が俺じゃなかったら容赦なく手を抜くけど、そのときは読みを外した司令塔の責任って訳ね。

読み、か……少し面白い余興になりそうだ。

総合力で劣るCクラスを指揮するコージーとしては、是が非でも俺に六助をぶつけようとするだろう。そのためには有栖の采配を読みきらなければならない。

こちらがヒントを撒いたせいかもしれないが、今のところ有栖の企てた策略をコージーは全て看過しているからね。有栖が読み勝ち俺と六助のマッチアップを外すのか、それともコージーが読み勝ち俺に六助をぶつけられるのか……それが勝敗の分かれ目になるかもしれないね。

happy birthday dear 有栖

特別試験で戦う相手は当初の予定通りCクラスとなった。有栖曰くクジを引き当てたのは金田君らしいけど、もしコージが引き当てたら俺達を指名したことをクラスにどう言い訳するつもりだったのか少し気になるなあ。

それはともかく2日後の昼休み。独裁者有栖は試験に向けてクラス全体での打ち合わせなどする筈もなく、今日は（というから昨日から）いつもの5人と食堂でご飯タイムである。

「へえ、Dクラスの子達がBクラスに嫌がらせね」

「ああ、石崎や近藤や小宮、それにアルベルト……Dクラスの中でも荒事が似合いそうな奴等が、Bクラスの別府とか中西とかに執拗に絡んでるのを見たぜ」

「それはそれは……まるで1学期の頃の彼等を思い出させますね」

もはや性分なのか、橋本は相変わらず使い道があるかも不明な情報収集に勤しんでいるみたいけど、今回戦う相手でもないクラスのことなどどうでもいいのか、マスミンとファルコンは黙々と食事に勤しんでいる……いや、ファルコンはそもそも基本的に寡

黙だし、マスミンはただ橋本が嫌いなだけかもね。

「金田君が指示したとは思えないし、誰の差し金なんだろうな？」

「実行者はかつて龍園君の手足となつて動いていた方々のようですし、格上クラス相手に後が無くなつて彼のやり方をただ猿真似しているだけ。もしくは……」

「ようやく龍園が重い腰を上げたか、だな」

橋本はリユンケルのことを買っている節があるので、妙に楽しそうだねえ。そしてその予想はここ最近の石崎君の様子からして、たぶん当たっているだろう。彼にしては意外にもちゃんと顔に出さないようにしていたが、残念ながら俺の眼を誤魔化すことはできない……彼の内心は親を見つけた迷子の子どもかかつてくらい喜びで満ち溢れていた。

リユンケルが裏で糸を引いているなら、目に見えて行われている嫌がらせはおそらくブラフ……Bクラスに圧をかけて警戒を引き上げさせ、本当の狙いはおそらく別のところにあるとみて間違いないだろうね。

「まあ今回戦うわけでもないクラスのことあれこれ探るよりも、目の前の相手に集中すべきでしょ。例えば橋本、根気強くCクラスの偵察してたけど何か収穫はあったの？」
「残念ながら不発だ。盗み聞き対策にケータイでやり取りしたりと、あちらさんもバカじゃないらしい」

「そうですか。元々期待してませんが、やはり無駄だったようですね」

「相変わらず容赦ねーな姫さん……」

がつくりと肩を落とす橋本。以前は他クラスの情報収集は主にこいつの役割だったのだが、先日の件で結構な範囲から滅茶苦茶嫌われているだろうし、その役割は今後彼女に移っていくだろうね。

「それにCクラスの方々が選んできそうな種目は、既にある程度は予想できています」

「へえ、流石だな姫さん。アイツらがいったいどんな種目で戦うつもりなのか教えてくれよ」

「そうですね……まず学業に関する種目はきつと選ばないでしょう」

「だろうな。クラス間のアベレージは天と地ほど離れてるし、うちのトップ層と互角に渡り合えるのはせいぜい堀北、幸村、高円寺の3人だけ。高円寺は戦力としてカウントできないし、少数の戦いに絞ったところで本条を投入されたら勝ち目無し……そんな勝ち目の薄い博打を仕掛けるくらいなら、一点特化の種目で来るだろうな」

「ええ。須藤君のバスケ、小野寺さんの水泳、三宅君の弓道などは確実に候補でしょう。……あとは外村君という方がコンピュータに精通しているそうなので、もしかしたら種目に加えてくるかもしれませんね」

「外村って、あの小太りの眼鏡か？そんな影の薄い奴の情報までよく集められたな」

ひとえにあの子のお陰だろうね。先日の件で橋本は他クラスの生徒達からの敵意と

警戒を集めたことからそろそろ情報収集役には適さなくなっているため、今後も彼女に頼ることは多くなりそうだ。

「橋本君はいちいち他のことを気にせず、チエスの上達だけに集中してください。今のままじゃとてもお話になりません」

「面目ねえ……」

「ことあるごとにクイーンに頼り過ぎです。最強の駒と言っても、桐葉と違って無敵ではないんですよ？」

ねえ有栖、俺だって無敵ではないからね？

さらに2日後、3月12日の金曜日。

いつものように4時半に起床し、いつものように決められたルーティンをこなしてから家を出る……と言いたいところだが、今日はいつもより30分早く外出する。長期休暇だろうと元旦だろうと基本的にルーティンを崩すことなどないけど、今日この日だけ

は別だ。

俺はエレベーターで13階まで上がり、目的の部屋まで歩きチャイムを独特のリズムで連打する。

ピーピーピーピーピーピーピーピーピーンポン……

もしものときのために合鍵は貰っているが、勝手に鍵を開けて無遠慮に侵入するのは何か犯罪的だし、そもそも風情も何もあつたものじゃない。

思いつきでやったモールス信号風チャイムから俺のメッセージを受け取つたのか、自分の部屋のチャイムでこんなアホな遊びをするのは俺以外ありえないと判断したのか、何の確認もせず無警戒に解錠されドアが開く。それと同時に俺は懐から持てるだけのカサブランカを取り出し、辺りいっぱい舞い散らす。

花言葉は……祝福。

「good morning、そしてhappy birthday有栖!あなたの生誕に祝福を」

その場にかしずき彼女の手の甲に口付けをする。

「おはようございます、桐葉。あの……お祝いでいただけるのはありがたいのですが、毎年毎年無駄にドキザな演出を用意するのはどうにかありませんか? 見てるこっちが恥ずかしくなってます」

共感性羞恥からか顔を赤らめながらモジモジする有栖だけど、ぶっちゃけこういう反応を見たいからやってるんだけどね。あくまで個人の主観だが恥ずかしがる有栖ほど見ていると幸せな光景はそうそう無いので、彼女には悪いけど来年も。

そんな邪な感情を見抜かれたのか、有栖はリングのような顔色のまま俺の頬を力の限り引つ張った。こんな可愛らしい反応をすることがここ最近外道の限りを尽くしてきたのだから、世の中わからないものだね。

「まったく……朝から無駄に疲れさせないでください」

「ごめんごめん、誕生日パーティーも開きたいけど今は特別試験中だから、後日祝勝会もかねて開くつもりだからさ」

「誰もそんなこと気にしてませんよ、もう……」

会話の噛み合わせない俺に対して呆れたように溜め息をつく有栖。いやでも君、開かなかったら開かなかつたでちよつと落ち込むでしょ？結構面倒な性格してるんだから。

「桐葉？私に何か言いたいことでも？」

「最初にあつた頃より一段と綺麗になつたなーって」

「……見え透いたお世辞ですね。この私がそんなもので絆されるとでも？」

平静を装っているつもりの有栖に、俺は満面の笑みを浮かべて手鏡を渡しながら、耳を指差してジェスチャーする。有栖が訝しみながらも鏡越しに自分の耳を見て……

真つ赤になつてゐることにようやく気づき、膨れつ面を俺に向けてくる。

「…………意地悪」

「お前に言われちゃおしまいだよ」

はっはっはと豪快に笑つてやると、有栖は拗ねたようにそっぽを向いた。

…………有栖は普段から冷静で冷酷に振る舞う。いくら俺と2人きりだからとはいえ誰が見ているかわからない状況では、こうも容易く感情的な面を表に出すことはそう無い。こういうときは大抵、何かを抱え込んでいる。

「ねえ有栖」

「今度は何ですか?」

「コージーには勝てそう?」

「…………」

俺が何気なく問いかけると、有栖は表情を強ばらせ押し黙る。四六時中余裕に満ちた笑みを絶やささないこの子のこんな顔、ランス辺りに見せれば下手したら偽者を疑いかねないだろうね。

まったくもつて何の興味無いけど、有栖の話すことだからと一応ちゃんと聞いておいたコージーのルーツ…………後天的な天才を作りだすための施設、ホワイトルーム。

自らの理念を真つ向から否定しようとする施設を有栖が許容する筈もなく、その施設

の最高傑作たるコージに打ち勝つことが幼き日よりの宿願だそうだ。何故そこまで固執するのかは知らないけど、有栖にとつて大事なことなら無関係の俺がとやかくいうことではない。

有栖が今抱えているものはおそらく不安……本当にコージに勝つことができるのかという不安。

最も身近に俺がいるのだから、自分と互角程度の相手にこの娘がそこまで執着するとは思えないので、つまりコージは俺や有栖をも凌駕する怪物なんだろう。

未だ俺にすらちゃんと勝てていないにもかかわらず、俺よりも強大な相手と小細工抜きの一騎討ち……不安に思わない筈がない。

「……ええ。勝ちます、勝ってみせます。天才とは教育ではなく、生まれた瞬間に決まっているものだと、証明して見せます」

しかしそれでも有栖は前を向いた。多少の逡巡を巡らせはしたものの、己の信念を貫かんとするこの娘の覚悟は欺瞞でも虚勢でも無い。……そういうところ大好きだよ有栖。

「その意気やよし。そんな勇猛果敢な有栖ちゃんに、誕生日プレゼントをお渡しします」

「……あのですね桐葉、私が結構真剣に決意表明した直後に、そんな緩いテンションでプレゼント渡しますか普通」

「そんなもん関係ありません。第一シリアスな空気は好きじゃないんだよ」

不満げに頬を膨らます有栖に近寄り、トレードマークであるベレー帽に懐から取り出した物を取り付ける。

「え、あの、桐葉？」

「……はい、これでオーケー。よく似合ってるよ」

「これは……ブローチ？」

有栖がベレー帽を取って確認すると、紫色の花と赤い楕円の石がデザインされた、ガラス製のブローチが取り付けられていた。

「意匠はアネモネとコーラル。どちらも3月12日の誕生日と誕生日石だよ。いらないうら別に捨ててもいいけど、作るのに3日かかったから大事にしてくれると嬉しいな♪」

「作るのにつて……これ、手作りなんですか？えと、布製ならともかくガラスとなると、ガラスを加工する技術とか道具とか、色々必要になりますよね？」

「ネット通販でバーナーとか全部注文して、ここ数日帰ってからひたすら製作に取り組んだ。初めての取り組みだから多少苦労したけど凄く楽しかったな」

「特別試験前にガラス細工に夢中になる生徒は、後にも先にも貴方だけでしようね……でも、ありがとうございます。大切にしますね」

呆れたような溜め息を吐きつつも、幸せそうな顔で大事そうにブローチを握りこむ有

栖。今日1日中ずっと見ていたけれど、もうすぐ学校だしそういう訳にもいかないよね。残念。

「コーラルの石言葉は『幸福』と『聡明』。そして紫のアネモネの花言葉は……『あなたを信じて待つ』」

「！」

「コージーがどれだけ凄かろうが、お前が負けるなんて俺は微塵も思っていないからね。ボロクソに負かしてあのスカした男に吠え面かかしてきなよ」

「……ふふ、綾小路君も貴方にはスカしてる、なんてきつと言われたくないでしょうね。何から何までキザにも程がありますよ」

そう言つて可笑しそうに笑う有栖には、先ほどのような影は見えなくなっていた。よかつたよかつた。

……今回の試験の結果がどうであれ、有栖は1つ殻を破ることができるともかもしれない。

普段の傍若無人な振る舞いからよく誤解されがちだが、実は有栖の心はそんなに強くない。強大過ぎる頭脳と信念に対して、精神は肉体ほどではないが脆弱な部類だ。

明確な証拠を挙げるなら俺達が何度もやっているチェス……俺の棋力は幼少期よりひたすら研鑽を重ねてきた有栖よりやや劣る。本来後攻スタート程度のハンデで1度

も勝てないなんてある筈がない。

にもかかわらず勝ちきれないのは負けることを恐れているのではなく、負けることで俺が彼女のもとを去ることを恐れているから。

あれは忘れもしない中一の春か夏か秋、もしくは冬。俺と有栖の間で結ばれた約束事……公平な勝負で有栖が俺に勝てばどんなことがあるかと一生有栖に従い、逆に俺が勝てば二度と有栖には従わないし仲良くしない。

……今にして思えば取り返しのない約束を結んでしまったものだが、あの頃はこの子とここまで仲良くなるとは思ってたからまあ仕方がないね。勿論この約束を反故にする気は一切無い。一度した約束は絶対に守るのが俺の美学。有栖も長い付き合いでそれを重々承知していて、そのためリスクのある勝負に出ることができず、結果今の今まで勝負を先伸ばしにしているのが現状だ。

その勝負弱さを克服するには、今回の一騎討ちはまさにうってつけ。幼少期より勝つことを目標にしてきた相手との、一回限りの真剣勝負。（おそらく）格上であるコージに勝つには、リスクを恐れない攻めの姿勢が必要不可欠になってくる筈だ。

有栖がそれを乗り越えられたなら、長く続いた俺との戦い終止符を打つのもそう難しくはないだろうね。

そしてその一方……もし有栖がコージに負けたとすれば、それはそれで収穫だ。俺

は有栖に負けちゃいないが勝つてもいないから、有栖はまだ一度として挫折をしたことがない。

有栖の持論では真の天才は挫折をしないものらしいが、それに対してだけは賛同できない。

挫折を知らない天才などただの未完成品だ。人は挫折を経験することで、敗北の恐怖を知り勝利に飢える。

そしてその飢えこそがさらなる高みへと駆け上がるために必要不可欠なものであり、負の感情を失ってしまったままの俺では、手に入れることのできないものだ。

えんだー

3月14日の日曜日、ホワイトデーの日を迎える。

俺はいつものようにルーティンをこなした後、用意したお返し（100%既製品）をポストに投函すべくロビーに向かう。……有栖にはともかく、一応は世話になった礼という名目で受け取った（正直有難迷惑な）義理チョコへのお返しは必要なのかと少し疑問だけど、まあ貰った以上は返しておくのが人の道というものだろう。

「……おや、コージに卍解ちゃん？日曜の朝だというのに早起きだね」

「あ、おはよ本条君」

「おはよう。いつもはそうでも無いが、ロビーに来た理由はお前と同じだ」

コージは俺が抱えるクツキーの山を見て、ホワイトデーのお返しをポストに投函しに来たと察したらしい。

「うーん……念のため言っとくけど、俺は周囲の視線が気になって直接渡すのを躊躇っているとかじゃないよ？」

「……何故わかった？」

「合宿でも一緒だったわけだし、君が人付き合い苦手なことなんて嫌というほど知ってるからね」

今日が平日だったらこの子はきつと、いつ渡すだのどういう順番で渡せばいいだの、凄まじくどうでもいいことでさぞや思い悩んだことだろうね。……少し見たかった気もするなあ。

クラスメイトのポストにクッキーを無造作に放り込みながら、俺は少々気になっていたことを卍解ちゃんに尋ねる。

「そーいや卍解ちゃん、君達今度はDクラスに嫌がらせされてるんだって？次から次へと貧乏くじを引かされて大変だね」

「そーいえば先日そんな話をしたな。あれからどうなったんだ？」

「えっとね、綾小路君達に話した後すぐに全員から話を聞いたんだけど、そのときは柴田君から聞かされていた3人だけだったの。でも……」

「でもっ？」

「翌日一気に被害が増えて、外にも男女で3人ずつ同じように付け回されたり声をかけられたって……」

かつてCクラスが二学期末あたりに受けていた嫌がらせと似たような内容だね。変更点があるとすれば徐々に標的を増やしてくるくらいかな。

「後をつけてるのは誰かわかっているのか？」

「分かっているのは石崎君、小宮君、近藤君、山田君、伊吹さん、木下さんの6人かな」

「うーわ、こりやまた荒事担当ばかり。身も心も優等生なBクラスの子達はさぞかし不安だろぅね」

「被害が拡大する前に手を打たないのか？」

「うーん……暴力を振るわれたわけでもないし、今のところどうにもできないんだよね……とりあえず実害が出るまで我慢してもらってる。あつ、勿論心のケアは怠らないよ」

「そうか……まあ今はそれでいいんじゃないか？学校に訴えたところで、現状ではDクラスに罰は下らないだろうし」

「かといってDクラスに直接文句言いに行けば、効果的だと自白してるようなものだし、無駄に付け上からせちやうよね」

「うん、そうだね」

俺達が同意すると亘解ちゃんは満面の笑みを浮かべるが、残念ながらこの一連の嫌がらせは確実にブラフと仕込みだろう。以前似たようなことをされたコージはもう気づいている筈だけど、亘解ちゃんに伝えるつもりは無いらしい。何か不都合があるのか……わざわざ指摘してあげるような相手ではないと判断しているのか。

「それじゃあ投函作業も終わったし俺はもう帰るね、馬には蹴られたくないし」

「う、馬って……違うからね本条君! 私は別に」

「俺はまだ何も言っていないよ?」

表面上はとぼけつつも、右手の人差し指で右目の少し下の辺りをトントンと叩きつつ
卍解ちゃんに向かって微笑むと、俺に嘘や隠し事や隠し事ができないことを思い出し、
顔を真っ赤にして俯く。……初々しい反応している卍解ちゃんには残念なお知らせだ
ろうけど、たぶんコージーにはバレバレだと思うよ?そして可哀想なことに、彼はそれ
を好都合と感じる人種なんだよね。

「にしてもコージー、ちよつと暢気過ぎない?」

「……暢気? どういうことだ?」

「司令塔の自覚がまるで無いってこと。例えば卍解ちゃん、今回もしウチのクラスと戦
うことになったとして、試験前に“情報泥棒”、“歩くプライバシーの侵害”との呼び
声の高い俺に関わりたいと思う?」

「え、ええと、その……ちよつと遠慮したいかな」

優しさが服を着て歩いているようなこの子でもNOと言うくらい、大抵の相手からは
好き放題情報を抜き取れる俺と接触するリスクはべらぼうに高い。

……まあ、その数少ない例外の1人がコージーなんだけど。この子ときたらどうでも

いいことはすぐに顔に出すくせに、自身にとってアキレス腱になりえることは一度として悟らせないんだから。

「オレが今回司令塔になつたのは退学のリスクが無いからで、種目の内容は全て堀北に任せてるからオレから抜き取れる情報はたかが知れているからな」

「ふーん……司令塔の関与についてもかい？」

「ああ」

となると、一騎討ちの内容に関しては有栖に一存するわけか。……どんな種目で戦おうと有栖に勝てるつもりかい？ 怖いねえ。

「まあ健闘を祈るよ、有栖はすごく強いし怖い子だから、どんな手を使っても勝ちに行くことをお薦めするよ」

「どのように戦うかも堀北に任せている。確実にお前達Aクラスと戦えるよう事前に一之瀬達に根回ししたりと、あいつには何か勝機が見えてるのかもな」

何か白々しいことをのたまうコージーに、俺は片手で手を振りながらロビーを後にした。……しらばっくれ方は一向に成長しないなあ。何と言うか、とりあえずホリリンに押し付けておけば誤魔化せれると思ってるよねあの子。

3月15日月曜日。

今日は対戦相手の指定した10種目が発表される日。

いつものように有栖と2人で登校していると、通学路の途中で何の偶然かまたコージート、そしてさらに偶然が重なったのか茜さんとコランダム先輩に出くわした。……はいそこの紫団子、露骨に嫌そうな顔しない。

3年生の2人はともかく1週間後激突するクラスの、よりにもよって司令塔同士の接触など第三者に見られたら余計な勘繰りをされるだけなので、はてさてどうしたものかと逡巡していると……

「堀北君、ここは2手に分かれましょうか」

「そうだな、試験前に敵対クラス同士が接触するのは健全とは言えん。色々と話すこともあるだろうし、俺と綾小路、橘と本条達……親交のある組み合わせでそれぞれ登校しよう。お前達もそれでいいか？」

「ああ」

「ええ、構いません」

「オツケーっす」

特に断る理由も無かったので俺達はコーギー達から距離を取る茜さんについていく。しかし少し意外だったね。以前までの茜さんなら、まずコランダム先輩の意見を聞くとうとしていたのに。それに2人とも……これは期待できそうだな。

「ええと、2人とも特別試験の方は大丈夫ですか？」

「ええ、勝利する算段はついていきます。……先輩方こそAクラスで卒業できそうですか？」

「来週の結果次第ですが、必ず勝って見せます。……本条君が資金提供してくれていなかったら、苦しい戦いを強いられていたでしょうが。あらためてお礼を言わせてください」

「どーいたしました。……何だったら踏み倒しても別にいいんだよね？」

「そういう訳にはいきません。必ず多少色をつけてお返しします」

正直いらんだけだなあ……ここ最近ポイントを利用した策略が多かったから、そろそろマンネリなんだよね。かと言って死蔵させるのも何だか勿体無い気もするし、どうしたものかね……？

「しかし3年生だというのにまだ登校しなきゃならないんだね。進学にしろ就職にしろ、普通の学校ならとつくに休みになつてのにな」

「きつと何か事情があるのでしよう。ですが上級生が下級生に伝えられる情報は色々

制限されるようですので、きつとそれについても……」

「ええ、在校生に伝えることは禁じられています」

茜さんが何やら申し訳なきそうにしているが、俺も有栖もネタバレを蛇蝎の如く嫌っているので一向に構わない。いずれわかることならそのときまで待つ所存だ。というかそんなことよりも……

「ねえねえ茜さん、昨日告白の返事もらったんでしょ？どうだったの？」

「うっ……やっぱり答えなきやだめですか？」

「駄目」

くだらねーことだと思い悩んでうじうじしてたこの人の背中を蹴り飛ばした功労者として、俺には結果を聞く権利がある筈だよな。

「ええ、と……そのですね……」

両手の人差し指をつんつんさせ、ジョナゴールドのように真つ赤になりながらモジモジする茜さん。どうやら答えるのを恥ずかしがっているようだが、こんな反応をされてはどうだったかなんて一目瞭然……いやまあぶっちゃけ、出くわしたときにはわかってたけどね。何か見るからに幸せそうなオーラが具現化しそうだったし。

「あの……えつと……堀北君と交際することに、なりました」

「えんだあああああああああああ！」

「ああもううるさいですよっ!? そうやって茶化されるとわかってたから言いたくなくなつたんですっ!」

「これが茶化さずにいらいでかつてね。ねーねー茜さん、コランダム先輩のこと何て呼ぶようになったの?」

「うえっ!? な、何を言ってるんですか? 呼び方なんて別に!」

「さつきコランダム先輩の名前呼ぶ寸前口の形が“あ”だったのを、咄嗟に“お”の形に切り変えてましたよね? 名前で呼ぶことになったのをまだバレたくないから慌てて取り繕ったように見えたんですけど、そこんどこどうなんですか?」

「ああああああああもおおおおとおおっ! 何でもかんでも見抜かないでくださいっ!」

その後も俺に散々玩具にされてむきーつてなっていたものの、それでも茜さんは幸せそうだった。今の彼女には少し前まで抱えていた罪悪感や後ろめたさといったものが、綺麗さっぱりなくなっていた。コランダム先輩が彼女の想いに応える際どんなマジックをしたか多少気にはなるけど、そこを詮索するのは無粋というものだろう。

「茜さん」

「……なんですかデリカシーの無い本条君」

「おめでとうございます」

「……はあ、まったく。散々からかった後にそれですか。結局最後まであなたはきつと、困った後輩のままなんでしょうね」

そう言っつて茜さんは可笑しそうに笑う。

……以前はくだらない思いつきで、この人が傷つき苦しむ様を見殺しにしたときは何も感じなかったし、どの面下げてと言われるかもしれないけど、今は心から安堵している。

この人の笑顔が失われなくて良かったと。

そう思えるくらいには、俺はまだ人の道を外れてはいないらしい。

「……」

「っーん」

「……なあ有栖、いい加減機嫌直してよ」

「何のことですか？ 貴方と橋先輩を慕っているのはわかっていきますし、それをとやかに言うほど私は小さくありません」

「じゃあその膨れっ面は何なのさ？」

「口にティッシュペーパー詰めてるだけです」

「どんな言い訳だよ。流石に苦しすぎるよそれは」

朝のホームルームが終わり、対戦相手であるCクラスの選んだ10種目が発表された……が、意外とやきもち焼きの有栖はさつきまで俺と茜さんが自分を放置して楽しくじゃれ合ってたのが大いに不満らしい。この様子だとこれから1週間駒である俺達はどう行動するかの指示は、昼休みか放課後まで持ち越しになりそうだ。

あとマスミン、そんな露骨に気色悪そうな顔しないの。後で何されても知らないよ？ ちなみにこちらの選んだ10種目の内、有栖にとって本命であるチェス以外は司令塔の関与を最小限まで抑えている。一方そのチェスは逆に司令塔の関与をギリギリまで大きくしている。おそらくコージーに対する隠れたメッセージ……この種目で白黒つけようという挑戦状だね。自分だって他の相手にうつつを抜かしてるんだから拗ねるんじゃないよまったく。

復活の平田（瀕死）

特別試験までいよいよ残すところあと数日。

我等がAクラスの学友達は有栖の指示に従い、他クラスに情報が漏れないよう研鑽を積んでいるらしい。

Aクラスが選んだ10種目は『チェス』、『フラッシュ暗算』、『囲碁』、『現代文テスト』、『社会テスト』、『バレーボール』、『数学テスト』、『英語テスト』、『大縄跳び』、『ドッジボール』。

有栖は当日に選出する5種目をクラスの誰にも話していないが、運動系の種目はCクラスに学力強化に集中させないためのブラフ。一部を除いたクラスの大半が休み時間も必死で学業に励んでいるところからも、うちの選ぶ種目は堅実に勝ちに行くため大半がペーパーテストだろうね。

あ、あと橋本が有栖にチェスの指導を受けているせいかな、なんか日に日にやつれていつている。あのDS娘のことだから、その指導内容はきつと苛烈を極めているんだろ
うね。

一方Cクラスが選んだのは『英語テスト』、『バスケット』、『弓道』、『水泳』、『テニス』、『卓球』、『タイピング技能』、『サッカー』、『ピアノ』、『百人一首』。

このうち間違いなくブラフだとわかるのはサッカー、英語テスト、そしてテニスだね。うちのクラスに学力勝負を挑むからには少なくとも最上位の面子で固めなきや話にならないけど、六助はやる気無いし平田君も今は役に立ちそうにもない。

となると期待できるのはせいぜいホリリンと幸村君、王ちゃん、櫛田ちゃんくらいだけど、この4人だと俺や有栖が出なくともウチのトップ層が相手じゃ分が悪い。それにうちのクラスが学業系を多く選ぶのは向こうも把握してらるだろうし、戦力をつぎ込んでまで博打を打つべきではない。

テニスに関しては向こうにはテニス部がないのに対し、こちらには（ほぼ幽霊部員とはいえ）実はテニス部だった橋本がいる。橋本をチエスの種目に出すことはバレてない筈だし、わざわざ余計なリスクは抱え込まないよね。

そして最後にサッカーだけど……あちらさんが人数の多い種目を選ぶわけないでしょ。下手したら俺が2種目出られるようになつちやうかもしれないのに。

スポーツ競技のうちバスケはまず間違いなく選ばれるので、マスマンとファルコンを含む肉体自慢の5人がCクラスの探りに注意しつつ、暇を見つけて練習に励んでいるそうだ。1度練習の様子を見学しそれを踏まえて評価すると、ケン坊が出てきたら流石に

厳しいけど、そうでなければ十分勝ち目があると見ていい。バスケだからケン坊が出る、なんて安直な考えをしがちだけど、彼の身体能力なら（俺が出なきや）どのスポーツでも勝ちを狙えるから、あえて彼抜きで戦うという戦略に備えてるのかな？……いや、有栖の性格ならケン坊を参加させた上で勝ちを狙うかもね。

まあそんな感じで、クラスが一丸となつて……なんて風には口が裂けても言えないものの、1人1人が打倒Cクラスを掲げて頑張つてる中、約1名だけ例外が存在した。

「ねえ有栖」

「なんででしょうか？」

「戸塚が退学してからずっと意気消沈してたランスが、昼休みの後から活力とお前への敵意がある程度取り戻してるみたいんだけど、今度は何やったのさ？」

「……さあ？ 私は特に心当たりはありません」

「ふーん……となると考えられるのは戸塚の件に関して、お前に復讐する算段がついたのかな？」

「でしょうね。あくまで推測ですが、Cクラスの方が葛城君と内通し、私が本命にと考えているであろう種目をリーク、そして試験でわざと負けるようにお願いしたのでしよう」

種目のリークはともかく、試験で負ければどうしてもクラス内での地位が下がる。第

一普通そんな裏切り行為よほどの見返りを用意しなければ誰も引き受けないだろうが、有栖に強い怒りと恨みを抱えている彼ならば、損得勘定を一切抜きにしてそれを承諾してもおかしくはない。既にクラス内での地位は一番下で、これまでのリードから今回の試験で惨敗しようとして下位クラスに落ちることはなく、その一方で独裁を貫いた有栖の評価はかなり下がることになる、ランスにとつては報復するまたとない機会だ。

「それでどうすんのさ？情報リークはあまり大した問題じゃないけど、ランスは本命種目であるフラッシュ暗算に出す予定なんですよ？あれ出来るの俺とお前を除けばランスと田宮だけだし、田宮に命運を託すのはCクラス相手とはいえちよつと無謀じゃない？」

「ふふ、心配なく。対処法はもう考えてありますよ。……どれだけ私が憎かろうと、彼は他のクラスメイトを見捨てることなんてできません」

ああ、手抜いたら以前お前に従つてた奴何人か退学に追い込むつて脅すのか。よく満面の笑みでそんなドス黒いこと考えられるなあ。

……しかしCクラスも随分と浅はかな謀略をしかけたね。俺がいる以上ランスが何を企もうと隠し切れるわけではないし、そうでなくても有栖なら試験当日までには思惑を見抜いただろう。死ぬほど用心深いコージは勿論、この1年で随分成長しかなり思慮深くなったホリリンが発案したとも思えない。となると誰かの独断だろうか？……

まあどうでもいいか。その程度の相手にかかずらっているほど、暇をもて余してるわけでもないしね。

試験前日の放課後、俺はケヤキモールにてそろそろ切れそうな日用品を買い込んでから寮に帰る途中、約1km先のベンチでコージーと平田君が並んで座っていたのが目に止まった。

特別試験前にあの状態じゃただの足手まといだから説得でもしているのかな？例の追加試験後からCクラスの女の子達が何度も励ましの言葉をかけても梨の礫だった彼を、コミユ力が下の下の下のコージーがちゃんと立ち直らせるのか、少し気になったので近づいてみると……

「僕の友達は一飛び降り自殺した」

どういう訳か平田君が凄く重い過去を語っていた。

そうなった経緯はまったくわかんないけど、話を簡潔にまとめるなら、虐めに遭った

友人が飛び降り自殺した後も標的が別の人間に移っただけで、それに絶望した平田君はリユンケルよろしく恐怖と暴力でクラスどころか学年全体を支配して無理矢理虐めを無くそうとした。で、最終的にはその地域ではちよつとした事件扱いされるくらい破綻した……と。

正直まるで興味は無いが、彼がここまで焦燥している理由はわかった。山内君はクラスを裏切つて俺達と共謀していたことが明るみになったことで、ほとんどのクラスメイ卜から非難されたことだろう。そして敵意をぶつけられながら脱落していったことで、昔のトラウマがぶり返したってわけだね。

「僕はやっぱりクラスをまとめようとしちゃいけない人間だったんだ。結局山内君を守ることができなかつたし、それどころかまた恐怖で支配しようとした。あれは間違つてると、わかつてた筈なのにね……」

声を震わせてそう絞り出す平田君は、誰がどう見ても限界だった。山内君を守れなかつたことに絶望している彼に、「君は悪くない」なんて届くわけもなく、ましてや「山内君が悪い」なんて言うのは完全に逆効果だ。

……さて、コージーはどんな手を使って彼を立ち直らせるのかな？

「ハッキリさせておくが、山内が退学したのは堀北のせいでもオレのせいでもない」

「……………うん、そうだね」

「かと言ってあいつに裏切りを持ちかけた坂柳や本条に責任を求めるのも間違っている。後で聞いたが坂柳は山内に個人的な恨みがあったから標的にしただけで、本条は坂柳の指示に従っただけらしいからな」

「そう、なんだろうね……」

「なら聞くが、山内がいなくなったのは誰の責任だと思う？」

「彼自身……と、考えるしかないだろうね」

「いやまあそう考えるのが普通だけど、そんな平田君も薄々わかっていることを持ち出しでも、かえって彼を塞ぎ込ませるだけじゃ——」

「山内が退学したのは、全てお前の責任だ」

「っ……………!？」

「……………えー……………ここまで精神的に弱ってる相手にさらに鞭打つ普通？ コージーつてもしかして、有栖以上のサディスト？ ほら、平田君も完全に理解の範疇を越えた顔になってるよ。」

「それほど助けたかったのなら、何としても山内を助けなきゃならなかった」

「打てる手は打ったよ！ だけど、どうしようなかったんだよ！」

「一之瀬達は犠牲を出すことなく試験を乗り切った」

「か、彼女らには僕達には無い、大量のプライベートポイントがあつたからできたことだ」

ろう?! 1ヶ月でクラスポイントを0にした僕らが2000万ポイントなんてかき集められる筈が――」

「クラスポイントが0になったのも、クラスをまとめられなかったお前の責任だ」

「それは……いくらなんでも理不尽だよ」

「ああ、理不尽だ。だがそれがお前の選んだ道だ。誰一人も欠けさせないなんて甘ったれた幻想を周囲にも強要するのなら、本条のように常識外の救済手段を保持しておくべきだし、何より失敗したときは全て責任を負う覚悟が必要だ」

「――ぼ、僕は――！」

「つくづくがっかりさせられたもんだ、所詮お前は口だけの男だったようだな。できもしない理想を語って人格者を気取っておきながら、化けの皮が剥がれた途端勝手に自滅していくだけのどうしようもない無能な生徒……それがお前だ」

ほんと情け容赦無いなコージ……何を意図しているかは薄々わかったけど、ここまですりぬいでの執拗な追い討ちを躊躇いもなくやってのけるとは、この子も俺や有栖に負けず劣らずの人でなしのようだ。

「いつまで夢を見てるつもりだ」

「それが、君の本性……なのかな? 恐ろしく容赦ない、冷たい言葉だね……」

「守りたいと願うのはお前の自由だが、それなら最後まで足掻き続けるしかない。その

過程でもし誰かが脱落したとしてもそれは受け入れ、そしてそれでも前に進まなければならぬ。お前が立ち止まってしまえば、次々と脱落していくのだからな」

「じゃあ……僕はどこで弱音を吐けばいいのか……僕だけが、我慢して歩き続けなければいけないのかな……？」

「そんなことはないだろ。困ったときは周りを頼ればいい。お前に手を差し伸べてくれる奴は沢山いる。今のお前は、それを見ようとしていないだけだ」

おつとサンドバックタイムはここで打ち止めか。まあコージの言うことはもつともだ。目に見えて落ち込んでいる平田君を、最初はCクラスの誰もが励まそうとしただろう。それらを全て無下にした彼が「自分だけ誰にも弱音を吐けないのはおかしい」なんてちゃんちゃらおかしいよね、うん。

「……僕は……こんな弱い僕が……みんなの前を歩いても、いいのか……？」

「今のお前なら、前を歩いても大丈夫だ」

「つ……ありがとうつ……ありがとう綾小路くん……！」

さて、見たいものは見れたし退散しますかね。

自分で徹底的にぶっ壊しておいて、自分で組み立て直す……まさかこんなえげつない立ち直らせ方があったとはね。

というかもしかしてコージ、軽井沢ちゃんや卍解ちゃんもこんな感じで立ち直らせ

たの？だとしたら勿論コージも怖いけど、それでコージに懸想しているあの2人は
もっと怖いね。

綾小路VS坂柳

〔side：坂柳有栖〕

長きに渡る準備期間を経て、いよいよ学年年度最終特別試験当日となりました。

大きくリードしている私達Aクラスはともかく、下位3クラスは高確率で入れ換わりが起きる分、程よい緊張感に包まれているでしょうね。

ホームルームが終わり司令塔である私はこれから多目的室に向かい、桐葉達残りの生徒はこの教室にて指示を待ち、種目発表後に私が選出した生徒が指定の場所に向かう形になります。モニターなどで詳細を知ることができないので、種目終了後に情報を共有することになりますね。

「それでは皆さん、行つて参ります」

「お土産買ってきてねー」

「買いませんよ」

まったく……こんな日でも桐葉はいつも通りですね。それと何ですかこれ見よがしに置かれたその黒ひげ危機一髪は。いくらなんでも緊張感無すぎでしょう。

「それと、あんま負い過ぎんなよー。普通にやれば普通に勝てるだろうし」
「言われなくてもわかっていきますよ」

正直臆目無しに考えてもクラス単位の勝負では、よほどのことが無い限りCクラスに負けることはありません。両クラスの総合力は言うまでもありませんが、その上ほとんどの種目で司令塔の関与が最小限に抑えられているからです。その優秀さを隠蔽してきた綾小路君の司令塔としての手腕をCクラスの皆さんが信頼する筈がありませんし、少しでも司令塔の差を無くそうとクラス全員で話し合った結果なのでしょう。

私も彼に配慮して関与を最小限に設定しましたが、そのことに対する橋本君の追求が正直鬱陶しかったですね。クラスの皆さんの力を信じてるから、なんて自分で言うのもなんですがまったく私に似合わない言い分で、苦労して強引に言いくるめなくてはなりませんでした。……腹いせにぼろ雑巾になるまでチェスで打ちのめして差し上げました。

故に私が求めるのは完全な勝利。クラスでは勿論、本命種目であるチェスでも勝利を取めることです。

そこまでやってのけて初めて、ホワイトルームの掲げる愚かな理念を打ち砕いたと言えるのですから。

「ところで坂柳さん、その帽子に付けてるブローチはどうしたの？とても似合ってるけど」

「ああ、これですか？先日の誕生日に桐葉から貰いました。試験期間中暇だったらしく、
1から作ったそうです」

「……えつと、それガラス製だよ？作ったって、まさか……」

「ええ、わざわざ器具から揃えてガラスを加工したそうです」

「そ、それは本格的過ぎるね……逆に本条君って何ができないの？」

「動物が絡む催しは全てダメですよ？例外無く逃げられてしまうので」

特別棟に足を踏み入れ多目的室に向かうとまだ開場されていませんでした。既に着いていた一之瀬さん曰く全員が揃ってからのことなので、残りの2人が来るまで雑談をして時間を潰しています。先日あんなことがあったのにもかかわらず嫌な顔1つせず私に接する彼女は、多感な高校生とは思えないほど人間の出来た女性だと思わず感心

してしまいますね。

そうこうしている内に綾小路君がやって来たので、私達は軽く挨拶を交わします。

「あとは金田だけみたいだな」

「そうだねー」

ふむ……この様子からして、お2人はまだ司令塔を金田君のままだと思っ
ているようですね。まあ私も桐葉が教えてくれなければ気づけなかつたで
しょうし、ここは今日まで騙しきつた彼の手腕を誉めるべきでしょうね。

……せっかくですから彼の戦略を補強しておいてあげましょうか。もしかしたら綾小路君の驚く顔が見えるかもしれませんし。

「それにしても一之瀬さんは幸運でしたね。今のDでは万に一つもBクラスには勝てませんし、重要なのは何勝積み重ねるかどうかのみです。7連勝すれば私達の結果次第では、これまでのリードを失ってしまうかもしれませんね」

「いやいや、どうなるかなんてやってみなきやわからないよ。当然向こうも必死で闘うだろうし、とてもじゃないけど油断はできない」

「ふふ、少なくとも対等には見ていないようですね。伊達に1年間Bクラスを守り抜いただけのことはあります」

「私達も勝つために戦略を練ってここに来てるし、結束力が大きく試されるこの試験で

は簡単に負けられないからね」

「なるほど失礼しました、確かに仰る通りですね」

表向き適当に肯定しつつも、内心では彼女達の敗北を確信しました。結束力が試される試験？ええ、まともに取り組めばそうかもかもしれませんね。

……しかし残念ながら貴女のお相手は、まともとは対極に位置する戦略を打つて来るのですよ。

遅刻寸前の時間によくやく現れたDクラスの司令塔は、桐葉の言った通り金田君ではなくドラゴンボーイさんでした。

「え……龍園君？どうして、ここに……」

「どうした一之瀬、何を動揺してる」

彼の言う通り一之瀬さんは目に見えて狼狽え、なんと綾小路君も僅かに目を見開いています。やはり彼にとっても想定外だったのでしょね。

「プロテクトポイントを持つ生徒が司令塔をするという思い込みの裏を欠くとは……随分と思いついた手を使いましたね龍園君」

龍園君は一瞬私に向けて「白々しい」と言いたげな視線を向けてから、一之瀬さんに向き直ります。まあ彼なら桐葉から聞かされていると予想できますよね。

「この特別試験は司令塔の存在は必要不可欠。当日不在になれば当然、他の誰かが代役

を務めるしかねえよなあ？」

当日の予期せぬ欠席なんて不測の事態は十分起こりえることです。代理としての司令塔役は当然認められるでしょうね。……しかし友達想いな一之瀬さんに、それを予想しろというのは酷な話でしょう。

「そうだとしても、君が出てくるなんて考えてもいなかったよ」

「だろうな。お前なら熱を出そうが怪我をしようが、クラスの連中に退学のリスクを負わせるくらいなら這ってでもくる筈だからな」

桐葉のような例外中の例外を除けば、プロテクトポイントを持たない生徒が司令塔に立ち負ければ、退学を防ぐことは決してできません。となれば今回の特別試験は、プロテクトポイントを持つ生徒同士の戦いと思いついても仕方がないでしょう。

「しかし代理としての参加となると、どんなペナルティを背負いこんだのですか？」

「金田を種目で使えねえ。欠席してる訳だし、あつて無いようなペナルティだな」

「そうかな？彼の学力はDクラストップクラスの筈だし、参加できないのは痛いんじゃないかな」

きつと一之瀬さんは内心パニックになつてるでしょうね。数少ない頭脳派の駒を犠牲にしてまで打った奇策の意味は何なのか？いつから龍園君が司令塔だと決まっていたのか？数日に渡る嫌がらせも彼の策略の一部なのか？……そんな風に混乱する彼女

に対し、龍園君は嘲笑するように笑いかけました。

「そんなにビビる必要なんざねえよ。金田が病気で欠席したのは不測の事態で、生憎とあいつにはお前ほどの根性が無かった。つまり俺はただの人柱さ。クラスの連中も前回仕留め損なった俺を排除できて喜ぶだろうぜ」

「だったら、手加減してくれると思っていいのかな」

「ああ、構わねえよ。安心してかかってこい」

「どんな手を使っても勝つのが、君のやり方じゃないのかな？」

「勝つと決めたら、な」

「やだなー、もう後が無い龍園君の背水の陣……なんか私達の負けフラグが立つちゃった気がするもん」

一之瀬さんは葛城君と同じく、下地を積み重ねて確信、信頼、安全を構築していくタイプで、予想もつかないアクシデントへの対応を苦手としています。相手が凡百ならいざ知らず、龍園君となるとそれは致命的です。

今頃石崎君あたりがBクラスの皆さんにこのことを周知させているでしょうし、彼らは動揺して十全にパフォーマンスを発揮できないでしょう。

ですがそれだけならジャイアントキリングは起きません。Bクラスはそれほど甘い相手ではありませんからね。となると……龍園君はまだ何か切り札を隠し持っている

と考えるべきでしょうね。そして動揺している一之瀬さんはそれに気づけない……これでは勝負以前の問題ですね。

「ともかく全員揃ったことですし、そろそろ参りしましょうか」

多目的室に入ると以前まで無かった壁が作られていて、丁度室内を半分に区切っていました。ふむ、即席にしては防音性が保たれそうですね。

「BクラスとDクラスはあちら側で試験を行う。私と茶柱先生についてくるように」

真嶋先生の指示と共に、4人は隣の部屋に向かいました。こちら側の進行役は坂上先生と星之宮先生ですので、ジャッジに片寄りが出ないように受け持つクラス以外の担当教師になつていようです。

「5分後に試験だから、今の内に心の準備をしておいてね」

星之宮先生はそうアドバイスすると、坂上先生と最後の打ち合わせのようなものを始めました。……盗み聞きしている様子もありませんので、気兼ねなく綾小路君と最後のお喋りができます。

「やっつと、この日がやって来ました。お恥ずかしながら昨日の夜はあまり眠れず、危うく寝坊するところでしたよ」

「そんなに待たせた覚えはないがな。そもそもオレがこの学校に来なければ会うことも無かつただろう」

「確かにこの学校で出会ったのは偶然ですが、私はいずれあなたと邂逅する日が来ると確信していました。運命として、それは決まっていたんです」

「運命、か。そんな抽象的なものを信じられるのか?」

「桐葉の幸運を間近で見ているらば、いくらでも生き証人になれますよ」

「……そうかもな」

確率論に人生を費やした数学者に彼の異常性を見せたら、いったいどのような反応をされるのでしょうか?

「貴方がこの学校にいるとわかってからは、早く戦いたいという気持ちを抑え込むのに随分と苦労しましたよ。でもそれは仕方がありません。幼少の頃に貴方を知って以来、貴方を倒すことをずっと夢見ていたのですから」

「夢から覚めるのが怖くないのか?」

「夢は覚めるものですから」

まったく不安にならなかつたと言えば嘘になります。私は自身の才能を疑ったことは一度もありませんが、今から戦う相手は真正銘の怪物、傑物中の傑物。ですが……私の帽子に付けられたブローチを握りしめ、アネモネの花言葉を思い返します。

『あなたを信じて待つ』……桐葉が私を信じているなら、私はそれに応えなくてはなりませんよね。

「お手柔らかに、とは言いませぬ……全力で向かってきてくださいね」

本音を言うなら今回の試験のような、お互いの実力を如何なく発揮できるとは言い難いルールで決着を付けるのはやや複雑な気持ちですが、まあこれ以上を望むのは贅沢でしょうね。実力をクラスメイトに知られたくない綾小路君にしてみればうつつの試験でしょうし、考えようによつては三味線を弾かれる心配がありませんね。

「はい、そろそろ試験を始めます」

星之宮先生の指示に従い、私達は機材を間に向かい合わせになります。お互いの表情は見え、手元のパソコンにはAクラスの皆さんの顔写真と、私の用意した10種目が表示されました。

「それでは特別試験を開始します。進行を担当する坂上です。各クラス、5種目を選択し決定ボタンを押すように」

私はあらかじめ決めておいた5種目……『チェス』、『英語テスト』、『現代文テスト』、『数学テスト』、『フラッシュ暗算』の5種目を選び、決定ボタンを押しました。

やがて大型モニターに選ばれた10種目が表示されました。……綾小路君の選んだ種目は『弓道』、『バスケット』、『卓球』、『タイピング技能』、『水泳』ですか、概ね予想通りですね。もつとも私の選ぶであろう種目は葛城君がリークしているでしょうし条件は五分ですね。

「ここからは抽選を行い7種目を決定していきます」

「それにしても綾小路君、相手が坂柳さんなんて先生同情しちゃう」

「星之宮先生、私語は慎むように」

坂上先生に注意され、星之宮先生は反省のポーズを取ります。そういえば以前、星之宮先生が綾小路君……ひいてはCクラスのことを警戒している節があると報告を受けましたね。真嶋先生と違って自分のクラスに肩入れしているのか、それとも……

「中央のモニターに抽選結果がその都度表示されるようになっていたので、見るように」
坂上先生に促されてモニターに目を向けると、画面か3D映像に切り替わり、1戦目の種目は表示されました。

『バスケットボール』

必要人数………5人 時間制限………前後半10分×2

ルール………通常のバスケットボールに準ずる

司令塔………任意のタイミングでメンバーを1人まで交代させることができる

か。おやおや、この種目がいきなり選ばれるとは………それでは1つ、仕掛けてみましょうか。

T i p | o f f

【side：坂柳有栖】

マウスを操作し種目に出場する方を選ぶ傍ら、綾小路君と上辺だけの駆け引きでも楽しみましょうか。彼なら星之宮先生が自分を探っていることにも気づいてるでしょうし、きっと誘いに乗ってきてくれますよね。

「坂上先生。私達も私語は禁止でしょうか？」

「特に決まりはありませんのでご自由に」

「なるほど……となれば舌戦による駆け引きも可能ということですか」

「うわー、坂柳さん容赦なくい」

「星之宮先生」

「すみません、もう私語はしません！」

当然教師の私語は許されませんよね。この大切な特別試験で私達の集中を欠くと見なされたら減俸や罷免もありえると、星之宮先生は承知の上でこうなのでしょいか？

「それにしても、予想通り少数のスポーツ競技で固めてきましたね。学力差は歴然なの

で無理ありませんが、この競技はやはり須藤君がキーマンでしょうね。彼を投入されては生半可な戦力では太刀打ちできないでしょうし」

「……………」

「余計なことは話すなど、真の司令塔である堀北さんに命じられましたか？もし貴方がお飾りの司令塔であるなら、何を話そうと人選は変わらないのでは？」

「堀北から余計な話はするなど釘を刺されていてな。下手に話せばあっさりと情報を抜き取られるってな」

彼がまともに舌戦するつもりであれば、決して言わないであろう返答をしてきました。私の意図が伝わったようで少し嬉しくなりますね。

「ふふ、それは悪手ですよ綾小路君。貴方を操っている方が堀北さんだということは是非でも否定しておくべきでした。彼女の性格や行動パターンから、Cクラスが取る戦術がある程度推測できてしまいます」

「いや、それは…………別に堀北から指示を受けたなんて言っていないだろ」

私達の情報戦（の皮を被った茶番）を聞いていた星之宮先生は気の毒そうに額に手を当て、坂上先生も落胆したような表情で首を振りました。

「オレは堀北に釘を刺されたと言っただけで…………指示は別の人間かもしれないぞ」

「そこはハッキリと別の人間だと言いつけるべきでしょう。そう自信なさげに言われても

説得力がありませんよ」

苦し紛れの言い逃れをあつさり看過され、あまつさえ敵にアドバイスされるといふ状況……綾小路君は秘密兵器でもなんでもなく、クラスから退学者を出さないためのただの人柱だとを教師達は判断するでしょうね。

その後も表面上は私が圧倒的優位のまま舌戦が続きましたが、流石に見かねたのか坂上先生は試験進行を促します。

「カウントは進んでいます。私語は自由ですが手を疎かにしないように」

お気遣いありがとうございますが所詮はただの雑談ですので、綾小路の精神状態にはまるで影響していません。第一そもそも星之宮先生が担当教師の枠組みを外れて綾小路君をマークしなければ、こんな芝居を打つ必要もなかったんですよ？教師たるもの真嶋先生のように全ての生徒に公平に接するべきでしょうに。

内心で星乃宮先生にダメ出ししつつメンバーを選び終えますと、ちょうど綾小路君もほぼ同時に選び終わったのかモニターに競技を行う生徒が映し出されました。

こちらのメンバーはバスケット経験者である鬼頭君を軸に、真澄さん、町田君、清水君、鳥羽君のクラスでもトップクラスの運動能力を持つ5人。対するCクラス側は牧田君、南君、池君、本堂君、そして……小野寺さんですか。

教師のお2人もそれはもう不可解そうにしていますが、これは恐らく堀北さんの差し

金でしょう。

「須藤君の運動神経ならどのスポーツでも勝ちを狙えますし、敢えて温存して勝ちを狙うという訳ですか。そちらの種目に『水泳』がありますが、いくら水泳部の小野寺さんでも男子生徒相手では荷が重いでしょうしここで投入したというわけですね。ともあれ予想が概ね的中して安心しました」

きつと堀北さんは私達が須藤君と真正面からぶつかることを避けこの種目を捨てると予想し、須藤君という強力なカードを温存するという方針を取ったのでしよう。

逆に好戦的な私が敢えて須藤君を真っ向から倒そうと桐葉を投入したとすれば、最も警戒すべき最強カードを切らせることができるという二段構えの策になっていますね。

……しかし残念ながら、堀北さん程度の策略を見抜けない私ではありません。

おそらく保険のために添えた司令塔関与のルール……一人までのメンバー入れ換え。万が一私が桐葉を除いた最高戦力で勝ちに来た場合に須藤君を投入しようとして三段構えを構想したのですが、かえって狙いが筒抜けになってしまいましたね。何事も欲張り過ぎはいけません。

モニターの向こうでは選出された生徒達がウォームアップを済ませ、ホイッスルとともに試合が始まりました。

皆さんには予め須藤君を引っ張り出すまで力を抑えて互角を演じるよう指示してお

きましたので、試合展開はほぼ互角のまま進みます。

どうやら向こうのエースは牧田君のようで、素人目で見ても中々の実力者のようです。鬼頭君も彼を基準に実力を抑え、流れるようなシューティングゲームを繰り広げ……おや、ここで真澄さんが小野寺さんの出したパスをカットしました。流石常習犯なだけあつて奪うことにかけては一家言ありますね。

真澄さんの活躍もありましたが前半終了間際にゴールを外してしまい、得点は1-1対1-2の1点差ビハインド。

凡庸な生徒なら須藤君を温存したままでも何とかかなりそうだと判断してしまいそうな状況ですが、綾小路君は迷うことなくキーボードを操作し須藤君と池君を交代させました。

モニター越しの須藤君からは慢心や油断は感じられず、ウォームアップをしつつも鬼頭を警戒するように睨んでいます。……頭脳面では警戒する必要は無いと考えていましたが、野生の勘のようなものを備えてるのでしょうか。

「勝負は互角、いや僅かですがリードしていたのはCクラスでした。須藤君に交代するのは時期尚早なのは？」

「……から逆転され点差が開いてから交代した場合、お前は本条を投入しかねない。パスケなら須藤は本条が相手でも互角に戦えるだろうが、大差をひっくりかえすとなると

な……」

「須藤君を失った挙げ句敗北するくらいなら、手堅く確実に勝ちを拾いにいくというわけですね。大切な初戦ですし悪くない判断です」

「1つだけ彼の考えに少々物申したい部分がありました、とりあえず今は置いておきましょう。」

4分間の休憩が終わり、後半戦が始まりました。鬼頭君はマークする相手を牧田君から須藤君にチェンジしました。……交代要員である須藤君は別室で試合を観戦していたので、自分に張り付いた鬼頭君の動きが、前半戦とは別物であることにすぐに気付くでしょうね。

『やっぱリテメエ手え抜いてやがったな!』

モニター越しに須藤君は声を荒げました。自分を引つ張り出すため互角の試合を演じていたことは見抜いていたようですが、鬼頭君の全力は予想したよりも上回っていたみたいです。とはいえそれでも実力では須藤君が上回るようで、見事なボール捌きで鬼頭君のディフェンスを躱しインサイドに切り込みますが、真澄さん達も負けじと食ひ下がります。

……私はあまりバスケットに詳しくないのですが、素人目で判断するならエース対決では向こうに軍配がありますが、他の4人はこちらに分がありそうです。

得点は17対13と差は広がったものの、鬼頭君達のメンバーのキレが急に鋭くなったことで、Cクラス側が動揺して少しずつプレーに精彩を欠き始めましたね。

それでも須藤君にボールを集められれば逆転は難しいでしょう。……ですので、敢えてその須藤君を攻略させてもらいましょう。

『鬼頭テメエ、絶対経験者だろ!』

『いいや、お前が素人の集まりに苦戦しているだけだ』

『嘘つくんじゃねえよ!』

『残念ながら事実だ。俺達は全員この1週間足らずしか練習はしていない。……お前のことは坂柳も随分と警戒していたみたいだが、思ったより大したことないんだな』

『この野郎!』

モニターを通じて須藤君と鬼頭君のやり取りが聞こえてきます。鬼頭君の侮るような言葉に苛立ち、須藤君のプレーも精彩を欠き始めました。

「ふふ、アレは嘘ですよ。須藤君の言う通り、鬼頭君はバスケット経験者です」

「須藤を煽つたのも戦略のうちか」

「たしかに彼の實力は破格と言えるものですが、精神面が未熟であれば付け入る隙はいくらでもあります」

かつては龍園君もそれをいち早く見抜き、彼の冷静さを奪い實力を發揮させず常に優

位に立ち続けていました。そうやって何度も辛酸を舐めさせられれば彼も改善しようと試みたでしょうが……：そう簡単に人は変われません。

鬼頭君がゴールを決め点差は2点になり、焦った牧田君の不用心なパスを真澄さんがカットしました。目論見通り彼等は精神的に乱れ始め、徐々に流れがこちらに傾き始めましたね。

やはり彼はこのまま同じ方法で挫折を味わうのでしょうか？それも今回は自らの支えであるバスケットですので、下手をすれば彼はもう立ち直れないかもしれませんね。

「お前は須藤の心が未熟だと言ったが、いつの話のことを言ってるんだ？」

「と、言いますと？」

「須藤はもう、その程度の揺さぶりで崩れはしない」

綾小路君の言葉を肯定するように、鬼頭君のシュートを須藤君は見事な反応で弾き飛ばしました。

ボールは小野寺さんが拾い素早いパスワークで揺さぶりをかけた後ゴール前に放り投げられ、空中で須藤君がキャッチしました。

『おらあー！』

『ぬー!!?』

どうにか防ごうと跳んだ鬼頭君を力づくで吹っ飛ばしながら、須藤君はリングに直接

ボールを叩き込みました。

……たしかアリウープ、でしたっけ？見かけの豪快さとは裏腹に、高い身体能力だけでなく優れた技術を必要とするスーパープレー。なるほど綾小路君の言う通り、もう彼に生半可な揺さぶりは通用しないようですね。

『へっ……予想以上にできるもんだから少し熱くなっちゃったが、お前じゃ俺には勝てねえよ』

須藤君の見事な活躍で他の4人も冷静さを取り戻したようで、段々と点数差が開いていきます。

「なるほど、彼も成長していたということですか」

本領を発揮した須藤君が相手では鬼頭君と言えど太刀打ちできず、残り2分を切ったところで得点は23対15と4ゴール差……きつとCクラス側の方々は勝ちを確信しているでしょうね。須藤君という強力なカードを切ったものの、こちらも鬼頭君や真澄さんといった主力を失いましたし、何より私の戦略を真正面から攻略した上での勝利。後続にも勢いに乗りやすいですし、限りなく理想的な勝ち方と言ってよいでしょう。

「さて、それでは私も勝負に出ましようか」

私はキーボードを操作し鳥羽君を下がらせ、代わりにこちらの最高戦力……桐葉を投入します。

綾小路君、それとも堀北さんでしょうか？須藤君なら桐葉にも対抗できると考えているようですが……それが思い上がりだと教えて差し上げます。

【side：桐葉】

「デメエ、今更出てきて何のつもりだ？」

怪我しないよう入念にウォームアップしていると、俺のマークについたららしいケン坊が何か嘯みついてきた。

「さあね。有栖の無茶振りは今に始まったことじゃないし、大方そちらに勝利を確信させてから逆転勝ちしようって魂胆じゃないかね？」

「こつからひっくり返すつもりかよ、舐めやがって……だがこつちとしても好都合だぜ。ちようどぶちのめしてえと思つてたところだ」

「ぶちのめすつて、随分と穏やかじゃないなあ。仮にもスポーツマンならもうちよい行儀良くしようや」

「ハのーっ！」

神経でも逆撫でされたのか、ケン坊の敵意がさらに膨れ上がったところで試合再開のホイッスルが鳴る。

俺が町田からボールを受け取ると、ケン坊は憎々しげに睨みつつも俺に張り付く。キレてるようでプレッシャーのかけ方には少し前のような雑さは見られないね。

「ひよつとして山内君のこと？元はと言えば彼が有栖に上等かましたから余計な恨みを買ったんだし、俺らを恨むのはお門違いじゃないかな？」

「ざけんな！そんなんで納得でき！」

こちらの軽い揺さぶりにケン坊が食いついた瞬間、俺は急加速して彼のディフェンスを躲す。

「させるかーっ!？」

ケン坊も優れた反射神経を發揮し咄嗟に反応するが、ケン坊の軸足に重心が乗った瞬間俺が逆方向に切り返したことで、バランスを崩して転倒してしまう。

「と、とめろー！」

ケン坊があっさり抜かれたことに動揺したのか、それともケン坊が復帰するまで時間

を稼ごうとしているのか、Cクラスのメンバー4人も俺がインサイドに切り込むのを防ごうと立ち塞がる。ノーマークになったことで悠々とゴール前に移動したフアルコンにでもパスすれば、労せずゴールなんだけど……

点差も点差なんでもちよつと欲張ろうか。

「なつ、そんな遠くから!?!」

3Pラインの外からシュートし、ボールは2回ほど縁に当たりつつリングを通過し5点差となる。

ほとんど未経験者だから仕方ないけど、アウトサイドへの警戒が疎か過ぎるよ。近代バスケは3Pで得点を積み重ねるのが主流だというのに。

「く、くそーああつ!?!」

Cクラスの南君が慎重にボールを回そうと考えて出したパスを、仕事人マスマンが強襲し奪い去った。

絶対的エースの予想だにしない敗北と、それでもまだ5点差あるという希望。つい残り少ない時間を潰そうとする気持ちはわかるけど、そんな後ろ向きな気持ちで回すパスを通すほどマスマンは甘くない。

不意を突かれあちらさんが動揺した際にマスマンからボールを受け取り、もう1度スリーを撃つためドリブルで切り込む。

「させつかよお！」

ケン坊も負けじと回りこみ俺に張り付くが……

「はい御苦労様」

「っ、またアングルブレイクだど!？」

再びドリブルを切り返して彼を転倒させる。本来狙ってできる芸当ではないけど、俺の眼にかかれれば軸足の重心移動くらい丸見えなんだよ。

「ああっ!？」

「そんな……」

再び俺がシュートを放つと、あちらさんから悲痛な声が漏れる。たぶん1ゴール差に追い詰められたと思っただろうけど、呆けてる暇があるならゴール前で待機しなきゃダメだよ。でないとな……

放ったボールは放物線を描きながらゴールに向かい、縁に当たって弾かれた。それをゴール下のファルコンが取って、そのままレイアップを決めこれであと3点差。

「……………え？」

「外れ、た……ど……?」

もしかして百発百中だと思っただけ? そんなわけないでしょうが。ノーマークでもせいぜい3回に1回入れば上出来だよ3Pシュートなんて。

ダメ元で放つて入れればそれでよし、たとえ外してもファルコンがリバウンドしてくれ
る。ケン坊以外には競り負けないだろうからね。……リバウンド勝負すら起きなかつ
たのは予想外だけだ。

「牧田、よこせ！」

「あ、ああ！」

二の轍を踏まないよう牧田君は鋭いパスを出し、ボールを受け取ったケン坊は猛ス
ピードでゴールに突撃する。だけどね……

「勢いだけじゃ俺には勝てないよ」

「本条、テメエツ……！」

俺は回り込んでケン坊の前に立ち塞がる。奇しくも先程とまったく同じ構図だね。

「っ……………」

流星にこの期に及んで無理矢理突っ込むほど愚かじやないようだけど……もうここ
からでは君に勝ち目は無いよ。

俺の視野は草食動物の如く広大で、パスを受け取ろうと牧田君がゴール前に向かって
いるのも見えている。

そして相手の動きの未来が視えるから――

「バツ、バカな!？」

パスを出す直前にボールを奪うという芸当も可能。相手がケン坊だろうと誰だろうと、1 on 1じゃ俺は絶対に負けないよ。

残り時間はあと30秒。

ボールを奪った俺はトップスピードでゴールに向かう。ケン坊も必死で追いかけてくるが差は縮まらず、3ポイントライン際で俺はシュートモーションに入るが……

「くそおおおおおおおおおっ！」

後ろからケン坊にタックルされ転倒する。当然ファウルとなり審判がホイッスルを吹く。

「おおあつぶね。咄嗟に受け身を取ったから何事も無かったけどさ、ちよつと乱暴すぎやしないかね？」

「……す、すまねえ」

腐つてもスポーツマンだからか素直に謝ってくるケン坊だが、表情は青ざめて動揺をまるで隠せていないね。友人の仇である俺に、自分の最も得意とするバスケットで圧倒されたのがよほど気が動転していたんだろう。冷静さを欠いた彼のプレーは最悪の結果をもたらした。

バスケットのルールに1つに、シュートモーションに入った選手をファウルで妨害するとフリースローの権利が相手に与えられるというものがある。3ポイントラインの

内側の場合は2本、今回のように外側の場合は3本。フリースロー1本決めると1点なので、つまり今から3本とも入れば同点になる訳だけど……

ノーマークでこの近距離は外す気がしないね。

フリースローは3本ともゴールに収まり、同点に追いつかれたCクラスは鬼気迫る表情でゴールを奪いに来たけど、精神的動揺から5人とも完全に動きに精彩を欠いていた。

そんな状態で俺達を抜ける筈もなくあっさりとボールを奪われ、そして……

ピーーーーー！

「そこまで！25対23で、Aクラスの勝利！」

ケン坊を切った挙げ句に敗北……それも勝利を確信した直後に逆転されるといって、Cクラスにとっては最悪の負け方で初戦は幕を閉じた。

盤上の死闘（前編）

〔side：坂柳有栖〕

その後の流れをも大きく左右する初戦であり、自クラスの選んだ種目であり、さらに須藤君という絶対的エースの存在から勝つことは前提だった筈のバスケットでの、勝利を目前にしておきながらのまさかの逆転負けという結果は、Cクラス全体に少なくない動揺をもたらしたでしょうね。少々危険な賭けでしたが、流石は私のクイーンと言ったところでしょう。

たしかに須藤君は以前よりも精神的に成長したようですが、それでもまだまだ未熟なことに変わりはありません。もし彼が桐葉に圧倒されながらも冷静さをもう少し保っていたら、大きく開いていたリードを守ることに徹して無事逃げ切れていたでしょうね。得意とするスポーツで圧倒されるといふ現実を受け入れられず、ムキになって真つ向から打ち勝つことに固執したことが敗因です。

堀北さんも桐葉には最大限の警戒を払っていたでしょうし、対応策もちゃんと考えて伝えていたんでしょうが……残り時間僅かに絶対的優位な状況から追い上げられる

ケースは、彼等の動揺からして想定できていなかったようですね。

2種目に選ばれたのは『タイピング技能』と連続してCクラスの選んだ種目となりましたが、外村君は動揺を抑えられないようで事前に入手していた情報からは考えられないようなタイプミスを頻発させ、結果は81対83と僅差とはいえCクラスは自らの土俵で連敗を喫してしまいました。

さらに悪い流れというものは続いてしまうもので、3種目は『数学テスト』、4種目は『英語テスト』と、立て続けにAクラスの指定した種目が選ばれました。

Cクラスの士気にトドメを刺すためこちらは『チェス』に出す予定の橋本君、『フラッシュ暗算』に出す予定の葛城君を除いた、クラスのトップ層を惜しみ無く投入しました。

対する綾小路君は『数学テスト』には軽井沢さんや佐藤さんといった今回の試験では活躍の見込めない生徒を投入し3連敗を許し、続く『英語テスト』には王さんや幸村君や平田君といったほぼベストメンバーを投入し勝負をかけるにきました。しかし……

「英語テストの結果……Cクラス631点。そしてAクラス……668点。Aクラスの勝利です」

坂上先生は告げた結果は残念ながら僅差でAクラスの勝利。残る3種目を待たずして、私達Aクラスがストレートで勝負を決めました。

「惜しかったですね綾小路君。しかし堀北さんと高円寺君を投入していれば勝てたので

は？」

「そうとも言えない。堀北は英語はあまり得意じゃないし、高円寺はおそらく本条以外には真面目に取り組みそうもない。考えうるベストメンバーで挑んで無理だったのだから、正直どうしようもなかったな」

クラス間での勝敗が決定し、プロテクトポイントを失ったというのに綾小路君の声色には動揺や落胆は微塵も感じられません。

彼にとつてこれまで隠してきた実力を最大限に披露してまで、Aクラスを目指すメリットが欠片も無いので当然ですね。

加えて桐葉という圧倒的なアドバンテージ差がある以上、現状ではCクラスがAクラスに勝つことなど不可能だと、徹底したりアリストである彼なら理解していた筈。私がCクラス、彼がAクラスの司令塔でもおそらく大差の無い結果だったでしょう。

高円寺君を桐葉にぶつけることができれば結果は違った可能性もありますが、桐葉は如何に不利な局面に放り込んでも逆転してくれる駒です。相手が綾小路君と言えどマッチアップを外すことなど造作ありません。

敢えて彼にぶつけてみるのも面白いのですが、例の月城理事長代行は綾小路君を退学させるため、邪魔なプロテクトを是が非でも剥がしたいでしょうから、もしかしたら何らかの手段で試験に介入してくるやもしれません。

私と綾小路君の勝負はあくまでチェス。そのときに余計な水を差されないためにも、いち早く4勝しておく必要がありました。

とはいえCクラスの皆さんは敗北が確定したことで、モチベーションを保つことが難しくなりましたね。チェスに出してくるであろう生徒はおそらく、成績トップクラスにもかかわらず学力テストに参加させなかった堀北さんでしょうから興奮めな展開にはならないと断言できますが、もしかしたらその他の2種目は鎧袖一触な展開になるかもしれませんね。

……と、楽観的な予想を立てていたのですが――

「集計の結果、1位は10問中10問を正解し満点を出した高円寺六助。Cクラスの勝利です」

5種目の『フラッシュ暗算』にて、初めてCクラスに白星を献上してしまいました。

参加した葛城君は当初は私への復讐としてわざと敗北するつもりのようにでしたが、もし裏切るような行為をすればクラスメイトを適当に何人か退学に追い込むと事前に釘を刺しておきました。仲間想いの彼が私への恨みだけでクラスメイトを犠牲になどできないでしょうし、モニター越しで観察してもこの種目に真面目に取り組んでいるようでした……ですが、どうやら相手が悪かったようですね。

「高円寺君は桐葉と相対しない限り、真面目に取り組むつもりはないと先ほどお聞きしましたが、ブラフでしたか。どのようなにして彼を懐柔したのですか？」

「いや、高円寺は誰にもコントロールなんてできない。何故今回に限って真面目に取り組んだのかさっぱりわからん」

「しらばっくれているのか、それとも本心で言っているのか……綾小路君の言う通りこれまでの振る舞いからして、誰かの言うことを聞くような方では無いのでおそらく本心でしょう。……案外、桐葉と戦えなかったことに対しての私への意趣返しかもしれませんね。」

「続く第6戦目には2対2で行う『弓道』が選ばれ、弓道部所属の三宅君の奮闘によりCクラスの2連勝となりました。」

「まあ誰も経験者の居ないこの種目は初めから期待してませんでしたので問題ありません。あわよくば敗北が決定したことで集中を乱してくれないかとも思っていました。普段から心の鍛練を積んでいるだけあり三宅君は素晴らしい集中力を発揮していました。」

「あつという間に最後の種目になりましたが、予め桐葉の豪運で補正をかけた以上、モニターに表示されたのは当然私の望んだ競技でした。」

『チェス』 必要人数1人 持ち時間1時間（切れ負け）

ルール……概ね通常のチェスルールに準ずるが、41手目以降も持ち時間は変わらないものとする。

司令塔……任意のタイミングで最大30分間、プレイヤーに指示を出すことができる。

世界選手権の公式ルールでは持ち時間は2時間で41手目に持ち時間を60分追加、61手目に15分追加され、61手目以降は1手につき30秒追加していく方式ですが、試合時間を長引かせるという理由で不採用になることを防ぐため省きました。

「クラス間の勝敗は既に決しましたが、ここで勝てばマイナスは30ポイントと最小限で抑えられますね。とはいえこの種目は司令塔の実力が勝敗を大きく左右されます。綾小路君、チェスの腕に自信はありますか？」

「ああ。大した取り柄の無いオレだが、幸いなことに足の速さとチェスには少しばかり自信がある」

「なるほど……それは楽しみですね」

しかしまずは前哨戦として、お互いが用意した生徒の戦いから戦いの火蓋を切りま

私の選んだ生徒は橋本君、綾小路君の選んだ生徒は予想通り堀北さん。

「バランス良く能力の高い彼女をここまで参加させなかつたのは、最後の切り札として温存していたからなんですね」

「もう出し惜しみする必要が無いからな」

両者の選択が各クラスに伝えられ、橋本君と堀北さんは移動を始める。

橋本君にはこの2週間弱でできる限りの指導を施しましたが、流石にこの短期間では所詮付け焼き刃……堀北さんがチエスの差し手ならば、苦戦は免れないでしょうね。

【side：橋本正義】

指定された教室にて、チエス盤を境に俺と堀北は向かい合う。……自クラスの敗北は早々に決まったというのに、目の前の女の闘志は欠片も揺らいじやないようだ。

「おいおい、随分と怖い顔してるな。もっとこの状況を楽しもうぜ？」

「面白くもない冗談を言うのね。クラスの敗北が決定してしまつた以上、私はクラスポイントの支出を最小限に抑える必要がある。楽しむ余裕なんて欠片もないに決まつてるでしょう」

ぐうの音も出ねえな。こちらとしても万全を期すためにクラスポイントはできるだけ多く筆記り取っておきたいところだし、最後にこちらが負けて終わるのは縁起がよろしくない。

「まあそこまで肩肘張らなくても大丈夫じゃないか？俺、チェスを覚えて数カ月だから」

「生憎と、私は一週間ほどよ」

この試験ではペーパーテストのような例外はあるものの、基本的に私語はほとんど咎められることはない。だから軽いジヤブとして嘘で油断を誘おうとしたが、まるで動じないか。

この種目は司令塔が大きく介入できるルールになっているし、頭を使う競技で坂柳が遅れを取るとは思えないが、決して油断できる相手ではなさそうだ。

「それではこれより第7種目、チェスを行う。両名席に着くように」

教師の指示に従い席に着きつつ、俺は堀北にわからないよう黒のポーンを右手で、白のポーンを左手で握りしめる。

「先行後攻の決め方はわかるよな？」

「ええ。……左手よ」

向こうに先行を取られちゃったか、幸先悪いな。

チエスは基本的に先行有利。本条と坂柳のように差し方が似ていて実力が拮抗した者同士の闘いならば、特にそれが顕著に出る。

「どんな初手を打つのか楽しみだ」

「さて、ご期待に沿えるかしらね」

堀北は迷いなく白のポーンを手に取り、意外性も何も無く定石通りにE4の位置に移動させた。俺も黒のポーンをE5に移動させると堀北はすかさずナイトを動かし、E5に置かれたポーンを射程圏に収める。

なるほど、ここで俺がどうポーンを守るかで俺の戦術パターンを読むうってわけか。

「俺も坂柳から色々仕込まれたからな、早々に流れは渡さないぜ？」

お互い初手から長考することなく手を進めていく。坂柳のために持ち時間を30分残しておく必要があるため、序盤からのんびりしてはいられない。

堀北は定石を守りつつも非常に手堅い差し方をする一方、俺の差し方はある程度定石を無視した変則重視の攻撃的な戦術。

坂柳曰くこの差し方なら付け焼き刃でも十分間に合い、ただ定石通り打つことしかできない相手は簡単に崩れてくれるらしいが、堀北はどう攻めても1つ1つ冷静に対処してくる。戦局はやや俺が押しちやいるが、こりや持ち時間の配分には気を配つとかないな。

「随分と捻くれた戦い方ね、指導者に似たのかしら」

「俺も坂柳も性格が良いとは決して言えないから、教えたときに一番フィードバックがあつたんだろうな。そつちは随分と綺麗な差し方だが……ちゃんとした指導者でもいたのか？」

指導したのが綾小路以外ならそいつが直接この競技に出てくる筈だし、指導したのは消去法で綾小路でまず間違いないだろう。合宿以降何度も探りを入れて、軽井沢恵と佐倉愛里に好かれてるってこと以外は特に何も出てこなかったが、やはりアイツには何かがある気がする。

「この1週間他を全て捨てて、ひたすらチェスのみと向き合ってきただけよ」

「へえ……ってことは俺達がチェスを選ぶと確信していたのか」

「さあ、どうかしらね」

まあこの種目だけやたら司令塔の関与が大きかったから、読まれていても別に不思議じゃない。本条のオカルト染みた非常識な手段で、選ばれるのが確定していたことまでは流石に読まれていないだろうがな。

……しかしさつきから何度かチェックをかけてはいるけど、ことごとく防がれて中々攻め切れないな。

「始めて1週間って本当か？」

「わかつてはいたけど、随分とお喋りね」

「それだけが俺の取り柄さ」

ルールで禁止していかないのなら、何度でも揺さぶりをかけてやる。口はいくら動かしてもタダなんだし、僅かでも動揺を誘えたら儲けものだ。

「そう、1週間よ。まあ客観的に考えれば、嘘だと言われても文句は言えないわね」

「もし本当なら独学とは思えないな。ウチの姫さんみたいにチェスに精通した奴がいたのか？」

「さあ、どうかしら」

しかしやはり堀北はまるで動揺した様子が見られない。……さて、ジャブはこれくらいにしこころで1つ核心を突いてみようか。

「それはそうと堀北、綾小路について少し聞いていいか？」

「彼の何を聞きたいの？当初は友達作りに難航してたけど、最近解決したそうよ」

「いや、それはどうでもいいよ。……無人島の一件でもしかしてさ、裏で暗躍していたのは綾小路なんじゃないか？」

明確な証拠など何も掴んじやないが、もしそう前会長や現会長から注目されている辻褄も合う。生徒会長の権力なら、他学年の特別試験の詳細を調べられても別に不思議じゃないしな。

「どうして思うの?」

「ただの勘さ」

「なら、今後はあまり頼らないことをお勧めするわ」

「そうか? 俺の目にはお前が少し動揺してるようにも見えるんだけどな」

「残念ながら、そんな揺さぶりでは私の牙城は崩せないわ」

堀北が白のビショップで、俺のキングにチェックを—おいおいマジかよ……いつの間にかリードを奪われてやがる。いや、あえて受け身に回ること俺が有利だと思わせていたのか?!

「悠長に話を続けるをする余裕あるのかしら、橋本君」

「面白くなってきたな……」

口では強がりつつも形勢は変え難い。チェックをかけられた以上守りに入らざるを得ないが、徐々に追い詰められ長考も増えていく。……こいつ、俺よりも数段強いな。

「いやあこりや参つたぜ、可愛い顔してとんでもないんだな」

「あなたも見かけによらず上手なのね」

「キレキレの皮肉をありがとよ。まったく、上には上がいるな」

このまま何事も無く勝負が進めば、確実にこちらが敗北すると確信できる。……だけどな堀北、上には上がいる……これはお前にも当てはまることなんだぜ。

盤上の死闘（後編）

〔side：有栖〕

モニターの向こう側では橋本君と堀北さんの熾烈な闘いが繰り広げられています。

序盤橋本君が果敢にチェックをかけたましたが、堀北さんはそれら1つ1つを冷静かつ的確に対処していき、彼に隙が生じたところを的確な反撃で主導権を奪い取りました。

そろそろゲームは中盤に差し掛かろうというところですが……もうお二人の格付けは済んだと考えてよろしいでしょうね。このままではリードが広げられる一方だと考えてよいでしょう。

「最後まで見ていたくなるような、面白い対局ですね」

「同感だな。クラスの勝敗は既についているし、最後まで見届けよう」

「ふふ、悪くない提案ですが残念ながらそういうわけにもいきません。私はAクラスのリーダーとして、クラスの利を最優先に考えなくてはならない立場ですし」

我ながら心にも無い建前を述べつつ、橋本君に指示を出すべくパソコンを操作します。その片手間に綾小路君の様子を伺いますが、どうやら彼はまだ動くつもりがない様子。この圧倒的不利な局面ではいくら私でも彼に勝てる筈もないのでほっとしました

が、もちろんそんな態度はおくびにも出しません。

「おや、綾小路君は参入なさらないのですか？」

「今の堀北には勢いがある。下手にオレが参加するより任せられた方が良いかも知れないからな」

おやおや、奇遇なことにこちらも心にも無い建前を述べましたね。1%の不安要素すら見逃さない貴方が、勢いなんて曖昧で不確かな根拠を信じる筈も無いでしょうに。

「なるほど。では遠慮なく逆転させてもらいますね」

形勢は堀北さんが圧倒的とは言わないまでもかなり優位ですし、あわよくば堀北さんがこのまま逃げ切れれば実力を隠したままでいられる、と期待していらつしやるかもしれませんが……残念ながら、彼女では私の敵にはなり得ません。

私の指示を受けた橋本君は、長考していた先程までとは打って変わって活発に動き出しました。

司令塔の持ち時間30分は伝達までのラグを考慮しエンターキーを押した瞬間に、対戦相手が指し返した瞬間に動き出します。つまり……相手がどう指して来るかを完璧に予測し自分の返し手を前以て用意しておけば、経過時間を限りなく0に抑えることができるということですよ。

先程までとは目に見えて違う一手―それもほぼノータイムで返ってくる一手―に、堀

北さんの動揺がモニター越しに伝わって来るようですね。

「少々ハンデが少なすぎたようですね」

堀北さんは素晴らしい指し手ですが、私からすれば少々指し方が素直で微笑ましいですね。おそらくは橋本君と同じく指し方を覚えて間も無いのでしよう……目先の一手に少々気を取られ過ぎです。

もし彼女がこの先幾多の経験を通腕を磨き続ければ、いずれ私にも届くように成長するかもしれません……現状では流れを自分に有利になるよう、彼女に気づかれずさりげなく誘導することも、さほど難しいことではありません。

徐々に追い上げ堀北さんも次第に長考が増え、あつという間に形勢は五分へと戻ったそのとき、ようやく綾小路君がパソコンを操作し始めました。

「ようやく私たちの勝負になりましたね」

「みたいだな」

それなりに楽しめはしましたが、やはり所詮は前座……ここからが本当の戦いです。

彼相手にノータイム戦術で挑むほど自惚れてはいませんし、綾小路君も多少は私を警戒してくれているようで、お互いそれぞれ10秒〜20秒ほどで手を進めていきます。

『おいおいお前ら、なんだこりゃ……ほんとに俺達と同じゲームかって戦いだな』

『さつきまで私達の戦いが、子どものお遊戯に見えてくるわね……』

『……だな』

モニター越しに私達の指示を受け駒を盤上で縦横無尽に動かしながら、橋本君達のげんなりした声が聞こえてきます。無理ありません、お二人の今のレベルでは戦況の有利不利すら判別が困難でしょうから。

……つと、今は彼らに意識を割いている余裕などありません。

指し始めてすぐに、彼の強さを嫌でも理解させられました。現状ほぼ五分ではあるものの、リードを許さないだけでも精一杯です。……桐葉と指すときですら、ここまでの重圧を感じたことはありません。

かつて私はあの施設で、ガラス越しに綾小路君が何人もの大人達をねじ伏せる光景に魅せられチェスを始めました。あの日私が抱いた憧れは、決してまやかしなどではなかったようですね。

……ですが、

「どうですか綾小路君。私の一手は、あなたの心に届いていますか？」

「ああ、痛いほどにな」

かつての思い出と勝負には何の関係もありません。

たとえ貴方の実力が常軌を逸していようが、私は私の信念を貫くためにも、私を信じてくれている桐葉のためにも……ここは勝たせてもらいます。

中盤戦を過ぎ後半戦に入りましたが、戦局は拮抗したまま持ち時間だけが徐々に減っていきまます。

どちらが何か一つ判断ミスを犯せばゲームエンドになるでしょうが、この期に及んで私も綾小路君も些細なミスなどありえませんが、となると、純粋に実力で上回る必要があります。

事無かれ主義を掲げる彼が何か仕掛けてくる、という望みは薄いでしょう。極論、このままどちらかがタイムアップでも彼としては何も問題ないのですから。手を抜いている訳ではないので私との約束を反故にしたことにはなりませんしね。

となると……やはり私から攻める必要がありますね。

「――」

後半戦に差し掛かった辺りで、私はこれまでの流れと相反するようしばし長考し、数分の沈黙後に考えうる会心の一手を不安そうにしていた橋本君に指示しました。

すると綾小路も同様に長考し始めます。ここで間髪入れずに対処されるようでは、流石にお手上げでしたのでひと安心です。

『何を……何をしているの綾小路君……もう、あと5分しか無いわ……！』

刻々と迫るタイムリミットに、モニターの向こうから堀北さんの不安げな声が飛んできました。焦る気持ちはわかりますが少々無粋ですし、第一彼を見くびり過ぎです。

「この程度では終わりませんよね、綾小路君。貴方の真価、私に見せてください」

挑発とも捉えられかねない私の呼びかけに綾小路君は何も反応せず、返答代わりに叩きつけられた一手は私の急所を正確に穿ちました。

……ああ、なんと楽しい時間でしょうか。

知略と精神を張り巡らせたギリギリのシーソーゲーム。自らの限界を絶えず引き出し続けなければ、すぐさま敗北という名のギロチンが振り下ろされる重圧……これこそ私が愛する戦いそのものです。

傾いてしまった流れに抗おうとするも次第に私の一手は長くなつていき、持ち時間は見る見る内に削られていきます。対する綾小路は1秒とかからず……今の私は、綾小路君の敷いた敗北へのレールを歩かされているようなものでしょうね。

……ですが、

「勝負事で冷や汗をかかされたのは桐葉以来になります。見事です綾小路君……貴方は期待通りの強敵でした」

私は誰の思い通りにもなりません。ええ、たとえそれが貴方であっても。

片方の手で帽子に付けられてアネモネのブローチを握り締めながら、もう片方の手でエンターキーを押します。

残り1分を切った辺りで手繰り寄せた私の会心以上の一手に、綾小路君が僅かに目を見開きました。

「まさか、（ ）までとはな……」

その後2、3手と指していくうちに彼の思い描いたであろう道筋からは完全に外れていき……そして逆に、今度は彼が私の敷いたレールを歩く番です。

「っ……」

やがて綾小路君の持ち時間も1分を切ったところで、彼は目を閉じました。勝負を諦めた……なんて考えるだけで無粋ですよ。

時間的に考えても最後の長考、まず間違いなくこの一手が勝敗を分かつてでしょう。

持ち時間が10秒を切ったあたりでようやく綾小路は目を開けき、堀北さんに指示を出してエンターキーを押し――

—この一手、は……

『……負けました』

『ありがとうございます』

モニター越しで橋本君がリザインしました。

「—それまで。今の種目、Cクラスの勝利です。今回の最終特別試験の結果は4勝3敗でAクラスの勝利となります。Cクラスも大健闘でした」

結末を見守った坂上先生が事務的な締め、何やら星之宮先生が綾小路君に探りを入れるよう絡む中、私は平常心を保つので精一杯でした。

この頭が真つ白になる感覚、全身のエネルギーを吸い取られるような虚脱感……ああ、なるほど—

これが『敗北』。

ミスは無かった。慢心など言うに及ばず。対局を一から振り返っても、私は全てを出し切れたと自信を持って断言できます。

ですが、彼はその上を行きました。

勝敗を決めたあの一手……彼が紛い物などではないということを証明するには十分な、最善を越えた至高の一手。

それをあの時間ギリギリの局面で手繰り寄せられては、私も白旗を上げざるを得ませ

んね。

負けてしまったことに関しては正直悔しいですが……綾小路君、私は貴方と戦えて良かったです。その気持ちに偽りはありません。

——本当に？あの局面、本当に打つ手が無かったの？

脳裏に響く幻聴は、気のせいだろうと無視しました。

11 卷エピローグ

〔side:桐葉〕

血で血を洗う（大袈裟かな？）学年末特別試験が終了した。

俺達Aクラスは4対3で辛くも勝利したものの、5戦目からのCクラスの怒濤の追い上げには目を見張るものがあつたね。特に……有栖がチェスで敗北したことについては、クラス中に決して少なくない衝撃が走つたものだ。

教室にいる俺達には試験終了と同時に解散許可が通達され、クラスメイト達はそれぞれ不安に思うところはあれど、大体の子は晴れやかな気分で帰宅していった。色々と反省点はあるけど、最終的に勝つたのは自分達だしさもありなん。

そして俺はというとコーギーと今後についての話があるというので、有栖に呼び出されて毎度お馴染み特別棟へと向かつている途中である。生まれて初めての挫折に傷心してやしないかと多少心配だったけど、相変わらずの人使いの荒さからしてある程度は大丈夫そうだね。

「あめんぼあかいなあいうえお〜♪うきもにこえびも……およ？リユンケルじゃん。司令塔おつかれ〜」

「あ?……なんだロリコン野郎か、相変わらずおちやらけた面してやがんな」

「わーお、出会い頭に辛辣」

いやあ、何一つ否定できないのが悲しいところだね。さらに植物狂いも加えれば満点回答だ。

「やっぱてめえは気づいてたみたいだな」

「まああれだけ石崎君に活力がみなぎったら、気づかない方が難しいしね」

「ちっ、あのバカが……」

舌打ちしつつ暴言を飛ばすが、当然満更でもないことはしつかりお見通しだったのでした。……そう指摘したら多分キレるんだろうなあ。

「それでリユンケル、何対何で勝ったの?」

「5対2でうちの圧勝だが、Bクラスが勝ったとは微塵も考えちゃいねえのか。一ノ瀬とは仲が良かった筈なのに薄情な奴だな」

「いやいや、卍解ちゃん達が勝ってたら今頃君は退学手続きとかで忙しい筈でしょ」

「クク、言われてみりやそれもそうだな」

……もつとも、多分リユンケル達が勝つんだろうなあとは予想していたんだけどね。

Bクラスはまともに戦ったらDクラスには安定して勝てるんだろうけど、リユンケルがまともに戦った試しも無し。だというのにダーティな戦術への対策も無しに馬鹿正直

に受けて立つてるようじゃ、勝負以前の問題だよ正解ちゃん。

しかし5対2か。つまり学年末特別試験後のそれぞれのクラスのc pは……

Aクラス……1278ポイント↓1408ポイント

Bクラス……613ポイント↓523ポイント

Cクラス……396ポイント↓366ポイント

Dクラス……334ポイント↓524ポイント

……になるね。コージー達は再びDクラスに戻り、正解ちゃん達は1年の最後の最後で下位クラスに、そしてリユンケル達は晴れて上位クラスか。王座復帰の本土産には十分と言えるね。

「それでリユンケル、今回はどんな狡猾な手段を用いたの？桐葉君聞きたーい」

「今回は別に大したことはしちやいねえよ。まずこちらの選ぶ10種目を全て力でねじ伏せるだけの種目にした」

「ほほう」

つまり、空手とかレスリングとかだな。必要人数は全種目バラバラにしないとイケないけど、格闘技なら勝ち抜き戦形式という抜け穴がある。たとえば10対10の勝ち抜き戦で山田君+戦力になりそうにない生徒9人でも、Bクラスには打つ手が無くなっちゃうだろう。アベレージは優秀だけど俺やコージー、六助のように抜きん出た戦力を

持たない弊害だね。

「でもそれだとくじ運次第で勝てるっただけで勝率は精々5割……あ、もういいや聞かなくて。相当いけない手段を用いてBクラスを弱らせたのは想像ついた」

「話が早くて助かるぜ」

クククと凶悪そうに笑うリユンケル。連日に渡る嫌がらせだけで済ませてあげるとは思えないし、もしや毒でも盛った……だと流石にシヤレにならないから、下剤でも盛ったのだろうか？えげつねえ。

「そういうてめえはどうだつたんだ？その能天気な面からして負けたとは思えねえが、てめえなら負けてもヘラヘラしてそれで判別がつかねえな」

「失敬だね君は。4対3でなんとか勝ったよ」

「はっ、てめえつつう反則臭えカード持つといて随分と僅差じゃねえか。あの女も底が見えたようなもんだな」

「いやいや、向こうは向こうで六助っていう反則カードが猛威を奮ったからね」

「……あの変人が真面目に試験に取り組んだのか？」

「そだよ。いったいどういう風の吹き回しなんだか」

俺との勝負をふいにされた腹いせ……いやいや、そんなわかりやすい思考回路ならホリリン達も苦労してないよね。彼の全てを理解できるのは世界広しと言えど彼本人だ

【side:有栖】

「かきのきくりのきかきくけこ〜♪やあやあお待たせしてすまないね半目コンビ」
「変な括りしないでください」

特別試験終了後、私と綾小路君は今後の予定の話し合いをするべく、監視カメラの設置されていない特別棟にきていました。桐葉も密接に関わっているため呼び出したのですが……来て早々いつも通りの桐葉節が炸裂しました。私が敗北したことで幻滅されたりしていないか、ほんの少しだけ不安になった時間を返して欲しくなりますね。……まあ、きっと貴方は変わらないだろうとは思っていましたが。

「役者が揃ったところで始めましょうか。……まずは綾小路君、お見事でした。今回の勝負は私の負けです」

「随分とあっさり認めるんだな」

「私が敗北を認めない、プライドの高い女に見えましたか？」

「認める認めないはともかくプライドは高いでしょ」

「うるさいです桐葉」

本当に貴方は茶々を入れるのが好きですね。

「私を知りたかったのは貴方と私、どちらが上なのかということ。その結果に不平不満を漏らしませんよ」

「……なあ坂柳、1つ聞きたいんだがいいか？」

「? 何でしょうか？」

「あの最終局面、お前はチェックメイトがかかる前にリザインしたが……本当に打つ手が無かったのか？」

「——っ」

綾小路君の指摘に私は理解が追いつかなく……いいえ、頭が理解することを拒みたくなりました。

「……当然でしょう? 手が残されているなら私が勝負を捨てる筈が」

「あの局面でクイーンを犠牲にこちらのルークを取っていれば、オレはチェックメイトをかけるのに手間取ることになっただろうな」

「それ、は……」

「……あー」

しかし綾小路君は私の触れられたくなかった部分を、容赦無く指摘しました。私達の会話から何かを察したらしい桐葉は、気まずそうに頬をかいています。

「……クイーンはキングを除けば最も重要な駒で、奪われることはほぼ敗北に直結します。あの局面でチェックメイトをかわしても、所詮はその場凌ぎにしかありませんよ」

「苦しい言い逃れだな、聡明なお前らしくもない。オレの持ち時間は10秒を切っていた以上、その場さえ凌げればチェックメイトをかける前に介入ができなくなっていた」

「私の持ち時間とてほんの微々たる時間でしたし、相手が堀北さんと言えどクイーンを欠いた状態で逆転するのは難しいでしょう。まず間違いなくチェックメイトをかける前に私も介入できなくなります」

二人の格付けは前半戦の様子からして火を見るより明らか。私達の介入がなければ橋本君は堀北さんに敗北した筈です。

「まあそうなれば十中八九、堀北が勝っていたんだろうな。……だが可能性は0では無かった。にもかかわらず、何故そうしなかったのか知りたい」

「それ、は……」

「そういや俺も有栖とは何百回と指して勝ったり負けたりしてきたけど、有栖のクイーンを取れた試しが無いなあ」

余計なこと口にしないでください桐葉つ。ああもう綾小路君がさらに興味深そうにしちやつたじゃあないですか……。

……どうやら、隠し通すのは無理なようです。桐葉が来るまでに話を始めなかつた私の判断ミスです……。

「……そう大した理由ではありません。言つてしまえばただの験担ぎのようなものですよ」

「験担ぎ……」

「綾小路君は随分前から桐葉と仲がよろしいかつたと存じています。では桐葉に聞かされなかつたですか？ 自分はチエスでいうクイーンだと」

「そういえば以前言つていたな」

「そだね、須藤君暴力事件のとき辺りだったかな？」

ああ、Aクラスには何の関わりもない事件に桐葉が暇を持て余して介入しましたっけ。……綾小路君と知り合えるなら私も介入するべきでしたね。

「そう、私のクイーンは桐葉です。替えの利かない、決して失うわけにはいかない存在なんです。だから私はその場凌ぎなどに……いえ、もつというならたとえチエックメイトをかけられる場面でもクイーンサクリファイイスは用いません」

「いやーん、有栖ちゃんてば乙女チッククー」

「きり は？」

「ハイすんません、黙ってマス」

シリアス嫌いなのはわかっていますが流石に今は空気を読んでくださいこのおバカ。

「……なるほど、そういう理由か」

「合理性に欠いたくだらないことに執着する、愚かな女と思うかもしれませんね」

「そんなことはない」

自嘲するようにそう呟くと、綾小路君は無表情のまま首を振りました。

「今回のお前との戦いは、これまでで最も敗北を意識させられた。お前はオレを葬ることができるかもしれない人間だと証明してみせた。そんなお前が勝負を度外視してまでするものが価値の無いものの筈がない。……むしろそれこそ、オレがああ施設から脱走してまで知りたかったものかもな」

「そう言っていたらけると、私としても悪い気はしませんね。……ともあれ今回の勝負で私は負けてしまいましたので、黒幕だということは公表せず伏せておきますし、貴方の抱える厄介事を解決するため私と桐葉が力になります。と言つても口約束では信じきれないでしょうから、後日先生方の仲介の下契約を結びましょうか」

「ああ、よろしく頼む」

本音を言えば桐葉も他人事ではないので、約束など無くても彼に協力するつもりでし

たが、こうして協力するだけの理由がある方が綾小路君にも不要な警戒をされないでしよう。

.....。

「……ですが綾小路君、1つだけ我儘を言ってよろしいでしょうか」

「我儘？」

「チエスでの対決では負けてしまいましたが、クラス同士の戦いは私達Aクラスの勝利で終わりましたよね」

「そうだな」

「桐葉という強大なアドバンテージがある以上それは予定調和ですし、私はそれで勝ち誇れるような愚物ではありません。……ですが、もう二度と勝負を持ちかけることもないという約束は、反故にして構いませんか？」

「長々と遠回しに嘆願したけど、要はリベンジさせろってことだよコージ」

「ああ、それで構わない。ただしばらくは控えてくれると助かる。ホワイトルームからの干渉はもとより、ゲームとはいえAクラスのトップとの直接対決を制してしまった以上、どうしても余計な注目を浴びる。当分はその対処に忙しくなるからな」

「ええ、勿論です。それでは今日の所はこれでお開きにしましょう。桐葉、帰りましょうか」

「はいよ、それじゃあね清隆君。きつつきこつこつかけやき〜♪」

「……さて、そろそろいいんじゃない？」

綾小路君と別れ桐葉と二人で寮へと帰る途中に、突然桐葉がそんな曖昧なことを言い出した。

「……? いい、とはどういう意味ですか？」

「ざつと見渡したところ、周囲には人っ子一人いない。生徒達は特別試験後ということもあり皆早々に帰宅したみたいだね。ついでにこの辺りは監視カメラもなく誰かに見張られてもいない」

「いや、ですから一体何を——」

私の言葉を遮るように唐突に私を抱き締めました。脈絡もない唐突なセクハラに私

が抗議の視線を向けると……桐葉はまるで母親のような優しい眼差しを私に向けていました。

「前にも言ったけど有栖、俺にまで取り繕うのはやめようよ。泣きたいときは泣きやいだらう？ 悲しかったときや……悔しかったときにはね」

「っ……」

「天才が生まれて始めて挫折を知ったんだ。俺のように精神に欠陥ができちゃったわけでもないお前が、何も思わない訳がないだろう？」

「……」

「大丈夫。弱味を見せたくらいで、俺は幻滅したりいなくなったりしないから」

……それから寮へと帰るまでについては、誰にも決して打ち明けるつもりはありません。墓場まで持っていく予定です。桐葉の言った通り、私は相当プライドの高い女だと痛感しますね。

そして私はとんでもない判断ミスをして、それこそクイーンに固執したことなど些細に思えるほどのミスをしてしまったことに、ようやく気づくことができました。

いずれ打ち砕かなくてはならない信念の象徴

綾小路清隆に挑む以前に、

絶対に勝たなくてはならない相手

本条桐葉との決着を未だに着けられていま

せん。

私と桐葉についてよく知る全ての人が、彼が私の右腕だと思つていてほしい、桐葉本人もそれを否定しないでしよう。……しかし本音を言えば私は今まで一度たりとも彼を配下などと思つたことはありません。彼は私に従つていてではなく、あくまでただお願いを聞いてくれるだけと考えています。

何故なら私と桐葉の決着は未だ着いていないのですから、真に彼が私の下につくとしたら、対等な条件を揃えた上で私が彼を上回つたときになるでしょうね。

……誰にも言うつもりはありませんが心の中でだけ、偽らざる私の本心を打ち明けましょう。

私は弱い女です。体だけではなく、心も。

彼は優しい人だから、私が敗けたとしても仲良くしてくれるでしょう。

でも彼はそれ以上に自分に厳しいから、自分より劣つた私に従うことはなくなる……いえ、従えなくなつてしまふでしょう。

そして彼は誰よりも残酷だから、二度と私は彼の特別になれなくなるでしょう。

私はそれが怖い。怖くて怖くてたまらない。

彼の中で私がその他大勢に埋没することを想像するだけで、胸が締め付けられるほど

苦しくなる。

本当の意味で私が彼の特別となるためにも……私は彼に勝たなくてはなりません。彼を失うことを恐れるあまり知らず知らずの内に決着を先伸ばしにしてしまいましたが、ようやく私も彼と向き合うべきときが来たのです。

卒業式

厳しい冬の寒さが過ぎ去り、暖かな陽の光が降り注ぐ。桜の蕾が膨らみ始め、春の訪れを感じる今日この頃。

3月24日、卒業式。

現3年生達が全ての教育過程を終え、いよいよ社会へと羽ばたいていく記念すべき日。

体育館には卒業生在校生問わず全ての学年の生徒、全教師及び関係者各位が参列している。

まさに卒業式マジックというべきか、生徒達から圧倒的な不支持を誇る毎度恒例校長の長話1つとつても、ほとんど全員が真剣な表情で耳を傾けている。

……いやまあ話してる内容については、大概の人は明日には忘れてるだろうけどね☆卒業式マジックがあらうとつまらねーものはつまらねーってことだよ校長。

「ではこれより、晴れてAクラスで卒業したクラスの代表者より、答辞を述べて頂きたいと思います」

進行役の大人がマイク越しにそう告げる。へえ、Aクラスのリーダー格にはそんな義務があるんだ。有栖やホリリン、正解ちゃんなら無難にこなしそうだけど、果たしてリユンケルはちゃんと真面目に取り組むかね？中指立てて「あばよ雑魚共」で済ませたりして。

「代表、Aクラス……堀北学くん、前に」

どうやら茜さん達は無事みやびん先輩の執拗な妨害をはね除けられたようだ。正直チカちゃん先輩やコランダム先輩は国の補助輪なんて無くても大した問題でもないだろうけど、能力面は凡人の域を出ない茜さんはそうもいかないだろうしひと安心だね。

コランダム先輩は内心ほんの僅かに安堵しながらも、勝利者に相応しい堂々たる態度で壇上に向かうと、俺達在校生や関係者各位に視線を移す。

「答辞。梅の香りに春の息吹を感じるこの日、我々は卒業式を迎えました」

堅物なコランダム先輩らしく答辞の内容は奇をてらわないよく言えば王道、悪く言えばありきたりな内容。盛大な卒業式に対する感謝に始まり、入学した当時のことから学校生活を簡潔に振り返っていく。

「私事ではありますが、生徒会代表として昨年1年生達にこの場所から言葉を述べたことがあります。そのときと比べれば一目瞭然、皆さんの成長を感じ取ることができま

す」

1年前、彼の持つ覇気にただ圧倒されるばかりであった1年生達も、私語一つ無く彼の答辞に耳を傾けている。きつと数々の過酷な特別試験が、彼等を一回りも二回りも成長させたんだろうね。知らんけど。

「そしてこれから最上級生となり在校生を牽引していく2年生には、この学校の規律を守りつつ存分にその力を発揮していただきたく思います」

2年生が並ぶ席のみやびん先輩に視線を向けてみると、いつもの軽薄な笑みは鳴りを潜め誰よりも真剣な表情でコランダム先輩の答辞に耳を傾けている。たしかに色々歪んだ性格をしているけど、コランダム先輩への敬意に関してだけは嘘偽り無いんだよね。

「この学校で学んでいることはこの先の人生において、かけがえのないものになるであろうことをここに約束します。……来年、再来年、この場で答辞を述べる人にもきつと理解できる瞬間が訪れるでしょう」

2年生である場に立つのは多分みやびん先輩だろうけど、はてさて俺達の代はどうなることやら。

現状クラスポイントこそ俺達が大きくリードしてはいるけど、つい先日俺達のリーダーが真っ向から打ち破られたばかりだし、リユニケルも完全復活してダークホースと

化したし……まあ、まだ3分の2も残っているんだ、お楽しみはまだまだこれからさ☆
「13年間、本当にありがとうございました」

卒業式が終わると、俺達在校生は一度自分達の教室へと戻る。この後すぐに卒業生達は教師達や卒業生の保護者達が集まり謝恩会が始まるらしい。

俺達は帰ってもいいらしいけど、部活に入ってる子や3年と仲の良かった生徒は謝恩会が終わるのを待ち、最後の交流を行う。勿論俺もお世話になった茜さんやチカちゃん先輩とかに会いに行くつもりだけど、その前にやるべきことを済ませながら時間を潰そう。

「じゃあ行こっか有栖」

「ええ、手早く済ませてしましましょう」

有栖をお姫様抱っこしながら教室を後にする。親愛なるクラスメイト諸君がもうこ

れくらいでは何のリアクションも取らなくなったのは、何だか少し寂しい気もするね。

……清隆君によると、謝恩会には理事長も毎年参加する義務があるらしい。臨時とはいえその座に着いた月城代行がそれをバックレるといふ選択肢は無い。謝恩会中の90分間は確実に監視の目が緩むということになる。

昨日、清隆君は有栖に教えられた坂柳パピーの連絡先を用いて彼と連絡を取り、監視カメラの無い応接室にて密会の場をセッティングした。

目的は俺達学生より遥かに上の立場から清隆君を退学させようと画策する月城代行への対策として、教師の後ろ楯を得ること。

月城代行が掟破りの手法を用いないか監視し、なおかつ代行に寝返る可能性の無い人物が望ましいが、白羽の矢が立った相手はというと……

「……………つまり話を纏めると、月城理事長代行は綾小路を退学させるために綾小路の父親が送り込んだ人物で、今後の特別試験等で綾小路を退学させるために強引な介入をする可能性があるため、俺や茶柱先生に理事長代行を監視し、可能であれば未然に防いでほしいと……そういうことか？坂柳、本条」

「そつすね」

「ええ。とはいえいきなりこんな話を持ちかけられても、俄には信じられないでしょうが」

「当たり前だ」

応接室にて我等が担任真嶋先生と、清隆君の担任茶柱先生に事情を説明するが、真嶋先生は呆れたように溜め息をつき、一方茶柱先生は何かを考え込んでいる。……まあそれが普通の反応だよね。

「お前達から大切な話があると坂柳理事長からの指示を受け、謝恩会の合間にここに来てみれば……そんな荒唐無稽な話をおいそれと信じられる訳がない。俺達をからかっているのか？」

「ふむ、困りましたね。現状では月城理事長は潔白そのものですので、まともな方法では説得は不可能でしょう。……桐葉」

「あいあいさー」

時間も有限、月城代行に怪しまれないためにもこの密会はあずすんあずぼっしぼーで切り上げるべきだと有栖は判断したようなので、俺は口からトランプを5枚出すマジックを披露しながら真嶋先生に向き直る。

「実際試験は介入するまでもなく清隆君のプロテクトポイントが無くなった訳ですし、有栖の言う通り信じるに足る明確な証拠を提示するのは残念ながら不可能です。

出したトランプを片手で持ちながら扇子状に広げ先生達に向ける。数字もマークもバラバラな5枚だ。

「とはいえ俺達も結構切羽詰まっている状況ですし、ここは少々強引に信じてもらおうしかないですね」

手に持ったカードを放り投げ、落下してくるカード全てを表裏がバラバラにならないよう注意しつつ片手でキャッチし、再び扇子状に開くとあら不思議！スペードのロイヤルストレートフラッシュに様変わり。

「先生方、改めて確認するまでもないですけど、ここではポイント次第で大抵のものは買えるんですよね？」

「……うーいきなりなんだ？何故今更そんなことを今聞く必要がある？」

カードを閉じて両手で覆い、開くと俺の手にあつたカードは一枚もなくなっており、代わりに携帯が握られていた。時間をかけて相手の心に訴えかけるよう必死に説得するなんて手法、焦りも不安も抱けない俺には不得意な分野なのだ。やっぱここは毎度恒例のパワープレーに頼らせてもらうよ。

「それじゃああなた方の信用を売ってもらえますか？20000万ポイント支払うので、今話したことを無条件で信じてください」

「……!？」

金で信用を買うというアレな発想に対してか、それとも提示した金額についてか、先生達は目を限界まで見開き驚愕を隠せないご様子。

「本条お前、自分が何を言ってるのかわかってるのか……?」

「勿論ですよ真嶋先生。今後先生方に背負わせるリスクを考えると、退学を回避するのに必要な額でも過剰な出資では無いでしょう」

「……お前が買おうとしているのは信頼だろうか? 2000万でさっきの話を信じたとして、私達がどう動くかはまた別問題だと思うが?」

「やだなあ、茶柱先生も冗談が過ぎますよ? 仮とはいえ理事長の座についての方が、私的な理由で生徒を無理矢理退学に追い込もうと画策しているんですよ? 聖職に就いているお二方が、そんな横紙破りを見過ごす筈が無いでしょうに。俺の話を信じるってことは、そういうことですよ」

詳しい事情は知らないし興味も無いけど、茶柱先生はホリリン達DクラスをAクラスまで上げることには相当強い執着があるみたいだ。だから良い機会だとばかりに俺の資金源をより多く削ろうって魂胆なんだろうけど……いち生徒にここまで言われちゃ協力させざるを得ないよね? ここでノーというならここにいる全員から、教師失格の烙印を押しされるんだから。

目論見が外れて悔しそうにしているが、俺の視た限りどうやら彼女は協力するつもりようだ。最悪真嶋先生一人引き込めたら妥協しようと思ってたけどよかったよかった、巻き添えは多いに越したことはないよね。

「……わかった。それだけの代償を払う覚悟があるのなら、でまかせを言っているという訳では無さそうだ」

少々悩む素振りを見せたものの、真嶋先生は信じることに決めたようだ。

「さつすが真嶋先生、いよつ教師の鑑……じゃ、ちやつちやつと送りますねー」

「いや待て本条、ポイントのやり取りは全てデータに記録される。月城理事長代行がそれを閲覧すれば我々のつながりが露見しかねない。受け取るのは理事長代行が退いてからにするべきだ」

「えー？まどろこしいですねえ。そこはほら、そつちでデータ記録を何かいい感じに弄つといってくれませんか？」

「不正を防止しろと頼んだお前が不正を教唆するんじゃない。……ともかく、今後行われる特別試験や筆記試験など、月城理事長代行の不正関与を許す真似がないように善処しよう」

「真嶋先生、それが簡単なことじゃないと理解してるんでしようね？綾小路達の話が事実だとしても、下手すればこちらの首が飛ばされる」

俺の説得に応じこちら側につくと決心してくれた真嶋先生に対し、茶柱先生が苦言を呈す。

「正直まだ半信半疑だが、学校側が不正に試験内容や結果に介入することは許されない。

やる以上は徹底する」

「しかし、ただでさえ真嶋先生は先日の選抜種目試験のルール違反で、今朝減給を言い渡されたばかりでしょう」

「ルール違反で減給とは穏やかじゃないですね。何をされたのですか？」

それまで成り行きを見守っていた有栖が、何だか面白そうな内容だと判断し食いついた。

「お前達に話すようなことでは——」

「いや、隠してもいずれ詳細は知れ渡る。ならば今話しても問題ないでしょう。……Bクラス対Dクラスの選抜種目試験の最終種目は、Dクラスの柔道が選ばれた。形式は1対1、Dクラス側は山田アルベルト。一之瀬はこの時点で戦意喪失し、出場すべき生徒を選ぶことが出来ずにいた」

「それはまあ、一之瀬さんを責めるのは少々酷ですね。彼に勝てる1年生は精々桐葉か高円寺君くらいでしょうし」

あと清隆君とかね。そして責めるのは酷とか言ってるけど、この子が正解ちゃんの立場ならノータイムで一番価値の低い生徒を生け贄にしたただろうなあ。

「あのまま時間切れでランダムに生徒が選出されていたら、最悪の事態も有り得た」

山田君 v s 白波ちゃんとかになってたかもね。

俺と同じような想像をしたのか、生粋のDSである有栖は凄く愉しそうな笑顔を浮かべている。

「そのとき真嶋先生は独断で不戦敗のジャッジをした。そのことが理事長代行は気にくわなかったらしい」

「その件も今回の件も同じだ。生徒が危険と判断すれば止める、不正があれば正す。生徒を導く立場の人間がそれを為さずしてどうする。自身の進退を揺るがすリスクなど関係ない、俺は常に覚悟を持って教師を続けている」

さつすが真嶋先生、あの坂柳パピーが太鼓判を押しただけのことはあるぜい。

茶柱先生はしばらく真嶋先生を見据えていたが、説得は無意味と判断したのか溜め息をつく。

「真嶋先生が首を縦に振ったのなら私も協力しよう。構わないな、綾小路」

「こちらの陣営は1人でも多いに越したことは無いので」

「私もひとまずは綾小路君の味方につくつもりです。雪辱を果たすために去られては興醒めです」

「俺も俺も。以前清隆。パピーを大した理由も無く挑発しちゃったから、俺も狙われてても不思議じゃないです」

「何をやってるんだお前は……」

教師二人と清隆君、有栖にまでも呆れた表情を向けられた。なんでや。

その後有栖と清隆君の間で取り決めていた契約の仲介をちよちよつと頼んでから、俺達は応接室からバラバラに退出した。

俺達は謝恩会を終えた3年生に会うべく体育館傍へ向かった。在校生達はざつと見渡した限り全部で134人も集まっていたが、集団から少し離れた位置にいるホリリンがいたので清隆君は声をかけに行った。ホリリン達の目当ては間違いなくコランダム先輩だろうけど、正直俺も有栖もあの人とは大して親しくもないし別にいいかな。俺達の目当ては言うまでもなくあの人だし。

謝恩会が終わったのか体育館の扉が開き、卒業生達がぞろぞろと姿を現した。外へ羽ばたいていくことへの期待に胸が膨らんでいる者、慣れ親しんだ学舎を名残惜しく思う

者、Aクラスで卒業したことを誇る者や叶わなかったことを引きずる者と様々だけど、俺は発達した眼力を用いて卒業生136人の中からお目当てのお団子娘を見つけ出し、気取られぬよう気配を殺して背後に回り……

「茜さんゲエエツツト!」

「ひやあああああつ?!」

両脇を持つて大きく抱え上げた。一年前と寸分違わぬリアクションを披露してくれた茜さんを、俺は高い高いの体勢のままコマのように回し始める。

「茜さん卒業おめでとー。もう会えなくなるなんて寂しいよー。外に行っても元気でねー」

「本条君つ降ろしてください回らないでくださいっ?!これが卒業生に対する仕打ちですか?!」

「リクエストにお応えしてすぴーどあくつぷ」

「いやだからリクエストしてませにぎやあああああああああああ!」

そんな風に茜さんとの最後のスキンシップを楽しんでいると……

「いい加減にしなさい」

「うぐおっ?!」

いきなり有栖に杖で股間を強打された。力を振り絞って茜さんを巻き込まないよう

解放しつつ、俺はその場に地面に崩れ落ちた。いくら俺でもそこだけは鍛えられないよ……俺の唯一の死角である真後ろに、ズパピタのタイミングで奇襲を成功させるとはやるね有栖……。

「流石にこんな日くらいは自重というのも覚えてください。……申し訳ありません橘先輩、私の躰が行き届いてないせいで」

「あうう、頭がぐるぐるする……いえ、坂柳さんが気に病む必要はありません。それに無茶苦茶じゃない本条君なんて気持ち悪いですし」

「ふふ、それもそうですね」

そして這いつくばって痛みに悶える俺を捨て置いて楽しんでそうに談笑するお二方。というか茜さん、その言い回しは俺のだからパクんないですよ。

「さて本条君、私達3年Aクラスからあなたにお渡しするものがあります」

「渡すもの？ ミネイロンの惨劇とかですか？」

「逆に聞きますがそんなものどうやって渡せばいいんですか!?!……ちーがーいーまずー」

茜さんは大袈裟に首を振りながら携帯を取り出し操作する。そのあざとい仕草は何なのか問い詰めたところだけど、俺のケイタイから通知音が鳴る。無関係である筈が無いので取り出して確認すると……思わずげんなりとしてしまう。

「混合合宿に貸してもらったポイントは、ちゃんと返却させてもらいますね」

「いらないうって言っても無駄だから返却するのは構わないんですけど……なんか500万ほど多くないですか?」

「お金を借りたらその額より多く返すのが常識です。利子ですよ利子」

「俺闇金業者じゃないんですけど。いらないうですけど」

それからしばらくゴネにゴネ倒したが茜さんは折れてくれず、結局無理矢理押し付けられてしまった。

散財しようとしてるのにポイントが勝手に増えていく……かといつて無駄な使い方は俺の主義に反するし……なんか有意義で愉快でスタイリッシュな使い方とか無いかなあ。

それから俺は餞別として卒業生一人一人にスイートピーの花(花言葉は門出、飛躍、優しい思い出)を配り、一週間後に正門へ見送りに行くと茜さんと約束してから帰路に就いた。

……一週間後には茜さんはこの学校を去り、しばらくは会えなくなる、か。寂しくなるなあ……

……あれ？今、俺は何を思った？

桐葉君と敗残兵達

「うおおおおおらあああああ!!!」

3月30日早朝……体育館バスケットコートにて、燃える男須藤健はボールを抱え雄叫びと共に跳躍する。

彼の身長は183cm。日本人にしては文句無しの長身ではあるものの、バスケット選手としては決して抜きん出ているというほどではなく、ダンクシュートをするには少々物足りないレベルの高さ。

しかし彼はそんなセオリーなど知ったことではないと言わんばかりに高く、高く跳び上がる。

生まれ持った天性のバネは勿論のこと、明けても暮れても愚直にバスケットに向き合い続けた経験は確かに彼の血肉となっている。

空を翔る彼は手にしたボールをそのままリングへと叩き込む――

「どあほう」

「ぬあああつ!？」

一寸前に俺がはたき落としました。ケン坊が桜木ならこっちは流川で対抗するまでさ! 流川別にディフェンスに定評ねーけど。

溢れたボールをすぐさま拾って、俺はゴールへ向けてカウンターを仕掛ける。

「待ちやがれコラー!」

「残念、一手遅いね! はっ!」

「ぬがっ!? またスリーかよ!」

後ろから猛追するケン坊だが、彼我の身体能力差は歴然なため追いつくことは敵わず、俺は悠々とスリーポイントを放つ。

ダンクなど花拳繡腿、3Pこそ王者の技よ。

「……おっ、入った入った。はいこれで10点越えたね、また俺の勝ち!」

「ちつくしよおおお……!」

選抜種目試験も含めると通算5連敗に達したケン坊は、その場に仰向けで倒れ込んだ。

「(こ)まで完膚なきまで負けたら突つかかる気力も湧かねえ……なあ本条、なんでお前そんな強えのにバスケ部入らなかつたんだよ?」

「そりゃあ俺はバスケが強いんじゃないやなくてバスケも強い、だからね。数ある選択肢から

「選び取る程興味が無かったただけだよ」

「ああ、そういうや空手で全国制覇してたっけか……」

まあ空手部にしたって、大量のポイントが欲しいと有栖におねだりされてなかったら、絶対入ってなかったけどね。スポーツで俺に対抗するには六助や清隆君クラスじゃないとダメだし、勝つとわかりきっている勝負なんてただの茶番でつまらねー。部活動なんて有栖と過ごす時間を削ってまですることじゃない。

「しっかしバスケでリベンジしたいから来てくれって、一体どういう風の吹き回しだい？君は山内君のことで俺や有栖を恨んでた筈だけど」

「……ああ、そのことか」

ケン坊は起き上がりつつ、少々バツが悪そうに目を逸らしながら話し始める。……やれやれ、なんだいその女々しい有り様は。

「そりゃつい先日まで恨んでいたかもしれないねえがよ……本当は最初からわかってたんだよ。春樹が狙われたのは坂柳を怒らせたことが原因ってことも、お前らに誘導されたがクラスを裏切ると決めたのは春樹自身だってこともな」

「だろうね。入学時ならともかく、体育祭で皮剥けたケン坊ならそれを理解しても何ら不思議じゃない。けど理屈はわかっていても友人に肩入れしちゃうのは、まあ血の通った人間である以上は仕方がないんじゃないかな」

俺も10割有栖に非がある場合でもあの娘の味方になるだろうし。……だいたい
つもそんな気もするなあ。あの娘名前も見た目もアリスなのに中身ジャバウオツクだ
し。

「それで最近ようやくわだかまりが解けたから、特別試験のときのリベンジがしたくて
俺を呼び出したわけだね。結果はこのザマだったけど」

「うるせえよ!?……リベンジしたかったって気持ちもあつたが、それ以上に確かめた
かつたんだよ」

「確かめたかった、ねえ……特別試験で俺を倒すことに固執してなきや、もしかしたらD
クラスは勝っていたんじゃないかってことをかい？」

「っ……ほんと何でも見抜いてくんのな。お前が歩くプライバシーの侵害とか呼ばれて
る意味がようやくわかったぜ」

「いやあ、それほどでも。……で、今日やりあつてみてどうだった？」

「お前は強えよ。バスケの技術だけなら負けねえが身体能力が段違いだし、何より俺の
行動がどういう訳か全部先読みされちまう。今の俺じゃ逆立ちしても勝てそうにねえ。

……だが、あのとき俺がゴール前でこぼれ球を拾うことに集中したら、あのまま逃げ
切れたかもしれねえ。そう思うと、俺を信じてくれた鈴音に申し訳が立たなくてな

……」

「ま、それは否定しないよ」

残り時間も僅かだったし、逆転するにはどうしてもスリー一辺倒で絞るしかなかった。ブランクのあった俺の3P成功率はお世辞にもそこまで高くなく、実際に1度ドフリーで盛大に外してる。あのときケン坊がリバウンドに参加できていれば、ファルコンにも高い確率で競り勝てただろう。

そうなればリードのまま逃げ切ることができ、最終結果は4対3……いや、2回戦目の外村君も動揺することなく順当に勝って5対2だったかもしれない。

……でもまあ、

「たらればで落ち込んでるところ悪いけどさ、もし君がそこまで冷静に徹することができるとしたら、有栖だってもう少し早めに俺を投入してたと思うよ？あの子はリスクなんていちいち恐れやしないけど、勝ち筋の無い無謀な賭けに出るほど愚か者じゃないよ」

「うっ……いやまあ、そう言われたらそうなんだろうけどよ……」

「それでも割り切れないってんならさ、次勝てるように死ぬほど鍛えるしか無いんじゃない？……打ちのめされたことがない選手なんて、かつていたことがない。ただ一流選手はあらゆる努力をはらって速やかに立ち上がろうと努める。並の選手は立ち上がるが少しばかり遅い。そして……」

「敗者はいつまでも横たわったまま、か……」

流石はスポーツマン、当然この不朽の名言は知ってるよね。

「少なくともホリリンはきつとすぐに立ち上がって、次の戦いに備えてると思うよ。だ
というのに君がいつまでもウジウジしててどうするのさ」

「鈴音が……そうか、そうだな。あいつはどんなときだって諦めなかった。きつと今回
だって……」

何やらぶつぶつと呟きつつも、ケン坊はようやく立ち上がった。まっすぐに俺を見据
える彼の瞳に、さっきまでの脆弱さはまるで感じられなかった。

「本条、現状ではお前に逆立ちしても勝てそうにねえ。いや、もしかしたらこの先俺がど
れだけ必死に努力しようが届かねえかもしれねえ。……だが、最後に勝つのは俺達Dク
ラスだ！」

「ん、その意気や良し。俺達Aクラスは24時間365日誰からの挑戦でも受け付けて
いるよ」

右手の人差し指に出来たペンだこからして、バスケだけじゃなく勉強も真剣に取り組
み始めたのだろう。

負けたとはいえ俺達と接戦を演じた彼らDクラスは、2年生からさらなる躍進が期待
できる。そして彼は歴代最低と言われたDクラスの飛躍の象徴となるかもしれないね。

さてと、用事も済んだことだし、俺はジャージからスーツに着替えて体育館を後にす

る……前に、１つだけ聞いておこうかな？

「ところでケン坊。ずっと気になってたことがあるんだけど、リユンケルってさあ……」
「あ？あのクソ野郎がどうしたんだよ？……もしやまたアイツ何かゲスイことでも企んで」

「ヤンキー時代のミッチーみたいだよね」

「思ったより100倍くだらねえな!?!いや確かに見た目だけは似てるけどよ!」
「いつか泣きながら「バスケがしたいです……」とか言ってくれないかな？」

交遊関係は広く浅く適当に、がモットー。

三学期では有栖が散々じやちぼーぎやくムーブを行ったせいで、Aクラスの生徒に敵意を持つ子がそれはもうわんさか出たもんだけど、俺はそのほぼ全員と和解を済ませている。

誰よりも優れた眼のお陰で俺は相手のパーソナルスペースを見抜き、最も心地よいと

感じる距離感で接することができる。多少警戒したところで30分もありや親睦を深めることなど造作もない。……ホリリンとカリユンケルとか榎田ちゃんといった、どの距離感でも敵意とか警戒とか嫌悪を手放さないような子は別だけだね。

そんな訳で仲の良い生徒はクラス学年問わず膨大ではあるものの、休日に約束をして一緒に遊びに出掛けるほど親しい子となると片手の指で数えられるくらいまで一気に絞られる。というか基本的に有栖と過ごす時間が最優先で、あの娘が一人でゆつくりしたい日は適当にケヤキモールでもぶらつき、たまたま目に留まったグループに違和感なくすつと入り込むという手口で時間を潰すことが多い。

3日前は満足先輩と高育史に残るであろう熾烈な卓球勝負を繰り広げ、時任君達Cクラスリユンケルアンチグループの愚痴を延々と聞き、コージー達のグループと映画を観に行ったりとそれなりに有意義な1日を過ごしたものだ。

さて、今日は誰と巡り会うかな……つと、意外な人物発見。

「やあザキちゃん、奇遇だね」

「……本条か」

Bクラスのイケメン参謀、ザキちゃんこと神崎隆二君。有栖曰く結構良いとこのボンボンで入学前から何度か面識はあったらしいけど、寂しいことに両者とも互いへの興味は欠片も存在していない模様。

「せっかくの春休みに1人で行動？仲良しBクラスにしては随分と珍しいね」

「元々俺は人付き合いがあまり得意な方ではないから、さほど珍しいことじゃない。……それに、今はCクラスだ」

ありやりや、デリケートな部分に触れちゃったかな？反省反省。

「特別試験は残念だったねー。司令塔はプロテクトポイントを持つ生徒が務める、って思い込みの裏をかいいたリユンケルの作戦勝ちってとこかな」

「それだけなら多少の動揺と混乱はあれど、正攻法で戦っていれば俺達は負けなかった。奴は卑劣な戦略で強引に勝利を掴んだに過ぎない」

「ほほう、卑劣な戦略とは穏やかじゃないね。どうやら連日に渡るしよぼい嫌がらせだけじゃなさそうだ」

「試験当日にクラスメイトの何人かが腹痛を起こした。事情聴取したところ、全員が試験前にカラオケ店で石崎達に絡まれたとのことだ」

「あちゃー、そりや盛られましたな」

俺の言葉を肯定するように、ザキちゃんは目を閉じて神妙に頷く。しかしリユンケルも随分と危険な博打に出たもんだね。有栖や清隆君なら守られるケースを想定して、飲食物の残りを保存しておくようクラスメイトに働きかけ……いや、そもそもあの二人にそんな綱渡りな戦略を打つほどリユンケルもバカじゃないよね。

「学校には訴えなかったの？ 明確な証拠は多分出てこないだろうけど、何もしないよりは――」

「俺を含むクラスメイト達もそう主張した。だが一之瀬は今回のことを戒めにするとして学校への訴えは起こさないと決めた」

「へえ、そりやまた……えーと、何て言おうか……」

「甘い、と言いたいんだろう。気を遣わなくていい。だが今回のような龍園の汚い策略は、今後は全て俺が防いでみせる」

目を閉じたザキちゃんの瞳に宿るのは強い決意……そして必要とあらば仲間を犠牲にすることも勝利を掴むという覚悟。

「常に一歩引いて正解ちゃんを支えてきた君が、とうとう重い腰を上げようってことね」
「一之瀬のクラスを率いる統率力と求心力は堀北、龍園、坂柳、そしてお前と比べても劣っていない。……しかし彼女には危機的状況を回避する能力や、いざというときに弱者を切り捨てる決断力が欠けている」

「それはまあ、誰よりも善であるが故の代償だね」

リユンケルのように卑劣な手段を用いないことは別に大した問題ではないけど、相手が卑劣な手段を用いてくることを想定しないことは大問題だ。ホリリンなら対策を講じる、有栖や清隆君ならそれすら利用し自身の計画に組み込む。しかし他人の善性を信

じる……いや信じたいたいあの子は、ダーティな戦術に対してどうしても後手に回ってしま
う。リユンケルからすれば格好の獲物だろうね。

「二之瀬の善性にケチをつけるつもりはない。彼女に不向きだというなら、代わりに俺
が動くまでだ」

「らしくもなく積極的だねザキちゃん。……クラスポイント差が大きく縮まつちやつた
し、ホリリン達と仲良しこよしもしてられなくなつた？」

「ああ、先ほど二之瀬からDクラスとの協力関係を解消したと連絡がきた。新学期から
俺達は崖つぶちに立たされることになるだろう。このままでは俺達は、Aクラスを巡る
戦いから脱落してしまう。だからこそ俺が……」

不意にザキちゃんの携帯から着信音が鳴り響く。俺に許可を取ってから画面を確認す
ると。ザキちゃんは片方の眉を僅かに吊り上げた。

「すまない本条、急用が入ったのでこれで失礼する」

「ん、いいよー。ここで会ったのも偶然だしね」

ザキちゃんは踵を返して去っていく……かと思いきや一旦歩みを止めた。

「本条……俺はまだ、Aクラスを諦めた訳ではない。かならず這い上がって、お前に勝つ
てみせる」

「こちらを振り返ることなくそれだけを言い残し、今度こそざきちゃんは去っていった。

「ザキちゃんはまだまだ青いなあ。きつと凄く苦勞するけど、頑張ってくれたまえ」
決意を新たにしたザキちゃんだけど、彼はすぐに本当の絶望を知るだろう。何故ならBクラスの本当の弱点とは卍解ちゃんのリーダーの資質などではない。彼女を最高のリーダーだと盲信するクラスメイト達だ。

過去に過ちを犯したかはしらないが、今の卍解ちゃんは生粋の善人だ。彼女の生き方は非常に綺麗で尊く素敵で聞こえが良い。……だからクラスメイト達は卍解ちゃんの判断を疑わないし疑えない。1人2人がその卍解ちゃんの在り方に疑問を投げかけたところで、同調圧力に屈するしかないだろうね。

ザキちゃん1人がいくらあがいたところで、卍解ちゃん達を救い上げることなどできない。
しない。

未来を見通す俺の眼は、冷徹にそう判断を下した。

勇気を翼にこめて

3月31日。

とうとう茜さん達の旅立ちの日がやってきた。

いつものように朝4時に起床しいつものようにルーティンをこなした後、例によって居候中の有栖を起こして朝食を摂り、長期休暇恒例と頭のネジゆるゆるモードの彼女を3時間ほど甘やかしてから部屋を出た。約束の時間は12時ぴったしだけど、早めに到着して待つておくのが出来た後輩の在り方だよね。

30分ほど余裕を持って正門前に向かうと、なんとそこには既に先客がいた。

「清隆君じゃん、ぐもーにーん」

「おはようございませ綾小路君」

「本条と坂柳か、おはよう。お前達も学に呼ばれたのか？」

「いえ、私達は橘先輩のお見送りで。同じタイミングでここを去るのは、お二人の関係から考えてもそう不思議ではないかと」

「無事Aクラスで卒業できたことだし、もう周囲に気を遣う必要もなくなつたんだ。思

う存分バカップルのごとく乳繰り合えるね」

「乳繰り合う、か……百歩譲って橘はともかく、あの学がそんな愉快的な光景を繰り広げるのはちよつと想像つかないな」

「わかかってないなー清隆君は。ああいういかにも堅物そうな人ほど実はムツツリで、一回タガが外れたらそれはもうー」

「ほん じょうくくん？」

「随分と好き放題言ってくれるな」

噂をすれば影とはよく言ったもので、懽然とした表情のコランダム先輩と怒髪天を突かんばかりに憤怒の表情を浮かべた茜さんがやってきた……恋人繋ぎしながら。

俺達の視線が集中してるのに気づくと慌てて離しちやっただけど、別に繋いだままでいいんだよ？

「ぐもーにんです御兩人。せつかくの晴れ舞台だつてのになんだか不機嫌そうですねー、門出にケチがついちやいますよ？」

「誰のせいですか誰の！まったくもう……結局君は最後の最後まで問題児のままでしたね」

「先輩の教えの賜物です」

「教えてませんよ!?何さりげなく私のせいにしてるんですかっ!」

むきーつと言わんばかりに両手を振り上げ怒る茜さんと、それを見て勝手に和む俺。……もう幾度となく繰り返したやり取りではあるが、今日で見納めと思うと寂寥感が湧いてくる。

「茜、俺は綾小路と話すことがある。そしてお前も本条達とは積もる話があるだろう」

「そうですね学君、いつぞやと同じく別れて話しましょう」

「ああ、正午直前にここ正門前で合流するぞ」

「はー」

俺達は茜先輩に連れられ正門から少し離れた場所へ移動すると、早速気になったことを詰問しにかかる。今日の俺は情け容赦という言葉を知らないぜ。

「学君、かあ……」

「……」

「学君ねえ……以前は会長、もしくは堀北君だったのに。付き合ってからも対外的には苗字呼びのままだったのに、いつのまにか呼び方が学——」

「ああもういちいち言い回しが鬱陶しいですね君はっ!?ここ、ここ恋人を名前で呼ぶことに何か問題でもあるんですか!?!」

「ふふ、顔がまるで林檎飴のようですよ橘先輩。相変わらず可愛らしい方ですね」

「坂柳さんも頭撫でないでくださいっ!先輩に対する敬意が感じられませんし、本条君

に影響されなくてください！」

どうやら羞恥に悶える茜さんは、生粋のサディストである有栖も大好物だったようだ。

しばらく玩具にされ続けその度に怒り続けた茜さんは、やがて肩で息をするほどグロッキー状態に成り下がった。見た目通りタフネスは微妙だから仕方ないね。

「ゼエ……ハア……ゼエ……ハア……なんでせつかくの、門出の日に、こんなに疲れなきや、ならないんですか……！」

「仕方ないじゃないっすか、こうして茜さんを弄り倒して和めるのも今日で見納めなんすから。これから俺は少なくとも2年は禁茜さん生活に突入するんだから今日の内に思う存分摂取しときたくて」

「禁酒とか禁煙みたいなノリで言わないでくださいっ！しかも2年経ったら私また弄られるんですか!？」

「冗談つすよ」

流石にこれ以上茜さんに負担をかけるのも忍びないので、名残惜しいけどここらでそろそろ真面目にしよう。シリアスは嫌いだけど、おちやらけてばかりでは逆に飽きちゃうから。

「思い起こせばこの1年、色んなことがありましたね」

「きゅ、急にまともな話になりましたね……」

「何を今更、桐葉と会話しているとよくあることじゃないですか」

有栖うつさい。さてはいつも茶々入れてるの根に持つてたな？

「持ち上げて振り回しては怒られてたり、絶叫ボイスを聴かせてはバックドロップされたり、後ろから頬をむいーってやればチョークスリーパーで落とされ、リアカーに乗せて自転車で暴走してネックブリーカーで沈められたり、コランダム先輩用に用意した義理チョコを粉碎してパワーボムでKOされたり、エトセトラエトセトラ……」

「聞いてる限りろくな思い出が無いですね」

「そうですよつ、私がひたすら本条君に振り回されてただけ——つてちよつと待つてください!? わ、私そんなプロレス技で反撃なんてしてませんよ捏造しないでくださいー!」

「……そして極めつけは、やはりあの混合合宿っすね。あのとき俺は、アンタがみやびん先輩の悪意に晒されているのを気づいていながら、私的な理由で見殺しにしました。だというのにアンタはそんな俺を見限ることは無かった。まったく、お人良しにも限度があるんじゃないっすか」

この学校に来てから一番、そして今までの人生を振り返っても二番目に自分の想定から外れた出来事を思い返していると、茜さんは「こいつ本当にどうしようもねえな……」

と言わんばかりに深く深く溜め息をついた。不出来な後輩ですんません。

「あなたつて人は本当に……いいですか本条君、あのときも言いましたが、私はあなたに助けを求めていませんでした。私が一人で抱え込んで、勝手に追い詰められていただけです。あなたには何も非ありませんし、むしろ私の為に大量のポイントを用意してくれたことに感謝してますよ」

「いやまあ、理屈はそうっすけどね……」

そう、確かに理屈のみで考えれば俺が責められる謂れは一切無い。が、人は理屈で感情を完全に抑えられるような器用な生き物じゃあない。

親しくしていた相手に、自分が苦しんでいることに気づいていながら見てみぬ振りをされれば、大抵の人が感じるのは失望、落胆、あるいは怒りや嘆きといった感情だろう（……いやまあガッツリ怒られはしたけどアレは別の理由だろうしノーカンだよね）。

普通なら絶縁されてもおかしくないところを、この人はビンタ一発でチャラにしてくれた。もう器が大きいとかそんなレベルじゃないよね……最初俺がこの人に目をつけたのに大した理由は無く、どことなく桐花ちゃん※に似ていたっただけで、一番尊敬する先輩云々は正直リップサービスだったんだけど……いやはや、まさか本当になるとはなあ。

「本条君が私を慕ってくれるように、私にとつても本条君は大切な後輩なんです。そう

簡単に私があなたを見限ると思つたら大間違いですよ」

「……ふふふ。桐葉、素晴らしい先輩を持ちましたね」

「そだね、俺がこうまで読み違えたのは有栖以来だ。……あのときの20000万は決して無駄ではなかったよ」

こうして笑顔で外へ巣立っていく茜さんを見送れることに、俺は誇らしさと共に一抹の寂しさを感じる。

そう、寂しさ……茜さんがいなければ抱くことができなかつた感情。この人と出会えただけでも、俺はこの学校に来るだけの価値はあつた。取り戻したというには微々たるレベルで、また他にも未だ俺の感情には欠落が多いが、それでも完全に取り返しのつかないことでないとわかつただけでも行幸だ。

「……来年から南雲君は本格的な改革を進めるでしょう。そして本条君、彼はきつとあなたと綾小路君をつけ狙います」

「コランダム先輩にしていたようにつすか?」

「ええ。既に学年全体を掌握しAクラスでの卒業を磐石にしている南雲君は、現状に退屈し刺激を求めています。体育祭で自分に土をつけたあなたと、学君が目をかけていた綾小路君を標的にしてもおかしくはありません。十分に注意をしてください」

「りよーかいつす」

「桐葉を狙うとなれば私も黙ってはいただけませんね。来年からも退屈せずに済みそうので安心しました」

実際はみやびん先輩よりも月城代行の方が厄介な強敵になりそうだけど……いやまして、2人を別勢力と決めつけるのは危険だね、2人とも俺や清隆が狙いなわけだし手を組んだとしても不思議ではない。もつと言うなら新入生の中にも代行の協力者が紛れこんでいるかもしれないし……中々に骨が折れる状況だね。有栖の言う通りこれは確かに退屈はしなさそうだ。

その後、茜さんとコランダム先輩二人分の携帯番号を覚えてもらい（在学中は連絡禁止なため使い道は無いけど）、正門前に戻ると……長かった髪を肩にかかるかぐらいまでバツサリと切ったホリリンを、コランダム先輩が優しく抱き寄せているという兄妹愛溢れる光景に出くわした。

そして有栖と茜さんは無言のまままるで打ち合わせでもしたかのような見事な連携で、俺の両脇を固め近寄らないように配慮した。

天使と悪魔が手を組んでまで俺を封じにかかるといふ非常に愉快な光景だけど、心配しなくてもここで茶々を入れるほど面の皮は厚くないと弁明したいところだ。ただまあ、普段が普段なので多分信じてもらえないだろうなあ。気分はすっかり狼少年の気分。

「鈴音、俺はお前のことを大切に思っている。そしていつか俺を越えるだけの力を身に着けてくれるような期待を抱いた。……だがお前は俺という幻影に囚われた。俺に劣っていると決めつけ、俺の背に追いつくことを終着点に定めてしまった。……俺はその自らの伸びしろを捨てる選択を、どうしても許せなかった」

前言撤回。有栖と茜さんに拘束されてなきや絶対に茶々入れてたわ。何かやたらと邪険にしてた理由がそれって、どんだけ不器用だよこの人。

「お前に1つ謝罪しなければならぬことがある。」

「謝罪……?」

「何年前だったか、俺は長い髪が好きだと言ったことがあったな」

「は、はい」

「あれは嘘だ」

!?」

数年越しのカミングアウトにホリリンは目を見開いて驚愕しているけど、あの子は茜さんの髪が大して長くないことについては疑問に思わなかったの?……いや、それだけコランダム先輩だけを盲信してたってことかな。

「短い髪型を好んでいたお前が、俺の言葉1つで自分の色を失ってしまうのか気になり、それを確かめたくてついてしまった。すまなかつたな」

「……酷いですね、兄さん」

「言い訳のしようもない」

コランダム先輩が今の今までその嘘を放置していたのは、きつとそれを目安にしていたんだろう……ホリリンが兄の呪縛から解き放たれたことの、ね。

「許します。その嘘のお陰で、きつと今の私があると思いますから」

ホリリンもそれをわかつているからこそ、精一杯の笑顔を浮かべてそれを許した。そのことにコランダム先輩も、今まで見せたことのないような柔らかい笑みを返すのだった。

「鈴音。2年後、俺は正門の外でお前を待つ」

「はい。精一杯、最後の最後まで戦います」

……拗れに拗れた二人の関係は、最後の最後でようやく元の鞘に戻れたようだ。やっぱり兄妹なんだからなかよくしないとね。

「さて、そろそろバスが出るお時間ですね。最後にお二人の門出を祝って饞別を贈りたいと思います」

そう切り出しつつ俺は懐から花束を2束取り出し、それぞれに手渡した。

「……ほんと、どう隠し持ってたんでしようか？」

「ああ、結局最後までわからずじまいだったな」

「タネがバレちゃ手品師はおしまいっすよ」

「最後までユニークさを忘れない奴だ。……なるほど、グロリオーサか。確か花言葉は——『栄光』、『勇敢』、そして『燃える情熱』か」

「3年間、お疲れさまでした！この学校にあなた達がいたことを、俺達は決して忘れません！」

俺が締め括りつつ敬礼すると、有栖も清隆君もホリリンも俺に続いて敬礼してくれた。おお、流石皆知能指数高いだけあって、打ち合わせもしてないのにぴったり合わせてくれたよ。

「また会おう」

「私達も、あなた達のこととは決して忘れませんっ」

茜さんとコランダム先輩はそう言い残し、二人仲良く手をつないで正門をくぐっていき、俺達はその後ろ姿を、瞬きもせず見つめ続けた。

「それでは私達はもう行きますね。新年度からもよろしくお願いします」

「ええ、現状はAクラスが大きくリードしているけれど、このまま逃げ切りを許すわけに

はいかない。学年末試験の借りは必ず返させてもらうわ」

「勿論受けて立ちましよう。私も個人的な借りは必ずお返ししなければなりませんし。ね、綾小路君？」

「勝てたのは偶々だし、正直勘弁して欲しいんだが……」

「勿論却下です♪」

当たり障りのないやり取りをしてから俺と有栖は寮へと歩みを進める。ちらりとホリリンの様子を見ると……あー、これは涙腺が決壊寸前だね。そりゃようやく和解できた兄とまた離れ離れになったんだから仕方ないか。

有栖に伝えると絶対ろくなことにならないからここは黙っていよう。清隆君もどうか察してさっさと離れてあげるかなー？ いやでもあの子有栖に負けず劣らずサディストのきらいがあるしなー。頑張れホリリン、面子を守りたいなら一刻も早く清隆君を撒くしか手はないよー？

「新年度から私達はより一層マークされる立場になりますね」

「クラスポイント差が大分付いちやったからね。執拗な狙い打ちはまあ当然として、下手したら他三クラスが結託するかもねー」

そうなったらぶっちゃけきついなんてもんじゃない。単純な物量差だけなら俺がひっくり返すけど、Dクラスには俺と同格の六助がいるからそうもいかない。あいつ普

段はサボマイスタのくせして、俺が絡むと急にやる気になっちゃうんだよね。

その上積極性に欠けるとはいえ清隆君もいるわけだし、六助の性格からして無いとは思うけど、2人がかりで来られたらいくら俺でも打つ手無しだ。

総評して、流石に三クラスに結託されたら勝ち目は薄いというのが俺の見解だ。

まあこれまで歪みあってきたクラス同士がいきなり足並を揃えられるとは思えないけど……あの子が主導するなら可能性は無くはない。

「……どうやら桐葉も同じ状況を懸念しているようですね。ご安心ください、ちゃんと手は考えています」

「ん、それなら俺から言うことはないね」

権謀術数をめぐらすのは有栖の役目だ、俺が口出しするようなことではない。

ホリリン、リユンケル、卍解ちゃんと差し合うのは有栖だ。未だ有栖との決着は着かざれど、立場として俺はあくまで駒の1つであり――

――有栖の女王なのだから。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
: